

まんじ

No. 79

2001. 2. 1

まんじ 第七十九号 目 次

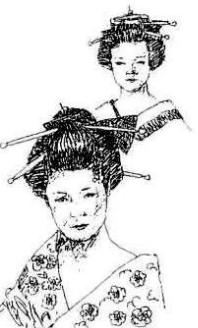
さ	ち	さ	ち							
演劇台本 箱根関所異聞	森	滝澤							
トルチエッロ島	青木	相原精次							
詩 旅行 フライブルグにて	新井	実与子							
神 の 手	島津隆子	中							
北条時宗とその時代(一)	鍋屋次郎	滝澤							
霧に包まれていた光(2)	三戸岡道夫	相原精次							
御参府中日記のこと(その二)	96	29							
体当たり戦法を強制された 神風特別攻撃隊の人びと(三)	88	16							
幕末トライアスロン(第三話) 南部三藩の去就と盛岡藩家老樋山佐渡の抗戦	64	4							
泰 山 木(九) 紙透小太郎の一生	島津隆子	中							
方解石の出る楠峠(十二)	鍋屋次郎	滝澤							
笹ヶ崎村(十三)	三戸岡道夫	相原精次							
ねずみ小僧丸楠(十九)	96	29							
漢詩 潮 騒 錄(二十八)	88	16							
近藤重蔵・富蔵の生涯とその時代(二十九)	64	4							
千篇萬律	55	49							
表紙・カット	49	29							
カット	29	16							
鈴木國男	宮城正彦	編集子	金子正義	鯨游海	鈴木昭三	太田和貞	伊澤敏久	紙透寛夫	大和禎人	千坂精一
:	:		:	:	:	:	:	:	:	:
168	156	150	143	137	132	126	115	109		

さ

ち

瀧澤

中



1、

女は乳房を包み込むように、桜色の襦袢を、座ったまま着込んだ。

「それっ、持つて行け」

差し出された老人の手は、皺こそ寄っていたが、ひどく固太りしていた。

半紙に包まれた金を受け取ろうと、女が左手を伸ばすと、

「こっちは来い」

恰幅のいい老人の手は、女のか細い手首を捻るように掴み、自分の膝に引き寄せた。

「あっ」

すでに事は終えたのだ。早く身支度して帰りたい、そう思つた女の着衣の様子に、老人は再び欲情を催したのだ。

「おやめ下さい、もう、もう」

入れるしかなかつた。

二度目の事を終え、身支度の最後に帯を締めた時、よほど気分がよかつたのであろう、

「なかなかいい帯じゃないか」

と、老人は珍しく女の衣装を誉めた。

紅色の地に、見事な白い鶴が舞つてゐる。

女はまだ無表情に、帯の絵柄を隠すようにして、先ほどの黒漆の短刀を胸元に指し、老人の別邸から出て行つた。

加賀百万石の城下町、金沢。

藩祖・前田利家からの豪氣さを受け継いで、小京都と言ふに相応しい豪氣さと織細さを持ち合わせている。

「さち様、」

紅色の地に、白い鶴の舞う帯を締めた女を呼び止めたのは、小間物屋の女将だった。

女将は店先から飛び出して、さちに声をかけた。

「さち様、ちょっとお寄りなさいまし」

さちは、特徴的な大きな目を少し伏せて、迷惑そうな、それでいてうれしそうな、複雑な笑顔を見せて立ち止まつた。

話はわかっている。

小店の女将が武家の女に、通りで堂々と声を掛けるな

その時、「ガチャリ」と音がして、張り替えたばかりの青々とした畳の上に、女の黒漆の守り刀が落ちた。さつとそれを拾い上げると、

「それ以上近寄ると、承知致しませぬ」

見事な短刀捌きで刀身を抜くと、女は切つ先を老人の胸に向けた。

しかし、老人は全く動搖する素振りも見せなかつた。

「ほう、刺すかね、ワシを。政府の仕事をしておるワシを刺したら、お前だけではない、周りがみんな迷惑するが、それでも刺せるかね」

老人はいわゆる「政商」だった。

幕末、加賀では唯一、倒幕派につながつて資金を提供し、その見返りに維新後、金沢での商売を取り仕切つて

いるのだ。

女は大きな瞳にいっぱいの悔し涙をためて、刀を静かに、い草の臭いのする畳に置いた。

そして、老人が襦袢の上から胸を掴むのを、ただ受け

ど、十年前、つまりまだ明治と言わず、慶應と言つていた時分ならば、手打ちはともかく、女将の常識を疑われても仕方がなかつたであろう。

しかし、時代はもはや、武家のものではなかつた。否、武家よりも、もしかしたらこの小店の女将の方の天下かもしぬなかつた。

しかし女将は決して威張った様子もなく、さちを店内に案内した。まるで、見つけた宝物を早く親に見せようとする子どものようであった。

さちは、ずっと櫛を集めていた。髪を梳いている時、さちは自分が女であることを強く感じる。

櫛はどれ一つとして、同じ梳き心地の物はなかつた。ほんの微妙な櫛の歯の具合で、まるで違う髪を整えているかのような錯覚を起こすのだ。

さちは髪を梳いている時だけ、今の自分を忘れることが出来た。いや、自分のことではない。あの男のことを、忘れる事ができるのだ。

そして髪を梳いている時、あの人を思い出すことができる。あの人のことだけを考えることができる。

さちは、この世話好きな小間物屋の女将を、嫌つてはいなかつた。それはそうだろう。女将は昔、さちの家に奉公していたことがあり、幼いさちは、よくなつた。さあ、さち様、ご覧あそばせ

貧しさも限界に近い下級士族の娘を、これほど丁重に

扱ってくれるのは、さちの父親が女将を奉公時代に大切にしたからである。

さちは、目の前に並べられた櫛の数々に、目を奪われた。

「まあ、なんて・・・」

そこには、輪島塗の金や赤をふんだんに使った、見事な櫛の数々が、絹の敷物の上に並べられていた。

伏目がちだつたさちの目は、大きく見開いた。

「どうぞ、お手にとつて下さいまし」

女将は微笑みながら、さちの驚く様子を優しく見守つた。

さちは、おそるおそる、手前から一番目の、金を雲のようにあしらつた愛らしい小さな櫛を手に取つた。

飽きもせず、いつまでも櫛を眺めるさちに、女将は

「お茶が入りました」

と言って、櫛の前からさちを動かしてあげた。

女将はさちが、櫛を買えないことを知つていてる。

そして今、櫛のこと以上に辛いことが、さちの身の上を襲つてゐることに、薄々勘づいてゐる。

さちは女将の声で我に返り、

「あっ、いえもう帰りませぬと」

と言つて、櫛を丁寧に絹の上に戻した。

「さち様、いつでもお寄り下さいまし。素通りはいけませんよ」

その溶けない雪を興奮しながらかき分けて歩いていた男がいた。

すでに、刀を指さぬ士族もいたが、男は腰の大小を、すんと武家屋敷の並ぶ町中へ進んで行つた。

男はひどく汗をかいていた。汗が、頸から鼻にかけて生やしている自慢の髭にしたたり落ちた。

仲間たちに一刻も早く、佐賀の乱の知らせを持って行きたいが、その前に水を飲みたい。

屋敷の角に、見事な枝振りの松が見えた。

「おっ、長屋だな」

その松の屋敷の向かいから、下級武士たちが多く住む長屋がある。

男の住んでいる長屋とは方角が違つたが、

(同じ士族じゃ)

と思って、のしのしと雪かきのしてある長屋の前に歩いて行つた。

「すまん、ごめんっ」

ひどく大きな声だったのか、長屋の前の屋根から、どさりと雪が落ちてきた。

「うわっ」

男はまるで雪だるまのようになつた、その所へ、丁度家人が出てきた。

「きやっ」

そう言つて微笑む女将に、さちは今日初めての笑顔で、

「ええ、是非また」と応えた。

さちは、思い続けている人がいた。

島田一良(いちろう)と言う。

さちと同じ下級武士出身の、石川県士族である。

さちはただ、思い続けてゐるのではない。島田一良が金沢にいる間は、すべてさちが身近な世話をした。

妻のいない島田一良の世話をしているから、妾、ではないが、正式な妻でもない。

しかし周囲は、純真無垢でお姫様のようなさちと、直情徑行型の島田一良の取り合はせを、「似合いの夫婦」と見ていた。

さちにとつては、手続きなどどうでもいい。

島田一良と過ごせさえすれば、それがさちにとつての「幸」であった。

島田一良との交際は、四年前の明治七年(一八七四年)から始つた。

すべての話を、ここから始めたい。

何でも、九州の佐賀で、明治新政府に反発した人が乱を起こしたという。さちはその日のことを今でも覚えてゐる。

その日金沢に降つた雪は、股の高さまであつて溶けず、

まだ十六歳のさちだった。

大きな声がして表に出たら、雪まみれの髭面の男が突つ立つてゐる。

男は、雪も払わずに、

「私は島田一良と申す。水を所望致したい」とぶっきらぼうに言った。

さちには不思議と、恐怖心は起きなかつた。

大きな茶碗に水を汲んで渡すと、島田一良はさも旨そ

うに、「ゴクゴク」と水を飲み干した。

「かたじけない。また、改めて御礼に参る」

そう言つて島田一良はまた、のしのしと刀を羽ばたかせながら、雪道を歩いて去つて行つた。

それから島田は、病身の父親を一人で養つてゐるさちに、なにくれとなく援助の手を差し伸べた。

カネ、ではない。

薪を割る、さちに縫い物仕事を持つてくる、病身の父親の話し相手になつてやる。

さちは初め、年の離れた兄として、そして徐々に、兄弟ではない感情、自分では制御できない思いを抱くようになつた。

さちは十七になつた春の宵、兄と慕つた男と、静かに熱く結ばれた。

会うたびに感じる、小さな胸の火照り。

さちはまるで雪だるまのようになつた、その所へ、丁度家人が出てきた。

「きやっ」

島田一良は、明治維新前後の時期、石川県士族の中の心的物であった。

幕末の加賀藩は、島田らに言わせれば、

「愚劣」

の一言に尽きた。

前田家に徳川の縁戚者が輿入れしている、ただそれだけの理由で、禁門の変では出兵を拒み、以後、「中立」という名の逃げを打った。

そんな藩の方針に納得の行かない下級武士たちは、多くが勤皇の旗印の下、倒幕軍に参加をした。

島田一良は、北越戦争に倒幕軍として参戦している。
(加賀藩は、たとえ佐幕でもいい、せめて長岡藩のように、見事に潔く戦うべきだった。それを「中立」などとぬかして、保身に走った姿は、醜い！)

加賀藩のような選択をした藩は、他にいくらでもあった。能力の無い者が生き残るために、中立・傍観しか無いのだ。

それを「醜美」で言う島田一良は、政治の何たるかを知らない、あるいは判ろうとしない、純粹な男であった。薩摩で桐野利秋が、ある種の尊敬を集めることに似た、純粹ゆえの人望が、島田一良を時の人によろとしていた。

(これだけの人数がこの時期に決起すれば、必ず日本中で同調者が出る。そうすれば・・・)

島田一良は、佐賀の乱が五千人で決起し、すぐに鎮圧されたという事を、この時はまだ知らなかつた。だからこそ、目の前に千名もの武士が集まれば、それだけで事は成功したかのよな錯覚に陥る。

島田は、集まつた全ての士族が、みんな自分と同じように悲憤慷慨しているのだと思つていた。そうとしか思えなかつた。

しかし。

この集まりは『忠告社』という政治結社として成立するが、作った島田一良自身が脱退して、雲散霧消してしまつた。

何故なら、議論こそ勇ましいが、いざ「決起を」となると皆、二の足を踏む。島田一良は怒りに全身を震わせて、ついに脱退を決意したのだ。

島田は、さちに、

「このままではいけない」

と言い続けた。

何がどういけないのか、十七のさちにはよくわからなかつたが、しかし生活の実感としてなら、理解することができた。

父の病が重い。しかし、薬を買う、医者にかかる金もない。

明治七年（一八七四年）の秋、佐賀の乱は鎮圧され、士族たちの憤懣が頂点に近づこうとしていた。

「このまま指をくわえて、政府の言いなりになつていいのか！」我々の理想は、こんなものだつたのか！」

金沢の私学校の講堂には、千名を越す士族たちが熱気をはらんで島田一良の獅子吼に聞き入つた。

「大久保は、江藤参議の首を刎ね、それを写真に撮り、江藤参議が囲っていた女のいる新橋に、ばらまいたといふのだ。こんな人非人を、政府の頭として戴いて、我等加賀武士は黙つていていいのか！」

佐賀の乱を起こした江藤新平の首が刎ねられ、その写真が新橋に出回つたのは事実である。

が、配つて歩いたのは、江藤憎しで凝り固まつていた警視庁の川路利良で、大久保利通ではない。

もつとも、川路は大久保利通の直系とも言うべき警察官僚だから、大久保も責任が無いとは言い切れないが。

「今こそ、武を以て起つときである。諸君の決起を要望して止まない」

島田一良は演説を終えた時、満足感をひしひしと味わつていた。

（加賀武士は起つ。必ず起つ）

いま目の前で熱い視線を私に向けているのは、紛れもない千名を越す加賀武士団ではないか。

しかも、政府に対する憤懣は、加賀だけではない。

幕府の時代には、毎年もらつてはいた家禄米が、決して多くはないが、三人の家臣と下僕を雇つて余りあるだけのものは手にできた。

明治の世になつて、家禄米の代わりに金禄公債という名の紙切れを受け取つた。

公債、である。

つまり、利子で食え、ということだ。

しかし下級士族は、とてもやつてはいけない。

大名なら何万円という公債を受け取つて、しかも家臣団を養わないのでいいのだから、利子だけでも十分に暮らせる。

織物などの仕事をくれると言う。

その事をさちは、島田一良に話した。

「なにつ、『授産場』？さちは、私が誰と戦つているのか、判つてはいるのか！」

結ばれてから初めて、さちは島田一良に怒鳴られた。

しかし島田は怒鳴つてすぐ、

「すまん。縫い物仕事は私がちゃんと持つてくる。だから、政府の世話をになるな」

静かに、諭すように言われた。

優しく頬もしかつた島田一良が、少しづつ変わつていつ

たのは、明治八年の夏を過ぎた頃からだった。

忠告社を脱退して、新たに結社をつくり、四百名の同志を集めたが、政治というものは、金がかかる。

島田一良は、政府に対抗するにはそれなりの力が必要で、その為には、意に沿わぬが、金を都合して同志を養うことも必要だと、考へるようになった。

(一良様は、お変わりになつた)

さちは、決して口にはしないが、島田一良の微妙な変化を感じ取っていた。

その変化が実際の形になつて、さちの前に表れたのは、明治九年の秋だった。

「さち、済まぬが、きょう入った針子の代金、私に貸してはくれないか」

武士を絵に描いたような人、それが島田一良だった。

決して嘘を言わず、虚飾を飾らず、常に誠意を以て雄々しく行動する男。

その武士の鏡が、いま、自分の針子仕事のお金を貸せ、と言つたのだ。

実は、そのお金は、たまつている父の医者代として払う約束になつていて。そのことは無論、島田は知らない。

「わかりました」

とつさに、さちは返事をしていた。自分でもなぜ、拒否しないのか、使い道を聞かないのか、不思議だったが、島田のためならば何を犠牲にしてもいい、という感覚が、

さちの判断をたやすいものにしていた。

それから頻繁に、島田はさちの針子代を借用した。前原一誠という人が、九州で続いた不平士族の反乱の後、長州で兵を挙げたことが伝わると、島田は再び決起のときと奮起して、同志を募った。

(四百名の仲間すべてが決起するとは思わない。しかし、半分の二百名は参加してくれるだろう) しかしそして、半分の二百名は参加してくれるだろう) しか

しまして、島田はそう読んだ。以前のように、人をすべて信じるということはなくなつていた。

しかし結果は、百名にも満たなかつた。

島田はその夜、さちのもとに帰ると、針子仕事をしているさちの行灯の向こうで、一晩中泣き崩れていた。

3、

さちは、針子代のほとんどを島田に提供していたため、父親の医者代が払えず、最初は着物を、そしてそれが無くなると大切にしていた櫛を、一本、また一本と売つて行つた。

残つたのは、母の形見の帯だけだつた。

これだけは売らない、そう心に決めていた。無論、母の形見ということもある。が、あの無骨でお世辞一つ言えない島田一良が、唯一誉めてくれた帯なのだ。

なかつた。

豪商は、さちが島田一良の妻同然の女であることを知っていた。知つていて、この政商はスリルを楽しんだ。

島田から見れば、政府の御用商人であるこの豪商は、おそらく親の仇よりも憎いであろう。その島田の女を自分は抱いている。

女はおそらく、金に窮している島田のために、自分が離れる出来ないだろう。

金で女を買うだけなら、いくらでも出来る。しかし女が、本来の意思とはまったく逆に、嫌な男と寝なければならないという状況を、豪商は楽しんでいるのだ。

だが豪商は、決して島田の名を口にはしない。

(おそらく、島田の女であることを、自分が知つてゐるということが露顕すれば、この女は死ぬだろう)

何度も抱かれても、いくら金を積むと言われても、さちは豪商になびかなかつた。

十日に一度、決まった額を受け取る、それを守り通した。

そうして半年が過ぎようとしたある日。

さちの父が死んだ。

明治も既に十年。さちは十九になり、島田一良は二十九となつていた。

島田一良は東京に行つたり、九州あたりまで出かけていて、さちが豪商のものになつたことを、気付く様子は

父親の遣いで昔の上司の家に行く時に、さちはその帯を締めた。他に、よそ行きの帯がない。
紅色の地に、見事な白い鶴が舞つていて。
着替えを見ていた島田が、
「さち、それは本当に、お前に似合うね」
そう、言つてくれた。
以来、さちは東奔西走する島田一良が久しぶりに家に来る時は、必ずこの帯を締めた。
しかし、その帯も売らなければいけない所まで、さちの家の状況は逼迫していた。
そんな時、父のかかりつけの医者は、
「割のいい仕事がある」
と言つて、ある豪商を紹介した。
それは最初、さちの針子としての腕を見込んで、豪商の妻や娘の着物を縫うという話だった。
呼ばれたのは、城下町にある店ではなく、犀川を上つて、立山の靈峰が美しく見える豪商の別邸だった。
部屋に通され、しばらく待つと、表れたのは妻や娘ではなく、小太りの老人、豪商本人だった。
拒めば、おそらく拒み通せた。
しかしさちは、受け入れた。

「鹿児島で西郷起つ」

島田のもとに知らせを持ってきたのは、島田が弟分として可愛がっていた長連豪（ちょう・つらひで）だった。

「島田さん、ついに、ついにやりましたよ」

長は興奮気味に詳細を島田に語った。

島田はこの年二十二歳。さちより三つ上だが、島田よりも汚れをしらぬこの青年は、さちにとつても弟のようないい存在であった。

島田と同じ、澄んだ瞳を持った青年。

さちは、島田がこんな素晴らしい青年から慕われているのを、自分のことのように喜んだ。

「長さま、ゆっくりして行って下さいね。一良さまは、

さちでは話し相手になりませんもの」

そう言うと島田も長も「カラカラ」と笑った。

久しぶりに見る島田の笑顔。

そして、全身から漲っている精氣。

さちは、今度こそ、島田が本懐を遂げられるよう、心

から祈った。

一〇〇万人。

明治初期の、失業した士族の数である。つまり、西郷の決起を歓迎した人数でもある。

もしもこの一〇〇万人が合わせて決起すれば、否、半分でも立ち上がりれば、政府は瓦解した。

しかしそういう計算は、かつての島田一良の計算と同

はない！」

島田は懸命になつて、決起を促した。

しかし、結果は惨憺たるものだった。

議論をしている間に、西郷軍は敗れ、世に言う「西南戦争」は九月、終りを告げた。

今度は、涙も出なかつた。

能登半島の同志説得中に、西郷敗れるの報を聞き、島田は力なくさちのもとに帰つた。

さちは、紅色の地に、見事な白い鶴が舞つている帯を締めて待つていた。

「お帰りなさいませ」

島田は、ふと、間もなく二十歳になろうという、自分が愛する女に、今までに無い色香を感じた。

政治と戦争に明け暮れた、というよりも、政治と戦争をするための準備に明け暮れていて、ろくにさちの相手をしてやれなかつたことに、島田はいまさらながら、済まない気持ちになつた。

しかし、今日は何も話をしたくない。

（そうだ、）

「その帶、やはり、いいね」

それだけ言うと、あとはさちが何を聞いても答えなかつた。

一言、帯を讃めたのが、さちへのいたわりと感謝の言葉だった。

じ、机上の空論である。

西郷には人望があった。

会つたことの無い人までが、

「西郷は人物である」

と言う。

その西郷が立つたのだから、今度ばかりは自分の計算方法、つまり総数の半分は立つ、というのは、空論ではないような気が、島田はしていた。

「さち、すまぬ」

島田はその日から、金沢中の士族を説いて歩いた。そして、さちから借りた金を、使い続けた。

島田は、

「即時挙兵の後、京都を襲撃し、東京からの政府軍を迎え撃つ」

島田は再び、熱を帯び始めた。

人が集まる。議論が尽くされる。

島田は今度こそ、と、成功を確信した。

しかしその確信は、西郷挙兵の知らせを受けた明治十

年の二月からわずか二カ月ほど経つて、ゆらぎ始めた。

またしても、議論ばかりなのである。

「今は既に、論ずる時ではない。行動すべき時である。

鹿児島は、戦つているのだ。西郷軍はこの瞬間にも血を流しているのだ。こんな所で言い合いをしている場合で

4、

年が明けて明治十一年。

さちが豪商の別邸から帰ると、予告なしに島田一良が帰つていた。

「おや、帯」

島田が、自分が帰つてくる日だけ、さちが鶴の帯をしていると思っていていたのに、と言つた。

「いえ、ちょっと父のお墓参りに」

そう言ってさちは誤魔化したが、何となく居心地の悪い言い訳になつてしまつたと、自分で感じていた。

その日の島田は、まるで出会つた頃のように、優しく頼もしい男だった。

「東京で仕事が見つかりそうだ。警官になる」

そう言う島田に、さちは心から喜んだ。

「一良さまは、正義感のお強い人だから、きっと素晴らしい警官におなりになります」

さちの言葉に島田は微笑んで、

「そうだ、きょうは、さちに贈り物がある」

そう言ってさちを、奥の座敷に座らせた。

島田は懐から、粗末な木綿の包みを出し、さちに手渡した。

「まあ、何でしょう。一良さまからの贈り物なんて」

さちは驚いていた。

そういうことをする男ではない。しかし、疑つては悪いと思ひ、木綿の包みを受け取つて開いた。

「あっ！」

それは、あの小間物屋で見た、金を雲に模した愛らしい輪島塗の櫛だった。

「どこでこれを？」

微笑む島田は、最初何も言つてくれなかつたが、

「小間物屋の女将が、私をつかまえて店に案内されてな、お前がご執心だつた櫛だ。苦労を掛けているのだから、買つてやれ、と言つたんだ。随分安くはしてくれたがね」

その夜、さちは久しぶりに島田に抱かれた。

三十になつた島田の肉体は、はじめて出会つた頃と比べ、ひどくやせ細つたように感じた。しかし、島田の情熱は、以前とは比べ物にならないほど、熱く、さちの心を揺さぶつた。

「もう、苦労はしなくていい」

そう耳元でささやいた島田の言葉に、さちは一瞬、戸惑つた。

（まさか、豪商とのことを知つていたのでは？）

そんな筈はない。もし知つていれば、その事に耐えられるような男ではない。

この言葉はつまり、東京で警官としてやっていくから、正式に所帯を持つこと、ということではないのか。そう、さちは解釈することにした。

なく、間違ひない、自分との関係を知つて、斬つたのだ。
（一良さまは、知つていたのか・・・）

調べれば、下手人はすぐにわかる。これから警官として奉職する人間が果たして、人を斬つて行くものだろうか。

さちは、島田一良が買つてくれた櫛を取り出した。そして、髪を解き、からすの濡れ羽色に櫛を通した。櫛の歯に集まる髪に、心地よい圧力がかかる。

（一良さま）

さちは、自分の汚れた身体を島田は許しておらず、だから豪商を殺したのだ、と悟つた。そして二度と自分のもとに島田が帰らないことを、確信した。

それから一ヵ月後の明治十一年五月十五日、東京で、大久保利通が暗殺され、その下手人の首魁が島田一良であることが、金沢にも伝えられた。弟分の長連豪も一緒に襲撃に加わつたという。

東京では極悪人として島田たちは処刑され、金沢では、島田たちは英雄になつた。

さちにとつては、どちらでもいいことだった。

呆然と日々を過ごしていたある日、小間物屋の女将がやって来、一通の手紙をさちに渡した。

「島田さまから、預かってました」

島田は櫛を買う時、小間物屋の女将に手紙を託した。

それは、政治や戦争とは一切関係のない、愛する女に

事実、翌朝になつて島田は、
「これから東京に行く。落ち着いたら連絡をする」

ただ気がかりなのは、当座の資金だ、と言つてお金を

置いて行つたことと、あれだけ政府に反対していた島田が、警官とはいえ、その政府に雇われることの矛盾だ。

だが、さちは信じることにした。

島田を信じることだけが、豪商によつて汚されたさちの心を、支えてくれるような気がしてた。

そう、さちはもう、限界に來ていたのだ。その限界を見透かしたように、島田が自分を東京に呼んでくれるといふ。

（これを信じないのなら、私は死んだほうがいい）

さちは、ようやく訪れようとする平穏で、平凡な幸せを夢想した。そして、これから何があろうと、二度と豪商の所には行かない、と決めた。

しかし、さちのその決意は、大した努力を要さなかつた。

島田が出かけた日の昼頃、犀川の河原で、首の無くなつた豪商の死体が発見されたのだ。

さちは、下手人が島田でないことを祈つた。

島田が罪人になるのを恐れたのではない。

島田があの豪商を襲つたとすれば、理由は一つ。

それは、反政府運動の一環として豪商を斬つた訳では

充てた手紙である。同志はいたが、同志には託せなかつた。

「何でも、他の人には託せない、とおっしゃつて」

その理由は、手紙に書かれていると、女将は島田から言われたという。

女将が帰つてから、さちは手紙を読んだ。

読み終えると、さちは着替えをした。

紅色の地に、見事な白い鶴が舞つてゐる帶を締めた。

そして、島田が贈つてくれた小さな櫛を、喉元に充てた。

さちの遺体の側には、燃やされた手紙らしき紙が舞つていたという。そして「くわづかな燃えかすの中に、さちの帶を薔めた言葉が書かれていた」というが、百年以上も昔のこと、いまは確かめる術もない。

箱根関所異聞



相原精次

登場人物

若いOL1

若いOL2

舞台 箱根旧街道

時 現代

中幕下りている 舞台前面で

乳母
立木徳右衛門（関所定番頭）
立木奥右衛門（その息子）

番役人

炭焼きの男1
炭焼きの男2
捕り手1
捕り手2
捕り手3
捕り手4

O L1 現代版、女弥次喜多珍道中もいよいよ、終点よ。
O L2 昔の人の旅もたいへんだったのね。私には信じられないよ。だってこんな道、草履はいて、歩いていたんでしょう。私達みたいに趣味で歩いているのじゃないしね。（辺りを見回しながら歌う）昼なお暗き杉の並木……歌のとおりだわ。

O L1 ズうっと木陰歩いていたのに汗びっしょりだわ。
烟宿の木工細工の小父さん、ずいぶん説明上手だった

O L2 うんうん。冗談なんか加えたりしてさア。見掛けによらないのよね。

O L1 あなた、はっきり言うのね。

O L2 そう、失礼な言い方だった？ でも、根気のいる仕事よね、あれも。

O L1 （止まつて汗を拭く）あなた、さっき滑って打ったとこ、何でもない？

O L2 痛い痛い。ひどく腰打っちゃって。足の裏は痛いしさ。ほんとはもう歩きたくないって感じ。（言いながら急に足を引きずった歩き方をする。）

O L1 なに言ってるのよ。そんな弱気出して。昔の旅人は、小田原を出るため途中の畠宿には泊まらないで、一気に箱根越えて、三島の宿まで行つたんだから。

O L2 ああ、もうごめんだわ。私達関所を終点にしといてよかつたね。

O L1 あら、私は行けって言われば、まだ行けますよ。この体力。（気張つてみせる）

O L2 （呼吸を調えながら）言つてるう。行くはずないって分かってるから、言いたいこと言つちやつてさ。O L1 うへッへ。ばれたか。苔の生えた石畠。この辺だった？ ぶつけたの。（腰のあたりを触る。）

O L2 ううん。そんなところだつたらいいへんよ、今頃、

こんな平気な顔して歩いてられないよ。あの勢いでころんだんだもん。道端で寝ころんだまま、まだうなつてゐるわよ。きっと。

O L1 ジヤアこのあたり？ 打つたのは。（2の臀部を触る）

O L2 そうそう。そのあたり。う、う、くすぐってえ。痛ててて。そんなに強く押さないでよ。本当に痛いんだから。

O L1 この肉づきのいいお臀、お瘦せさんだつたら骨が碎けてたかもね。太めも、こんな役に立つことはあるんだよ。よかったです、君。

O L2 くやしい。言いたいこと言いやがつて、全く。でもさ、私が、あのまま動けなくなつたりしたらさ、それがきっかけで、夢のようなロマンスが生れてたかもね。

O L1 ええっ？ 何、それ。変な論理ね。

O L2 花もはじらうこの乙女がさ、したたか腰を打つて、道端で動けなくなつて。そこへ、やっぱり旅の途中の、水もしたたるようないい男がさ、とおりかかるつてわけよ。

（芝居つ氣たっぷりに二役を）

「いかがなされた、お女中」「はい、この石畠の苔に足を取られまして」「どこか痛めなされたか」

「はい、このあたりを少々」

「それは気の毒に。拙者がさすって進ぜよう」

「ありがとうございます。ああ、お荷物が地べたに。じかに置いてはなりません。これ、婆や、このお方の荷物を持っておやりな」

O L 1 カット、カット。ちょっと待つてよ。その婆や、つて言うのは誰のことよ。

O L 2 私と一緒にいるの、あなたしかいないじゃない。

O L 1 しゃーくにさわる。自分だけお姫さま気取りでさ。いいのよ。夢みてらっしゃい。想像するのは勝手だもんね。実際はね、だアれも相手なんかしてくれるもんですか。そうね、せいぜい箱根名物の雲助のおつさんが身ぐるみはいで……（服を脱がせようとする。）

O L 2 ヒヤー、何すんのよ。私はね、ジッと見てて、助けてなんかやんないからね。

O L 2 イーダ。友達甲斐もない。：世間知らず。：薄情モノ。

O L 1 何よ、その、世間知らず、ってのは。

O L 2 いいのよ、何でも。うまい言葉が見付からなかつたのよ。

二人のO L、下手側いっぱいまで来かかるところで、中幕が開く。

二人、疲れた様子。あたりを見回す。

O L 2 とうとう、終点の関所まで来たのよ。

O L 1 湖と山に挟まれた関所、絵になるね。

O L 2 ねエねエ、見返りの松ってあるわよ。何を見返つたのかしら。

O L 1 うん、それって、聞いたことあるのよね。あれはね、確かに……小学校の遠足んとき、ガイドさんが言ってたな。関所を無事に通れた人がね、やれやれと思つて、あれに手が何か掛けたね、振り返った場所なんだつてよ。

O L 2 フーン、じゃ、こんな感じか。（松に手を掛け寄り掛かりながら足を交差させて芝居のような斜を作つて、首を後ろへ回しながら）「やーれ、やれ」ってね。

O L 1 （手をたたいて）うまいうまい、あんた、芝居の素養あるんじゃない？

O L 2 （回りを気にして急に1の方に駆け寄つて1にしがみつく。）あーッ恥ずかしい。

O L 1 どうしたのよ。

O L 2 恥ずかしい。あそこのおじんの団体さんがさ、さっきからじっとこっち見てたのよ。

O L 2 どの？ あの、あれ。あははは、みんなまだこつち見て笑ってるよ。

O L 2 ああやだやだ、恥ずかしいたらありやしない。

舞台

やや下手寄りに再現された番所と関所の門。その外側に松の木が一本（「見返りの松」と説明付き）。やや上手寄りに番屋の軒。その下に高札。

定

一、関所を出入する輩笠頭巾をとらせ通すべき事乗物にて出入る輩戸を開かせて通すべき事

一、関より出る女はつぶさに証文に引き合させ通すべき事

一、乗物にて出る女は番所の女を指出し相改むべき事

一、手負死人並に不審なるもの証文なくして通すべきからざる事

一、堂上の人々諸大名の往来かねてより聞こえあるにおいては沙汰に及ばずもし不審あるにおいては誰人によらず改むべき事

右の条々厳密に可相守者也仍執達如件

正徳元年五月

奉行

O L 1 まあ、いいってことよ。笑わしときな。

O L 2 ひとことだと思って平気な顔して、全くウ。

O L 1 何言つてんのよ。あなたと同行しているのは私なのよ。言つておきますけど、結局私だって、同じ恥かいりますのよ。あなたのために。

O L 2 （高札を見つけて）ねエ、ねエ、あそこの立て札に何て書いてあるのかしら。

O L 1 （キヨロキヨロして）あんたって馬鹿ね。また恥かくじやない。

O L 2 何よ、どうしたって言うの？ 私また何かしたかしら。（慌てて自分の身体を見回して、あちこち身づくろいする。）

O L 1 何してんのよ。

O L 2 どっか…乱れてるのかと思って。

O L 1 違うわよ。大きな声で「立て札」なんて言うからよ。ああいうのは「高札」っていうのよ。

O L 2 ああ、そうそう。私だって知つてたのよ。

O L 1 だって、そう言わなかつたじゃない。

O L 2 （キヨロキヨロして）誰も聞いていなかつたでしょうね。

二人、高札に近付いて、たどたどしく読む。

O L 2 なに、なに。エート、「セキショヲ、デイリノ

ハイ……カサ……」えーと、

O L 1 「デイリノ、ヤカラ」っていうんじゃないかな。

O L 2 ああ、「ヤカラ」ね。

O L 1 「カサ、ズキンヲ、トラセ」でしょう。

O L 2 ああ、「カサ、ズキン」ね。点が打つてないから読みづらいのよね。

O L 1 つまり、かぶっているものは取らせて、確認してから通すこと、って意味じゃない。

O L 2 なアるほど。あんた頭いいのね。

O L 1 ふん、いまさら。

O L 2 イーダ。

O L 1 あの三番目のさ、「セキヨリ、ソトニデルオン

ナハ、ツブサニ、ショウモンニ、ヒキアワセ」ってと

こ、気になるわね。証文で、通行手形のことかしら。

O L 2 手形は手形でしきう。ああ、分かったわ。あのさ、高三のときさ、私、社会科の選択授業で日本史とったのよ。

O L 1 あんた、日本史が好きだったの?

O L 2 うう、うん。実は先生がカッコ良かったのよ。

日本史のね。(歌う)先生、先生、それはせんせい。

O L 1 なーんだ、せいぜいそんなものなんだよ。あんたの勉強なんて。

O L 2 ナー二よ。その言い方。私だってこれでもそれなりの成績は取っていたんだぞ。

O L 1 ふーん。

O L 2 そのさ、日本史の時間に確かに聞いたのよ。

O L 1 何て?

O L 2 関所じやさ、特に「入鉄砲に出女」っていって、江戸へ鉄砲が入ることと、江戸から女人が出ること、

すごく気使ったんだって。

O L 1 うん、うん、私もどっかで聞いたことがあるよそれ。つまりさ、江戸幕府の権力の安泰のための政策だったのよ。

O L 2 そうそう、それでね、男は、通行手形さえあれば簡単に通すのに、女の場合は、手形の他に証文が必要だったとか。

O L 1 ヘーっ。女だけ別に証文が……そうか。そういうことね。ここにある「証文」てのは。

O L 2 たぶんそうよ。それにねえ、女が関所を通るときは、番所に、何て言ったつけな、えーと、改め女、とか言ったかな。女人がいてさ、奥の特別な部屋へ女の通行人を連れてって、髪解いたり、時には服まで脱がせてさ、証文にある人相書きや、身体にある特徴まで確認したんだって。

O L 1 ヘーっ、あんたの知識も、まんざらじゃないのね。

O L 2 日頃は知性をこの身体の奥に秘めている、このおくゆかしさ。

O L 1 すぐまた、その気になつて。

O L 2 私がね、こんなこと特に覚えているのはさ、日本史の先生がさ……

O L 1 もういいの(歌う)先生、先生……でしょ

(二人顔を見合わせる)

O L 1 2 (声を揃えて)

関より外に出る女は、つぶさに証文に引き合わせ通すべき事

二人のO L、ストップ・モーション。

暗転

中幕、下りている。舞台の前面で。

一人の炭焼きの男、息を切らせて上手より登場。後ろの方を落ち着かず振り返る。そのあと直ぐ別の炭焼きの男登場。

炭焼き 1 僕たち、どうして追われなけりゃいけねえんだ。何にも悪い事してねえのに。

炭焼き 2 どうも禁足の御要害の山に入っていたらしい。だって、あそこには小屋が建っていたじゃねえか。

炭焼き 2 どうも誰かが、御禁制を破つて建てていたらしい。

炭焼き 1 御要害の山に入っていたとしたら、僕たちはどうなるんだ。

炭焼き 2 お関所破りだろう。山を通つてお関所を裏ぬけしようとしたって、言われるだろう。

炭焼き 2 さらし首か。俺たち。

炭焼き 1 そうなるかも知れねえ。

捕り手 1 (上手袖の奥から) 関所やぶりだ。出合え、

出合え。

捕り手 2 (下手から二人、上手から二人、炭焼きをはさむように登場) 曲者、神妙にしろ。

二人の男、うろたえ、逃げようとして揉み合つ。しばらくして男たち搦まる。

捕り手 1 (男の腕をねじ上げながら) お関所破りめ、神妙にしろ。

炭焼き 1 お関所破りだなんて、とんでもございません。

おらは、仙石原の炭焼きでござります。

捕り手 2 炭焼きの男が、何で要害のお山でうろついていた。

炭焼き 2 いい炭を焼こうと思って木を探しているうち何時の間にか……

捕り手3 お山に紛れ込んで、お関所抜けを謀ったに違
いあるまい。

炭焼き1 本当に、ただの炭焼きでございます。

捕り手4 それじゃ、お山の中に、禁じられている小屋
掛けしたのが、おまえたちだったんだな。

炭焼き1 いいえ、小屋掛けだなんて、全く覚えがあり
ません。

捕り手1 申し開きはお番所でしろ。

捕り手2 〈炭焼きの男に縄を掛ける。〉さあ、番所まで
こい。

炭焼きの男たち、引き立てられて下手へ下がる。

中幕 あがる

舞台 江戸時代。 装置はそのまままでよい。

関所内。お手つき石のそば。それぞれ荷物を檻にして
背負っている旅姿の娘いちど、同行の乳母きぬが番所
の役人に通行をとがめられている。番役人、お手つき石の横の床机に腰掛けている。一人
の女は、お手つき石を間にして、番役人と向き合って
座っている。

番役人 言い訳にならぬ。いかような者であろうと、女

乳母 何としても先を急ぎとうござります。どうかご
慈悲を。旅に不馴な者でござりますゆえ、かつても
知らず……

番役人 黙れ！ 通行人はおまえたちだけではない。邪
魔だ。早くこの場を立ち去れ。

娘 〈おろおろしていたが、急に顔を輝かして、帯
のあたりに手をやり、ものを探るようにして〉婆や、
もしや、腰帶の縫取の中に、路銀のかくしと一緒に、
乳母 おお、そう言えば、路銀のかくしと、御守り札
と……よいことを思い出してくれました。お役人様、
畏れいります。少々お待ち下さい。もしかしたら、証

文はなくしたのではなく、持っているやもしれません。

出でくる。

二人、不馴な感じにお辞儀をして、場を外す。

娘の帯の中を探り証文を見つけ出す。

乳母 お役人様、ございました。確かに証文がござ
いました。

番役人 どれ、見せてみよ。全く忙しいのに手間を取ら
せる。〈証文を見る。〉武蔵の国橋の郡、坂本村、染
物問屋、橋屋伍兵衛娘いちど、並びにその乳母きぬ、こ
れはお主ら二人に相違ないか。

娘・乳母 さようでござります。

番役人 用向きは、尾張は有松まで。〈証文から目を離
し〉何用あって尾張まで行く。

娘 はい、父親伍兵衛が稼業の用事で、有松まで行っ
ておりましたが、その用向きのところで倒れました。
そのため、看病に出向くところでござります。

番役人 しかし、印判にかすれがあるな。奥で詮議する。
（上手奥に向かって）改めババよ。この二人を証文に
あるとおりか奥で吟味してくれ。

乳母 決して怪しいものではございません。

番役人 つべこべ言うな。

そこへ定番頭の立木徳右衛門がときどき咳込みながら

であれば通行手形だけでは、関所通過は罷りならぬこ
と、いまさら言うまでもあるまい。

乳母 はい、重々、そのことは出掛けに聞いて存じて
はおりました。確かに出立の際は、武蔵の国、橋の郡
の名主様、組頭様連名による証文を持っていたのでござ
ります。

番役人 出るとき持ついても駄目だ。証文はたった今、
この場で必要なのだ。

乳母 昨夜、小田原の宿で、護摩の灰に合い、路銀の
ほとんどを入れた紙入れを取られました。確か、その
中に証文も入っていたはずなのでござります。

番役人 ええい、言い訳はいらぬ。ここでの通行は罷りな
らぬ。國もとへ戻れ。

乳母 何としても先を急ぎとうござります。どうかご
慈悲を。旅に不馴な者でござりますゆえ、かつても
知らず……

番役人 黙れ！ 通行人はおまえたちだけではない。邪
魔だ。早くこの場を立ち去れ。

娘 〈おろおろしていたが、急に顔を輝かして、帯
のあたりに手をやり、ものを探るようにして〉婆や、
もしや、腰帶の縫取の中に、路銀のかくしと一緒に、
乳母 おお、そう言えば、路銀のかくしと、御守り札
と……よいことを思い出してくれました。お役人様、
畏れいります。少々お待ち下さい。もしかしたら、証

役人に追い立てられて、上手へ下がる。

暗転

夜の感じで溶明。関所の門の脇に、篝火が燃えている。
娘、泣いている。乳母、なだめている。

乳母 娘 さア、何處か宿をとりましょうねエ。お嬢様。

乳母 夜露は、身体に毒ですよ。ここで夜明し、といふわけにもいきませんからね。

娘 (ただ泣く。)

定番頭立木徳右衛門の息子、奥右衛門見回りのため蠶燈を持って下手より登場。一人を見つけて不審そうにちかづく。

奥右衛門 こんな夜分、そこで女二人、何をしておる。

(蠶燈で確認する。) おや、二人は昼間、通行差し止めを食らっておった者どもだな。

乳母 はい、さようでござります。

奥右衛門 夜分に何をしておる。

乳母 お役人様、どうぞ、お聞き下さい。私どもは、訳あって先を急いでいるのでございます。

奥右衛門 いくらここにおつても埒は開かぬ。身体にわるい。ここを立ち去れ。

乳母 はい、お言葉有り難くは存じますが、路銀の余裕もございません。今日は三島で宿をとる予定でございました。一刻も早く、ここを通過したいのでござります。

奥右衛門 無理は、無理。(泣いている娘の方を見る。)

この程度の乱れなら何とかなると……

奥右衛門 ただな、一度下した判断をくつがえすのは容易なことではない。それにな、一旦何か障りを感じた手合いは、つい疑つて掛かってしまうものなのだ。なぐしてしまったとか言つて、始めから証文を素直に見せようとしない者とかな……。

乳母 私どもは、旅の不慣れで、つい：

奥右衛門 いやいや、お主たちが実際あやしいものとは思えぬが、な。

乳母 明日、もう一度この証文をお見せしてお願いしてみます。決して偽りの証文ではないと、分かって頂けると思います。ね、お役人様、あなた様でしたら分かって頂けますね。

奥右衛門 そうさな、人が変われば、可能性がないではないとは思うが、ことはないのでしょうか、あなた様でしたらお分かり頂けますのに、

奥右衛門 わしも、立たないではないのだが、娘 お願いでございます。一日も早く尾張まで行

きたいのでございます。父が病の床で私の着くのを待つております。私は、一刻も早く父の看病がしたいのでございます。

乳母 お役人様、このお嬢様は、父親思いのお子でござります。

ところで、何ゆえに通行差し止めになつたのだ。

乳母 証文の名主様の印判が二重になつてゐるとか。

奥右衛門 どれ、その証文を見せてみよ。

娘、証文を取り出す。乳母、それを受け取つて、奥右衛門に見せる。

乳母 これでござります。

奥右衛門 (篝火にかざすようにして見る。) 名主と、組頭連名の証文に、特に不行届きはないようだが。

乳母 はい、この証文に、何のやましいところはございません。

奥右衛門 だが、確かに名主の印が多少、不鮮明ではある。

乳母 それは、名主さんがお年をめしていらっしゃり、少々力が弱かったためでございます。

奥右衛門 だがな、こういうことで通行差し止め、といふことは珍しいことはない。こういうところに厳しいのがお上の定めなのだ。

乳母 では、何としても、もう一度、証文を貰つてこなければいけないのでございましょうか。

奥右衛門 そういうことだ。ただな、この程度のことなら差し止めに合うほどでもないようにも思えるが。

乳母 (顔を輝かせながら) さようでござりますか。

ざいまして、こうして足止めとなつたことを嘆きまして、今夜は宿をとる気になれないと、こうして、朝を待つと言い張つております。

娘 ここから国元へ引き返すには、時の余裕も、路銀のゆとりもございません。一刻も早く先を急ぎとう存じます。

乳母 お役人様どうか明日、

奥右衛門 確かに事情もありそだし、

乳母 どうぞ、よしなに……

奥右衛門 うーむ。そう言われてもな、……実は、私は

まだ、御役儀見習いの身でな。近頃は父上の代りとして、番役として立てないでは……のだが……

乳母 (少々力を落として) さようございましたか。

……ところで今「お役儀」とおっしゃいました。お役儀と言えばここでは一番お偉いお方、どうぞあなた様の

お父君に、よしなにお話し頂けませんでしょか。

奥右衛門 この娘御の孝行な心掛けはよし、拙者も氣の

毒とは思うのですが……

娘 どうぞお役人様、どうぞ、どうぞあなた様のお力をもってご慈悲あるお取り計らいを：(その場に膝

まづく。乳母も後に続く。)

奥右衛門 うーむ。(腕組をして、行つたり来たりする。)

そこへ、ひどく咳こんで徳右衛門、三人に近付く。

奥右衛門 あゝ、父上。

徳右衛門 (ひどく咳込む。胸苦しそうである。) 先程より、そこで何ぞ話しかしをしるのは奥右衛門か。

奥右衛門 は、はい。

徳右衛門 (近付きながら、二人の女を冷たく見つめる)

そこの二人は、昼間通行差し止めにあつた者どもだな。

娘・乳母 は、はい。(地面に低くなりながら) はい、さようでございます。

徳右衛門 何を話しておった。

奥右衛門 はい、実はこの者どもが、訳あつて先を急ぎたいと……

乳母 お役人様、私どもは……

徳右衛門 (息子に向かって) バカ者め。早く番屋へ戻るがいい。関所番役人が一々通行人の繰り事に同情をかけていて何とする。

奥右衛門 はゝ、ただこの二人の様子が余りにも、

徳右衛門 役人たる者、天下の大事は一点の水漏れから始まるという畏れを常に忘れてはならぬ。荒木靖之進の例を知つておろう。一度とがめた者に同情を示し、通行を許したところ大事に到り、お役ご免となつたうことをな。おまえも、その後のあの家族の悲歎ぶりはよく知つておるはず。

奥右衛門 は、はい。

徳右衛門 おまえは今、御役儀見習いの身であること忘

様、どうぞ、どうぞ、私どもの通行をお許し下さい。

徳右衛門、二人の懇願を無視して下手へ去る。一人、残つた奥右衛門に向かつて、泣きながら願いを続ける。

奥右衛門 (腕を組んで) うーむ。

奥右衛門、進退極まってそこに立ち尽くす。

溶暗

溶明

舞台 昼間の関所

乳母 うろたえて) は、はい。(娘から証文を受け取つて奥右衛門へ渡す。) 申し訳ございません。これでござります。

奥右衛門 (手に取り、目を凝らしてその内容を読み上げる。) 武藏の国、橋樹の郡、坂本村、染物問屋、橋屋伍兵衛、娘いち、並びにその乳母きぬ、(二人を見て) これはお主ら二人に相違ないか。

娘・乳母 はい、相違ございません。(期待に顔を輝かせて奥右衛門を見つめる。)

奥右衛門 この証文では、関所を通す訳にはいかぬ。

乳母 はっ? 何とおっしゃいました?

奥右衛門 この証文では、関所の通過は罷りならぬ。

乳母 な、なぜでございますか。

奥右衛門 名主の印判に、乱れがある。

娘 で、でもそのことは、昨晚:

奥右衛門 (激しい口調で) 沙汰以前の問題じゃ。

娘、力なくその場に崩れるように伏す。

乳母 お役人様、どうぞよろしくお願ひ致します。

奥右衛門 (慌てて) は、はい。これでございます。

奥右衛門 女の通行には、何人たりとも別に証文が必要なこと分かつておるだらう。手形と一緒に示すものだ。

乳母 (慌てて) は、はい。これでございます。

奥右衛門 (昨夜会った親しみは見せない。) 通行手形を見せよ。

奥右衛門 女の通行には、何人たりとも別に証文が必要なこと分かつておるだらう。手形と一緒に示すものだ。

れるでない。(咳込む) 過日私は、小田原の大久保様に「願出書」を送つておいた。市橋様が間に入つて下さり、私の病氣のこと痛く心配して下さつてな。おまえのことを、私に代つて定番御役儀としてお認め下さることになつておるのだ。市橋様の言によれば大久保様も、日頃のおまえの様子をお聞きなされて、そろそろ定番にして、私に、心おきなく養生するがよい、とまで言つて下されたとのこと。市橋様の御親切を忘れはならぬ。

奥右衛門 は、はい。

徳右衛門 あと数日もすれば「申渡書」も届こうという時に、おまえがそんな頼りないことでどうするのだ。

すべからく、定番というものはお上のお定め通り、敵密に見張りを致し、関所をお守りすることが第一の仕事だ。それがつまりわが家においても幸せなこと。先代から受けついだものを子々孫々に伝えていく。これが私の務めであり、おまえの務めでもある。おまえも一児のて親じや。詰まらぬ同情や、ゆきがかりの感情で、末代に悔いを残すようなことはするでないぞ。今日は、要害のお山から関所抜けを謀つた男が撲まつたそうだ。気を緩めてはならぬ。(咳込みつつ下手へ下がりながら) 一点の水漏れが、堰を崩す例は多いのだ。

娘・乳母 (行こうとする徳右衛門に向かつて) お役人

奥右衛門　ええい、黙れ！（娘を足で払いのける）ほかの通行人の邪魔じや、下がれ。（下役人、六尺棒で押し返す）

娘その場に泣き崩れる。乳母おろおろする。

溶暗

溶明

時代 現代。

舞台 そのまま。

二人のOL高札の下にすわって居眠りして、頭を打つけあっている。一人寝ながら時々しゃくり上げている。

OL2 あらあら、やだ。ね、ね、起きてよ。
OL1 何よ、どうしたの。（あたりを見回す）あらいやだ。私、寝てたの？

OL2 そうらしいよ。二人ともこんなところで、何時の間にか寝ちゃったのよ。あら、あなた、泣いてたの？涙流してるよ。

OL1 そう言えば、私、悲しい夢を見てたんだわ。そういうあんたは、よだれ垂らしてるわ。

幕

二人のOL、慌てて歩きだし、ストップ・モーション
OL2 （時計を見て）あら、もう五時過ぎてるわ。
OL1 大変だ。もう帰らなきゃ。
OL2 ええ、（慌てて顔をさわる。）違うわよ。私も夢見て泣いていたんだわ。涙よ。
OL1 あら、そうなの。ところでどんな夢。
OL2 あのね、かわいそうな娘がこの関所の通行差し止めになっちゃったの。
OL1 あら、やだ。私もそんな夢見てたのよ。かわいい、私みたいな女の子が、かわいそだつたの。
OL2 あら、その女の子は、私だつたわよ。
OL12 （同時に立ちがる）何よ。（にらみ合う。しばらく見つめ合って、同時に吹き出す。）
OL12 ねえ、今何時？
OL12 （時計を見て）あら、もう五時過ぎてるわ。

トルチエツロ島

森 実与子



船に乗ってから、かれこれ一時間近くがたとうとしていた。うつらうつらしているうちに、蜃氣樓のようにかすんで見えたヴェネツィア本島の遠景も、いつしか見えなくなっていた。大半の乗客は、途中で止まつたムラノ島やブラーノ島で降りてしまい、満席だった船内はいまやがらんとしている。人が減るにつれて、回りの景色は、次第に静かで穏やかな眺めになつていて。

陽光にきらめく海原のところどころに、湿地帯のような草むらが広がり、海というよりも湖か川を遊覧しているような感じだ。人気を感じさせない静寂が辺り一面に漂い、まるで秘密の楽園に近づいているような気配さえある。動いているのは、水面近くを低空で飛ぶカモメとかすかな海風に揺れるざざ波と草木のそよぎ……、そしてこうして島へ向かう定期便の船だけである。それで、船はトルチエツロ島の桟橋に着いた。十数人

ほどの観光客が順番に船を降り、私と連れのロベルトもその後に続いた。小さな桟橋からはレンガ敷きの一本道が続き、船を降りた人たちが、その道をボツリボツリと歩き出す。

「皆こっちへ歩いて行くけれど、教会へ行くにはこの方向でいいのかしら」

私がロベルトに問いかけると、

「道は一本しかないよ」

ロベルトは答へながら眩しそうに空を見上げ、ジャケットのポケットからサングラスを取り出してかけた。

私たちも、船から降り立つた人たちの後をついていく。どうやらこの道の先に、島の見どころである古い教会があるらしい。

小道に沿つて運河が続き、濁んだ緑色の水をたたえている。回りには、無造作に草木が生い茂つているだけで、

人工的なものは何ひとつない。さっきまではヴェネツィアの中心街で、めまぐるしいまでの喧騒に囲まれていた。というのに……。別世界へ降り立ったような、まるでこの世の最果ての島へやってきたような、不思議な気分にさせられていた。

真っ青な空から刺すほどの強い陽射しだが、空気は張り詰めたように冷たい。その新鮮な空気の心地良さに浸りながら、私は軽やかに、ゆっくりと歩く。

前日の深夜、私は日本からヴェネツィアに着いたばかりだったが、観光客で溢れる本島から人を避けるようにして、この島をめざした。

「落ち着かないの、人が多いと……。だから、人があまりいかない場所を訪れたいわ。観光客ばかりのところでは、本当の旅とはいえないでしょう」

「本当の旅ってなんなのさ」

「観光地じゃないところへ行きたいの」

「それなら、この国はどこもかしこも観光地だから、どこへ行つたって無駄だよ。いつそのこと、アフリカの奥地の砂漠か、アマゾンの森林地帯でも行くしかないね」

「私は冒険家じゃないのよ。ただ、旅の余韻に浸りたいっていうか……、単純にいえば、静かなところに行きたい」

「僕と二人きりになりたいと、解釈していいんだね」

所詮この国のどこへ行っても、観光客向きに用意され

たお気軽な旅行にすぎないだろう。それでも、せめてもう一步先へ足を踏み入れてみたいと思ったのだ。

「トルチエッロ島はヴェネツィア発祥の地で、かつては

中心の町として繁栄した。でもマラリアで人々は死に、本島へ移つていったから、今はさびれてしまつたんでしょ。

私って、そういう忘れ去られた場所が好きなのよ」

「きみは、ロマンチストなんだね」

東京でしか会つたことのないロベルトとここまでやつてきたのは、夏のバカンスで国に帰つていた彼から、連絡を受けたからだった。

はじめてロベルトと言葉を交わしたのは、私が通つているイタリア語学校のパーティの時だった。

学校の教室を使って、ワインを飲みながらチーズと生ハムをつまむ気楽な会合に、生徒や教師、数十人ほどが集まつた。

ワインを飲んで酔いが回つたせいか、私はたまたま近くにいたイタリア人教師のロベルトに話しかけた。

「日本に来てどれ位になるんですか?」

「一年くらいかな」

「イタリアでは、何をしていたの?」

「今と同じ、イタリア語の教師だよ」

「どこの出身?」

「トリエステ……」

そして、泉から涌き出る水は、微風に撫でられ、甘く囁きながら、流れていく。

さっきの落ち着いた物腰からは想像できないほど、思い入れたっぷりにソネットを朗唱するロベルトの姿に、私は不意をつかれた。片手に詩を書いた紙を持ち、空いた片手を動かして感情を表現するその姿からは、彼の情念のようなものがほとばしっている。

（彼は情熱家のかしら。それとも音楽や詩を愛する芸術家……）

ロベルトは私の興味をおおいにそそり、自然に私の心はロベルトに傾斜していった。

名刺を交換したロベルトからそれからほどなく電話があり、誘われるままデートの約束をした。そして、梅雨の終わりを告げる雨の休日、渋谷のカフェでコーヒーを飲みながら、ロベルトと私は、カタコトのイタリア語と日本語で会話を交わしていた。

「私、本当は、イタリアにはほんの一、二日しか行ったことがないの」

「どこに行ったの?」

「ローマのヴァティカンとスペイン広場に行つただけ。お決まりの観光コースね。大学の卒業旅行で、ヨーロッ

春が来た。

浮かれた小鳥たちが、喜びの歌で挨拶する。

パを回ったの。もう十年以上のことよ」

「どうして、イタリア語の勉強をしているの？」

「本当は、子供の頃からずっとフランスにかぶっていたんだけど、いざ憧れのパリに行ってみたら、街も人も美しそうで悲しくなってしまった。素敵すぎて、遠い国だなあと感じちゃったのね。その点イタリアでは、すべてが楽しくて懐かしさすら感じたわ」

「それはうれしいことだね」

イタリアへの憧れが芽生え、言葉を習いはじめたのは、別れたばかりの恋人の置き土産みたいなものだった。

「ドイツは寒くて身も縮む思いだったけど、イタリアは文句なく楽しかったよ。ローマからナポリ、カプリ島まで足を伸ばしたんぜ。あんなに美しい島と海は、今まで見たことがないよ」

情報機器メーカーに勤務する彼は、仕事でドイツに行つた後イタリアで遊んできた話を、うれしそうに私に話してくれた。羨ましくてしかたがない私が、「私も連れていくて欲しかったわ」というと、

「それは無理だね。自分のお金で行けば……」

妙に冷淡な言い方をされた。

付き合って三年たつのに、恋人との仲は、ちょっとした行き違いが積み重なり、平行線をたどっていた。いつ

も仕事で忙しい彼と、テレビ番組の構成作家という不安定な身分の私との間には、徐々に距離ができていた。シナリオライターを目指してテレビの世界にもぐりこんだのに、現実にもらえる仕事といえば、お笑いやバラエティ番組の構成ばかりだった。スタッフとの深夜に及ぶばかばかしい会議や、出演者へのお追従。自分に合わない仕事をしていると感覚がいつも自分自身にまとわりついていたが、生活のためにには辞めることもできなかつた。仕事のことでもくさくさしている私の気持など、仕事が順調な彼はわかってくれない。都会で一人で生きるには、もう限界にきていたのかもしれない。

はじめて面と向つて、私はロベルトの顔をつぶさに観察した。

とんがった耳が特に際立ち、彫の深い面長の顔に、細くて高い鼻と薄い唇。白いジーンズにブルーの長袖のシャツを肘のところでまくり、細い体が強調されている。黒い髪の生え際にはわずかに白い物が混じり、あまり若くはないことを物語っていた。

「年はいくつなの？」

「年なんて、関係ないさ。心の問題だ」

気持ちは若いといいたいのだろう。手首のシルバーのブレスレットと、かすかなオーデコロンの匂いが、精一杯の若さの装いなのだろうか。私だって決して若くはない。

「イタリアでずっと教師をしていたのに、どうして突然、日本に来る気になったの？ 何か、ワケアリとか」

わざと冗談めかしていくつてみたが、私の稚拙なイタリア語では、言葉の真意がうまく伝わらなかつたかもしれない。

「僕の祖父は、大昔海軍にいてね。横浜に来たことがあるんだ。……子供の頃、写真を見せてもらってね」

「じゃあ、まんざら日本と縁がないわけでもないのね」

「ああ、子供心に遠い東洋の国に憧れを感じた。年頃になつてどうしても町を飛び出したくて、はずみでアメリカにまで行つてしまつた」

「アメリカにもいたの？」

「そう、アメリカの大学に入ったけれど、途中でお金がなくなつて卒業できなかつた。イタリアに舞い戻つて、そして今度は日本に来た」

「行つたり来たり、忙しいのね。放浪の癖なのかしら」

「……かもしれないね。子供の頃の記憶を急に思い出しても、それで日本に来たのかもしれない」

彼の出身地であるアドリア海に面した町トリエステは、悲しいという意味のイタリア語トリステに響きが似ている気がする。

彼の出身地であるアドリア海に面した町トリエステからは、

旧ユーロースラビアとの国境の港町トリエステからは、

い。無邪気な青春の時代はとおに過ぎ去り、なんとなく鬱々とした気分を抱いている。ロベルトは私より七、八歳年上の、四十代前半に思えるが、もしかしたらもっと上かもしない。

「ずっと一人なの？」

「そう」

「本当かしら……」

「疑ってるの？」

「ええ」

「理由はないよ。きみだって一人だろう。同じだよ」

ロベルトは真面目で礼儀正しい態度を崩さなかつた。

私は彼の顔をじっと見つめた。次第に、謎めいたブルーの瞳に吸い寄せられていく。

「あなたの瞳の色は、ブルーなのね」

不思議そうに見つめる私の視線が恥ずかしいのか、

ロベルトはわざと、

「いや、ブルーじゃなくてグリーンだよ」

と答える。典型的なイタリア人顔というより、もっと鋭角的で、ゲルマン系かユダヤ系の血も混じっているよう

な氣がする。

彼の出身地であるアドリア海に面した町トリエステは、悲しいという意味のイタリア語トリステに響きが似ているからか、どこか寂しさが漂う。

いさんが日本に来たのって、いつのこと?」

「前の前の戦争。つまり、第一次世界大戦のことさ」

「そんな昔?」

「そうだよ。僕の町は、長い間オーストリア領だったし、その後は国際的な貿易港になつたから、いろんな国と自由に行き来できたんだよ」

「むしろ、イタリア領となつてからは、日が浅いのね」

「そう、ヨーロッパは地続きだから、戦争に勝つたか負けたかで、国境線なんかすぐに変つてしまふ。トリエスティは、色々な人種や言葉が混在している町さ」

「島国の日本では考えられないことね。国境の町のロマンに誘われるわ。行ってみたい……」

ロベルトは下を向いて、子供のように指の爪を噛んだ。

彼の癖なのだろう。

薄暗いカフェのなか、私たちは意志を伝えあうために、かなり大きな声で話をしていた。その声が、高い天井のざわついた店のなかで響き渡り、私たちの空間だけは異質な空気が流れているような気がした。異国の男と一緒にいるということで、私はその独特的の雰囲気に酔い、妙に心が高鳴っていた。

雨のなか外に出るのも煩わしく、二時間ほど同じ店にいたが、やがて会話もとぎれ、街の色も夕方から夜に変り、何となく手持ち無沙汰になつていた。

「これからどうする? 食事でもする?」

うなづきながらロベルトはいう。

「日本の料理も悪くはないでしょ。ソノピエナ」

覚えたてのイタリア語で、私がおなかがいっぱいだというと、

「その言い方はおかしいよ」

とロベルトは私のイタリア語を訂正する。

「人前でいったら、変に思われるよ」

「どうして?」

「おなかが大きいっていう意味にもなるからね」

手振りを加えながらロベルトはいう。

「あはは、妊娠しているっていう意味ね」

「そう、変だらう。知らない人が聞いたら、変に思う」

「……じゃあ、なんといえばいいの?」

「ソノサツィアの方がいいね」

ロベルトはシャツのポケットからボールペンを取り出すと、箸が入つていて紙に書いて教えてくれた。

「ありがとう。この言い方、忘れないわ。ロベルト先生から、じかに教わったんですもの」

店の外に出ると、雨はあがっていた。

雨に濡れた横断歩道を渡り、足早に駅に向つた。

「やっと、雨がやんだわ。もうすぐ、私の好きな夏」

「ええ、寒さが苦手だから。夏の暑さと強い陽射しを浴

「そうしよう」

外に出ると、まだ雨は降り続いていた。ロベルトが差し出してくれた透明のビニール傘のなか、人込みに押し流されるように歩いていたためか、私の剥き出しの腕がロベルトの肘にあたり、シャツを通して、生暖かい体温が伝わってくる。

日本風のものを食べたいというロベルトの要望で、近くのうどん屋に入った。

暖簾の下がつたうどん屋は、それまでいた薄暗い店とは違つて明るい照明のせいか、ロベルトの表情もさっきより緩んで見える。

私が一つ一つのメニューを読んで説明すると、ロベルトはちょっと考える顔つきになり、結局この店のおすすめのうどんすきとマグロのカマ焼きセットを注文した。しばらくして注文した品が目の前に置かれると、ロベルトは箸を使って口にしようとするが、なかなかうまくつかめない。

「フォークとナイフ、頼みましょうね」

「いや、いいよ。箸を使つて食べたいんだ」

懸命になつて箸を使おうとする不慣れな手つきがおかしくて、私は苦笑していた。同時に、何となく胸に暖かいものがこみ上げ、心が動いていくのを感じた。

「うん、おいしいな。魚もうどんも気に入つたよ」

私の胸の内など察するべくもなく、食べ物を噛み締め、

びると、生き生きと甦つていくような気がするの」

「夏が好きなら、やっぱりきみはイタリア向きだね」

数時間一緒にいて、私はなんとなく名残惜しい気持ちになつていた。それはロベルトも同じらしく、若者たちでごつた返す駅の切符売り場で、しばらく立ち話ををする。

「休日にはいつも何をしている?」

「スポーツクラブへ行くことが多いから。プールで泳いだり、ジムでトレーニングしたり」

「僕も、スポーツジムにはよく行くよ。スポーツが好きなら、それなら今度は、テニスでもしようか。……お互に、電話をしあおうね」

「ええ、わかつたわ」

混雑した駅の改札で、お互いの顔をくつつけあうイタリア式挨拶をするのは、ちょっと恥ずかしかつたけれど、人込みのなかで、私たちは抱擁しあつて再会を約束した。

「きみは、まるでイタリア人みたいだね」

冗談めかした言葉を残して、ロベルトは改札の向こうへ去つていった。

連絡をとりあう約束を交わしたものの、ロベルトとはそれつきりで、あつという間に夏休みのシーズンに入つていた。早々にイタリアへ帰つてしまつたのか、語学学校でもロベルトの姿は見当たらない。また会おうなんて、ロだけの社交辞令だったのかもしれないとちょっと落胆

しながらも、私は秋からはじまる新番組の仕事が入り、夏のバカンスとはほど遠い生活を送っていた。

八月の中旬、不意にロベルトから電話があった。

「仕事でアメリカへ行っていたから、連絡がとれなかつた。明後日、イタリアに帰るんだ。……時間があつたら、今日か明日、逢いたいけど」

恵比寿の広場に面したビヤホールで、ビールジョッキを目の前にして、私たちは人の波を眺めていた。週末の夕方、たくさん的人が行き交っている。陽射しがコンクリートの歩道をじりじりと照らし、まぎれもなく夏の盛りであることを感じさせる。

「こうして人の通る風景を見ているだけで、楽しいわ。カップルや親子連れ、いろんな顔の人たちが、思い思いの服装で通り過ぎていく」

「イタリアへ行つたらこんなものじゃないよ」

「そうよね。広場やオープンカフェが至るところにあって、道行く人たちは、もっとおしゃれできいで、絵になる風景だわ。きっと、見飽きないわね。……故郷へ帰るの？」

「ああ、それにヴェネツィアに用事があるんだ。かなり長くいると思う」

「……いいわね、私も行きたいな」

「いきつけのホテルがあるから、教えておくよ」

（36）

私たちの前を、外人の老カップルが腕を組んで仲良さ

そうに歩いている。日だまりの中で、時間が止まっているかのようなどかな風景だ。

小道沿いに幾軒かの民家が点在し、庭先には赤やピンクの小花が無造作に咲きみだれ、島に住む人々のさざやかな暮しが垣間見られる。やがて前方の右手の奥に、小さな塔が見えてきた。きっと私たちの目指す教会なのだろ。しばらく歩くと運河は行き止まりとなり、小さな広場のような一角に出くわした。広場といつても、レストランが一軒ある他は、安っぽい露店の土産物屋がいくつか並んでいるだけで、草むらと木々が広がるばかりである。行き止まりの運河はまるでブルみたいで、水面に、真っ青な空と豊かな枝振りの緑を映し出している。土産物屋の布や置物を横目で見ながら通り過ぎると、すぐに、赤茶けたレンガ作りの古い教会の前に出た。八角形の建物を柱廊がぐるりと囲む立派な教会で、日が当たって明るい正面や屋根とは対照的に、柱廊は暗い影を織り成している。さらに行くと、歩きながら望んだ、鐘楼を持つもう一つの教会がある。

教会の中に足を踏み入れると、外の眩しい光線とはうつて代つて、闇のような暗さである。次第に目が慣れてくると、その暗い空間の中で金色のモザイクが燐然と輝いているのがわかった。キリストを抱いた聖母像とそれを

取り囲む使徒たちの像が、くつきりと浮立っているではないか。

「外観からは想像つかないくらい、すばらしいモザイクだわ。やっぱり、キリスト教の国ね」

自然がそのまま放りだされているような外の風景と比べると、精巧に描かれたモザイク画の、なんと華やかなことか。暗くひんやりとする教会の空間、そして輝く聖母子像。明暗の対比が厳かな空気を醸し出し、聖なるキリストとマリアが伝わってくる。

「この島が、かつて繁栄していたことの名残だね。榮光のかけらとでもいうのかな」

けれども教会以外には、見るべきものは何もなかつた。おそらくこれらの教会がなかつたら、この土地は、ただの忘れ去られた孤島でしかないのだろう。

教会の奥の草むらに、足を踏み入れてみた。野つ原が一面に広がり、誰もいないし何もない荒涼たる風景だが、明るく光に満ちた廃墟といつてい。その時目の前に、一匹の野良猫が現れた。黑白のまだら猫は、観光客慣れしているのか、親しげな素振りを見せ、おもむろに草むらに仰向けに横たわる。

海の匂いを含んだ潮風が、体を突き抜け、体中の細胞に染み入っていくようだった。猫も風を感じているのだろうか、それとも私の愛撫が心地いいのか、体をよじらせてじゃれついてくる。何もかもがあるがままの姿で、

ロベルトはズボンのポケットから手帳を取り出すと、ホテルの名前と電話番号をテーブルの上のナブキンに書いてくれた。

「どれ位いるの？」

「一ヶ月半くらいはいるつもりだ。ヴェネツィアで絵を描いている友達がいて、日本で個展を開きたいといつているんだ。その打ち合わせがあつてね」

滞在先を教えるなんて、これは私に対する誘いなのだろうか。口に出して直接聞いてみようと思ったけれど、言葉にならなかつた。イタリアもヴェネツィアも、そしてロベルトという男も、私にとって未知の世界であるが故に、強烈な好奇心にはかられるが……。

三週間ほどして、ロベルトから絵ハガキが舞い込んだ。トリエステの青い空と海、そして海に面した白い古城の写真がまぶしかつた。イタリア語で書かれた文句のなかに、「ロベルト」とカタカナで記してある。その拙い日本語に、ロベルトの思いがこめられているようで、私は強く惹きつけられた。

突然、雨の日のデートのことが脳裡に甦つてくる。そして、イタリアの明るい陽光のなかで、ロベルトに会つてみたいという思いにかられ、私はいつもたつてもいらなくなっていた。そして、見えない力に招き寄せられるようにして、ロベルトが書いてくれたホテルを目指し、私は一人、ヴェネツィアへ向つたのだった。

息をひそめて生きている。かつて二万人いた人口が今は三十人余しかいない、いわば無人のような、死んだ島だということが実感できた。が逆に、そんなさびれてしまつた土地だからこそ、私の心を搔き立てる。

「時間だけが、ただひつそり流れていて、この世とは別の世界みたい」

「ここが気に入った?」

「ええ、好きだわ」

「住んでみたい?」

「ええ、悪くはないわ。でも、長い時間いたら退屈してしまうかしら」

ロベルトは立ったまま、猫と遊ぶ私を上から見下している。黒いグラスの奥で、ロベルトがどんな眼差しで私を見ているのかは、この時の私にはわからなかつた。

丁度昼下がりの時刻となつていた。来た道を引き返し、

桟橋へ戻る途中の、運河沿いの小さなレストランで昼食を食べた。

レストランは、欄干もなく、レンガと石を組み立てたおもちゃのような橋のたもとにあり、外に面したテラス席は、とても居心地がいい。島を訪れた観光客のほとんども、この店に寄りこむようで、レストランは昼食時の賑やかさを帶びている。

「この眩しい陽射しが、私を包みこんでいるようだわ。

「人の匂いがする。生活の匂いもね」

「鼻がいいんだね」

「そうよ、特に嗅覚は敏感なの」

私がわざとおどけて鼻を突き出すと、ロベルトは私の鼻をつまんだ。

島の中心へ行く道は、いく筋もあるらしい。小舟の浮かぶ狭い運河や、細い路地や広場を、しばらく行き当たりばったり歩いていくと、突然、目の前に色の洪水が広がつた。赤やピンク、ブルー、グリーンと、色とりどりのベンキを塗つた、マッチ箱のような小さくて四角い家が立て込んでいるのだ。しかも、窓の外に吊るした棒には、洗濯物がはためいている。今までの眺めとは一変した鮮やかな色彩に、私は面食らつていた。

「かわいい家ね。まるでポップアートの世界に迷いこんだみたい」

「ここは漁師の島でね、海から自分の家がわかるように、思い思いの色を塗っているらしいよ」

「目印に色をつけたのね。でもこれほどカラフルだと、逆に自分が自分の家かわからなくならなかしら」

家の玄関先に椅子を持ち出し、お喋りしながらレースを編む女たちの姿も現れた。日焼けして肥つた女たちは、この島の主婦たちであり、漁師である夫の帰りを待つているのだろう。土産物屋の店先には、彼女たちの編んだ真っ白なテーブルクロスやハンカチ、ヴェネツィア特

なんだか、眠くなってきたわ」「疲れているんだよ。昨日着いたばかりなのに、午前中からこうして歩いているのだから。十二時間のフライトはきつかつただろう。少し頬がこけたんじゃないかい」「痩せたっていうこと? それならうれしい言葉だわ」「きみはもともと痩せているんだから、それ以上細くなつたら困るよ。もっと食べれば」

白ワインを飲みながら、魚介類のスープと、パケツ一杯ほどもある大盛りの蒸したムール貝を口にする。島の食事は、実に素朴でデリケートだ。

慎ましくてお行儀がいいロベルトの一舉一動は、年上の男の落ち着きなのだろう。と同時にどこか謎めいた影があり、一緒にいても掴みきれないような歯がゆさもある。それは言葉のせいなのだろうか。それとも……

しばらく休んだ後、私たちは桟橋に向つて歩き出した。そして船に乗つて、別の島へ向かつた。

船は葦のはえた平原のような浅瀬を通り抜け、十分ほどでブランノ島に着いた。

午後になつて雲が増え、太陽の光は、少しにぶくなつてきた。桟橋の近くは公園になつていて、並木道の木の下にはベンチが点在する。この島はトルッチャ島より広く、住人も観光客も多いことがわかる。

有のガラス細工のキャンディーやアクセサリーが並び、観光客の目を楽しませてくれる。かわいらしいレストランも軒を並べ、さつきの無人の島とは違つた活気がみなぎる。

ここでは島のあらゆる場所に生活感が滲んでいるが、外国人の私から見ると、逞しく飾り気がなく、まるでおとぎの世界に紛れこんでしまつたような、夢見心地な生活感である。

低い家々のバックに、一本の傾いた茶色い塔が、空に伸びている。

「あの塔、今に倒れるんじゃないの。それにやけに洗濯物が目につくわね。でもそれも絵になつていてるわ」「ここは、洗濯物とカラフルな家の島だね」

ジグソーパズルのような家々の間の路地を歩きながら、私は写真を撮ろうとリュックからカメラを取り出そうとした。が、いくらリュックの中をかき混ぜても、カメラは見あたらない。

「トルチエッコ島に忘れてきたみたい。どうしよう……最後に写真を撮つたのは、確か、レストランの前の橋の上、だつたかしら」

「じゃあ、戻つてみようか」「……戻るのも面倒だけど、まだカメラはあるかしら」

半信半疑で私が問うと、「あの島なら、大丈夫、盗む人なんていないさ」

「それならあなたのいう通り、戻ってみようかしら。でも時間が気になるわ」

船の間隔は、一時間に一本ほどしかないが、時計を見るとまだ五時前である。

「まだ時間は十分あるからね」

ロベルトの言葉に促され、私たちは引き返すことになった。

船が来まるまで、桟橋近くの木立の下のベンチに腰を下ろして、元来た島へ戻る船を待った。

石でできた、大きな古い井戸が目に入る。その周りの木の幹には洗濯ロープが張り詰められ、辺り一面、白い洗濯物が風にはためく。岸辺では、数人の子供たちが遊んでいる。船をこいだりボートを投げ合ったり、実に忙しい。奇声を発しながら、伸びやかに遊びに興じる無邪気な子供たちは、島に生きる朴訥さが溢れている。

「あなたも子供の頃、あんな風に遊んだの？」

ロベルトは答える代りに、私の肩を抱き寄せた。その手には、力がこもっていた。

彼らはこの島で、親の跡をついで漁師になるのだろうか。それとも、島を出て都会の波のなかで生きていくのだろうか。日が傾いてきた夕暮れのなかで、子供たちの姿が影絵のように揺らいでいる。

「ロベルト……」

名前を呼んでも、答えは返ってこない。

「ロベルト、どこへ行ったの？」

私の声が辺り一帯にこだまして、沈黙だけが広がる。今まで一緒にいたロベルトが、忽然と消えた。一瞬のスキにいくなり、影も形もなくなってしまった。つな

いでいた手のぬくもりが、微かな感触として残っているだけだ。とその時、運河の水が風に揺れ、さざ波が立った。さわざわっという水音とともに波がゆらめいたが、すぐに元に戻ったようだった。いや、風が起こったと感じたのは、私のせいだったのかもしれない。

「私をからかっているの。ねえ、早く出てきて」

あたりをいったりきたりしてみるが、人も、猫さえない。

「こんなところで、私を一人にしないで」

昼間食事をしたレストランも、もう営業を終えたらしく、ドアはかたく閉ざされている。

「ロベルト、どこへ行つたの？」

私が抜けた私は、レストランのドアの前にしゃがみこんで、ロベルトの名を呪文のように繰り返した。どれ位、時間がたつただろうか。わずか五分ほどの中でもあり、店の裏口から中年の男が出てきた。肥って愛嬌のある丸顔の男は、帰り支度を終えたレストランの従業員らしい。

……もう陽が暮れていた。

トルチエッロ島で船を下りたのは私たちだけで、代つて、本島へ帰る人たちが乗り込んだ。

昼間は、太陽の光に射すくめられそうなほどあらゆるもののが輝いていたのに、今はひんやりとした冷たさだけが私を捕らえ、人影もない草むらは黒い塊となつて私を怯えさせた。

「何だか、恐いくらい」

「さっきとは、正反対だね。この島が好き、それとも嫌い？」

「昼間だけだったら、好きなままでいられたのに」

私はロベルトの手をひっぱり、ゆっくりと運河の道をたどった。

すぐには、石の橋が見えてきた。目をこらすと、橋の階段の隅に、黒いケースにおさまった小さなカメラが、ちょっと鎮座していた。

「あっ、きっとあれだわ」

「僕のいった通りだろう」

私は急いで、橋のたもとへ駆け寄った。

「よかったです。この島の人たちは、モノをとつたりしないのね……ついでにもう一枚、写真を撮りましょうか」

振り向くと、しかしロベルトの姿はそこになかった。

夕闇にまぎれて、見えないのだろうか。

「どうしたのかね？」

中年男は驚いたらしく、おおげさな手振りで私に問い合わせてくる。

「連れの男が、急にいなくなっちゃって。ついさっきまで、一緒にいたのに」

私の言葉に、男は困惑顔を見せる。そしてしばらく考えこむような表情を見せて、一気に口を開いた。

「……きみをからかって、先に帰つたんじゃないのかな。私は今から、最終の船でヴェネツィアに戻るんだ。これ

を逃すと、船は来ないよ」

「どうすればいいの」

私が独り言のように呟くと、

「戻つた方がいいんじゃないのかい」

陽気に喋る男の言葉に促されて、私も帰つた方がいいような気になっていた。

桟橋へ戻ると、乗客は数人しかいなかつた。ロベルトの姿もそこにはなかつた。では、彼はまだ島にいるのだろうか。しかし、人気のないこの島にこれ以上一人でいるのは耐え難く、私は戸惑いながらも、来た船に乗り込んだ。

暗い海の上を、船は滑るように走り抜け、時折、町の光が遠くにキラッと反射する。いつの間にか、私はまどろんでいた。気がつくと、船はヴェネツィア本島の桟橋に近づき、出口に人だかりができている。

「あの橋はね、悪魔橋というんだよ」

私の横に、島で出会った中年男がやってきて囁いた。

「あんな可愛いらしい橋が？」

「運河を渡るために、悪魔が一晩で、あの橋を作ったと

いう言い伝えがあるんだよ」

「そんなところで消えるなんて……」

「君の彼も、悪魔なのかもしれないね。今夜は食われち

まうかもしれないね」

中年男は、笑いながらウインクをして、去っていった。

不意に私は、ロベルトの耳を思い出した。

上の方に鋭利にとんがった耳は、何かに似ていると思つ

ていたが、そうだ、彼の耳は、悪魔の耳ではないか。ロ

ベルトの正体は、悪魔だったのか。……そんな、ばかば

かしい。

（私を驚かそうと思って、下手な芝居を思いついたのか

しら。まあ、この国の人たちは冗談が好きだから）

肥った男の軽口に少し心がほぐれて、ホッとしながら

船を下りると、私は一目散でホテルに戻った。

しかし、ホテルのフロント係に尋ねても、ロベルトは

帰つてこなかつたという。動搖しながら部屋に戻ると、

がらんどうのようない室が煤けてみえ、惨めな気分になつ

てきた。ロベルトの旅行鞄も、洋服箪笥の中の数枚のシャ

ツとズボンもそのまま置いてあり、戻つた形跡もない。

「ロベルト、本当は私を驚かそうとして、バスルームに

走り出しが、人の塊に遮られて思うように動けない。
前を歩く外人の大きな体が、私を通せんぼする。やつ
とのことで前の人を追い抜いても、今度は逆方向の人の
流れにぶつかり、同じ場所で足踏みしているような状態
である。憔悴感にかられ、全身から汗が吹き出し、服が
濡れしていくのがわかつた。ようやく人の流れをくぐり抜けたその時、再びロベルトの姿をとらえた。小走りに走り、

「ロベルト」

声を出した拍子に、勢い余つて肥った外人に体当たりしてしまつた。その外人は、怪訝な目で私を見る。

「ごめんなさい」

私はロベルトを見失わないよう、必死で人の群れの中を駆け抜け、

「ちょっと待つて」

声を上げても、ロベルトは気づいてくれない。私はやつ

とのことでその男に接近し、力をこめて腕をつかんだ。

吃驚した顔で振り向いた男は、ロベルトに似てはいるが、もっとふっくらとした顔立ちの別人ではないか。それに女を連れている。

「ごめんなさい。人違いでした」

カップルはおどけたように笑っているが、私は落胆のあまり息苦しくなり、人込みから逃げ出したいくなつていた。

隠れているんでしょ」

わざと声に出してバスルームを覗くが、使われた形跡もない。

（もしかして、あの運河に落ちたとか。まさかね。海辺出身のロベルトが、泳げないはずはないもの。それにしても……）

じつとしていることができず、私は部屋を出た。

観光客を乗せたゴンドラが、細く曲がりくねつた運河を縦横無尽に行き交う。レストランで食事をする人たちの楽しげな談笑、ショウウインドウをのぞきながらそぞろ歩きする人の波。広場、橋、路地すべてが人で埋め尽くされ、私はその人の群れのなかにロベルトの姿を見つけようと、目をこらしながらあえてなくさまよつた。

しばらくして路地裏の狭い運河の橋に出ると、一つ向こうの橋の上に、ロベルトに似た瘦せて長身の背格好の男をとらえた。だが、建物と運河に阻まれてすぐに追いつくことはできない。

「ロベルト……」

私が呼びかけると、その男はチラッとこちらに横顔を見せた。私は急いで運河から脇道へ引き返し、その橋へ向かつた。しかしその脇道には、ショウウケースに魚介類を並べたレストランやアイスクリーイム屋、カーニバルの仮面を飾つた店など、観光客が喜びそうな店が軒を並べ、人の波が絶えない。一刻も早くロベルトに追いつこうと

人のいない方へ向かつて歩くと、いつしか、入り組んだ迷路のような運河の路地へ出ていた。レンガが剥げ落ち、煤けたような古い外壁に囲まれた小さな空間は、薄氣味悪いほどうらぶれ、ひっそりとしている。レストランの裏口で、従業員たちが、仕入れの食材を入れたダンボール箱を店に運びこんでいる。観光客の大群とは無関係の、地元の人たちが働いている姿は、この街の隠された日常である。

そのうちに、観光の中心サン・マルコ広場に出ていた。夜が更け人の数は減つてゐるが、有名なカフェの前では小さな楽団が音楽を奏で、優雅な気分を誘う。オレンジ色の街灯と暗い海に反射する光が、海蛍のように揺らめく美しい夜景を見ているうちに、疲労感がずつしりと押し寄せてきた。

（こんな夜に、こんな場所で、私を一人ぼっちにして平氣でいるなんて、ロベルト、あなたは一体どういうつもりなの。意地悪な男）

歩き疲れた私は、夕食もとらずにホテルに戻つた。

しかしロベルトは帰つておらず、伝言もない。部屋に

戻つてシャワーを浴び、鏡に顔を写してみると頬はこけ、私は一日で、すっかりやつれていた。

ベッドに横たわつても寝つかれないままに、私は夢を見ていた。

黒いマントをはおったロベルトが、私の前に現れた。観客のいない舞台の上で、ロベルトは、詩を朗読している。やがて、ただ一人観客席に座る私に向かって、語りかけてくる。

「僕を探すことは、できなかつたようだね。見つけてくれるかと思っていたのに、残念だ」

「ロベルト、今どこにいるの？　さんざんあなたを探したのよ」

ロベルトは無言のまま、不気味な笑みを浮かべる。

「どうして私を置き去りにしたの。あなたの正体は、……やっぱり悪魔なの？」

「やっと気づいたようだね」

「私をどうしたいの、悪魔の世界に引きずりこみたいの」「僕はきみに恋をしてしまったから、きみの魂を預けて欲しいんだ。それが悪魔の常道じゃないか」

「私は、こうしてあなたと一緒にここまで來たのよ。これが十分に愛の証じゃなくて」

「いや、愛ではないよ。單なる気まぐれ、きみ特有の暇つぶしつてことだろう」

「そんな言い方しないで。私なりにあなたを愛しているのよ。おかしいのは、あなたの方よ。年のこと気にしているの？」

「いや、年なんて関係ない。ただきみは、魔女のような女で、僕の力の及ばないところに生きている」

（こんな変な夢を見るなんて、どうかしてるんだわ。悪魔とか魔女だなんて、頭が変になつたみたい。明日は早く起きて、ロベルトを見つけ出さなきや）

翌朝、私は前日と同じコースをたどり再びトルチエックロ島を目指した。

船乗り場まで行く道すがら、ロベルトに似た男を何度も目にした。しかし私の視線が男をとらえると、すぐに消えてしまう。それはある種のゲームのようでもあり、ロベルトの影に引きづられて、やはり私は島へ戻るしかなかった。

真っ青な空、強い陽射し、果てしなく続く海……。ロベルトがいないことを除いては、昨日とまったく変わらない静かな眺めだ。

桟橋に降りて、私は小道を歩き出した。

悪魔橋までたどり着き、私は橋の近辺にロベルトの手がかりがないかどうか、たたずんだ。彼の持ち物が落ちていないだろうか、どんな小さなものでもいいから、ロベルトにつながる手がかりを見つけ出したかった。けれども、何の形跡もない。とその時、橋の数歩先の民家が目に留まった。花のある小さな庭先は昨日も目にしたはずだが、何故か気になつて、私は鉄格子の門の前まで行って足を止めた。石造りの古い家はすごく感じがよくて、中を覗いてみたくなった私は、導かれるようにして中へ

「いいえ、あなたの他に私の関心をひく男はないわ。本当よ。近寄ってくる男たちは、どれも退屈でつまらない男ばかりだもの」

「ほら、きみは自分では意識していないようなことをいえけれど、男を振り回すのが得意じゃないか」

「どんでもないわ。振り回されているのは、私の方よ。今日だって、突然姿を消して私を翻弄したのはあなただわ」

「いや、きみの授業中の態度を考えてみるがいい。まったく感心できないね。心ここにあらずといった風にそっぽを向いたり面白くなさそうな顔をしたり、真剣味が感じられないよ。そして無関心を装いながら、時にはその丸い瞳を輝かせて、人の顔を覗き込んだり、花びらのような口元から赤い舌を出して唇を舐めたり、長い髪を撫で回したり。そんな不埒な態度は、魔女としかいよいうがないじゃないか」

「そう思いたいのだったら、それでも構わないわ。皮肉ばかりいわないで。優等生みたいな態度をとれないのは、私の性格なの。学校に通っても、一向に語学は上達しないし、あなたのいう通りかもしれない。でもあなたは、そういう魔女みたいな女が好きなんでしょう」

目が覚めると、夢にうなされて全身に汗をかいていた。身を起こすと、目の前の壁にかかる銀の十字架が暗闇の中にくつきりと浮き立ち、一瞬私は恐ろしくなった。影が動いた。

入っていった。
人影はない。

門をくぐり抜けると小さな庭があるが、手入れがされていなくて、雑草が生い茂っている。その草のなかに、小さな白いブランコがポツンと置いてある。
(子供のいる家のかしら……)

玄関のドアには鍵がかかっておらず、押すと簡単に開いた。

短い廊下の先に、リビングルームが続いている。数枚の絵が飾られた白い壁とレースのカーテンのかかつた窓、そしてベージュの木目のテーブルと椅子を置いた、こぎれいな田舎の家であることがわかつた。私は一瞬こんな家に住めたらいいと思った。その時、奥のキッチンで人影が動いた。

「こんにちは」

私は、思わず声を発していた。しかし返事はない。何かロベルトの手がかりが掴めそうな予感がして、もう一度声をかけた。

「こんにちは」

私は、思わず声を発してきたのは、小さな男の子だった。あどけない顔をしたブロンド髪の幼稚園生くらいの男の子は、恥ずかしそうに笑う。

「素敵なおうちね、実は、人を探しているんだけど……」

「パパを、呼んでくるよ」

男の子はそういながら、二階に駆け上がっていく。

キッチンの流しの脇には、朝食で使つたらしいコーヒーと皿が洗つて置いてあり、きちんと片づけられている。二階で話声がし、やがて人が降りてきた。

……降りてきたのは、ロベルトだった。

「ど、どうしてここにいるの？ タベからずっと探していたのよ。心配したじゃないの」

私は怒ったようにいい、ロベルトに駆け寄つて抱きついた。

「きみを待つていたんだよ。……やっと来ててくれたね」

「あなたは、この子の父親なの？」

「その子は、僕たちの子供だよ。僕たちは、自分たちの行く海を探すためにここまで来たんだ。はてしなく遠いけれども、きみはついてくれたんだね。……きみはすっかり、この島が気に入ったようだし、ここが、僕たちの家なんだ」

ロベルトは、さらに力をこめて私を抱きしめた。彼がいつもつけているオーデコロンの香りが、ほのかに伝わってくる。

「とても素敵な家だわ」

「気に入つてもらえてうれしいよ。さあ、上へ行こう」ロベルトに促されて階段を一步ずつ上ると、寝室があり、隣にもう一つドアがある。大きなベッドと洋服箪笥だけの広くてシンプルで部屋には、テラスもついている。

なかに入り、ゆっくりと波のように動き出す。一定のリズムを持つ動きに、私の体はすいつくように密着し、一つの塊となっていく。

行為が終わって、私はロベルトの肩にしなだれかかった。

「とてもうれしいわ」

「愛しているよ。この家は、僕たちのものなんだ」

再び、くちづけを交わす。

「そうね、子供までいるなんて、生きている実感があるわ」

「その言葉を聞いたら、もう僕は……」

最後の囁きのような言葉を、私は聞き取ることができなかつた。

……目が覚めて、夢うつつのまま隣のロベルトに触れようと手を伸ばしたが、宙を擱むだけだった。ハッとして横を向くと、もぬけの殻だった。腕時計を見ると、二時を回っている。私は二時間あまり眠ってしまったようだ。

家のなかは静まり、窓を閉じた部屋は暗かった。起き上がつて扉窓を開けると、強い陽射しが部屋中に差し込み、慌てて窓を閉めた。洋服を着て階下へ行くと、ロベルトも男の子もいなかつた。

（また消えてしまった。それとも、ロベルトとベッドを

「隣の部屋は？」

「息子のために用意した」

ベランダの扉窓を開けると、海が見渡せた。船の中から見たのと同じように、ところどころに草むらが生い茂る穏やかな海が光っている。

私たちはベッドに行き、体を重ねた。

身につけていたジャケットと薄いワンピースと下着はすぐ取り払われ、全裸になつた私はベッドに横たわった。ブルーのTシャツを脱いだロベルトの胸板は思ったより厚く、胸毛が生えている。無駄な脂肪のない、痩せている割りには筋肉質の体だ。ロベルトの纖細な指と舌が、執拗に私の乳房に、腰に、首筋にからみつく。ロベルトの吐息が全身に伝わり、私の体も呼吸をはじめ少しずつ開いていた。高まっていくのを感じながら、私はおもむろに頭を上げてロベルトの顔を覗き込み、耳を噛んだ。

「ああ、なんてすばらしいんだ。……もっと噛んで」

ロベルトはもだえながら、歓喜の声を上げる。

「やっぱり、悪魔の耳ね」

再び強く噛むと、とんがつたロベルトの耳が、ピクピクと痙攣している。すると今度は、ロベルトが私の乳房を噛んだ。痛みが体を突き抜け、次第に全身が痺れていくような感覚に陥る。ゆっくりとロベルトの顔は私の下半身へ移動する。そして、上になつたロベルトが、私の

共にしたのは夢で、現実ではなかつたのか）

私は外に出て、桟橋の方へ向かつてとぼとぼと歩き出した。

船着き場には人だからができる、何やら騒がしい。この島にそぐわない雰囲気に胸騒ぎがした私は、慌てて人だかりのなかに飛び込んだ。

「何かあったんですか」

「海に、男の死体が浮かんでいたんだよ。……夜、誤つて海に落ちたらしい」

「夜って、タベのこと？」

「さあ、はつきりしたことはまだわからない。今さつき、死体があがつたばかりだから」

「身元は？ 死んだのは、どんな人なの？」

「なんでも、一週間くらい前にこの島にやってきて家を買つたばかりなんだとき。その家で新婚生活を送るんだといって、一人で新居の準備をしていたというんだ。こんなさびれた島で新婚生活とは、変わった奴もいるものだと、島の人間たちは話していたんだ」

（やっぱり、ロベルトなの？……でも、タベのうちに溺れたのだろうか）

私は人だかりを離れて小道を引き返し、家の前に戻つてたたずんだ。

あたりには、何事もなかつたような穏やかな風景が広がるばかりだ。

私はロベルトと一緒に、はるか遠くこの島まで足を伸ばしたというのに、運河や海や太陽や緑や、この風景しかし目に入らなかつたのだろうか。隣にいたロベルトは、煙のように消えていつてしまつた。そう思うと、途端に心のなかに空しさだけが広がつた。この家のなかで、私はただ、虚無に抱かれただけなのかもしれない。しかしこの家は、現実に存在しているのだが……。

呆然としているその時、突然、ジャケットの袖口をひっぱられた。

傍らを見ると、家のなかで見た男の子が立つてゐるではないか。悲しげな表情で私を見上げ、やがてしゃくりあげ始めた。幻影だと思つてゐた子供が、目の前にいるとは。

「どこにいたの？ ロベルトはどうしたの？」

私はしゃがんで男の子の顔をのぞきこんだが、子供は泣きながら首を振るだけだ。

死体がロベルトだとしても、それは単なる事故死に違いない。私は一人の観光客にすぎず、このままそっと帰つてしまえば、何もわからないだろう。次の船に乗つてヴェネツィアへ戻り、急いで日本に帰ればそれでいいのだ。……しかし、男の子は力をこめて私の手を握つてゐる。その手のぬくもりが伝わり、私を離さない。これはもしかしたら、ロベルトの手なのだろうか。

「あなたの名前は、歳はいくつ？」

「マルコ、五歳……」
「きっと、ママが迎えにくるわ。私は船に乗つて帰らなければならないの」

後ろ髪を引かれる思いで、男の子の手を離し、私は一目散に棧橋へ走つた。

事故の後始末のために付近はまだ混乱しているが、時刻表を見ると、十分後に船はやつてくる。私はホッとしてベンチに腰を下ろすと、目を閉じてこの二日間の奇妙な出来事を思い返してゐた。ロベルトは、本当に死んだのだろうか。いや、ロベルトは本当に生きていたのだろうかと。

船が到着した気配に目を開けると、あの男の子が立つていた。ふっくらとした白い顔には、ロベルトと同じグリーンの瞳が輝いてゐる。その澄んだ瞳が、執拗に私を見つめる。その時私はふいに、この子を育ててみたいといふ衝動にかられていた。日本に帰つたところで、意にそわない仕事に追われながら、今までと変わらぬ平凡な日常が繰り返されるだけだ。これから先、自分の子供を産むこともままならないかもしれない。それならいっそ、この愛らしい子供を自分の子として育てるのも悪くはないだろう。

ロベルトは私に、深い痕跡を遺していつた。それは、これからの私の人生を呪縛するほど、ずつしりと重いものにちがいない。

旅 行

フライブルクにて

青木昭成



1 目覚め

朝が来ていた
フライブルクの朝が

厚いカーテンの隙間から来て それは
だが部屋の隅すみまでは満たしていない
だから目覚めきれないでいる私の脳裏
そのかたすみには密かな緊張のきざしが
しかし すでに静かに忍びこんでいて

妻はまだ 眠りのなかに居た
声をかけずに そっとベットを下りる
昨日からの疲れはもちろん癒されていない

旅装は床のうえにまだ解かれたままだ
それにしても昨夜 窓を飾っていた点景

あの常夜灯の輝きは 窓枠からいっただい何処へ
隠れてしまったというのか
そうだ やつと うつつのなかに身をおいて
私はよその国にいる己を実感しはじめているのだ

2 朝食

バーデン地方の小さな都市の
数少ないホテルのなかのその小さな一つ
だが なんとも小ぎれいな食堂ではないか
植え込みの枝ごとに街路が見え隠れする
テーブルの上にはスイートピーの花が一房
私たちはまずは 落着きの場所を得たことになる

「グーテン モルゲン」
「カフェー オーダー テー」
それは私たちがテーブルに着くやいなやの
ウエイトレスからの問い合わせであった
そうか バイキング形式の用意になつてゐるが
それでいて「お茶」だけは違うのか

「カフェー ピッテ」と妻が答える
それに倣つて「ティー プリーズ」と私も続く
すると早口の問い合わせ返ってきた

「Sです お疲れでしょか 先生は?」
パリトンの主の 第一声はそれだった
かってS氏は十余年間 妻のピアノの生徒だった
「先生」と呼びかけるS夫人もまた若い同窓生だ
お二人はフロントで待っていた

「お疲れでしょが お出かけは」
またも 老夫婦を気遣ってくれる それは
昨夜遅くまで付きあつてくれたお二人の
若々しい抒情とでもいべき好意だった

七月の初旬 それにしてはひどく寒い
S夫人が妻にそつと何かを差し出している

セーターだった 妻はおおげさに喜び
先週の暑さにかわる今週の 異常気象が
と またも お二人はかわるがわる氣の毒がる
曇り空からは思い出したように 小雨が落ちる

詰りきれなかつた季節 私たちはそのためには
最初の外出を 買物に付き合させていた
傘をさし 町角を二つ いや三つ曲がったろうか
これと印象の残らないほど の 距離を歩く
そこがこの街のおもな商店街であった

「ミルヒ オーダー ツィトローネ」
どうやら選択を訊いているのに違いない
それが正解 ウエイトレスはすぐに
「ヤー」と微笑み 下がつていった
ああなんと 詰まらない緊張の試行であつたことか
数少ないゲストたちの静かな話し声のなか
気兼ねの消えた私たちは 同時に椅子を立つ
好みの食材を選ぶべくコーナーに近づく

オレンジとアップルジュース ヨーグルト
チーズ サラダ 何種類かのドイツパン
ベーコン ハム ソーセージ それに
メロン トマト 林檎 葡萄 莓などなど
それにしても 全部がこの地方の産物だろうか
なんと豊富であることが これから一週間
と思うことで私は満足だった

3 季節に諧る

十時 部屋に電話が鳴る

大店舗はない しかし何でも揃つてある
これがドイツの古い小都市の街並みなのか
いや 音楽大学もある魅力のある街のはずだ
雨降り用の帽子 コート 靴 それにセーター
ついでに 取替え歯付き歯ブラシ 入浴剤
めつたに見かけないだろう日本人には
あれも これもと よく薦めてくれる
それにしても観光客の姿は何処にもいない

4 遊歩

ひろい歩道は凹凸のある小さな正方形の
石ですっかり敷きつめられていた
ヨーロッパの古い街ではよく見かけるに違いない
だが 車道もまたおなじ凹凸の石畳で敷かれしていて
冬には凍結するだろうに だが その歩道の巾の
半ばば 並列する小型自動車の姿で占められていた
車の合間をマロニエの巨木が空から覆っている
どこかの国の あの長い自転車の列とは ちょっと
模様が違う だがこの国でもいつから生活の
利便のためには こうして街路の風情を
壊しはじめてしまったのか

四人は揃って ホテルのオーニングの階段を降りる
それがそのまま駅からのトウルム・大通りだ

歩道はやや登りがちに ほぼ まっすぐに
市の中央に向ってすすんで往く しかも

この歩道にも縁取りするよう石溝が沿っている

ここがベッヒレの源泉とか だから街路の
お臍のようなところかも とお二人が言う
十米の高さにベルトルトのブロンズ像が
立ち上がっていた

5 街のうちそと

底は深くない それは石の大きい桶そのものだ
だが その底を速くしかも鋭い清水が疾走し

これをベッヒレと言うとかつまり この街の
通路から路地をぬって走る小川の流れのことだ

そういえば こうして
私たちは何に心を奪われていたのだろう

いや 何に目を奪われていたと言うのでもない
差し出せばベッヒレは指を斬る冷たさだ

そういえば こうして

私たちは何に心を奪われていたのだろう
いや 何に目を奪われていたと言うのでもない
差し出せばベッヒレは指を斬る冷たさだ

いや 屋根の形 窓枠の色 ショウウインンドウ
古い商館 新しい博物館 そびえる大聖堂
黒い森の裾に位置しているというこの街には
古いものと新しいものが混在していた

私たちは結局 目当てを目指すこともなく
それだけに ベルトルトの噴水の広場まで
とうとう遊歩して来てしまっていた

ここはまた大学都市 およそ九〇〇年の歴史の街だ
だから 市立のオペラ・ハウスがあつてもうぜん
S氏はそこの専属の歌い手であつて もちろん
市の吏員として仕事をする身分でもある
シーズン・オフまえの最後の週にあわせ この日
私たちは初めて舞台姿の彼に会うことができた
S氏は初めて舞台姿の彼に会うことができた
S氏は初めて舞台姿の彼に会うことができた
S氏は初めて舞台姿の彼に会うことができた
S氏は初めて舞台姿の彼に会うことができた

斬新な演出によるヘンデルの

「アシスとガラテア」 それが演し物だった
妻は かゝっての生徒の堂々たる舞台での雄姿に
ひとしおの思いで聴き入っていた

それはまた この街の着飾った紳士・淑女の
よゆうある鑑賞のありかたに すっかり
魅惑されてしまつての感激でもあつた

あくる日 私たちは市電に乗っていた

有名なケーキの店で昼食をとろうとの誘い
いくつもの停車場で止まり また発車する
そのつど車内のアナウンスが呼んでいる

「・・・・シユトラーセ」「・・・・ガッセ」

私の耳にはその それしか聞こえてこない
いくつもの小路と いくつもの通りを越して
やがて終点 そこはスター・フェンの町

レストラン風の しかも客が混みあつてゐる店で
自慢のオプツ・クーヘンとオプツ・トルテと
そのどちらかに紅茶をそえて夫々に注文した

あくる日曜日
私たちは大聖堂への通りを歩いていた

そびえたつ尖塔 その石の古色が
歩く人々の気配さえもいよいよ静謐にしている
ここには私たちには無い何かが有るとふと思う

妻はフロントへ言った

しかし 無いが不思議でない私もいる とも思い返す

大聖堂の木造の大扉は 時間ごとに開かれる

S氏に誘われ おそるおそる その闇の空間に入る
はるか彼方にひかる祭壇 高い頭上のステンドグラス
慣れるにしたがい 人々がいて 小さな蠟燭が灯り
とおい距離から賛美歌が近づいてくる

S氏がそっと囁く

「このミサに 時々 ソロを頼まれて歌っています」
「戦争で まわりの建物は みんな壊れたのに
この教会だけは 無事だったそうです」

そうだ 異教徒の私にも この奇跡は真実そのものだ

6 回遊へ

ミュンヘンへは汽車で と決めていた
出発の瞬間は どんなときでも慌ただしいものだ

八時半にはS氏がもう来てくれていた
九時には夫人が紙袋を下げてやって來た
彼女が乗り換え駅のマンハイムまで
同道してくれるというのだ

妻はフロントへ言った

「ダンケシェーン アウフ ヴィーダアゼーエン」

私は英語のつもりだったが

「ダンケ シー ユー アゲイン」と言ってしまった

すると日本語が返ってきた 「さ よ な ら」

それに もちろん「ダンケ シェーン」が加わった

私たちのトランクの下の小さな車輪が

石畳の凹凸のうえで激しく振動して鳴る

それをお二人が それぞれ一台づつ引いてくれた
改札のない駅の構内をよこぎりホームを確認する

ホームの列車の停車位置をも確かめる

列車はS氏を残して あっけなく駅をはなれた

彼には会える だがこの街をふたたび訪ねることは
無いかも知ぬ との思いが私にはあった

私は寡黙になっていた かわりに二人はよく喋る

マンハイムでの乗換え時間は同じホームで

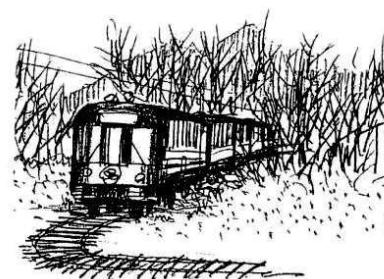
十分程しかなかった

やがて 列車に乗り込んだ時

私たちはトランク二個を座席の背後の空間へ
押し込むことに懸命だった

ふと気づき 二人は同時に車窓を振りかえる

だが もう列車はホームの端を滑っていた



(54)

神の手



新井宏

数多くの伝記文学の中でも、トロイを発掘したシュリーマンの自伝や伝記ほど、波乱の生涯を、誰にでもわかり易く、物語性豊かに語り聞かせてくれるものはないであります。まるで良く練り上げられた壮大なドラマである。

そのため、戯曲やオペラあるいは青少年向けの偉人伝の定番にもなっており、現在でも世界中に感銘を与えつづけている。

トロイ戦争が史実であったことを証明する。まさにアマチュア学者の大勝利であった。

このようなシュリーマンの栄光に満ちた感動的な物語は、青少年の夢をかきたてずにはおかなかった。フロイトもそのひとりである。私も、アーヴィング・ストーン著（水上峰雄訳）の『シュリーマンの生涯』を読んで、考古学への夢を育んだ。

幼い日、父から聞いたホメロスの叙事詩に魅せられ、いつの日にか焼け落ちたトロイの町を発掘することに決めたシュリーマンは、まずは十分な資金を得るために、極貧の中から、語学の才を武器に、商売の階段をかけ登り、数々の事業に成功して巨万の富を得る。そして四十年になつて、考古学を学び、学界の常識を覆し、ついにはヒッサルリクの丘に「ブリアモスの財宝」を発見し、

初恋の少女ミンナと語り合ったトロイ発掘の夢を、生涯かけて実現して行くシュリーマン。十三カ国もの言語を自由にあやつり、事業家として大成功した第一の人生、そして幼い日のロマンを追い求め、地中海考古学を開花させた第二の人生。物理的には不可能なふたつの人生を実現して生きたシュリーマンは、何もかもが理想的であり、私も彼の人生に密かに自分の夢を重ねていた。

妻は云った 「ホームで何度も挨拶したから」
そして 手にはS夫人が渡してくれた
紙袋があつた 入っていた中身は
サンドウィッチとペットボトルだった

ところが最近になって、この感動的な物語が、全て偽りだったことが、相次いで明らかにされた。エルヴェ・デュシェーヌ著（青柳正規監訳）の『シュリーマン・黄金発掘の夢』と（デイヴィッド・トレイル著（周藤芳幸はか訳））の『シュリーマン・黄金と偽りのトロイ』である。

シュリーマンに虚言癖があつたことは、前からある程度知られていた。しかし、何から今まで偽りで彩られたことを、誰が想像したであろうか。とにかく、凄まじいばかりの虚飾なのである。

まず幼い日のトロイに対する関心からして、全くの作り話であった。それは、トロイ発掘の前にシュリーマンが書き遺した膨大な手紙や日記の中に、トロイのことなど、どこを探しても書き遺されていないことから判る。また幼い日に読んだルートヴィッヒ・イエッラーの『世界歴史』、そこには、燃え盛るトロイの城壁を背に、父を背負い幼い息子の手を引いて逃げるアイネイアスの銅版画が載せられているが、これも厳密な考証結果では、彼がトロイの発掘後に入手したものであった。

もっとも、この程度のことであれば、功成り名遂げた人物の自伝という性格からして、シュリーマンを嘘つきと決めつけることはないであろう。問題なのは、彼の人生のあらゆる面で、この虚言癖が付きまとっていたことである。

この事はおそらく、シュリーマンの初めての著作『現代のシナと日本』にも当てはまるであろう。実はシュリーマンが、一八六五年幕末の日本に来ていたというと誰もがびっくりする。シュリーマンの膨大な伝記を読んでも、彼が日本に来たことなど、東まわりでアメリカに渡った旅行の一環として、一行書かれているだけなので無理もない。しかし彼は中国と日本に滞在した二ヶ月の経験をもとに、文庫本にして二百ページになる旅行記を書き残し出版している。ただしその本が、石井和子により『シュリーマン旅行記清国・日本』として日本に紹介されたのは、ほんの十年ほど前のことであり、一般にはあまり知られていなかった。

この本を読むと、当時の横浜のみならず、生糸の集散地である八王子まで遠出したことや、著しく制約された江戸の市中見物さえ、比較的自由に行っている様子が、詳細に描かれている。たった一ヶ月の滞在で、良くもこれほど多彩な経験ができたものだと驚くばかりだが、あるいは他人の話を自分のことのように脚色して書いた

ものかも知れない。貴重な史料であるが、歴史研究者による検証が必要と思われるには、彼の虚言癖がこの書のみ例外であったとは考えられないからである。

このように、私生活や日記あるいは著作に頻出する虚言癖が、考古学の世界に限って無縁であつたなどと、楽観的に考えるわけには行かない。いや、そもそもシュリーマンの虚言癖が、百年以上もたつた今日、ある意味で執拗に追求されているのは、むしろその問題が考古学上の大問題だからである。

例えば、シュリーマン発掘のクライマックスである「ブリアモスの財宝」発見の経過について触れて見よう。この財宝は、長さ一メートル、幅五十センチの不思議な形をした銅製容器の中から見つかったもので、金、銀、銅器などが多数入っており、まさに財宝というに相応しいものであるが、公式発表によると、一八七三年五月にシュリーマンと彼の妻ソフィアが発見して取り出したことになっている。しかしこれは事実ではない。その時、ソフィアはアテネにて現地を離れていたのである。

また発見場所が当初の「ブリアモスの宮殿の一室」から後に「隣接する市壁」に変わった上に、図面では市壁の外側になつていて、その経過が不自然であり、発見日も最初の五月三十一日から六月七日に変わっている。更に決定的なことは、「ブリアモスの財宝」として写真に収められた出土品のいくつかは、発掘の二年も前に撮影

そのなのである。実は、発掘の最大の成果である「ブリアモスの宝」さえも、彼の手によって埋められ、そして掘出されたと疑われているのである。まさに「神の手」であった。

シュリーマンの虚言癖が病的で想像を絶するのは、私的な日記でさえも、嘘で満ちていることである。例えば、一八五一年二月二十一日のフィルモア大統領との一時間半にわたる歓談など、実況放送ながら臨場感にあふれるものであるが、まったくの創作であり、また同年のサンフランシスコ火事を生き生きと書き記した日記の部分も、検証の結果では、彼自身の経験ではありえない。

これは当然ながら商売面にも現われていた。一八五年から一八五二年にかけて、黄金ラッシュに沸くサクラメントで百三十五万ドルもの砂金を仲買して大儲けしているが、その時には買い付けた砂金の送量をこまかして取引停止にあつてはいる。また一八五九年にはサンクト・ペテルスブルグで詐欺犯として告発されたりしている。前妻との離婚のため、アメリカの市民権を取ったのも、詐欺的な申告によってであり、その後も、同時にふたりの女性に求婚して贔屓を買っている。

この性向は、書き物となると、ますます巧みに発揮され、いたるところに盗作的な記述が残されている。例えばシュリーマンは、地中海地方への最初の旅行をもとにして、一八六九年に『イタカ』という考古学的なエッセ

された、別の出土品の写真のなかにも見られている。

そのため、これらの財宝はシュリーマンが闇で購入して、こっそり遺蹟に埋めておいたものと糾弾されるようになっている。またシュリーマンが、その後ミケーネで発掘した何百点もの遺物も、実は贋作なのではないかと疑われ始めている。ギリシャでは現在、八百カ所以上のミケーネ時代の遺跡が知られているが、シュリーマンが見つけたミケーネの竪穴墓から出た金の十分の一の金でさえ出土した例が皆無なのである。問題は既に、シュリーマンの発掘に虚偽があつたか否かではなく、その中にどれだけ本物があるのかに移っている。

考古学が科学と最も異なるのは、その検証過程である。科学では、ある事実が提示されると、必ず追試が行われ、追試で同じ結果が得られてはじめて、その事実は認証される。しかし考古学では、いくら似たような場所を発掘しても、同じような結果が得られるとは限らない。むしろ同じような結果がでることの方が稀である。しかも考古学は遺物を求めての学問であり、百の推論よりもたった一つの決定的な事実で、勝敗が決まってしまうところがある。

だから自分の掲げる学説を正しいと信じていれば、さほど罪の意識なく、発掘による事実関係を、都合良くカモフラージュして表現することなど日常的に起こり得る

のである。その延長線に恣意的な捏造が起ころる素地がある。逆にいえば、そのような考古学の性格から、新しい発見や学説に対し、極めて懷疑的になつていているのも考古学界である。どんなに重要な事が見つかっても、都合が悪ければ、黙殺して済ますことができる。二度と検証される可能性が少ないのである。権威の顔色を見て、余計なことは言わないで居れば安泰である。新しく提出された斬新な学説も、よほど確定的な事実でも現われないかぎり、とりあえず無視してしまう生活の知恵も、その流れである。

特に、新しい事実の発見者あるいは新しい学説の提唱者がアマチュアである場合、絶対といってよいほど黙殺される運命にある。黙殺されることは、はつきり根拠をあげて否定されるよりもはるかに厳しい拒絶である。

在野の研究者相沢忠洋が、岩宿遺蹟で旧石器を発見した場合もそうであった。それまでは火山活動の盛んな日本列島にあって、火山灰の赤土層より古い時代に人が住んでいたはずがないというのが定説で、専門家達は三年間も相沢忠洋の主張を冷笑し無視していた。そんな中で、相沢忠洋は納豆の行商で生活を立てながら、旧石器の存在を訴えつづける。それに反応したのが、若き日の芹沢長介であった。

当時、芹沢長介は明治大学の大学院生であったが、彼

の説得によって、明大助教授の杉原莊介らが動き、旧石器時代の存在を初めて学術的に証明することになる。しかし、その結果を受けても日本の学界は、相変わらず冷ややかに無視を続けた。しかもその一方では、驚くべきことに、杉原莊介は、新聞発表から学会報告、報告書の刊行まで自分だけの名前で行い、最大の功績者である相沢忠洋は、単なる「あっせんの労をとつてくれた人物」としてしか扱ってもらえたかった。二重、三重にわたるアマチュア無視である。これに抗議して芹沢長介は大学を去る。

このような雰囲気にある考古学界では、専門家は何事にも懷疑的で大胆な主張を嫌い、アマチュアはその反動で、独創的な主張を無警戒に展開することになる。その結果、アマチュアは無数の間違いを犯す一方で、その拘りによって画期的な業績を独占することになる。日本の考古学界史を紐解けば、まさに在野学者の活躍のオンラインである。

そもそも大森貝塚のモースは動物学者であつたし、古墳研究の草分けガーランドも冶金学者であつた。もちろんその頃、考古学という学問体系が日本になかつたのであるから、当然といえば当然である。しかし、その後の考古学の研究も、その多くの部分を、情熱的な在野的研究者によつて支えられてきた。前出の相沢忠洋はもとより、森本六爾、中山平次郎、相良信夫、藤森栄一、それ

に山根徳太郎、原田大六、坪井良平など個性豊かな方々が、どれほど日本の考古学界に貢献したか計り知れない。おそらくあらゆる学問分野の中で、考古学ほどアマチュア参加の多いものもないであろう。

このような在野研究者の活躍は、時によつては、職業としての専門学者からの妬みをさそい、意図的な無視や低評価や、業績の横取りを生むことになる。そうなると、むきになるのが人間の性であり、アマチュア研究者は、更に学説を先鋭化させ、強引な論理や主張、無理な証拠を求めて走り出す。そしてその無理が綻びを生み、専門学者からの反撃にあつて、また無視や冷笑に晒される循環を生む。

シュリーマンの場合もそうであった。その当時、ホメロスの叙事詩『イリアス』などは、まったくの虚構であり、トロイを探そうとするなど、専門家の間では、まったく馬鹿げたことだと思われていた。もちろん『イリアス』などに歴史の反映を認め、トロイを実在の場所と考える者もいたが、それは少数派であり、しかもその場所としては、より内陸のブナルバシを想定していた。

そんな中で、初めてトロイに旅行したシュリーマンは、ヒッサルリクこそがトロイであると信じるアメリカのダーナエルス副領事フランク・カルバートに出会う。既に部分的な発掘を進めており、かなりの手応えを得ていた。

シュリーマンはこれに飛びつく。

何らかの遺跡があることは、初めからはつきりしていなかった。ただし、シュリーマンにとっては、それが『イリアス』のトロイでなければならなかつた。シュリーマンの事業家としてのセンスからいえば、多大な投資に見合う成果は、ヒッサルリクが焼け落ちたトロイであることを論証し、全世界を驚かせることによってしか得られなかつた。最初から結論を決めての発掘であつた。だから何としても「プリアモスの財宝」が、それに相応しい場所から発掘される必要があつた。

シュリーマンにとっては、学問的な好奇心もさることながら、アマチュア学者が専門学者の鼻をあかして、ホメロスの世界を実証するという物語を完成させ、全世界からの称賛を浴びることがより重要であった。それには彼が正規の教育を受けなかつたというコンプレックスも関係している。経済的な豊かさを得た現在、シュリーマンにとって、社会的な名声こそが必要であった。いくら十三カ国の言語を話せても、それは教養とは見なされなかつた。

シュリーマンにとっての最初の名声は、著作活動によつて得られた。日記にさえ虚構を書きつけたシュリーマンは、生まれながらの小説家であつた。他人の業績を縦横に組み合わせ、そこに彼の視点を与えると一冊の本が出来上がつた。そのようにして書かれた『イタカ』によつ

て哲学博士の称号を得たことは彼にとって絶大な支えであった。そしてこれをトロイの発掘によつて拡大再生しようとしたのに違ひない。シュリーマンの欲望はとどまるところを知らなかつた。彼の頭の中では、既に全世界が相手であった。

発掘の成果は、専門家向けの研究誌よりも大新聞に発表され、新事実は、直ちにタイムズやアウグスブルグ新聞、ギリシャ国王に打電された。そこでは、新聞に好意的な記事を掲載してもらうため、金を使うのも常套手段であり、世論操作を含めた壮大なドラマが発掘とともに進行していた。専門家たちの白眼と一般大衆の支持といふのが構図であつた。したがつて、もはや発掘さえもそのドラマの筋書きを逸脱することは許されなかつた。そのなかで、発掘の事実関係の改竄やヤラセが進んでいた。

似たようなことが、最近の日本でも起つた。東北旧石器文化研究所の前副理事長の藤村新一による旧石器捏造事件である。

ドラマは、宮城県岩出山町の座敷乱木遺跡で、一九八一年に四万数千年前の石器が、藤村新一の手によつて発見されたことに始まる。それまでは三万年以上さかのぼる人工遺跡は存在しないと考えられていただけに、日本にも中期に遡る旧石器時代があつたことを高らかに宣言

した大成果であった。

これに勢いを得たのであらうか、藤村新一は、三年後の一九八四年には古川市の馬場壇A遺跡でも十七万年前の石器を発見し、旧石器時代を一気に前期まで遡らせる。それからというものは、とどまるなどを知らぬように、わずか二十年たらずの間に、十万年単位で「日本人の起源」を更新し続け、ついには秩父市の長尾根、小鹿坂両遺跡そして宮城県築館町の上高森遺跡や北海道十津川町の総進不動坂遺跡で、五十万年、六十万年、七十万年前の石器を発見し、世界の人類史の通説を覆す大発見を成し遂げる。

とにかく神がかつていた。二千件以上にもわたる前期・中期旧石器時代遺跡の発掘で、藤村新一だけが、大成果を上げ続けた。これにお墨付きを与えたづけたのが、奇しくも岩宿で相沢忠洋を助けた芹沢長介である。

マスコミも町おこしを願う地元も、世論は「日本人の起源」の繰上げ更新をあげて歓迎していた。アマチュア学者の研究には冷淡でも、学界の権威の「お墨付き」があれば、多少うさん臭くとも大手を振つて通用するのが考古学界であった。それをマスコミが後押しした。いやリードしていたのである。

藤村新一は仙台市内の高校を卒業後、独学で考古学の世界に入ったアマチュアである。一九七二年に本格的な活動を開始し、七五年には相沢忠洋に会つて激励を受け

ている。そして、座敷乱木遺跡で大成果を上げてからは、次々に「神の手」によつて成果を上げ続ける。もう既に異様な世界であつた。

もつとも、座敷乱木遺跡の場合についても、当初から異論があつた。東京都教育庁の主任学芸員であった小田静夫が『人類学雑誌』に批判論文を寄せて、三万年以前にさかのぼる人工遺物の確かな証拠は、いまだ存在しないと真っ向から異議を唱えていた。小田静夫は石器の専門家である。しかもその論文が考古学の学会誌ではなく、人類学史の学会誌に書かれていたことにも注目する必要がある。考古学の学会誌では握りつぶされる恐れが多分にあつたからである。

それにしても、考古学分野における相互批判の乏しさはどうしたことであろう。それは新しい学説が、無視され軽視される風土と無関係ではない。学界の権威に逆らう主張は無視され、権威の認めたことには無批判で従う。異論を黙殺し、議論を避けてきた考古学界。だからこそ藤村新一の行為以上に、それを許してきた考古学界の体質が問われなければならないのである。

普通なら、藤村新一だけが大成果を上げ続ける異様さに、気がつかなかつたはずがない。しかしそれを声高に主張したのは、共立女子大の非常勤講師である竹岡俊樹だけであった。

幼い頃から石器になじみ、パリ第六大学で旧石器の本

格的な修行をつんできた竹岡にとつては、藤村新一の業績には不可思議なことばかりが目立つた。何度も氷河期を経ていれば、歪みがあるはずなのに平面に並んで出てくるのも不思議だつたし、石器を手に取つてみれば技術は縄文時代のものが多い。ヨーロッパの知識では、旧石器原人は力が強くても、とても指先の微妙な制御は無理で、縄文時代の石器のようにものは作れるはずがなかつた。

竹岡俊樹はその疑問を学術誌に発表するが、学界アウェサイダーの悲しさで、またもや無視される。そのため非常手段として、当事者や学界の権威にもその論文を送りつけるが反応がなかつた。そのような行為そのものを嫌う学界は、既に自浄能力を全く失っていた。

そして問題解決がマスコミに委ねられるという悲劇的な結末を迎えた。いわばマスコミが藤村新一の悲劇を誘発し、マスコミがその悲劇を暴いたわけである。考古学者自身で問題を解決し得なかつたことは、藤村新一の捏造事件よりもはるかに深刻な事態であつた。

竹岡俊樹は、オウム真理教事件の解明などにも著書のある多才人であるが、国際的な旧石器研究者である。その彼の肩書きが、共立女子大の非常勤講師である。そのことだけでも、日本の考古学界の国際的な閉鎖性が判る。かつて戦前には、明治の元勲大山巣の息・大山柏によつてヨーロッパの旧石器については詳細に紹介されていた。

しかし、日本では考古学の発掘が盛んになるにつれて内向きになつて国際性を失つて行く。批判を嫌い異端を排除して、仲間内でのみ権威を作りあげ、その権威にあぐらをかいて、自由な批判を黙殺する。それにマスコミが同調していた。逆説的ではあるが、いわば考古学界全体がアマチュア化てしまつていたのである。

事件が明るみに出た後に、いわば当事者のひとりでもある芹沢長介が、中央公論誌上で「波乱の考古学界を憂えて」いる。それを読むと、一九九七年の時点で既に、中国や韓国の学者が、石器の状態を見て、疑問を呈してゐたことがわかる。中国や韓国の学者にわかつたことが、なぜ日本の学者にわからなかつたのか。いや日本でも竹岡俊樹のように疑問の声を挙げていたはずなのに、芹沢長介は、なぜか一言もその発言について触れていない。全く不可解である。

が埋まつてゐる必要があつた。そしてその通りに遺物が出てくることこそが、サービスであり正義であり、捏造という非法的な手段であつても、主観的には何も間違つたことではなかつたのである。

藤村新一の行為は、いま世論の指弾を受けてゐる。しかし真に咎められるべきは、そのような行為を自浄し得なかつた考古学界の方にある。何が彼をそこまで追い込んだか、なぜ自浄作用が働くかが厳しく問われるべきであろう。それと共に、一部の捏造資料混入だけで、遺跡の性質が変わつてしまふほど、考古学発掘とは未成熟な技術ではない。いくら問題の多い考古学界でも、宝さがしづかりに熱中してゐたわけはあるまい。事実、藤村新一の絡んでいない遺跡からも、前期や中期の純正な旧石器が発掘されているのである。

当然のこととして、藤村新一の絡んだ遺跡については、今後徹底的な再検討が行われよう。その結果、前期、中期旧石器の多くが否定されるようなこともあるかも知れない。しかし、シリーマンや藤村新一の心理に立ち入れば、そんなことは決して有り得ない。両者ともに、遺跡の性質については、信頼してゐたのである。無から有を生じさせたわけではない。

今日、シリーマンの虚言癖が明らかになり、発掘結果に疑わしき点が数多く見つかつても、彼の地中海考古学に与えた功績は、いささかも軽減されることはない。

それは、シリーマンが本質的なところでは、発掘を信じていたからである。いわば、虚構の「ブリアモスの財宝」を準備し、ロマンある伝記物語で世界の世論を操作したのは、シリーマンのサービス精神の発露であつた。それに彼の名譽欲や学歴コンプレックスが絡んでいただけなのである。

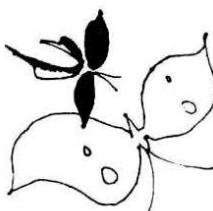
したがつて、シリーマンの最大の功績は、世界の目をホメロスの世界に集めさせ地中海考古学の流れを作つたことにある。シリーマンは本能的にそのことを良く知る、時代の演出者であった。

その意味では、状況は異なつても、藤村新一も、日本の旧石器時代を華やかにマスコミの世界に登場させた労者であった。そのことによつて、地味な旧石器時代の発掘調査が、維持されてきたことも忘れてはなるまい。さもなければ日本において前期や中期の旧石器遺跡発掘がこのように継続されたはずがない。問題の根底には、日本における学術文化に対する國の認識不測と援助不足があつたのである。藤村新一の狙いは、彼の奇異なる行動によつて、この困難な事業を継続させることにあつたようと思えてならないのである。

私には、シリーマンと藤村新一が良くわかる。……

北条時宗とその時代(一)

島津隆子



一、父時頼と嫡子時宗の誕生

●夢のお告げ

鎌倉・鶴岡八幡宮の社殿では、建長二年（一二二五〇）元旦の早晩から、別当・隆辨が、肝胆を碎いて北条家嫡子誕生の祈願をしていた。

前夜来から精進潔斎をした熱のこもった祈りの途中、ふうーと睡魔が襲い、隆辨は一瞬、夢うつつの境地をさまった。そのとき、神の感応があり、お告げを受けたのである。

「願いは聞き届ける。夫人は八月に妊娠をするであろう」はっと、夢からさめた隆辨は、

（ああ、正月早々、何と縁起のよいことであろうか）一刻も早くこのことを時頼の耳に入れたくて、執權本邸に急ぎ、報告した。

ことの次第を聞いた時頼は、自分の見込んだ隆辨の神

通力にまちがいのなかつたことに満足し、率直に喜んだ。

隆辨は、四条大納言隆房卿の子息であり、年のころは四十三、四歳であろうか。

文暦元年（一二三四）に鎌倉下向以来、將軍をはじめとする幕府中枢の人々の崇拜あつく、時頼の執權就任の翌年、鶴岡八幡宮の別当職に就いた。

鶴岡八幡宮は、康平六年（一〇六三）八月、勅命を奉じた源頼義が安倍貞任征伐の途中、戦勝祈願のため、ひそかに石清水八幡をこの地・由比郷に勧請したのがはじまりとされる。

その約二十年後の永保元年（一〇八一）二月、源義家が社殿の修復をした。それから百年を経た治承四年（一一八〇）十月、源頼朝がはじめて鎌倉に入った折に、若宮の上、つまり今地に遷したという由緒ある神社であるとされる。

る。

それからの隆辨は、気をもむ時頼を落ち着かせながら、着帯の加持から、安産のための諸仮の護摩祈禱、仏像供養、夫人の発願による七觀音への誦経まで、一人でできぱきと執り行つた。

京の圓城寺の別当も兼務している隆辨は、京と鎌倉の間を往復しながら、十二月十三日には、京から執權邸に直行し、夫人に腹帶を着けさせて加持を行つた。また、翌建長三年の正月八日、時頼が夫人の安産を祈るために铸造させた身丈八寸の金銅薬師如来像の供養も、隆辨が導師となつて行つた。

夫人は正月の八日から二十八日まで、大般若経の真読、全六百巻の誦誦をやりとげている。一方の時頼は、十七日、放光仮の供養と、如意輪の護摩の修行を、隆辨の導師で行つた。

二月のある日のことである。鎌倉に飛び帰つた隆辨は、すぐに本邸に駆け込み、注進におよんだ。

「殿、お喜びください。どうしても御神託を拝したく、三島神社にお籠りをしておりましたところ、十二日の寅の刻（午前四時）ごろ、白髪の翁が出現いたしました：

」

伊豆国の中島神社で祈念していた隆辨に、白髪の老翁が、またも夢で告げたというのだ。

●安達邸の産所

五月一日、北条時頼夫人はいよいよ産所に入つた。

十四日が過ぎ、別当・隆辨の言葉通りなら、明日十五

「して、何と聞いたのじゃ」

「五月十五日、酉の刻に男子が安産されようぞと、はつきりとこの耳にきこえました」

隆辨の説明をきくと、時頼は嬉しさと安堵のあまり、胸を熱くした。

二十四歳の時頼が、なぜこうまで産まれる子にこだわるかというと、それには理由があつた。

実は、鎌倉幕府五代執權に就任した翌年の寶治元年（一二四七）、二十一歳の時頼は、大江廣元の子息・毛利季光の娘を正妻に迎えている。しかしすぐに宝治合戦が起こり、季光は三浦泰村の娘であった妻の諫言によつて三浦方につき、娘婿の時頼を敵に廻したのだ。時頼は即刻妻と離縁。三浦一族方を滅亡させた。

その年の五月に、時頼の側室は男子・寶寿（後の時輔）を儲けている。しかし同じわが子でも、妻女の出自によつて身分の格差が生じてくる。

それから二年後、時頼は北条重時の娘を正室に迎えた。時頼は是が非でも、自分の正式な後継ぎが欲しかつた。

正室に男子を生ませて、権力を握つた北条家の後継者にしたいと、熱望しているのである。

日にはお産になるはずである。夫人は大きくせり出した臨月の腹に手をやり、肩で大きく息をする。

産所は、時頼の実母、つまり生まれてくるはずの赤子の祖母・松下禅尼の居宅、甘縄（今の鎌倉市甘縄神明神社前長谷地区東部のあたり）の安達邸にもうけられた。

松下禅尼には一人の男子があった。長男経時は、祖父・泰時の住む小町西邸の北隣の付邸に世帯を持ったが、祖

父の死後は、小町西邸に移り住んだ。次男時頼は小町東邸で結婚生活を始めたが、母の禅尼は、次男夫婦との同居を避けて、生家・安達氏の甘縄邸に住んでいる。その禅尼の住まいが産所に選ばれたのだ。

松下禅尼は、評定衆として政治の中核に食い込んだ安達景盛の娘であり、時頼が片腕とも頼む、安達義景の妹である。この安達義景の娘堀内殿は、十一年後、今までに生まれようとしている赤子の妻となるのだから、縁とは何とも不思議なものである。

こうして、安達家は北条氏の嫡流と結びつき、幕政を助け、幕閣の中核としての地位を固めてゆくのだ。

●念願の男子誕生

夫人の身近の静寂とはうらはらに、屋敷内には、どこで聞き知ったのか、赤子の誕生を待ちきれない人々が集まってきた。夫人がここに来た日からずっと続いている安産の祈禱にも、自然と熱がこもり、煽られるよう

は何んとも不思議なものである。

こうして、安達家は北条氏の嫡流と結びつき、幕政を助け、幕閣の中核としての地位を固めてゆくのだ。

●念願の男子誕生

夫人の身近の静寂とはうらはらに、屋敷内には、どこで聞き知ったのか、赤子の誕生を待ちきれない人々が集まってきた。夫人がここに来た日からずっと続いている安産の祈禱にも、自然と熱がこもり、煽られるよう

は何んとも不思議なものである。

「傑出した人物は、このようにして世に現れるという。先が楽しみですなあ」

口々に祝いの言葉を述べ合ううち、修驗者をはじめとする人々に、時頼から、めいめいに生衣一領、野劍一柄、馬一匹が贈られた。

北条氏と重縁の三浦盛時は、若君の誕生と聞くや、白直垂のまま、銀の蔵を置いた大島鹿毛の名馬にまたがり馳せ参じた。そして、嬉しさのあまり、陰陽師主殿助泰房に、乗りつけてきた名馬をそっくりそのまま引き出物として与えたという。

●お七夜を迎えて

五月二十一日、母子ともに健やかに、お七夜を迎えた。赤子は、正壽と名づけられた。

「この子の産婆役は、八幡様でござりますなあ」「ほんに、神仏の申し子じゃ」

わが子を覗きこむ。だが、そこに夫人の姿はなかった。時頼は母の松下禅尼とともに、さも満足げに、産着の

に、父親になる時頼は落着きを失っていた。

隆辨からあれほど神仏宣託の詳しい報告を受けていても、

「今日に至るも、全く気配がないではないか」

そもそも十五日と予言された理由がわからないと、時頼は半信半疑の体である。

「明日十五日には、かららずお産になりますゆえ、どうぞ、ご不審なさいますな」

隆辨はきっぱりと言い切った。

落ち着かぬ空気のなかで、外孫の生まれるその時をじつと座つて待っている夫人の父・重時の姿が、印象的だつた。

明けて十五日、一門の者が賑やかに出入りするなか、今か今かと気もそぞろな時頼は、その時をそわそわと待つた。

やがて、隆辨の予言通り、夫人は十五日の申の刻（午後四時頃）から産気づいた。その頃には、医師典薬頭時長、陰陽師主殿助泰房、験者清尊僧都、良親法律師らが参上してきて、加持祈祷を始めていた。

なかなか姿を見せなかつた隆辨も、予告した刻には駆けつけて加持をはじめた。するとまるで時を合せたかのように、産所から元気な産声が聞こえてきた。

こうして酉の刻（午後七時）頃、無事、男子の誕生を

お産の忌みで、夫人は産所で慎んでいなければならず、夫といえども、男性は穢を恐れて産所には入らない習わしなつているのだ。

時頼は、正壽の外祖父である重時が、この日の祝宴を盛大に執り行つたことにいたく満足していた。

重時は、執權・北条義時の三男であり、若くして幕府の要職を勤め、將軍側近として近侍した経験もある。順調に位階も昇進し、十八年間も六波羅探題として京都にあった。その間、貴族たちとの面倒な交渉の任にあたりながら、西国御家人の統括を果した苦労人である。その経験を生かして、重時は『六波羅殿御家訓』を、子息長時に書き与えた。同じ役柄の人との付き合いの大切さ、酒宴のもてなしのあり方、礼儀作法に気をつけること、目下の者への配慮など、詳細をきわめた。家を保ち、発展させながら、武士団の中で生き長らえるためには必要な配慮を、現実的に示した家訓である。

しかし、宛てた長時がまだ生後二週間の赤子であったというから、その親バカぶりには驚かされる。

弱冠二十一歳の時頼は、夫人の父親で、自分にとつて舅である重時を、連署として鎌倉に呼び寄せたのだ。執権と共に、公文書に連判をする人物を連署というが、この役職は執権・北条泰時が叔父・時房に連署させたことが始まる。

こうして、時頼と重時の間には、全幅の信頼を寄せ合

う親密な関係が出来上がった。若いのに肝が座っている

と評される時頬だが、政治家として練達の手腕を持つ五十歳の重時という味方を身近に得て、どんなにか心強かったことか。六波羅探題の後任には、当然のように、重時たの子長時が据えられた。

さて、お七夜から七日後の五月二十七日、正壽が本所に帰ってきた。

その喜びの日、時頬は使いの工藤三郎左衛門光泰を遣わし、書面をもって隆辨に礼をつくした。

「このたびの男子安産は、隆辨殿の御法驗あらたかな賜物である。その上、隆辨殿の仰せのことは、一つとして事実と違反するところがなく的中した。これは、とても言語で説明できるようなことではない」

として、御祈りの褒美に能登国諸橋の庄を与えたのである。

隆辨は心に呟く。

（私の祈りの驗力といいますより、神仏から、授かるべくして授かった若者でございます。さぞかし、成長の砌には、天下の御為になりましょうぞ）

●母の憂い

「あなたに、幼い頃の時頬のことをお話しましょう」

松下禪尼は、遠い目つきをして、思い出を手繰るよう

います。これからは若いあなたの方の時代。正壽殿の育児も、よろしく頼みましたよ」

七月八日、体調が回復した夫人は、松下禪尼のもとを辞して、時頬と正壽の待つ本里の邸に帰った。

禪尼はわが子時頬を薰陶した、かつての自身と重ねながら、母になつたばかりの若い嫁の後姿を、感慨深げに見送った。

邸に戻ると、時頬は夫人に労いとも感謝ともれる声をかけて、喜びに浸つた。

「知つておろうが、この子の名前は、正壽ときまつた。そなたの父上がつけた、よい名じや」

夫の言葉に頷きながらも夫人は、「でも、少し変でござりますよ。お祝いに来てください」とお見えになつた。夫人がそう言うのも無理はない。若君さまとは、将軍家の御子をさして言うのである。

「いいではないか。蔑んで言つているわけではない」とにかく、八幡神と三島大明神の加護のもとに生まれた子であるから、正壽は特別な子というわけなのだ。

時頬はさすがに言葉のトーンを最後で落すと、「今や、眞の將軍は、このわしであることを皆が認めておる何よりの証拠じゃ」

（もしかして、若君と呼ばせたのは、あなたさまではな

に嫁に語つた。

禪尼は若いころから篤く仏を信じていた。その母親の姿に接しているうちに、いつしか幼い時頬にも信仰心が育まれていったのだろう。こともあろうに、もの心がつく頃から時頬は、仏法に興ずるようになつたのである。

小さな子供がお堂を作つたり、仏さまを作つたりして遊び始めたのだ。側で仕える平左衛門入道（平頬綱）や諏訪入道（諏訪盛重）などは、

「やがて弓矢をとる御身は、弓矢でお遊び下さい」と言つて、その遊びを止めさせようとした。

しかし、時頬の祖父の泰時は、「どうして禁ずるのだ、そのままでよい。前世、インドの須達長者が祇園精舎を造ろうとした時、立派な大工の棟梁が生まれた夢を見たことがあるそうだ。仏遊びも何かの暗示かもしれない」

といつて、その遊びを禁じようとはしなかった。

大きな深い心と長い目で、時頬の成長を見守つたのである。

しかし一方では、乗馬や射的、犬追い、蹴鞠など、武士にとって大切な武芸を、怠りなく時頬に仕込んでいた。

禪尼はつけ加えた。

「鎌倉武士は質素儉約を旨とし、乳母おんぱりがき日龜で育ててはいけません。三文の値打ちもない人間になり下がつてしま

いのですか）

半ばあきれながらも、夫人には、夫のこの強気が何とも頬もしく映つた。それは、若さゆえの恐れを知らない天真爛漫さである。

時頬の目には、自分を信頼する夫人の姿が、愛しく感じられる。

丸みを帯びた体の線、輝きを増した肌、悪戯っぽくみつめてくる瞳には、そこはかとない憂いも宿して、一ヶ月ぶりに間近に見る妻は、女らしい妖しさを秘めているようによみえる。

二人だけになった時、時頬は問うた。

「何か、気がかりなことはないか」

夫人は迷うふうだったが、言葉にした。

「正壽の兄になる時利殿（後の時輔となる）のことが……」

「わかつておる。このわしに、ぬかりはないから安心するがよい」

人間は生まれて來た以上、決して平坦な一本道ではない。正壽とて例外ではないはずだ。しかし、わが北条の政権は、磐石な基盤の上に成りたつてゐる。その上に立てよう、正壽自身を磨くことが肝要と、時頬は夫人を諭した。

夫人は、愁眉を開いたような笑顔を見せたが、母親としての憂いの予感は当たつていた。

確かに、夫人ならずとも、時利の存在は、正壽の立場を脅かす危険性があると考へても、不思議はなかつた。

ところで、時利の生母は家女房小山長村の娘で、三河局と呼ばれる時頼の妾である。生母の家柄の違ひは、兄弟といえども、二人の子の立場を明確にした。

三歳の年長にありながら、時利は妾腹から生まれた兄、つまり庶兄であり、正壽を得宗としたのである。「得宗」とは、父祖・義時の法名からとった制度の名で、北条氏嫡流の家督を意味するのだ。

(父を同じくしながら、この境遇の差は、何で埋め合わせればいいのか。所詮、持ち合わせた資質も努力も空しいのではないのか)

時利の苦悩は、そのまま生母の懊惱でもあつたろう。

長い年月をかけて燃りつづける葛藤の萌芽である。しかも、時頼が夫人に、磐石な政権をアピールしたよう

うに、十四年後、時利改め時輔は、六波羅南方に任じられて、鎌倉から遠ざけられる。そして遂には、対抗勢力として滅ぼされる運命を迎ることになるのだった。

●若き日の時頼

時頼の父は時氏、母は松下禪尼である。

祖父は、北条家の幕府での権力を確立した三代執権泰時である。時頼は恵まれた家庭環境に生まれたが、父とは、わずか四歳で死別していた。しかしその分、祖父と

母から十分な愛情を注がれて育つた。

時頼の歴史舞台への登場は、元服を迎えた十歳の時である。

幼名戒壽丸、元服の祝宴は、御所寝殿の南面で始まつた。

夜に入り将軍の御前においてその儀は行われた。

そして、元服の日から約四ヶ月後の、嘉靖三年(一二三七)八月十六日、鶴ヶ岡八幡宮で行われた流鏑馬への

参加が、事実上、時頼の顕見世であつた。

直垂の上に、毛皮の行縢を着け、綾蘭笠をかぶり、物射沓をはき、太刀・腰刀に弓矢を帯び、射籠手をはめた狩装束姿で現れたこの日の時頼は、堂々として、弱々しい子供っぽさなど微塵もみせない。

「めっぽう仏法遊びが好きなお子と聞くが、果して射的ができるのだろうか」

「祖父泰時殿の薰陶よろしきを得て、さぞかし腕前は確かなものでござろうよ」

などと、かまびすしい外野の雀たちを煙に巻いて、馬を走らせながら、鏑矢を射流して的を射ち、時頼は見事な腕前を人々の前で披露したのである。

流鏑馬の馬場は直線で二町(二百十六メートル)、両端には扇形の空地、両側には低い柵の埒がある。竹の串にさした一尺八寸の檜板の的を三ヶ所、その埒に沿つて立てる。

あつたため、二十歳の弟・時頼が突然、五代執権の座に着いたのである。

もちろん、執権の座を狙う輩を押し退け、陰謀の末の着座である。時頼が蹴落としたのは、前將軍九条頼經と密着していた名越光時。評定衆をバックとする名越一族の長である。かつて、父、名越朝時が逃した執権職が、

今度こそ経時から名越光時氏のものになると誰もが思っていた。しかし案に相違して、その座は時頼に転がり込んだのだ。

執権就任から二ヶ月後の五月、時頼はすかさず「深秘の沙汰」といわれる秘密会議を開く。前將軍と名越氏の分断をはかるため、幕府転覆を謀る輩として、名越光時の抹殺を協議したのである。

その結果、兄・光時の領地越後国を没収し、伊豆に配流し、弟・時幸を自殺に追込んだ。その他、前佐渡守後藤基綱、前大宰氏藤原為佐、上総權介千葉秀胤ら幕府の要職にいた人物を次々と罷免し、鎌倉から追放した。そして、陰謀の中心である前將軍・九条頼經を京都に送還して、反勢力を殺ぎ、第一の閑門を無事に乗切つたのである。

しかし、いまだ前將軍を慕う惣領泰村、弟光村を中心とする三浦一族と、時頼に最も近い関係にある外戚安達景盛・義景を中心とする一族との間に、不協和音が高まつてゆく。

●血の匂いのする時頼

寛元四年(一二四六)三月、四代執権の北条経時が重病に陥り、二十三歳で没した。経時の遺児がまだ幼少で

京都に帰る頼経の護送役の一人に選ばれた三浦光村は、

頼経寄りであることを、あからさまに言動で示した。頼経と涙で別離を惜しんだ後、

「どんなことをしても、今一度、頼経公を鎌倉にお迎えいたそう」

これが時頼の耳に入らないわけがない。不用意といえど一行の者に訴えたのである。

ば余りに不用意な言葉である。

四月十一日、このことを聞きつけた安達景盛と時頼は密談した。

「これはもう十分に幕府転覆の意図ありと聞くべきでござろう」

「それにしても、光村はなんと直情な人物であろうか。障子に眼あり、壁に耳ありと申すのに」

「だからこそ、こういう人物をそのままにしておくのは、刃物を持つ狂人を野放しにしておくようなもの。早かにお手を打たねばなりますまい」

しかし、五月六日、時頼は何食わぬ顔で泰時の次子・駒石丸を養子にする約束を取り交わし、同十三日、將軍の室である自分の妹の忌に服するため、三浦邸に移った。時頼にすれば、三浦一族の謀反を牽制する意味もあったし、自ら動向を探ろうとする意図もあった。

一週間後、鶴岡八幡宮の鳥居前に不可思議な立札が立った。八幡様の神託にこと寄せた安達の搖さぶりである。

「若狭前司泰村、独歩の余り敵命に背くに依り、近日討罰せらるべきの由、その沙汰あり。よくよく謹慎あるべし」

だが、時頼は十四日間、三浦邸で喪に服しつづけた。しかし、二十七日、ただならぬ物音に危険を察した時頼は、太刀持ち一人を連れ、そつと三浦邸を抜け出したのである。

六月三日、三浦邸に使者をやって調べさせると、案の定、武器が用意されているではないか。

隠しておいた武器がみつかり慌てた泰村は、時頼のもとを訪れ、弁明にこれ努めた。だが猜疑と狡智のなか、翌日には、安達と三浦の陣営には多くの兵馬が集められ、もはや、収集のつかない事態に追い込まれていた。

五日、時頼の使者が三浦邸を訪れ、討伐の意志の無いことをぬけぬけと告げた。これを信じた泰村は、時頼の要求通り、矛を收めようとする。張り詰めていた泰村の緊張が解けた、油断の一瞬である。

挑発的に事を構えようと手ぐすね引いて待つ安達氏は、時頼の使者の帰り着かない間隙を衝いて、三浦邸に兵を挙げ、凄惨な戦の火蓋が切られた。

安達氏は、頼朝の第一の巧臣らしく頼朝の墓所がある法華堂にたてこもった三浦一族二百七十六人と、それに従う郎党を合わせた五百余人を討死や自殺に追込み、全滅させたのである。

間髪を入れず、時頼は号令した。

「容赦無く、千葉氏を追討せよ！」

翌日には、上総国一の宮の千葉秀胤に追っ手をかけ、一族もろとも自害させてしまった。

宝治合戦といわれる三浦一族との決戦、いわば第二の関門を、時頼は、見事に乗切ったのだ。

しかし、この戦勝も僧・隆辨の幕府平安と戦勝の懇ろな祈禱があったからである。それは、真言密教の如意法論に基づいたものであった。

これで、時頼の権力は一挙に不動なものになつたが、あまりにも血と謀略の匂いのする登場の仕方であった。それから十年間、

「毎年、元旦に將軍をご招待しての『^{おひば}塙飯の儀』を欠かさないのは、時頼公らしい忠勤の表明でござるな」

「さよう、あの盛大な饗宴には、誰だって恭順を見てとるだろうよ」

側近の陰口どおり、時頼は宮将軍を頭にいただき、幕府を運営してるようにみせながら、その実、將軍をも凌ぐ地位を着々と築いていった。

その一つが、引付という機関である。御家人保護を謳う立場上、御家人の訴訟を公正に取扱うための制度だが、頭人という重要ポストに北条の一族を配することで、北条の意向のままに運営して、執権・時頼の権力を強めることに役立てた。

そのために、いち早く有力な御家人の三浦氏とその姻戚関係を滅亡させたことは、逆に下級御家人との関係を強化させる結果になったのである。

ちなみに、御家人というのは、鎌倉幕府を支えた武士のことである。つまり私力で開発した土地を持つている者で、その所有が將軍の下文によって承認されていることが必要条件である。

手続きとして、將軍に直接対面をして、自分の名簿を提出する。または、將軍の名代か、將軍に委任された者が発行する文書によって、その関係が成立する場合もあつた。

御家の規模は大小さまざまであつたらしいが、一旦事があると、軍備を整えて戦陣にも臨まなければならなかつたので、かなりの負担を強いられた。

御家の収入は、定められた給与の基準によつていた。一、田畠十一町ごとに一町ずつ、地頭が年貢を取得する地頭給田とする。

二、山野河海からの収益の半分を上納する。

といふものである。

なかでも強い姻戚関係で結ばれている安達氏は、北条氏と連合を組み、権力の中核で生き延びることに成功している。

実権を手中にした北条氏は、その後、自由に將軍の首

のすげ替えを行ふまでになる。

このように、將軍を凌ぐ権勢を誇つて來た時頬は、三十歳になつていた。

●時頬、病む

建長八年（一二五六）九月半ば、時頬は病をえて、床に伏した。

その少し前から、赤斑瘡が流行の兆しをみせていた。麻疹ともいう疱瘡に似たこの病気は、体に赤い瘡ができる人にうつる厄介なものだ。

將軍家とて伝染病に打ち勝てるはずではなく、將軍宗尊もこの病に罹つた。ただちに、若宮寺に參籠した隆辨の祈禱が行われ、つづいて、諸堂においても百座の仁王講がもたれて、毎日のように御悩みのご祈禱がなされた。

時頬もまた、赤斑瘡に悩まされる日がつづく。

病氣の平癒を祈つて、時頬の邸でも、大般若經の転読がされたが、正壽の妹である幼い姫君までも悪い氣に災いされて、赤斑瘡に見舞われた。

さすがの時頬も、夫人を相手に氣弱に愚痴る。

「こんな厄介な病に罹つたのは、陰陽道によると、去る日、このわしが、御衰日（帝王の崩御された日）に出仕したことが原因という。日頃、怠りなく祈禱をしている」というのに、勘氣を被つて、このままじゃ」

「いいえ、だから、あなたさまは間もなく全快いたしま

たのだ。

●ある告白

「わしは出家して、執權を長時に譲ろうと思うが、どうじゃ」

時頬の言葉の意味がすぐには呑み込めないらしく、夫人はしばらく怪訝そうな面持ちをしていたが、

「まだ、正壽は年端もゆかず、元服さえしておません。せめて、元服までは……。福壽とて幼すぎます」

と言うのがやつとだった。

福壽は、建長五年、正壽が三歳の時産まれた弟である。「いや、またそのときには、もう少し……と思うだろう。欲にはきりがないものじゃ。人間、位に留まる年月や、命が長ければいいというものではない」

病床の時頬は頬がこけ、目が落ち窪んでいるが、眼光は鋭い。

「私は、あなたさまは、逞しいお方とばかり。病も快方に向かっています。もう少しの辛抱でござります。正壽だって、今しばらくは、あなたさまの羽の下の温もりが欲しい年ごろですのに……」

「そなた何か勘違いをしておるな。わしは政事から手を引くと言つてゐるのではない。今までどおり政権を掌握してゆくのは、このわしだ。その弟・長時を執權に握するのも、そのためだ」

夫人の言うとおり、十五日ほどで、時頬は沐浴ができるほどに回復した。

だが、瘡ができた姫君は、さまざまの御祈禱の甲斐もなく、短い生涯を閉じてしまったのだ。

その嘆きも癒えぬ十一月三日のことである。

「殿、どうなさいました」

時頬の顔からは血の気がひいて、びっしょりと冷汗をかいている。先刻から、頻繁に廁に立つ時頬の様子がおかしいのだ。

みかねた側近が声をかける。

「いや、どうしたわけか、しぶり腹でな、腹が痛くてかなわぬ」

すぐには床が延べられ、時頬は横たわった。

しばらくすると、熱が出て、下痢がつづくようになつた。

薬師が呼ばれる。

「どうやら、世間にはやつている、赤痢らしゅうございます」

と診断が下つた。

病床で下痢と腹痛、高熱と戦っているものばかり見えた時頬は、まるで勇者のごとく、独り落飴と執権の譲位を決断したのである。時頬の潔い孤独の逡巡の時でもあつた。

夫人は小さく呟く。

「いや、次々と天変地異もおこり、まるで將軍家も疫病神に魅入られているようだ。わが北条とておなじこと。人の配置も、余力があつてこそ、思いのままじゃ。追いつめられてからでは競争相手の思う壘だ。この家系は早世でもあるからな」

夫人にとつて、時頬は弱音や愚痴には縁遠い夫であつた。

しかし、人間は年月とともに変わるものである。それを誰がとがめられよう。

そのとき、時頬は急に悪戯っ子のような表情をして言つた。

「それに、ひとつ、わしには夢があつてな」

「夢つて、なんでござりますか」

「いや、まだ言えん。もう一步、現実に近づいたら教えることにする」
「あらあら、ずいぶんもったいぶつていらっしゃいますこと」

「そうだ、吹聴して、夢が消えてしまつては、もつたないからな」

それからほどなくして、時頬が最明寺において蘭渓道隆を戒師として出家したのは、康元元年（一二五六）十一月二十二日である。

そして、翌二十三日、執権を重時の子・長時に譲り、その職を辞任する。だが長時は、嫡子・正壽が幼い間の代官として、という条件付きの執権就任であった。

時頬を慕う多くの人々が、時頬の出家と共に髪を落した。

影の形のごとくつき従つた舅の重時も、三月には連署を辞して出家し、極楽寺重時と号している。

執権を長時に譲つたので、六波羅探題には、重時の子・時茂（長時の弟）がなつた。

しかし、時頬の政治力は依然として保たれ、衰えたわけではない。これからしばらくは最明寺入道として、得宗の立場に君臨しつづけるのである。

当時、世の中は、度々起ころる天変地異のため、飢饉とともに疫病が流行つて、人々は苦しめられ、恐怖におのまれた。

雲一つない晴天のこの日、己の刻（午前十時）に、宗尊親王は泉邸に入御され、遊宴をはつた。午後になつて宴席が終わると、不思議なことにわかつに空は曇り、小雨が振り出した。おかげで暑さがひき、快い涼しさに包まれた。

親王はこの泉邸をよほどお気に召したらしく、翌二十四日も逗留し、御鞠会などを催した。そして、二十五日にお帰りになつている。

「お作法にかなうように、きちんとお式をやり遂げるのですよ。あなたは七歳、今日はりっぱな武士の誕生の日です」

夫人は、緊張した面持ちで立つ正壽の前に座り、柔らかく小さな両手を強く握りながら、一二、三度搖すつた。

正壽ははにかむような笑顔で、うん、うんと頷き返し、お供の大人に囁まれ、夫人の元を離れた。

康元二年（一二五七）二月二十六日、正壽の元服の儀が執り行われる朝のことである。公家に比べて武家の元服の年齢は遅いが、父・時頬の七歳と同じ年齢で、正壽もその日を迎えた。

元服の儀は、午の二点（午前十一時半頃）、將軍宗尊親王の二棟御所で始まつた。御所には多くの公卿や武士たちが集まり、東の障子にそつて將軍の御座がしつらえられている。

のいていた。そして、それはすべて穢れであると信じられていて、呪術や祈禱で、この穢れを取除こうとした。だから、日常茶飯に信仰と祈禱は、貴賤上下を問わず、人々を捕らえて離さなかつたのである。

二、時宗の元服と結婚

●七歳で元服

時宗が七歳になつた時、息子を元服させ、早く結婚をさせたいと考えていたので、父時頬は、時宗のために、独立した屋敷を建てようと思いついた。そこで早速、最明寺別業の東側に新邸を建てるにした。

現在、北鎌倉駅近くの東海道線の線路から明月院に行く道にそつて流れている川は、おそらくその昔は、最明寺別業内を流れていたのではないかといわれている。したがつて時宗の新邸は、地名の山ノ内をとつて山ノ内泉邸とも、たんに東邸とも呼ばれていた。

泉邸というからには、川は清流だつたのだろう。清い流れに臨んだ新邸は、眺めも涼しさも、格別だつたにちがいない。

正嘉元年（一二五七）六月二十三日、將軍・宗尊親王は、時宗の新邸がことのほか涼しいと聞きつけ、夏の炎暑を避け、泉邸にお出ましになつた。

狩衣で縫取りのある袴をはいた童装束の正壽は、つき添い役の北条朝直の座の下に着座した。その表情には、まだ幼さを残している。

やがて、衣擦れの音とともに宗尊親王が出御された。すると、二棟南面の妻戸を出て、廊根妻戸に蹲居する直衣姿の土御門中納言顯方卿から、

「将軍さまが、お召してござります」

の言葉があり、正壽が將軍の御前に進み出る。そして

將軍から装束と鳥帽子を頂戴して、一旦、御前を退く。この日、終始正壽に付き添つた北条朝直は、六波羅探題や連署を歴任する二番引付頭人であり、評定衆を補佐する頭首庶務係である。かつて執権泰時を補佐した北条時房の子であった。

正壽は、中御所、西の渡廊の屏風のかげに入つて、大人の寸法に仕立てられた装束に着替えた。浮線綾狩御衣、紫浮織物の御奴袴、蘇芳一袍、紅の単衣である。華やかな下着と上衣は綾織物である。

着替え終わり、わずかに大人びて見える正壽は、再び御簾の中の將軍の前に進み出る。

その後に雑具が置かれている。そこへ安達泰盛が柳筥に入れた鳥帽子を持参して、將軍の御前の竹を編んで作つた床・簀子に進み、御簾をもたげて中にさし入れる。

次に壱岐前司泰綱が乱筈をとる役をつとめる。

次には、太宰權少式景頼が柳筥に入れた、髪をくしきするときの水や湯を入れる器・垸壺を運ぶ役をつとめた。

将軍の御前の簾子に進み、御簾の中に入れるこれらの作法は、みな同じ振舞いである。

ここで、西侍の間に着座して待っていた外祖父重時が、

その座を立ち、廊の西の縁から切妻戸の庇に座った。

服装は袴の裾をくくった狩衣姿である。その他の人々も廊の西南に列座した。

理髪の役の朝直が御簾の中に入り、正壽の後ろに廻り、稚児髪を大人風の髪に整えるしぐさをする。心なしか、きりっと面変わりした正壽が、将軍の御前に進んだ。

正壽が三度の礼拝を行い、ここで加冠の儀は終わるのである。

この儀に参加した人々は、それぞれ西面の庭に設けられた庭上に移った。そこで、二棟御所の南面から土御門頭方卿が出てきて、西面の御簾を上げると、初めて将軍と新冠正壽が二人そろって現れた。

十八歳の将軍と並んでも遜色のない凜々しい正壽の面に、一瞬、「ほう……」

という、声にならないどよめきが流れる。

つづいて進物の儀がおこなわれた。

将軍に対する礼物は、剣は朝直、弓矢は尾張前司時章、鎧は教時と公時、野矢は下野前司泰綱、御行駿は和泉前

その夜、父と子は向い合っていた。

「今日からは、そなたを子供扱いはいたさぬ。元服したら、もう立派な大人じゃ。この世の中は、いくら名門に生まれようと、至らぬ者は血祭りに挙げられるのだ。あらゆる点で、秀でた者が勝つ」

「あらゆる点とは、どういうことですか」

「武道、学問の道、人を扱う道、すべてじや。その上に、わが北条に生まれ、得宗に選ばれたからには、王道といふものがある」

「王道?」

時宗は食い下がるような目をして父に聞く。

「王道とは、選ばれた王者の進む道のことだ。王道を行く者、つまり王者が命を落としたり、とつて替わられた

「王道?」

時宗は食い下がるような目をして父に聞く。

「お初の、武士同士のご対面でござりますか。お手柔らかに、小手合わせですね」

記念の日、子の心に楔が打ち込まれ、頃合をみての母親の登場に、父と子の表情が和み、この記念すべき日をそれぞれの胸に刻印したのである。それから、六日後の三月二日、時宗はじめて御所に上り、将軍に馬を献上した。

そのためには、宗教、学問、道徳をも、謀りごとの手段に用いるのだ。そなたにも、父の言うことが追々とわかってきてこよう。

それともう一つ、今日の元服の儀に関係するが、そなたに烏帽子親について話しておこう。時宗の烏帽子親は

將軍宗尊親王であったな」
「はい、そうでした。烏帽子を被せてくださいました」「元服の時に、烏帽子親を立てるのだが、対する子供は烏帽子子というのじゃ。本当の親子の次に大切な関係といえよう。わが北条は有力大名などの子の加冠の際には、烏帽子親になることが多い。それは、大名たちと親密な関係を結ぶという意味で、大事なことなのじゃ」
「そのようにして、親子の関係を増やしてゆくのですね」

事実、この年の十一月二十三日、北条家子飼いの武士金沢実時の十歳の子の加冠の儀では、七歳の時宗が烏帽

司行方が献上した。それに馬三頭であった。

将軍からは、新冠正壽に剣が下される。朝直がつき添つて下がり、侍の座についた。

人々も西の庭上から侍の座にもどつて三獻の儀「次新

冠御前杓」が行われる。

式の初めに将軍の御前に進んだ位置に、各々が着座して、神への祭礼をし、いよいよ最後の命名の儀となる。

朝直が頭方卿から「時宗」と書かれた紙をうやうやしく受け取つて、式は滞りなく終わった。

北条時宗の誕生である。

● 錬磨を重ねる時宗

こうして、時宗は幼いながら武士の仲間入りを果たしたが、当然、将来を約束されている執権の器にふさわしい人間としての錬磨が必要である。

時頼は時宗の元服の夜、これから歩むべき「王道」について言い聞かせたが、時頼は父として、これから積極的に錬磨の機会をとらえては時宗に与えた。

正嘉二（一二五七）年二月のことである。

将軍家では近々箱根権現と伊豆権現の二所の御精進を始めると言及したが、時頼は、

（これは時宗に将軍家供奉の作法を学ばせるのに、よい機会だ）

と考えた。さっそく執権長時や小侍所の別当実時に時

二月二十五日、將軍家では二所の御参詣の精進始めをすることになった。もちろん時宗もメンバーに加えられた。

そして申の刻（午後四時）、潮を浴びて禊をするために土御門中納言を従えた將軍は、水干の装束で由比ヶ浜にでられた。

それにつづいて、長時・時宗・武藏前司朝直・左近大夫将監公時・陸奥七郎業時・修理亮久時・摂津權守などが供奉したのである。

三月一日、よく晴れている。

辰の刻（午前八時）、いよいよ將軍家の二所御参詣が進発した。宗尊親王が二所の御精進に自ら出かけるのははじめてであるが、幼い時宗にとっても初体験である。

淨衣をつけた人々の総指揮官は和泉前司行方で、隨兵の行列は兵三郎左衛門尉盛時が奉行となつた。

戦陣の隨兵は十二騎である。つぎに御引馬三疋、腹巻きをつけた御弓袋差、御甲著、御冑持、御小具足持と続く。さらに御調度懸、御油、御先達、各一名ずつが続いた。いずれも騎馬姿である。

將軍は御籠で行く。

徒步の家来が続き、その後に騎馬の土御門中納言顕方にから十九騎がつき従い、小侍所司がつく。

その後ろに、長時と時宗が馬を並べて従っている。

最後に侍所司がつき、後陣の隨兵十二騎が二列になつた。

はいなほどの腕前もかねそなえていた。

このような逸材をほうつておくはずもなく、すでに泰時が目をつけていて、実時が十八のとき、同じ年の孫・経時に、

「よい執権となるためには、学問の仕方を実時から見習うように。そのためには、実時と水魚の交わりをいたせ」と教えていた。

また、こんな逸話も伝わる。

実時が弱冠十五歳、小侍所別当だった頃、將軍・頼嗣を守護して上洛した。途中、橋本という所に宿泊の折、將軍と自分の宿舎が離れていることを知った実時は、

「これでは、何かあったとき、將軍守護の任を全うすることはできませぬ。將軍のおそば近くの、あの松原に野営をしてお守りいたす」

と二月の寒風もいとわず、責任を貫こうとしたというのだ。

この話を聞いた時頼の祖父・泰時も、兄・経時も、実時への信頼を深めた。もちろん時頼も、この人物に少年時宗の薰陶をまかせようと思いついたち、小侍所に入れただけである。

こうして、時宗は身近に傑出した人物を得て、人間的な鍛磨を重ねていくのである。

て進んだのだ。

三月六日、亥の刻（午後十時）、將軍家の二所参詣は、ここにつつがなく終わった。六日間にわたる旅の終わりの日であった。

この日は北風が激しく吹き、雨もはなはだしく降った。八歳の時宗にとっては、かつて味わったことのないつらい経験になった。

だが、こうして少年の心身は鍛磨されていったのだ。これ以後、時宗は將軍家の御参詣の供奉の列に、たびたび加わるようになる。

文應元年（一二六〇）二月、時頼は十歳の時宗を小侍所に入れた。小侍所というのは幕府の役所であつて、將軍出行のさい、従事や警衛をしたり、弓始めに射手の選定をつかさどる役目を持つてゐる。ここは別當（長官）・所司（次官）・朝夕雜色の職員などがいるが、北条実時という人物がこの小侍所に勤めていた。

当時、三十七歳の実時は、ほかにも幕府評定衆や三番引付頭を務めていた。

実時は政務に忙しい身でありながら、儒者・清原教隆について儒教を学び、宋から本を取り寄せるなどして、学問に精を出している。幕府内で傑出した博学者でもあつた。

また、武道の上でも騎射としては、実時の右に出る者

●父子の遠出

文應元年（一二六〇）の暮、珍しく風もなく、日射しが暖かなある日のことである。父・時頼が時宗に遠出を提案した。

「今日はそなたの祖父重時殿が建築中の極楽寺坂口の邸に寄り、稻村ガ崎に出て、海を見ようではないか」

提案した。

「はいっ、私はお祖父さまも海も大好きなので、喜んでお供いたします」

久しづりに父子は連れ立つて、後先になりながら馬を駆って険しい山道をたどった。

馬上から父は息子に話かける。

「この道は、そなたにはまだ無理であったかな」

「いえ、大丈夫でござります」

「男子はいつまでも子供ではいられないからな。子供でいる期間の長短によって、男の値打ちが決まるようなものだ。それなら、いっそ、早く立派な男になってしまえ」

時頼は息子に向かうと、なぜか、早く、早くと急がせてしまうのである。立てば這え、這えば歩めと、心が急ぐのだ。

鎌倉の町並みをすぎると、路は細く嶮しさを増す。

当時、名越・朝比奈、巨福呂坂・亀ヶ谷・化粧坂・大仏・極楽寺坂の七切通しの内側が、鎌倉と呼ばれていた。その中で、もっとも重要な鎌倉への入口の役目をはたしめたのが極楽寺であった。

今、親子は丘陵の重なりを切り通した峻しい谷戸の路をたどっている。やがて、やっと月影ヶ谷の東の谷戸の入口にさしかかった。

峠の坂に極楽寺の黒い山門が見えてくると、時宗ははつとした表情になる。二人は山門に馬を乗り入れる。桜並木にはさまれた長い参道が続き、寺域は谷戸の奥深くに広がっている。

その昔、時宗の祖父・北条重時は、寺の再興を思い立ち、良観房忍性に相談したという。忍性はこの重時の要請に従って、鎌倉の西南に位置し、三方を山にかこまれ、南に海の開けたこの地獄谷を選んだのである。しかし、寺の完成をみずく重時は世を去り、その子、長時・業時兄弟が七堂伽藍を造営したと伝わる。

一説には、重時の邸宅を寺に改め、極楽寺と称したともいわれる。

時頼・時宗父子の不意の来訪に驚きながらも、重時は嬉しそうに引きとめる。

「親子揃っての到来とは、珍しいこともあつたものだ。しかし誘いを振り切るようにして、二人は海に向かった。

「父上、海が見えます。ああ、きらきらと輝いている」「うん、穏やかな日和なので、海は凧いでるようだな」

馬もしぜんと早駆けになつて、海はぐんぐん近くなり、

「父上、海が見えます。ああ、きらきらと輝いている」「うん、穏やかな日和なので、海は凧いでるようだな」

馬もしぜんと早駆けになつて、海はぐんぐん近くなり、

「いつまでも無邪気な子供でいていいものを、この父は、そなたに無理な要求ばかりしておるな。許せよ、時宗。

選ばれてある者の優越と不安がそなたの肩に重くのしかかっていることは、よくわかる。だが、それに押し潰される時宗でないことも、わかつておるのじゃ」

沈黙した二人は、それぞれの思いで海をみつめていた。

海は冬の光を吸い込み、さざ波の中に、ゆらめいて果しない。

（山の中には、石仏や墓石や、祠^{ほら}や社殿が、諸々の記憶を留めて遺っている。まるで人間が生きた証のように、また、残滓^{ざんし}のように。だが、海はどうだ。静まりかえる海面にも、潮が渦巻いて騒ぐ波間にも、人の足跡が刻まれることもなく、まして墓石も祠もない。永遠の潮騒があるばかりだ。だが、私はそんな海が好きだ）

父も思つていた。

（かつて、実朝殿は海に乗り出そうとした。痛ましくも傷ついた歌人の魂は、ただひたすら大波のなかに、雨滴

のように漂い、戯れようとしたのではない。海の大さな懷に抱かれ、この国から走り去りたかったのかもしれない。幼い時から海は、実にいろいろなことを、この

視界いっぱいに広がりをみせる。

「時宗は稻村ガ崎のこの海岸線が好きです。眼下の荒々しい岩肌が、男らしくていいですね、父上」

木立ちが海に突き出た、お気に入りの崖の上に立つて由比ヶ浜の方を見ると、逗子あたりまでの海岸線が、曲線ではっきりと描き出されている。その先は三浦半島。遙か彼方には、房総半島が遠く霞んで望まれるようだ。

反対側の海の中には江ノ島が浮かび、逆光線を浴びて美しく裾をひく富士山が姿を見せる。おそらくその先には、遠く伊豆半島の山波が続いているだろう。

空も陸も海も溶け合つて、透明な冬色の刷毛ではいた

ようである。寒さは全く感じられない。

父が突然、この景色と関係のないことを言った。

「もうすぐ正月がくるな。新年の鶴岡八幡宮の供奉では、そなたを兄の時輔の前にしようと思つておる。これは、何でもないことのようだが、大きな意味を持つことなのだ。あるいは、あからさまに抵抗を示す者があるかもしれません」

「将軍さまが八幡宮に参詣される祈りの行列の順序でござりますね」

「そうだ。兄の前に並ぶことは、これから後、弟の分際で、兄を越える位置に着くことを意味する」

「父上、そんなことがおできになるのですか？」

「おう、このわしには可能なのじゃ。しかし、名実ともれない」

「将軍さまが八幡宮に参詣される祈りの行列の順序でござりますね」

「そうだ。兄の前に並ぶことは、これから後、弟の分際で、兄を越える位置に着くことを意味する」

「父上、そんなことがおできになるのですか？」

「おう、このわしには可能なのじゃ。しかし、名実とも

わたしに語りかけてくれる）

眺めても眺めても飽きることのないこの海原に、これから二十年後、暗い嵐が押し寄せ、国土を二度までも侵略の危険から守ることになるなど、今の父子が知る由もなかつた。

「父上、海鳥が飛んでいます。少し寒そうですが、楽し

そうですね」

「うん、冬の海は日暮れが早いから、ぼつぼつ帰ることにいたすか」

年が明けた、文応元年（一二六一）正月七日の供奉で、案の定時頼が決めた順序、つまり異母兄の時輔の上に弟の時宗を就けたことは、将軍の御意に反したものであった。

しかし、子息の序列を人々の前に明確に定める時頼の意志は固く、敢えて慣例を破ることに踏み切ったのだ。そして、それは周囲に驚きを与えたが、事後承諾のかたちとなり、得宗・時頼の権勢の大きさを示してありますこととなつた。

●離^{ひな}のような夫婦^{めおと}

さて、時宗と安達家の姫・堀内殿との結婚の儀が執り行われたのは、時宗が十一歳、堀内殿が十歳のときであり

安達邸の産所で時宗が産声をあげた翌年、堀内殿も同じ安達邸で呱々の声をあげた。その誕生の時から、堀内殿の運命は定まっていたのだろう。堀内殿の父・安達義景は、時宗の祖母松下禅尼の兄であり、二人の結婚は、北条氏と安達氏が結託して権力を掌握するための、車の車輪ともいえるみごとな政略結婚だったのだ。

安達義景は持ち前の政治力で時頼を扶け、幕府の中枢にいたが、建長五年六月三日、四十四歳の若さでこの世を去ってしまった。堀内殿は、まだ二歳であった。その後は、兄の泰盛が幼い堀内殿の父親替わりをつとめたが、泰盛は後々、時宗をも協力にバックアップするのである。

堀内殿は度々、時宗の住む泉邸を訪れ、時宗や弟妹たちと、庭で竹馬遊びに興じたりする、仲の良い幼なじみとして接していた。泉邸も、勝手知った親戚の家のような気楽な屋敷だった。

時宗の早い結婚は、条件を満たすよい花嫁候補・堀内殿が身近にいたことがあるが、時頼夫妻の目には、堀内殿の姿が麻疹で亡くした妹娘の化身のように映っていたのだろう。幼くして亡くしたわが娘の面影を堀内殿に見て、結婚話をどんどん拍子に進めたのではないか。こうして、時宗は安達義景の娘・堀内殿を娶ったのである。時頼の花婿は、もちろん、新邸の泉邸に迎えられた。夫の持ち家に妻を迎える、いわゆる迎え婚である。当時、夫が自分の家族の中に嫁をとる嫁取り婚の例は、

それらを型通り終えると、やっと無礼講の祝宴がスタートするのだ。

兄の泰盛に促され、小さな掌を膝の前につき、花嫁は姑に挨拶をした。

「私は安達の堀内姫でございます。ふつつかな者ですが、どうぞ宜しくお願ひ申し上げます」

「今日はめでたい日なので、珍しいものも用意しましたよ」

時宗の母は、やさしく微笑み返す。

夫人のいう珍しいものは、熨斗鮑のしわざである。その頃のご馳走は、包丁の技のほかは、せいぜい、くらげ、打あわび、梅干しなどに塩と酢を添えて、折敷のたてふきに出す程度のものだった。しかし目の前の折敷の高杯には、祝いものの熨斗鮑が供されている。

「これは、北条の始祖が食した縁起のよい食べ物です。北条の祝い膳には、必ずといっていいほど熨斗鮑が供されます。あなたが正式に北条家人間になつたことを祝して、用意させました」

祝いの熨斗鮑は、頼朝公が都落ちして伊豆に旅立つとき、落魄の頼朝を途中まで送ってきたお供の者の夢に由来する。

夢の中に十二・三歳の神々しい童子が現れ、六十六本の熨斗鮑を運び、「これを頼朝に食べさせよ」と告げたのだ。

まだなかつた。

● 婚礼の儀式

弘長元年（一二六一）四月二十三日、降りしきる雨の中、固めの役・押垂範元に付添われた堀内姫は、木材の素朴な作りの輿に乗って、甘繩の安達邸から時宗の元に輿入れをしてきた。

姫は、唐衣の上に裳と合わせの袴を身に着け、袖口と襟回りに桜色を配し、子供らしく可憐に装っていた。先駆の二人の雑色や供奉人たちは武家の礼服狩衣姿で伴い、他の武士たちも白狩衣で輿の側に従っていた。

武家同士の婚礼なので、服装や調度、式次第など、婚礼の儀式は簡素なものだったが、までのこの佳き日の前日から、陰陽、呪詛、靈氣を祈るお勤めが行われていた。幼い二人の儀式に、周りの大人たちはいささか堅苦しい面持ちだったが、当の堀内姫は、そんなことは意に介さず、親類の屋敷に遊びにきたような無邪気な振舞いを見せた。花婿の時宗は、水干装束で小さな花嫁を出迎え、ここに愛らしいカップルが誕生した。

そして、古くからのしきたりにのっとった、儀式ばつた饗宴が催された。お菓子、瓶子などに、焼飯は釜で炊いたご飯を碗に盛る。さらに、鯉やなますなどの生魚をまな板上で切つて、即席に供する包丁という儀式も厳粛に行われた。

「これはきっと、あなた様が将来、六十六ヶ国の支配者になるという神のお告げでございましょう」

お供の者はそう言い残し、頼朝のもとを去つていったというのだ。

鮑の肉を薄く長く打ち延ばした熨斗鮑は、その後、武士の出陣や祝宴で、酒の肴として用いられた。

時宗は、すぐに自分の高杯から熨斗鮑をつまみ、素早く堀内姫の口に入れてやつた。姫ははにかみながら、素直に頬張っている。

「それにしても、よくお似合いのお二人じゃ」「まるで離さまのようですこと！」

人々は口々に、ままごと遊びしているような一対の雛を愛でた。

● 小笠懸で氣を吐く時宗
雛のような二人が結婚した翌日、將軍宗尊親王夫妻は、新築したばかりの重時の極楽寺山荘に、泊りがけで遊びに出かけた。翌日には、余興のための笠懸が予定されている。招集をかけられた十四人の腕自慢の射手たちが、鳥帽子直垂の礼服に、腰から下に鹿の毛皮を巻きつけた装束で、朝から極楽寺山荘の馬場に集まつた。

笠懸とは、射手たちが次々と馬に乗り、馬の走る道の左右の柵、つまり埒の間の浅い溝を駆け抜けざまに的を射る競技である。



霧に包まれていた光(2)

鍋屋次郎

南蛮の坊さん達が、命を落とすことも厭はないでキリ

シタンの教えを広めるために我国にやつて来ていると言
う清吉の話に、亀松が

「旦那さん、どうして命懸けでやつてくるんか？ 何が
命より大切なんか？」

と聞くと

「俺にもよく説明は出来ないが、南蛮の坊さんの一日の
暮らしぶりや、いろいろと話を聽いていると何となく分
かるような気がするな」

と清吉が言つた。その言葉に目を丸くした彦次は
「旦那さん 旦那さんは南蛮の坊さんに会つたのか？」

と叫ぶような声を出した。

「おう、何度も会つてゐるよ」

「そんじゃあ、もつといろいろ話してくれ」

と三人は部屋を出ていった

秋葉神社本宮への参拝を済ませ、火伏せの靈験あらた
かな「秋葉神社のお礼」を大切に抱えた清吉は、森町村
の古着商「山田屋」に寄つて、秋には京物古着を持ち込
む商談を済ませて相良屋に戻つた。

駿府のキリシタン弾圧の状況を調べに行つた幸兵衛は、
清吉が相良屋に戻つてから三日後の日暮れ近くに漸く戻つ
てきた。

喜びと心配を織り交ぜて迎える妻女のお鶴に足を洗つ
てもらつて座敷に上がつた幸兵衛に、清吉は早く報告を

聴きたい気持ちを抑えて

「幸兵衛さん、今晚はどうぞ旅のお疲れを休めてください」
と言つて、自分の寝室として与えられている客間に引
き下がつた。

翌日の昼過ぎ、やつと寝床から起き上がつた幸兵衛が、

奥座敷にこもつて駿府での調べたことの書付を整理し終
わつたときは既に夕闇が迫つていた。

夕食後、清吉を奥座敷に招き

「清吉さん、駿府の取り締まりは厳しく、調べも困難だっ
た。夜、ひそかに知り合いの信徒を訪ねて何とか大体の

と彦次が言つたとき、部屋の襖が開き

「旦那様、こんなに遅くまで有難うございました。おい、

亀松、彦次、旦那様にお礼を言つて帰りなさい」

「旦那さん、秋葉詣でのお帰りにまた寄つてくれんかの

う

と言い出すと、同時に亀松が

「旦那さん、お願ひします」

と、ぺこんと頭をさげたので、清吉は苦笑しながら留

藏の方を見て
「お若い方の熱い気持ちに負けたよ。京へ戻る前にまた
來ることにしよう。今晩はこれでお帰り」

と言うと

「旦那様、有難うございました」

ことを聞き出すことが出来た。

バードレ様とイルマン（修道士：日本人がなつていた
ケースが多い）様は天主堂を追われ安倍川の西、丸子の
宿外れの藁小屋に隠れている様子だ。既に何日か経つて
いるから今もなおそこにいるかどうかは分からぬ。
そこで小笠原様ご家来衆や一般の市中の二百四十名に上
る信徒の安否を気遣つておられるそうだ。

駿府のキリシタンの後ろ楯であった小笠原様（六千石
の旗本、三河に知行地を持つ小笠原權之丞。洗礼名ディ
エゴ小笠原）のことだが、ご一家ご家来衆は改宗を迫
られ、改宗しない小笠原様は領地没収の上、やはり改宗
を拒んだご兄弟方共々追放になつたそうだ。

お城からお役人が小笠原様のお屋敷に来たとき、小笠
原様は三河の知行地にお出掛けだつた。お帰りになつて
ご家来衆を集めて、今までの忠誠に礼を述べた後
『自分はデウス様の御為に死ぬことは本望である。この
地上での難難は、必ずパライソ（天国）で報われる。こ
のことを信じて日々歩みなさい。皆の上にデウス様の御
加護が豊かにあるように』

と言つて、あるだけの金子をご家来衆にお分けになつ
て、お供をしたいと申し出たご家来衆をお断りになつた
そうだ。

翌日には奥方のご実家に累が及ぶことを懸念して、ど
こまでもご一緒にと言われた奥方をご実家にお戻しなつた

られ、ご兄弟衆と共に西の方に向かわれたそうだ。

兎に角、今の所一般信徒には全く追求の手が伸びていない事から判断すると、駿府町奉行も、バードレ様、イルマン様を駿府から退去させることと、小笠原様を追放することで今回のキリストン弾圧は終わりになるお考えの様子だと思う。多分、バードレ様達も一般信徒の生命に危険がないことが分かれば、一先ず都へ戻り、時期を見てまた出直してくることを考えていると思う。

まあ、このようなことを徳右衛門さんに報告しておいてください。また変わったことが起これば駿府の信徒の方から連絡を貰うようにしているから、何か変化があればご連絡しよう

ここまで一気に話して、一息いれてから

「清吉さん、駿府で聴いた話だが、江戸では大奥の女性三人がキリストン改宗を拒否して伊豆大島などに流されたそうだ。場所が大奥と言うことで公方様は重く罰したのだと思う」

と付け加えた。清吉は

「幸兵衛さん、本当に命懸けの事で有難うございました。大変詳しく述べてくださいました。帰つたら兄徳右衛門に幸兵衛さんのご苦労の程をよく話します。お話の状況では、夜寝る時間も少なかつたのではないか」

更に続けて

「どうしてキリストンになることが悪いのか、お上はどうしてキリストンを禁止しなければならないのか」
が納得できなかつた。

清吉は、お鶴が表面では清吉をもてなしているが、あと一つ歓迎していないことを感じていたので、翌日幸兵衛夫妻にお礼を述べて帰り支度をして、次の日朝早く出立した。

出立するその朝、お鶴の表情はいつになく明るくあれこれと道中支度の世話を焼き、土産も持たせていた。

掛川宿を通つて森町村へでた清吉は、くねくねと曲りながら延びている秋葉街道を北に進み、日の暮れる前に旅籠吉川に入った。

旅籠の主、留藏は清吉の顔を見るなり

「お待ちいたしておりました。若い者が今日か明日かと首を長くしておりました。今日は、奥の離れのほうが空いておりますので、そちらをお使い下さい」と離れに案内した。

夕食が済んで暫くすると、留藏が亀松と彦次を連れてやってきた。

「旦那様、若い者を連れてきましたので話を聞いてやつてください。私はキリストンの話ということで、一時は旦那様のお話を若い者に聞かせることはどんなものかと考

「それと、森町村の山田屋さんを紹介してくださって有難うございました。お陰さまで、秋には京物の古着が商える事となりました」とお礼を言つて、今聴いたばかりのことを書き留めるために部屋に戻つた。

その夜、お鶴は、幸兵衛と二人きりになつた時、涙を流しながら

「もうキリストンに関わることは止めてください。貴方が戻つてくるまで心配で心配で、もしも貴方に危険が加わることがあれば、と考えると夜も眠れませんでした。娘も嫁に出す年頃ですし、あなたの姉さんが播州屋さんに嫁いでいることと、キリストンのことは別問題です。後生だからそんな危険なことはもうこれきりにしてください。そして、都の徳右衛門さんの所へ行くのもしばらくの間は止めてください」と哀願した。幸兵衛は

「分かった。心配かけて済まなかつた。安心しなさい」とお鶴を宥め、優しく抱き寄せた。

しかし、幸兵衛の心中は、徳右衛門や清吉達と一緒に都で聴いたバードレの話、キリストンに転宗した後の小笠原の殿様や、駿府のキリストンの人たちの清々しい交わりとその生活ぶりを見ていたので

えましたが、若い者がキリストンのことを知りたがっている様子を見て、こんな田舎では滅多にお聞きできる話ではございませんし、また、これから若者の渡つて行く世間を考えてみると、是非聞かせてやっていただきたいと思うようになりました。私からもお願ひします」と言つて、お茶と煎餅を置いていった。

亀松と彦次はニコニコしながら

「旦那さん、待つてたよ。旦那さんが都で南蛮の坊さんと会つたと言う話、聞きたくって」

の言葉に、清吉が

「そうか、お前達との約束だもんな。ここは離れて、他のお客様の邪魔にもならないからゆっくり話せるな」というと、二人は目を輝かせていた。

清吉は最初、言葉の問題で日本人イルマンの通訳を通してバードレの話を聞いていること等を語つて、煎餅に手を出して一息入れると

「どんな話だ?」

と彦次が早く続けるとばかりに清吉を見つめる。

それから夜の更けるのも忘れて、彦次と亀松は清吉の話に耳を傾けていた。

天主堂の中のオルガンという今まで聞いたことのない美しい音色が出る楽器のこと、キリストンにはデウスと言ふ神様があつてその神様は天地の全てを作つた神様だ

が、その神様には神社で出す様なお札はないということ、

天主堂の中に掲げられているのはその神様ではなく、神様の子供という十字に組み合わされた木に縛り付けられて処刑された男であること、そしてその男がゼスズ・キリストということなどの清吉の話が続いていた。

やがて夜も更けて夜四つ近くなつたとき、亀松が

「旦那さん、南蛮の坊さんは、言葉も話せなくて、その木に縛り付けられて殺された男を拝ませる為にわざわざやつて来たのか。けんのんな長旅までして」

と言ひ出した。すると彦次も

「その男を拝むとどんなご利益があるんだか？」

と質問した。清吉は亀松に向かつて

「そうだな、キリストンでは、その男を拝むのとは違つて、その男の前でデウスという神様にお祈りしているんだ。それからキリストンのご利益は、どうも俺達が思つてゐるような大金持ちになるとか、出世するとかいうよううなご利益とはちよつと違うんだよな亀松。南蛮の坊さんの目的は、人間が悪いことをしないで、その木に縛り付けられて殺された男ゼスズ・キリストの教えを守つて眞面目に暮らしていれば、どんな人間でもデウスという神様がパライソと言つて、人間が生きている間にする苦労や悲しみは全くないという天国へ連れていってくれるそうだ。だから、俺達皆がそのパライソと言う天国へ行けるようになるように、という親切な思いでキリストン

の教えを広めに來てゐるんだな」

ここまで言った清吉に、彦次は「旦那さん、その男の教えって一体どんな教だか？」と口を挟んだ。清吉は

「俺もよく分からんけど、キリストンの教えでは神様はデウスだけで、その他の神様は絶対に拝んではいけないと言つてゐる。また、その教えは、親を大切にせよとか、妾を持つてはいけない、盗んではいけない等の教えだ」と言う清吉に、亀松は

「キリストンの神様があることは分かつたけど、そんなじゃあ、キリストンの仏様はどうなつてるんで？」と聞いた。

「キリストンには仏はないみたいだ」

の清吉の答えに、亀松は

「仏がないって！　じゃ、死んだ人は仏ではないのか？」

と叫んだ。

「おいおい、そんなに聞かれても、俺にも分からんよ。とにかくキリストンでは、さつきから話したようにデウスだけが神様で仏様はない。だから、西国の有馬や豊後の御殿様がキリストンになつた時には、今まであつた領内のお寺や神社を壊したそうだ」

と言う清吉に、亀松は口を尖らせて

「そんなら、城下村の谷本神社、森町村の三島神社や天宮神社の神様、秋葉神社の神様は、キリストンでは神様

ではないのか？そんなの変だよ。俺達は神社の前を通ればそこで神様を拝んで、毎日無事に過ごすことが出来てゐるじゃん」と同意を促すように彦次を見た。それを見ていた清吉は

「兎に角な、キリストンでは神様はデウスだけで、世の中に他に神様はないと言つてゐるんだから、キリストンとはそういうもんかと聞いておくしか仕方がないよ」というと、亀松も彦次も何か考える様子でしばらく天井を眺めていたが、やがて彦次が

「さっき、旦那さんが言つたキリストンの神様のデウスに何を祈つてゐるんだ？　それと、木に縛られて殺された男は何故殺されたんだか？　神様の子供なんだから教えていたことは良いことなんだろ？」

と鋭い質問を浴びせてきた。清吉は「何を祈るかって？　うん、南蛮の坊さんは、『自分の心から、悪い思いを取り去つてください』とか『病気の人気が早く治りますように』等と祈るそうだ。それと、何故殺されたかって言われてもその所は俺にもよく分からぬし説明も出来ない」と言つて

「おい、もう大分夜も更けた。今夜はここまでにしよう。秋にはまた来るからこの続きをしよう。その時にはお前達の質問にもっと答えられるようしておくよ」

と清吉が終りを告げると、亀松と彦次は残念そうな顔をしたが、秋にまた会える事の期待に顔をほころばせて清吉に丁寧にお礼を言って帰つていった。
入れ違いに主の留藏が礼を言いにやってきた。

翌朝、ゆっくりと朝食を済ませて宿代を払おうとすると留藏は受けとらないばかりか、太田川で獲れた鮎を自家で薰製にしたものを持たせてくれた。

秋葉神社のお礼を大切に抱えた清吉は、森町村から太田川の土手を南へ下つて飯田村を通り抜けて袋井宿へ出て、そこから東海道を上り、半月後に伏見の播州屋に戻つた。季節は既に初夏になつていた。

播州屋の主、徳右衛門はその夜清吉から一通りの話を聞くと奥座敷に入り、堺に潜んで時の流れを見つめている京都伏見天主堂バードレのオルティーノ神父宛に駿府でのキリストン弾圧の概要をしたため、夜更けてからその書状を清吉に目を通して、その上で密封をして文箱に納めた。

その夜は明け方まで徳右衛門と清吉は話し合つていた。

勿論、相良屋のお鶴のことも話した。

清吉の留守の間の都の状況は、徳右衛門の話によると、伏見の天主堂は壊されもせずそのまままで、その後バード

レや信徒への摘発の手は伸びず、時折役人が門を締め切ったままの天主堂を確認するよう眺めて行くので、バードレからも信徒に對して天主堂に近寄らないように指導しているとのことである。

夏も盛りを過ぎて朝夕が涼しくなった頃、イルマン北川が恐る恐る天主堂に入り、半年間の埃を払って掃除をしたが、役人からの咎めはなかった。

その翌日、オルティーノ神父もやってきて、蠟燭を灯しミサの準備を始めたところを町奉行配下の役人が覗いていったが何のお咎めもなかつたので、神父とイルマン北川の二人は三日後からミサを復活することとし、信徒に連絡した。

慶長一七年（一六一二）の秋以降、家康は特にポルトガルとの通商をより活発にして一手にその利を得るために、キリストンの布教活動を見て見ぬ振りをしていたので、翌年慶長一八年（一六一三）春には伏見でも、駿府でも、イエズス会の活動は元に戻り、むしろ駿府での布教活動は以前よりも活発になつていった。

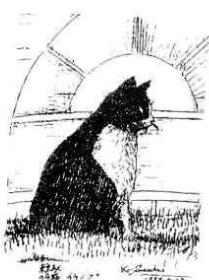
しかし、その頃九州の有馬では、慶長一七年（一六一二）三月に露見した岡本大八事件（今回のキリストン摘発の端緒となつた）により罪を問われ、同年六月に処刑された有馬晴信の後継を許された晴信の子直純は、自己

られるかが不安であることほのめかした。

秋の穫り入れも終わって村人達が一息つく十一月三日は森町村三島神社の大祭で、近郷近在からも参詣人が集まり大いに賑わっている。

古着商の山田屋に京物古着を買い取つてもらった清吉は、三島神社の大祭を見物した後、相良屋には行かないで旅籠吉川に直行した。相良屋の妻女お鶴に気付かれないと幸兵衛に會う方法はないものかと道中考え続けてきた結果、亀松か彦次に相良屋まで使いに行つてもらうよう頼むこととした。

（つづく）



家康のこのような態度に対し、仏教界からのキリストン取り締まりへの要求は日に日に高まり、江戸、駿府、京都等のキリストンの平穡は長く続かなかつた。

慶長一八年（一六一三）十月も半ばになった頃、この一年余り活発に布教活動をしていたイルマン北川が久しうりに伏見の播州屋を訪れた。奥座敷に通されて「この八月から九月にかけて、江戸で厳しい弾圧があつて、キリストンが何人も斬首されたと言う情報が入つた。江戸での癪患者の収容所の中にはいた礼拝施設も壊された。近く京・大阪も摘発があるかも知れない。駿府の情報が入つたら教えて欲しい」と声を細めて徳右衛門に頼み込んだ。

「わかりました。弟の清吉が、京物古着の商いで近く遠州森町村という所まで行きますので、駿府の情報を得るようにさせましよう。ただ、取り調べが強まるとき、情報入りにくくなってしまいますのでどこまで出来ますか、一寸心配です」

と、それとなく徳右衛門は相良屋の協力がどこまで得

御参府中日記のこと（その二）



三戸岡道夫

第二章 江戸滞在中の日記（続き）

（三月十四日）

正式の登城通知が来た。

午後四時頃、御用番の水野越前守様よりの御使が、石見守様の門番に正式の書状を持ってきた。その書状は門番から、田中増右エ門、神谷亮蔵と順次渡されてきた。その正式の登城通知は次の通りであった。

明日十五日午前八時頃、江戸城に参上し、将軍にお目見えして、御礼を申し上げなさい。

三月十四日 水野越前守

松平太郎左エ門殿
殿様は、右のように先例通りに登城の通知が來たので、およろこびになり、すぐ御供をつれて、水野越前守様と、

先の月番である松平和泉守様へお礼の挨拶に出掛けた。
御礼の供揃いとしては、殿様は徒步で行かれ、付添いの侍は小川惣兵ヱ、深見覚藏の二人であった。それに槍持が一人、草履取りが一人、お箱が一人、合羽籠一荷という態勢でお出掛けになり、滞りなく御礼をすませられた。

なお、お取次坊主への依頼も怠ってはならない。そこで下谷池ノ端の関口玄清の宅へ、明日が登城の旨の左のようないい頼状を書き、これを状箱に入れて、使いの者に持たせてやった。

手紙をもってお願い申し上げます。

かねて御意を得ておりました登城の件、明十五日
と、御用番老中様から御沙汰がありましたので、

殿中でよろしくお世話を願い申し上げます。

なお、江戸城の玄関番へも依頼状が必要である。そこで江戸城の玄関番の直井重作のところへも、左のようないい頼状を書き、状箱に入れ、栄助に持たせてやった。

手紙をもってお願い申し上げます。

春暖の候、御安全の御事と珍重に存じます。さて、主人（松平太郎左エ門）が明十五日午前八時頃登城いたしますから、相変らずよろしくお願ひいたします。

なお、明日十五日の供揃えのためには、これ以外にも次のような依頼事項が必要であった。

一、御押えの御侍が一人。これは押え口入屋の平七

へ、深見覚藏から書状を出した。

一、西ノ久保藤七のところへ通知
一、山崎屋より陸尺を四人、御対箱、蓑箱にて三人、差手代を一人、長柄を一人、御草履取を一人、差出しのこと

一、弁当を用意のこと。弁当箱など足らない場合は、竹皮包みにて煮めなどを入れて二十一包。

一、お上は、重箱に入れ、お駕の中へ召上られる予定である。

一、茶樽、菓子なども詰めて用意し、ろうそくも用意すること。

そしてこれらのこととはすべて石見守様にお知らせする

御草履取は一人 山崎屋からの口入

御長柄は一人 全右

全右

袴着 深見覚藏

御徒士は三人 麻上下もも立 山田菊次郎

借用人

御槍は一人 ただし手代が一人で、これは西久保藤七からの口入

御駕は四人 これは桜田町山崎屋からの口入

御侍は 小川惣兵ヱ

借用人

全右

深見覚藏

御蓑箱は二人 全右（内手代が一人）

合羽籠は二人 御手人

弁当持は一人 全右

以上二十一名

大御所様、右大将様への御礼

御奏者番 加納遠江守様

出席大目付 丹羽近江守様

御目付 渡辺 小膳様

御目付 松平 求馬様

御登城遊ばされ候段御届

大目付 土屋紀伊守様

佐々木三蔵様

内藤紀伊守様

右の通り書状をもって申し上げます。

なお、杉山幸三の住所は下谷仲御徒士町、剣持栄次郎北西の内で、御用のあるときは、ここへお尋ね下さい。さて、江戸城の中での模様である。
まず玄関番の直井重作がまかり出で、よく世話をしてくれた。つづいて御坊主の閑口玄清もまかり出てくれた。玄清は一度だけでなく、二度も出てきてくれた。

初めから終りまで杉山幸三が世話してくらたので大変都合がよかったです。また平井栄朴には初めてお会いなされたのだが、大変よく世話をしてくれた。

献上物などは杉山幸三が取りはからってくれた。
御供の者が雨にぬれて困っているのを、玄関番の直井幸作が掃除番に言いつけて雨具を借してくれたので、みんな喜んだ。

杉山幸三から殿様に差出された書状には、次のように

殿様は殿中で内藤丹波守様とはじめてお会いなされ、お話しをされた。

さて、このようにして登城されてからは、殿様は將軍家慶様への御目みえを首尾よく済ませ、つづいて御老君（前将軍、十一代家斉）へもご挨拶され、また御三家へも挨拶され、さらに酒井雅樂頭様へも挨拶され、いずれも滞りなくおすませになった。

なお殿様が殿中に居られる間に、お供の者はお弁当をたべた。
また、（石見守様より上下着たる使者が家の方へ来て、本日太郎左エ門様が御登城されたのは珍重に存じて、およろこびのお肴一打の目録を下された）との報告があつた。

「苦しうない、面おもてをあげい」と仰せられた。太郎左エ門は、

「はは、本日ここにお目通りのできましたことは、はなはだ光榮に存じます。上様にはうるわしき御尊顔を拝し奉り、恐悦至極に存じます」

と口上を述べた。しかしこの他に、どのようなお言葉を頂戴したかは、判らない。

二百石以下の御家人は、名目上は直臣であつても、こうした將軍への御目見えはできないのである。松平太郎左エ門はたつた四百余石の寄合旗本の身であるが、松平本家という名門のために御目見えが許されているのである。しかし、そのためにつたつこれだけの『御目見え』という行事を無上の光榮と心得て、一年おきに参勤し、登城するのであつた。

なお、御目見えが終つて、御三家や酒井雅樂頭などへ挨拶に廻つたところ、これは殿中における控えの部屋へ御挨拶を行つたのであると解される。毎月一日と十五日は、大名や旗本が登城する定例日になつたから、御三家や酒井雅樂頭も登城していたものと思われる。御三家の屋敷へは下城してから挨拶に行つてるので、こは城中での挨拶である。

書かれていた。

なお御登城にあたり御玄関まで召連れた侍は、上下着用の山田菊次郎と小川惣兵エの二人であった。それに御草履取りが一人、押が一人付いた。

中の御門に残つた者は、御箱一つ。ただし御箱番、御箱持一人であった。

弁当箱を持ってきた幸七は、ここで各人に弁当を渡し、早く家へ帰つた。

「松平太郎左エ門が御目見えに参上いたしました」と申し上げた。すると将軍は、

さて、登城が終ると、いろいろな所へ御礼の挨拶に参上した。

松平太郎左エ門が平伏していると、御披露番が、

「松平太郎左エ門が御目見えに参上いたしました」

まず、老中、若年寄、大目付のところへ挨拶に行つた。これは江戸へ到着したのを知らせたときと同じように、行列して挨拶したのである。その口上は次のようにあつた。

私儀、本日参上の御礼、滞りなく相すみ、有難く、
ここに御礼に参上いたしました。

松平太郎左エ門より

次は御三家への挨拶である。まず水戸様の屋敷へ入り、お玄関から通り、御用人々へお会いの上、口上を申し上げた。

次に尾張様へは、これまで中の口から入っていたのに、案内の者の心得違いで桐の間へ通されてしまった。すると御用人が出てきて、「間違えましたから」と、本間へ通し直し、そこでお茶、たばこなどが出された。

口上は水戸様のときと同じであり、また紀伊様へも尾張様と同じような要領でご挨拶された。

以上のように松平太郎左エ門は、登城お礼の挨拶をすませて、午後四時頃に宅へ帰られた。留守中に石見守様からおよろこびの使者があり、返札は神谷亮蔵が行つた。

お登城が首尾よくお済みになつたので、殿様（太郎左

さてここで松平本家の窮乏と、松平本家への助成依頼について、若干のべる。

松平本家（太郎左エ門）は一年おきに江戸へ出て將軍にお目通りするのであるが、それには相当の経費がかかるのである。ところが近年は凶作が相次ぎ、地元では一揆が起つたくらい領民の困窮はその極に達していたので、年貢も思うように取れなかつた。それなのに松平太郎左エ門は格式ばかり万石大名並なので、交際の相手も御三家をはじめとする、一流の名門ばかりである。とてもやれたものではない。

そこで、これまで幕府直轄の山林奉行か、あるいは代官にでもしてもらって、余分の収入が得られるように、再三、幕府の要路者に頼んでいたが、きいてもらえなかつた。

そこで今回の参勤の機に、
(全国に松平を名乗る数十の大名旗本にこの窮状を訴えて、お救いを求めるよう)

と、神谷亮蔵と田中増右エ門の二人の間で、話がまとまつたのである。

松平本家を救つてもらうためには、殿様を先頭に立てて行動しなくてはならぬ。ところが登城がすむと、やれど緊張がとけたのか、殿様は病気になり、三月十九日、二十日と、二日間寝込んでしまつた。そこで医師の松平宗伯の診察を受けて、やっと回復することが出来た。

江戸幕府は全国の藩主はもちろん、旗本、御家人の末に至るまで、将軍が変ったときは、新将軍に対し、絶対服従、すなわち忠節をつくす意味の誓詞を書いて、差すことになつていた。

天保八年七月、十一代将軍家斉が退き、家慶が十二代将軍となつたので、全国の大名、旗本はことごとく誓詞を書いて出した。ところが松平太郎左エ門はこの時まだ誓詞を出していなかつた。そこで今回の参勤を機に、誓詞を出すべきか否かを、三月十七日付で月番老中の水野越前守忠邦へお伺い書を出したのである。すると三月十八日になって、(誓詞は差出すに及ばず)

という返事があつた。これは松平の本家が将軍に叛くようなことは絶対にないというので、このような处置になつたものと理解される。(しか以前には将軍の代替りに、松平本家からも誓詞を差出していることは、先祖書に見える通りである)

(三月二十一日)

助成をお願いする相手はいずれも一流の大名や旗本であるから、行列を作り、正門から堂々と押しかけねばならない。そこで殿様は御輿に乗られた。

陸尺は四人であり、供侍ともだちとしては山田菊次郎と深見覚藏の二人、それに御槍、御箱、御草履取、合羽籠を從え、一行十名で、それぞれの屋敷を廻つた。

このような助成願いが、三月二十一日、二十二日、二十四日、二十五日の四日間（二十三日は休んだ）、朝は八時頃から夕方四時頃まで、弁当持ちで続けられた。毎日、十五軒くらい廻つたとあるから、全部で六十軒ほどを懇請して歩いたわけである。

それはどの屋敷を廻つたのか、どのような話の内容で、どのような収穫があつたのか、御参府中日記には『別帳に記す』とあるだけで、内容は一切わからぬ。

三月二十六日に尾張大納言様が逝去されたので、二十七日と二十八日は謹慎した。

また三月二十九日と三十日の両日は、雑用だけであったので、別段記述することはない。

四月一日と二日には、神谷亮蔵と田中増右エ門の二人は手分けして、再度の助成懇請に巡回した。いずれもお供としては若党一人、草履取り一人を、召し連れていた。

四月一日には神谷亮蔵は十八ヶ所、田中増右エ門は十

四ヶ所を廻り、四月二日には神谷亮蔵は十七ヶ所、田中増右エ門は十三ヶ所を廻り、一人で合計六十二ヶ所を廻った。

この時の話がどうであったかは、「一件帳にあり」と記されているが、その一件帳が見当らないので、内容を知ることはできない。

なお四月六日の個所に、

(御助成の件、本日四ヶ所より到来、昨日(四月五日)

松平遠江守様より白銀二枚、これにて二ヶ所なり。この使者は、石見守様の表玄関で受取るよう頼んでおいたところ、門番がまちがえて御用部屋へ通してしまい、大変困ってしまった)

と書いてあった。

こうしてみると、助成金を石見守の門番に預けて帰った者もあつたらしいことが、わかる。また巡回者が、その場で若干の金をもらったものもあることも、推測される。

(四月三日)

いよいよ帰郷の支度である。

殿様は貞次郎様とご一緒に、下谷の山口植之助様のところへ行かれた。お供は神谷亮蔵が病気のため、田中増

明日八日に出発するので、御老中、若年寄様方へ挨拶にお廻りになった。お供廻りは左のようであった。
御乗物 四人(日雇の者)
御侍 山田菊次郎、小川惣兵卫
御槍 一人(日雇の者)
御箱、御草履取 各一人(日雇の者)
午後二時頃、帰つてこられた。

(四月七日)

いよいよ四月八日に出発の旨を言い渡した。

右エ門が勤めた。
ついでにお城の御坊主の関口玄清のところへも行き、たちへ、左の通りお礼の目録をつかわした。
御太刀馬代目録を与えた。

一、金二百疋 関口玄清へ(御使いは神谷亮蔵)
一、金百疋 杉山幸三へ(御使いは田中増右エ門)
一、金百疋 平井栄朴へ(御使いは神谷亮蔵)
メテ金一両

(四月五日)

(102)

つづいて石見守様のところへお暇乞いの挨拶に行つた。石見守様からは使者が来て、反物一疋とその他にもいろいろな品物を下された。

貞次郎様は夕方に来られて、夜半まで、お酒を一同に下された。

南沢條助、関茂、国瀬起十郎などもお出でになつた。

石見守様から逗留中にお借りした品物を、それぞれ点検し、お返しした。

また江戸にいた間にお世話になつた方々へ次のようにお礼を差し上げた。

金三百疋 山田菊次郎、小川惣兵卫

金三百疋 田中増右エ門

金二朱 田中妻へ

金二十疋 御台所番へ

金二朱 小用人並に中番へ

金二朱 御槍持 二人

金一朱 御料理担当の初太郎
メテ金二両二朱と二百文

第三章 帰路の道中記

帰路の予定表は次の如くであった。

一、人足は六人
一、乗本馬一疋

右は松平太郎左エ門が参勤のところ、来る四月八日、江戸麻布龍土屋敷出発にて、品川から岡崎までの宿々へ、書面の人馬並びに渡川越、前の通り遅滞なく差し下された。この先触れは三河の松平郷屋敷まで、お届け下さい。

四月六日

松平太郎左エ門内

神谷亮蔵

一、天龍川役人

一、富士川役人 栄屋望月藤右エ門方

右通行の件、申通り給わるべく候、また宿泊は次の通りまちがいなく本陣へ通知下さるよう頼みます。宿泊予定は次の如くである。

四月八日 程ヶ谷宿

水谷与右エ門

" 九日 小田原宿

中川太郎右エ門

" 十日 沼津宿

高田弥惣右エ門

" 十一日 江尻宿

寺尾与右エ門

" 十二日 金谷宿

佐場佐次右エ門

" 十三日 浜松宿

梅谷市左エ門

(103)

木原順藏

川が川止めのため、手前の島田宿の本陣の、大久保新右エ門のところに泊ることになった。

右は府中宿の貫目、ならびに人馬取調べ見届けと
して、羅り出申し候。

と書いた書類を持出すと、殿様（松平太郎左エ門）はお駕の戸を少し引き、それに対し挨拶があつた。それから伊豆屋へ立寄つてお茶を飲んだ。奥津鯛五尾が献上された。それで高田、木原の同心へ一朱ずつ与え、また伊豆屋平右エ門へも茶代一朱を与えた。

次に、駿府町奉行加藤韌負組同心の寺田定蔵と布施源三郎の二人が、

「安部川の川越え人足の取締見届けとしてまかり出ました」

と申し上げると、殿様はお駕の戸を引き、ご挨拶された。ついで人足と相談し、渡し賃を払つて、川越えは無事終了した。

丸子の宿で小休止した。茶屋の桔梗屋左右エ門が大鯛

一尾を献上したが、これはお断わりし、茶代を与えた。

藤枝の宿でまた小休止した。本陣の伊右エ門が袴のお召し替えをすすめたが、

（追つて帰国の上、何分の返事をする）
と申して、確答はしなかつた。

次に本日は金谷の宿へお泊りの予定であったが、大井

た。

(四月十五日)

宿にて舟賃（四百七十文）を払つて、舟を一艘借り切つた。本陣の亭主が海辺まで見送つてくれた。

今日は波もいたって静かで、海上も心地よく、新居の宿に着いた。本陣の紀之国屋が出迎えてくれ、また新居の関所へと連絡してくれたので、らくらくと関所を通ることができた。こうして白須賀の駅のつば屋で小休止し、昼食を取つた。

吉田の宿へは成瀬甚兵エがご機嫌伺いにまかり出た。甚兵エはこの二、三日中、江戸へ行つていて、帰つてきたばかりだという。

加藤民右エ門が二川まで出迎えに来つて、これからお供をすると申し出た。御油の橋の袂で鈴木要人と出会い、殿様の乗物に付添つてお供をしてくれるといつた。神谷亮蔵は乗越馬で先に進んだ。そして江戸へ行くとき御油の宿に預けておいた上下を受取り、藤川の宿へは午後二時頃に着いた。

この時刻なら、少し無理をすれば在所（松平村）まで帰れるであろう。しかしく聞いてみると、人足などはもう帰り支度をして、今日は動いてくれないというので、止むなく一行は藤川の本陣の大西喜太夫のところに泊る

午前四時頃、島田の宿を出発した。本陣の亭主が股引き姿で川岸まで見送りに出て、川役人といろいろ相談し、乗物も新調の大台を持出し、人足に対してもいろいろと世話をやいてくれたので、都合よく大井川を渡ることが出来た。

日坂の問屋役人から、小夜の中山の案内人を差出してくれたので、らくに小夜の中山の峠を越えることができた。

掛川の宿の花川町伊藤又右エ門のところで昼食を取り、天龍川を渡つた。今夜は浜松で泊る予定であったが、一日も早く領國へ帰りたいとの気持から、浜松へは泊らず、夜になってからその先にある舞坂宿の本陣の宮崎伝右エ門のところに泊つた。蛤などが献上されたが、これは断つじめ、いろいろな手配を頼んだ。

ことになった。

今夜は、鈴木要人、加藤民右エ門などが一緒に泊つてくれたので、神谷亮蔵は肩の荷が下りたような気持になって、お先に就寝した。明日は買い上げ人足で滝山寺へお詣りの予定なので、亭主と相談し、人足九名の世話をはじめ、いろいろな手配を頼んだ。

(四月十六日)

藤川の宿のはづれまで、本陣の人々が高張提灯で見送つてくれた。鈴木要人は御先乗りを申し出て、松平村までお勤めになつた。

岡崎領内から松平村までは、出発の時と同じような行列を作つて進むため、欠村の大西のところへ預けておいた道具を受取り、また岡崎城主本多家からご馳走の同心が來てくれたので、行列の供揃えはどうやら出来上つた。滝山寺へご参詣のため、久右エ門町から滝山道へ入つた。

久右エ門町の角では同心衆が下座していたので、殿様はお駕の戸を引き、会釈された。その後で神谷亮蔵が、（江戸では首尾よく登城して將軍にお目通りされた）ことを話し、一同に、いろいろ御配慮下さったことに対して、お礼をのべられた。

それから稻熊村にさしかかると、松平村からお迎えの

(四月十四日)

人足が大勢来ていたので、藤川の宿で雇った人足はそこで帰した。行列が進むにしたがって、行列の人数もふえ、盛大になつていった。

米河内村の万屋幸兵エのところで、昼の弁当を食べた。

それからは神谷亮蔵が供の栄助に槍を持たせて、一足先に松平村へ帰り、御家内一同に殿様の無事帰宅を報告した。

午後一時頃、殿様の一行は、松平村の御屋敷に到着された。奥方様、若殿様をはじめ、御一家は残らずお出迎え申し上げた。

殿様はお玄関からお居間へお通りになり、ご休息されました。

一門の者はみな御前に出仕して、よろこんで恐悦申し上げた。

めでたし、めでたし、千秋万歳、万々歳、万歳楽を相唱つた。

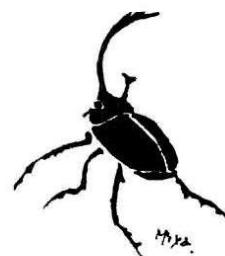
天保十年四月十六日

神谷亮蔵記す

(発行日)	(原稿締切日)
春季号	二月一日
	十二月三十一日
夏季号	五月一日
	三月三十一日
秋季号	八月一日
	六月三十日
冬季号	十一月一日
	九月三十日

「まんじ」季刊発行内規

体当たり戦法を強制された 神風特別攻撃隊の人びと(三)



千 坂 精 一

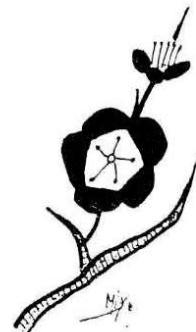
ソロモン諸島ガダルカナル(1)

連合艦隊司令部は、ミッドウェーの敗戦後も南のソロモン諸島攻略を諦めてはいなかつた。

北はアリューシャン列島のアツツ、キスカなどを奪取していたが、しかし要の位置にあるミッドウェーを占拠出来なかつたのだから、たとえソロモン諸島を抑えたとしても、広い太平洋の南北両端だけで果たして防衛線を確立出来るかどうか、地図を眺めれば一目瞭然である。が、そんな疑問をよそに、計画はどんどん進んでいった。

アメリカとオーストラリアを分断する作戦は、ニューギニア島ポートモレスビー攻略につづいて、五月三日には呉第三特別陸戦隊七百人がフロリダ島ツラギに上陸していた。

ついで、ミッドウェー海戦から一ヶ月後の六月十六日には、ニューギニアとオーストラリア進攻の前線基地にする飛行場建設のため、海軍設営隊二千五百七十一人が第八十四警備隊の一部百五十人に護衛されてガダルカナル島(以下ガ島と記す)に上陸した。



そして、ひと月かけての調査で北岸の平坦地を選んで建設作業にとりかかり、昼夜兼行の突貫工事で二十日後には長さ八百メートル幅六十メートルの滑走路が出来上がった。

だが、その飛行場の完成を待っていたかのように、八月七日早朝軽巡洋艦一隻、駆逐艦一隻に見守られたアメリカ第一海兵師団八千人がツラギに、一万一千人がガ島に上陸してきた。

ツラギにいた陸戦隊員と横浜航空隊員は、十倍のアメリカ軍を相手に抗戦したが、所詮衆寡敵せず二時間の死闘で全員玉碎してしまった。

横浜航空隊司令宮崎重敬大佐は自決、副長勝木三郎中佐は白兵戦で散華したという。

いっぽう、ガ島のほうは圧倒的多数のまえに抵抗する術もなく、設営隊員と警備隊員たちは山中へ逃避したので、飛行場は容易に占領されてしまった。

この報を受けた連合艦隊司令部は、ラバウルの航空隊に出撃を命じた。

勇躍発進した艦攻二十七機、艦爆九機、零戦十八機は、ガ島を空襲して敵戦闘機二十七機を撃墜したが、六機が未帰還、被弾した三機は帰投途中不時着した。

翌八日には、陸攻二十七機が零戦十四機に掩護されて出撃し、駆逐艦一隻中破、輸送船一隻沈没の戦果を挙げたが、対空砲火を浴びて陸攻十八機、零戦一機が撃墜された。

載機の行動圈外に退避することで焦り、ガ島ルンガ岬泊地で荷上げを急いでいる二十三隻の輸送船団攻撃の機会を逸してしまったことは残念至極であった。

報道班員として三川司令長官座乗の旗艦鳥海に同乗した作家丹羽文雄は、この夜戦を『海戦』という作品にして発表しているが、その文中で敵艦沈没の様子を、「よく燃える。やすやすと燃えるものだと呆れる。木か紙でつくった軍艦のようなものだと形容しても嘘ではなかつた」と記述している。

この殴り込みの夜戦に勝利したことで氣をよくした陸海軍首脳部は、アメリカ軍を甘く見て、連合艦隊司令部は空母を出動させて機動部隊の殲滅を図り、陸軍はガ島奪回作戦を企て、ミッドウェー攻撃部隊としてグアム島に待機させたままだった一木清直大佐指揮の歩兵第二十八連隊二千四百人を送り込むことにしたので、海軍も安田義達大佐司令の横須賀特別陸戦隊六百十六人を出動させることにした。

八月十八日、一本支隊の先遣隊第一梯団九百十六人は無事タイボ岬に上陸した。

一本大佐は、アメリカ軍は二千人の兵团と報らされていたので、二対一なら造作なく勝てると踏み、後続の第二梯団の到着を待たず、二十一日に飛行場奪回の猛攻撃に出た。

れた。

話は逸れるが、明日知らぬ身の搭乗員たちは、毎日夕食時に酒盛りをして気勢を擧げる。そして、宴席になると車座になつて肩を組み合い、蛮声を張り上げて齊唱するのだ。

そんなときによく唄われるのが『艦爆乗り』（作者不詳）だが、その歌詞のなかに、

ソロモン群島ガダルカナルへ

今日も空襲大編隊

翼の二十ミリ雄叫びあげりや

落ちるグラマン シコルスキー

というのがあるのは、このときのことを詠んだのではないだろうか。

余談はさておき――。

この日、ガ島とその近海に犇めいているアメリカ艦隊と輸送船団に対し、新編成されたばかりの三川軍一中将（海兵三十八期、海大二十二期）率いる第八艦隊が長驅夜襲で殴り込みをかけることになった。

一六三〇、甲板上の一切の可燃物を投棄してラバウルを出港した三川艦隊は、サボ方面に赴き、二二四〇（ころから開始した夜戦で重巡洋艦四隻撃沈、一隻大破、駆逐艦も二隻大破する戦果を挙げたが、夜明けまでに空母搭

ところが、敵は案に相違の大兵团だったので、テナル河の白兵戦で脆くも敗れて全滅してしまったが、一木大佐は自決した。

そうとは知らぬ一本支隊第二梯団は、二十三日〇八〇〇輸送船三隻に分乗、田中頼三少将（海兵四十一期）率いる第二水雷戦隊に護衛されてガ島に向南下したが、途中敵哨戒機に発見されたため、そのまま南下しているとみせかけておいて急反転し、北上退避した。

翌日は空襲警戒で日中の行動を避け、二一一二第三十駆逐隊に護衛されて出港した一本支隊第二梯団は、二五〇〇五〇〇ガ島北方百五十浬（約二百八十キロ）まで迫った。

〇六〇五上陸準備で慌ただしい第二水雷戦隊旗艦軽巡神通と輸送船団を空母エンタープライズの艦爆が襲いかかり、金龍丸が大損傷を受けたので第二梯団の敵前上陸作戦は中止され、ショートランドへ回航された。

一本支隊第一梯団がガ島に上陸する二日まえの八月十六日、連合艦隊司令部は、山本長官直々の指揮で敵機動部隊を誘き出して潰滅し、陸軍のガ島奪回作戦を成功させる計画を立てて、第三艦隊と第一艦隊に出動を命じていた。

第三艦隊は、ミッドウェーで潰滅した一航艦の代わりに新編成された翔鶴、瑞鶴、龍驤の三空母を中心とした機動部隊で、指揮官は真珠湾、ミッドウェーのときとお

なじ南雲司令長官、草鹿參謀長の組み合わせであった。

第二艦隊は、ミッドウェーのとき、サイパンから出撃する陸海軍合同編成上陸部隊の輸送船十六隻を護衛する任に当たつて果たせなかつた、司令長官近藤信竹中将座乗の戦艦陸奥を旗艦とした強力艦隊で、このたびは第三艦隊の前進部隊の使命を帶びていた。

南雲機動部隊（第三艦隊）は、受命当日ただちに柱島泊地を出港したが、近藤前進部隊（第一艦隊）は、翌七日連合艦隊旗艦の戦艦大和とともにトラック島へ向けて出港した。

八月二十日、連合艦隊司令部からガ島北方海面への進出を命ぜられた南雲機動部隊は、トラック島寄港を変更してそのまま南下し、すでにトラック島に寄港していた近藤前進部隊もただちに出港しておなじく南下した。

二十三日、両艦隊はガ島北方四百浬（約七百四十キロ）まで南下したところで偵察機を発艦させて索敵したが、発見出来なかつた。

このとき、サラトガ、エンタープライズ、ワープス三空母を擁したアメリカ機動部隊は、ガ島東方百五十浬（約二百八十キロ）にいた。

翌二十四日、〇二〇〇空母龍驤中心に重巡利根、駆逐艦時津風、天津風で編成した南雲機動部隊支隊がガ島攻撃の南下を開始した。

支隊を編成して、本隊より敵地に接近させたのは、空

てきた。

集中爆撃されて修羅場と化し、満身創痍になつた龍驤は、夕刻ついに沈没した。

いっぽう、南雲機動部隊本隊は、この日〇四〇〇に南下を開始した。

一二〇〇、重巡筑摩の零式水偵が、

「敵大部隊見ゆ。われ戦闘機の追撃を受く」

と打電してきて消息を絶つた。

南雲司令部は、その位置を推定すると、ただちに閑衛まもる少佐を指揮官にして第一次攻撃隊を発艦させた。

瑞鶴から零戦六機、九九式艦爆九機、翔鶴から零戦十機、九九式艦爆十八機、九七式艦攻四機、総計四十七機の攻撃隊は、南下して一四二〇にアメリカ機動部隊を発見した。

フレッチャー少将のサラトガ、キンケード少将のエンタープライズ両空母を中心に編成された二十隻の大艦隊であつた。

もう一隻の空母ノイス少将のワブスは、補給のため戦列を離れていた。

攻撃隊は、ただちに突撃態勢に入つたが、グラマン艦戦の迎撃に阻まれ、翔鶴の艦爆六機が撃墜されて氣勢を削がれた。

高度三千五百メートルでエンタープライズに迫った翔鶴の艦爆十機が、集中砲火のなかを急降下ヘリコプターして二百五十

母を誘き出す策であった。

一〇三〇、支隊がガ島北方二百五十浬（約四百六十キロ）地点に達したころ、ラバウルから九七式飛行艇と一式陸攻が索敵に向かつたが、いつまで経つても敵空母発見の報らせがないので、苛立つた司令部は納富大尉を指揮官にして九七式艦攻六機と零戦十五機の戦爆連合隊を出撃させた。

納富隊は、二時間後にガ島上空に達し、ハンダーソン基地からの迎撃戦闘機グラマンF4Fと空戦して四機を撃墜した。

この空爆で艦攻三機、零戦二機を失つたが、「ガ島爆撃成功」を報告することが出来た。

南雲機動部隊支隊は、一三〇〇哨戒機B17に発見されたので、龍驤から迎撃機を発艦させたが取り逃がしてしまつた。

発見されたからには空爆の虜おそれがあるのに、龍驤からなんの防衛指示も出ないので、不審に思つた天津風から、「警戒怠るべからず」と手旗信号を送つたが、応答がなかつた。

はたして、龍驤の位置を突き止めたアメリカ側は、サラトガからSBDドーネントレス艦爆三十機、アベンジャー雷撃機八機の攻撃隊を発艦させ、エンタープライズからも艦爆二十機が発艦して、一五〇〇過ぎに龍驤を襲撃し

キロ爆弾三発を命中させたが、中破程度で止めを刺すにはいたらなかつた。

また、瑞鶴の艦爆がサラトガを襲つたが、命中弾はなかつた。

前述の『艦爆乗り』の歌詞のなかに、

十字砲火の真まっ只ただ中に

俺が得意の急降下ヘルダーフライ

抱いた爆弾だてには持たぬ

なんの巨艦も粉微塵

というのがあるが、相手次第だから、いつもこんな絵に描いたようにゆくとは限らない。

事実、この戦闘での損害は大きく、零戦三機、艦爆十七機、艦攻四機が撃墜され、さらに追い撃ちをかけられて零戦三機、艦爆一機が不時着し、三十四機が海の藻屑となつた。

開戦から僅か一年足らずのあいだに多くの練達搭乗員を失つてしまい、人材不足に陥つてはやくも戦力低下を來したが、さりとて、じっくり練磨育成するだけの余裕はなかつた。

第一次攻撃隊がアメリカ艦隊を発見したころ、零戦七機、九九式艦爆二十七機の第二次攻撃隊が発艦したが、通信状態が悪く一次隊からの報告を受信出来なかつたの

で、ついに機動部隊発見にいたらず、むなしく帰艦した。

いっぽう、ガ島奪回のほうは、一木支隊の失敗のあと、

新たに川口清健少将率いる第三十五旅団が送り込まれた。

八月二十九日、上陸に成功した六千人の川口支隊は、苦戦をつづけていたうちに食糧が底を突いたので、起死回生の斬込隊を編成して九月十二日と十三日に夜襲をかけたが、いずれも銃火器に阻まれ徒らに犠牲者を出すべかりで二進も三進も行かなくなつた。

もはやこれまでと決意した川口少将は、残存兵力をまとめて、十四日に総攻撃をかけて全員玉砕した。

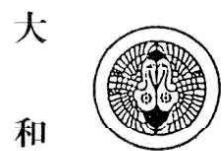
房総半島の二倍ぐらいの面積といわれているガ島に固執する首脳部は、この後も執拗に消耗戦を繰り返して泥沼の様相を呈してゆく。

(つづく)



幕末トライアスロン（第三話）

南部三藩の去就と盛岡藩家老、樅山佐渡の抗戦



南部家
家紋

丸の内向鶴胸に九曜

大和頼人

南部藩という言いかたは南部氏の支配地を総じて指す呼称で、その実は盛岡藩を宗家とし、その同族支配にかかる七戸、八戸の二藩を加えて三藩を指すのである。

南部氏は鎌倉期いらの旧族である。だが、時代を下るとともに同族垣に開き、盛岡の藩祖となる二十六代の信直のころになると、一族の協議により家督の相続を認められるというほど、一族、家臣の相克絶えず、幕末におよんでも、三藩の去就は三態三様の始末を見るのである。

さて、まずは少しく主題をそれるきらいがあるが、南部藩史に拾い、話題の多かった藩主二人ほどについてその人となりを紹介しておきたい。

盛岡藩三代重直は通称権平、山城守を称した。母は会津藩主蒲生氏郷の養妹源秀院であった。江戸に生まれ、幼児より江戸に暮らし、よろず江戸風を好み、封国を卑しみ「僻土」と呼んで憚らなかつた。かれが父利直の遺領を相続したのは寛永九年（一六三二）、時に二十七歳

である。寛永十二年、重直までの三代にわたる築造を経て、盛岡城は完成している。はじめて拠地として三戸から移り、本格的な領国經營を着手しようとする矢先、南部の家にとり大問題が起つた。藩主重直が参勤交代の時期を違えたとの理由で逼塞を命じられたのである。

事実は重直自身の吝意にもとづくもので、単純に時期を間違えたというようなものではなかつた。
(参勤交代などと、愚ではないか、それもわが藩のごときは僻土ではないか、無駄な失費と申すものじゃ)

承知の上で時期を遅らせる意地をとおしたのだった。南部氏の場合は例年四月参府を原則（天保以降不定期）として、盛岡から江戸までは一三九里、宿駅九第一次の行程を往復した。南部氏の一〇万石の格式では各宿駅には伝馬一〇〇疋、人足五〇人が準備されたものだ。奥州街道各宿駅の常備の人馬は二五人・二五疋の規定であったから、盛岡藩の場合は規定の四倍の伝馬と二倍の人夫が用意されたことになる。

享保六年（一七二二）、幕府の示した供人数制限令によると、一〇万石以上は馬上一〇騎、足軽八〇人、仲間人足一四〇人五〇人と規定されている。したがって南部氏の参勤交代には一〇万石の格式の場合でも、二五〇人前後の供を従えて上下し、ほかに伝馬一〇〇疋と馬ひき一〇〇人、人足五〇人を要したことになる。実際に供奉した人数は江戸中期で五〇六〇〇人、文化五年（一八〇八）、二〇万石に格上された時代になると、規模が改正されて三〇〇人程度となつた。

盛岡藩では原則として藩士などの江戸往来については一二日振り（一一泊一二日）と規定していたが、文政五年からは一三日振りに改められ、また下つて文政八年の時代になると参勤は四月下旬から、五月中旬までの間に盛岡を発駕し、一五日間の日程で江戸に到達するよう計画されていた記録が残されている。

南部重直はことさら、承知の上で出発を遷延させたのである。駄々子よろしく、一流の反骨にもとづいた挙であった。かれはこの時、逼塞に止まらず、江戸と京の賄い料を没収されている。

幸い、春日局や天海僧正の仲介により寛永十四年十二月には赦されるが、南部が陸奥の名家であるかどによるところが多分にあり、以後、それでもなお、五ヶ年江戸での謹慎生活を強いられることになった。

重直の領国經營の実際は寛永二十年以後に本格化を迎

える。南部藩の家中は中世いろいろの影をひきずり、一門や旧国人出身の門閥による譜代層が藩政の実権を握っており、これに対し重直は国主としての実権の確立を急いでいる。譜代層の意見を無視し、新規の家臣を召し抱えるなどの専制体制を固めていった。

万治三年（一六六〇）には家臣を削減するために、目を閉じて筆をとり、五〇〇石以下の家臣四十二人の名前に墨を引き、いっせいに暇をとらせるという強硬手段をとった。このために家臣らはこの暴挙を「墨引き人數」と呼び大変な動搖を呼んだ。その四年後、重直は繼嗣を定めぬまま急死する。寛文四年（一六六四）九月のことであった。あるいは謀殺という疑いもあるが、真相は不明に付され明らかではない。

はからずも重直の繼嗣を定めぬままの死去が八戸南部藩の分立という事態を招くことになる。

盛岡藩主の繼嗣として有力な候補としては重直の次弟で家臣の列にあつた七戸重信と中里直房が挙がつた。長幼の順では重信であったが、この時もはや四十九歳、末弟で若年の直房を推す意見も強く、その上藩内の実権争いも絡んで、家中対立して分裂の危機さえ孕むにおよんで、幕府は仲裁に乗りだし、二人の兄弟に遺領を分与することでの解決をはかった。

かくて南部藩は八万石に減領となり、重信が相続し、

別に八戸藩二万石を直房を藩主として分立させるという裁定であった。南部氏の旧家であることを尊重し、継嗣の定めなく改易となるべきを避けた幕府の温情による採決であった。いらい盛岡の南部宗家を呼んで「大南部」と一般に呼ぶようになった。

だが、封土分断の処置をうけたことに対する怨嗟は宗家たる「大南部」側にくすぶり、醜い両家対立抗争のはて、ついに八戸藩主直房謀殺におよぶのである。

そうした渦中にせめて拾える一掬の挿話として、ここに直房の嫡男、八戸二代藩主、南部直政についてふれておきたい。八戸藩の体制は寛文十一年までに、この人により整えられた。

他方直政は文筆にすぐれ、江戸藩邸に「文林館」という学問所を設け、「南部家伝旧話集」五巻を編纂させ、またその遺文集「文林全集」には林大学頭が序文をよせるなど、その豊かな学才はうかがうに足り、こうした教養が認められたものか、五代将軍綱吉は貞享四年（一六八七）直政を御詰衆に登用してゐる。ついで、元禄元年（一六六八）九月御側衆、同年十一月、御側用人に昇進して綱吉の側近に侍することになった。外様で二万石の小大名としてこの登用は異例のことだった。この登用の後間もなく、同年十一月、朝鮮國から献上された屏風があり、これを開かぬさきに、その表書きから内容の詞意

をかれが解説して国辱を免れ、その功に対し五万石加増の台命があつたが、これを辞退したというエピソードが伝えられる。

直政は翌元禄二年一月、病氣のため側用人を辞退しているが、この病氣については宗家盛岡藩からの手入れがあつたという憶測もある。その後元禄十一年、直政は病状危篤となり、盛岡の重信の四男右近（通信）を養子として幕府の許可を得た。翌元禄十二年直政は三十九歳で世を去り、養子通信が襲封し、盛岡藩との反目は解消されたが、直政の死についても毒殺説が囁かれた。

なお、南部三藩の一に七戸藩の存在することを補足しておかねばならぬ。盛岡藩主第五代南部行信が弟正信に新田五千石を元禄七年（一六九四）分知し、寄合旗本に遇された。さらに文政二年、宗家十一代の利敵により五代目信燐は減米六、〇〇〇石を加増され、万石を超えて諸侯に列し、播磨守に任せられ江戸城柳間詰となつた。以後の歴代は参勤交代のない定府の大名であった。八戸藩とは異なる分家筋だから、盛岡新田藩の異称をもつて呼ばれ、宗家との軋轢は見ていない。

さて、幕末の政情不安に際し、三藩はどう対処したかを見ていく。この期にあたつて藩情のもつとも微妙を見たのは八戸藩であった。それというのも当代の藩主

南部信順が薩摩藩主重豪の五男で、天保十三年、養子に入った人だからだ。この縁組は軍備を急ぐ薩藩が鉄鋼資源豊かな南部領に着眼をおく親密な交易関係があつての政略が推測される。ともあれ信順としては宗家に気をかねると同時に東北各藩と歩調を合わせ、新政府の出方にも敏感に反応しなければならないのだった。難局を乗り切るためににはまず藩論の統一がなにより必要であった。

鳥羽伏見敗戦の報の翌日、八戸に出陣命令が届いた。（江戸が戦場になる、しかも攻め上つてくる先鋒は薩摩、そして長州軍であるとすれば、父祖の軍と干戈を交えねばならぬ仕儀じゃ、なんとする）

信順はひとり誰にも漏らし得ぬ苦惱を抱え、家老吉岡左膳を盛岡の宗家へ派遣し、去就いすれを是とするかを尋ねている。この時、この場合の判断はもちろん困難であつたが、宗家に対する伺いの使者を立てたものだ。宗家に対する儀礼という配慮によつて、養子として八戸へ入夫の身ゆえの気がねであった。

江戸出陣の命に応じる姿勢を示しながらも、実際の行動は慎重であった。三月に入つて奥羽鎮撫総督府が置かれて、東北へ向けて進発するという情報が入り、安閑としてはいられなくなる。三月八日、八戸藩兵は逸見屯、船越鞍負。中里八郎右衛門の率いる三隊に分かれ、江戸へ向けて進軍する。

江戸へ近づくにつれ、古河以南では旧幕軍と新政府軍

総督からの庄内へ出兵を命じられたことを報告する用務をもつて盛岡へ派遣された吉岡が白石の会議に参加するはずがない。後から議定書に署名したものであつた

ろう。盛岡藩から事後の要請で後から白石へ赴いたに相違ない。同盟の決定をうけて八戸藩兵は庄内征伐軍を藩境近くに停止させている。

同盟が次第に会庄救解嘆願から「反薩長」の傾向を深めていくなか、薩摩藩出身の藩主をいただく八戸藩では立場がますます難しくなってきた。江戸から戻った佐藤理右衛門から江戸以北の情報を入手し状況を把握していくのであった。

五月になって藩は岩泉大七という若者に同盟への出役を命じている。とかく藩内統制に問題となる人物を選んだ派遣だった。

「服装については仙台・盛岡では土分はみな筒袖だん袋（戦闘服）を着てゐるそだが、自分はなにを着ていけばよいのか」と岩泉が藩老に尋ねると、

「仙台までは平服（長袖羽織袴）で行け、仙台に着いたら情況を見て良きようにして判断せよ」と細かく指示を与えていた、つまりは、藩としては從来どうりの姿勢を保ちながら、どちらの色も出さず情勢をうかがうことのほうが賢明と判断したことによつている。この姿勢は藩内に徹底され、當時流行っていた「物語」

が衝突していく、道を阻まれ、関宿から利根の水路で江戸に入った。八戸を発つてから二十日が過ぎていた。

江戸では京都弁事事務所に指示を仰いで、兵をどう進めるかを尋ねたのだが、答えをもつた使者が到着したころ、江戸城明け渡しの会談が進められようとしていた。京都の指示は奥羽鎮撫総督府の指揮下に入るようとの命だったので、藩隊はいったんの帰国を願い出て許された。前途は知らずまだそのような余裕の情勢が幸いしたと言える。帰路では各所で戦争の混乱を目あたりにすることになった。遠からず東北の地でも戦渦に巻き込まれるだろうと、八戸藩兵は思い知ったはずである。

一方、東北諸藩は新政府の命するまま、会津、庄内討伐軍を出したものの、鎮撫総督府の会庄討伐には疑問をもつものが多かった。

五月九日には鎮撫総督九条道孝の使者が来て、新庄まで出兵せよと命じてきた。東北諸藩が総督府の命に離反しはじめたこと知つたあせりであった。

そんな折、会津藩が弁疎謝罪の嘆願書を出したことから仙台、米沢藩が中心となつて会津救解の嘆願を協議して、白石で諸藩連盟の嘆願を決定するに至つた。ところが、この嘆願は総督から拒否され、諸藩はふたたび白石に集結して会庄討伐兵の撤退を決めた。この動きが奥羽越列藩同盟結成につながっていく。

八戸藩では家老の吉岡左膳が同盟に署名しているが、

髪に紛らわしき細月代」の禁止が行わされている。つまり当時の過激派の風俗にかぶれてはならぬという達示なのであった。

船越寛という開明的な藩士が提出した建議書も受領はしても握り潰し、藩論を主導しそうなものは他領に使者として出して國元にはおかない方針をとるなど、穩便保持政策を続けた。難しい局面のこの時期、藩論が分裂するようなことがあれば命取りになることをひたすら恐れたのである。

六月十七日、九条総督に従つていた佐賀藩の兵士約二〇〇名が盛岡から八戸にやつてきた。八戸から軍艦孟春で箱館に行く予定であったが、暴風雨のため、孟春は白銀海岸に座礁してしまつた。藩兵と孟春の乗組員は八戸に足止めのかたちとなつたが、この時の八戸藩の対応は丁重であったため、のちに好印象をあたえるのに役立つことになった。

七月に入り、秋田藩、弘前藩が相次いで同盟を脱退する。この頃、筆頭家老の川勝内記は秋田に滞陣していた九条総督を訪ねている。この時、すでに新政府寄りの立場をとることにしたと思われる。

その後再度庄内追討を決定し、盛岡藩から両藩提携の勧奨の任務を帯びて八戸に來ていた秋原勇馬を藩主自ら労をねぎらい盛岡に体よく帰している。八戸藩はようやく新政府寄りの態度を表明するのである。

皮肉なことに、東北戦争が実質的にはすでに終結をみてから、藩情降伏に急転した盛岡藩兵と混成部隊をなしていた八戸の一小隊は野邊地に駐屯し、弘前藩兵の攻撃をうける。この場合戦功をあせつた弘前藩の仕掛けた無用の戦闘とされるものだったが、同じ「恭順」を表明した藩同士が戦う羽目になった。八戸藩は銃撃隊を側面に配置させ、弘前藩兵を攻撃してこれを退けた。この戦いの責任者として八戸藩は隊長の苦米地又兵衛を謹慎させて、秋田に滞在の九条総督に謝罪を申し入れている。この素早い対応により、八戸藩はお咎めなしとされる。

こうして八戸藩の戊辰戦争は完全に終わりを告げた。ただ一人の武勇の士も尽忠の功臣、非業の戦死者の話題も生まずに嵐は過ぎ去ったのだった。なにも目立たなかつたことが、結果的によかつたのだが、これを日和見的なご都合主義として見るか、生き抜くためのしたたかな手腕の冴えと見るか、小藩の八戸の場合としては最善の道を全うしたものと言えるだろう。

七戸藩の戊辰戦争開戦時の藩主は南部信民である。文久三年、宗家から陣屋地として三本木村に二万坪を支給するという届けを幕府に提出したところから、名実上の藩の体裁が整えられた。江戸定府は宗家の代理の意味合いもあり、数寄屋橋御門番などを勤めるうちに戊辰の戦乱を迎える、陣屋建築も中断の止むなきに至る。

慶応四年三月、いったん国元に帰った信民は会津征討軍応援の指揮官となつたが、宗家の盛岡藩が奥羽越列藩同盟に加盟したのをうけて、これに同調した。ところが戦況は盛岡藩には不利となり、九月にはほぼ降伏という情勢になつた。

そうした際に八戸の場合に同じ野邊地戦に遭遇する。九月二十二日、野邊地には七戸三小隊の一八〇名が駐屯していた。奮迅隊と呼んだ安宅正路の隊、発揮隊と云い野邊地律巳を隊長とする隊、そして他は遊軍隊付きとして新渡戸伝などの將士であった。弘前藩兵が攻めこんできたが、盛岡、八戸などとの連合南部勢は側面攻撃に成功して逆に弘前藩兵を撃破した。比較的に少なかつた南部勢五名死者の中で三名までが七戸藩の者であった。このことはかれらが前線に配置されていたことを意味する。支藩という立場にあり、小藩の宿命と言えるのである。

戦後は宗家とともに奥羽越列藩同盟に加担したかどにより、減封の処置をうけ、七戸は一〇〇〇石を召し上げられ、信民には隠居の沙汰が下つた。嗣子のなかつた信民だったが、辛うじて宗家藩主の弟の信方を跡目とする申請は新政府もこれを認めた。

宗家盛岡藩の戊辰戦争開戦時の藩主は南部利剛(としひさ)であった。この人の墓所は東京都文京区音羽の護国寺にある。

歴代は盛岡であるのに所を異にし、また夫妻並ぶ二基の比翼、巨石の石柱型であり、大方の大名諸侯の五輪塔といった墳墓形式とは異なっている。文政九年生まれで明治二十九年を没年として七十歳。ご一新による東京、やがての東京の开花期をその晩年に暮らしたことによる派手であろうか。嗣子利恭の墓も同所、こちらは安政二年生まれ、没年明治三十六年、四十八歳、後に伯爵とあって、やはり巨石の石柱、二基、比翼である。この稿を起こしてからほどなく、はからずも展墓の機会を恵まれた。まさにやら奇縁を覚える経験だった。

慶応三年十月、藩主利剛に上洛せよという幕命があった。藩主病中として家老三戸式部が上京した。晴天の霹靂とも言うべき将軍徳川慶喜の大政奉還の宣言である。まさに驚天動地の事態である。

翌年二月、さらに家老樺山佐渡、用人目時隆之進、目付中島源蔵、佐々木直作らが上京する。家老樺山佐渡は藩主利剛の従兄弟にあたり、強硬な佐幕派で、積極果敢の性格であった。上京後は諸藩の重役と交わり、意見を交換し、激変する上方の情報入手と情勢の把握に努めていた。

「奥羽皆敵」とする東軍の參謀世良修藏を誅殺する出来事いらい、諸藩の硬化する一方に、既に触れた会津藩が仙台藩を通じて降伏謝罪の嘆願するにおよんで、仙台藩は米沢藩と協議し、總督府にとりつぐとともに奥羽諸

藩に檄が飛ばされ、閏四月十一日、仙台・米沢・二本松・棚倉・亀田・中村・山形・福島・上ノ山・一ノ関・藤井・三春・南部の十三藩が白石城に会合し、同盟の機運に動いた。盛岡藩では野々村真澄が出席している。

仙台藩の叛意を知った九条総督以下の一五〇〇の兵は盛岡藩に来たり、総督は本誓寺、醍醐副總督は東顯寺に宿舎をおき盛岡藩を説得した。

しかし盛岡藩はまだ態度を確定せず、総督の申し出でによって、軍資金一万両は出したが、薩長兵の城下入りは拒否したので、総督以下は秋田藩に移動した。これにしたがい秋田藩は九条総督の申し入れをのんで官軍派に組み込まれ、西軍はここを拠点として、奥羽鎮撫の画策をすすめ、やがて津軽をも味方とすることに成功した。

ここにいたり、奥羽同盟は秋田、津軽の違約を責め、秋田戦争の勃発となつた。しかし盛岡藩は秋田侵攻には慎重で、藩内は二派にわかれ去就いざれかの論争を続けていた。革新派と目される家老東中務(ひがしなかつかさ)を主とし、野田丹後、安宅正路、折笠四郎、石龜左司馬、目時隆之進、中島源蔵、佐藤昌蔵らがあり、保守派は樺山佐渡を筆頭として南部監物、野々村真澄、米田武兵衛、平山郡司、向井蔵人といった人々であつた。

この際に樺山佐渡にまつわる戊辰戦争秘史とも言うべき事実が伝えられる。それは京にあった佐渡が岩倉具視と会談する機会があり、策謀家で知られる岩倉から、

「薩長の専横は思いのほか、はなはだ憂慮に耐えぬものがある、幸いご貴殿に会うことを得たはまことに千載の一遇と申すべし、東北の雄藩たるご家中を代表さるそなたの一臂のお力をいただけまいかかの徒輩たちの抑えは奥羽の諸藩同盟の軍事力をもつて抑止するが、もつとも時宜に適するものと考える。やがて帰藩の上は心してのお働きを期待したい。いかがであろうか」

「防長回天史」はこれを檜山の構えた詭弁としつつ、重大な秘事を記録している。岩倉が藩主導の新政府に危惧を感じ、奥羽列藩の力を結集させ、薩長と戦わせようとするかかる意図があつたとしても頷けるいきさつである。あるいは真実かも知れぬ。佐渡にとっては驚くべき囁きであり、巧言に醉わされたとして無理はない。

六月四日、檜山佐渡は固い決意をもつて帰国の途についた。用人目時は強く反対の意見で、脱藩して長州藩邸に身を投じ、目付中島源蔵は佐渡の意志の固いことを知り、藩の滅亡を見るに忍びずと腹を切つて果てた。戊辰の風雲のはざまに、士道をそれぞれの思いをもつて貫く悲劇がここにあつた。

佐渡は帰国の途次、仙台に寄り、家老但木土佐に会い盟約を確認し、七月十六日、盛岡に帰国した。

この時点においても抗戦か恭順か藩論は統一されておらず、去就は決まっていなかつた。七月三日の重臣会議でも激論のすえ、まとまらず、佐渡の帰國を待っていた

状態であった。

佐渡は帰国の翌日、城内に重臣を集め、烈々持論を吐露し、列藩同盟の約をあくまで固守し、脱盟した秋田久保田藩討伐の決行を宣言した。京阪の最新情報を持ち帰った佐渡の決断に、異論を唱える人物は一人もいなかつた。ただ一人この決定に危惧を抱いたのは佐渡の政敵、東中務であつた。

佐渡はただちに戦備を急ぎ、鹿角口を主方面とし、零石を第二方面、弘前藩の牽制として野辺地に軍務局を置くという三方面軍を編成した。

七月二十七日、総指揮にあたる檜山佐渡は兵二〇〇〇を率いて久保田の藩境、鹿角郡花輪（現・鹿角市）に出陣した。

「まず比内平野の中心大館城を占領し、米代川添いに西に下る、敵の補給拠点の能代の港を攻略し、もつて弘前藩を北へ封じこめる」

佐渡はこの作戦に強い自信をもつて臨んだ。

八月九日、葛原口、新沢口、十二所口、別所口の四道から進撃を開始した。

すでに前日の八日には久保田藩領十二所の守将、茂木筑後に軍使をおくり、宣戦の通告書を手渡した。筑後は秋田表へ報告する猶予が欲しいと申し入れたが、これを拒否し、間髪をいれず、侵攻を開始した。

十日、十二所館を攻め立てた。筑後の隊は総勢二〇〇

余、装備も火縄銃主体とあり、防戦しきれず、戦闘はわずか三時間、昼過ぎには館に火を放ち、自焼するとともに退却し、大館城主佐竹大和に急を知らせた。

同日夕刻には佐渡自ら率いる盛岡軍は扇田（大館の東南六キロ）まで進撃し、神明社を本陣として夜営した。十二日、大館兵の応援を得た筑後側は反撃に出たが、兵力の勝る盛岡軍にふたたび敗れ、引き上げた。

二十一日、盛岡軍は本道・葛原・新沢口の三方向から敵の牙城大館への進撃を再開した。翌日、明け六つ（午前六時ごろ）池内・餌釣・柄沢の三方面よりは砲撃を加えた。

城外は山王台方面を防衛ラインとしていた佐竹勢にいたまち死傷者が続出した。浮き足立つたところに盛岡勢が肉薄、佐竹勢は総崩れとなつて退却した。市中は火災を起こし、折からの烈風があおられ、約三〇〇〇の民家はわずか二時間で焼失した。焼け残つたのはわずか二戸を数えるのみと伝えられる。

佐竹大和は大館城を自焼して綴子（大館の西方一三キロ）に脱出した。

「大和は部下を率いて必死奮戦すといえども、孤軍ささうるに能わず。是日辰刻（午前九時ごろ）遂に大館城を自焼し綴子村に退く」『秋田藩戊辰戦記』

秋田側の戦死者二名、手負い四一名。盛岡側戦死者はわずかに砲手一名、手負い二名。

両軍の兵力はこの場合、ほぼ同等にもかかわらず、このような大差は兵器の優劣によるものであつた。佐竹勢は五挺のケーブル銃以外はすべて旧式火縄銃だったというから驚くに值しよう。

しかし、佐渡の快進撃もここまでだつた。一週間後、新式装備の佐賀藩兵の応援を迎えると、立場はたちまち逆転する。

大館城を攻略した盛岡軍は米代川沿いに、羽州街道を能代を目指して進撃し、二十六日、今泉に達した。だがこのスピードはあまりにも遅かった。

秋田にあつた総督府は背後から迫り来る盛岡軍の脅威に対し、急ぎ対策を立てる。西軍の下参謀大山格之助は佐賀藩の隊長、田村乾太左衛門を急ぎ呼び寄せた。

佐賀藩の隊長田村は部下九〇名と肥前小城藩隊長の田尻宮内率いる兵五〇〇とともに応援にかけつける。二十七日、新式装備の佐賀・小城藩と佐竹・茂木勢との総兵力一四〇〇名の強力な連合軍が誕生した。

二十九日、濃霧の朝、盛岡軍の頭上に敵の新式長射程の大砲弾が炸裂した。西軍の反攻開始である。盛岡軍は何事が起つたのかよくわからないまま、大砲二門をうち捨て、あわてて退却した。

九月二日、西軍は激しく追撃にうつり、川口で敗れた盛岡軍は夕刻、大館城に引き上げた。一進一退、攻防戦は終日続いた。

五日朝、冷え込みが厳しく、戦場は真っ白い霧に覆われていた。この日、西軍は大館城奪回の意気込みと、新たに弘前兵二小隊の応援が加わり、徐々に盛岡軍を圧迫した。

盛岡側は兵力、武器、弾薬の補給が続かず、その夜、佐渡は城内に諸将を集め、軍議をひらいたが、沈痛の色を隠せなかつた。

「敵兵日々多人数に相成り、味方兵士追々疲れ、他に応援の兵も之無く、葛原口へも敵相回り、新沢口一方空き居り候事。玉葉もはや明日の合戦には、一挺へ十七発ばかり外に之無、当惑の次第」（『秋田藩討入之日記』）

六日、やむなく佐渡はひそかに大館城より撤退した。この日、西軍は総攻撃の予定で進撃したが、一兵も見えず、見事、佐渡に肩すかしを食つた。

自藩盛岡領に後退した佐渡は、態勢を立て直し、十二所を奪回すべく、たびたび攻撃に出た。そして盛岡隊は国境防衛戦に最後の闘志を燃やした。これには敵将の田村乾太左衛門も攻めあぐみ、戦線は膠着状態になつた。

九月二十日、早朝、花輪の佐渡のもとに突如、無念な

報せがもたらされた。それは藩主利剛よりの一通の奉書であった。

「米沢、仙台の両藩すでに降伏し、奥州すべて謝罪に決した。したがつて此方も右に準じ申出含みの事。」

万事休す、佐渡は断腸の思いを噛んだが、藩主の命に

は逆らえない。かれはやむを得ず向井藏人、桜庭祐橋らと協議の上、秋田側に降伏ではなく、休戦の申し入れを行うこととし、この日の午後、参謀の沢出善平に三人の捕虜を伴わせ、申入書を持たせた。

二十二日、藩境袈裟掛で会見の後、二十五日、十二所

において秋田藩の家老三戸式部が総督府参謀の前山精一郎、田村乾太左衛門、佐竹大和らに取り次ぎ、降伏謝罪

状を提出した。

だが、応接に当たつた前山はこれを却下し、次のように三条件を提示した。

一、藩主利剛自ら軍門に降り、謝罪降伏すること。

二、首謀者橋山佐渡を禁固して差し出すこと。

三、軍資金七万両を申しつけること。

厳しい条件提示であった。急ぎ盛岡に帰つた式部は利剛に復命した。

対応する藩議は降伏使節団を編成することに決定、病氣の利剛に代わって嫡子彦太郎（十四歳）を代理とし、後見に南部美作が同行する。佐渡には三戸式部、戸来楽民、目付島川瀬藏、小姓大田小一郎が従つた。

十月三日、約による十二所に到着したが、参謀前山は秋田に赴き総督九条道孝に会い、直々に嘆願せよと命じた。降伏使節はさらに五日、久保田城下に着いたが、総督の一行は仙台に向かって出発した後であつた。

七日、横手で追いつき、謝罪書を手渡したが、九条總

督は盛岡藩の反旗、錦旗に対する発砲を責め、容易に許そうとはしなかつた。藩主自ら出頭せず、無冠の代理に対するこだわりを多分に底意にもたれた結果だつた。

十日になり、ようやく受理されたが、その間、無腰の彦太郎は寒風の吹き荒ぶ門前に平伏し、三日の間待ち続けたのであつた。奥羽列藩同盟中、最後の降伏だつた。

この際のいたいけな少年彦太郎は後年の利恭である。盛岡藩存亡の危機に会い、やがて利剛に代わり藩主の座に就くが、廢藩置県に至る数奇を生きる君公となつた人である。

同じく十日、盛岡は正式に開城となつた。武装解除して西軍に渡された武器は、大砲一八六門、和洋小銃六六三八挺、弾丸一万九一八発と記録されている。

列藩同盟を守り、庄内藩とともに最後まで戦いを續けて、南部武士の意地をみせた盛岡藩の戦死者は一五〇名、負傷者二三〇名であった。

佐渡はそのまま禁固となり、東中務が蟄居を解かれ、政務にあたつた。

さらにもう一月、藩主親子と「奸徒重罪の者」三名、権山佐渡、佐々木直作、江幡五郎は東京に送られ、軍務局で取り調べのうえ、芝金地院で謹慎を続けた。

明治元年十二月十七日、盛岡藩は二〇万石を政府直轄地として没収され、旧仙台藩家臣片倉氏の白石城を居城とし南部彦太郎が転封となつた。居住地を失つた家中の

明治二年、奥羽越諸藩叛逆の首謀十一人について刎首ふんしゆを決定されたが、佐渡のみは五月二日東京を発ち、六月七日盛岡へ護送、市内報恩寺へ移された。藩の請願が温情をもつて許されたのだ。そして藩の責任を一身に背負い、從容として切腹した。介錯は二十三歳の若者江釣子源吉。戸田一心流の刺客であり、佐渡の愛弟子だった。

南部士魂を貫いた佐渡の辞世である。（うつらぬものは）の下句に佐渡の万感を伺える。時に三十九歳だった。

権山佐渡の靈は盛岡市聖寿禅寺に葬られている。

南部士魂を貫いた佐渡の辞世である。（うつらぬものは）

花は咲く柳はもゆる春の夜に

うつらぬものは 武士の道

泰山木（九）

一紙透小太郎の一生一



紙透寛夫

第三章 朝鮮での思い出

一 会寧（現ホエリヨン）

現在の会寧は、一二一の資料によると、商工業都市になっているようであるが、当時は軍隊の街であった。

会寧停車場前の広場を起点とし、大通りが、くの字なりに曲がって伸び、突き当たりが練兵場であった。左側には丘陵が続き、右側には会寧川が、ゆうゆうと流れている。停車場の近くには、警察、グラウンド、病院、商店が大通りの左右に並び、さらに進んで行くと、小学校、神社、旅館、飲食店などがあった。その先の左右には城に囲まれた兵営が、ずらりと並んでいた。

父の勤めていた会寧憲兵分隊は、大通りの左角にあり、

裏、すなわち背中は、すぐ丘陵につながり、そこに官舎がひな壇のように中腹まで建っていた。その一軒に私たち家族は住んでいたのである。

この官舎と内地（本州）の住いとの違いは、畳敷きのほかに、オンドル（朝鮮語）の部屋があつたことである。オンドルは、たき口で火を燃やし、床下に設けた煙道に煙を通して床を暖める暖房装置であるが、寒い間、私たち子供は、この部屋で遊んだ記憶がある。

憲兵隊の構内には、別棟として剣道場があつた。街の人たちに混ざって、子供も稽古に来ていた。

「寛夫も、剣道を習ったら」

父に勧められて、私も通うことになった。古いアルバムに、剣道着に袴をはいて竹刀を持った、私の美少年剣士振り？の写真が貼つてあったが、その出で立ちで、よく稽古に行つたものである。

ある日道場の真ん中に、父が立っているではないか。

「今日は、紙透先生が、ご指導下さいます」

司会者が言つたので、私は驚いた。順番に紙透先生と手合わせするのであるが、私の番がきた。

まず、正眼に構えて、父の小手を打とうと思ったら、父は私の面を打ってきた。頭にずしりと感じた。なんと最も、照れ臭いものがあった。

父は昭和十年四月十一日、建武館長・大日本武徳会剣道範士・大嶋治喜太から剣道初段を允許されたのが、そのころのことだったと思う。

憲兵隊の左隣りには、陸軍衛戍病院があった。ある日所在無く、官舎の庭で、ぶらぶらしていた私は、目に触れた小石を拾つて、庭に据えられていた大きな石を目掛けて、力一杯投げ付けた。その途端に、小石が真っ二つに割れて、跳ね返り、その一片が私の額を直撃した。

（痛いッ！）

と感じた瞬間、顔が血でぬるっとして、たちまち、着ていたランニングが真っ赤に染まってしまった。私の泣き声を聞いた母は、部屋から出てきて、とっさに隣の衛

戌病院に私を連れて駆け込んだ。軍医が手当てしていると、そばに付いていた看護婦が、「傷は浅いぞ！名譽の負傷だ！」と、言つた。そのうちに手当てが終つたら、
「泣くんじゃないよ！男の子が」と、看護婦は、私を叱り、母の方に目を遣り、微笑みを浮かべながら、
「血を見て、びっくりしたんでしょう。もう大丈夫ですよ」と話していた。

私も、ろくなことは、しなかつたようである。

夕方近くなると、その衛戍病院の隣にあった。歩兵第七十五連隊からは、よく、軍歌の合唱が聞こえてきた。そして夜になると、就寝ラップだから、消灯ラップだからが、鳴つた。子供心にも、なんとなく物悲しい気持になる、あの消え入るような、旋律を聞いたものである。

父も、きっと、初年兵時代を思い出した時があったのではないか。私は、まだ起きていた夜は、（もう寝る時間だな）

と思って、寝床に入ったものである。

少し、日差しの強い日であった。母の買い物に付いて行つた時のこと、大通りは賑やかであった。歩いている

と、向こうから、小さな足をした人がやって來た。

（はて、なんだろう？ 子供ではないらしい）

私は、近付いて來たその人の、足の爪先から、徐々に目を上に移して、頭の天辺までをじろじろと見た。足は子供のように小さいが、上体はおばさんだったので、びっくりした。履いている靴から、着ているチャイナ服まで、黒尽くめで、柳腰。子供心に人品卑しからぬ満州国の貴婦人かと見受けた。心なしか痛痛そうに、よちよち歩いているようであったが、私の思い過ごしか、表情は明るく、連れと笑いながら過ぎ去つて行つた。

あとで、あれは纏足だったと知った。小さい足が美人の条件とされて、女性が子供のころから、足を布でかたく巻いてしばり、足が大きくならないようにした中国の旧習である。二十世紀に入り、この弊習打破の運動がおこり、改まって以後、天足（天然形の足）になったといふことである。

講談社版の Yun·Chang 著、土屋京子訳『ワイルド・スワン』によると、纏足した小さな足を『三寸金蓮』と呼び、（十センチ足らずの金の蓮）と述べていた。私は本物の最後の三寸金蓮を、見たことになるのだろうか。

昭和十年四月、私は、咸鏡北道会寧公立尋常高等小学校に入学し、四年生の一学期まで通学した。

わが家では、家族全員が顔をそろえるのは、大体、昼

父が言ったので、母から、ごく軽い申し訳程度の一膳いぢせんが戻ってきた。私も、それで満足した。

昭和十一年九月二十六日、三女久代ひさよ（私の妹）が官舎で生まれた。その日のことは覚えていないが、これで我が家は六人となり、大分にぎやかになってきた。

歩兵連隊の先は、練兵場になつてゐた。私はある日、その練兵場がどうなつてゐるのか、好奇心に駆られて、一人で見に行つたことがある。そこは、果てしも無く、広大な荒野であった。人っ子一人いない、犬猫一匹いなかつた。少し氣味が悪くなつてきた覚えがある。

歩兵連隊の向かいには、工兵連隊が陣取つていた。ある日、母が、

「今日、工兵隊でお祭りがあるから、見に行こう」と言つて、私と妹たちも連れだつて見に行つたことがある。

當庭は、開放されていた。真ん中に高い柱が立てられ、四方に綱が張つてあり、万国旗で飾られて、風に翻つてゐた。當庭では、元気な工兵たちが楽しそうに運動会をやつていた。

会寧川にかかる会寧橋を渡り、真直ぐにかなり歩くと、飛行第九連隊があつた。また、左に曲つて、しばらく行

食の時だった。父は昼休みになると、憲兵隊から官舎に戻り、軍服のまま、食事をした。この時に、いろいろな話が出た。ある日、

「上手な絵を描く子がいるもんだね、と感心して、名前を見たら寛夫のだったよ」

と、母が相好を崩して言つたのも昼食の時であつた。これは母が授業を参観した時に、壁に児童の絵がずらりと貼り出していた。そのなかの、私の一枚を見たのであつた。また、二年生か三年生のある時、

「今度、寛夫が級長になつたんですって」

母が言うと、

「ワッ、ハッハッ」

父は如何にも、うれしそうに笑つていたこともあつた。夕食が、みんな一緒にいた覚えは、余りない。たまの休日の夕方、父は着物姿で、時々、どこで覚えたのか、得意のところ汁を作つた。すり鉢に、すり粉木で、作つているところを、私たち子供は、のぞき込むようにして見ていたものである。このところご飯は、いつもおいしかつた。そんな、ある夕食の時、私が、

「お代わり」

と七杯目か八杯目の茶碗ちゃわんを出したら、

「もう駄目。そんなに食べちゃあ、おなかをこわすよ」

母は茶碗を受け取ろうとはしなかつたが、

「まあ、いいじゃないか、食べたいだけ食べたら」

くと、松原が続いていた。この松原には、小学校で、よく遠足を行つた楽しい思い出がある。また、憲兵隊でも、隊員と家族全員同伴で行つて、和やかに酒食をした覚えがある。言わば、慰安会、レクリエーションの催しで、ずいぶん、アットホームな雰囲気があつた。

ある時、何氣無く、官舎から庭に出ると、母が青空を仰いでいた。

「ご覧、あの飛行機に、お父ちゃんが乗つてゐるのよ

母は、空の一画を、指差して言つた。

「ふうん」

よく見ると、小さな飛行機が一機、飛んでいた。まるで、蚊の鳴くように、ブーンと小さな爆音が聞こえてきた。

（なんで、父が飛行機に？）

私は素朴な疑問を抱いた。

それから、数日して、父が、

「寛夫、飛行機を見に連れていってやろう」

と言つたので、二人で飛行第九連隊を行つた。くたびれるほど歩くと、やがて、アスファルトの舗装道路があり、飛行場が見えてきた。隅の方に格納庫があつて、中に入ると、奥に一機、飛行機が納まっていた。

父は、飛行隊の人と話があつたようで、事務所の方に行つた。私は一人で、その飛行機をしげしげと見た。

しかし、戦闘機なのか、攻撃機か、爆撃機か、偵察機か、あるいは練習機なのか、私に分かるはずもなかった。だが格納庫とともに、何もかもが整然と新らしく、ぴかぴかとしていた。

そう言えば、当時、小学校に一人の転校生が入ってきた。名前は忘れたが、同級生で、こここの飛行連隊長の息子であった。ある時、彼のいる官舎に、級友たちと連れだって遊びに行き、庭で暴れ回ったことを、思い出した。だから、多分、新しい出来立ての飛行場だったのかも知れない。

終戦後、母から聞いた話によると、あの日、父が飛行機に乗っていたのは、少年兵の相見軍曹が、会寧飛行場に不時着し、父はその飛行機に同乗したのだそうである。戦後も十数年経ったころ、その相見元軍曹は、父と同じ系列にある会社に偶然にも務めていた。

（紙透さん？、余り無い珍しい苗字だ、ひょっとしたら、あの会寧の、紙透曹長ではないか？）

と、思ったそうである。その通りだったので、二人は旧好を温めたそうである。

世の中は、広いようで狭い。

ある夜、母に付いて大通りに出た。道の両側には、大勢の人が静かに、立ち並んでいた。何だろうと思つてみると、整列した兵隊が、それぞれに、白い布に包まれた

四角い箱を両手で抱えるように持つて、肅々として行進して來た。そして、続々として歩兵連隊に向かって行った。

後で分かったことだが、私たちは、張鼓峰事件で戦死した将兵の、遺骨を出迎えたのであった。

張鼓峰は、満州国間島省琿春県の最南端、豆満江とソ連領の間に挟まれた、帶状地帯にある標高一五〇メートルそこの丘陵であった。この付近は国境線が不明確で、各国の地図も、まちまちになっていたそうである。張鼓峰の戦略的価値について、「羅南憲兵隊史」は、

張鼓峰から、豆満江を渡った朝鮮一帯は、羅津（現ラジン）要塞地帯である。ソ連側が張鼓峰の頂上を手に入れれば、満州国琿春県一帯は一望し得、また、北朝鮮も北鮮鐵道の輸送状況、羅津、雄基両港への船舶の出入、灰岩洞の朝鮮窒素の液化工場等の状況は一目瞭然、手に取るように、眺められる。

また日本軍がここを手に入れれば、ポセット湾に入するソ連の船舶の状況、また、ウラジオストックから、ポセット地区への兵力輸送等も、一望し得る有利な地点である。したがつて、日ソ両軍にとつて、この地点は、まさに天目山とも称すべき地点である。

と述べている。

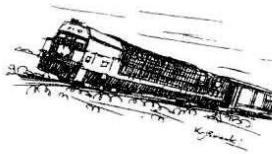
昭和十三年七月十一日、ソ連兵が張鼓峰に陣地を構築しはじめたと言う情報が入ると、これに対し、日本側は張鼓峰は、満州の領土であることを主張。事件はこの国境紛争により、日ソ両軍が衝突した。八月十一日まで約一ヶ月間の局地戦に終つたが、日本軍はソ連軍の機械化部隊によって、苦戦に陥り、大打撃を受けた。結果的には、停戦と共に日本軍が撤退後、ソ連は張鼓峰山頂にソ連旗を立てたのであった。

八月十三日には、両軍戦死者の遺体交換が行われた。日本軍の損害は、戦死五二六名、戦傷者九一四名、計一四四〇名で、第一九師団の損耗率は二一%余に達した。そのうち、会寧歩兵第七五連隊は、実に消耗率五%に達したとのことである。戦傷者は統統と、羅南と会寧の衛戌病院に後送され、超満員になつたそうである。

以前、私が額を怪我した時に、見ててくれた看護婦も、戦傷者の間を駆け回り、私に言つたと同じように、
「傷は浅いぞ！ 名誉の負傷だ！」
と繰り返し、叫んだのではないかと想像している。

張鼓峰事件の興奮冷めやらぬころ、父は准尉に昇進し、阿吾地憲兵分遣隊に転勤することになり、私たち家族も同伴であった。

出発の日、会寧駅（すでに停車場とは呼ばなかつた）



（つづく）

方解石の出る楠峠（十二）



伊澤敏久

昨年と同じ様に今年も暑い夏の日、九人の仲間は、再び一年ぶりに憲造を中心に、謙一、昭一等と楠峠に集まり息をはずませながら汗の流れ出るもの忘れ、洞窟に無言で出来る限りの力走で向った。

洞窟の上に着くと、幸一と二郎の準備した命綱の半分を近くの太い木にしばりつけ、順平と礼二の二人が残り七人が洞窟に憲造を先頭に入っていったが、入口等は殆んど繁った雜木林や樹木の葉で穴が隠れる程であったが、以前からの様子で洞窟を見つけることができ、ようやく入ることが出来た。

幸一と山口が照らす懐中電燈を頼りに足元を注意しな

がら水の流れを気にかけ岩の上を右へ左へと飛んで奥へと向った。洞窟は、上からの落ちる水で服をぬらし、涼しさから寒さが次第に感じられる様になり奥からかすかな滝水の様な中に清水の流れが耳に入り、洞窟らしさが一段と感じられていった。

暫く行った所で、以前に削った方解石の所に着くと憲造が、

「少し削って持つて行きたいな……」

「俺も前に削り取ったのが家には、二つばかりあるが、今日の方解石は名古屋へ持つて行こうと思う……」

七人は、準備して来た道具で、主に憲造と謙一が削つていく手ごろな方解石を、袋や、ポケットに入れたりし

た。

憲造が、

「どうだ、こゝらで、いゝにして奥へ行つたら……」

七人は三本の懐中電燈を頼りに進んで行つた。

奥の方から「キーキー」とこうもりの鳴く声が聞こえ

始めた時、方解石が水の中に置かれている頭蓋骨の近くに来た時、昭一が、

「頭だ！」と大声を出すと、皆は、歩を止め、「どきつ」とした様になつた。

幸一が、

「以前と変わらない様だな……清水が頭の上へ落ちている……」

七人は、恐るく、少し避ける様にして手を合わせ、奥へと進んで行つた。

さらに進んで行つた時だった、

幸一が、

「風林火山の旗だ」

憲造もそばに行き、

「幸一が話した旗と云うのはこれが……」

七人もそばにより、清水になびかれている、色あせ、

破れかけた布切れを見た。

足元の流れる清水の岩下等を覗くと、見た事もないぞうり虫、ミジンコの様な小虫や、むかでに似た小虫が泳いでいるのが多く見られ、真っ暗の中を、三本の懐中電燈の明りが一直線に前方を照らし続け、前後左右等を注視し進んで行つたのである。

七人は、時間も忘れていた。

奥から風の泣く音、何かの鳴く声、清水の流れの音

寒さもあり

「どこまで続いているのかな……」

二郎が叫んだ、皆は無言だった。

地上に出れば別世界である……。

複雑な気持にかられたり、人間の住んでいた所なのか……。心に感じられることは、それそれで、眼ばかりが大きく開き、ゆっくり奥を見極めるだけだった。

二、三十メートルも進んだ時である。幸一が大声を出した。

「何かあるぞ……」

三本の電燈が、一直線となつて幸一の指す方向に照らした。

六、七メートル先である。岩の上に誰か腰掛けている様な物が眼に入った。

「何だ、何かある、誰か座つていてるぞ」

憲造も大声を張り上げた。七人は凝視しながら恐るく近づいて行つた。

間近かに来て見た時、思いがけない物が眼に入ったのである。

一口に云えば、「よろい」を着た武士である。

七人は、近づくに従い「おー」と同時に叫んだ。驚きの声でもあり、新しい発見とが入りまじつた声であった。

傍に行きよく見ると、武士と云つても、兵である。武

一〇人に云えど、「よろい」を着た武士である。

七人は、近づくに従い「おー」と同時に叫んだ。驚きの声でもあり、新しい発見とが入りまじつた声であった。

「おい、あそここの武士の向かい側の岩の上に、青白く光つて光沢がある、あれは方解石だ……」

皆の視線が走つた。

「武士の前に置いてある様に見える……」

幸一が云うと、

「そうだ、徳川軍か、武田軍か……」

謙一も、考えて異様な話し方だ。暫くして話を続けた。

「まだまだ見たいことがあるが、時間も考えんと。洞窟の中は真っ暗だ、外に出て真っ暗くなつていると困るぞ……。」

「そうだ」

憲造も大声で云つた。

「大分深く入つたから、もう帰らんといかんかも知れん。」

山口が時計を見ると午後四時近くなつていた。

「帰った方がよい」

山口が大声を出した。

七人は思いがけない発見と、家路に急ぐことが交錯した。

将でないことはすぐに感じ取つた。

鎧の笠の様なものを頭に乗せているのだろう、顔は見えず黒くさびた、くすびた様な色の胴元をつけているではないか。

足は全部やゝ深いただよつて流れの清水の中に入つていて見えず、足首だけが、骨である様に思えた。

「足には何もつけていないのか」

昭一が叫んだ、

「岩のこけの様な色になつてゐる、あれがそうかもしれん」

謙一もよく見て話すと、「弥生時代の人骨が残つてゐると歴史の時間に教わったことがあるから、骨かも知れんぞ」

「江戸時代の人骨でさえも、墓の中の水中でそのまま残つてゐると云うじゃないか。」

憲造も、思わず口を開いた。

「武将でない、下っぱの兵だ。顔は胴元の中に入つてしまつたのか、顔が有るのか無いのか、わからん……」

「廻りの水が深くてそばまで行けんな……」

憲造は話を続けた。

七人は、思いがけない物を発見し、「すごい!!」の声が何回も出たのだった。

山口が、廻りを電燈で照らすと、向かい側のや、高い

洞窟の外に出て、七人は、順平と、礼二に話をしながら家路に向かった。

夏の日は短く、西に夕焼けが見え、涼しい風が九人に感じられた。

憲造は、「今日の方解石は学校へ持つて行つて皆に話をしようかな……」と一人つぶやいた。

家に帰ると再びアメリカとの関係が現実となり戦争は、益々長くなる様に思え、九人には先のことは何もわからなかつた。

夏休みの登校日も多くなり、幸一と、山口の学校では軍事教練が次第に多くなつていった。

憲造は、飛行機の操縦に……

謙一は軍事工場に……

數日して皆は、それぞれの所で生活が始まった。

と別れ、

夏休みも中ば過ぎ、幸一の父から母の所へ一通の手紙が届いた。今迄も、時々、幸一の所へは父からの手紙が届いた。

幸一宛にも同じ封筒に入っていた。

手紙には

「父は毎日訓練に励んでいる様子や、幸一には母の云うことを聞いてしっかり勉強する様に……等と書かれ最後に、

八月二十五日、面会が許可されたから、豊橋に来る様にと書かれていた」

母が、

「面会に来る様にと書いてあつたから行かんといかんね、長い間、お父さんと合わなかつたからね……」

幸一は、父が何を話をするのかなとも期待も感じ、その日が早く来ないかなとも思つたりした。

日を追い一人の生活は毎日が益々窮屈に感じられていたのである。

戦争のことは毎日報道され、新聞やニュースが国民の

筐ヶ崎村

(十三)



太田和貞

（136）

吉 報

（137）

「まだ若い。あと十日は掛るな」と平左衛門の顔を見て言った。

「さよう御座居ますな」

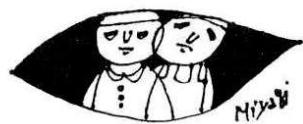
平左衛門も前歯で噛んでいた糲を口から出して、そう答えた。

「あの小さな蝗のどこに、この長雨を生き抜いた野性が秘められているのでしょうか。わしら人間でも、この洪水にくじけそうになつたというのに、……。糲をくらう蝗にあのような生命力、つまり野性があるので、わしは糲も蝗と同じように、あと二、三日すれば、たんぽから立ち上がりてくれる信じています。わしら百姓が糲にかける思いで、糲もきっと立ち直ってくれるものと信じております」

「ひとつの穂に約一二五粒。例年ならば豊作となつたであろうに、あの水で粋となつたのが四割。残りの六割が完熟しても不作は免れぬ……」

糲を前歯でかみ、胚乳を舌の先で味つた十郎兵衛が、

生活は次第に楽しい笑いから遠ざかって行つたのである。（つづく）



（136）

十郎兵衛は、そう言つて深い吐息をついた。

「ほれ、セカセカとこちらに歩いてこられるのは、関東取締出役の田口様ではないか?、……」

十郎兵衛は平左衛門を振り返つて聞いた。

「左様でござりますな。あのセカセカした歩き方は田口様以外には、ありえません」

「田口様もわしらに気付いていなさるだろから、わしは逃げる訳には、いかぬ。平左衛門、屋敷に戻つてしまふに田口様がお見えだと伝えてくれ」

十郎兵衛のことばに、平左衛門はさりげなく脇の畔道に曲がつていった。

「十郎兵衛、喜べ!。吉報だ!。吉報を持ってまいつたぞ!」

田口東兵衛は遠くから両手を挙げて、大声で喚いたが、

十郎兵衛にはよく聞きとれなかつた。ただ、吉報ということばだけが耳に入つた。

「御役目、ご苦労さまに御座居ます」

十郎兵衛は丁寧に腰をかがめて、田口東兵衛を迎えた。

「上様が三日後に、この葛西筋を巡察される。その折、十郎兵衛、そちのこのたびの水防の働きを嘉みせられて、白銀三十枚が下されることに相成つた。そちに早く知らせようと存じ、このように急いでまいつた。秋とは言え、このよう日差しの強いなかを急いでくるのは、容易ではなかつた。急いでくるのも難儀であったが、それ以上

「田口様は、いかがなされましたか?」
と聞いた。

「あわてて帰られた。よほどお急ぎとみて、畔道に足を滑らせて二度も転ばれた」

しげを見る目が笑っていた。

「折角、用意して貰つた膳を無駄にしてもつまらん。上様からわしが白銀三十枚を頂戴することになつたので、平左衛門と一緒に呑むとしようか、……」

「旦那さま、今なんと申されました。上様から白銀三十枚と言われましたか?」

「そうよ。呑みながら、ゆっくりとしげと平左衛門に語つて聞かせよう。この度、上様からわしが白銀を頂戴することになれば、あの鶴代の惣右衛門も、長八とにくが夫婦になるのを、よもや反対はしまい」

長八とにくのことここまで思い至つて、十郎兵衛は、(わしも、しげ以上にあのふたりに肩入れしている)と氣付いて、思わず苦笑した。

その日の夕方、奉行所から明後日、朝五ツ半に村方三役、打ち揃つて奉行所に罷り出づべき旨の差紙が届いた。(相達する儀、有之候)と書かれているだけで、用件は書かれていなかつたが、田口東兵衛の話で、「白銀三十枚」の件だと十郎兵衛には分かつていた。

将軍さまから十郎兵衛に御褒美として白銀三十枚が下賜されるという噂は、またたく間に村々にひろまつた。

に、十郎兵衛に決定するまでの拙者の苦労は並ではなかつたぞ。白銀三十枚とは言わん。十枚は考えて貰いたいものよ」

田口東兵衛は、ぬけぬけと賄賂を要求した。

十郎兵衛は田口東兵衛の顔を見ながら、先日の下鍛田村と谷河内村の水争いを治めたとき、谷河内村の名主藤左衛門が言つたことばを思い出していた。

「ご迷惑をお掛けしたのではないでしょか? 田口様をおもてなししているうちに、つい口がすべつて、百姓たちに休暇を下さつた十郎兵衛さまは心の広いお方だと言つてしまつたのです」

藤左衛門のことばを聞いて、田口東兵衛は十郎兵衛にたかりにきたのだった。

「田口様、おことばを反すようで申し訳ありませんが、金で買うような名譽は譲んで辞退いたしますので、どうぞ、よしなにおとりはからいください」

「な、なにを馬鹿な、……」

田口東兵衛は居丈高に怒鳴つたが、あとのことばが続かなかつた。十郎兵衛の思い掛けない逆襲に、絶句した。

「田口様、名主や百姓から賄賂をとるのは、たいがいになさいませ。お名前に傷がつきますぞ」

十郎兵衛は田口東兵衛の顔を真正面から見据えて、きっぱり言つた。

名主屋敷に戻ると、酒肴の用意をしていたしげが、

将軍家慶は打続く長雨に、江戸城に降りこめられて、鬱々としていた。

先刻より長々と続いていた老中阿部正弘のことばも家慶の耳には入らなかつた。

阿部正弘の話がやっと終つた。

「よきに計らえ」

家慶はいつものように言つた。

「は、はあッ。お召しになる御馬は亘^{わたら}、御座船は麒麟^{きりん}丸でよろしうございましょうか?」

家慶は、そう答えたが、

「はて、亘と麒麟丸は、正弘の話のどこで出たのであるか?」

と小首をかしげながら小姓を従えて奥に入った。

このようにして、将軍家慶の江戸川洪水地の巡閲が決められた。勿論、笛ヶ崎村名主十郎兵衛に対する御褒美もその計画の中に入つていた。

将軍家慶のご巡閲を二日後に控えて、村々はあわただしさを増していった。

泥水が引いたあとでの稻の後仕末は女子供に任せ、男たちは道普請や橋の修繕などに掛りきりであった。

「将軍さまをお迎えするときの心得を」

と、十郎兵衛は代官所におそるおそるお伺いを立てた。

「御鷹狩りの際の心配りを以てせよ。特に笹ヶ崎村はよくよく念を入れ、粗相のないようにいたせ」とのお達しであった。

洪水の後仕末の上に、さらに将軍さまをお迎えするわざらわしさに、村々の迷惑、笹ヶ崎村の村人たちの苦労を思いやつて、十郎兵衛は思つたりもした。

十郎兵衛は古い御用留帳を繰って、御鷹御成の際の諸心得を箇条書きに書き出した。

ないことがらであることが十郎兵衛には悲しかつた。巡閲される將軍さまが御覽になりたいのは、村の本当の姿ではないのか?。村の子どもたちが遊びに夢中になつて、思わず口にするあの叫び声ではないのか?

小川に架かる橋の破損箇所がきれいに修繕されたのを見ても村の状況は分かりはしない。貧しい村では、破損箇所は一月も二月も、いや半年近くも放置されて、

掃き清められた村の道からは、村の生活の苦しさや楽しさは浮かび上がつてはこない。

小川に架かる橋の破損箇所がきれいに修繕されたのをと言われて、初めて修繕されるのが普通であつた。村では江戸の町から苦労して運んできた金肥(下肥)を使つていた。その下肥を溜めて置く肥溜を村の子どももや大人は誰も臭いとは言わない。

下肥が畠の地味を肥やし、前栽(野菜)を育てるこ

とを知つてゐるからである。

天保十二年(一八四一)、將軍家慶の信任を得た水野忠邦は天保の改革を断行した。

この改革の強行で諸物価は値下げの傾向をたどつたが、江戸近郊の農村にとつて頭が痛かつたのは、下肥の値段が居据つたことであつた。

そこで、江戸近郊の農村は下肥の高値は野菜の高騰につながるという理由で、天保十四年(一八四三)十月、東葛西領の名主および惣百姓が連名で、下肥の一割方値

書き出した箇条書きがすべて百姓が守らなければならぬに致す可き事

- 一、小松川筋鶴御成りに付き、村役人打ち揃い、村境へ罷出ず可く候事
- 一、御道筋左右之畑へ肥引き申すまじく候事
- 一、火之元、大切に致す可く候事
- 一、野留、人留之事
- 一、乱心ものは終日、番人附置き申す可く候事
- 一、野犬村内へ入れざるように致す可く候事
- 一、村内の社地・寺院、門閉じ置き申す可く候事
- 一、村々にて高声、高唄など騒々しき事、これ無きよう致す可き事

下げを町奉行鳥井甲斐守に嘆願した。

將軍の裁下を得て、町奉行は江戸の町の名主たちに、天保十二年度の下掃除代一か年分の三万五四九〇両余の一割方引き下げを命じた。この下肥で育てられた野菜の初物を当時の江戸っ子は好んで買ひ求めた。

そのため、幕府は再三再四、百姓に対するは、「初物といつて早出来の野菜を高く売つてはならぬ」と禁止令を下す一方、町人に對しては、しかし、いくら町触を出しても、江戸っ子の初物好きを止めるることはできなかつた。

将軍家慶も初物が好きであつた。特に新生姜を好みだ。あるとき、家慶が新生姜を求める、と老中は諫めた。

「将軍さまが御禁制の新生姜を召されでは、御政道にもどります」

「ならば、新生姜を初物禁止令からはずせばよい」と、家慶は新生姜を初物禁止令から外してしまつた。一旦、天下に示した法を、新生姜を食したいという欲望のために、その法を曲げたのである。

家慶の父家斉は頭痛持ちであった。その体質を受け継いだ家慶も頭痛に悩まされた。

家斉は側室四十人に、御台所茂姫を加えた十七人の腹から五十五人の子を産ませていた。家慶も父には、やや劣るとはいえ、十五人の側室に二十七人の子を儲けている。この耽溺の生活と家斉・家慶の父子の頭痛とは無関係であろう筈は無かつた。

麒麟丸は隅田川に入つたが、川の水は家慶の予想に反して茶色く濁つていた。江戸城に二十日近くも閉じこめられていた家慶は、笹ヶ崎村にいくよりも青い海を見たかった。

広々とした青い海を見れば、先刻よりズキン、ズキンと脈を打ち出した頭痛も、たちどころに治まると思つた。

「よ、予は海を見たい。青い海を見たい!」

家慶は唐突に喚き出した。

「それはなりませぬ」

阿部伊勢守正弘が家慶を抑えにかかつた。

「そうじゃ、伊勢、そちに予の名代を申し付ける。永寿丸に乗つて笹ヶ崎村とやらに、いくがよい。よ、予は不快じゃ。頭の中がくらくらして座わつていられぬ」家慶は我を張つた。阿部正弘は、上様のいつもの悪い癖が始まつたと思いながら家慶の顔を凝視した。

「いいえ、そのようなことは、決して、……」

「そ、そうであろう。で、では、改めて申し渡す。あ、阿部伊勢守正弘、よ、子の名代として、さ、笛ヶ崎村への出張りを申し付ける」

「は、はあッ。ありがたき仕合せにござります」

正弘は平伏して家慶のことばに従わざるを得なかつた。

「それでは上様のご名代を務めさせていただきます」

正弘が挨拶して、永寿丸に乗り移ると、家慶の頭の中でズキン、ズキンと脈を打っていたのが嘘のように消えてしまつた。

「酒(さけ)を持て！」

頭を押さえ付けていた正弘がいなくなると、家慶は酒を申し付けた。

御側御用お取次(とりつけ)の水野美濃守と本郷丹後守は顔を見合わせて、

（御酒とは意外な！）

と思うだけで、誰も家慶を諫めることはできなかつた。

「も、持つてまいれ！さ、ささを早よう！」

家慶は怒ると、どもる癖があつた。

どもり始めた家慶の声に、小姓たちが家慶の前に膝行した。朱塗りの木盃を持った家慶の手がブルブルと震えていた。家慶は左手で右手の手首を握つたが、手の震えは止まらなかつた。盃になみなみと酒を注がせて、家慶は一気に呑みほした。

富士の氷室の氷で冷やされた酒は家慶ののどを心地よ

く流れ落ちた。二杯、三杯と立て続けに盃をあけた。手の震えがおさまった家慶の顔は、しまりが無くなり始めた。家慶はトロンとした目で船中を見回した。

（お美津を連れて参ればよかつた）

と家慶は後悔した。

家慶の正室は、有栖川宮一品中務卿熾仁親王の姫で

喬子(たかこ)といい、文化十年（一八一三）に竹千代を産んだ。

正室が第一男子を産んだことは稀有なことであつた。

しかし、満一年を迎えたうちに早世した。

家慶の二十七人の子女も、そのほとんどが早世、夭折している。

お美津の方が文政七年（一八二四）に産んだ第九子政之助だけが成長し、のちの十三代将軍家定となつた。

そのため、家慶は殊の外、お美津の方を寵愛した。

（政之助とお美津の三人で船遊びをしたら、どんなに楽しかろう）

家慶は、そんなことを思いながらコトンと寝入つてしまつた。目のまわりに青黒いくまが浮んでいた。

「青い海を見たい！」

と喚いた家慶は船上から青い海を一度も見ることなく、江戸城に帰城した。

（つづく）

ねずみ小僧丸桶（十九）

鈴木昭三



貸本の配当は私達がき共にとつては夢の実現だつたわけで、待望の煙草と饅頭を目の前にした時の喜びようはそれは大変なものでした。

煙草は憧れのチエリートエアシップの新品で、味と香りも想像していた通り素晴らしいものでした。残念ながら分不相応とも言つうのか、日頃馴染んでいた露人館の吸殻とは違つていました。新品の長い丸まる一本は、がき共には吸いでがあり過ぎ、きつくて余してしまつたのです。たて続けの二本めの煙草はただ早く吸い終ることしか考えませんでした。

それでも煙草をなんとか吸い終つてみると、おかしな事に次に待ちかまえている青木葉の上の田舎饅頭を食べ

る気になれなかつたのです。煙草の煙が胃の中に溜つてもいるのか、腹がふくれた感じだったのです。そんな

氣分になつていたのは私ばかりではなくて、他のがき共

もいるのか、腹がふくれた感じだったのです。そんな事に次に待ちかまえている青木葉の上の田舎饅頭を食べ終ることしか考えませんでした。

それでも煙草をなんとか吸い終つてみると、おかしな事に次に待ちかまえている青木葉の上の田舎饅頭を食べ

る気になれなかつたのです。煙草の煙が胃の中に溜つてもいるのか、腹がふくれた感じだったのです。そんな

事に次に待ちかまえている青木葉の上の田舎饅頭を食べ終ることしか考えませんでした。

貸本の中での一番の人気はなんと言つても一冊ののらくでした。当時の少年達にとつてのらくろは超人気者

だつたのです。私達がき共は学校で使うノートや筆入れやかばんの片隅に迄、のらくろの似顔をかいたものです。

それから学校の板屏や便所の壁にも落書きがありました。果ては落書きはのらくろにとどまらず、のらくろの生みの親、ベレー帽にロイド目がねの田河水泡の似顔や、トレードマークの一本足のお玉じゃくし迄、あちこちで見かけるようになりました。

放課後の校門附近では、がき大将から手渡される一冊ののらくろをめぐっての奪い合いが毎日のように起りました。

その中にのらくろは私達男子だけではなくて、ついには貸本の客としては論外だった女子からも見たいと言う要望がでてきていたのです。

煙草に参つて朦朧としていた私達低学年のがき共も、ようやく正がつき、上級生達の話し合いに加わりました。がき共の話し合いは、これからはのらくろの本で貸本の数をふやして行こうと衆議は一致したのであります。私達がき共の貸本で手元にあるのらくろは、軍曹と曹長の二冊だけでした。のらくろを出版している講談社から、この二冊の出版の数年前から階級順に「二等兵から一等兵、上等兵、伍長の四冊が発売されていました。貸本でこれから仕入れるのはこの四冊だったのです。

この四冊の中でのらくろ伍長だけは村でも売られてい

たのです。村のデパートでは、がき共の手の届かない高

い棚の上に、もう一年余りもそのまま、つまり正確には売れ残っていたのです。

売れ残っている間に猛犬連隊でののらくろは階級がいつも上がっていて、今は曹長になつてゐるのです。

曹長になつたのらくろは腰の帶剣も、二等兵から軍曹迄の短いいわゆるごんぼう剣ではなくて、曹長刀と言つて、得意顔で颯爽と闊歩していました。紙上では猛犬連隊の當庭や婆婆の街頭を、そのサーベルをがちゃがちゃいわせながら、得意顔で颯爽と闊歩していました。がき共は同じ川の前の住人としてデパートへの義理だつてがつたのです。

所が露人館の太平がデパートののらくろ伍長には今年の正月こんな事があつたと言ひだしました。

いつも露人館に逗留する太平とも顔馴染みの茶問屋が、正月のお年玉に本を買ってやると言つて、デパートと一緒に行つたことがあつたのです。

「あの棚にあるのらくろ伍長は、今いくらしているずらか」

太平は以前からあののらくろ伍長を欲しかつたのです。デパートは大急ぎで踏台に乗り、のらくろ伍長を棚からおろしました。

「てえかの、い、ち、え、ん」

て、こんなことを教えてくれました。

「デパートのおじいは去年悪い病気で死んだだけで、のらくろの埃にもバイキンがついていたに違いない」

太平はともかく今はデパートに憤慨しているのです。太平の話の後にがき大将の同級生の男が、隣町の古本屋へ月おくれを買いに行つた時のことです。のらくろの男について私は色いろ思い出があるのです。のらくろからは少しようはずれますが記してみます。

彼は小学校で尋常科から今高等科迄を通してずつと級長です。川の前では彼の二級下の地ごく耳と並び称される秀才でした。その上毎朝牛乳と新聞の配達をしていました。そうかと言つて彼には世間によくある暗い背景はありませんでした。それは彼の生活設計のひとつだったのです。私達川の前のがき共は彼を今のがき大将とは違つた意味で敬慕していたのであります。

彼は読書家で隣町の古本屋へ行きました。買うのは主として月おくれの少年俱楽部でした。当時彼が私達に言つたには、ほんとうは譚海と言う雑誌が面白いのだが、それを読むと不良になると誰かに言われて買わないのだそうです。

月おくれと言うのは、月刊誌などで発売日から一ヶ月ぐらい経つて売れ残ったものを、今度は場所を代えて古露人館に戻つた太平が居合わせた女中衆にのらくろの話をすると、女中衆の一人が買わないよかつたと言つた。

「太平君帰ろう。こんな埃まみれの古本なんか買えるかい」

数日して太平のもとに茶問屋からのらくろ軍曹が届きました。貸本の中ののらくろ軍曹がそれあります。

露人館に戻つた太平が居合わせた女中衆にのらくろの話をすると、女中衆の一人が買わないよかつたと言つた。

一か月の半値、更に三か月おくれは古本屋だけではなくて、駄菓子屋や、祭や縁日の板店にも並んでいて、値段も五銭したかしなかったか、安さだけが魅力だったような気がいたします。

例えば少年俱楽部の正月号の発売日は前年の十二月の初旬でした。本屋の店頭で名前通りに正月号としての商品名で通用したのは殆んど十二月一杯だけだったのです。年が明けて正月の初旬には又二月号が発売となるわけで、正月号はもう正月初旬には、古本屋で月おくれとして売られていたのであります。

月おくれ愛好家の彼のお陰で私達川の前のがき共は、小学校の正月休中に、正月号の少年俱楽部に目を通すことができたのです。

よその集落のがき共の中には月おくれを読んでいる私達をへばかにする者もいましたが、実際には月おくれと言ふ名の、日時の遅れと言うか、ずれと言うか、そんな違和感などは余り感じませんでした。それに月おくれでも附録はちゃんとついていて、その双六やカルタ等のゲームで遊んだ記憶もあるのです。

彼は又私達低学年のがき共の面倒見もよくて、おたぎりさんの大杉の下で小説本や少年俱楽部などを、よく透る声でみんなに読んで聞かせてくれたものです。その大半は忘れてしましたが、おぼろげながら、佐藤紅螺のああ玉杯に花うけて、吉川栄治の天兵童子、大佛次郎

月おくれ愛好家が立ち上りました。着物の兵児帯の左右の腰のあたりに拳をあてがうと、村の青年団の弁論大会の弁士のような口調で始めました。

「全くその通りであるんである」

がき共は大笑いで拍手しました。

「四十銭あればのらくろ一冊仕入れができるんである。更に一円あれば二冊ののらくろが手中に入り、その上、二十銭のつり銭が戻って煙草を買うこともできるんであるのである」

当時のがき共は日常の会話で、あるんであるがはやつていてよく連発したものでした。あとになって、あるんでは大隈重信の口ぐせだと聞きましたが、その頃の私達は政治家や軍人のえらい人達は皆こう言う風にしゃべるものだとおもっていました。

こん度は地ごく耳が立ち上りました。

「おれ今突然思いだしただけ。貸本のことじや郵便局の若おか様に世話をかけたわけだが、この間こんなことをおれに言つただよ」

それは若おつか様が芸者で月丸の時分、デパートのおとうには、たんと貸せがあったと言うのです。今でも彼女がデパートにその当時の話を切り出せば、デパートは青くなつてちぢみ上がるそうです。地ごく耳がデパートで何か高い買物でもするようなら、値段が安くなるように若おつか様が口添えしてくれると言つてくれたそうです。

「それだで、のらくろ伍長もデパートで買うことにしちてさ、若おつか様に掛け合つて貰つたらどうかと、急に思いついたけど、みんなどうぞらか」

「そりゃええ」

まつ先にがき大将が賛成して、しゃべりました。

「デパートが月丸に惚れて、郵便局の目を盗んで会つていた事、おれも噂で知ってるよ。地ごく耳よ、早速月丸に話をつけて貰うだなあ、なる可く安い値段で」

私達がき共は拍手しましたが、月おくれ愛好家ひとりだけは異を唱えました。

「そお言うのを、おどしとか、恐喝とか言って、罪になるのだぜ。おれもデパートは嫌いだけど地ごく耳の話、ちょっと気になるなあ」

「でもさあ」

太平が年上の月おくれ愛好家に遠慮して言いよどんでしまったと、がき大将が続けよと声をかけました。

「折角いやなデパートでも安く買えるかも知れんだで、

の花丸小鳥丸、南洋一郎の浮かぶ飛行島等の小説や、斎藤五百枝、伊藤幾久造、山口将吉郎、梁川剛一、村上彦次郎、樺島勝一等の挿絵にも心をときめかしたものでした。その後、高等科二年を卒業すると、師範学校が受かっていたのに、両親や担任の先生や校長達の時局柄ひそかに惜しむ声を振りきり、村長の激励を受け私達小学生のうち振る日の丸の小旗に送られながら海外雄飛を夢見て満蒙開拓青少年義勇軍の内原訓練所に入隊していました。

その月おくれ愛好家の彼が言いました。

隣町の古本屋でのらくろは古本の中では別格で、棚の一段を占領していて、本物の兵隊が整列しているかのように、二等兵から階級順に約二十冊が見事にずらっと並んでいたそうです。値段は二等兵、一等兵、上等兵迄、どれも四十銭。伍長と軍曹は五十銭で、曹長はまだ出たばかりで高くて七十銭だったそうです。

棚ののらくろ達は全部うす茶色のケースに収まっていて、外観は本屋の新本と変らない風でした。

「うーん」

話が終つてがき共はみんな長い吐息をもらしました。

月おくれ愛好家の言う古本屋ののらくろと、太平のデパートののらくろを、頭の中で比較していました。

がき大将は腕を伸ばして背後の灌木の小枝を摘みとると、それを妻楊枝代わりにして歯をつつきながら

やめる手はないと思うやあ。おら達が買つてやらなきや、あののらくろはどっちみち永久に売れ残つてしまふだよ。それにデパートが月丸ねえさに、いじめられたらきみがええよ」

地ごく耳が太平の後を続けました。

「おら達おたぎりさんの大杉の下でいつも勉強しているじゃんかね。草双紙なんかにでてきた遊女や芸者と、客の男達が、だまし合いのかけひき、手練手管、みんな面白がったじゃんか。若おつか様の話はあれとおんなじさ。おら達は、草双紙や絵本で勉強しているだで、男女の事は村の人衆よりはずっと物知りだと思うぜ。花柳界と言う所じゃ、男と女のだまし合いは普通の事だよ。あの意地悪でけちんばなデパートはいじめてやつた方がええと思う」

地ごく耳の話に、がき大将も私達がき共も異口同音にそうだ、そなだと叫びました。

結局地ごく耳が月丸ねえさんにのらくろ伍長を安く買えるようにお願いにいくことで、衆議は一決したのであります。後の値段は結果待ちと言う事で、がき共は気楽になりました。地ごく耳は、デパートの月丸ねえさんとの事を第一弾とすれば、まだ第二弾の話も聞いてきたと言つたのです。

「ここに露人館のたあにいがいるけど、あの十五夜のかっぽれが大評判だそんだな。おら達が見たかっぽれは

おたぎりさんの舞台だったけど、今度は狭い座敷でやるもんで、客が大喜びだつてさ。全くしらかな話だよ。おっか様が言うにや、村長も助役も村会議員も消防団長も、それに梁山泊で隣り合わせの校長迄、みんな十五夜にめろめろだつてさ。それからあのデパート、用もないのに露人館の周わりをうろうろして、梁山泊の十五夜を狙つてるだつて。くうにいや女中衆に見つかると、ご注文のお品をお届けにきましたってそらをつかうんだって太平が言いました。

「デパートの噂ならおれだって、女中衆から聞いてるよ。十五夜は今、錢で苦労してるだつて。十五夜は顔がええもんで、狙いをつけた村の男に、色仕掛けで、なりふりかまわづ当つていくだつて。男をだますのはお手のもんだつて。それから十五夜はくうにいの部屋にも入りびたりだで、世のため人のためのあの竹筒も、やられるかも知れんだつて。おれもくうにいが心配だよ、すげべいだで」

太平の話を待つまでもなく、私も十五夜は最初に会つた時から虫が好きませんでした。くうにいが水谷八重子みたいだと言つて見とれていた時から、くうにいが危いと思っているのです。

つい先日、くうにいの部屋に太平を尋ねた時、そこに太平はいなくて、くうにいが横になり、十五夜の膝枕で、彼女の口三味線に乗せて虎造節をうなつていました。

私はなんとなくばつの悪い思いで、それでもほんの暫く土間に立つて立っていました。

うなつていてるくうにいの顔を上から見守るように、うつ伏せ加減の十五夜が、横目でちらつと私を見ました。それは恐ろしい目付きでした。その時私は文字通り視線と言う線に射すくめられたのか、私の全身は凍る思いでした。十五夜といる時のくうにいは、いつもの彼とは違つていました。馴れなれしくここにいてはいけないと咄嗟に気付いて私は戸外に走り出たのです。

露人館の中衆の言葉通り十五夜はすでにあのくうにいの竹筒の中味を知っているかも知れません。やがて地ごく耳の話も終りました。煙草も饅頭も証拠の残らないように片づけると、がき大将の言つた宴会もようやくお開きとなつたのであります。

つづく

社 生日（内規）

☆ 同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会員へのお誘い

本誌の經營を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせつかくのお申しありであります。維持会員になつていただいている、三ヶ月分をまとめて前納して頂いております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なつております。

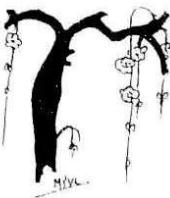
* 同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座

〇〇一二〇一四一九〇八一五

加入者名

作家群編集部



潮

騷

錄

(廿八)

鯨
くじら游
ゆう海
かい

賀辛巳春

平成十三年正月

雪冒馬齡風沁身
蛇行跔躅復迎春
古詩斷絕天當恐
願授一篇歎後人

押韻・身春人

△辛巳(蛇)の春を賀す

雪は馬齡を冒し
風は身に沁む

蛇行跔躅して復春を迎

古詩の断絶するを天は当に恐るべし

願わくは授けよ後人を嘆ぜしむ一篇を

〔注解〕

馬齡は犬馬の年。自分の年令をへり下つて云う。

跔躅は行き惱む、進まない事。史記・淮陰侯伝

「麒麟之跔躅不如駕之安步」より。転句恐るは心

配する。韓愈の詩「孟郊死葬北邙山」

從此風雲

古詩は舊詩の意で用いた。現代中國語では日本で云う漢詩の事を舊詩と云う。口語訳してみよう。
 元旦の雪は徒に年だけ喰った私に容赦なく降つて老軀を冒し、更に風も冷たく我が身にひときわ沁み通る。ぐねくと行き惱みつつ復新春を迎えて了つた(ああ漢籍の道は今日本で途絶えんとしている)。
 あの孟郊が亡くなつて文学の断絶するのを恐れた天は替りに賈島を生んでそれを守らせた。天も大に心配している事であろう。ならば、菲才の身ではあるが一篇の佳句を作らせ給え。後世の人々をして感嘆おく能わざるような素晴らしい漢詩せめて一首を。

☆心なき世に亡ぶるか漢の詩

古人泣くらむ天瞋るべし

夢初孫之顔容

平成十二年六月

祝婚歌贈川島青果會社川島勉社長與姪美穗嬢華燭之典

平成十二年六月

鶯啼烟雨水天宮
安產偏祈鶴髮翁
姫笑於兒無一詣
至孫幾度冒忙中

押韻・宮翁中

△初孫の顔容を夢む

鶯啼く煙雨の水天宮

安產偏えに祈る鶴髮の翁

姫は笑う「児に於ては一詣無きに

孫に至っては幾度ぞ忙中を冒すとは」と

〔注解〕

水天宮は東京の下町、墨田川に近い所に在る安産の神様。お腹を膨ませた若い母親やお婆さん、更に神妙

につき合っている若い主人達で賑々しい。當時東京に不案内の私は、水天宮に近い銀座支店に勤務していたのに、我が児の時はここを訪ずれた事が無かつた。

歳月は巡り初孫が産まれると聞くやいなやまつ先にお参りした。多忙であったが三度詣でた。鶴髮の翁とは勿論私であり姫とは我が荆妻。

☆吾兒の時詣でそびれし水天宮

初孫と聞き三度詣でし

山川優美秋津島

祝婚歌贈川島青果會社川島勉社長與姪美穗嬢華燭之典

平成十二年六月

五穀穗伸梅子垂
青果市場人勉勉
兩情厚從祝婚辭

押韻・垂辭

△川島青果會社川島勉社長と姪美穗嬢との

華燭の典に贈る祝婚歌

山川優美なる秋津島

五穀の穗伸びて梅子垂る

青果市場人勉々たり

両の情は祝婚の辞よりも厚し

〔注解〕

姪の美穂が大和市鶴間で華燭の典を挙げた。五穀の穂が青々と勢いよく伸び梅の子がたわわに垂れる梅雨入り前の一日であつた。

句は川島青果川島勉美穂を折込んで詠んだ。秋津島は日本の古名で大和を連想。秋津州、蜻蛉州とも書く。勉勉は絶えず努め励む。五穀は米麦粟黍豆。

☆鯛跳ねて金杯躍る鶴の間の

果の実る家いよよ栄えん

祝婚歌寄池野昌平君與姪智子嬢華燭之典

平成十一年九月

奇縁仁智結紅絲

旭日昌平野熙

子戒池塘春草夢

祕期鴻鵠志誰知

押韻・絲熙知
寄

△池野昌平君と姪智子嬢との華燭の典に寄
する祝婚歌▽

奇縁なり 仁と智と紅き糸にて結ばれたる

旭日昌々として 平野熙なり

子は戒む「池塘春草の夢」

秘かに期す鴻鵠の志を 誰か知らんや

〔注解〕

姪の智子嬢が新宿のセンチュリーファイアットホテルで華燭の典を挙げた。天あく迄蒼く爽やかな秋の一日であった。例によつて池野昌平智子の六文字を折込んで詠んだ。

仁智とは①情深く智恵がある事。孟子・公孫丑「仁且智」。②山と水と。孔子・論語「仁者樂山 智者樂水」より。また大將として身に備えるべき五つの徳を云う。孫子・始計「將者 智信仁勇嚴也」

ここでは仁徳も智恵もある二人を指す。
紅き糸とは晉書・索統傳の故事より。男女の縁をと

りもつ月下旬が袋の中の赤い糸で天下の男女の縁を結んだと云う。昌々は明るく輝やくさま、盛んなさま。熙も同じく光り輝やくさま、やわらぐさま。

転句の子は先生。ここでは朱子を指す。「少年易老學難成 一寸光陰不可輕 未覺池塘春草夢 階前梧葉已秋聲」既に桐の葉が落ち始める秋だと云うのに未だ池の堤に萌え始めた春草のどこ迄も繁茂していくだろうとの夢を追つてゐる)より引用した。

結句は史記・陳涉世家「燕雀安知鴻鵠之志哉」より。即ち燕や雀には理解出来ない大きな志を胸に秘めているとの喩え。鴻鵠は大鵬。秘の正字は祕。口語訳してみよう。

素晴らしい仁と智に恵まれた若人よ、月下水人の糸によつて君達は結ばれたのだ。旭日が明るく輝やき益々旺んな光を注いでくれ、それに照らされて野も山も暖かく和らぎ輝やき祝福してくれてゐる。

かつて朱子は、その時に「池塘春草の夢」と詠んで若者達を戒め励ましてくれた。

所で君達はあの大鵬が抱いていたような大きな志をきっと秘かに胸にいだいている事だろう。誰もそれに気づかないけれども。

☆紅の糸あざやに虹架かる
比翼となりて世紀翔くべし

聽朋友伊藤清功大兄出演町田男聲合唱團

定期演奏會堪感

平成十二年五月

切切美聲來奈邊
嘈嘈合唱湧深淵
醒覺雷神頌蒼天
群虎咆哮疑劈耳
幽泉烏咽聞顫肩
陽春白雪妙旋律
無聲樂堂唯肅然

押韻・邊淵天肩然

△朋友伊藤清功大兄の出演す町田男声合唱團の定期演奏會を聴きて感に堪えたり▽

切々たる美声 奈邊より來たるや
嘈々たる合唱 深淵より湧けり
夢に聴く羽衣の 雲上に舞うを
醒めて覚ゆ雷神の 蒼天を頌ぐかと
群虎の咆哮 耳を劈くかと疑い
幽泉の烏咽 肩を顫わせて聴く
「陽春白雪」の妙なる旋律
聾なき楽堂 唯肅然たり

〔注解〕

切々は小さな音、嘈々は大きな音。白樂天・琵琶行

行

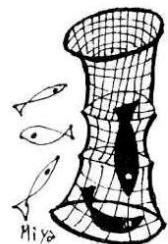
☆美しき嗚咽とまごう。ピアニッシモ
轟ろきわたる雷神の声

近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（二十九）

第一部 北方探検近藤重蔵 下

第一章 重蔵の榮華と失脚 三 拝島の開拓経営

金子正義



(三)

近藤重蔵は拜島開拓経営の初年度は、今迄の原始的な漁獲狩猟を、用具を使っての漁猟方法に進歩させることであり、次に原始的な風俗習慣を改善して、拜島に入り込もうとする得撫島の赤人（露人）を追い返し、北辺の国防を強化する事が基本であると考えていた。

漁猟、狩猟の開発は拜島と得撫島では違つてあるが、得撫島は露人がラッコ島と云うように、^{ラッコ}獣虎が多いがアザラシや、トド等の海獣資源が豊かである。

拜島もラッコや熊皮、鷺羽も得られるが、鮭・鱈・鱒・赤魚・鯨とより豊かである。特に鱈と鮭は季節によつて無尽藏と云う程で、河川に溢れて川の流も堰止される程である。

青紺色の背をした本鱈の大群が産卵の為に川を遡つて、上流の泉の湧く水源近くに雌が産卵すると、雄が精液を

注ぐ、川面に出ている青紺色の魚の背をアイヌが渡り歩く程に鱈は密集している。産卵を了えた鱈の死魚は川を白濁して異臭を発し、川の流れの中に腐爛して川に満ち溢れる有様である。

従つて何んの道具も必要なく原始的な手掴みで充分であつたが、近藤重蔵は、高田屋嘉兵衛が辰悦丸で運んでき、漁具・魚網等を、老門・紗那・留別・内保のそれぞのコタンの乙名に貸与した。

イトコイは、多くのウタレを連れて、拜島開拓移民として來たが、拜島のコタンの住民として漁獲・狩猟をやるよりも、主として山野で軽物の鳥獣を獲り度いのであつた。従つて自由に山野を跋渉できる得撫島に渡つた方がよい。

五月六日、イトコイは、ウタレを従えて岡合船で得撫島に向つた。

岡合船には根室の乙名センヒラが、一人の若者を連れて乗船していた。

山田鯉兵衛は、五月朔、拜島開島式に、エトロフアイヌは、妄に島外出稼に行くな、と伝えていたので、

イトコイ、センヒラが得撫島へ行くのは慮外であった。

然し、イトコイ、センヒラが連れて行くアイヌは蝦夷本島のアイヌなので黙認するが、イトコイが行くのは未だしも、根室の乙名センヒラが何用あって得撫島に行くのか不審に思つて、通詞の山本久兵衛を介して尋ねると。

昨年寛政十一年三月に箱館に着任した、幕府の蝦夷地御用役の、勤番村上常福や、普請役の井上辰之助より、イトコイが、得撫島でラッコや鶴・鷹等の軽物を獲つたりして赤人に接し、密交易を侵さないかを探ることも、含まれてゐるようであった。

山田鯉兵衛が近藤重蔵に伝えると、重蔵は、又しても村上常福の権力介入かと不快に思つたが、得撫島の露人の動静については大方は承知しているが、最近の状況を確かめる必要もあるうかと思つたが、

「拜島の島開きをしたばかりの多用中、赤人の動静を探りに行く迄もあるまい、現在得撫島より北の知里保以島や羅処和島に出稼を行つてゐる蝦夷本島のアイヌや、羅処和島に出来てゐる蝦夷本島のアイヌや、

寛政十一年よりの幕府の蝦夷地御用は、松前藩の場所

(四)

開設された各番役所では、会所近くの河川に前年宮本源次郎や寅吉、アチャボ達が漁場予定地を選定していたので、海岸辺の河口に建網を設けたり、魚道に袖網をつけて袋網に魚を誘い込む等の魚猟の方法をアイヌ達に教え込む為に、寅吉や又四郎、新雇の番役の松兵衛・重兵衛、連れて来た和人の漁師等が手別して、老門・紗那・留別・内保の漁場に詰め切つていた。

勿論、漁場で教え込まれるアイヌも、教える和人漁師

も皆平等に、漁場で働く一人前の漁師扱いで、一人前の賃銀払いがなされた。

是は蝦夷地御用役人の統一された原則で働く者は和人夫であれ、アイヌであれ全て同一賃銀で差別してはならぬと厳守していたからである。

請負制を改善廃止して、幕府の直轄による直捌取引でアイヌ差別を是正し、特にアイヌの賃銀差別を解消しようとしているのであった。

択捉島では未だ会所でのアイヌと和人商の物産取引が始まっていないが、幕府の直轄による直捌であればアイヌ同じ物産を、和人漁師から買い取る値段は異なる。

例えば蝦夷地名産の昆布、四貫五百匁をアイヌから買取る時は、三十五文、和人漁師から買い上げるときは四貫五百匁は九十文。でアイヌの三倍である。

海産物だけでなく漁場や港湾工事、道路開削工事、家造りの工事等の労賃でも、松前藩ではアイヌ人夫は一日玄米二合、和人労務者は二升である。

斯る差別を廃して択捉島では全ての漁獲物も労賃も和人もアイヌも同じく平等であった。

其れを聞いたアイヌは、会所から離れているコタンの男女が喜んで漁場や、海産物加工の働き場に集つて来るのであった。

然し和人並みの賃金が得られるからでは無く、初めて見る大きな魚網を使って魚を取る面白さに惹れて、働きたいと云つてくるのであった。

然し其の働きぶりは、今迄漁具や魚網など使ったことが無いので子供の様に幼稚であった。

のである。

高価な塩を大量に使っても本土に運べば紅鱈は鮭以上に高く売れるのである。

留別のみならず、老門、紗那、内保の漁場でも、同じように大漁となつたので、四会所の漁場十七ヶ所全体の産出量は相当のものとなつた。

五月二十八日には、高田屋嘉兵衛の手持船観音丸（六百五十石積）が老門に入津したので、各会所の産物を集め江戸へ回漕することになった。

観音丸だけでなく、蝦夷地よりの物産は寛政十一年四月江戸靈岸島の埋立地に設けられた蝦夷地産物会所に納め船は再び択捉島へ秋物を積み込みに回漕するのである。斯うして蝦夷地択捉島の海産物は江戸を通して大阪、長崎等に回漕され相等の収益となつた。

山田鯉兵衛の推定によれば、此の秋に鮭を塩で加工して蔵に囲って（切廻）としたり三枚におろして（アタツ）にして囲つておき、タンネモイの鯨油を加えれば三千石から四千石程の出荷となるであろうと云つた。

鯨油については、タンネモイの海岸近くにはザトウ・セビ・白ナガス等の鯨が遊泳し、海岸近くより湾内迄入り込んで浜に乗り上げるのを、タンネモイのコタン全員で一、二頭引き摺り上げて後は放置しておくのであった。

鯨は頭から尾鰭迄、皮も肉も骨も油も残すことなく役に立つのに、エトロファアイヌにとっては使い切れず、砂

浜に異臭を発して腐爛するので困つてゐるので、和人の漁師が来て捕えて呉れば大喜びである。

山田鯉兵衛は本職の鯨漁師を雇えば、一日に五、六頭は突き上げられるであろうと予想して九州平戸の鯨組の羽差し職人二人を雇い、鯨船一艘まで用意して弁済湊に停泊している辰悦丸に積んで来た。

だが、タンネモイ近くに遊泳する鯨群を見た本職の鯨漁師（羽差職人）は、本格的な鯨漁となると、鯨船も數十艘で追い囲むので、鯨漁夫も数百人は必要であり、鯨漁の諸道具、鯨油絞り機を据える油屋蔵も備えなければ仕事にならぬ、と云つた。

山田鯉兵衛も驚き近藤重蔵に告げると、

「確かに本土の平戸や、仙台での鯨漁を見たが、海戦さながらの大捕物であった、タンネモイのアイヌの鯨漁を見分してから、どの程度の鯨漁をするかを決めよう。然し、国境の択捉に多くの人夫が入り込むのは露西亞等の外國に影響もあるから本格的な捕鯨は、今年充分準備して来年度にしたら如何かな、十二月に江戸に戻つて老中伺いで許可を得てから取りかかるうでは無いか」と慎重であった。

確かに各会所の漁場が大漁となつてアイヌ達が精一杯働き通しても、各漁場は手不足である、更に鯨漁まで拡げる必要もなかろうと山田鯉兵衛も今年は充分準備して来年度より始める事に同意した。

近藤重蔵が江戸への漁場開設の報告文に

『エトロファアイヌの大半は是迄漁事も山稼等一向に相任馴不申候間 蝦夷本島のアイヌ五人にて相済可義も十人、十五人相懸不申候ざるは埒明不申 夫故仕事は半ほども出来ざるも人数は倍増仕候……』

賃銀は全て平等でも仕事は半人前しか出来ず、亦それを別段劣つているとも思はず、万事笑顔で急がず焦らず伸び伸びしているのには、近藤重蔵も啞然として見守るばかりであった。

其の様な作業遂行でも、漁場は十七ヶ所も開かれた。

然も、留別の漁場では日々大漁続々で、一網で六千本から七千本もの鱈がかかつた。余りにも多い鱈があるので、其の儘にして置けば忽ち腐り始めるので、寅吉や又四郎、市助も加わって、高田屋嘉兵衛が運んで来た鉄物の大鍋で、煮え湯を通し、エトロファアイヌが始めて見る木製の圧搾機にかけ油を絞り、灯明等の油を取り、其の魚粕は天日で乾して袋に詰め、肥料として本土の海産物問屋を通して全国の農家に魚肥として販売された。

油を取る本鱈でなく紅鱈は美味なので魚肥を取らず、塩引に加工された。塩引鱈は獲ると直ぐ浜で腹を割いて内臓を取り出し作業小屋に集めて腹と頭に塩をつめ一定の高さ迄塩を振りかけ乍ら積み上げ、船の積み荷にする迄に二度程積み返して塩を大量にかけて本土へ船出する

魚網を使っての漁獵も始から大網を用いるのではなく、先ずざる網に魚を追い込む初步から始つて魚道に建網を張つたりして行成網に大量の魚を獲る技術を要する方法があるので、和人漁師はアイヌを教え乍らの作業となり、魚をとるだけで無く関連した作業が伴なうので、多くの働き手が必要となる、男だけでなく女手でも出来る仕事もあるので、夫婦で作業に出たりするようになつた。

原始的な手掘みの漁方より網を張り、漁具を使う漁業や道具を使っての海産物加工となるに従つて、半裸体や樹木の枝葉や、鳥の羽根を綴つたものでは仕事が出来ず、自然に布地の肌着を身につけるようになるのであろうが。近藤重蔵が、始めて択捉島に渡つた寛政十年の頃は南端のベルタルベのエトロファイヌが、アッシを着けず、木皮草根を編んだ衣を着ている女や、魚の皮を干乾にして着衣にしている男が主で、乙名などは熊の毛皮や鷺の羽毛を背に着けていたが、子供達は裸であった。

択捉島にはアッシ樹が少なく從つて、アッシで布地を織ることも無く、山中に少々ある程度なので、秋の皮剥ぎの時から纖維を洗い出し布地の織糸にするアッシ織を、エトロファイヌには伝承されていないのであろうと思つた。

近藤重蔵は択捉島の開発は、豊富な海山の資源を開発し、エトロファイヌを原始的生活より、人間らしい生活に向ふさせ、風俗習慣を和人と同じように改善させよう

山田鯉兵衛は、漁場の番役を通して、半裸体で働く女性に布地の腰蓑を渡し、チセに置き放ちの錢を使わせた。共稼の夫にも木綿の胴巻きを渡して、同じように錢を持ってこさせた。又酒の好きな男にも錢で渡した。斯うして錢で、米でも煙草でも手に入る事を理解させた。

コタンの仲間同志で物々交換していた品も錢で得られる事が次第に理解できるようになつた。

金錢貨幣で、米でも煙草でも、鍋釜の道具も手に入ることも分つて来る。と自然に働く女達は布地の肌着を身につけるようになり、番役が古着の和服を与えると、髪を結ぶようになり、日常の暮らし方も変化して夫も和人のようく月代や鬚を剃るようになり、風俗にも変化が生じて來た。

自身のエトロファイヌの娘も美しくなるので、和人の

出稼人夫が島娘と結婚する者も出て来て、自然に同化が進み、名も和名に変える者も出て来たので、山田鯉兵衛は、改名したアイヌは村方の人として、其の証しに守法人の「改俗牌」を与えた。月代や鬚を剃るようになり、風俗にも変化が生じて來た。

村方アイヌは木製板、惣乙名は名主として真鍮板、惣乙名は脇名主として銅製であった。表には日付、和人名と旧アイヌ名を記し、裏には奉行名と花押もあった。改俗牌は、近藤重蔵が長崎奉行吟味役の時、オランダ商館長のゲイスルト、ヘンミイから、英仏蘭いすれの国も植民地にした原住民を支配するのに困ったのは、改名

と思っていたので、冬の寒氣で手足も凍てつき、耳も鼻も凍傷で崩れ落ちると云うのに半裸体で過すとは何たる事か、せめて子供達にはアッシを着せてやり度い、蝦夷本島厚岸より百反程買い集めて支給すべきでは無いか、其れが幕府の御仁政と云うものだ、と山田鯉兵衛に云うと、鯉兵衛は早速、厚岸の番役だった重兵衛に調べさせた。

「箱館相場で何んと一反につき四、五百文で百反となりと相等の額となりますので、念のために古着ではと当たりますと、古着一枚に付き元値は、上方江戸の錢相場で十三匁位より十七、八匁で、売渡し直段は三十四、五匁より六十匁餘で、銀六十匁は一両でありますので相当の値段です。

羽織アッシが錢百十六文で、それはタバコ一把の値でありました。

何れにせよ、エトロファイヌの働き手全員に、アッシ一枚ずつ給するとなると大変な金額となりますので、来年度の予算に組み入れた方が宜しいかと思います。

又、エトロファイヌは、物品と通貨の等価関係が分りません、漁場や山林での働き手の賃銀が和人と同じで一人前の賃銀玄米二升であつても、現品でなく賃銀として鐵錢、銅錢で支払われるのは嫌います。従つて何にも買う必要も無く死蔵された貨幣で、衣類を買うことを教えるのも生活の改善向上となるでしょう」

と生活習慣を改める事であると訊いたが、亦、露西亞が北千島に渡り来て羅^{ラショク}処和、新知のアイヌをクリルと呼んで鉄砲で脅して従がわせ、首に十字架を下げさせて従服の証にした。と訊いたので密かに用意したものであつた。 択捉島が活況を呈し何處のアイヌも保護されると知つたアイヌや、赤人に銃で恫喝されて毛皮税を取り立てられ、従服した証に十字架を受けられた酋長などが、択捉島の同族を頼つてやって来て、十字架を胸から外して近藤重蔵の下に平伏して和名を与えられて、漁場で働くようになつたクルリ人も居た。

近藤重蔵等が寛政十年に始めて択捉島に標柱を建てた頃、日本名に改名した者もいたが、其の頃のエトロファイヌは四百二十人程であったが、寛政十二年にはエトロファイヌは千百十八人を数えるに至つた。同時期の国後島も二百二十人となつた。

近藤重蔵は、漁場の成功と関連してエトロファイヌの風俗の改善も、強制せずに自然に果しつつあるのを密に喜んだ。

近藤重蔵は、択捉島の開拓經營の根幹を成す漁場の開設に成功し、エトロファイヌの風俗習慣の改善も徐々に効果をあげ始めたので、平行して、択捉島全島の自然景観、産物、コタンの生活を確認する為に六月より七月にかけて択捉島全体を巡回し乍ら人別改めを始めた。

海岸伝いの行程なので、団合船で随行者もなく、家僕の梅吉、通詞役の市助、宮本源次郎と其の従者、アイヌ人夫二人団合船の漕者二人であった。

行程は山狩漁獵や荷物の輸送でないので、重蔵は船上で、前年航路按検をした宮本源次郎の説明を聴き鳥瞰観察した自然景観を野帳に書きとめていた。

重蔵は、択捉島に来て今更の如く思えるのは、天候も良く天地間陽気に見え海岸辺りは形勝の地の如く思え、会所を置いた老門^{オイド}は手を加えれば要害の地となるであろうと思つた。

択捉島の気候は、夏場の故もあるうが、存外に靄も薄く時化も少ないが、国後島よりは寒いように思われた。閏四月二十四日老門に着船以降綿入の重ね着をしていた程で、会所の裏山の奥の高山には残雪もあり岩穴には、五、六寸程の白氷も残つていて、会所の番役や働き方は単物を着る日は僅か計りであったが老門会所の裏山の残雪も追々に消え、其の後山桜が夥敷花咲き巖石の上の唐松の間に相交つて殊の外見事な風景となつた。

て薬草にして売り渡すように教えた。

七月二十一日近藤重蔵は択捉島回浦の途中、マクヨマイで、羅処和島出身のアイヌ、イチャンケムシ一家三人に会つた。元々エトロファイヌであるが、出稼に出た儘北千島各島々を渡り歩いていたが択捉島の噂を聞いて戻つて來たのである。

近藤重蔵は二十六日から二十七日にかけて薬取に於てイチヤンケムシに得撫島以北の千島諸島の地理について聞き取り、得撫島の北にある北知里保^{レブンナリホイ}から磨勘留^{マカル}に至る島々の絵図チュプカ島図を描き、後に重蔵が文化元年に完成させた『邊要分界図考』になつた。

亦、薬取のシャルシャムにあった露人の建てた十字架を引抜いて、前々年国後島でエトロファイヌに与えた標柱、『大日本恵登呂府 江戸近藤重蔵建』を立て替えさせた。尚、露人の十字架は、図に書き取つて江戸に送つた。江戸詰の蝦夷地御用役が、番町明地薬草植場に差置されている、大黒屋光太夫に確認させたと云う。

亦、得撫島に出稼に行つてゐるエトロファイヌを迎へた市助が、アイヌを連れて戻つて来て得撫島の赤人の動向を、山田鯉兵衛を通して近藤重蔵に報告した。

（得撫島の赤人（露人）は寛政七年にカムチャッカより大船で男女六十人程の移民団で、團長はワシレイニヲブ

此の唐松はアイヌ語でオグイと云う苔を生ずる蝦夷地だけの樹木である。其の辺り一面桜草や、赤黒の百合花が一面に咲き競つて見事であり、続いて菖蒲、くわん草が毛氈のように咲いて見事であった。

春花も夏花も一時に満開となり鶯や杜鵑も並び囀り雲省などは他所よりも大振で囀りも大きく心地良い、其の他エトヒリカと云う鳥が鶴の如く嘴の赤い鳥で、アトシヤヌプリ辺の沼沢地帯に多く集つて、舞い上つては急降下して水中の魚を嘴で啄んでいた。

山麓の野草の中に、エトロファイヌが食料にする「トマ」と云う珍しい草根があつて択捉島の各地に自生していて、平素アイヌが掘り出して食用にしていた。

近藤重蔵は、其れは「延胡索」と云う薬草で、古代胡吟味しても不明であると返書が届いたが、田村元長なる京の薬師より、調書が届き「唐十品の薬草であつて、癆に用いる薬で、調整すれば壹斤七八匁に買受ける」との事であった。

重蔵は「延胡索」を掘出すのは子供や老人でも出来る作業なので、掘り出して泥をよく洗い落し、天日で干し日本との交易を望み、特に野菜を求めてゐる。

所が、イトコイが、今は異国との交易は禁じられてゐるから本国に帰るようとに伝えたが、効果がなかつた。唯、蝦夷本島アイヌが、近頃多くなつたので警戒の為にと、鉄砲を構えて油断なく行動していた。

又、頭立つ者が、当夏には本国より迎えの大船があるので、来航したら択捉迄行つて日本の役人に逢い度い、若し秋に至つても迎えに来ない時は、明年早々に択捉に行き交易の相談に行くであろう、其れ迄得撫島の露人は小舟數十艘を新造して荷物を積んで帰國する用意をしておく。

と云つてゐたが得撫島には、新造船を作る木材など払底して無く喰え寄せ集めて造船したとしても、露人が蓄えた物品は二軒の蔵に満てるので、積み込む事は無理である。

山田鯉兵衛は、露人は表向きには手強く見せかけてい

我が方でも、異国との交易は禁じていると、アイヌに言い渡し乍ら、当方の役人が現地に渡って、直接赤人に伝えてないので偽りを云つてゐるのであろうと、我が方に嘲笑しているのであろうと思われる。』

山田鯉兵衛は、得撫島等の出稼から戻ったアイヌから聞き取つた。露人の動静を要約して近藤重蔵に報告した後に、山田鯉兵衛の意見として珍らしく強硬に主張した。

「露人の得撫島殖民が迎えの船の来るのを待つてゐるようだ、出稼アイヌの話でありましたが、当方の蝦夷地御用択捉島係と致しましては、鯨漁が明年度より本格的に取りかかる予定ですが、既に国後島泊港で、西国方面の廻船業者の仕組んだ鯨漁の本格的な活動が始まられる

ようです。漁場は国後島か、択捉島かよく判りませんが、始まりますと二、三百人かの羽差職人や何十艘もの鯨船が走り廻ります。近藤様が、択捉島の鯨漁については、国境の地に入り込むと異国に影響を及ぼす恐れがある、と申されましたが、

現在得撫島の露人の殖民団が帰国の一迎え船を待つてゐる時、鯨組の羽差職人が大勢海上で鯨漁をやつておりますと露国の迎え船は近寄らず、帰国見合せとなるも計り難く、露人殖民団の定着の理由とも成ります。

更に帰国見合せとなりますと、露人共は交易を求めて択捉島へ渡来する事も計り難く、若し其の様な場合は、渡り口に差留置き、寄せ付け申さず、蝦夷本島アイヌを

通して早々に得撫島へ差戻して迎船を待つ様説得させます。

従来エトロフアイヌもウルツブアイヌも、松前の役人は勿論本土の幕府役人にも頼らず、出稼露人と交易していたので、才覚あるアイヌに國法で異国との交易は禁じられているので早く國元に帰るよう申し諭することが肝要です。露人達は、出稼アイヌが勝手に異国との交易は禁止だと言つてゐると信じないのでしょうが拙者が出向いて、本国へ引き上げるよう説得致しましようか』

と山田鯉兵衛が進言するように云うと、

近藤重蔵は

『いや、今得撫島にいる露人達は、露西亞本国よりの殖民団でなく、シベリア、ヤクーツクの商人や其れに従う移住殖民であるから、我が方が幕府役人が直接出向いて、露人達を立ち除かすと、露人達に怨を起させて、国と国との不和争いの大目に至るやも知れぬ、寧ろアイヌ達に國是によつて最早や交易は出来なくなつたから帰国するようによつて、伝えた方が穩便である。

今迄にも露西亞が通商を求めて來航した時に、幕府も松前藩も來航者が露西亞政府からではなく、商社や商事殖民団なので、公には応じなかつた。

例え安永七年（一七七八）根室半島北岸ノッカマップに通商を求めて來たのは、露西亞のヤクーツクの商人ラストチキンが派遣した、シャバーリンなので、松前藩

の上乗役新井田大八が対応したが、正式の便で無いから翌年再航せよと帰し、翌八年再度シャバーリンが厚岸に來たが、対応した、松前藩浅利幸兵衛が、國法により通商不可として帰させた。幕府にも知らせなかつたが、浅利幸兵衛は、シャバーリンを正式の使節と認めなかつたのである。

處が寛政四年（一七九二）ラクスマンが、女帝エカテリーナ二世の國書を持って根室に來航した。海難漂流の大黒屋光太夫等の救命者送還の事もあつたが、幕閣重臣は重大事として協議、鎖國の國是により修好通商条約に応ずる事は不可として、此の祖法を説明する、対応役宣諭使を以つて開港せず、長崎への通行許可信牌を与えて帰国させた。

対応役の宣諭使は目付の石川将監六郎左衛門忠房、西丸目付の村上大学義礼であった。

対応は根室より松前に招致して礼を尽し帰国に当つては太刀、米等を呈したが、國書は受取らなかつた。ラクスマンも目的を達せず残念であろうが、長崎への通行許可信牌を得たことで納得した。國書を返されて失望したであろうエカテリーナ二世も、其れを以つて事を構える心狭き女帝では無かつた。其れよりも欧羅巴は仏蘭西大革命の動乱でルイ十六世は刑死しナポレオンの馬蹄で露西亞の大地が踏み躡られるかも知れぬ時である、極東の事など煙の如く消えて仕舞つたようであつた。其れより

もエカテリーナ二世自身が一七九六年に急逝した。従つて露西亞との和親通商のことは消え失せたようであるが、ラクスマンに与えた長崎通行の許可信牌は生きているので、後日再び開港問題として再発するであろうと思う。

斯のように国と国との通商の約束は重要なので、エトロフアイヌやウルツブアイヌの露人との交易は、公な取引でなく自分達の責任の中で自由にやつていたのである。

最上徳内先生が寛政二年（一七九〇）得撫島の東海岸ワニナウで発見した露人の住居跡地は、安永四年（一七七五）より、天明二年（一七八三）まで七年間も居住していたのは露国の「レベデフ商事殖民団、PAVELLED EV-LASTOTCHKIN」であり、此の商事会社等は我が國と国交を結ばずの交易取引で、蝦夷本島アイヌや、ウルツブアイヌ和人商人、回船問屋等と、露人商人が自由交易していたが、遠方の事もあって交易相手方が来島しないこともあつて、次第に露人も帰国して跡地に住居跡のみ残つてゐた。と徳内先生は帰国されて報告している。今度も得撫島の露人と得撫島のアイヌ、エトロフアイヌが異国人とは國の定めで交易しないと云えれば、露人も致し方も無いので自然に帰国する。争い事も無く得撫島の露人は引き上げるであろう』

と山田鯉兵衛と話し合つて理解したが、翌日得撫島に

出稼していたエトロファイヌが二人連れ立って老門の番役所に来て得撫島の露人からと鷺羽二尾と玄狐皮一枚を差し出した。通詞の山本久兵衛が訳を聞くと、

「今度の択捉島開発に御役人衆が会所に詰めていると聞いたので、祝儀として鷺羽二尾と玄狐皮一枚を御役人に差し上げて呉れと頼まれたと持つて来た」と云う訳だった。

近藤重蔵は、受け取る事は出来ないが預り置いて、露人の本国より引き上げる時に差し返そう。と山田鯉兵衛に渡し乍ら

「穩便に露人が引き上げ千島の国境の定めを明確にする事や、鯨漁の事など、幕府の重臣達の見解を確認せざるに押送係として決定すれば、必ず、独断専行の誇りを受ける、文書を以つて報告を密にしても仲々真意が伝わらぬ、漁場設置成功の報告もあるので一度帰国して老中伺いをして幕府の基本方針を確認しようではないか」と云うと山田鯉兵衛も全く同感で、早速、帰国伺いを出しましょと云つた。

松平信濃守忠明や大河内善兵衛等の見解を確かめに箱館や様似に行つても良いが、八月になると海上は荒れる日が多いので蝦夷地御用役の重臣達は早く江戸へ引き上げるであろうから、寄らずに直接江戸へ参ろうと山田鯉兵衛に、文書の調成を頼んだ。

程良く山田鯉兵衛は、択捉島の漁場の成功と鯨漁の問

て來たので、其の國絵図を見て千島列島を確かめたりしていた。

山田鯉兵衛はタンネモイ鯨漁の諸設備費用の細部の見積費の予算案を書いていた。

程無く江戸より連絡があつて、山田鯉兵衛は先発し、重蔵は高橋重賢、湯浅三右衛門と同道し、奥州街道を南下して十二月十二日江戸に帰着し十一月に先着していた山田鯉兵衛と共に登城し、連日の老中伺いの評議に報告して多忙であった。

題をも書き、露人の立ち帰りの難点等を克明に書いて、末尾に報告の為に帰国し度い旨の帰国願としてあつた。

末尾の方を参考に記すと次の通りであつた。

「……得撫島に罷越候赤人のエトロファイヌとの交易に対する、交易不相成事の申渡の事について、入組候仔細も有る書面難認取 其の様子も委細御直に申上度奉存候に付 藤右衛門様 箱館表御在勤中に御座候ハば同所迄罷出奉相伺候興又ハ若同所御出後に相成候は私共義も一旦帰府被仰付被下候様仕度奉存候

右宜御評儀被成下候様偏奉願此段御内々申上度置度如何御座候 以上」

六月廿九日

山田鯉兵衛
近藤重蔵

松平信濃守忠明 様
石川左近将監 様
羽太庄左衛門正養 様
三橋藤右衛門成方 様

と届出ていた。

此の許可状が届くには二ヶ月を要するので、近藤重蔵は、コタンの人別改めを続け、得撫や知里保以辺り迄数年前より出稼に行つていた択捉や蝦夷地本島のアイヌが戻つて来ると、北千島の状況や露人の動静を確かめたり、師の本多利明から松前広長の「蝦夷之図」の写しを持つ



千篇萬律

☆昨年十一月各新聞に小さな記事が載った。

「中國の歴史、考古、天文、科学測定の専門家約二百人が国家的プロジェクトとして取組んできた中国古代王朝の年代確定研究が終了し、最初の王朝夏の成立は紀元前二〇七〇年との結論に達した。

各地の遺跡で発掘された甲骨文字や青銅器に刻まれた銘文から年代の記載を調べ、古代天文学の暦法を現代天文学により計算し直し年代を推定した。これは司馬遷の史記に記された紀元前八四一年より凡そ一二〇〇年遡ることとなる……」

☆われら日本民族は黄河文明圏＝漢字文化圏に属する。他事ではない。わが文明の古代が明らかにされた事になる。昂奮するを禁じ得ない。

☆わが国の文学史を繙とくと、記紀、風土記から記述が始まわり懷風藻、萬葉集と続く。それ以前は口頭伝承による神話伝説の類だという。私は予てこの記述に不満である。こんな貧弱な古典の歴史しか持たない文化ではあるまい。ある日突然古事記や日本書紀、懷風藻や萬葉集が出現する訳がない。その前史がある筈である。それは夏王朝に迄遡ぼれた黄河文明そのものに在る。

☆甲骨文字に始まる卜辞、金石文や銘文。そして詩經、書經、易經、禮記、春秋、論語、孟子、大學、中庸。

更に老莊や孫吳、諸子百家の説。楚辭、史記、漢書、

後漢書、三國志。説苑や説文解字。國語や千字文。山海經や神仙傳。華嚴經等の佛典類。三略等兵法書。六朝の詩や四六駢麗文。そして唐詩。鳴乎、已矣乎。「我々のもの」である。漢字で書かれてはいか。これを何故わが国文学史の中に正式に位置付けてはいけないのか。漢字は単なる記号としてわが国に伝わったのではない。同時に思想、文化が伝えられ消化されていったのでありいわば日本人の血となり肉となつたのである。八世紀初頭に記紀が出る数世紀前からこれら漢籍が貪ぼるように読まれたに違いない。この点で西洋の古典とは一線を画する必要がある。西洋がわが国文化に接触し始めたのは中世以降である。

☆菅原道眞は白樂天を敬仰し菊を賞する趣味迄真似た。芭蕉は李白の詩文を骨の髓迄消化し俳句を作った。先人達は論語や千字文、詩經や楚辭を暗記する程に読み尽くしたからこそ懷風藻や萬葉集に結実し得た。

☆改めて云う。中学高校の国文学史の教科書は全て記紀から書き起こされているがこれは大きな誤りである。それ以前、既にこの国には重厚な漢籍が存在したのだ。嬉しい限りではないか。これ抜きでわが文学史は語れない。文化に国境はない。これらは我々の血肉となつた誇るべき黄河文明圏のものであり、夏王朝は我々の歴史そのものである。昂奮を禁じ得ない所以である(く)

「まんじ」 第七十九号

平成十三年二月一日発行（非売）

編集 鯨游海

発行 柴田富佐子

西一〇一—一〇〇六二

東京都千代田区神田駿河台二一九
柴田方

〔作家群〕

(まんじ)編集部

● ○三(三一九三)〇〇九四 柴田方
郵便振替口座 〇〇一二〇一四一九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印 刷 大和印刷株式会社
埼玉県川口市青木一一十二一二十
テ 三三三一〇〇三一

○四八(二五四) 三三一一

まんじ

No. 80

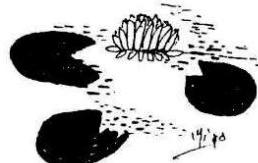
記念号

2001.5.1

まんじ 第八十記念号 目 次

連 載		論 考											
人形師奇譚	三戸岡道夫	虚飾の礎	千坂精一	睡魔	鈴木昭三	人形師奇譚	三戸岡道夫	虚飾の礎	千坂精一	睡魔	鈴木昭三	人形師奇譚	三戸岡道夫
おふく	森太田和貞												
可もなく不可もなく	新井青木昭成												
予定調和	柴田鯨游												
論語の解釈・二千年の誤りを糺す —学説、通説の盲点を衝く—	新井青木昭成												
配達	柴田富佐子												
孤獨	空に祈る												
泥めんこ	瀧澤												
演劇台本箱根烟宿	鍋屋透												
破竹の唱(上)	中相												
北条時宗とその時代(二)	柴田瀧澤												
師恩・唐詩の淨書	金子島津中泉原精												
千篇萬律	正彦子												
表紙・カット	カット												
掲載作品総目次(第七一号～第八〇号)		掲載作品総目次(第七一号～第八〇号)		掲載作品総目次(第七一号～第八〇号)		掲載作品総目次(第七一号～第八〇号)		掲載作品総目次(第七一号～第八〇号)		掲載作品総目次(第七一号～第八〇号)		掲載作品総目次(第七一号～第八〇号)	
鈴木國男	宮城正彦	編集	金子正義	島津隆聖	中泉聖	相原精	鍋屋次	紙透	瀧澤	柴田游	鯨海	新井宏	青木昭成
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
226	224	222	188	154	141	131	127	122	116	109	101	96	81

人形師奇譚



三戸岡道夫

(一)

人形師の世界には、

(人形草を見たら、命が危い)

という言い伝えがあった。人形草を見ると人形師の生命が終るというのである。人形師の生命が終るとは尋常でない。

だから江戸の人形師たちは人形草に逢うのを避けた。しかしその人形草なるものを実際に見た者がいたわけではなく、ただ噂に語りつがれているだけだったから、避けようにも避ける方法がなかった。いや、避けようとするほど、心の片隅に、

(人形草とはどんな草なのか)

(その人形草を一目見てみたい)

という衝動が突き上りてくるのが人情だった。

人形師の兆次もその一人であった。

今日も兆次は風呂敷からあふれるほど仕入れた布切れを、仕事場の板の間に並べながら、あれこれと品定めに余念がなかった。

人形の衣裳に使う端切れは、兆次が古着屋や端切れ屋、着物の仕立て屋などを廻って丹念に集めてくるのだが、集めてくるとそれを仕事場の片隅の大風呂敷の中へはおり込んでおく。そして月に一度、風呂敷を解いて中の端切れを整理するのが、兆次のたのしみの一つなのだった。

兆次の長屋の部屋は二間である。大きい部屋が仕事場になり、住むのは小さい方の部屋である。仕事部屋の中ほどには大きな仕事台が置かれ、おびただしい作りかけの人形や、色とりどりの端切れ、それに鉋や小刀、糊などが、所せましと散乱していた。仕事台の周囲には材料に使う布切れが山積みにされ、背後の棚には、作りかけの人形の胴や、首や、足などが、まるで獄門台に並んだように横たわっていた。

風呂敷の中にはさまざまな模様の端切れがつめこまれていた。華麗な友禅染もあれば、粹な江戸小紋もあり、花模様、縞模様、紗綾形模様と妍を競って、兆次の手による裁断を待っていた。兆次はその一枚一枚を手にとりながら、

(これはどの人形に着せようか)

と空想するのがたのしみだった。

仕事棚の上には、身体は出来上がったが、着物や、帯がまだ決まらず、未完成のまま待機している人形がいくつも並んでおり、その人形の一つ一つに、

「この端切れはあの人形にいい」

と、次々に衣裳がきまり、兆次の仕事がリズムに乗っていくのだった。

そうかと思うと、端切れの方から人形のイメージが触発されてくることもあった。この端切れを着て似合う人形は、どんな人形だろうかと空想の手を伸すと、兆次の瞼に幻の人形の姿が浮かんでくる。事実、そんなふうにして作った人形に、案外と傑作が多いのだった。妖しい霧囲気の端切れからは、思いがけぬ妖しい人形が出来、うれいを含んだ端切れからは予想もつかぬ可憐な人形が出来てくる。

(もし人形草の模様の端切れがあつたら、どんな人形が出来るだろうか)

兆次はふとそんなことを思うときがあった。

だが、人形草を見た者は誰もいない。どんなわしい草木図録にも載っていないから、見当のつけようもなかった。

しかし兆次の心には、人形草にたいする自分なりの思ひがなんとなくあるのだった。人形草のイメージは、なんとなく水草のイメージに重なってくるのだった。理由はわからない。それは、これまで兆次が何百枚、何千枚という端切れの模様を見ているうちに、いつのまにか心の底に定着した予感のようなものだった。

今日も風呂敷包から取り出した端切れを、これは若い娘用、若衆用、中年の女用、童用などと、さらにこれは着物、これは着物などと分類していると、その中に幻想的な水草模様の布地が見つかった。

それは着物の柄というよりも、なにか祭壇の装飾用の布地のような気がするのだったが、ちょっと不思議な感じの模様だった。

水面に浮かんだ落花の絵柄だったが、手法が流水の断面図といった角度から描いてあったので、落花の層の下に水が流れ、その流水の下に落花、そして落花の下に流水という工合に、落花と流水が交互に配置されて、描かれていた。

問題はその流水で、その流水の中に細長い水草が、水になびいてゆれ動いているのだった。水草の幻想的な青

の色が、とてもこの世の色とは思えない凄さなので、

(もしかしたらこれが世にいう人形草なのではあるまいか)

そんな予兆のようなものに、ふと兆次は身をふるわせた。

と、その時であった。

ガラ、ガラ

と格子戸が開いて、

「ごめんください」

案内を乞う声がした。兆次はのび上って腰高屏風越しに表の方を見た。その声があまりにかすかな声なので、客は女かと思ったが、そこには若い男が立っていた。

が、若者は立っているというよりも、格子戸の内側に、はかなげに漂っているという感じだった。だから兆次は、一瞬、その若者が、いま見ていた布地の水草模様から抜け出てきたのではないかと思つたくらいだった。若者はいま水中から出てきたばかりのように、陰気な感じで、まっ青な顔をしていた。

「なんのご用で……？」

若者がいつまでも黙っているので、兆次の方から声をかけると、

「人形を作つてほしいのです」

若者はこれ以上暗い声はないといった声で、そう答え

と、ねばっこい注文をつけて、帰つていった。

若者が去つてしまつと、兆次の心は、奇妙な人形を注文する偏執狂のような若者の取扱いを若干もてあましていたが、その暗い水草の雲のような千代吉の姿が瞼から消えず、

（いつたいあの若者に何が起きたのだろう）

と、いつそう関心が高まつた。

(二)

兆次が推察したように、千代吉は人生に絶望していた。原因は女である。相手は吉原の花魁だった。

源氏名は初花といつたが、本名はお新で、もと神田の裏長屋に住む職人の娘であった。

父親というのが子供を作る以外には能がないどうたら職人のため、おきまりの貧乏を絵に描いたような生活で、お新を頭に六人の子供たちが、いつも空腹で、眼をぎょろつかせていた。お新が苦界に身を沈めるよりほかに、家を助ける方法がなかつた。

初花と名乗つて、三芳樓という小さな店から出でていた。

お新が、千代吉と出逢つたのは、二十一のときであった。すでに店に出てから四年は経つたが、お新にはいまだに娘々した素人っぽいところが残つていて、十七、八ろつかせていて。お新が苦界に身を沈めるよりほかに、家を助ける方法がなかつた。

た。

(嫌な客を迎えてしまつたな)
と兆次の方も暗い気持に引きずり込まれたが、
「はい、わたしは人形屋ですからご注文には応じます
が、どんな人形を……？」

こんな陰気な男はどんな人形を注文するのかと、兆次はちょっと心配になつた。

「女の形です。それも若い女の形……」

「はい、それはどんな女でしょう」

「花魁です」

「へえ、花魁人形ねえ」

この陰気な若者と華やかな花魁と、どんな関係があるのかと、ちょっと怪訝な思いにかられたが、

「大きさは等身大のものをほしいのです」

若者は追いかけてそう注文した。

「ふむ、人間と同じ大きさですか」

若者は千代吉と名乗つた。兆次は頭の中で、陰気な千代吉の横に華麗な花魁人形を描き、その取り合せの妙に、ますます狐につままれたような気になつた。

千代吉は花魁人形について、あれこれと細かい注文を出すのだった。とくに人形の顔については注文がうるさく、口だけでは不十分だと、紙に描いて説明する執拗さで、最後に、

「一度作ったものを見た上で、決めさせてください」

かれたのである。

二人の間は急速に接近して、気がついた時にはもう離れられない間柄になつていて。

千代吉は日本橋の木綿問屋に勤めていたが、やつと手代に手が届くか届かないかといった年頃なので、そうそう三芳樓へ通う金がつづくわけがなく、ましてやお新を苦界から救い出す金の工面など出来ようはずはなかつた。

「いっそ一人で死んでしまおうか」

派手な蒲団の中で抱きあいながら、一人でささやき合つたこともあつた。

「ええ、千代吉さんと添えないのなら、わたしも死んでしまいたい」

「本当に死んでくれるかい」

「ええ、死ぬわ。そうね、どうせ死ぬのなら、夢のよくな死に方がいいわねえ。ねえ、こういう死に方ってどうかしら。水草で二人の身体をしばつて、川の中で心中するのよ。いいと思わない」

お新はなにかを思い出すような眼ざしでそう言うのだった。

「水草か……」

水にゆれる水草は、なんとなく幻想的な感じを千代吉に与えた。水草で固く結ばれた二人の心中死体が、大川の流れの底でひらひらと揺れるさまを、千代吉は心に描いた。川底に生えた水草も死体といつしょに揺れる。そ

んな情景を幻のようく思い浮かべながら、千代吉は、

「水草心中か……」

「そう、二人の身体が抱きあって水草のようく揺れるのよ」

しかしお新にそんなことが許されようはずがなかつた。

貧乏長屋に住む親子七人の生活が、お新の肩にかかるつているのである。そのためにお新は働いて、働いて、血を吐くほど働きつづけねばならないのである。

やがてこの苦界のお決まりのように、二人には破局がきた。突然、お新が三芳樓から姿を消したのである。お

新はさる藏前の大店の旦那に、身請けされたからだつた。

旦那は萬屋善兵衛といつて、五十歳をちょっと越した男であったが、自分の娘のようなお新にぞつこん惚れたのである。

だがお新と千代吉との間柄にうすうす気づいていた三芳樓のおかみは、そのことを千代吉に知らせなかつた。

下手に知らせて、心中騒ぎでも起こされたら、元も子もないからである。

だから千代吉がそのことを知ったときでも、おかみはお新の行く先を教えず、

「ね、あんたが追っかけていったって、どうなるものでもないのよ。お新は貧乏な家族の生活を助けなきゃならないの。自分で自由にならない身体なのよ。だから誰かに身請けされて安気に暮していける方が、お新のため

長屋へ帰つても、その絶望感は消えなかつた。

千代吉はふたたびお新の黒髪に顔を埋めて、その匂いをいつまでも嗅いだ。すると、身請けを前にして、千代吉に渡そうと黒髪を切るお新の姿が眼に浮かんできて、またむせび泣いた。そして泣きながら、

（死ぬならこの赤いしきで首を吊るのが一番いいな）

と思つた。

千代吉はそうと、しきを首に巻いて、強く引っぱつてみた。するとお新のしなやかな両手で首を締められているような甘美な戦慄が、全身を走つた。

その翌日から千代吉の紐集めがはじまつたのである。

もちろん首吊りのための紐である。

町を歩く千代吉の眼つきが変わり、その眼はたえず紐を探していた。他のものはいっさい眼に入らない。

（どこかにいい紐はないか）

千代吉の眼は憑かれたように輝き、道を行く女の腰にそれを発見したときは、犬のようにその後をつけて行つた。

だが紐が五本、十本と集まるにつれて、千代吉の紐へのイメージが少しずつ変わつていつた。最初は首吊りに役立てばいいと思っていたのに、それだけでは満足できなくなつた。もう一つの欲望が首をもたげてきたのである。それは紐の装飾性であった。紐はたんに千代吉の首

を吊るだけでなく、千代吉の死体を飾りたてるものでなくてはならないのである。

千代吉とお新が寝物語に心中話をしたときの、二人の死体のまわりで揺れる水草のようく、紐は千代吉の首吊り死体のまわりでゆらめいて、死体を飾り立てねばならないのである。すなわち紐は死への装飾なのである。

そのために紐は多ければ多いほどよかつた。何十本、何百本と、長さも色彩も種類もとりどりの紐が多ければ多いほど、効果がある。千代吉は、その華麗な紐の瀧で飾られた自分の首吊り死体を想像すると、ますます死への甘美な誘惑にのめりこんでいた。

その紐には、華やかな女の腰紐や、しきなどが、千代吉の好みに合つた。しかしそれだけでは足らない。その他にも美しい組紐とか、色とりどりに染められた織物の糸、さらに蜘蛛の糸とか、蛇の抜けがら、女の黒髪なども集めては、紐の蒐集へ加えていた。だから紐の群集は、美しさに加えて、次第に妖しさ、異様さを増していった。

こうして紐の蒐集にのめり込んだ千代吉は、ついに木綿問屋の勤めをやめて、浅草の組紐屋の職人へと仕事を変えてしまつた。組紐屋の方が、紐集めにより便利だと考えたのである。

千代吉は店の紐を組みながら、暇を見つけては、自分の考案した紐も組んでいた。そして一本組むごとに、

にも一番いいことなのよ。ね、お新をそっとしておいておやり（あんき）など暮しているものか）

と千代吉は思ったけれども、若い千代吉にはそれを押し返す言葉が出なかつた。

「その代わり、あんたが来たらこれを渡してくれって、お新が置いていったわよ」

おかげは小さな風呂敷包を千代吉に渡した。開けてみると、お新の黒髪と、いつも身につけていた赤いしきが入つていた。

千代吉の顔が急にくしゃくしゃとゆがんだ。千代吉の脳裏に、お新を抱いた時の黒髪の匂いがソソと抜けるよう走つた。その赤いしきを解くときのお新のしなやかな手つきを思い出すと、もう千代吉はいたたまれずに肩をぶるさせて泣き出した。

「さあ、男なんだから、いつまでも泣いてなんどいな（得心などいくものか）

だが、千代吉は帰るより外なかつた。千代吉は受取つた風呂敷包をかかえると、三芳樓ののれんを出た。そして大門にむかつてよろめくように歩きながら、

（ああ、お新はもういないので）

絶望感に打ちひしがれた。

千代吉は歩きながら、自殺することを考えていた。

その中へお新の髪を一本ずつ組み込んでいった。

こうしていつのまにか紐の蒐集は千代吉の両手に抱えきれないほどの量になり、それを何束にもまとめて長屋の部屋の隅に吊るし、毎日眺めていた。独身者の殺風景な部屋に不似合いな華麗な紐の束は、あたかもお新の華麗な花魁道中を千代吉に連想させた。

そんな頃千代吉が耳にしたのが、人形師兆次の名声だった。兆次は、

(その作る人形には魂があるみたいだ)

と噂に高い人形師である。人形に魂があるのは、

(人の心を迷わす人形)

だからであり、

(人の魂が吸いとられるような人形)

だからであった。

その噂を聞いたとき、千代吉は兆次に花魁人形を作つてもらおうと思ったのである。どうせ死ぬのなら、魂を吸いとられるような凄い花魁人形に、魂を吸いとられて死にたいと思ったのである。

(三)

兆次の人形師としての出発点は、布切れへの偏愛にあつた。

兆次は、母と子の二人きりの家庭に育つた。父は死ん

いつの間にか兆次は、母親が裁断して捨てる布の端切れを、ひろい集めるようになっていた。

「男の子がそんなものを集めてどうするの……」

と母親は最初眉をひそめたが、あとは見て見ぬふりを

「ほら、これもきれいだよ」

と、切り取ったばかりの布地の断片や、珍しい端切れをくれるようになった。

兆次は母親から風呂敷を一枚もらうと、その中へ端切れを大切にしまっておいた。次第に端切れの量はふえていく。すると、ますます端切れへの愛着は深まっていった。

そんなある日、兆次はいつものように母親について吉原へ着物を届けにいった。

その時、一人の遊女が兆次の前で着替えをした。眼の前にいるのが子供とあって、女は無警戒な姿勢で着物を脱ぎ去った。兆次の顔の先で着物の裾がはたはたと動くと、白い足が腰の方までまぐれ上り、脱いだ着物が兆次の眼の前へ、花模様の雪崩のように落下した。

兆次はその体温の残っている着物を、じっと見つめた。その華麗で繊細に入り組んだ着物の柄が、異様に幼い心を魅きつけたのである。

兆次はやにわに鍼を手に取ると、その着物の端を、ジャキ、ジャキと、切りはじめたのである。

だのか、生き別れなのか、それとも兆次は父なし子だったのか、いずれともわからない。とにかく兆次が物心ついたときに、すでに父親の影はなく、母親と二人で吉原に近い裏長屋に住んでいた。

母親は吉原の花魁や芸者の着物を仕立てて生計を立てていた。だから長屋の狭い部屋には、美しい着物の布地や、端切れが散乱し、幼い兆次はそんな布地に埋れるようにして育つたのである。

着物が出来上ると、母は風呂敷につつんで吉原まで届けに行く。子供の兆次はいつもその後についていった。着物の仕立て屋などが表から入れるはずがないから、裏手にまわり、狭い入口をくぐると、そこがもう女たちの溜まり部屋だった。

表の籬の中に座っている着飾った花魁姿とは違つて、その部屋の女たちは、しどけなく、自在に生きていた。母が出来上った着物を注文主の女に着せてみたり、次の注文の相談を受けている間に、兆次は鏡のまわりに置いてある女たちの持物にさわったり、散らばっている女たちの着物を引っぱりして遊んでいた。

その女たちの、しどけなく、投げやりな、なまめかい部屋が、兆次には気に入っていた。兆次は子供の頃からそんな花魁や芸者の部屋へ入りびたつていていたわけで、次第にそこに散らばっている着物の柄に強く魅かれはじめていった。

「あら、この子、何するの！」
女が叫んだときは、もう遅かった。女の大切な着物はざっくりと切り裂かれて、その一片が兆次の手にしつかりと握られていたのである。

「どうしてくれるのよう、あたしの大事な着物をさ！」
女は悲鳴をあげると、やにわに兆次の頭を思いきりなぐりつけた。兆次はあおむきにひっくり返つたが、その痛さを当然のお仕置きのように冷静に受けとめていた。あわてた母親が、女の前にひれ伏して、

「とんだことをしてしまって、申しわけありません。子供のことです、どうか勘弁してやってください。この弁償はきっといたします」

とあやまつたが、女の怒りは治まらず、
「ふん、あんたなんかに弁償できるものか。この着物は高価いんだから」

吐きするようそう言つた。
家に帰ると兆次は母親からひどく叱られ、その罰として柱に一日しばりつけられた。

しかし兆次はつらくも悲しくもなく、やつたことを後悔してもいなかつた。そればかりではなく、着物を鍼で切つたときのシャキ、シャキとした触感が、柱にしばられた兆次の中に甘美に甦つてくるのだった。すると柱にくりつけられた所在のない時間の中で、兆次はにわかに、

(集めた端切れで人形を作つてみたい)

という欲求に強くかられたのである。かられたというよりも、兆次の指先がそう強く訴えたといった方が、よかつたのかもしれない。

兆次は部屋の隅にころがっている、端切れを集めた風呂敷包を横目で見た。の中には苦心して集めた端切れが山ほどつまっている。苦心して集めただけに、その一枚一枚に愛着があった。あの端切れをはやすく切りきさんでみたいと思った。あの一枚一枚に、ざっくりと鍔の刃を入れてみたい。

鍔の切れ味は戦慄するような興奮となつて兆次の身体を走り抜け、

「おつかさん、おれは人形作りになる」

と叫んだ。

こうして兆次の人の形作りがはじまったのである。といつても最初はまだ子供の遊びである。母親の横に座つて、見よう見まねで作っているのだが、子供心に人形師になるのを決意しただけあって、その出来ばえはなかなかのものだった。

やがて、本格的な人形師の道を進むのならばと、さる師匠のところへ弟子入りした。人形作りが好きで、生まれつき手先が器用ときていて、兆次の腕はめきめき上達した。

それを両親が発見して大騒ぎとなり、

「人の心を迷わす人形だ」

とその商家から、師匠のところへ苦情がきて、兆次は師匠のところを破門になつたのである。

しかし兆次の名声はすでに高かった。兆次は別の師匠へ弟子入りするよなことはせず、独立した。

ところが、人の心を迷わす人形を作る、という破門の原因が、いっそ兆次の評判を高くしたのである。人間は誰しも、そんな妖かしの人の形に心を迷わされてみたいと、心を動かされるものである。兆次の名声はますます江戸市中で高まつていった。

名声が高まるにつれて、兆次はさまざまな人形を作るようになつた。

有名なものを二、三、列記してみると、初夜人形とい

うのがある。娘が嫁入りする夜の教育に使うものである。別名を秘儀人形ともいつた。そのようなとき普通一般に使われるものは秘画であるが、裕福な商家などでは人形を使うのである。

人形は花婿姿をした等身大の美男で、からくり人形に作られていた。からくりの操作によって身体は柔軟に如何ようにも曲り、そして闇の四十八手を見事に演じ分けたのだつた。

だから娘が初夜人形を抱いて練習しているうちに、い

た。

つか人形に恋してしまい、婚礼が中止になつてしまつうようなことも、時にあるとのことであつた。

そうかと思うと、その逆もあつた。人形が花嫁に嫉妬して、婚礼の夜に花嫁の寝室へしおびこみ、花婿を絞め殺してしまつたという噂が流れたこともあつた。こうして、

(初夜人形には魂がある)

と恐れられると同時に、人々はまたその妖しい魅力にひかれるのであつた。

また愛撫人形にも注文が多かつた。注文がくるのは、圧倒的に妾宅からが多かつた。日陰に囲われている者は、共通して、いわゆるペット人形の愛好家が多い。囲われていても、毎日旦那が来るわけではない。毎日が退屈でたまらないし、物足りない。相手をしてくれる男が欲しい。

それで若い男をひそかに妾宅へ引っぱり込んだりするのであるが、それも露見すると大騒ぎになる。そこで代わりに犬や猫を飼うのだが、生きものの世話には手数がかかるし、また、生きものを嫌う旦那も多い。一番安全なのが、人形を集めてかわいがることである。若い男の代わりに、ペット人形をかわいがるのである。しかし人形といつても、ただの人形では面白くない。それで次第に工夫されて、からくり人形になつたり、また写実的な生ま生ましい人形になるのである。

(子供なのに、うますぎる)

それが師匠が抱いた感じであった。

兆次はその師匠の許で十年ほど修業した。そしてその間に弥太という名前を兆次という、人形師らしい名前に変えたのである。兆次はすでに一人前の人形師になつて、

いた。その人形は兆次人形と呼ばれて評判もよく、時には師匠に代わって注文の人形を作ることもあつた。しかし兆次の人形にはどこか正常でないところがあり、それが師匠には気がかりであった。兆次の人形はなにか不気味で、鬼気迫るものがある。そのためか兆次人形を愛好する娘たちは、

(兆次さんの作る人形には、まるで魂があるみたいだわ)

と、時にぞっとする感じを持つのだった。

それを裏書するように、ある時、ひとつの事件が起きた。それは兆次の若衆人形にある商家の娘が惚れて、まるで狂女のようになつたのである。人々は、

(娘が、人形の魂に魅入られたのだ)

と、ささやいた。

そのため娘は降るような縁談などに見向きもしなかつた。片時も若衆人形を離さず、寝るときにも人形の着物を脱がせて、裸の若衆人形を抱いて寝るという徹底さであつた。白絹で作られた若衆人形の肌は白くなめらかで、男の象徴も、黒い茂みも立派だという、精密な作りだつ

近頃評判のいいのは、**最員**の歌舞伎役者に似せたり、ひそかに情を通わせている情夫の顔に似せて作る人形だった。だから愛撫人形はただ外見だけを作つてあるのではなくて、裸体までリアルに作つてあり、目にもあやな緋縮緬の褲をしめていた。そして褲を外すと、茂みも黒々と濃く、男のしるしがそそり立つてゐる。

それに加えて人形はからくり人形に出来てゐるのであるから、女が望する種々の愛撫に存分に応じてくれるわけである。だから旦那の来ない夜、この愛撫人形を抱いてもだえ狂う女の狂態が、想像できようというものである。

いつのことであつたが、旦那がこの女の狂乱を見て、愛撫人形を取り上げ、庭にたきつけてしまつたことがあつた。すると怒った人形がやにわに立ち上つて、両手で旦那を羽交い締めにし、首筋に噛みつき、旦那を噛み殺してしまつたことがあつた。人形の口腔には、鋭い歯が植えつけられていたのである。

まだこの他にも、呪い人形とか、人型人形とかいった、いわゆる不気味人形というものもあつた。兆次人形には人の怨みが乗り移りやすく、したがつて調伏の効果が期待できたからである。

そのため愛撫人形にしろ、呪い人形にしろ、兆次人形のひそかな注文はひきも切らず、最近では江戸城の大奥などからも極秘の注文が来るということであつた。

だ世界であり、得意の分野といつてよかつた。これまでにも花魁人形の注文は何回もあり、兆次には自信があつた。

それなのにいくら兆次が一生懸命やつても、千代吉の氣に入った花魁人形が出来ないのだった。それは千代吉の注文があまりにうるさいからだった。いや、うるさすぎり、といつてもいい。

まず人形の顔である。いくら作つても人形の顔が、千代吉の気持にぴたつとくるものが出来てこないのであった。

口に出しては言わないが、千代吉の求めるのはお新的の顔である。花魁姿のお新である。それが欲しさに花魁人形を注文しているのである。ところが兆次の方は、お新的の顔を見たことがない。千代吉の描くたどたどしい似顔絵頼りに人形の顔を作つてゐるのであるから、いくら名入とはいえ無理である。

いくつ作つても千代吉の氣に入らず、失敗作が棚の上にごろごろ並ぶようになった。一つの人形のために、人形の首をこんなにたくさん作るなんて、これまでの兆次にはないことだった。だが、絶望の渦から哀願しているような千代吉を見ていると、なんとかしてその要望をかなえてやりたいという気持になるのだった。

しかし、ある日ついにその我慢も限界にきて、ついに兆次が

「どこが一体氣に入らないのかわからない。あつしに

また、つい最近こんな事件があつた。柳橋のさる料亭から頼まれて、大きな歌舞伎人形を作つたことがあつた。それは助六の舞台からとつた、中村花之丞扮する花魁揚亭に足を運んだ当の花之丞自身が満足したというくらいだつたから、その見事さは推して知るべしであつた。人形は大広間の正面に飾られていたが、あるとき一人の醉客が、

「花之丞がモデルというのなら、姿は女でも、この人形は男のはずじゃな」

と言つて、人形の裾をまくり上げた。すると花魁人形の股間には、ちゃんとあるべきものがあつた、というのである。

(さすが兆次人形じやわい)

と兆次の評判はいっそう上つたのであるが、人形の裾をまくつた客は、それから二、三日して後、突然、発狂して死んでしまつた。花魁人形は衆目の中で裾をまくられた恥かしさに堪えられず、その恨みが醉客の命を奪つたということであつた。

(四)

兆次は千代吉から花魁人形の注文を受けたのであるが、こうして花魁の世界は兆次が子供のころから慣れ親しん

は、もうこれ以上作りようがありませんぜ」とさじを投げると、千代吉の方も、

「実はわたしにもそれがわからないので困っているのです。顔つきも、眼も、鼻も、唇もそっくりなのだが……、どうも、その、ちょっと感じが……」

千代吉は人形の顔の底をのぞきこむような目つきで、そう言った。

「えっ……、感じだって……？」

感じなんて、摑みようがないではないか。

（もうこの若者の異常執着につき合つてはいられない）

と思つたとき、ある日、吉原で心中事件が起きたのである。遊郭でのお決まりのように、若い花魁が、なじみの客と心中したのである。

それを聞くと兆次は絵筆を持って、心中の現場へ駆けつけた。そして花魁の死顔を写してきた。そしてその写し絵をたよりにもう一度人形の顔を作つてみると、これが見事に千代吉の心を捉えたのである。

「ああ、こんな顔が欲しかったんだ」

だがその顔は、お新的の顔とはあまり似ていなかつた。千代吉が欲しかったのは、人形の顔が持つ、死の雰囲気だつたのかもしれないのだった。

こうして人形の顔はいちおう解決したのだが、それ以上に梃子ずつたのは人形の着物だった。

花魁の衣裳だから華麗なものがいいだろうと派手なものにすると、華やかすぎて淋しさがないという。そこですこし淋しい柄にすると、淋しさのなかにも華やかさがほしいという。そうかと、

(思いきり陰惨な感じがいい)

などと口走つたりして、何枚作つても千代吉の気に入らないのだった。

(顔を作つたときとまったく同じだな)

と兆次は思った。

(だが仕方がない。乗りかかった舟だ、もう一度、顔と同じ苦労をしてみるか)

兆次はいつしか、最後まで千代吉に付き合う気持になつていた。

兆次は手許にある布地や端切れだけでは間に合わないと気がつくと、自分の足で布地を探しに歩いた。等身大の人形を作るのだから、大きな布地が必要である。端切れ屋では間に合わないので、古着屋を中心に廻つた。ときには千代吉もついてきたが、なかなか気に入った古着は見つからなかつた。

しかし回数が重なるうちに、ある事がわかつてきた。

それは千代吉が、

「ああ、これはいい模様だな」

と目を細めたり、また古着を両手で抱きかかえるようにしながら、

のはしょせん安物ばかりで、豊富な古着というよりも、むしろ古着の捨て場ともいつた方がよかつた。

その古着の山のまん中に、店の主人が座つていた。

兆次の目に入ったのは、いちばん隅にある、今にも土間へ崩れ落ちそうに積まれている、古着の山だった。兆次の目が光つたのは、その山の中ほどに、水草模様をちらつと見たからだった。

「ちょいとこれを見せてくれませんか」

兆次が古着の山へ手をのばすと、

「あっ、それはまだ整理してありませんので……」

古着屋のおやじの返事は乗り気薄だった。

「でも、売るのは売るんだろう」

「そこにあるのはあまり売れないとねえ」

商売氣のないおやじなどと思った。でも、卖れない品物はどういう品なのかも、兆次が古着の山をよく見ると、それはたしかに、ちょっとすき味の悪い古着の山だった。

しかし兆次の横から千代吉も、食い入るような視線を、その古着の山に向けていた。

兆次は古着の山へ手を突つこんだ。何日も積み重ねられて放置された古着の山は、ひんやりと冷たく、そしてべとっと指先にねばり着く感じだった。

兆次はその中から、狙っていた水草模様の古着を引きずり出した。

「この感じは捨て難いですね」
などと反応を示すのは、きまつて水草模様の場合だつたのである。そこで、

「じゃ、この柄にしましょうかね」

「でも、まだちょっと、すこし感じがねえ……」

とその古着を買おうとする、

と躊躇して、決心がつかないのだった。

雲が低くたれこめ、雨がしとしと降る陰鬱なある日だった。その日も兆次は千代吉をつれて古着屋廻りに出掛けた。

細い路地に入り、濡れた柳の枝が傘に音をたてて触れるのを聞くと、こんな日がかえって、気に入った古着が見つかりそうな気がするのだった。

柳の茂みの陰に、ひっそり、見捨てられたような古着屋があった。こんな陰氣で貧相な古着屋へなど、誰も客など来ないのではないかと思われる、せまい入口をくぐつて中へ入ると、黴臭さが鼻をつくうす暗さだった。だが、

「ごめんなさいよ」

と言つて入つた兆次の目に、一つの古着の山がとび込んできた。

貧相な店の外見に反して、店内の商品は以外と豊富だった。だが豊富な古着は、運びこまれたままろくに整理もされずに、ただそこに積み重ねられている感じだった。路地裏の古着屋なので、豊富といつても、持ち込まれる

その古着の柄は、水中で揺れている水草の図案で、時代がすこし古いものだった。しつとりと重い縮緬に染められた模様はすこしほんやりしていたが、それがかえつて幻想的な雰囲気をかもし出していた。

着物はうすい紫色なのに、水草は、青や濃紫、紺などりどりの色彩に染め分けられて、中には墨のもあつた。着物の柄に墨が使われているなんて、珍しかった。そんな水草の群が、水の流れに逆らうように、乱れるように、狂うようにと、尋常でないのが、この古着から異常なものを発散させていた。

(噂に聞く人形草とは、このような草のことではあるまいか)

と兆次はふとたじろぎのようものを感じたが、

「どうでしょう、千代吉さん」

兆次はその古着を千代吉の前に拡げて見せた。文句のつけようがないようと思われた。

兆次はその古着を千代吉の前に拡げて見せた。文句のつけようがないよう思つて、兆次の背にこれまでの疲労がどつと出てきた。

そんな二人の姿を、店の主人は古着の山から首だけ出して不気味そうに眺めていたが、

「おやじさん、これを貰いましょうかね」

と兆次が声をかけると、

「……ん？」

といった表情で兆次の方を見て、

「本当にそれをお買いなさるんで？」

「だって、これ、売り物なんでしょう」

「売り物です。だから売りますがね、でもね、旦那、

その古着の山は全部湯漬場から運んできたものばかりな

んですよ」

「えっ、湯漬場から……」

兆次の顔は青くなつた。ということは、どれも死人が

着ていたということになる。道理で陰気くさいはずだと

思った。

「それでもいいとおっしゃるなら、お売りいたします

がね」

兆次は千代吉の方を見た。しかし千代吉は拒否反応を

示すどころか、むしろ魅きつけられるように、

「かまいません」

そう答えた。

「その水草模様は自殺した女の着ていたものですよ」

それでも千代吉は迷いもせずに、

「かまいません」

こうして死体からはぎ取られた水草模様の着物が、花

魁人形の衣装と決まったのである。

着物の柄が決ると、後のものはとんとん拍子に決って

いた。二、三日して、また古着屋を歩くうちに、帯も

が立ちのぼっていた。花魁人形も死の臭いで染め上げたのであろう。

「よろしくございます」

と答えて、兆次は紐を受取り、その使い道を考えた。

人形を仕上げるには、帯締め、帯揚げ、腰紐と、いくらでも紐は必要である。使おうと思えば、どこにでも使えるわけであった。

紐を渡して千代吉が兆次の家を出ようとすると、一台の駕籠が兆次の店の前に止つた。

そして一人の男が中から降りてきた。

それを見たとき千代吉は、

（えっ……！）

と声にならない声をあげた。それは萬屋善兵衛ではないか。善兵衛はお新を吉原から身請けした男である。

（なぜ善兵衛がこんなところへ？）

駕籠から降りて足早やに兆次の店の中へ消えていく善兵衛を、千代吉は穴のあくほど見つめた。もちろん善兵衛の方は千代吉の顔など知りはしない。

お新が身請けされて吉原から姿を消したとき、三芳樓のおかみはその身請先を教えてくれなかつた。しかし千代吉は風のたよりにその相手が萬屋善兵衛であることを知つた。蔵前で指折りの商人である。

お新は囮われ者だから、萬屋の本宅ではなくて、どこ

見つかつた。これも水草模様で、朱と金の配色の派手なものであったが、ちょっと見だけで千代吉の気に入つた。兆次がそっと店の主人に聞いてみると、これも女の死体が身につけていたものだつた。

最後は長襦袢である。これは最初の柳の木陰の古着屋のおやじに、

（また湯漬場の品が入つたら教えてくれ）

と頼んでおくと、まもなく、

（新しいのが入りました）

と知らせてくれた。これも若い女の死体が着ていたもので、もちろん柄も水草模様であつた。

こうして難航した千代吉の条件は、すべて解決したわけである。

千代吉はほぼ毎日のように人形の出来具合を見にやってくるのだったが、ある日、

「これを人形に使つてほしい」

と、紐を二、三本、持つてきた。千代吉が蒐集した紐である。だがそれは、いずれも薄氣味の悪い紐ばかりだつた。しかし古着屋廻りで千代吉の正体がわかりかけてきていた時だけに、なんとなく紐の意味がわかるような気がした。

千代吉の背には死の影がはりついていた。千代吉が好み古着には、死の臭いがした。その紐からも、死の臭いがすまなかつたのである。

萬屋は評判のことだけはあって、紐のれんがはためく、立派な店構えだった。のれんの下をたえず人が出入りして、繁盛の様子が手にとるようにわかつた。善兵衛に抗議しようと思ったのでもない。ただお新を身請けした萬屋がどんな家なのか、一度見ておかなければ気がすまなかつたのである。

萬屋は評判のことだけはあって、紐のれんがはためく、立派な店構えだった。のれんの下をたえず人が出入りして、繁盛の様子が手にとるようにわかつた。

とその時、のれんの内側がざわめいて、三、四人の男が表へ出てきた。中央に立っているのが、主人の善兵衛らしい。善兵衛が駕籠に乗ると、

（いってらいしゃいませ）

送りに出た番頭たちがいっせいに頭を下げた。

吉原の花魁を身請けするくらいだから、恰幅のいい男前の主人を千代吉は想像していたが、善兵衛はちんちくりんで、くしゃくしゃとした顔の男で、如才なさひとつを武器に商売を大きくしてきた平凡な商人であつた。千代吉は意外な感に打たれると同時に、少しがっかりした。

善兵衛を乗せた駕籠は次第に遠ざかり、その影が町角に消えると、千代吉は裏手へ廻つてみた。なまこ塀がつ

づく屋敷の中はかなりの広さで、屋根や蔵の壁などが重なりあって、千代吉を威圧するように立ちはだかっていた。

この屋敷の中で、さっきの、ちんちくりんで、くしゃくしゃの善兵衛がお新を好きなようにしているのかと思うと、腹立たしいと同時に、お新がかわいそうになってしまった。

この日兆次の店の前で善兵衛と逢ったことによって、にわかに千代吉の中にお新への思いが吹き上げてきた。

(お新はどうしているのだろう)

千代吉の頭に、いつか堀の外から眺めた萬屋の屋敷がよみがえってきた。あの家の中で、千代吉のことなどとくに忘れて、善兵衛といちゃついているお新のことを思うと、胸がかきむしられるようだった。

(それにしても萬屋の主人ともあろう者が、なぜ人形師の家などを訪ねるのだろう)

と千代吉は首をひねり、

(お新が人形でもほしがったのだろうか)

そんなふうにも思ってみた。すると、すっかりお内儀ふうに髪を結い上げたお新が善兵衛にしなだれかかって、

「ねえ、今度はすこし刺激のある人形がいいわねえ」

などと睦言を交わしている姿が千代吉の目の前に浮かんできて、

した。

「ほう、これはすばらしい出来栄えだ」と善兵衛は目を細めて、

「よく動くかい」

「ご満足いただけます」

それは一对の男と女のからくり人形であった。

「これはいい、白井権八と小紫だね」

「へえ」

「動かしてもらおうか」

兆次が器用に人形のからくりを操作すると、権八と小紫の着物はたやすく脱げるようになっていて、精巧な男と女の裸体が現われた。二つの人形の手が両方から伸びて、褲と腰巻を互いに外し合うと、その下から、これもまた精巧を極めた、男のもの、女のもの、が顔を出した。

「ほう、これは見事だ。毛まで本物そっくりに生えているではないか」

善兵衛は歎声を惜しまなかつた。

組人形は兆次の指さばきで、次々と姿態を変えていった。小紫の手のがびて、権八の太腿ももをさするかと思うと、顔を権八の股間に近づけて、そこにそそり立つものを唇で愛撫した。さらに、それをすっぽり口に含むことまでやるのだから、見てる善兵衛もあきれるほどだった。

次に権八が小紫の上にのしかかっていく。すると小紫の両手が下からのびて、権八をしなやかに抱いた。権八

(畜生め!)

そのとき千代吉の頭に、ある恐ろしい思案が浮かんだのである。

(うん、これはいい考え方だ)

千代吉の陰鬱な顔がにんまりと笑って、

(俺だけが一人で、自殺するようなことをするものか)

と唇を歪めた。

(五)

萬屋善兵衛が兆次のところを訪れたのは、千代吉が想像したような人形を注文に来たのではなかった。最近金持ち連中の間で流行している、ある人形作りの催促にきたのである。

「ご免なさいよ」

そう声をかけると善兵衛は、返事も待たずに、散らかって仕事場へ足を踏み入れた。これだけ見ても、兆次とはかなり親しい間柄であることがわかった。

「あ、これは萬屋さん、ようこそ」

兆次が端切れの断ち屑を払つて立ち上ろうとすると、

「そろそろ出来る頃だと思ってね」

「へえ、やっと出来ました」

「では、見せておくれでないか」

兆次は仕事場の片隅の木箱から、一对の人形を取り出

の腰が前後に動きだすと、小紫の下半身もゆっくりとそれに応じて、動きが次第に早くなると、二人の歓喜の表情は、まるで生きた人間のようになっていくのだった。

「うん、これはますます驚いた」

「お気に召して下さいましたか」

「召すも召さぬも、大満足だ。これなら今度の仲間の

寄合で、わしも鼻が高くなるわい」

こうしたからくり人形が、泰平の世に慣れた大名や豪商たちの間で、ひそかに流行しているのだった。贅沢にもあき、遊びにも退屈し、酒も飲みあき、女にもあきて、自堕落な毎日を送っているさる大名のところへ、ある人形師が妖しげなからくり人形を持ちこんだのが発端だった。なにか新しい刺激がほしいと思っていた連中が、わざとそれに飛びついたのである。

世の中もその頃になると、全盛をきわめた浮世絵の秘画も、出るのは出尽してしまって、そろそろ限界にきていた。秘画にも飽きがきた、次は動くものに食指がの出番である。どんな有名な浮世絵師でも、裏では必ず秘画の製作にいそしんでいたように、人形師たちも裏ではからくり組人形の製作をきそっていたのである。

当然兆次のとこへえも、降るような注文がきた。あまつさえ兆次の人の形には、人の心をそそてやまない妖しさがある。怪しげな人形作家としては屈指である。兆次

も乞われるままに怪しげなからくり人形を作つては、愛好家の注文に応じていた。

今やこのからくり人形は大名、豪商ばかりでなく、江戸城の大奥などへも流れしており、また老中などへの贈り物としては欠かせぬものだった。精巧なからくり組人形

を将軍に献上したおかげで、危うくお国替えになるのを免がれた大名もいると聞く。商人たちの間でも、その愛好家たちが仲間を作り、自慢のからくり人形を見せ合つて、コンクールまでやっていた。

権八と小紫のからくり人形を見て善兵衛が、

(今度の競技会での優勝はまちがいなし)

と胸をふくらませたのも、むべなるかなであった。

善兵衛が注文してあったのは三組であつたので、

「こうなれば次の人形もはやく見たいものだ」

と次の作品を催促した。

兆次が取り出した二番目の作品は、巴御前と木曾義仲

だった。馬に乗った木曾義仲と巴御前が、馬で駆けながら、愛の組打ちをするのである。

きらびやかな鎧兜を脱ぎ、華麗な直垂を取りざると、筋骨たくましい義仲の裸体が現われ、すると巴御前の方

も白い花が匂うような裸体をさらした。馬上の義仲が巴

御前を横から抱いて自分の馬に移すと、馬上で抱合図となるのである。手足のからみ工合がこれもまた絶妙に出来ていて、巴御前の豊かな腰が、義仲の毛むくじゅら

の腕でがっしり抱えられると、馬の背で、微妙な運動を盛んにくり返すのだった。

「……」

善兵衛は絶句したまま声も出ず、ただ生唾をのみこん

で、「こんなすばらしいからくりが出来るとは信じられぬ

「ありがとうございます」

「で、三つめの人形は……？」

「屋形舟でございます」

それは前髪姿の若衆と芸者の組合せだった。派手な大振袖の若衆が舟の中ですだれを持ち上げ、舟べりにもたられた芸者がそれを眺めている。川風の心地よさに二人が裸になると、若衆の褲は水色で、芸者はもえるような緋縮緬。緋縮緬の裾ははやくも乱れて、そこから覗く女の秘所が、かわらけなもの、どきりとさせる。水色の褲は内側から力強く盛り上り、端から黒々とした叢ものぞいでいる。

「まるで本物そっくりではないか。わたしにもちょっと、と、触らせておくれでないか」

善兵衛が芸者の緋縮緬をむしり取ると、その接触で、

「あっ」

人形のからくりがカタリと動いて、芸者は前に倒れ、四つん這いの形になつた。そこへ若衆が背にまわって、腰を重ねた。

「なるほど、うまく細工したものだ」
背後から抱えた腰を、若衆はさらに深々と抱え直すと、にわかに、

カタ、カタ、カタ

とからくりは音をたてて、二人の腰はなめらかな前後運動へと移っていく。

「うーむ、見事だわい」

見事だ、見事だと、善兵衛は歎声を発し、すっかりからくり人形のとりこになつてしまつたが、とりわけ屋形舟が気に入り、芸者を背後から犯す若衆が、いつのまにか自分自身であるかのような錯覚に陥るのだった。

が善兵衛はすぐ現実に還り、

(この屋形舟は仲間のコンクールなどに出したのでは、もつたいない。老中筋へのお近づきの進物にするのが一

筋に生きる善兵衛らしいところであった。

(六)

翌日の朝はやく、千代吉は兆次の店を訪れた。昨日につづく、今日である。それも夜が明けるか明けぬほどの、朝はやくである。それに千代吉の顔には決意のようなものが秘められてのに、兆次はただならぬものを感じた。

「ただし条件が一つあります」

「条件……？」

難かしい条件は花魁人形でコリしている。また死体が着ていた古着を探すなんて、まつ平だと、兆次の身体に震えが来そうになると、

「顔がわたしに似てることです」

千代吉は臆面もなくそう答えた。

花魁人形のときと違つて、モデルが目の前にいるのだから、それはたやすいことであつたが、さてその目的は何なのであらうか、兆次には見当がつかなかつた。

想像すると花魁人形がお新で、若衆人形が千代吉であり、その二つの人形を部屋に並べて、千代吉がため息をつきながら眺めようとでもいう魂胆なのであらうか。もしこの注文が萬屋善兵衛からなら、花魁人形と若衆人形をからくり組人形にしてくれという注文になるのにちがいないが、もちろん千代吉にはそんな意向はまったくない。

「わかりました。お作りいたしましょう」

すると千代吉は最後にもう一つ条件を出した。

「実はそれをからくりにしてほしいのです」

「からくり？」

千代吉の口からからくりという言葉を聞いて、兆次はなんだと思った。やはり千代吉も萬屋善兵衛と同じなんか。それで、

「どんなからくりなんでしょうか」

とやや揶揄する口調で聞くと、千代吉は兆次の耳もとへ口を近づけて、

「実は……」

と、からくりの内容を話したのである。それを聞くと兆次の顔は驚きから困窮へと変わり、

「それは作れません」

みる。すると若衆人形の胸から飛び出す刃が、花魁人形を深々と刺すのである。それは意外性があつて、面白い

（千代吉は自分で花魁人形を刺す代わりに、人形にやらせるのかもしれない）

そんな千代吉の心の内が、兆次にわからないこともなかつた。

（だが、本当にそれだけなのか）

という疑問が消えない。

（若衆人形が抱くのは本当に人形だけなのか。もしも人間を抱くようなことがあれば……）

そこまで考えたとき兆次の中を甘美な戦慄が走り抜けた。

（そうだ、この人形でどんなことが起るのか、じっくりと見てやろう）

（人形が何をやろうと、そんなこと、わしの知ったことではない）

こうして恐ろしい若衆人形の製作を、兆次は承知したのであった。

と強く拒絶した。

千代吉の注文とは、

（若衆人形の胸の中に、刃を埋めこんでほしい）

という、とんでもない内容だったからである。

もちろんその刃は、平常時には胸の中に納まっているのであるが、相手が目の前に現われると若衆人形は両手をひろげて相手を抱きかかえる。そして完全に抱き終ると、やおら胸の中央が二つに割れて、中から鋭い刃が飛び出すというからくりなのである。

相手はしつかり抱きかかえられているから、逃れることはできない。刃は相手の胸に突きささり、そのまま死に至るのである。恐ろしい人形といわねばならない。兆次はこれまでに何十体、何百体という人形を作ってきたが、こんな恐ろしい人形の注文を受けたのははじめてであった。

（作れません）

と断るのは当然である。

（だが、千代吉の目的は何なのだろう）

作れません、作れませんと拒絕する一方で、兆次の気持は、そんな人形を欲しがる千代吉の心の秘密へ吸い寄せられていくのであつた。

たとえば千代吉の心はこのようなものかもしれない。ただ花魁人形と若衆人形を並べて飾っておくだけでは面白くない。そこで時々、若衆人形に花魁人形を抱かせて

（七）

それから二十日ほどして、千代吉が注文した花魁人形と若衆人形は出来上った。

若衆人形の完成に意外と時間がかかったのは、胸の中に刃を埋めこむ細工に手間どつたからだつた。

出来上つた二体の人形を並べてみると、それはまさに花魁若衆一対の似合いの人形で、自分でも惚れぼれする出来栄えであった。

とくに華麗で陰惨な衣裳をまとつて、立兵庫の鬚に後光のように簪をさした花魁人形の美しさは、さながら青く燃える炎の凄艶さであった。

人形に人形師の情念が注ぎこまれると、人形は生身の人間に変身するというが、この花魁人形がまさにそれだつた。人形を受取つた千代吉も茫然とそれを眺め、まるで花魁人形に魂を吸いとられてしまつたようだつた。

若衆人形の方もそれにひけをとらなかつた。顔は注文した通り千代吉にそっくりなので、知らない人間が見たら、千代吉が若衆姿でそこに立つているとしか見えなかつた。その胸の奥に鋭い刃が隠されていようなどとは、誰が想像できたであろうか。

二体の人形はその日のうちに、千代吉の長屋へ運びこまれた。

しばらくの間、千代吉は人形を部屋に並べて飽かずにならなかった。

眺めていた。せまい部屋へ等身大の人形が二体も加わったので、部屋はにわかに狭くなり、千代吉の方が人形に遠慮しながら生活する有様であった。

ある夜、千代吉は人の寝静まったころを見はからつて若衆人形に手をふれ、兆次の仕込んだからくりの点検をはじめた。袴を外し、帯びを解き、着物を脱がすと、若衆人形はたちまち裸体になり、なめらかな絹地の肌があらわれた。腰には目のさめるような水色の襷。顔だけではなく、その人形の裸体までもが自分にそっくりなのを見て、千代吉は我ながら氣恥ずかしくなった。

人形の胸のあたりに手を触れてみた。

が、なめらかな胸には一点のしみもなければ、傷口も見当らなかつた。胸のどこを見ても、胸が割れるからくりが細工されているようには見えなかつた。

だが、千代吉が鳩尾のあたりにちよつと手を触れたとたんに、胸がすーっと中央で割れて、左右に開いたのである。見るとその奥には注文したように、鋭い刃がまっすぐに正面を向いて仕込まれていた。そして次の瞬間、

かたり、とかくらくりが進むと、刃は音もなく前へ突き進んできたのである。この時もし千代吉が人形に抱かれていたら、刃は完全に千代吉を刺し貫いて、背中へ抜けていたのはまちがいなかつた。

千代吉は自分が注文したのに、そのからくりの恐ろしかたり、

というわけであつた。

さて、若衆人形を運びこまれた萬屋では、下女から連絡を受けた女中頭が、人形の到来を善兵衛に伝えると、

「はて、兆次から人形とな、心当りがないな」

と首をかしげたが、人形の見本でも届いたのか……、それとも誰かからの贈り物なのか……、それとも善兵衛の方ではすっかり忘れてしまつて以前注文した人形でも出来てきたのか……、などとさまざま思わくが一瞬頭をかけめぐり、恐ろしい若衆人形が運びこまれたとはつゆ知らぬ善兵衛は、

「じゃあ、奥座敷へ入れておいてくれ」

と気軽に返事した。

だが、しばらくたつて善兵衛が行つてみて、驚いた。

そこに置いてあるのは等身大の人形、しかも目のさめるような若衆人形ではないか。

「おい、おい、お新、何だね、これは」

善兵衛は奥へむかって声をかけた。

呼ばれて顔を出したお新も驚いた。人形が届いたといふから、また例のいやらしい組人形かなにかだろうと、気にもかけていなかつたが、そこにあるのはあでやかな若衆人形。

「…………？」

お新にも何が何だかわからなかつた。

さに慄然とした。がそれと同時に、
(うん、これなら大丈夫成功するだろう)
と横顔ににんまりと嬉しい笑みを浮べた。

からくり人形のテストが終ると、千代吉は若衆人形の方だけを箱に入れて荷車に乗せ、ある日萬屋善兵衛まで運んでいった。

その日は雨が降り、青葉のしずくで道行く人もまつ青に染まつてしまいそうな、初夏の一日であった。

雨なので、人形を入れた箱を油紙で厳重に包み、濡れないようにした。

荷車をひいた千代吉は萬屋に着くと、裏口に廻り、案内を乞うた。下働きの女が顔を出したので、案内を乞うた。下働きの女が顔を出したので、案内を乞うた。

「人形師兆次のところから、人形をお届けにまいりました」

裏口からは、善兵衛の注文した兆次人形がよく運びこまれてくるらしい。今度もまた旦那の注文した人形が届いたのだろうと思いこんだ下女は、

「はい、雨の中をご苦労さまでした」

不審も抱かずに箱を受取つた。

こうして若衆人形は無事、萬屋の屋敷の中へ運びこまれたのである。

そしてさて、この後、犯行はどのような形で進んでいくのであろうか。それは若衆人形の活躍如何にかかるる

だが正面に廻つて人形の顔を見た瞬間、お新の顔色が変わつた。人形の顔は、千代吉の顔でないか。
(なぜ、こんな人形が……?)

(どこから……?)

だが、いぶかるお新は心の底で、同時に、

(千代さま!)

と叫んでいた。千代吉と別れて以来、萬屋の屋敷に住んでいても、お新は一日たりとも千代吉のことを忘れたことはなかつたからである。

(千代さまが人形になつて逢いにきてくれたのかもしれない)

と思うと同時に、

(いや、情のないわたしを責めにきたのかも知れない)

とも恐れた。

しかし責められても、仕方がないと思った。わたしは萬屋善兵衛に買われた女なんだもの。そして貧乏長屋に住んでいる両親や弟妹の生活を支えるのがわたしのつとめなのだ。弟や妹は相変わらず腹を空かせて毎日わめいているというのに、また赤ん坊が生れたという。能なしのくせに子供だけはどうして一人前に作るのだろうと、お新には父親が情けなくなると同時に、作る父も父なら、それを平気で生む母も母だと、次第に父も母も軽蔑したくなつてくるのだった。

しかしそんな心中を悟られてはならないと、お新は

知らぬ顔で、
「旦那様、近頃は組人形から若衆人形へと、趣向変え
ですかえ」

と善兵衛の顔をうかがった。

「いや、こんな人形は知らぬ。注文をした覚えもない」と善兵衛は口の中でぶつぶつ言っていたが、ふと、あ

ることに思い当った。

（もしかして、兆次がこの若衆人形を使って、等身大の組人形を作れという暗示なのかもしだね）

そう思うと、にわかに善兵衛の心は騒ぎ出した。これまでの組人形はいずれも小さいものだった。小さいものなら雛人形ていど、大きいものでも淨瑠璃人形ていどであった。等身大の組人形を作つたら、どんな迫力のあるものが出来るだろう。人間の白黒ショードを見るよりも、もっと凄いものになるだろう。

そう思うと、にわかに幻の組人形が着物の前をはだけ、妖しげに腰を動かすさまが善兵衛には想像されて、

（またのしみが一つ増えたわい）

ぐっと生唾を呑みこんだ。一度兆次の方へ趣向を聞いてみよう。それまでは、

（しばらく、ここへ置いておくとしようか）

こうして若衆人形はうまうまと萬屋の奥座敷へ居座ることに成功したのである。

その日も雨が降っていた。三日つづきの雨で、大川の水は増し、萬屋の庭の池も水かさを増して溢れそだつた。

お新は池の面に落ちる雨の糸をしばらく眺めていたが、

つと決意するように立ち上ると、奥座敷へむかつた。

あれからずっとお新には若衆人形のことが気になつてゐた。しかし善兵衛に気づかれてはまずいとぞ知らぬ顔をつづけ、奥座敷へは一度も近づかなかつたが、お新的の胸は今日の池の水かさのように、千代吉への思いで溢れんばかりになつていた。

お新は善兵衛が出掛けたのを幸に、足音をしのばせて奥座敷に入った。

若衆人形は屏風の前の暗がりに、この前と同じ姿勢で立つていた。

匂うような囁色の大振袖を着て、金襴の袴をはいた等身大の若衆人形は、まるで千代吉がそこに立つているかとお新は錯覚した。

（でも、あまりに千代さまに似ているので、かえつて氣味が悪いくらいだわ）

でも、お新的胸には千代吉いとしさがにわかに盛り上つてきて、

「千代さま……」

小声で呼んで、人形の袖に手をふれると、
カタリ

と音がして、人形が動き出した。人形が動くとは予想もしていなかつたお新は、

「あっ……」

と心臓が止まるほど驚いた。

人形は白足袋の両足を交互に動かして、まるで生きているかのように歩き出した。お新は息をつめて、それを見つめた。人形は歩きながらゆっくりと首をお新の方にめぐらし、さそいこむようにお新的顔を見た。人形の身体からは見えない妖気のようなものが流れ、それはあたかも人形の中にひそむ千代吉の生靈がお新を招いているようで、お新的全身に甘い戦慄が走つた。

お新は招き寄せられるままに近づくと、若衆人形を抱いた。等身大の人形は、まるでその昔、千代吉に抱かれているようだとお新は思つた。

お新が人形の首に両手をまわすと、また、
カタリ

と音がして、それまで下に垂れていた人形の両手が前へ伸びると、お新を包みこむように抱いたのである。

「ああ、千代さま、会いたかった」

お新はまるで訴えかけるようにささやいた。お新的両手に力が入ると、お新を抱く若衆人形の両手にも力が入り、二人は互いの両手を鎌のようにして、しっかりと互いの身体を締めつけあつた。

「ねえ、千代さま、もっと強く……」

お新はうわ言のようくに言って、しばらくじつとしていた。だが、その時であつた。

カタリ

とまた音がして、何事かと視線を落すと、人形の着物の前がはだけて裸身があらわになり、いきなり胸が二つに割れて、左右に開きはじめたのである。

「あっ……」

お新は驚きの声をあげた。が、驚きはすぐ恐怖に変わつた。

引きつらせて、

「ギャーッ……」

断末魔の悲鳴をあげた。

刃は深々とお新の胸を刺した。だが、それでも人形は締めつける力をゆるめず、刃の切っ先がお新的背中に突き抜けて、はじめて人形の動きは止ったのである。

お新は血まみれになつて崩れ落ちた。

奥座敷の中は嘘のような静けさであった。

ただ雨の音だけが聞えていた。

その静寂のなかで、若衆人形は瞳をつぶらに見開いたまま、動かなくなつたお新を見下ろしていた。その朱い唇には、かすかな笑いが浮かんでいるように見えた。

(八)

その翌日。

萬屋からあまり遠くない大川の中ほどで、若い男と女の心中死体が見つかった。

発見したのは朝釣りの老人で、大川の中ほどに水草のよく茂った場所がある。そこは魚の棲み家なので、いつも老人はそこを目ざしていく。

雨はすっかり止んで、空はすっきり晴れ上つていた。しかししつづいた雨で大川の水量は少し増し、流れが早かつた。

(や、や、や……)

その奇怪な心中死体に、老人は腰を抜かさんばかりに驚いた。

心中死体が千代吉と、お新を模した花魁人形であったのは言うまでもない。千代吉と花魁人形はしつかり抱きあい、紐で固く結ばれていた。

がその紐というのが、異様だった。紐といつても、それは何十本、何百本という紐の束で、色彩も、金、銀、赤、青、白、黄色、水色、桃色、模様のあるもの、ないもの、その種類も、腰紐、しごき、組紐、織糸などと多種多様で、それがからまりあいながら二人の身体を縛りつけ、水中に長々とただよっているのだった。それはまるで極楽鳥が華麗な羽を水中に拡げたかのようだった。

千代吉は最初首吊り自殺に使おうと集めた紐を、最後は花魁人形との心中に使つたのである。

考えてみると千代吉は、最初から花魁人形と心中しよ

うとして兆次に製作を依頼したのか、それは不明だった。

人形が出来上つてみたらあまりの出来栄えに、人形との心中願望が湧いてきたのかもしれない。また、花

魁人形の魂が千代吉を中心へさせこんだのかもしれない

かった。それとも首吊り用の紐がたくさん集まるにつれて、その妖しい華やかさが、首吊りから心中へと、千代吉の気持を変えたのかもしれない。

いずれにしても、千代吉は花魁人形と心中したのであ

遠くから見ると、その流れの中ほどに、赤く輝くようなものがまるで友禅流しのように見えたのである。

(何だろう?)

その辺は水底に水草が密生していて、おびただしい水草が、まるで青い布でもさらしたようゆらめいているところだった。その水草のまん中あたりに、赤い光の帶のようなものが見えるのである。

(…………?)

老人は一瞬釣りのことも忘れて、川岸沿いにその方へ歩いていった。

遠目に友禅流しと見えたのは、色あざやかな紐の集合であった。何十本、いや何百本かもしれない、おびただしい華麗な紐が、ひらひらと、ゆらゆらと、身をくねらせ、身をよじり、水草とからみあいながら、水中にただよっているのであった。

(これはいったい、何……?)

老人には見当もつかない。

がその時、紐の根元に固まりのようを見つけた。それが男と女の心中死体だとわかったとき、老人は、(げっ……)

のけぞるばかり驚いた。

女の方は華麗な衣裳をまとった花魁であった。しかしよく見ると、それは人間ではなくて人形であった。若い男が人形と心中したのである。

る。

人形が兆次人形であるところから、兆次のところへも知らせがあり、兆次が急いで大川へ駆けつけてみると、黒山のような人だからで、ちょうど検死の役人が死体を水から引き上げようとしているところだった。

兆次は橋の上からそれを眺めていた。

心中死体はおびただしく茂る水草にせき止められるようにして、漂っていた。だから友禅流しと見えた紐のゆらめきは、あたかも赤い水草のようであり、花魁人形の華麗な着物、帯などは、水草の花のよう見えるのだった。

それを見たとき兆次は、ふと、(ひょっとしたら、あれが噂の人形草なのかもしれない)

と思つて、背筋が寒くなつた。

萬屋の奥座敷でお内儀が人形に刺し殺された、という噂が江戸の町に流れてきたのは、それからしばらくたつてからだった。

虚飾の基礎



千坂精一

一

久坂恵一は、満州事変に端を発した十五年戦争のなかで育ったので、國家ぐるみの精神統制で皇国史観を洗脳され、純粹培養されて、筋金入りの軍国少年に仕立て上げられた。

祖父の果たせなかつた夢を託されて、否応なしに教師への順路を進んだが、太平洋戦争が拡大の一途を辿り、國を擧げて戦時体制になつたことから、

「まず、陸海軍の学校を志して、成らねば師範学校へ進学するように」と奨められ、その心算になつていた師範学校のほうは滑り止めに追い遣られてしまつたが、教師という職については魅力も憧憬も感じていなかつたので、悩むことはなかつた。

たとえ、教師に執着していたとしても、時代は国家至上の全体主義になつていたから、選択の自由などなかつた。

いるが、せっかく生き残つても頼みの乗艦が沈没したら、遠泳などやつたことのない久坂は放り出されて大量の海水を飲み、跪き苦しんで死ぬことになる。

そんなみつともない死に様は嫌だつた。

久坂の理想とする軍人像は、「練磨した伎倆を振るつて戦闘の修羅場を生き抜き、敗れたときは潔く死ぬ」

戦国武将の生きざまそのものであつた。

軍律厳しいなかで、そんな一匹狼のような我が儘が許されるのは飛行隊しかない。

飛行機乗りなら、編隊を組んで出撃しても、遭遇戦は一対一の勝負である。

一騎打ちだから、伎倆が優れば生き残れるし、劣れば敗れて撃墜され、瞬時に死ねるから潔い。

久坂は海軍飛行予科練習生を受験することにした。

ところが、学科は及第したのだが、適正検査という節にかけられて落とされた。

生來の無器用が祟つて、右手で丸を、右足で三角を同時に書くことが出来ず、また、急速回転した座席から停止と同時に立ち上がりつて直立不動の姿勢をとらねばならぬところを、踉跄けて倒れてしまつたのである。

試験官のなかの責任者らしい士官が、「学科は上位だったのに、惜しかつたな」

そう氣の毒がつて、

た。

教師への未練に固執して軍人養成学校への進学を拒めば、白眼視され、非国民呼ばわりされるに違ひない。

久坂は、卑怯者にはなりたくなかったので、進学指導に素直に従い、軍人への道を歩むことにした。

そのころ、技能習得の術科学校のなかでは海軍飛行予科練習生（通称予科練）の募集が大々的に宣伝されていて、七つ鉗のかつこうの恰好いい軍服姿が少年たちの憧れの的であつた。

久坂がその予科練を受験しようとしたのは、軽率な感情からではなく、慎重に考慮したうえでの選択であった。まず、重装備で長距離を移動する陸軍は、体力に自信がなかつたので敬遠した。

海軍は艦船勤務だから、進軍途中で落伍する心配はなかつたが、そのかわり、水練が達者でなければ生命の保証はなかつた。

軍人を志すからには、戦闘で死ぬことは当然覚悟して

「通信学校へ推薦しよう。電信技術で優秀な成績を収めれば、航空隊へ配属されて偵察員になれる機会もある。頑張るように」と励ましてくれた。

その場の繕いと聞き流し、師範学校の受験準備をすすめていたら、本当に防府海事通信学校から合格通知が届いたのでおどろいた。

入学は五月二十七日の海軍記念日だったので、それまで二ヵ月余りも自由時間があつた。

久坂は、野球と映画が好きだった。

大学野球は敵国の競技ということで早々に自肅したのか、すでに連盟が解散してしまつてはいたが、職業野球のほうは球団名や規則が日本語化され、枯れ草色のユニフォームと戦闘帽に統一されたが、試合はまだ辛うじてつづいていた。

久坂は、後楽園球場へ巨人軍の試合を観戦に行って、川上や青田ら人気選手の活躍を堪能したり、新宿、池袋、浅草などの盛り場（歓楽街）へ足を運んで映画に熱中したりして、天が授けてくれた休暇を貪欲に楽しんだ。

映画館は、フィルムの欠乏で作品は紅白二系統の配給、興業は入れ替え制だったから、映画を観るには晴雨に拘らず次の上映開始時刻まで戸外に並んで待たなければならぬ。

あるとき、入場を待っているところへ外勤巡查（警察

官）が見回りにきて見咎められ、鬼の首をとったようにいきり立つて交番（派出所）へ連行された。

小さな箱形の詰所に入るや、巡査は威丈高になつて説教するのだが、なんとも紋切型で内容がなかつた。

「国家非常時のおりに、勤労奉仕を怠けて娯楽にはしるとはなんたる非国民か」

このころは、非国民呼ばわりされるのが最大の侮辱であつた。

「おまえがどこの生徒であるかは帽章で判つておる。先生に連絡するから生徒証を出せ」

久坂は、威張り散らす巡査の態度に反感を抱き、不貞腐れて抵抗した。

「本官に反抗すると、監獄へ打ち込むぞ。観念して素直に生徒証を出せ」

そう一喝された久坂は、徐ろに懐中ポケットから防府海軍通信学校の合格通知書を取り出すと、巡査の鼻先に突きつけた。

手に取つて見た巡査は、急に直立不動の姿勢をとり、久坂に向かつて最敬礼した。

「お国のために志願されたとは日本男子の鑑かがみです。武運長久をお祈りいたします。」

久坂は、權威を笠に着て団に乗る横柄な態度の巡査を

遣り込めたことで溜飲を下げた。

これが病みつきになつて、つぎの機会を愉しむように

なり、なるべく盛り場に足を運んでは人目につく行動をとるよう心掛けた。

そうしてゐるうちにも、戦時体制下の引き締めは急速に強まってゆき、流行歌（歌謡曲）は情熱溢れる甘い旋律が姿を消して、『ラバウル海軍航空隊』『若鷲の歌』『少年兵を送る歌』『勝利の日まで』『同期の桜』といった戦意昂揚を目的とした軍国調一辺倒に変わり、映画のほうも『姿三四郎』『花咲く港』『無法松の一生』あたりを最後にして、『あの旗を撃て』『加藤隼戦闘隊』『陸軍』などの戦争物が多くなつていった。

享楽を理由に劇場は全面興業禁止になつて歌舞伎座などが休館を余儀なくされ、高級料理店、待合、バーなども閉鎖、ビヤホールや喫茶店などが材料不足で営業出来なくなつたあと東京都が雑炊だけの都民食堂を開設、国技館が風船爆弾工場として接收され、国技の大相撲は後楽園球場での青空土俵に追い遣られるという、なにもかもが豊かな色彩を抑圧されて素っ気ない灰色一色に統制され、なにか得体の知れない巨大な怪物に追い詰められてゐるかのよくな無氣味な氣配が感じられるようになつてゐた。

そんななかでも、久坂はなおも激減してゆく娯楽を求めて、盛り場をうろつきまわつた。

軍人になるといつても、戦場へ行くわけではないから見納めという悲壮感ではなく、ただ遊び呆けたいだけの

隣組長の熱烈な送別の辞に圧倒されて狼狽え、謝辞は

「万歳、万歳」
の声に送られて都電の停留所まで行き、家族や親族との惜別もそこそこに都電に乗つた。

いちばん下の叔父が同行してくれた。

都庁前で降りるとき、車掌が、

「ご苦労様です」

と挙手の礼をした。

電車の去つたあとの暗い停留所に立つて、久坂は叔父に礼を言い、

「しつかりやれよ」
と激励されて踵を返すと、正門に向かつた。

門前で申告して府内に入るとき、見送人のいるほうを振り返つてみたが、暗くて叔父の姿を認めるることは出来なかつた。

真っ直ぐ歩いて行く久坂の背後で、大きな鉄格子の扉が音を立てて閉まつた。

都庁に集合した久坂たち関東地区の合格者は、深夜に隣組長の挨拶は、國家非常事態に際し率先して海軍少佐をして挨拶に出た久坂は、暗い裸電球の街燈の下に立たされた。

久坂は、大袈裟な言ふように赤面した。

なって品川駅に移動し、東北や北海道の合格者たちと合流して、臨時の軍用列車に乗車した。

**夜明け近くになると、引率の下
日除けを下ろすように指示された。**

る山口県防府市の三田尻という駅に到着した。入校式前日の朝であった。まるで犯罪者でも護送するように、便所以外禁じられ、固い木製座席に腰掛けたままの長崎トレイ

まるで犯罪者でも護送するように、便所
おじられ、固い木製座席に腰掛けたままの

そして、外部から車中を見られぬための目隠しであるから、断じて開けてはならないと注意された。

久坂は、戦闘部隊の移動ならともかく、たかが通信学校へ入校する非戦力集団なのにそこまで気遣うのかと呆れたが、敵国の諜報活動に神経質になり過ぎるために、^{スパイ}疑心暗鬼を生ずるようになっていたのである。

りを走っているのか判らず、車窓に映る景色もたのしめないとあっては退屈このうえなかつた。

こんなときは、本でも読んで過ごすより仕方がなかつたが、外光を遮断されているので車内は日中でも薄暗かつて、それこそ萬千辛虫^{（よろこび）}といふは「萬千辛虫」^{（よろこび）}。

訓をとつて行進していた靴音はいつか舌れに舌れでいつた。

全身満塗れになつて、なんざいしたことをよがやく遡か彼方に何棟もの建物が見えてきた。

で、結婚の締め目はあたる車輪の音を数えて過ごした。食事は、どこかの駅に臨時停車して積み込んだのだろうが、毎回竹の皮に包んで小毎入りの屋の坂ばかりだ。

が毎回竹の反は包んだ小柄入りの握り飯ばかりで、なんざりした。

軍用列車といつても通常運行の合い間を経て元の
であるから、駅でもないのに停車したり、速度も一定し
なかつこので、一昼夜半ばかりようやく通言学校のあ

一星石上にかかれりて、こゝへく道信寺のあ

間と厳粛に隔絶された聖域に入ることを自覚し緊張した。

広い練兵場で出身原別に分類され、武道館のような建物に誘導されると、そこで身体検査を受けた。

受験から半年余りも経過しているので、再検査するのだという。

異常なしと認められると、楕円形の枠のなかに合格と書いたゴム印を手の甲に押された。

これが、略式の入校許可であった。
そんななかで、ときおり泣き声が聞こえた。

再検査の結果不合格になつた者が、検査官に哀願して
いるのだつた。

徵兵検査や応召で課せられた兵役を忌避したい者にとつては、これを幸運として密かに雀躍するところであろう

し、このころ唄われた『可愛いスウチャン』（作詞作曲者不詳）のなかにも、

お国のためとは言いながら

志願で出てくる馬鹿もいる

というのがあるから一般的にはそうなのであろうが、軍国少年に育て上げられ、みずから^{のぞ}希んで願い出た者にとっていつた校門を入りながら不合格にされることは、

食べ終わると、男は礼のつもりらしく、

「東京か」

と愛想よく尋いてきた。

そして、久坂の返事を待つでもなく、

「俺は福島だ」

そうつけ加えた。

久坂があらためて顔を向けると、男は微笑を浮かべていた。

握り飯を一個半もペロリと食べるだけあって、頑健な

体軀をしていた。

久坂は圧倒されて、練習生教程のなかの体育訓練が不安になってきた。

午後は配属分隊が決まり、引率されて何棟か並んでいるうちのひとつ屋舎に入った。

屋舎内は、真ん中を土の通路が貫通していて、向かい合った広いデッキ（床）がそれぞれの分隊の居住区になっていた。

どちらの分隊にも細長い卓が十個並んでいて、そこが夕食後就寝まで自習する温習机であり、食堂でもあった。

分隊は、各班二卓ずつの五班に分けられたが、そのなかにあの食欲旺盛な福島出身の男はいなかった。

久坂は、第一班一卓であった。

分隊世話係の助手谷垣上等水兵（上水）から直属上官が紹介された。

に坦いで行くのである。

衣嚢を収納する棚は居住区の両脇にあった。

一個ずつ入るように枠で仕切られていて、整然と並んでいるその穴が蜂の巣のようであるところから、そう呼ばれていた。

その棚に衣嚢を押し込むと、底の部分がこちらを向く。

そこにまた兵籍番号と氏名が墨書きされているから、持ち主は一目瞭然だった。

東京からはるばる防府まで身に着けてきた私物の衣類を脱ぎ捨てて、貸与品に着替える。

褲（くわ）、襦袢（じゅばん）、靴下（くつした）、事業服（じぎょうふく）、略帽（りやくぼう）、短靴（たんばく）などすべて官品に変わると、心身までもが個人の所有物ではなくつながるような錯覚に囚われる。

校内着の白木綿の事業服姿になつて練習生らしくなり、被服の整理整顿が終わると、つぎは食事についてである。海軍は、艦船以外でも炊事は烹炊所（こうしょくしょ）で主計兵が担当しているから、四人の食事番が出向いて行つて麦飯と菜の大食罐（だいしょくわん）、汁の小食罐（こうしょくわん）、焙じ茶の大薬罐（だいやくわん）、それに食器籠（しょくきろう）を持ち帰り、配膳すればいいのだ。

現在の小学校の給食方法と似ている。

席次は身長順に決められたので、久坂は最初の食卓番を免れたが、あとで聴いた話によると、烹炊所から片手で提げてくるのが辛いと零していたので、先が思い遣られていた。

分隊長は学徒出身の寺崎中尉、分隊士は多田兵曹長、第一教班長は先任下士官の町村上等兵曹（上曹）であった。

そのあと、谷垣助手に引率されて被服庫へ行き、貸与される衣服などを受け取った。

入口に待っていた髪を生やした主計下士官が、貸与品の受領方法について説明したあと、

「服が合わない者は、服に躰を合わせろ」

と真顔で言つた。

軍隊という聖域内だけに通じる無理難題であった。

そう言われて瞬途惑い、みなぎょとんとしていると、

「わかったら返事をしろ」

そう怒鳴られてわれにかえり、一同慌てて元気よく返事をした。

衣袴（いきばん）（軍服）、軍帽（ぐんぼう）、略帽（りやくぼう）、襦袢（じゅばん）（下着）、袴下（ズボン下）、短靴（たんばく）、靴下（くつした）、日用品など一式を受け取つて居住区に戻り、それらのひとつひとつに兵籍番号と氏名を墨書きしてきちんと畳み、衣嚢（いのう）に収納した。

（衣嚢）とは物を入れて口を括るもの、とあるように、底面縦横三十センチほどのやや長方形で、深さが一メートル以上ある防水加工した大きなケンパス（帆布）の袋で、口は鳩目孔（くじめあな）にロープ（細綱）が通してあって、それを引くと折り畳まつて塞がるようになつていた。

つまり、衣嚢は携帯用箪笥で、転勤のときはそれを肩

夕食は、町村教班長を上座に据えての初めての食卓なので緊張した。

食器は鉄製磁瑣（はうろう）引きで内側が白色、外側は空色、箸は竹製であった。

久坂は、『軍隊小唄』（下條ひでと詞）に、

いやじゃありませんか軍隊は
カネのおわんに竹のはし
仏さまもあるまいに

一ぜん飯とは情けなや

と唄われているとおりだと思いながら、しかし、一膳飯は情けないどころか半分近くも残してしまった。

そつと見回すと、周囲にも食べ残した者が四、五人いた。

町村教班長が、遠くから見つけて、

「婆婆の食糧事情に慣れた腹には收まり切らんか。よし、今日のところは眼を瞑つてやるから捨ててよい。教科で扱かれる」と消化旺盛になり、三度の飯では足らんようになるぞ

そう嚇すように言うと、微笑した。

食後に、私物返送の荷造りをさせられた。

久坂は、婆婆の臭いの染みついた学生服と訣別すると、万感迫つて懐郷的になつた。

軍隊という聖域内生活の衣と食を体験したあとは、住の時づくりだけであった。

鞍婆の臭氣を梱包で封じ込めた私物が、どこかへ搬出されて行つたあと、谷垣助手から夜鍋で釣り床つくりを教えられた。

釣り床は、衣嚢棚の上部空間にぎっしり林立状態で収納されている。

そこへ、当番が両隅のラッタル（垂直梯子）を駆け上がり、一個ずつ下ろすのである。

受け取った釣り床を素早く肩に担いで自席に戻り、食卓に上がつてビーム（梁）に取り付けられたフック（鉤）に釣り床前部の丸環を引っ掛け、五箇所括つてある太いロープを解き、後部丸環にロープを張つてフックに縛るのであるが、これがなんどやつてもうまくいかず、就寝後縛つた結び目がずるずる解けて、すとんとデッキに落ちることがよくある。

まがりなりにも吊り終わつてようやく寝床が出来たころには、全身汗塗れになつてゐた。

そのあと、町村教班長から明日の入校式についての細かい注意事項があつて、ようやく自由の身になつた。

久坂は、きちんと畳んだ事業服を頭の下に敷いて釣り床に入った。

東京からの車中は、なすこともなく退屈な長い一日であつたが、今日は一変して目紛しく追い捲られ、軍人生

谷垣助手の叱咤に焦れば焦るほど手許がうまく運ばず、誰も彼もがもついていた。

どうやら括り終えて収納棚まで運んでも、括りが弱くて膨らんだり、お辞儀をしてしまつたりして、収納することが出来ない。

当番が懸命になつて林立させようとするのだが、腰折ればかりでどうしようもなかつた。

そうした混乱の様子を凝と見詰める町村教班長の眼には、一部始終が噴飯物に映るのだろう、笑いを噛み殺しているようであつた。

朝食のあと、入校式の準備にとりかかり、衣嚢から軍服を出して着替えた。

この日、五月二十七日の瀬戸内は快晴で陽射しが眩しく、汗ばむほどの陽気だったが、第二種軍装（白夏服）は六月から九月までの着用と定められているので、今日はまだ厚手の生地の第一種軍装（濃紺冬服）であった。

軍服に身を固めると、緊張で身も心も引き締まり、同胞の楯にならんとする覚悟が沸々と湧き出てくる。

やがて、張り切り男の谷垣助手から号令がかかり、久坂たち練習生は軍服姿で居住区の屋舎前に整列した。点呼を受けたあと、歩調をとつて練兵場へ行進してゆくと、入り口に一期先輩の練習生たちが正装で両側に並び、盛大な拍手で歓迎してくれた。

校長と教頭の訓示のあと、一期上の練習生隊長後藤中

活のいろはを詰め込まれた充実の一 日であった。
久坂は、手足を伸ばした釣り床のなかではじめて消燈喇叭を聞き、その物悲しい音色に誘われて感傷的になつた。

三

翌朝〇四四五（午前四時四十五分）、久坂は静寂のかで通路天井に備え付けられた拡声器の電源が入る幽かな気配を感じとつた。

「総員起こし十五分前、釣り床係起床」
の放送があつて、昨夜割り当てられた当番がそつと起きて配置についた。

「総員起こし五分前」
の放送のときには、すでに全員釣り床のなかで起床体制を整えて待機していた。

○五〇〇、起床喇叭がけたたましく鳴り渡ると同時に、谷垣助手の威勢のいい、

「総員起こし」
の叫びを聽いて、一斉に飛び起きた。

昨夜びっしょり汗をかくほど練習を重ねたのに、釣り床の括りがうまく出来ず、久坂は焦つた。

「急げ、急げ」
久坂は、神谷隊長に魅せられた。

佐が壇上に立つて『軍人勅諭』を代読した。
『軍人勅諭』は、明治十五年（一八八二）一月四日に明治天皇から陸海軍人に与えられた具体的告諭であるが、久坂は全文を知らない。

「わが国の軍隊は、世々天皇の統率し給うところにぞある」
短身瘦軀の後藤隊長は、低い声で悠々と読み上げはじめた。

久坂たちは、不動の姿勢をとつたまま、じりじりと照りつける強い陽射しを浴びて、全身汗水漬になつた。
ときおり後方でどすんという鈍い音がした。

直接日光に晒され、劇しい頭痛と目眩で卒倒する者が出てはじめたのである。

久坂も苦しかつたが、もう終わる、もう終わると自己暗示をかけて堪えた。

長い時間が経過して、ようやく後藤隊長の『軍人勅諭』代読が終わつた。

「休め」

の号令がかかつて、その場に立つたまま顔面と頸回りに吹き出た汗を拭うだけの小休止が与えられたあと、久坂たちの練習生隊長神谷少佐が『海軍軍人の心得』を訓示した。

久坂は、神谷隊長に魅せられた。

大柄でがっしりした体軀に日焼けした赤銅色の大きな

顔、頭に黒ずんだ抱き茗荷の形が崩れた軍帽を冠った姿は、甲冑に身を固めて幾多の戦場を駆け巡ってきた古武士を髣髴させた。

久坂は、神谷少佐が自分たちの隊長であることを誇りに思つた。

ようやく練兵場での入校式が終わって、居住区に戻ってきたときには、脱水症状になっていて喋るのも億劫であつた。

昼食は、海軍記念日ということで、おなじ一汁一菜でも内容が豊富で、食後に汁粉までついたが、久坂はまったく食欲がなく、残さず食べるのが苦痛であつた。

午後は、谷垣助手から一週間の課業割り当てが発表された。つまり時間割りである。

海軍の各科練習生応募資格は中学二年終了以上であるから、二年の教育期間を経て婆婆の中学（旧制）卒業とおなじ資格になる。

ならば、相当の一般教養が含まれていていいはずなのだが、なぜか座学より短艇、陸戦、体育などの心身鍛錬教科のほうが多いかった。

谷垣助手の課業内容説明が終わったところへ、第二教班長の真壁一曹がやってきて、

「聞けッ」

「巡検ツ」

の掛け声につづいて、教班長の、

「異常なし」

の報告とともに、見回る当直将校の靴音が土間の通路を移動して行く。

やがて、屋根つづきの隣接分隊から、

「巡検ツ」

の声が上がり、靴音が遠去かると、それまで狸寝入りしていた者たちが、そっと寝返りを打つたり、両腕を屈伸させたりした。

久坂は、

（みんな眠れないのだ）

と安堵して、手足を思い切り伸ばした。

それでも拡声器から低音で、

「巡検終わり、煙草盆出せ」

の放送がされるころには、広い室のあちこちから寝息や鼾が聞こえてくるようになつた。

だが、久坂はまだ眠れそうもなかつた。

（眠らないと、明日が辛いぞ）

そう自分に言い聞かせて、無理矢理眠ろうと努めたが、それがかえつていけなかつた。

仕方なく暗い天井を見詰めていると、そこに母や弟、祖父、叔父叔母たちの顔が次々に浮かんでは消えていくた。

と叫んだので、みな一斉に注目した。

「貴様たちは、今日から帝国海軍軍人になったということだとを肝に銘じておけ」

そんなことはあらためて言われるまでもないことだったが、真壁教班長の物言いは、そのあとなにを言わんとしているのか察しがつくほど刺々しかつた。

「昨日今日は甘やかしておいたが、明日からはそうはさせんぞ。骨の髓まで海軍魂を叩き込んでやるから覚悟しておけ」

そう凄んだ蒼白の顔貌は、能面のように無表情であった。

町村教班長は赭ら顔の豪放磊落な人であったが、この真壁教班長は逆の型で、みるからに神經質そうで陰湿な性格に見て取れた。

久坂は、真壁教班長に威されて、明日からの課業が不安になつてきた。

一般教養の普通学や実技演習などの座学は頭脳活動だからまだしも、体力がすべての心身鍛錬教科はまったく自信がなかつた。

久坂は、海軍軍人になつた昂奮と、課業の過半を占める体力鍛成への恐怖とが絢い交ぜになつて目が冴え、なかなか寝つけなかつた。

消燈喇叭とともに居住区の明かりが消えた。ややあって、屋舎の入口で、

「聞けッ」

（これが郷愁ノスタルジアというものなのか）

久坂は、遙か東京へ想いを馳せた。

四

普通学が少なく、軍事学の電信術や身体鍛錬教科が多い課業内容は、「戦時法」で教育期間が半分に短縮されたからだという。

多田分隊士は、そう説明したあとで、

「先輩たちが二年で習得したことを、貴様たちは一年でやらねばならぬ。心して励め」と発破を掛けた。

久坂は、だらだら扱かれるよりは、密度濃い実践教育のほうがましだと歓迎した。

そして、一年後の巣立ちに心を躍らせた。

ここでの心身鍛錬は、健全な精神と身体づくりというよりは、勇猛果敢な攻撃精神を育成するのが主眼であつた。

そのことは、体育鍛成競技に如実に現われていた。騎馬戦は騎手だけではなく、馬も殲滅しなければならなかつたし、棒倒しも棒だけではなく、守りの人数を殴り倒すまでやらせられたから、いつも競技を超えて喧嘩になつた。

小柄な久坂は棒の根本を抱える役なので、守りの人数

に二重三重に囲まれて息苦しく、倒されたときには太い棒や仲間の下敷きになつて、死ぬかと思ったことがたびたびあった。

屋外課業のなかで体力を消耗しないのは、軍歌演習と手旗訓練である。

地獄の教練に較べれば、確かに極楽ではあるが、これにも落とし穴があつて、扱きを目的とする練習生教程に手加減や思い遣りなどあらうはずはなかつた。

軍歌演習は、各班一卓と二卓が左回りと右回りの二重円形に整列し、教班長の、

「艦船勤務」用意ッ

の指示で『軍歌集』を開き、持つた左手を真っ直ぐ前方に突き出して右手を大きく振り、足踏みで歩調をとりながら次の号令を待つ。

そして、教班長の、

「軍歌演習はじめッ」

の合図とともに整然と行進をはじめながら、蛮声を張り上げて齊唱するのだ。

「四面海なる帝国を

守る海軍軍人は

戦時平時の別もなく

勇み励みて勉むべし

そう唄いながら歌詞に傾注して、軍人たるの本分をわが身に確かり植え付けてゆく。

除が待っていた。

デッキ掃除は、まず居住区内の卓や椅子その他の器物を全部屋外へ運び出すことからはじまる。

障害物を片付けたあとの居住区は、体育館のように広々となつた。

掃除用具は、オスタップ（大きな洗濯桶）とソーフ（甲板用棒雑巾）と箒、刷毛である。

ソーフは、荒縄を五十センチぐらいの長さに何回か折り曲げて束にしたものをおくるぐる巻いて固定した代用品であった。

はじめに箒で掃いておいて、オスタップの水をバケツで撒く。

谷垣助手が、『海軍精神注入棒』と墨書した手製のバット（太い棒）を持って現われ、

「ソーフ用意ッ」

の号令をかけると、十人一組で衣嚢棚の前へ一列横隊に並び、ソーフを両掌に握んでトラックでの競争競技のスタート位置につくように尻を上げて構える。

そして、

「押せーッ」

の号令でソーフを越えて顔に飛び込んでくる。

反対側の衣嚢棚の前へ行き着くと、合図の呼ぶ子の笛で反転して駆け戻るのだ。

そのあと、『如何に狂風』がつづく。

「如何に狂風吹きまくも

如何に怒濤は逆まくも

たとえ敵艦多くとも

何忍れんや義勇の士

大和魂充ち満つる

我等の眼中難事なし」

唄いつづけることによつて、断じて行えば鬼神もこれ

を避くと確信するようになる。

演習は二時間つづくので、『軍歌集』を持つ腕が棒の

ようく突っ張つて脂汗が出てくる。

久坂は、軍歌演習を重ねているうちに、軍歌は俗念を払い、純真無垢の少年兵に培養する呪術だ、と思うようになつていつた。

手旗信号は、白と赤の旗を両手に持ち、全身で片仮名をつくって相手に伝えるのだが、この訓練は意地悪く昼食前に組まれている。

谷垣助手が手旗を振り、読み取れた者は町村教班長のところへ行つて耳許で答えを囁く。

「よし」

となれば食卓に着けるが、正解出来ないと食事抜きになつてしまふ辛い教科である。

樂あれば苦ありというが、海軍体操、軍歌演習、手旗訓練の軽い日課だけですむはずがなく、午後はデッキ掃

往復百メートルぐらいのだが、汗塗れになり、腿の筋肉が引き攣つてふらふらになる。

「交替ッ」

で次の組がおなじことを繰り返す。

こうして、デッキを満遍なく濡らすと、こんどは磨きになるのだ。

ソーフを両掌で握んでデッキに屈み、

「はじめ」

の号令で片足を前に出し、握んでいるソーフに体重をかけて磨く。

前進を促す笛で、屈んだままこんどは後方の足を前に出して一歩進む。

そうやって先へ先へと磨いて行き、交替の号令がかかるまで何回も往復する。

そのあとからソーフをオスタップで洗いながら、汚れを拭きとる組がついてくる。

そして、ソーフ押しで仕上げて終わる。

都会育ちで筋力の弱い久坂には、ソーフ押しも辛いが、

デッキ磨きはもっと強かった。

しかし、デッキ掃除はまだいいほうで、ほかに体力がすべての厳しい教科があった。

短艇と陸戦の訓練である。

日課表に両方が組み合わされている魔の日は、まさに地獄の責め苦であった。

短艇訓練は、三田尻港の^{もや}航い場に釣り床を吊ったよう^{オール}に整然と並んでいるなかから、各班に一艘ずつ割り当てられる。

まず当番の漕ぎ手が乗り込み、右舷と左舷の櫂^{オール}の位置に着いたところで、全員がそのあいだに並んで腰掛けた。

櫂の握り部分は両掌で輪をつくるほど太く、長さは身長の二倍もある。

漕ぐ方法は、足を伸ばして腰掛けた上半身を前に屈めて反動をつけ、いきに後ろへ倒れ込むようにして櫂を引き、また前屈みになりながら櫂を押すことを繰り返すのだが、速度を上げるために回数を多くしなければならないから、息つく暇もない。

また、漕ぎ終えたあと、

「櫂立てッ」

が大変な苦労なのだ。

傍目には恰好よく映る光景であるが、実は涙ぐましい努力の賜物なのである。

櫂の手許を足で固定しておいて、反動をつけて持ち上げ垂直に立てるだけのことだが、それが重くてとてもすんなりとはいえない。

これがあるから、短艇訓練は憂鬱になる。

さらには、短艇訓練と雖もまだ習熟するだけに留まらず、騎馬戦、棒倒し、銃剣術などの競技とおなじ各班対抗の競漕に発展するから、はじめのうち艇尾の舵柄^{ハンドル}を握っ

である。

漕ぎ終えた櫂を次の動作に移すとき、角度を誤って海

中に引き込まれ、抜けなくなる状態をいうのだが、その櫂が制動機になつて艇は急激に減速し、惨敗してしまう。

勝ち抜き戦は、敗者が除外されていって、最後に残つた二者のあいだで雌雄が決せられるのであるが、海軍のそれはまったく逆で、敗者は攻撃精神が欠けていると判定されて、勝つまでやらせられる負け残り方式であった。

一班員だけ残されて徹底的に扱かれ、ふらつく足取りで居住区に戻ったときには、他班はすでに昼食を終えて、午後の教科陸戦訓練の準備にとりかかっていた。 もはや昼食を摂る時間的余裕はなく、空腹を抱えたまま陸戦訓練に出ざるを得なかつた。 練兵場に分隊全員が整列する。

正面に分隊長寺崎中尉、その横に分隊士多田兵曹長が軍刀代わりに軽い指揮刀を持って立ち、町村上曹以下五人の教班長が受け持ち班列の先頭横に練習生とおなじ三八式歩兵銃を持って並んだ。

唯一の武装教科ということもあって、久坂はこのときだけ自分が軍人になろうとしている実感が湧いてくる。

分隊長と分隊士は好対象で、多田兵曹長は徵兵上がりの歴戦の勇士だから敵ついが、寺崎中尉は学徒出身の知識人であり、長身瘦躯の貴公子然とした容貌と、枯草色の陸戦隊用開襟服の中尉の襟章が相俟つて、恰好いい。

ていた教班長たちも、勝負が懸かると操舵を練習生に委せて、青竹の笞^{むち}を片手に仁王立ちになり、漕ぎ手を叱咤激励する。

そんなとき、久坂はたびたび操舵手を命ぜられることがあった。

漕ぎ手が小柄では頼りないからであろうが、久坂にとつては屈辱どころか、町村教班長の命令が地獄に仏の救いであった。

それほど、漕ぎ手と操舵手では天地雲泥の差があるので、漕ぎ手は、尻の皮膚^{かわ}が擦り剥げ、掌の肉刺^{まづ}が潰れて握った櫂に付着してしまうが、操舵手はせいぜい肉刺が出来るぐらいですむ。

左右の櫂は、一漕ぎ^{ストローク}の調子^{ピッチ}を揃えることによって速度を上げるのだから、一本たりとも乱してはならないのが鉄則である。

調子を乱した者には、容赦なく教班長の笞^{むち}が飛ぶ。

短艇訓練の身形^{みなり}は、騎馬戦や棒倒しのときとおなじ略帽の顎紐をかけ、上半身裸^{ヌード}、洋袴^{ズボン}は膝下までの三つ折りである。

その裸の背中に、撓^{ねじ}った青竹が食い込んでくるのだから堪らない。

たちまち赤い線が走り、蚯蚓^{ムカデ}脹^ぼれになる。

しかし、競漕において決定的な痛手^{ヅケ}になるのは櫂流しである。
久坂が『軍隊小唄』の詞のなかに、
大佐中佐少佐老い耄^ぼれで
と言つて大尉にや妻がある
若い少尉さんにや金がない
女泣かせの中尉どの

というのがあるのを思い出して、なるほどそうだと見惚れていると、その寺崎分隊長が指揮刀を抜いて右脇に立て、

「訓練はじめッ」

久坂たちは、教班長の指揮で重い銃を肩に担ぎ、行進や早駆けを繰り返して汗塗れになつたあと、銃の操作訓練に移り、伏射、膝撃ち、立射などをやらせられた。

空砲射撃だから、命中率は判定出来ないし、子供の頃の戦争ごっこ染みていて身が入らないのだが、この基本を確かり覚えておかないと卒業試験の実弾射撃に結果が出るといわれているので、徒や疎かには出来なかつた。

陸戦訓練の最後は、匍匐^{はづき}前進である。

伏せたまま、銃を横にして両掌で支え、両脇と両足で蹴る^{くら}にして進むのであるが、一日二合三勺の主食制限で生活してきた久坂の腕力と筋力には堪え難い苦痛であった。

ようやく地獄の訓練が終わり、解散になつたが、久坂ら一班員だけはその場に残された。

命じたのは谷垣助手で、

「おまえたちは、今日の短艇競漕において先任教班長に大恥をかかせ、そのうえ昼食もお撰りいただけない不始末を仕出かした。根性を叩き直してやるから俺に従いてこい」

そう言うと、三八式歩兵銃を担がせたまま二列縦隊で校門まで先導し、そこで見張つていて外周を何回も駆け足させられた。

ようやく罰直から解放されて居住区へ帰り着き、銃の手入れをして点検を受けたとき、あろうことか大事が出来ました。

中原練習生に貸与された銃の、床尾の螺子釘が一本足りないのである。

一班全員が整列させられ、町村教班長から、

「銃は、畏くも天皇陛下からのお預かり物である。たとえ螺子釘一本たりと雖も紛失することは許されぬ。全員で搜し出せ」

そう厳しく叱責されて、追い立てられた。

久坂たちは、練兵場へ急ぎながら中原に、

「どこで落とした」

と詰問したが、それが判れば拾うはずで、鬱憤晴らしにしても愚問であった。

つけて隠し持ち、中原を陥れたのだ)

そう推測して、穢い遣り口に肚を立てた。

谷垣助手もおなじ思いだつたらしく、ぶいと横を向いて屋舎へ入つてしまつた。

「おまえたちは、弛んでおるからこういう不始末を為出かすのだ。先任が宥まるから儀が赦さん。修正してやるから一人ずつ前へ出ろ」

凄む真壁二班長の前に、いつも率先して修正を受ける大沼がすっと出て、

「お願ひします」

「よし。足をひらけ、歯を食いしばれ」

そう言うなり、鉄拳が大沼の頬を左そして右と撲つて顎を取つた。

大沼は、蹠蹠ながらも不動の姿勢をとり、「有難うございました」

と礼を述べて最敬礼した。

これで修正（体罰）を受けるときの厳粛な作法であつた。

あとは、次々と先を争つて前へ出た。

全員の修正が終わると、真壁二班長は、

「中原は残つて前支えしている。他の者は急ぎ食事の用意にかかり」

と解散を命じた。

捜せど捜せど練兵場では発見出来ず、ついに校門を出で外周りを捜しあじめたころには、誰も彼もが怨み言を呴いていたが、努力むなしく精根尽き果てるど、

「間が悪かったのだから仕方がないさ」と中原を慰め、諦める心境になつていった。

夕暮れ近くなつて、這うようにしても識別が難しくなると、ようやく谷垣助手から、

「作業止め、整列ッ」

の声がかかり、点呼をとられたあと、解放されて校内へ戻つた。

だが、ことはそれだけではすまなかつた。

居住区前に真壁二班長が立つていて、報告すると囁みつくような顔でどやされた。

「貴様たちの目は節穴か。厭々捜しとるから見つかんのだ。そうだろう、どうだ」

そう言われても、返答が出来なかつた。

軍隊では、弁解は一切許されないのである。

沈黙がつづいた。

「貴様たちが総掛かりでも捜し出せなかつた螺子釘を、

この儀が見つけた。ここにある」

そう言いながら右手を挙げたその指先に、問題の螺子釘が抓まれていた。

久坂は、そんな真壁二班長に疑念を抱いた。

（銃架に立てたときにでも弛んで落ちたのを、偶然見

前支えとは、伏せた躰を掌と足の爪先で浮かす腕立て伏せするときのあの恰好である。

体罰に楽なものなどあるはずはないが、この前支えは時間の経過とともに手足が痺れて痙攣を起こし、腹筋が張つて痛み脂汗が出る。

中原は、そのあと真壁二班長からバットでの修正も受けたということで、顔面蒼白、いまにも倒れそうにして戻ってきた。

その夜、中原は寝たまま糞尿を垂れ流した。打たれどころが悪く腰椎を損傷したらしい。

バットで打たれるときは、両腕を真っ直ぐ上げて両足を半歩ひらき、躰を腰から折つて尻を突き出す姿勢をとるのだが、間違えて尾骶骨を割られぬよう注意して、その下の肉の豊かな尻を打たせなければならない。

だが、その柔らかい膨らみを打たれると、焼かれるような熱さと激痛が走る。

体罰を与える機会を見つけると、たとえ他班のことでもしゃしゃり出る陰湿で加虚趣味の真壁二班長の手にかかると、バットを振り切らずに打ち留めるから堪つたものではない。

強烈な衝撃で躰が仰け反り、二、三歩前へずり出るだけでは痛みを鎮静出来ず、思わず爪先立ちでちょこちょこ歩いて堪える。

（中原は、尻を突き出すのを躊躇つて、尾骶骨の上部を

直撃されたのだろう)

久坂は、私的制裁で一生台無しになるかも知れない中原が可哀相でならなかつた。

教班長たちは、無聊の慰めに好んで練習生たちに罰直を与えて愉しんでいるようだつた。軍隊は、上官に反抗すれば重罪だから、無抵抗な練習生に体罰するのは赤子の手を捻るよりも簡単であつた。典型的弱者苛めである。

罰直は、ほかにもいろいろある。

掌を床につき足を卓上に乗せる〈急降下〉。

ビームのフックに両掌の指を掛けてぶら下がる〈牛肉〉は、体重に引っ張られて指が千切れるのではないかと思うほど痛い。

衣嚢を取り出したあの棚に潜り込む〈蜂の巣〉は、一步でも遅れるとすんなり入れる中段は埋まつてしまい、上段へ跳躍したり下段へ屈んだりしてもたつき、這入り切れずに入る尻をバットで容赦なく叩かれる。

体罰の代わりに恥辱を受けるのが、〈鶯の谷渡り〉である。

長閑な春の光景が連想されるが、これほど馬鹿馬鹿しい罰直はない。

分隊全員が苦笑して見詰めるなかを、木の枝に見立てたビームに上らされて、教班長の、「そこで啼く」

と教えられた。

「トンツー伊、トンツートンツー呂」と習うよりはずっと覚え易い。

送受信とも、一分間百字を目標にして実技訓練に入つた。

一秒間に二字足らずだから簡単なようだが、これが至難の業なのである。

はじめのうちは、基本をまじめにやっているのだが、そのうちに、毎日ただ一字一字を悠々と打つだけの单调な繰り返しに飽きて、そつと電文をつくり、試しに早打ちする者が出てはじめた。

久坂は、実技をはじめるにあたつて、町村教班長から、「銃操作のときにも言つたことだが、実技は基本が大事だ」ということを忘れるな」というのは、ある符号がどうしても打てなくなってしまうことをいう。

自分で書いたが、早打ちをはじめた者のなかから恐れられていた〈手を毀す〉症状が出はじめた。

〈手を毀す〉というのは、ある符号がどうしても打てなくなってしまうことをいう。

自分では原稿どおり打っている心算なのだが、その字のところへくると意識しまつて、どうしてもその符号が打てなくなるのだ。

つまり、手首が脳の指示どおり反応しないのである。いちど手を毀してしまうと、特効薬などないから容易

の号令で、

「ホー、ホケキヨ」と美声をつくって張り上げるのだ。

「声が小さい」

そう言われて、思し召しに叶うまで何度も啼き真似を繰り返しているうちに、自分自身が情けなくなつて口惜し涙が出てくる。

こうして書き上げれば枚挙に遑がないが、久坂が個人責任を問われて受けたのは、〈牛殺し〉、〈安全装置〉、〈木魚叩き〉などの軽体罰多かつた。

こうして、入校から夏の終わりにかけて、短艇、陸戦、銃剣術、騎馬戦、棒倒しなどの日課のうえに体罰まで加わって海軍魂を注入され、久坂ら練習生たちは短期全力集注で逞しく育つていった。

五

秋になると、一変して座学が多くなり、それも密度の濃い学習がつづいた。

専攻教科の電信術は、毎日午前と午後に分けて送信と受信の実技演習が行われた。

モールス符号のイロハニホヘトは、

「伊東、路上歩行、ハーモニカ、入費増加、報告、屁、特等席」

に治らない。

焦らず、のんびり構えて、當時手首を振る訓練を根気よくつづけながら、基本にかえつて一字一字悠々と鍵を叩くことを繰り返し、自然恢復を待つよりはかに方法はない。

そうなると、送信技倆の練達が著しく遅れてしまう。座学は、電信術のほかに、敵味方の艦船を識別する訓練がおこなわれた。

町村教班長が、艦影を黒く塗り潰した平面と側面の絵を紙芝居のようにしてみせて、艦名を答案用紙に書かせるのである。

はじめのうちは、このところ送受信実技演習が猛烈に進んでいたため、息抜きか頭脳休めぐらいに思っていたが、そのうちに要領を覚え、それぞれの特徴遊び感覚で面白半分にやっていたのだが、それが正規訓練同様に正解点数を競わせるようになると、みな真剣な態度になつていった。

久坂は、敵艦どころか、これまで味方の艦船さえ見たことがなかつたので、呆気にとられて為す術を知らず途惑っていたが、そのうちに要領を覚え、それを把握することによって適中率を上げていった。

そんなある日、座学を終えて廊下へ出て、自分の略帽がないのに気がついた。

誰か取り違えたのだろうと、全員が戸外へ出るまで待つてみたが、帽子掛けにはひとつも残らなかつた。

居住区へ戻った久坂は、すぐ谷垣助手に、「自分は座学中に略帽を盗られました」と申告した。

「なにッ」

谷垣助手は、屹度なって、「もたもたしているからだ」と怒鳴ったが、そう言われても自分の不注意ではないから納得いかなかった。

「次の时限はなんだ」

「体操であります」

「よし。体操を休んで卓で待機している」

「はい。自分は卓で待機します」

久坂は、谷垣助手の命令を復誦してそのまま卓に着いて待った。

しばらく待っていると、谷垣助手がやってきて戸外へ連れ出された。

（頸か、バットか）

一瞬そう思ったが、

（修正される謂ではない）

（と思ひ直して、従いて行つた。

谷垣助手は、教室棟へ入つて無人の廊下を歩きながら、送信実技演習の電鍵の音で煩い教室の帽子掛けから略帽をひとつ抜き落とし、立ち止まらずに通り抜けて裏側へ出た。

た。

全科目の試験が終わつたある日、久坂たち練習生に初めて外出許可が出た。自由外出ではなく教班長の引率であつたが、それでも婆娑へ出られることで昂奮した。

だが、海軍の外出は服装点検が厳しかつた。塵が付着してしたり、ズボンの折り目が二重だつたり、靴が光つてないと外出止めになる。

だから、前夜は寝押しに神経を遣つた。

当日は『水兵さん』という映画を観たが、ある少年兵が班長に修正される場面があつて、当然頸がバットだと思つて期待していたら、案に相違して言葉の叱責だけで終わつてしまつたので、拍子抜けして苦笑させられた。

その後は、教科も訓練も罰直もなく、貸与された被服類の員数点検や衣嚢内の整理整頓のほかは、ただ温習しているだけの至極暢んびりしたしかし退屈な日々がつづいた。

久坂には、そんな静謐が却つて無気味だつたが、果たして予感は適中した。

年の暮れも押し迫つた二十五日の朝食後、突然分隊全員集合がかかつた。

寺崎分隊長が、訓示に先立ち、

「試験結果は極めて優秀であった。みなよくやつた。分隊長は嬉しく思う」

そう褒めたあとで、

人気のないところで足を止めた谷垣助手は、「軍隊は員数合わせだ。盗られたら盗るんだ。いいか、解つたか？」

「はい」

「すぐに名前を洗い落として、そこへ濃い墨汁で目立つよう自分の名前を書いておけ」

そう言うと、谷垣助手は薄笑いを浮かべながら、久坂にその略帽を突きつけた。

谷垣助手の態度は、分隊が預かった官品の員数合わせとはいえたかも知れない。

久坂は、居住区へ早駆けしながら、略帽を盗んだことへの良心の呵責に苦しめられた。

十二月になると、これまでの訓練成果を判定するということで、連日試験になつた。

実弾射撃を皮切りに、陸戦、銃剣術、手旗信号とまず屋外教科からはじまり、そのあと座学の教科に入った。

専攻の電信術は、電鍵を使っての送信と、暗号文や平文を受信器で聴いて書き取る受信で、どちらも一分間百字が及第線だったが、久坂の技倅はすでにその壁を超えていた。

久坂たちは、晴天の霹靂に動顛した。
これまで戦況についてはまったく知らされず、ただ教科と訓練に追回されていたが、その離まで戦力に当とうと急かすのは、よほど切羽詰まった情勢にある証拠であった。

久坂は、そんな勘織りをしていたときに氏名を呼ばれないので、躰が震え、胸が高鳴つた。
その日からは身辺整理で落ち着かず、年末年始は慌ただしく過ぎていった。
五日に武道館で行われた第一次選抜者卒業式の席上、神谷練習生隊長が厳肅に、「貴様らは、近々実施部隊に配属されるのであるが、國家有事の防衛に先駆けてその礎とならんことを切望する。奮効努力せよ」と訓示を垂れた。

式のあと、任地別に分けられて、赴任についての詳細な説明を受けた。
久坂の任地は南九州で、それも南端に近い町の基地にいる三桁の数字を冠した航空隊であった。
配属先が陸上の通信隊や艦船勤務ではなく、航空隊と

いうことなら、飛行隊の偵察予備員になれる可能性もあるわけで、久坂は希望が叶えられるかも知れないと密かに北叟笑んだ。

事務官の説明によると、久坂が配属される航空隊は、関東の基地から北海道美幌へ移り、さらに南方戦線のラバウル、セブと転進して、翼を憩めに九州へ帰還したのだという。

転進とは拠点を捨てて退却することであり、帰還は満身創痍の飛行隊を立て直すための戦線離脱であったのだが、久坂は、転進を後退ではなく勢いに乗じての転戦と誤解していたので、歴戦の疲れを癒せばまた勇躍南方戦線へ出陣するものと思い込んでいた。

その夜、酒保で分隊の壮行会がひらかれた。赤飯と小鯛の煮付け、それに汁粉で壮途を祝されたあと、各教班長の送別の辞があつた。

最初に立った町村先任教班長は、

「実施部隊の期待に副うよう頑張れ」

と簡単な激励であったが、真壁二班長は、

「これまでたびたび修正してきたのは、貴様たちが憎くてやつたのではない。一人前の軍人に育てる愛の笞だったのだ。貴様たちはよく班長の期待に応えてくれて嬉しく思う」

そう諄々と弁解して、目頭を押さえた。

久坂は、私的制裁を正当化しようとする真壁二班長の

「血肉分けたる仲ではないがなぜか気が合うて別れられぬ」と嘆いておいで、
「なあ久坂。貴様と俺とは同期の桜。地獄の果てまで連れだ」と戯けてみせた。

久坂は、遠去かつてゆく学舎の燈火に目を遣りながら、（座学の教科よりも、肉体を痛めつけられたバットの感触や、攻撃精神鍛磨で生死の境を彷徨つた猛訓練のほうが、忘れられない思い出になるな）

そう自分自身に問いかけて、感慨に耽った。

軍隊という聖域のなかで孵化し、雛鳥となつた久坂らの練習生たちは、国土防衛の礎になれと命ぜられて、いま巢立つて行こうとしていた。

歯が浮くような台詞を聴きながら、

（いつの日か実施部隊で再会したときに、階級が逆転していることを恐れて、遺恨を持たれぬよう芝居掛けた弁解をしているのだ）

（貴様、それでも帝国海軍軍人かッ）

と怒鳴りつけてやりたい衝動に駆られた。

各分隊の壮行会が終わると、任地への出立がはじまつたが、極秘ということで三々五々の異動だったから、寂しい門出であった。

順番がきて、久坂が事務室に出頭したとき、おなじ航空隊に配属される練習生がもう一人きていて、一緒に具体的な説明を受けた。

その同期生は松本健太といい、初対面なのに馴れ馴れしく振る舞う剽輕者であった。

出立日の夕刻、久坂が衣嚢を担いで事務室に行くと、松本は先にきて待っていた。

今夜の出発は二人だけであった。

二食分の握り飯を受け取り、日が暮れてから幌つきトランクの荷台に乗って校門を出た。

隣りに腰をおろしていた松本が、昂奮していきなり久坂の肩を抱くと、

「貴様と俺とは同期の桜
おなじ防通校の庭に咲く





睡

魔

鉛木昭三

三重海軍航空隊奈良分遣隊は当時の奈良県山辺郡丹波市町にあった。ここは天理教の本部のある所だ。この町の中には地方からやって来る信者達が宿泊する寮がたくさんある。海軍はこの寮を借りてそのまま兵舎として使つたのである。

須山が中学校の制服制帽姿で仮入隊した兵舎は、町の中の方角で言つたら、東のはずれで、山裾の高台にあつた。この兵舎は町の中の他の兵舎に比べると、建物は古くて小じんまりした寮だった。この兵舎は又見晴しがよかつた。山を背負つた東側は駄目だったが、町の北から西、南まで遮るものもなかつた。

兵舎の二階から眺めると、まず真っ先に目に入るのは、正面眼下に展開する天理教本部の建物群だった。須山が中学校の国史で習った豊臣秀吉の聚楽第の絵を思わず広大な日本建築が、甍を連ねて聳え立つてゐた。その本部から右手に開ける市街地は、春先にしては緑が多くて美しい町並を見せていた。その市街地の中でも目立つのは

やはり天理教の寮だった。二階三階建ての日本建築が、言い合わせたように屋根つきの白い土塀に囲まれていて、小さな城郭を見るようであつた。

須山は風景を眺めている中に天理教に対し子供の頃から抱き続けていた感概が一変してしまつた。故郷での外観の規模雄大さだけで既に圧倒され、霧散していた。この兵舎に集められた須山達約二百人は、便宜的に分隊と呼ばれ、殆んどが長野、山梨、静岡出身の中学生だった。分隊と称しても分隊長がいたわけでもなくて、須山達からしても見るからに応召兵と言つた感じの、髪の薄い、物静かな老兵曹長が下士官達を指図していた。この老兵曹長とは縁があつて、この数か月後大津の滋賀海軍航空隊へ転勤した時に須山の分隊士になつた人だつた。応召した時彼は木更津の郵便局長だつた。彼は須山達に、どうせこの先長い命じゃないのだから、最後の親孝行をせよと言つて、給料天引きで郵便保険に加入させられた。

この兵舎での二日間の、一日目は午前、午後をとおして身体検査、二日目も同じだが、午後の検査は早めに終つて、その日の中に採用の可否が発表された。

須山は合格採用と決まつたが、二日間寝食を共にした隣町の男が不合格になつた。須山の分隊では他に二人不格合だつた。隣町の男は、夕食後トランクを提げて兵舎を出る時、須山に小声で言つた。

「命びろいだよ。あしたから又、元の中学生だい」

須山は、この二日間、わけも分らずに怒鳴り散す下士官達の理不尽な仕打ちに多分に恐ろしさを感じていた。この隣町の男とは何かにつけて愚痴をこぼし合つていた仲だったので、彼と別れるのは心細かった。それに彼が軍隊から解放される事が、いささか羨しいとも思った。彼は隊門を去る時、須山を振り返つた。須山も手を振つた。

「いつも眺めているなばかもん。娑婆が恋しいのか」いつの間にか須山の後に白い事業服の下士官が立つてゐた。彼は一機曹で、昨夜ミッドウェーの話をしてくれた。日本が有力空母を失つた事を、須山達中学生は初めて知つて驚愕した。

翌日朝食後、須山達十二名はその一機曹に引率され、正式に入隊する兵舎に向かつた。

舗装され幅員の広い奈良街道を、桜井線の单線の鉄路に沿つて南に歩いている時だつた。

「お前須山だったな。まさか、お前の町にあるすやま旅館と、関係はねえよなあ」

「すやま旅館は須山の実家の屋号であった。須山はこんな所で意外にも実家の名が出て驚いてしまつた。

「はい、すやま旅館はぼくの家です」

「ええっ」

フルヤは一瞬大きく目を見張り、そのまま間を置いて

から息をのんだ。

「機曹が振り向きざま怒鳴つた。

フルヤはすぐに前に向きなおると黙つて歩き続けた。

九州の古い国の名を記した寮の前で、一機曹の「歩調トレ」の号令で門の中へ入っていった。衛兵詰所を通り過ぎると行進を止めた。寮の庭木の陰から現われた二人の白い事業服の下士官に一機層は、彼の顔の前で掌をただ動かしただけの簡単な挙手の礼をした。二人の下士官も右手を肩のあたりに上げ笑いながら答礼した。一機曹は笑顔で何か言った。「手荒くいい女」とそんな風に須山には聞えた。緊張していた十二名の中学生も色気づいた頃で下士官達の会話の意味がおぼろげながらわかった。それでごく自然にみんな苦笑したのかも知れない。一機曹は須山達を振り向くと、一番手近かにいたフルヤの顔をいきなり拳でなぐった。海軍で初めて見たあごだった。

「きさまあ、にたにたするな」

フルヤは二メートル横によろけて地面に倒れた。

一機曹はこの後、ここは二十二兵舎だと須山達に告げただけで、あわただしく帰ってしまった。

残った二人の下士官は夫それ手にした黒表紙の名簿を広げ、二人共同時に分隊名を叫び、それから名簿の名を読み上げた。須山達十二名は自分の名を聞き取るのに困惑した。

フルヤは六十三分隊、須山は六十四分隊だった。夫ぞれの下士官の後に従つて十二名が六名づつに別れる時、フルヤは須山に笑いかけた。唇が切れていて、白い歯が赤く染まっていた。

はいなかつた。つまり噂の真意は希望的観測であった。ある日当直練習生が本部から戻ると、十四期操縦は土浦航空隊へ転勤と本部の黒板に書いてあつたと報告したのだ。土浦は予科練の本場であつた。須山は偵察の練習生に遠慮しながら、操縦の班員と抱き合い目を輝かせながら喜び合つた。

その翌朝の課業整列の時、六十三、六十四分隊長を兼任していた特務大尉が、昨日の当直練習生の報告を裏書きするような事を言つたのだ。

「いつなん時、いや明日でも転勤命令が出てもよいように、身辺整理をして置くように」

須山達練習生はその日から衣嚢と言ふ衣類をしまつて置く袋の整理を始めた。軍から公に支給された衣類を官品と称して、その員数を過不足ないように常に検査されていたが、今回は転勤であるからいつもより念入りに員数を当つた。軍帽、一種二種の軍装を始め軍靴から靴下に至る迄点検し、ズボンは毎夜寝押しした。員数の足りない物は各自の責任で揃えろと班長が言つた。須山は朝干した靴下を一足盗まれてしまった。隣の六十三分隊へ取り戻しに行つたのだが、向うも警戒していて目的を果せずにすごすと戻つた。夕食の時須山の班長が言つた昔の話だがと前置きして靴下は鍛みで縫に切りさいて、一足を二足のように並べた奴がいた。検査もそれでうまく通つたという話だ。だがおれは知らないよと後は口を

この寮は今迄二日間いた所と違つて、広くて屋敷の真ん中が庭になつていて。そこには庭につきものの老松、奇岩、巨石が隨處に配置されていた。庭などに全く興味のない少年の須山の頭にも、いわゆる贅を尽したという言葉が浮んだ。この庭を囲んで建物は三棟あつた。北側の一棟には須山達の一期上の十三期練習生が居住していた。西側の二棟に六十三分隊と六十四分隊が入つた。翌四月一日、須山は憧れの七つ鉤即ち濃紺の一種軍装で、天理外語の校舎の近くの広場にいつになく緊張して整列した。

海軍第十四期甲種飛行予科練習生ヲ命ズ。海軍二等飛行兵ヲ命ズ。

ずっと後になつて復員する時に渡された履歴書に当る考課表にこう記されていた。

六月の末は多忙だった。須山達十四期練習生は飛行機の搭乗員としての適性検査が行われた。操縦員と偵察員の二つの専科に分かれるのだ。須山は操縦員に決まった。うまく行けば操縦員はある名だたる零式艦上戦闘機の搭乗員になれるのだ。須山は入隊以来の苦労が一辺に報くわたと思った。

そこで海軍と言う所は噂がよく飛んだものだ。噂は出所がわからない事が多いから後になつてデマだとわかる。尤も海軍では予定は未定で屢しば変更する事有りと教えられていたから、須山達練習生は噂も予定も余り信じては語り合つた。

その夜、床に就いてから、須山は明日外出したら、ひょっとしたら奈良最後の思い出になるかも知れないと考えた。春日大社の拝殿の前か、それとも東大寺の二月堂のあたりで記念写真をとろうと決めた。写真屋も当時はその辺りにしかいなかつた。その一枚を写真屋に頼んで故郷へ送つて貰おうと考へていて中に眠つてしまつた。

須山は右半身が横から何かに押されているような、胸のあたりにこれ又何かが乗つているような、夢ともうつともつかない状態でいた。人間の体表のどこかに昆虫の触角のような器官があるとすれば、それを司どる脳味噌のその部分だけは目覚めていたのかも知れない。須山の傍に横になつている男のいることがわかつたのである。仰向けに寝ている須山の胸の毛布の上に男の腕が乗っている。須山の右の脇腹からずうっと下がつて、右足の爪先に至る迄、その男の体が須山の掛けた毛布を間に挟んでびつたりとはいついていた。

(誰だろうこんな夜更けに。何しに来たのだろう。)

須山は男がここにいる理由を考へようとした。だがすぐ眠たくてそれ所ではないとやめにした。所が又考え直した。

(ともかく、考へるより男の顔を見る方が手つとり早い。そうだ男の顔を見ることが先決だ。男の顔を見ればよいのだ)

須山は依然として眠たくて目をあけられないでいる間に、隣に寝ている大村練習生の、一週間前のことが突然思い浮んだ。

(おれは迂闊だった。隣は大村じゃないか。そうだぶっちゃなら、おれの所へ転がってきても、寝惚けておれにはりついても不思議はない。ぶちゃに違いない)

この時六十四分隊、第三班の半数の十六名が須山の寝ているこの部屋にいるのだ。

この部屋は畳敷きで、西側の桜井線に面したガラス窓の他は、全てその建具を取つ払つて、廊下からは丸見えである。部屋の真中に折り畳んだ食卓を枕がわりに置き、左右から八名づつがそれに頭を乗せて寝ている。その様は胸骨から枝分かれしている肋骨のようだ。廊下から一番遠い窓際に大村練習生が、その次に須山が寝て、左隣は肥后練習生だ。二週間前のことだった。三班員十六名は床に就いていたが、スピーカーからの「巡査終り」の号令がある迄は眠つてはいけないのだ。その時右隣の大

須山の両瞼から鼻梁、それから頸まで、濡れた雑巾のようにならぶさっているのだ。

(こいつはぶちゃじゃないな。ぶちゃはおれに似て、こんな大きな手じゃない)

須山は男の掌を顔から払いのけたかった。須山は右腕を使おうと何度も試した。それがまるで金縛りに会つたようで、全く動かせないのだ。それでもあきらめずに動かそうとしている中に、指先だけは動いてくれて、腕の動かない理由が分った。

男は須山の掛毛布の上から、須山の右脇腹と右腕の間に上体を押しこんでいる。男の左腕が、須山の右腕の外側にあるために、須山の右腕が毛布の袋の中に入つてしまつた形で、動きがとれないでいたのだ。須山は顔の上の男の掌をとる事をあきらめた。男は全く動かない。

須山はじっとしている中に、男の呼吸が気になりだした。最初男のいるのに気づいた時にくらべると男の息づかいが今は少し静かになつたような気もした。でも須山が今になって男の呼吸が気になつたのは、須山の自分の呼吸にくらべたらやはり荒いからだ。

息づかいが荒いのは、この男がここへ現われる前に、或いは現われるために、体を激しく動かした証拠かも知れない。そのせいで掌も汗ばんでいる。

(この男が動かないのは、眠っているのか。いや眠つていて息づかいが荒かつたり、掌に汗をかいたりしている

村練習生が自分の掛け毛布を体に巻きつけたまま、須山との境の三十粁ばかりの畠の上を寝返りして、須山の右腕を掴んだのだ。

この時間、ものを言つてはいけない規則だ。大村練習生は須山に秘密の相談もあるのかと考えたが黙つたままであった。巡査終りの声がして、須山は傍の大村練習生においと声を掛けた。するとすこぶる大声だった。

「須山、このごみ、ぶちゃってくれ」

寝言だったのだ。大村練習生を除いた三班員十五名は、三部屋離れた班長達のいる教員室に聞えないように、毛布の中で大笑いした。

朝になってそれを言われて大村練習生は頬を赤く染めてはにかんだ。小さい頃から寝惚けるくせがあるもんと言った。ぶちゃってくれば、捨ててくれの甲州の方言だった。それ以来三班では大村練習生を「ぶちゃ」と呼ぶようになった。

須山はいつの間にか眠っていたのだ。須山の体のどこかで何かが動いた。そんな気がして目を覚ました。やっぱりそうだった。

須山の朦朧とした意識の中でも、胸にあつた筈の男の手が、今は須山の顔の上にあるのが分った。男の掌の指の股のあたりが、須山の鼻孔をおおうように触れていた。

須山が息を吸う度に、掌のどこからか油を吸つた埃のにおいがするのだ。男のその大きな掌は汗ばんでいて、

のは。そうだこの男、夢で誰かに追われてているのかも知れない)

須山は又、男がこんな所へ来て眠るなんておかしいとも考えた。

(じゃあ、眠つてもいい、夢でもないとすると、興奮している。そうだこの男興奮しているのかも知れんぞ。

おれの体にぴったりはりついて、興奮。ええっ、興奮だって。まさか、まさか)

須山の背筋に冷たいものが走つた。

入隊して最初の日曜日、六十三、六十四分隊合同の引率外出で明日香村のことだった。六十三分の通信の教員の話だった。彼は比島方面から母港の舞鶴へ帰投すると、そのまま陸上勤務となりこの奈良分遣隊へ配属されたのだ。彼は巡洋艦に乗つていた。連日の苦しい戦いぶりを口ごもりながら練習生に語つた。その頃は明日香の石舞台には今のような棚もなく、須山達と八人の練習生がこの教員を囲んで、その辺の草の上に腰をおろして聞いた話だ。

艦隊勤務の最中でもおかしな事はあるもんだ。古参の下士官の中には、若い志願兵を弄んだ者がいたと話したのだ。聞いていた須山達練習生はショックだった。「七鉗は桜に錨」の歌に送られ憧れの予科練習生になったばかりだった。須山は同じ海軍の志願兵の一人として教員の話を非常に屈辱的に受けとめた。練習生達の深刻な

表情は教員には意外だったのかその後は口をつぐんでしまった。

（もしも、もしも傍の男が、教員の話のように、おれを求めてやつて来たとしたら）

須山の心は急速に不安になつた。いたたまれない衝動にかられた。

（もう眠ってなんかいられないぞ）

須山は目をあけようとした。目があかない。

男の指の腹が須山の両瞼を押えているのだ。

須山は首を左右に動かそうとした。首が動かない。

男の親指と小指が須山の頬骨を左右から挟んでいるのだ。掌の手首へのつけ根が須山の頸を包むように押えている。

うつ屈した不安と不気味さから逃がれるには、大声を出して助けを求めるしかない。これも駄目だった。

須山の唇は男の掌が邪魔していて開けないのだ。

男は計画的に須山の首から上の自由を奪っているとしか思えなかつた。

須山はこの時始めてこの男に恐怖を感じた。須山の伸びた両足も上から男の片足がくの字に押えこんでいた。

須山は不覚にもこの男にがんじがらめにされていたのだ。男が動けないのは、獲物を仕留めるチャンスを狙っているためかも知れない。

（手込めなんかにされてたまるか。帝国海軍の恥辱だ。

ここは比島沖の艦内とは違うのだ
須山はこのままでは男の掌で息の根をとめられるかも知れないと思った。

（ひょっとしたら、おれはこの男に殺されかけているのかも知れない。おれは危機に瀕しているのだ。誰かに助けでもらわなければ。右隣のぶちやでもいい。いや右隣は男がいるから駄目だ。左の肥後に頼むか。体が動かせなくとも、声が出せなくても、なんとかして、この男をはね飛ばしても）

須山は満身に力をこめてと言つても、自分が利かないのだから、せめて気持だけでもと、一旦身を縮めてみた。

その時全く不意だった。教員室の入口のガラス戸のあく音がしたのだ。

「あと何名ぐらいで、終りになるかな」

廊下に出た先任教員のしわがれ声だ。この頃教員は毎夜遅くまで須山達練習生の操偵別の新編成の事務に多忙だった。

「たすけてくれ

これも又予測しなかつた男の声だ。声は殺していく小さかつたが、湯気のような熱い息と共に須山の耳朶を打つた。たすけてくれは須山の方のせりふの気がした。

「たすけてくれ

男の二度目の声は最初より小さかつた。それに驚いたことに、男は須山の顔の上の掌も、須山の毛布の上の上

体も、あっと言う間にずらすと、今度は須山の毛布をめくり上げて中に入りこんできたのだ。男は直かに須山の胸のあたりにしがみついた。

「ううう」

須山は顔の上の障害物がとれて、まるでびんの栓が抜けたようなうめき声を発した。

「たすけてくれ

毛布の中から須山の咽のあたりに男の息がかかった。

先任教員のスリッパが廊下に断続的に響いて来た。先任教員は夜中に必ず一度は、懷中電灯を照らして寝ている練習生を見て歩くのだ。先任教員のスリッパは隣の部屋の前で止つた。この時男の片手が動いて須山の股間を掌で包むように掴んでしまつたのだ。須山は一瞬体中の力が抜けるような吐息をもらした。急所を握りつぶされれば一巻の終だと思った。だがこの時股間を握られて、須山はこの間の唐手の課業を思い出したのだ。この男が股間を握るについてはあの課業を受けた奴かも知れないのだ。あの課業で練習生達はみんなくすくす笑っていた。唐手の教員はおかしな発音で演技して見せた。

「前敵倒して、きんだまをかける。
後敵蹴り上げて、きんだまをつぶす」

あの教員は言った。いつでもきんだまは必殺のわざだと。

須山は毛布の中からこの風をかがされても別に不快感はなかつた。それ所かその中にこのにおいになんだか懐かしさをさえ感じたのだ。

先任教員が側屋から戻ると、順番を待つていたかのように後の七人の教員が、間を置いては一人づつ側に立つた。須山は全員が終わるのには相当の時間を食うことだ

ろうと考えた。

男は毛布の中で須山に抱きつき、股間を握ったままでいた。男は何をたくらんでいるのか須山にはわからなかつたが、どうも教員室の様子をうかがっているような気がした。須山は目を開けて、天井の真中のピンポン玉のようなうす黄色の電灯の有明をぼんやり眺めている中に、おかしなことに、頭の中を駆け廻っていた不安と恐怖心も徐々に薄らいでそれと逆比例して、むしろ平穏な気分が満ちてくるような感じがした。後になつてはちょっとと考えられないのだが、それと共に再び眠氣を催してきたのだ。

見知らぬ男に寝床に侵入され、急所を握られているのにそれでも眠たくなつてしまつたのは、おかしな話かも知れない。

その後実際に須山は男がいつ頃須山の傍から姿を消したのか眠つていて全く知らなかつたのである。

その夜須山は夢を見た。
須山が五、六歳の頃まで故郷すやま旅館には兼さんと言ふ料理人がいた。須山の実母が須山を生んで直ぐに亡くなつた。須山が小学生の頃、お前のおつかあは自殺だと言つた者がいた。須山の父はすぐにうちの旅館の女中を後添えとしたから、須山はこの後添えを実母と思って育つたのだ。料理人の兼さんはそんな須山をあわれに思つたのか、兄弟の中でも特別に須山を可愛がつてくれた。

た。一班の二谷一郎練習生の軍帽が紛失していたのである。

朝食後六十四分隊総員で兵舎の内外を探したが、夕方になつても結局軍帽は出てこなかつた。

翌年の六月、須山達練習生が福知山郊外で土木作業をしている時に、突然に面会が許可された。須山達は噂によると切り込み隊の特攻要員になつたらしいのだ。遠い静岡県から母と姉が来てくれて、須山は福知山の駅通りの金物店の二階を借りて会つた。積もる話が多くつたのだが、話の途中で、母が兼さんのことをしゃべり出した。この春、須山の実家の年忌に兼さんが久しぶりに顔を見せたと言うのだ。兼さんの話題は須山の子供の頃のことばっかりだったそうだ。

「お前が枕を持参で兼さんと寝てさ、朝わたしんとこへ戻つてくると、そりゃもう大変なの」

「なぜ」

須山は初めて聞く話で、母に大変の理由を尋ねてみた。母は笑つてばかりいて姉が答えてくれた。

「あんたはくさかったの。あなたの全身から兼さんにおいが、ぶんぶん」

「兼さんのにおいって、そんなにひどかったのかい」

「そうよ、それはひどいわきがだったのよ。尤もこの頃は余りくさくないって、ご当人が平氣で言つてたわよ」

須山は夜になると自分の枕を持って、兼さんの寝泊りしていた離れの兼さんの布団の中に入つて寝ていた。泊り客の朝飯の仕込みを終えた兼さんが戻つてくると、須山が目覚めている時はおとぎ話をしてくれた。当時世間では須山は兼さんの子だと噂されていたそうだ。兼さんはすやま旅館に大正十四年に駆け落してきて、その後相手の女は連れ戻され、兼さんだけがそのまま居つたのである。

須山のその夜の夢の始まりは東海道線の駅のホームだった。ホームは須山の予科練入隊を見送る親戚や中学校の同級生達でにぎやかだった。入隊者だけの特別列車に須山が乗つて窓を開けると、料理人の兼さんが腕を差し入れてきて須山と握手した。それからおかしなことを言つた。

「戦争で死んじゃいかんよ。どこかに隠れて眠つているのがいいよ」

列車が出発した。兼さんは須山と握手したままホームを駆け出した。列車がホームを離れても、それから三十分もたつて天竜川の鉄橋の上でも、窓の外に兼さんがいて須山の手を握っていた。須山はこれは只事ではないと大声で兼さんの名を呼んだ。

ぶっちゃが、須山の名を呼びながら、須山を振り動かしていた。もう朝になつていて総員起し五分前に近かつた。夜が明けて日曜日の外出は、六十四分隊だけ中止となつた。

「へえー、おれ未だ小さくて気がつかなかつたなあ」「そんな事よりもさあ、兼さんの息子さんも、お前と同じで、去年の春に丹波市の予科練へ入隊したんだつてよ。ひと口に予科練なんて言つたって、丹波市だけでも何万人つているとかで、わかりやしまい」

須山は兼さんが当時どこに住んでいるのか知らなかつた。

「兼さんはうちに駆け落してきた時のハルさんと縫りが戻つてさ、うちをやめて昭和十年頃正式に一緒になつたのよ、甲州の韋崎で。ハルさんは駆け落の時すでに兼さんの子を宿していてね、その子が今予科練つて言うわけ」

「その予科練、何んて言う名」

「古谷太郎。たしか大正十五年生れだつたね。そらお前と同じ年だつたね」

須山より二つ年上の姉がうなづいてみせた。

「おれの知つてゐるフルヤかも知れん。六十三分隊だつたよ。今はどこにいるかわからんけど」

その日午後四時の面会時間が終つて母達と分れる時、須山は母に小さな紙包みを渡した。中には須山の手指の爪が入れてあつた。母は背中のリュックサックにしまい込むと、緊張した表情で須山に最敬礼をした。姉も同じように頭を下げた。顔を上げた二人の頬は涙で濡れてい

その夜床の中で須山はあのフルヤのことをあれこれと考へてみた。

フルヤは古谷太郎で、わきがのひどかった兼さんの伴とする。

軍帽を紛失した二谷練習生の名も太郎で長野県出身である。仮入隊の兵舎は、古谷太郎も二谷太郎も、須山も一緒に顔と姓ぐらいは互いに覚えていたと思う。二谷太郎の軍帽の中の名札に、ちょっと墨で棒をふやせば、二谷が古谷に変えられたかも知れない。でも兵籍番号はどうしただろうか。

あの土曜日の夜の男。須山をあのどさくさの最中に眠らせたのは、あの兼さん譲りの体臭だったと結びつけるからであろうか。

戦後になって、古谷太郎は広島県の特攻基地で昭和二十年の七月、訓練中に殉職した事を知った。須山は若年、須山の父と母が相ついで亡くなり兼さんも昭和三十一年に鬼籍に入った。

須山が生れた時、兼さんの子ではと噂されたそうだが、当時を知る人は今ではいなくなってしまった。須山は若い頃から他人にわきがと言われた事はなかった。百科事典で腋臭症を開いて見たら、これは多く女性に遺伝すると書いてあった。

おふく



太田和貞

小岩村の書役の孫兵衛が卒中であっけなくあの世へ旅立ってしまったので、定使いの吉兵衛がとりあえず仮の書役になった。

「仮の書役といつてもな、案ずるには及ばぬ。村の寄合までの辛抱だ」

名主の直右衛門にそう言われて、吉兵衛は安心した。

吉兵衛が直右衛門から貰った文書には、「仮」の文字が入っていたので、ちょっと気になっていた。

急度申し渡し候、当村吉兵衛儀百姓なれど達筆なるを以て村内の仮の書役仰せ付けられ候、

役料の儀は金二両二分へ米八斗也、此の事、其外精を入れる可く候、依て件の如し、

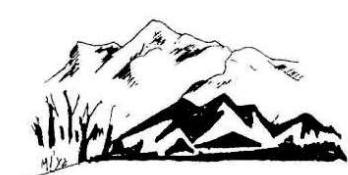
安政二卯年五月

東葛西領下之割り

吉兵衛の持高は一石三斗五升三合であった。

吉兵衛が書いた廻状を見て、

「吉兵衛は達筆だのう。孫兵衛よりすぐれている」と直右衛門から褒められたりした。



直右衛門が吉兵衛の実直さと達筆を見込んで、孫兵衛が急死したとき、仮の書役に推薦してくれたのだと知ったその夜から、吉兵衛たちは北枕で寝るようになつた。

「そんでは、なんば、なんばでも、もってえねえ」と、ちかとしづが言ったからだつた。

北枕に寝ても、吉兵衛は幸せを感じていた。年に、二両二分の役料と米八斗が村から支給されるので、これまでのように出稼ぎや日雇いに出る必要も無くなつた。

それに定使いは納屋が仕事部屋であつたが、書役には狭いながら三畳の小部屋と机が与えられた。机の前に座るのは、寺子屋以来だつた。

万福寺の寺子屋明物堂に、吉兵衛は八歳から十二歳までの四年間、通つた。普通、百姓の子供は二、三年で寺子屋をやめて江戸に出るが、吉兵衛は違つた。

「おらのような水呑百姓には、子供に渡してやれる身上はなんもねえ。読み、書き、そろばんを身につけてやるのが、せめてもの親の務めだ」

ちかは貧しい家計の中から盆と暮の謝儀をひねりだして、いた。

明物堂に登山して二年目から、吉兵衛は筆道の腕をめ

きめきとあげて、師匠の融義を凌ぐほどになつた。

四年で明物堂を下山するとき、融義に請われて筆道を教えることになった。

名主の直右衛門は触次および大物代を兼務していたので、毎日何通もの触書や廻状が代官所、御鷹野役所、関東取締出役および各村の名主から届けられた。

直右衛門がそれらを読んだあと、その触書や廻状を『御用留書上帳』に写し取り、返事の必要なものは直右衛門の口述を吉兵衛が筆記した。

写し取つた触書や廻状は油紙に包んで吉兵衛のあとに定使いになつた孫八に持たせて、つぎの村に届けさせた。孫八は孫兵衛の孫で、ことし十三歳だった。

このように、村の勤め口は縁続きの者が独占していたから、吉兵衛のように、つながりのない者が名主屋敷の仕事に入り込む余地は少なかつた。

吉兵衛が定使いになれたのは、万福寺の和尚融義のくちききであった。総代の横槍で筆道の師匠になりそこねた弟子をあわれんだ融義の思いやりでもつた。

書役になつた吉兵衛は紺の筒袖に、紺の袴を着用して、いた。来客があれば、正面玄関の式台に出迎え、来意をうかがい奥座敷の直右衛門に伝えた。

直右衛門の指示に従つて、客を奥座敷、つぎの間または、中の間に案内し、敷物をすすめてから女中に茶を運ばせた。

こうした来客に備えて名主屋敷では台所の囲炉裏に火を絶やすことは無かつた。かまどの脇に積み重ねられた薪を下男・下女・吉兵衛たちが気付く度に囲炉裏にくべ

その最初の日、筆子たちの視線を一身に受けて吉兵衛は顔が赤くなつた。しかし、筆道に自信を持っていた吉兵衛は落ち着いて授業を進めることができた。

その翌日、吉兵衛が万福寺に行くと、山門の前で融義が待つていた。

「わしはお前に長く教えて貰おうと思つておつたが、……なんじゃ、横槍が入つてな、……。当山の総代から……」

融義は、そのあととの言葉を濁したが、吉兵衛は全てを了解した。

昨日の初午の日に入った筆子たちの中に、万福寺総代の儀右衛門の孫がいた。

「水呑百姓の小作の吉兵衛からわしの孫が教わるとは、とんでもねえ。万福寺の和尚は、一体なにを考えているだ。寺が困ったときには総代さん、総代さんと頼んでくれるくせに、……。水呑百姓の小作にわしの孫が教わつては、わしの男の沽券はどうしてくれるのだ」

昨夜、儀右衛門が万福寺にねじ込んできたのだった。吉兵衛は師匠に一礼すると、なにも言わずに家に帰つてきただけに、吉兵衛の失望は大きかつた。

それ以来、吉兵衛は筆を持つことはなかつた。

定使いになつて、書役の孫兵衛が困つている姿について筆を採つたまでだつた。それが吉兵衛を救つた。

た。新しい薪を入れると、薪はけぶつて紫色の煙が立ちのぼつた。

その煙は囲炉裏の自在かぎや大黒柱をあめ色に光らせ、磨けば磨くほど艶が出てきた。たゆたつた煙は茅葺き屋根の茅に染み込み、防虫の働きを果たして茅葺き屋根を長持ちさせた。

名主屋敷で働いているうちに、吉兵衛は明物堂で受けた心の傷も癒えて安政二年（一八五五）の十月を迎えた。季節は秋から冬に入つて、一日は終日、雨が降り続いていたが、二日になると小雨になり、昼ごろには雨も止んでいた。

夕方には空が晴れ上がり、地上ではほとんど風もない無風状態であったが、茜色に染つた雲が東から西へと吹き流されていた。あわただしく西の空に流されていくうちに、雲は茜色をましていく、そのあやしさに人々は空を仰いでおびえた。

「なんかの前兆では、あんめえか、……」

不安を口にすることによって、百姓たちは互いの不安を消し合つていた。やがて、陽が沈み、茜色が薄れて闇が空を覆い始めるとなれば、百姓たちは先程の不安を忘れていた。

夜四ツ（午後十時）ごろ、吉兵衛は書見中であった。定使いのときには、灯火用の油を惜しんで書見もままならないが、書役になつてからは、その心配もなくなつた。

突如、吉兵衛の体が上下に揺れた。

倒れそうになつた行灯を体で守ろうとしたが、足がふらついて行灯ごと倒れそうになつた。

「し、し、地震だ！おっかあと、そ、そとさ逃げろ！」

吉兵衛が、そうわめくと同時に、しづがちかを抱えて吉兵衛の部屋に転がり込んできた。

「は、はやく、早く表さ出ろ！」

吉兵衛は行灯を抱えたまま、そう怒鳴った。しづとちかは、体ごと雨戸に体当りすると暗い庭に転げ落ちた。

それを見届けてから、吉兵衛は行灯の灯を吹き消した。

闇の中で大地が沸騰するように、烈しく揺れた。

土壁が崩れ落ちた。鉄びんを吊した自在かぎが大きく揺れてギィ、ギィと不気味な音を立てた。

「あ、あんたあ！」

しづが庭で悲鳴を挙げた。

「大丈夫だ！家さ入ってきては、なんねえぞお！」

吉兵衛は怒鳴りながら四つんばいになつて、庭に出ようとしたが、怒涛のような大地のうねりに翻弄されて、もがくばかりだった。

「あんたあ！」

しづの手が吉兵衛の手をつかんで、外に引っ張り出した。

吉兵衛は怒鳴りながら四つんばいになつて、庭に出ようとしたが、怒涛のような大地のうねりに翻弄されて、もがくばかりだった。

再び激震が襲ってきた。

なく、突然鳴動とともに激しい震動が起つた。

江戸の市中はもとより、江戸城の内外が損壊し、諸侯、旗本の屋敷および町人の家の大半が倒壊した。しかも、三十余か所から火災が発生したため、江戸の市中は大混乱におちいった。

『町方書上』によれば、江戸の被害は死者三八九五人（四六二六人ともいわれている）、重傷者は一九〇〇余人、家屋の倒壊は一四〇四か所であった。しかも、これには、武家の被害は含まれていなかつたので、それを加えれば死者は七千人とも、一万人ともいわれている。

幸いなことに、小岩村では死者は出なかつたが、総家数四拾二軒のうち潰家八軒、半潰家拾三軒の被害を蒙つた。

名主の直右衛門に従つて、吉兵衛は余震の続くなかを村の被害状況を調べて回つた。

「吉兵衛の家も半潰家だのう。すこし、手を入れれば住めないことはないわ。屋根の茅の下敷きになつたそうだが、梁の下でなくてよかつた。桑川村では四人家族が梁に押しつぶされて、二歳になる女の子だけが生き残つたそうな。死んだ親たちもかわいそつだが、残された女の子もあわれだのう、…………どうだ、吉兵衛、その女の子を貰つて育てる氣はないか？」

直右衛門は立ちどまつて、吉兵衛の顔を見た。

吉兵衛は崩れ落ちてきた茅の下敷きになつただけに、

茅葺き屋根がド、ドーッとふたりの上に落ちてきた。

「あー」と悲鳴を挙げたのは、ちかだった。

「死んでは、なんねえ」

ちかは夢中になつて、茅を搔き分けた。最初に、吉兵衛の頭が見付かった。吉兵衛の体の下に、しづがいた。

ちかは右手で吉兵衛、左手でしづの顔を叩いた。ふたりとも気を失つていた。

最初に気が付いたのは、しづだった。

「しづよ、しっかりしんねえ。お前をかばつた吉兵衛がまだ氣を失つているだ。はよう目を覚ますように、声を掛けくんろ」

ちかの声をぼんやり聞いていたしづがパッと起き上がり、吉兵衛の体を烈しく揺すり始めた。

「あんたあ！」

それは悲鳴に近かつた。

「う、うーん」

吉兵衛がかすかに、うめいた。

「あんたあ！」

「吉兵衛！」

しづとちかが同時に大声で吉兵衛を呼んだ。

安政二年の大地震は江戸時代二百六十余年のうちで、最も大きな地震として記録されている。

十月一日、夜四ツどき江戸近郊一帯に何のまえぶれもなく大きき地震として記録されている。

十月一日、夜四ツどき江戸近郊一帯に何のまえぶれもなく大きき地震として記録されている。

桑川村のことは、ひとごとではなかつた。

しづが嫁にきてすでに六年。子供ができることは、あきらめていた。

「子供を貰いましょうか？」

夫婦で話し合つたこと也有つたが、なんとなく、ふんざりがつかないままに、だらだらと今日まできてしまつた。

「しづと相談してみねえことには、…………」

吉兵衛はそう言ったものの、吉兵衛の心は、もう決まつていた。

「おう、そうよのう。おしづさんと相談してみてくれ。

こうゆう話は早い方がええだ。今から暇をやるで、話し合つたらええ。桑川村の名主の源左衛門さんが赤ん坊の面倒を見ていいなさるそうだから。わしが添状を書いてもええぞ」

直右衛門のことばに甘えて、吉兵衛は自分の家にとつてかえした。

丁度、しづが崩れ落ちた茅葺き屋根にのぼり、ちかが地上から放り上げる藁束を受け取つて、屋根をつくりつてゐるところだった。

「しづとおっかあ！赤ん坊が貰えるぞ！」

そう叫んだ吉兵衛の声は弾んでいた。

着替えたしづと一緒に、名主屋敷に戻つた。

「どうぞ、お願ひします」

ふたりで直右衛門に頭を下げた。

「お前たち夫婦のことは、この添状に書いてあるでえ。源左衛門さんも親身に取り扱ってくれるだろう。ただ、その赤ん坊がまだ貰われていねければ、ええがのう」

直右衛門のことばに、吉兵衛としづは顔を見合せた。長屋門を出ると、しづはすぐ駆け出した。

「氣を付けていけ。女の子を抱いたら決して離すでねえぞ！」

吉兵衛はしづの後ろ姿に、そう怒鳴った。

屋敷に戻ってきた吉兵衛の姿を見て、直右衛門はびっくりした。

「なんと、いっしょに行つたのではねえのか？」

「添状まで書いていただいて、その上、お暇までいただいては罰が当ります」

吉兵衛は律気に、そう答えた。

それから一^{いつ}刻（二時間）ほどして、しづが赤子をおぶって名主屋敷に帰ってきた。

しづの背中からおろされても目を覚まさなかつた。赤子は背中からおろされても目を覚まさなかつた。

「名前はなんと言うのか？」

赤子の寝顔をのぞき込みながら、直右衛門が聞いた。

「はい、おふくといいますだ」

しづは直右衛門の顔を見上げながら答えた。

「おふく、ええ名前だ。色白でかわいい顔をしている。

おふく、きょうからこのわしが、お前のおとうだぞ。ほれ、目を開けて新しいおとうの顔を見んかい、……」

吉兵衛はおふくの体をゆすって、目を覚ませようとした。

「あれッ！お前さま、それではおふくが起きるではないかえ。ねたいだけ、ねかしてあげましょ。夢の中で、なくなつたおつかさまと会つてゐるかも知れないし、親に死に別れて、よほど淋しかつたのだろうねえ。このおふくは、……。わたしの顔を見るなり、すぐ膝にあがつてきて、小さな手でわたしの胸をさぐって、わたしの乳首を吸い出したの。乳の出ない乳首をチュウ、チュウ吸いながら、下からじーっとわたしの顔を見上げているのを見て、わしは死んだおつかさまに代つて、このおふくを見つたけど、どうぞ、おふくを育てさせてください」

「おふくは、わしらの本当の子だ。どれ、わしにもちよっくら抱かせてくれろ」

吉兵衛は、しづからおふくを抱き取つて、ぎこちなく、おふくの体をゆすった。

おふくはパチッと目を開けて、吉兵衛の顔を見上げて、ニコッと笑つた。

「おふくが笑つた。わ、わたしの顔を見て笑つた」

吉兵衛は、しづと直右衛門におふくの笑顔を見やすいように、体の向きをかえた。

「ほーら！」

しづはおふくを足の甲に乗せたまま、ゆっくりと持ちあげた。

おふくの両足が、しづの足の甲からずり落ちたが、おふくは両手で握っていたしづのもんべを離さなかつた。

「キャーッ！」

おふくは喚声をあげながら、しづの足にしがみついた。おふくは、この遊びが好きだった。

「ちょっとお休み」

しづがくたびれて、休もうとするとおふくは両手で握つた、しづのもんべをゆすって催促した。

「あと一回こつきりよ。おとうが帰つてきたら、高い、高いをしてもらひなさい」

口の端から、よだれを流しながらしづの顔を見上げるおふくの顔がかわいかつた。

（おふくのなくなつた母親も、こうしておふくを足に乗せて遊んでいたのだろう）

あごが二重あごにくびれていた。

おふくが思つた。

「一回こつきりよ」

とおふくに言つたはずのしづが何回も何回も、おふくの両足を足の甲に乗せて遊び続けた。

吉兵衛が帰つてくる前に、おふくは遊び疲れて寝ついた。

「キャーッ！」

おふくが喚声をあげた。

「おふく、いくわよ！」

しづは足の甲におふくを乗せたまま、静かに横歩きしました。

「キャーッ！」

また。

「なんだ。寝たのか?」

吉兵衛は不満そうな声を出した。

「まあ、ええか。寝る子は育つとゆうからのう」

そう言つて、おふくのほっぺをチヨンと指でついた。

「おつかあ、おしづ、来て見てみろ。かわいい寝顔をしてる」

吉兵衛は母親と女房を小声で呼んだ。

おふくの枕元に三人は両手をついて、おふくの寝顔に見入った。

「こんなかわいい子を残して、おふくのおつかさんは死ぬに死ねなかつたろうにね」

「わしはおふくの本当のおつかさんだと思って、この子を育てます。この子のおつかさんはふじ、二十五歳。おとっさんは茂兵衛、二十七歳。おばあさんはあや、四十七歳。地震が起る前までは、四人家族で楽しく暮してたというのに、……」

「過ぎてしまつたことをいくら言つても仕方あんめえ。おふくをどうやって育てていくか、それを話し合うのがでえじだ」

吉兵衛のことばで三人は囲炉裏端に戻つて、音のしないように遅い食事を始めた。
「おふくは囲炉裏に近付かないよう、おつかさんかことばはむごいものだつた。

その同じことばが、今のしづにとつて至福のことばに思えてならなかつた。
しづが嫁にきたとき、持つてきたさらし木綿でおふくの肌着を縫い始めた。
おふくの体の寸法は昼間、計つて覚えていた。
縫いあがつたおふくの肌着を両手でひろげてみて、あまりの小ささにびっくりした。
寸法を間違えたのかと思い、肌着に物差しをあてたが、間違つてはいなかつた。
あすの朝、その小さな肌着を想像して、しづの口元はほころんだ。

「おつかさま、おふくの肌着ができたけど、あんまり小せえので物差しを当ててみた。みてくだせい。ほらこんなに小せいの」
しづは肌着の両袖を指先でつまんで、吉兵衛とちかに

ら、きびしく仕付けられたような。わしがいちばん心配したのは、囲炉裏の火に落ち込むのと自在かぎに掛つてゐる鉄びんにさわることだ。けど、そんな心配はちつともいらないの。おふくはわしに抱かれて、囲炉裏にあたつても、ひとりで囲炉裏に近付かねえだ」

「わしが吉兵衛を育てていた頃は、吉兵衛がいつ囲炉裏に頭を突っ込むべえかと心配ばかりしていたが、おふくのおつかさんはどうやって、おふくを仕付けたのかなあ」

「そりや、わしにも分かりません。でも、きっとおふくに囲炉裏はあつい、あついと教えたのでしょう。それにおふくは男の子のように、乱暴な遊びが好きだ」
そう言つて、しづは自分の足の甲におふくを乗せて遊んだことを話した。

「せっかく、授かった女の子だ。おふくの笑い声が、なくなつたおとうとおつかあの供養になるように、元気に育てなきゃなんねえ」

吉兵衛は自分に言い聞かせるようにつぶやいて、ちかとしづの顔を見た。
その夜、しづは遅くまでおふくの着物を縫つていた。
(子供の着物が縫えるなんて、夢みたい)
子供をあきらめていたしづにとつておふくのために、針を動かすことは嬉しくて仕方がなかつた。
(お針を習つていて、本当によかつた)

かかげてみせた。

「ほんと、小せえのう。こんなに小せえうちから大きな不幸を背負いこんでしまつて、……」

「な、なに言うだ。おふくは名前のように、おおきな福が待つてゐるだ。あすの朝までに、新しいベベを縫いあげて、おふくに着せれば、この家にも鶴が舞い、亀が遊ぶようになるわ」

吉兵衛はそう言って文机から離れた。

「名主屋敷の仕事も片付いたで、わしもなにか手伝うべえか?」

行灯を提げて囲炉裏端に寄つてきた。

「手伝つて貰えれば、どんなに助かるか、しんねえ。ほれ、この弁慶縞の着物をほどいてくださらんか?」

「よししゃ、わかった。わしは針は使えんが、鋏なら任せておけ!」

吉兵衛には、その弁慶縞に見覚えがあつた。
しづとの最初の逢瀬のとき、しづが着ていた着物だった。

(やっぱり、駄目だったか)

吉兵衛はあきらめかけて、帰ろうとしたとき、夕闇の中から浮き出てきたのがしづの白い顔とこの大柄な弁慶縞だった。

「しづ、これをほどいてええのか?」
吉兵衛は、しづに聞いた。

「わしがいちばん仕合せなとき着ていた着物だから、おふくにも着せて仕合せになつて貰いたいの」

「そうだのう。しづの着物を着れば、おふくも器量よしなつて、村の若い者から付け文をたんと貰うだろう。そんなときは、わしがまきざっぱ持つて村の若い者を追つ払ってくれる」

吉兵衛がそう言つたとき、おふくが、

「う、う、うーっ」

と、うめいた。

おふくのちゃんちゃんこを縫つていたちかが、しづに言つた。

「かわいそうに、あのときのことを夢みているのかもしんねえな。しづ、はよう、乳を口にくわえさせてやれ。なんたつて、ややこにはおつかさんの乳がいちばんだ」しづはおふくの脇に添い寝をした。胸をはだけて乳首をおふくの口にふくませた。

おふくの唇があわてて乳首に吸いついた。

おふくはしばらくして乳房を強く吸っていたが、そのうちおふくの口から乳房が離れていた。

「おふくに乳首を吸われて、わしは本当のおつかさんになつたみたい」

「そんだ。女はね。乳を吸われて、はじめて母親になるだ」

「そうゆうもんかのう、……。男のわしには、よ

いにくと曇り空で月も星も見えなかつた。

吉兵衛は足許から忍びあがつてくる夜氣の冷たさと頬に当たる風の動きから、四ツどき（午後十時）だらうと見当をつけた。

風の吹き具合によつて、たまに両国の回向院や国府台の総寧寺の鐘が聞こえてくることがあつたので、吉兵衛は耳を澄ましていた。しかし、何も聞こえてこなかつた。しづが汲んでくれた白湯を飲みながら吉兵衛は、

「四ツどきだんべえ」と小さな声で、しづに答えた。

「九ツ、八ツ、七ツ」

としづは指を折つて夜明けまでの時間をたしかめた。それから自在かぎに、水を張つた大鍋を掛け、それに刻んだ野菜と麦とを入れた。

「おつかさま、根をつめてお疲れでしょ」

「なんの、なんの。かわいいおふくのためだ。一晩や二晩、夜鍋したって、なんちゅうことはない」

「わしも大丈夫じや。おふくがしづの着物を着るかと思うと、心がワクワクする」

おふくは三人にはさまれて、スヤスヤと眠入つていた。その色白な顔に、ほだ火があかあかと映つていた。

夜が更けるにつれて夜氣が冷えてきた。吉兵衛は西炉裏にほだ木をたびたび補給した。

一番鶏が鳴いた。

「うわからんが、……」

「仮さんは、よう考えておなごの体をつくんなさつたと、わしは感心しているだ」

「おふくもよう寝てくれましたので、ここらでお茶にしましょか、……」

しづは粗朶を畳炉裏にくべた。

「いまは、なんどきなんでしようかねえ」

お茶にしようと言つたしづが時刻を気にして、吉兵衛の顔を見た。

「そんなら、わしが外に出て、お月さんに聞いてくるわ」

吉兵衛が身軽に、外に出ていった。しづがあしたの朝までに、おふくの着物を縫い上げたいと願つているのを知つてからだつた。

小岩村を含む東葛西領は、徳川将軍の御鷹場に指定されていたので、一切の鳴り物は禁止されていた。

鳴り物の中に、時の鐘も入つていた。

時の鐘を鳴らせば、御鷹狩りの獲物となる鶴や白鳥を驚かすばかりでなく、御鷹の餌となる小鳥たちを驚かすという理由であった。

百姓家の新築や改築も同様であった。

将軍の御鷹狩りのために、百姓たちの生活が犠牲になつていた。

吉兵衛は放尿しながら悠々と夜空を眺めていたが、あ

「夜鍋仕事とは、昔の人はうまいことを言つたもんだのう。夜に鍋を掛けて、ほだを燃やして、その光でおふくの着物を縫つているわしらは、どつから見ても夜鍋仕事だわい」

「昔の夜鍋仕事は、しんどかった。今夜のわしらはおふくのためだから仕事も楽しいし、ほだ火もぬくいし、そのうち夜食も煮えるし、昔の人に申し訳ねえほどだ」

「昔は米俵を編んだり、草鞋をつくったり、あかぎれの傷口に藁のしんが突き当つて、とびあがるほどいてかつたあ。昔とくらべれば、夜鍋さまざまだ。野菜と麦の煮えてる匂いがしてきた。しづ、味噌を入れろや」

「おつかさま、このくらいの味で、どうだろうか？」

「うん、ええ塩梅だ。腹にあつたけえ物を入れて、あつたけえ心でおふくの着物を縫うとするか、……」

味噌あじの野菜と麦の雑炊は熱くて、うまかった。閉炉裏の脇におふくが寝ついて、おふくの着物を縫つているという思いが雑炊のあじをいつそうひきたたせていた。

「しづ、あしたの朝は白い飯を炊け、おふくがこの家にきて、はじめて迎える朝だし、それにわしらが今、縫つている着物にはじめて袖を通す着初めの嬉しい日だ。白い飯をおふくに食べて貰つてわしらもお相伴にあづからう」

鍋を片付けていたしづの顔が、ぱッと明るくなつた。

「そんだけ。おふくにたまごをたべさせたらええ」

おふくにたまごを使うことまで許されて、しづは胸が躍った。しづが世話をしている鶏たちは、毎朝七個ほど玉子を産んだが、しづはその玉子を食べたことは無かった。

三日に一回ぐらいの割で、村にやつてくる振り売りの男が買い取っていった。

白い飯は正月か村祭りでなければ、しづたちの口には入らなかつた。世に言う『慶安の御触書』では、百姓の夫食（食料）は次のように定められていた。

百姓は分別もなく末の考え方もなきもの二候故、秋に成候らえバ、米・雑穀をむざと（むざむざと）妻子ニもくハせ候、いつも正月・二月・三月時分の心をもち、食物を大切ニつかまつらず候ニ付、雑穀専一二候間、麦・粟・稗・菜・大根、其外何にても雑穀を作り、米を多く食いつぶし候ハぬようにつかまつるべく候、（下略）

百姓にとって米は御年貢として納めるもので、自分が食べるものではないという考えが浸透していた。

そのため、ちかが、

「白い飯を炊け」と言つたのは破格であり、しづが喜んだのも当然であつた。

うぶんに乾燥していた。その稻架の脇を通る誰もが、ゴツゴツした掌で稻穂の乾き具合を確かめていた。

「去年と違つて、ことしは豊作に違えねえ」

誰もがそう思った。吉兵衛の家でも、一間ばかりの稻架に三段の稻束が架けられていた。水呑百姓の吉兵衛の家では、これだけの収穫しかなかつた。

三年前までは稻刈りや稻架かけの日雇いの仕事が村からなくなると、吉兵衛は江戸へ出稼ぎに出掛けっていた。しかし、ことしは名主の直右衛門が約束してくれていた「仮の書役」から「正式の書役」に昇進したおかげで、役料も二両三分に米一石と増えていた。

生活が安定し、しかも直右衛門の口添えでおふくが貰えたことで、吉兵衛は「お役目、大事」と名主屋敷に今まで以上に精勤していた。

八月二十三日、二十四日と小雨が降り続いた。

「ちょうど、ええおしめりだ」と、百姓たちは氣にも止めていなかつた。

二十五日の五つごろ、突如雷鳴が轟き渡り、南東の風が強くなり始めた。

その夜、直右衛門は馬喰町の公事宿に泊まり、明朝のお裁きに備えていた。

「名主さまが留守なので今夜は帰つてはこられねえ」しづにそう言い残して吉兵衛は家を出てきた。

風が次第に強くなるにつれて、吉兵衛はおふくやしづ

二番鶏が鳴き始めた。

おふくの肌着二枚、袴の着物一枚、ちゃんと肩を揉んで

枚がようやく出来あがつた。

「おっかあ、ご苦労だったのう。わしが肩を揉んでつから米を取り出して、とき始めた。やるでえ」

吉兵衛はちかの肩を揉み始め、しづはいそいそと米び元された。

これは、『群書治安』の卷三十八に、「庶民安政、

然後君子安レ位矣」とあることによつた。

安政三年八月 おふくは三歳になつていていた。

近くの百姓家に小さな子供がいなかつたので、おふくの相手はいつも大人だった。

それを哀れんだしづが吉兵衛に、

「もうひとり、女の子を貰うべえか？」

と相談を持ち掛けていた。

（おふくのためには、遊び相手の妹を貰うこととは、ええことだ）

と分かっていても、吉兵衛にはなかなか、ふんぎりがつかなかつた。

八月に入り、晴天が続き稻架に架けられた稻束がじゅぱされていった。

吉兵衛は最後の雨戸を閉めながら、そう思つた。

きびきびと下男や下女を指図して雨戸を閉めさせ、米蔵、土蔵の重い扉を閉めさせていた。

最後の雨戸を閉めるとき、吉兵衛は首だけ外に出してあたりの様子をうかがつた。

轟々と空は鳴り渡り、樹々の太い枝がユサユサと頭上で揺れていた。丈の低い木は葉をみな裏返して身を縮めていた。

時折、バキッと鋭い音を立てて、枯枝が折れて風に飛ばされていった。

（あいにくだつたのう）吉兵衛は最後の雨戸を閉めながら、そう思つた。今ごろ、風の音におびえたおふくがしづにしがみついている様子が頭に浮かんでいた。（名主さまが江戸にお出張りでなければ、おふくのそばにいてやれたのに、……）とも思つていた。

風が強く吹く度に、名主屋敷の茅葺き屋根が揺れて、太い柱がミシミシと音を立てた。

奥さまの承諾を得て、吉兵衛は下男たちに飯を炊かせ、下女たちに沢庵などの古漬けを用意させた。飯が炊き上ると、それを握り飯にして古漬け二枚を添えた小皿を二つ持つて、吉兵衛は奥の仏の間にいった。

「吉兵衛です。お夜食を持って参りました」
中の間に片手をついて、吉兵衛は声を掛けた。

「吉兵衛か、おりり」

奥さまの声に、吉兵衛は仮の間の板戸を開けた。
ご隠居と奥さまが黙然と座わっていた。

「どうぞ、召しあがってください」

と挨拶して、そのまま引き下がろうとするのを、

「わたしたちも、そちらに参りましょう。あばあさま
とふたりでは淋しくなりませぬ。みなといっしょなら
ば風の怖さもうすらぎましよう」

「それがよろしゅうございます。みなは握り飯をつくっ
ております。万が一のときの炊き出しと考えております。

この大風が無事におさまれば、夫食として村の者に配る
つもりであります」

「それは、それは、よいことにお気付きました。ぜひ
そうしてあげてください。直右衛門が留守をしておりま
すが、直右衛門もきっとそうしたと思ひますよ」

「ありがとうございます。いつもながら奥さまのご厚
情、吉兵衛、心よりお礼を申し上げます」

奥から出てきたご隠居と奥さまの姿を見て、下男や下
女たちの話し声がピタッとやんだ。

「さあ、さあ。遠慮せずにおしゃべりしておくれ。奥
さまは、みなといっしょにお夜食を召し上がりたいとい
われている。話がはずめば、握り飯もうまいというもの。

それに、ご隠居と奥さまとお夜食がとれるなんて、年に
何回もあることではないわ」
吉兵衛はご隠居と奥さまの心をひき立てるよう、努
めて明るく言つた。

『安政三年年八月 風災一件御用留』に、吉兵衛が書
いた被害届が綴られていた。

乍おそれなから恐以おそれなから書付二申上候

一、半潰家拾五軒

一、潰物置七ヶ所

一、半潰物置三ヶ所

外ニ即死人 女參人

吉兵衛女房 しづ

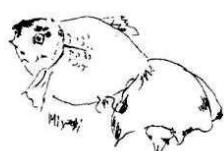
三十才

同人 養女 ふく

三才

同人 母 ちか

五十六才



森 実与子

可もなく不可もなく

今、私は車の助手席に座っています。

隣の運転席で車を運転しているのは、夫の稻葉衛いなば まむちです。渋滞に巻き込まれて、車は全然動きません。信号が赤から青に変わつても、ほんの五メートルばかり進んではまた止まり、さっきからそんなじれったいことの繰り返しです。私たちは無言のまま、前をみつめています。夫が時々、私に何か話しかけようとしますが、その度に、私はわざと首を横にファンと向け、巧みにかわしています。そしてそおっと夫の表情を盗み見すると、目の前にぶらさがった餌に食いつこうとした魚が、急にやってきました。ぱしつこい魚に餌をとられてしまつたような、間抜け面をしています。

沈黙の続くなか、カセットラジオから流れるショパンのピアノ曲が、車内にただ空しく響くだけです。

東京の郊外から都心へ向かう幹線道路には、派手な作のファミリーレストランがやたらと目につきます。

でも私は、本当は行きたくないのです。というより、実のところ、横にいる夫のことを少しも好きになれない人の、暗黙の規則です。

これから私たちは、私のママのところへ夕食を食べに行くのです。日曜日の夕方、こうして夫の運転する車に乗つてママの家へ行って過ごすという習慣は、結婚して二年半、きちんと守られています。ママと私たち夫婦三人の、暗黙の規則です。

今日の天気は一月末とは思えないほどうららかで、春を思わせる柔らかな日射しが、町並みや人、樹木など、あらゆるものを持ち運んでいます。このところ寒い日が続いたので、こんなに暖かで天気のいい日曜日の午後には、誰しも外に出たくなるものです。その証拠に、家族連れやカップルが、ファミレス近くの道路や駐車場に慌ただしく車を駐車し、出入りしています。おかげで渋滞はますますひどくなっていますが、それはまさに、欠伸が出てきそうな平和な風景です。

これから私たちは、私のママのところへ夕食を食べに行くのです。日曜日の夕方、こうして夫の運転する車に乗つてママの家へ行って過ごすという習慣は、結婚して二年半、きちんと守られています。ママと私たち夫婦三人の、暗黙の規則です。

のです。眞面目一点張りの、どこといって個性のない平凡な男と向き合っていても、心が少しも浮き立つてこないのです。夫を選んだのは、実はママでした。ママが夫をいたく気に入つて、私に差し出したといったらいいでしょうか。

青白い顔色、高くも低くもない鼻、大きくも小さくもない目と口、幾分うつろな目つき。顔立ちには、これと沂て特徴がありません。まあ、美男子でもなければ男でもない、十人並みの顔といつていいでしょう。いえ、鼻は、貧弱といえるかもしれません。夫の没個性的な顔のなかで一番不満なのが鼻です。特別低いとか、だんご鼻というわけでないけれど、小さくて存在感がないのが、私は気に食わないのです。

体つきも顔と同様に特徴がありません。背は高くも低くもなく、瘦せても太ってもいらない中肉中背です。声も高からず低からず。すべてが中庸で、大勢の人の中に入ったら、まったく見分けがつかないのでしょうか。つまり私にとって夫は、存在感のないのっぺら棒のお人形に過ぎないです。

むしろ、夫がもっと不細工であつたらと思うくらいです。醜悪なら、きっとそれを埋め合わせようとして、気がきくとか愛嬌があるとか、面白いこと言って笑わせるとか、何かしらユニークな一面を持ち合わせているはずです。それとも、私は嫌悪感を抱き苦痛にのたうち回る

かもしません。そして、醜い夫を愛そうとする葛藤が心の中に芽生えるか、または憎惡の炎が燃えたぎるはずです。……いいえ、顔の良しあしか外見はどうでもいいことです。そういうことよりも、冗談のひとつもいえず、クソ面白くもおかしくもない夫に対して、私は、愛情はもとより、何の感情も沸いてこないのです。

結婚生活はあくなき日常の繰り返し、そんなものよ、という人もいるでしょうが、私にとって、何の刺激もない退屈な日々は、牢獄にも近いものです。

夫は、男子高校の社会科の教師です。夫の留守に部屋を掃除している時、たまたま、生徒に配るプリントや試験問題を目にしたことがあります。私には、さっぱりわけがわかりません。なぜなら、

「フランスのド・ゴール政権について述べよ」

なんて、ちんぶんかんぶんの試験問題を出しているんですもの。

一瞬、ド・ゴールって、フランス料理のレストランかお菓子の名前かしら、と思つたくらいです。はるか離れたヨーロッパの、しかももう何十年も前のド・ゴール大

「こんなもの、不衛生じゃないか……」

「ブツブツいって、食べさせてくれません。スキを盗んで一人で食べていると、やろうとしません。」

「きっとおなかをこわすよ」と軽蔑した口調でいい、自分は口にしません。

海辺のマリンスボーツも、怪我をしたら困るからと、スを飲みながら読書をしていました。日がな一日、夫は青白い顔をして、バンガローでジュースを飲みながら読書をしていました。

私は、夫が止めるのもきかずに、現地のインストラクターについて、一人でパラセイリングやジェットスキーを楽しみました。

パラシュートを羽のように背中につけて、ボートに牽引されながら空を舞つたパラセイリングは、世界一優雅な空中散歩といえました。どこまでも広がる海と、海を覆うはるかな空が一つに融合し、まばゆいばかりのブルーの静止画像となっています。照りつける太陽に見守られ、私はふわりふわりと軽やかに空を浮遊し、まるで紺碧の空に吸い込まれていくような心地よさを、全身いっぱいに享受しました。下を見ると、白い砂浜と緑の木々が箱庭のように鎮座しています。地上が近づくとその箱庭がゆっくりと動き出し、見る見るうちに浜辺で遊ぶ人たちの姿が近づいてくるのです。

空を見上げて手を振り、私の着地を待ち構えているイ

統領なんて、日本人の私たちには、これっぽっちもなし
みがないではありませんか。それに、たとえ夫のよう
ド・ゴール政権について詳しかったとしても、私たちの
生活が変わるわけでもないし、何の意味もないと思うの
ですが……。

せいぜい古い言葉でいう『教養がある』といわれるく
らいのものです。でも夫は大眞面目に、毎晩夜遅くまで
そういう類のプリントを作つては、一人で悦に入つてい
るのです。

その上、夫の性格は四角四面で、学校の先生の典型的な
のです。

新婚旅行で、バリ島へ行つたときのことです。

私は、旅行に行つて知らない町をさまよい歩くのが大
好きなのに、歩き過ぎないようにしよう

と、少しも楽しもうとしないのです。

せっかく南の島まで来たのですから、夕日のきれいな
海岸に出かけてサンセットクルーズとしゃれこみたかつ
たし、有名なディスコへ行って踊るのを楽しみにしてい
たのです。それなのに、夜は泊まったホテルのレストランで食事をしただけでした。

それに、食いしん坊の私が屋台のラーメンを食べよう
とすると、

ンストラクターたちに迎えられ、ささやかな冒險はあつという間に終わりました。私にとっては、しばらくの間、笑いが止まらないくらい愉快で感動的な体験だったのです。

「ねえ、空を飛ぶのってすっごく気持ちいいのよ。衛さんも挑戦したら?」

うれしさのあまり夫にすすめると、

「僕は高いところ恐怖症なんだ。きっと気分が悪くなってしまうよ。……楽しめてよかったね」

夫ときたら、私の遊びっぷりを呆れ顔で見つめ、ひたすら日陰で読書をしているのです。一体なんのために、

はるばる赤道を越えて南国までやって来たのでしょうか。私は夫の考えていることが、少しも理解できません。思い切り羽を伸ばして楽しむことができないかわいそうな人だと、憐れみさえ抱きました。

これはだめ、あれはだめ、私は修学旅行に引率された生徒のようなものでした。ガイドブックにのっているお店や名所とか、あたりきたりのところへは行きましたが、それ以上の冒險心や好奇心は、これっぽっちも持ち合つせていないのです。でもそれは、用心深くて臆病な夫の特色であって、心の底から、少しでもハメをはずしてはいけないと思っていました。

「君は大胆だね……」

再びベッドにもぐつて十時過ぎまで寝ています。睡眠不足はお肌の敵ですもの。午前中に大急ぎで洗濯や掃除をこなし、午後はまるまる、私の自由な時間です。外出好きな私は、デパートへ買い物に行ったり、フラワーアレンジメントや英語のカルチャー教室に通い、気ままな生活を送っています。

でも一番の楽しみは、週二回通っているスポーツクラブです。車で一時間かけて、都心の大きなスポーツクラブへ向かうのですが、少しも苦になりません。若さを保つには、運動することが何よりですから、インストラクターが作ってくれたメニューにしたがって、トレーニングや水泳、エアロビクスで爽快な汗を流すことは、私にとって大事な習慣となっています。それにインストラクターの人たちが、若くてとても親切なのです。

「このマシーンは、もっとゆっくり足を動かさないと、効果がないですよ。少したいへんかもしれないけれど、頑張ってください。それから、ストレッチも忘れずに……」

にこやかに、感じよくアドバイスしてくれます。

また、私がしばらくお休みすると、

「稻葉さんの姿が見られなくて、寂しかったな」夫の帰宅時間は六時頃なので、デパートでお惣菜を買って食べさせます。お料理を作る意欲も、最初の半年で失

と苦虫をつぶしたような顔でいいながらも、私が一人で遊んでいるのを、結構楽しそうに見ています。

夫は私が一人ではしゃぎ回っている姿を、眺めているだけで満足なのです。自分が大胆に行動できないのは、道徳の教科書から抜けたような型にはまつた性格だからなのでしょう。だからこそ私の天真爛漫な振る舞いが、内心、うらやましくてしかたがないのです。自由奔放に振る舞うことに、実は、私なんかよりずっと強烈な憧れがあるのです。ならば自分の殻を破つて、思うように行動すればいいのに、必ずブレーキがかかってしまうのです。夫は、思いと振る舞いがちぐはぐなのです。

そんな夫と一緒にいる私は、たまたまものではありません。私は夫を楽しませるために結婚したわけではありません。一人芝居を演じて、傍観者である夫を喜ばせているばかりで、私自身は少しも面白くもないのです。自分の尻尾を追いかけて、同じ場所をくるくると回つて一人遊びしている哀れな動物みたいで、なんだか割りに合わないというか、ばかばかしい気分に陥ってしまいますのです。こんな無味乾燥とした生活に、もういい加減うんざりしています。

夫は月曜から土曜まで、最寄り駅を七時半発のバスに乗つて学校へ出かけます。

朝が苦手な私は、コーヒーをわかして夫を送り出すと、

「せてしましました。

セックスも同様です。土曜の夜になると、きまつて私は私を求めてきます。いつもとは違つたぎらついた目で、夫は私の身体を執拗に愛撫するのです。

ボリュームのある胸と腰、くびれたウエスト。トレーニングで鍛えた私の自慢のボディの、とりわけ肉づきのいい胸と腰回りの曲線を、夫はいたく気に入っているみたいです。

「このプリプリとした肉感が、僕はたまらなく好きなんだ……」

と喘ぎながら口走り、尻や腹、足、そして私の一番大切な部分をしつこいほど撫でたりキスをするので、私はまるで身体を点検されているような感覚に陥り、わずらわしさだけがつのっていきます。一通りの愛撫が終わると、夫はやにわに私の上にかぶさってきて、規則正しいリズムで上下に動きます。その動きのぎこちないことといつたら……。私は、何の刺激も歓喜も感じません。夫は私に強烈な性的欲求を感じているのでしょうかが、私の体の奥底で眠っている官能が、夫によって呼びさまされることはありません。

「エアロビのしすぎで筋肉痛がひどいのよ」

最近では、私は夫に触れられるのが苦痛で、あれこれ理由をつけて逃げ回っています。

「まだ生理が終わらないの」

「食べ過ぎて、胃が痛くて具合が悪いわ」

私の拒絕にあうと、夫は不機嫌そうな顔をしながらも、しぶしぶ撤退していきます。

こんな堅物な男だからこそ、ママは夫を気に入ったのです。もっともママは私と違って、眞面目で勉強家の男が好きらしく、インテリ風な男に弱いのです。ですから、学校の先生なら間違いないと読んだのでしょうか。

でもそんなことよりも、ママが私を結婚させたのは、

私が決まってろくな男を好きにならないからでした。

これまで私が好きになつた男は、女癖の悪いカメラマン、負債を抱えた歯医者、マザコンの銀行員……、そんな類の男ばかりで、私はいつも泣かされ続けてきたのです。

少なくともお金に縁のある男は一人もいなかつたし、必ず本人の病気や妻や隠し子が発覚し、何かしら複雑な問題を抱えていることが露見していくのです。男たちが私の目の前で、次々に義足や義手、義眼をはずしていく姿に面くらい、その度にうろたえました。けれどまともでない男に惹かれてしまうのは、私の宿命かもしません。なぜなら今振り返ってみると、彼らは私自身の投影とも思えるからです。彼らと私は表裏一体であつて、私自身もわけのわからない困難を背負つた人間で、そんな私の壊れた何かが、いかれた男たちを引き寄せていたような気がするからです。未熟な私は、彼らを愛すること

てだ

といつて、たいそう喜びました。

このことに気をよくしたのでしょう。違う大学へ進んだのに、一年に一、二度、忘れた頃に電話をしてきては、二時間も三時間も一人で喋り続け、私は受話器を握り締めながら居眠りしてしまうような状態が続きました。内気な夫は積極的にアタックしてきたわけではありませんが、数年たつて、いつも男に泣かされ続けていた私をママが見かねて、夫に目をつけたのです。

「年頃になって結婚したいのなら、まず足元から探さいと……」

「でも、私の回りには口クなのがいないから困っているんじゃない」

私は半泣きしながらママに訴えました。

「足元を見落としているのよ。自分の身近にいる人間から選ぶのが一番なのよ」

わけ知り顔で、ママは私にいいきかせました。
よくよく回りを見回してみると、私の近くにいる異性のなかで夫を見落としていることに気づいたのです。でもそれは私が夫に関心がないからであつて、恋愛や結婚とはほど遠い関係だったからです。
「悪い人ではないけれど、彼は結婚の対象ではないわ。好きでもないし、嫌いでもない。私にとつてどうでもいい人なんだもの」

「でも、ちゃんと話をしたことがないでしょ。心を割つて話してみないと、どんな人かよくわからなわよ」

そして二人で相談した結果、夫を家に招待したのです。

「礼儀正しくていい人じゃない」

ママの夫に対する第一印象です。男の子を持たないママは、点数が甘いのです。

「でも、退屈でつまんないわ」

「平均点はいっているわよ。あれぐらいで不足にするなんて、贅沢ではないかしら」

切羽詰まっていた私は、二十五歳の誕生日の一ヶ月前に、自分を安定させるために彼を選んだのです。
いくら可愛がっても、犬や猫は私が病気になつても何もしてくれません。たいして気乗りはしませんでしたが、こんな男でも、風邪をひいたらコップ一杯の水ぐらいは持ってきてくれるでしょうし、何らかの精神安定剤になるだろうと、観念したのです。回りの女友達も一人、二人と片づいていく年代に入り、結婚という言葉が切実に感じられるようになつて、ママのいうことをきいてしまつた私は、まったくの子供でした。

今、車で向かっているママの住む都心の家は、結婚するまで、ママと私が二人で住んでいたところです。十年前に亡くなつたママの二度目の夫、つまり不動産会社を経営していた私の義父は、ある程度の遺産を遺してくれ

ができなかつたのです。度重なる悲惨な状況に、私は奈落の底に突き落とされたような精神状態に陥り、普通の平凡な男に身を任せたい、そんな投げやりな気持ちになつていました。

その点、夫が身軽だったことだけは確かです。

父親は病氣で亡くなり、母親もお兄さんもそれぞれに独立して、係累が少ないとママのおメガネにかないました。

もともと夫は、高校の同級生でした。私は優等生然とした夫にはハナから興味がなく、高校時代は五歳年上の大学生と付き合つていました。それでも夫は遠くから私を窺い続け、影ながらずっと追いかけ回していたのです。

そんな視線を、私は感じとつていましたが、興味の範疇になかつたため、挨拶を交わす程度の希薄な関係でした。ただ、卒業式の日に、夫は私にシステム手帳をプレゼントしてきました。しかしその記念の品も、私にとつてはどうということもなく、ガラクタと一緒に押し入れの片隅で忘れ去られていきました。それでも、人から物をもらつてもらいっぱなしというのは、気分がよくありません。とりわけ好きでもない人からのプレゼントは、何だか借りがあるようで落ち着きません。私はデパートでハンカチを三枚買い求め、お返しに夫の家へ送りつけたのです。夫は、
「女の子にハンカチをもらったのなんて生まれてはじめて」

ました。そのおかげで、悠々自適な生活を送ることがで
きたのです。私もその家を、とても気に入っていました。
猫の額ほどの狭い庭ですが、梅や椿などの木々が四季
の変化を感じさせてくれます。家中は贅沢すぎるほど

凝ついて、玄関の窓にはステンドグラスがはめこまれ、
二十畳のリビングには光り輝くシャンデリア、地下室に
はサウナがあり、並べあげたらキリがありません。

私の一番のお気に入りは、二階のバルコニーです。南
向きのこのバルコニーは明るいサンルームのようで、長
椅子に寝そべって日光浴できるのです。寒さに弱く夏の
暑い陽射しが好きな私にとって、これほど素敵な場所は
ありません。私におあつらえ向きら作られたこの洒落た
洋館に、私は、結婚してもしなくてずっと居座るつも
りでいたのに、結局ママに、夫が一人で住む郊外のマン
ションへ追い出されました。ママは、再婚でもするつ
もりなのでしょうか。

私たちの新居となったマンションは、夫が自分の母親
に頭金を出してもらい、三十五年ローンを組んで、独身
時代に買ったものです。三LDKの結構広いマンション
で、さすがに几帳面な夫の家だけあって、独身男の住処
にしては小奇麗なものでした。リビングの片隅に申し訳
なさそうにくつついている狭いキッチンが玉にキズです
が、生活に必要な家具や電気製品は一通り揃っていたの
で、私は身軽にお引越しすることができました。でも都

会育ちの私は、回りの風景が気に入りません。畑の中に
羊羹みたいなマンション群が立ち並ぶ、なんとも垢抜け
ない新興住宅地の風景は、私を憂鬱にさせるだけでした。
駅に隣接するデパートやスーパーも、なんだかよそよそ
しくてなじめません。

特に冬の夕方はいけません。マンションの建物の間を
吹き抜ける風は、まさに荒涼たるもので、私の心象風景
そのものです。ベランダから見える灰色の空と、犬の遠
吠えのような不気味な風音が、私の気持ちをかき乱し、
不安にかりたてます。

私の生活、人生はこんな殺風景なものではなかつたは
ずです。もっと色彩に富み、躍動感に溢れていたのでは
ないでしょうか。自分の人生に対する私の深い欲望は、
突然なえてしまったのかしら……。生きる屍のようなう
つろな日々が、これからも際限なく続していくのでしょ
うか。

私のいきがいは、カルチャーセンターやスポーツクラ
ブに通うことに、ますます集約されていくような気がし
ています。

日が沈み、外は暗くなっています。道路は少しは流れ
るようになつてきましたが、相変わらずの渋滞には変わ
りありません。バイクや自転車が、車の隙間をすり抜け
ていくのを見て、私のライラはつのるばかりです。そ

れなのに、夫はいたつて落ち着いています。夫は取り乱
すということがないのです。いたずら心が起つた私は、
わざと怒らせるようなことを口にします。

「もっと早く出てくるべきだったわね、私、渋滞に耐え
られないのよ」

「時間が十分あるんだから、何もそう急ぐことはないよ。
気が短いね、きみは」

いたつて悠長な受け答えに、私の神経はますますとがつ
ていきます。でも反応が鈍い夫に、私はケンカをふきか
けるのをあきらめます。夫と私とでは、ケンカの矛先が
まるで違うので相手にならないのです。けれども今まで
に一度だけ、夫が烈火の如く怒ったことがありました。

結婚して一年ほどたったときのことです。

学生時代のテニスサークルのパーティーに、夏休みで
家にいた夫を同伴して出かけたのです。

お酒に強い私とは正反対に、夫はアルコールに弱くビー
ル一杯くらいで赤くなってしまうのですが、この日は氣
楽な友人たちとの久々の再会で、私は夫にかまわず飲ん
で食べてお喋りし、大いにはしゃぎました。二次会にも
繰り出し、人数も徐々に減り、親しい数人がお店のカウ
ンターに残りました。

「電車がなくなるよ」

夫は時計に目をチラチラやって、時間を気にしながら
「先生は夜更かしないんですか？」

「先生は夜更かしないんですか？」

「帰ろう」というではありませんか。血の気が引いたま
ま、夫はトイと席を立ち、

青な顔は、神経がピクピクと痙攣しています。

「先生には、冗談が通じないのかな……」

「明日は午前中プールに行くから、もう帰らなきゃ」

夫が私を見ていいます。

友人たちは面白がって、ますます夫をからかいます。

すると夫は私の言葉も待たずに、「早く起きて行くんだ」

怒ったようにいい捨てる、一人で店を出ていきました。

片意地な態度は、実に幼稚でした。臨機応変に対応できない夫の振る舞いに、私はがっかりさせられ、追っていく気も起こりませんでした。それに友人の手前、恥ずかしくて仕方ありません。

「こういう場、慣れていないのよ。ごめんなさいね。せつかくいい気持ちで飲んでいたのに」

「融通がきかないなあ。……真美とは月とスッポンだね」

場がしらけたウサ晴らしに、私たちはそれからクラブへ繰り出し、踊り狂いました。

満員電車並みに混みあつた店の中は、青白いライトだけがとり異様な雰囲気で盛り上がっていきます。夫へのわだかまりを吹き飛ばすかのように、私は髪を振り乱して、激しい音楽に身を委ねました。時折ライトが消えると店の中は真っ暗になり、自分だけしか存在しないような不思議な気分にさせられます。

「音楽と熱気がこのまま永遠に続いてくれたら……。そして、いつそのこと体がバラバラに解体して、闇の中に消えてしまえばいいんだ」

投げやりな気持ちと陶酔感に浸り、私は一時、すべて

を忘れることができました。

朝方タクシーで家に帰ると、一睡もしなかつたらしい夫が、恐い顔をして玄関に立っています。開口一番、「君はあんな下品な連中と付き合っているから、口の引きかたが乱暴なんだな」

激しい口調で私を責め立てました。私は決してお上品ではないけれども、言葉使いが悪いのは私の持つて生まされた性格であって、友達のせいではありません。

「そういう言い方されるのって、気持ちのいいものじゃないわ」

「きみは、顔に似合わず言葉がキツイよね」

「あなたみたいに、曖昧なことをいわないだけよ」

私は夫の顔を見ずに、冷めた声で答えました。

「ああいう友達が、きみに悪影響を与えているんだ」

「他人のせいにしないで。私は私よ。それよりも、冗談もわからないあなたの頭って、カッチンカッチンの石でできているのかしら」

「ああいう人たちと付き合うの、やめて欲しいな」

普段より一オクターブ高い甲高い夫の声が響き、私の脳天を直撃したみたいです。

「私が誰とつきあおうと、あなたには関係ないと思うけど」

夫の目は血走り、異様な光を放っているように思えました。なめるような陰湿な目つきは、嫉妬にかられた狂

夫の目だつたと思思います。

「お母さん、今日は真美とある約束を取り決めたいんです。聞いてください」

「いつになく神妙な夫の口ぶりに、ママも私も動きを止めました。

「何なの、衛さん。真美がどうかして？」

ママは一瞬、私を睨みます。

「外出する時は、行き先と連絡先をきちんとといつてもらいたいんです」

「えっ、……どういうつもりなの？」

私は思わず絶句しました。

「外出先を、はっきりして欲しいということだよ。だから、僕たち専用の携帯電話を用意したんだ」

そういって、夫はカバンから三台の携帯電話を取り出しました。

「お母さんの分も用意しましたよ」

「まあ、気がきくわねえ。ありがとう」

「私を束縛する気？　あなたに迷惑かけた覚えはないわ」

自分が気が弱くて他人と対抗できないから、私の行動範囲を制御して、がんじがらめにしようとする気なのでしょうか。夫の卑怯なやり方に怒りがこみあげ、私は泣き叫んばかりに取り乱しました。

「まあ真美ちゃん、落ち着いて。衛さんのいうことを聞いてみましょう」

私が思い切り言い返すと、夫はもうそれ以上何もいいませんでした。

この一件以来、私の自由な時間は制限されてしましました。昼間はまだしも、夜、外出するなんてことは考えられなくなってしまったのです。そのことを切り出したのは、今日と同じように、日曜の夜、ママの家で食事をしている最中のことでした。

確かに、ママの作ってくれた巻きずしとお吸い物を食べ

ママが私を、さとします。

「そうじゃないよ。いまは物騒な世の中だから、女の一人歩きは危ないだろう。ストーカーも増えてるし、僕は比較的帰りが早いから、真美が遅くなる時は駅まで車で迎えに出ることにしようと思ってね」

「それは有り難いじゃない。衛さんは、気が回るわねえママは夫の提案を善意に受け取り、香気に笑っていま

す。

「真美は羽目をはずすと何をするかわからないもの。それに、衛さんに迎えに来てもらえば安心でしょ」

「私は、あなたの生徒じゃないのよ。そんなに監視したいの」

「真美ちゃん、そんな荒っぽい口の聞き方はやめなさい。衛さんはやさしいのよ、ねえ」

「そうですよ。監視するなんて、大人気ない。心配なだけさ」

夫は味方の援護を得て、得意満面の表情です。

「真美はいつまでたっても子供っぽいから、困るわねえ」

二人は気の合った恋人同士みたいに、微笑み合っています。

「お母さんも同意してくれたし、真美、わかったね」

そういうと、夫はまたあのぞっとする目で私を見ました。

夫は私から自由を奪って、自分のいいなりにしたいの

ようやくママの家については、予定の時間を二時間も過ぎていました。

「お母さん、遅くなつてすみません」

夫はすまなそうな表情を見せ、礼儀正しく頭を下げます。ママもいかにも人が良さそうな笑顔で、

「事故か何かに巻き込まれたかと思って心配したわ」

なんていいます。

ママは、いつも精一杯の手料理を並べます。息子を持ったことがないせいか、夫がかわいくてしょうがないのです。この日は、得意のタンシチューと野菜ご飯でした。夫は一口、一口かみ締めながら、ゆっくりと味わっている様子です。

「柔らかくて、奥行きのある味ですね」

夫はママに取り入るのが実にうまく、ママはボッと少女のように頬を赤らめて恥ずかしそうな仕種を見せます。

「お似合いだこと……」

私は声にださずに、そっと言葉をかみしめました。夕食を食べ終わり、食卓をたつてソファでぼんやりして

ていると、二人の話し声が聞こえています。一週間の出来事でも報告しているのかしら。私は上の空で、一人テレビを見ていました。

「私、この女に似ているっていわれるのよ」

テレビに登場した女優を指していくと、

でしょう。私を自分だけに縛りつけておこうなんて、残酷なエゴイズムしかありません。でもそれが、夫のねじれたプライドを満たしてくれる唯一の方法なのです。

私はまるで、夫の愚かなプライドの犠牲者ではありませんか。近くにいても、夫ははるか彼方の人間なのです。私の距離はますます離れ遠ざかっていくばかりで、表面上は可もなく不可もない夫かもしれません、私にとっては不可だらけの男でしかないのです。

それ以来、ママは何かにつけ夫の肩を持つようになります。

なんだか、お化粧も濃くなつて洋服も派手になったみたいですね。母親としての私への愛情から、夫を好意の目に見てたのが、私を通り越して直接夫へ向かっている気がします。むしろその方が、私は肩の荷が降りてホッとするんだけど。

「衛をママに譲ってあげるわ」

何度も、口から出かかったことでしょう。でも、そんなに性急に事を運ぶことはできません。もしかしたらママの夫への気持ちは無意識のもので、本人は気づいてないのかもしれません。それを、もっと確固とした形にしなければならないのです。

日曜の夕食のあと、そのままママの家に泊まることもあります。私の期待通りになつてくれたらしいのに……。私はその機会を、密かに窺っているのです。

「髪型だけじゃないの」

夫は冷めた声でいいます。私よりかなり若い女優ですが、面影がちょっと似ていると、よく人にいわれるのです。それなのに夫は、素直に「本当に似てるね」なんて甘い言葉を吐くことができないのでしょうか。

結局のところ夫と私の関係は、ママを媒介にして成立しているのです。夫と私一人きりだったら、私は我慢できなくて、とっくに家を飛び出しているでしょう。ママを含めた三角関係が、からうじて夫との、アンバランスな釣り合いを保っているのです。だから日曜の夕食は、私たち三人にとって、大事な儀式なのです。一人っ娘の私は、最後にはママのいうことを聞かざるを得ません。小さい頃から二人三脚で生きてきた私は、ママに逆らうことなどできないのです。

夫の冷やかな受け答えに気分を害した私は、二階へ上がり、かつて私が使っていた自分の部屋へ足を踏み入れました。

黄色い花柄のカーテンも、ベッドも洋服箪笥もそのままです。

大きな鏡に、私の全身が写ります。実際の年よりも若く見える、あどけない表情とひきしまった体。結婚前と少しも変わらない自分の顔とスタイルを見て、ほつと安堵の息をもらします。つまらない夫、いわば愛される価値のない男との生活に疲れた所帯臭さは、微塵もありません

ん。夫が私に、少しも影響を与えていないことの証明ではないかしら。

本当の私は、ここでママと一緒に生活していたのではないでしょうか。夫との生活は怠惰な夢であって、現実の私は、ここで私自身を待っていたのです。夫との生活はガラス細工のような脆い幻に過ぎないので。早く夢から醒めて、現実の私に戻りたい。私はそう確信しながら胸を高鳴らせ、洋服箪笥の中にある洋服を取り出して、一人でファッショントリーンショーをはじめました。

鮮やかな花柄のミニのワンピース、腕を露出したノースリーブのTシャツとジーンズ、結婚式に着た赤いペルベットのカクテルドレス……。ぴったりの洋服が、私も見捨てずに迎えてくれたのです。ささやかな満足感に浸っているうちに、突如として睡魔が襲い、私はベッドに倒れ込みました。

三十分ほど眠ってしまったのでしょうか。階下へ降りて行くと、夫とママは、丁度取りこみ中でした。

リビングのシャンデリアの電球を付け替えていたのか、壁にかけた時計の電池を入れ替えていたのかよくわからなければ、夫が脚立の上にたって天井の方に手を伸ばして、何かしている最中でした。夫の横に立ったママは、夫の腰に手を添えて助けています。

「年をとると、高いところに手が届かなくてね。せっかくだから、衛さんにやってもらっているのよ」

いいわけがましくママは私にいいますが、別に夫とママが何をしようと、私は関係ないことです。「お好きなように」私がもごもご口にしていると、その時「ゴツン」と鈍い音がして、

「あっ、痛い！」
夫が小さな叫び声を上げました。

「大丈夫、衛さん」

ママがすかさず答えます。脚立から降りる拍子に、腰をサイドボードにぶつけたみたいで、夫は苦痛に歪んだ顔しています。私は無関心に、それらの振る舞いを見ていました。目の当たりの出来事が、はるか宇宙の彼方の出来事みたいに感じられます。

夫がズボンからワイシャツを引き出し、二人で腰ののぞきこんでいます。

「ちよっと、血が……」

「まあ、どうしましょう。困ったわ」

ママはあわてふためいています。

「あっ、でもたいした事はありませんから」
そんなことくらいで、血が出るかしら。厚手のセーターを着ているというのに。普段私にかまつてももらえないから、ママの歓心を買おうと思って、大袈裟にいつているんじゃないかしら。一人のやりとりは、ぎこちないがゆえに妙になまめかしく、淫猥な感じがしました。

「……あっ、そうだわ。急用を思い出したわ……」

私はそういうと、すばやくガレージへ行って車を出し、無我夢中でハンドルを握りしめました。

気がつくと、私はかなりのスピードで車を飛ばしていました。

これで一大決心がつきました。

これから私が向かう先は、年下の愛人のところです。彼は、私が通っているスポーツクラブのインストラクターです。

親しみやすい笑顔と彼の浅黒い肌、逞しい腕の筋肉に、私はすっかりなじみ、夫と違つて明るくスポーティマンの彼が、今の私にはどうしても必要なのです。一年前から、私たちとはお互に首ったけなのです。

「スポーツクラブの前後、時間と場所を気にしながらの密会はもうこれでお終いだわ。夫はママにプレゼントす

るから、よろしくやってね、共有する気は微塵もないのよ。これでやっと、二人と決別できるわ」

私は一人で呟きました。

これから、心おきなくこの愛人ののもとへ行くことができると思うと、私の心は晴々とし、夫とママのことなど、胸中にはこれっぽっちもありませんでした。

車は全速力で走り、いつしか、暗い道を走っているのは、私の車だけになっていました。目の前を照らすヘッドライトの光だけをたよりに、私はさらにアクセルを踏み込みました。とその時、バックミラーに閃光が反射し、

私は眩惑されました。

「……まさか、そんなバカな！」

いくら嫉妬深いとはいって、夫が追ってくるなんて……。そんな機敏な芸当ができるはずがありません。しかし、

凍りつくような戦慄が、一瞬、身体を駆け抜けました。

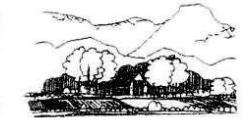
私は不気味な予感を振り払い、再び右足に力をこめ、闇のなかを走り続けました。時折、後方でキラッと光る

ライトに脅えながら……。



蕪村のこと

青木昭成



「終日と書いて、ヒネモスと読むのは何故だ」と突然

聞いてくる。それが和四郎君の何時もの癖だ。

彼は夭折してしまった。が私には、かけ替えのない幼馴染みの小学校同級生だった。正直に言えば私と同様、成績優秀とまでは褒められなかつたが、ただ熱中型で、こと国語に関しては、いつも私をたじろがせていた。

「ヒネがモスからひねもすさ」「じゃ、ヒネってなんだよ」「ヒネは古くなることかな」「それならモスは」「すっかり済んだって言うことだろ」「古くなつて済んだなんて変だ、分からん」「お前が分からんなら、俺にも分からん」、話題はそこで、たわいなく次へ移る。

春の海終日のたりのたり哉

俳句の一句が私たちには、こんなふうに、その日の珍問答の材料になつたりした。同じ集落のなかでも、珍しく人数の少ない二人だけの同級生、小一時間歩く農道の小道を、道草しながら仲良く帰つたものだ。

たいする独特の口調の響きが、なんとも言えない郷愁となつてその句を読むたびに、情景が浮かぶのである。

そう言えば、私たちには芭蕉の句も、蕪村の句も、どこかで自分の感覚とすっかり同化されて、自分の俳句と名句とがどうも区別できなくなつていて感がある。鑑賞の対象とは承知しながらも、単なるお手本でしかなかつたのだろう。私たちの記憶のなかの芭蕉の句は、

古池や蛙飛びこむ水のをと
名月や池をめぐりてよもすがら

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

であり、それに負けない蕪村の句には、

春の海終日のたりのたり哉
菜の花や月は東に日は西に
春風や堤長うして家遠し

などであつた。

しかし無村は、私の成長とともに、その俳句とその名前が、芭蕉の残した「奥の細道」など、古典の存在の偉大につつまれて、すっかり隠されてしまい、あまり俳句に興味がない人間には、ほとんどその姿を見せてくれなくなつてしまつていた。何故だろうか。

菜の花や月は東に日は西に

風情は、まさにこの句の遠景そのものであった。

二人は子供心にも、五・七・五の十七文字を、指を折りつつ作るのが好きであった。季語を必ず入れること、切字を用いること、字余りは止むをえない場合以外は用いないこと、などそれが俳句の伝統だからとも教えられていたが、本当のところは何とも呑気な遊びであった。もちろん俳句が、俳諧の発句から独立して作られるようになつた文学で、などという面倒な歴史やその俳壇の存在など、学校で話してくれる訳もなく、ただ俳句を短歌と並んで作つてみると言う事実だけであった。

それでも、日本語のリズムが五・七・五や七・七に、どうしてこうも旨く合致し、意味が伝えられるのか、それが私たちにはなんとも不思議で、しかもそれが面白く楽しかった時期もあつたことが面白い。

だから想いだすと私の脳裏には、和四郎君が暗唱して時々口にしていた俳句のいくつかが、また、その語彙に

俳句は創るものでなく「一句ひねるもの」と論評されたのは、何方であつたろうか。私は今もたしかに、相変わらず一句ひねることもしない。
だがふと私はこの頃、俳句について、いや蕪村についてどうしても少々語つてみたい衝動にかられる。
勿論それは、あからさまに言つてしまえば、もうまったく単純な動機でしかないが、それは近代詩人・萩原朔太郎がもう半世紀以前に、かつて執筆した「郷愁の詩人與謝蕪村」を、最近になつて、ふと再読する機会をもつたことによる。
詩人が俳句を詩として受け取る情熱、その論旨に触発されたの行為と言えるものかもしれない。

その一冊は決して大部ではない。しかし、その巻末には、これは付録だと言わぬばかりの、だが、詩人の詩学による「芭蕉私見」が附加されている。それはまた、まさしく詩人の俳論であり同時に、詩論そのものとも言えるだろう。詩人はこう述べている。

俳句は嫌いだつたが、唯一つの例外として、不思議にも蕪村だけが好きであった。そして、芭蕉等の句は全く没交渉の存在であり、如何にしてもその詩趣を理解することができなかつた、とも。
では蕪村に対し、詩人はどう理解していたのか。それは、蕪村の情操における特異なものが、自分の趣味や氣質と蜜に符号して、感流するものがあつた為である、

としている。そして、蕪村の情操の特異性とは、その詩境が他の一般俳句に比して、はるかに浪漫的で青春性にとんでいると言う事実による、とも言っている。

だから詩人は、次の句などを例にあげる。

遙き日のつもりて遠き昔かな

春雨や小磯の小貝ねるるほど

行く春やおもたき琵琶の抱ごころ

愁いつつ岡に登れば花いばら

(いかのぼり)

風きのうの空の有りどころ

真似るわけではないが、蕪村から選ぶとするならば、この句を私も選ぶ。それを趣味のことだからとすれば、じつに簡単だ。しかし、自分の鑑賞眼のもとに自身をもって指摘したと明言するならば、蕪村の本質について改めて自身に問うてみなければならぬ。けつして容易ではない。

そこで芭蕉の句を、私の選び方で、ここに同じように五句を拾ってみてみよう。

辛崎の松は花より朧にて

藻にすだく白魚やとらばきえぬべき

若葉して御めの雪ぬぐはばや

菊の香や奈良には古き仏達

これらはもちろん秀句であろう。ただ芭蕉の句作からもう少し膚浅の二・三句を選ぶとするならば、それはもうただ「奥の細道」所収のものから拾うしかあるまい。それが、たちちに俳聖とまで呼ばれる芭蕉の鑑賞ともなつてしまっている。そうした安易な評論を嫌った詩人・朔太郎は、ことさらこの時まで、芭蕉の俳句が嫌いだと、言いつづけていたように思われる。何故だろう。

詩人は、蕪村と芭蕉の句を、彼の独特的詩論から、どう比較しているか。それは素人の私が集約するよりも、詩人自身が当時のおかたの「定評」から集め、試みたつぎの批評に依ってみるとこととする。

一、蕪村は写生主義的、印象主義的であること。

一、芭蕉の本然的なに對し、技巧主義であること。

一、芭蕉は人生派の詩人であり、蕪村は叙景派の詩人である。

一、芭蕉は主観的の俳人であり、蕪村は客観的の俳人である。

詩人はここに使われている「印象的」「技巧的」「主知的」「絵畫的」などの言葉は、すべて客觀主義的藝術の特色である、と言う。だから蕪村の特色は「客觀的」芭蕉は「主觀的」と片づけてしまう當時の評論の方法である。

は「俳句は叙情詩の一種であり、しかもその純粹の形式である。」と言う詩人からすれば、蕪村の背後にある主觀の実体を感覚得ずして、蕪村の俳句（詩）の美を理解することはあり得ないだろうと言う。

ところで、芭蕉は蕪村とちがつて、具体的な哲学觀念を持った詩人であった、と詩人・朔太郎は言う。

つまり、芭蕉の哲学は多分に仏教や老荘の思想を受けており、従つてその本質は、趣味としての若さを嫌い、閑寂の静かさを求め、枯淡のさびを愛しつづけた。従つてある時期まで詩人自身は、その人生觀の妙味を解することを嫌い、近づこうとしない時期があった、とも述懐している。

ところで私は、以上の詩人の評価とは別して、芭蕉と蕪村、この二人の俳人には、次のような世代、でなければ運命の大きいなる差異が存在し、それが結局作品の質のあり方を変容させていると考えている。

それは、その人物が生きた時代、また、その人物が享受した資質とその人となり、その二つが融合し、私たちが芸術の創造と呼んで、その結果として享受する作品そのものとなつたと判断するのである。

芭蕉が生まれたのは正保元年（一六四四）、そして大阪で元禄七年（一六九四）五一歳で没している。

蕪村は享保元年（一七一六）に生まれ、そして京都で天明三年（一七八三）六八歳で没している。

「洛東ばせを庵にて」という前書のあるこの句は、崇拜しておかない主のいない庵を訪ねて、蕪村は独り何を感じ概し、瞑想し、作ったであろうか。

ただ、時雨は今では初冬の季語であるが当時は晚秋の季語でもあつた。だからこの句が初めに「冬近し」と言つてゐるのは、無駄な重複のよう気がしてならない、と評した俳人もいるが、果してそうだろうか。

蕪村は自分の墓地さえも芭蕉の墓と並べさせている。

であれば、ここに生身の蕪村はどんな孤独のなかで、この句をものしたろうか。その技法の破綻よりも蕪村の心境が私の心を打つてしかたがないのである。

たしかに芭蕉の生涯は、蕪村の生涯と比肩すればそれは如何にも偉大で、且つ凄絶でもあったと言える。

伊賀上野の藤堂藩士に生まれ、幼少から藩の土大将の当主「蟬吟」に仕えて、その俳諧の優れた技量から大いに愛でられたという。その縁で松永貞徳や北村季吟にも師事したとも言う。まもなく若い当主蟬吟の死、それがやがて多感で才氣ある芭蕉の、その後の生涯をいかに

左右するものとなつたか、計り知れないものがある。当時「桃青」と称していたが、やがて仕官を辞して江戸にくだる。時に三十歳とか。三十三歳妻を娶るも俳諧だけでなく水道工事にも携わる。三十八歳草庵に移り芭蕉を植える。自ら「乞食の翁」と名乗り、翌年はじめて「芭蕉」と号した。

四十歳以降は「野ざらし」の旅のように「草枕」「鹿島詣」「笈の小文」「更科紀行」「奥の細道」など俳諧と旅とを友とする日々を過ごした。その間、芭蕉を師と仰ぐ俳諧の門弟は、蕉門十哲を始めとし、それはもう数えきれない連衆として存在していた。

こうした芭蕉の生涯を知るにつけ、蕪村の生涯には門弟も少なく、これは又いかにも柔軟で、かつ哀愁さえ漂いそうな生活ではなかつたのか、とも推理される。

蕪村は生涯、誰にも自分の生い立ち等を、語つていな。ただ、門人・高井几董の残した資料から、蕪村の姓は谷口、名は信章と推される。生家は摂津の毛馬村の村長ともされ、そう言えば幼少から絵画を習つたとの伝えもある。母を亡くしたのは十三歳。家が破産し俗姓を捨て出家、仏門したのは十七歳。二十歳・江戸にくだり仏道修業と俳諧また絵画を学ぶ。師とも親とも宋阿を頼み二十三歳に俳号を「宰町」に。その後放浪し「四明」を画号、二十九歳に処女出版、俳号を「宰鳥」次いで「蕪村」とす。四五歳還俗し母の出生地に因み与謝氏を称し、結

婚する。以後俳諧と絵画の生活が続くも六八歳十月病床につき、十二月没す。

さて芭蕉、また蕪村が生きた時代は、歴史的には江戸を中心とする民衆の安定と繁榮のなかにあった。

俳諧や浮世草子の流行、古事記や万葉集の研究が見返えされ、西鶴・近松・秋成など文人また白石・真淵など学者の出現など、全てこの時代の趨勢と言えるだろう。芭蕉が和歌や漢詩、ことに杜甫から授かったものは大きいだろう。まして、蕪村は文人画家であつたから当然漢詩を学び、李白・王維などから影響を受けたことは間違いないと言える。芭蕉の俳句は九百余句、それに対しても芭蕉の俳句は三百余句ともいわれる。

正岡子規の評には「芭蕉の佳句は十に二・三、蕪村の駄句は十に二・三」とあるとか。写実主義を俳人の規範としていた子規らしいが、何れにしても句作の数を、巧拙に問うのは、邪道と言うしかあるまい。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る
芭蕉
白梅に明ける夜ばかりとなりにけり 蕪村

共に臨終の直前に味じた句と言われる。辞世の句とも呼べれる。この句が与える感性は、二人の俳人の人生そのものを暗示していく、私を身震いさせる。

予定調和



新井 宏

精神活動における心地良さの原点は、予定調和にある。もつとも、予定調和などという哲学用語の意味を知つて使つてゐるわけではない。それは、どこかで聞きかじつて使つてゐる内に、私の頭の中だけで、勝手に育つた概念である。

私の意識する予定調和とは、過去の記憶が刺激されて、次に何が起るか期待する心の動きが生れ、そして期待通りの具象が起つた時に生ずる「心の安らぎ」のことである。

例を挙げれば、テレビの水戸黄門である。筋書きは分かっている。「ここにおわすは、前の中納言、天下の副将軍、水戸の黄門様であらせられるぞ、下におろ」と葵の印籠を見せるところで劇は終る。偉大なるマンネリと言われても、人気が衰えないのは、知つてゐることが予定通りに起こり、予定通りの結末にいたり、その間、見る者の心に予定調和を生じさせ続けているからである。巨人の勝った翌日のスポーツ誌が確実に売れるのも同じ

類であろう。誰でも、結果を知つていることを再度楽しむのである。

かように、人は、自分になじんだ世界に調和する情報や事柄を好む。しかし、だからと言って、そこに知的な緊張感がなければ、退屈してしまう。時には、次に何が起るか期待する心に、新鮮な意外性や驚きを付け加えなければならぬ。その時に「心の安らぎ」に加えて「心の弾み」が生まれる。

例えば、川端康成の『雪国』の有名な冒頭の文章は、……国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなつた……とある。「夜の」の次に「底が」とくる意外性に加え、それが「白くなる」と結ばれる表現に、読者は引き込まれ、心が弾むのである。おしなべて、小さな緊張感が随所にちりばめられた予定調和が心地良く、それが文章なら名文となるようである。そして、どのような情報や出来事に対しても、予定調和し得る心の自由度を確保できた時に、人生は楽しい

のではなかろうか。

以下は、そんな意識を雑然と書き溜めた「予定調和」に関するメモである。

童話

子供は、何回でも何回でも、同じ昔話をせがむ。同じところで笑いこけ、同じところで涙ぐむ。大きなかぶを引き抜く他愛のない童話であっても、主人公の子供が「うんどこしょ、どっこいしょ」と引張ると目が輝き、「まだかぶは抜けません」というところで、グラグラと笑う。次に妹を呼んで来てふたりで「うんどこしょ、どっこいしょ」と引張るが「まだまだかぶは抜けません」で、またまた笑う。かくして、次々に十人で「うんどこしょ、どっこいしょ」と引っ張るまで、延々と笑い続けるのである。

お気に入りの作者ができると、片っ端からその作者の本を漁るのもその類である。誰でも知っていることに調和する話が好きなのである。

旅行

旅行もそうである。一度楽しい想いをすると、類似の体験を求めて続ける。旅行で見たこと、味わったこと、覚えたことなど、それらに関連したことがテレビや新聞にでも出てくると、にわかに脳細胞が活躍しはじめる。知つ

母の胎内で聞いたメロディーは、意識下ではなくとも、懐かしさを呼び起し、豊かな心地をもたらす。眠っていた脳細胞が、出番がきたとばかりに張り切り、基層の記憶に新たな記憶が調和する。

どんな名曲だって、初演の時はそれほど好評だったわけではないと言う。初演で好評を博したのは、交響曲のように主題が繰返し現れ、終章に至るころには耳になじんで、曲と聴衆の間に一体感が生れ、予定調和を生じた場合など、むしろ特殊な例なのである。

歌謡曲も、繰返される歌詞とメロディーが必須の条件で、そこに華やかな変化が加わると、時に名曲となる。ぼけ老人の治療に、ナツメロが極めて有効なのは、眠っていた細胞に出番が与えられるからである。

味覚

おふくろの味が忘れないのも、予定調和の一種である

ていることを再確認するプロセスで、脳細胞は自己の勢力を増殖して、新たな領域を開拓して行くかのようである。

だから、旅行のガイドブックは、旅から帰ってから読むのが良い。事前に読んでもさっぱり面白くなかったことが、心地良く頭に入る。

音楽

だから、旅行のガイドブックは、旅から帰ってから読むのが良い。事前に読んでもさっぱり面白くなかったことが、心地良く頭に入る。

る。知っている味に巡り合ふと脳細胞が歓喜の声をあげる。だから、どんな味にも慣れるにしかずである。

かつて、海外に出かけることなど夢の夢の時代に育った世代は、その頃見た映画に異様な思い入れがある。だから、絶対訪れるはずのなかつた、映画の場面を目の前にして、若干の失望を伴いながら歓喜するのである。青春が甦るのである。

映画

俳優の容貌だって、しかりだ。多少壊れたところのある顔立ちでも、ストーリーに引き込まれると、次に呼び起される時は、もう欠点が魅力になっている。癖のない顔など、深みがないなどと思うようにさえなる。

そのようなことでもなければ、映像の世界の中で、美女男女を仮想の友として育つた現代の若者は不幸である。周辺にいる現実の恋人予備軍は、どうしても見劣りしてしまうではないか。もっとも晩婚化の傾向に、その憂いなしとしない。

容貌

予定調和の世界は知的な面ばかりではない。身体を動かす世界も同じである。かつて身体が覚えたスキーやダンスや水泳など、どんなスポーツも、名選手のプレーを見ただけで、心が高ぶる。まして、自分で身体を動かして再体験した時の心地よさは、小脳の細胞が一齊に歓喜の声を上げていいかのようである。歳をとつても、泳ぐのが良いし、自転車に乗るのが良い。脳細胞が喜んでくれる。

アジテーター

アジテーターの才能は、聴衆に予定調和を巧みに起させる能力にある。聴衆の知っている分かりやすい事実を、ロンドのように繰返しながら、ちょっとづつ変化させて、自分の主張につなげて行く。繰返しは、あまりに単調であってはならず、かと言つて聴衆が付いて行けないほどの飛躍があつてもいけない。聴衆が、次にどんなバリエーションが現れるか、読み取れるようになつた時に、聴衆は調和し共振し酔い、アジテーターが完成するのである。それは、予定調和の心の動きが、アジテーターの論理に取込まれる瞬間である。

教育

そして、その極まりが教育である。物を覚える過程は、それ自体が予定調和の世界である。どんな子でも、その子の知っていることが刺激された時には、その近傍の脳細胞が活性化する。活性化した脳細胞こそ、喜び勇んで

運動

予定調和の世界は知的な面ばかりではない。身体を動かす世界も同じである。かつて身体が覚えたスキーやダンスや水泳など、どんなスポーツも、名選手のプレーを見ただけで、心が高ぶる。まして、自分で身体を動かして再体験した時の心地よさは、小脳の細胞が一齊に歓喜の声を上げていいかのようである。歳をとつても、泳ぐのが良いし、自転車に乗るのが良い。脳細胞が喜んでくれる。

アジテーター

アジテーターの才能は、聴衆に予定調和を巧みに起せる能力にある。聴衆の知っている分かりやすい事実を、ロンドのように繰返しながら、ちょっとづつ変化させて、自分の主張につなげて行く。繰返しは、あまりに単調であつてはならず、かと言つて聴衆が付いて行けないほどの飛躍があつてもいけない。聴衆が、次にどんなバリエーションが現れるか、読み取れるようになつた時に、聴衆は調和し共振し酔い、アジテーターが完成するのである。それは、予定調和の心の動きが、アジテーターの論理に取込まれる瞬間である。

新しい知識を吸収するのであって、チンブンカンブンな基礎の上に、いくらシャワリーのごとく、新知識を浴びせても、混乱を招くだけで、やっと覚えたことさえ、あやふやになるのが闇の山である。

だから、優秀な教師は、どんな高度なことでも、その子の知っているレベルまで戻ってから話を始める。知っていることを五つ話してから、六つ目に応用問題を出すと、どんな子でもクイズの答えを求めて活性化する。そ

して、もし答えがうまく当りでもすれば、もう立派な予定調和の世界である。当たらなくても、次のクイズにチャレンジしようという心の動きが起り、七つ目の問題に目を輝かす。その時、正答できる問題まで戻ってあげれば、もう子供の心を完全に掴み得る優秀な教師である。高度なことを教えることも、知っていることを繰返し刺激し、再確認させるプロセスで、予定調和が生れ、かつての知識が確実になり、更にはその周辺に新たな知識が付け加わって行くのである。

精神分裂症

でたらめができない。どうしても整然としてしまう。順番を変えられない。これが精神分裂症の典型的な症状のひとつだそうである。例えば、一から九までの数字をでたらめに言ってくださいと言われても、精神分裂症患者は一二三四と順番にしか言えない。回復してみると、

マニア
マニアックなコレクターは必ず数を誇る。ある時、たまたま五十円玉が小銭入れに五、六個入っていたのがキッカケで、五十円玉を集め始めた男がいる。最初は買い物をしてお釣に五十円玉があると貯金箱に放り込むだけであったが、その内に五十円玉のお釣が出るように工夫して買い物をするようになる。電車の切符を買う時も、わざわざお釣が五十円になるように調整してコインを投入する。そして溜めに溜めた五十円玉が一万個になってしまふ止められない。しかし、そんなささやかな行為でさえ、予定調和を楽しめるのである。

若者

若者は、ひとつの理論や法則を覚えると、何でもその方式で世間を割り切ろうとする。これが若者の正義感である。ある意味では、精神分裂症のようなものだ。でたらめができないのである。

正義

世の中に、正義ほど厄介なものはない。正義など、單に「予定調和」の一概念に過ぎないので、それを信奉している者にとっては、調和せざるもののが全て敵に思えて、妥協ができなくなる。多くの民族紛争、宗教戦争そして

一の次に九とか、できるだけ離れた数字を言うようになる。精神分裂症とは、整然とした予定に対し、整然と調和しようとする心の動きが極めて強い状態なのである。その状態にしか心の安らぎがないのである。換言すれば、心の自由度が失われ、調和し得る能力が極度に低下した時に、精神はバラバラに対応せざるを得なくなり、分裂せざるを得なくなる。

百名山

一二三四あるいは一二四八と続く数値の次の数値を当てさせる問題は、算数好きを育てる好例であるが、世の中には、深田久弥の百名山と言うのがあって、その百名山の完登を目指している人種が数多くいる。山好きの者が、ある時、登った山を数えて見て、その中に百名山が三、四十もあると、必ず感染する症候群である。初夏の花の美しい山に秋に登り、紅葉の映える山に春登つても、ひたすら百名山のコレクターたらんと努力する。

四国八十八ヶ所や秩父三十四ヶ所札所巡りや、サンチャゴ・デ・コンポステーラの巡礼なども、予定調和の一種であろうか。とにかく、始点から順次廻って、終点に至らないと気が済まない。何かの事情で、途中が欠けてしまって、執念を以って再挑戦して、完遂しようとする。だから、昔から、人を引き付けるには、すべからく、数をつけるか、連番をふるに限る。

嫁姑戦争が、この正義の厄介さに根ざしている。汚職は国を滅ぼさないが、正義は国を滅ぼすと言うではないか。だから、正義と精神分裂症とは相通じるところがある。

サラリーマン

かつて、日本のサラリーマンは、自分の会社に忠誠心を持ち、会社の言うとおりにコツコツ働いていれば、将来にわたって生活を保証してもらえた。だから家庭のことなど一切かえりみず、残業に異をとなえることなく働き、転勤命令が下れば、黙つて任地に赴き、多少法律にふれることでも、ためらわずに会社のためにやつた。

その代償として、会社は一生めんどうを見てくれるといふ予定調和の人生こそ、日本企業の最大の特徴であった。予定調和が成立しなくなつた日に、サラリーマンの悲劇が始まつた。

老人扶養

かつて、子が親の老後を見る。これが約束ごとであつた。もつともその頃、病床で長生きすることなど、めつたになかった。ところが、医療技術の進歩は、病床での長生きをもたらし、個人の負担には耐えられないほどの状況を生み、税を通じて、社会が老後の面倒を見る時代に移行しなければならなくなりつづつある。そして社会としての予定調和に混乱が起つてゐる。

経済と政治

かつて、市場機構を自由放任しておくと、社会はもつとも幸福な状態に行き着くという古典経済論の「予定調和」説が流行した。政治の世界でも、個々には社会全体のことなど考えずに選挙が行われても、それが繰返される「予定調和」説が、近代デモクラシーに理論的な根拠を与えた。

このような概念は、さかのぼれば、ライプニッツの予定調和説である。自然界では、偶発的にバラバラに事柄が起っているが、いずれも神の定めた予定（宿命）にしたがって、必然的な調和に至るとする考え方である。調和とは、多様における統一のことにはかならぬ。

道徳と科学

神は、善きことをなした者を救済し、悪しきことをなした者を救済しない。人々はどうしてもこう考えたがる。そう考えないと、社会に道徳は成立せず、崩壊に向かうからである。しかし、この予定調和が成立つ世界の人々は幸せである。

十九世紀の科学者、ハックスリーは、科学の悲劇は、美しい理論を醜い事実で殺害することだと言っている。美しい仮説は醜い現実に裏切られる。

神は、善きことをなしても救済するとは限らず、悪し

る。

本歌取

有名な古歌の表現をとりいれ和歌を構成し、その古歌の世界を背景に表現・情趣の重層化や複雑化をはかる作歌技法。漢詩の世界にも似た技法があると言う。

接続詞

私の書く文章は、直接間接を問わず接続詞の連続である。そのことに気付かされたのは、かつて気になじまぬ論文を書いて、読み返すのも億劫になり、心安い部下に、文だけでも整えてくれと頼んだところ、ほとんど全ての接続詞をカットして持ってきたことがあったからである。折角、直してくれたものなので、そのままにしてしまったが、あとで読むと、それでも十分に意は通じている。

そして、なぜ接続詞が多くなるのか自問してみて悟った。文に遊びや余裕がないのである。そういうと、さぞかし名文かと誤解されようが、事実は逆で、書き手の考える筋道を、読み手が勝手に踏み外さないように、執拗に誘導しようとしているからなのである。

それは、ある意味で論理的な記述には適しているかも知れないが、詩や小説には全く不向きである。せっかく読み手の共感を呼び起こしたもので、おせっかいにも読み手の心に遊ぶ余地を与えなければ、味わいなどが生えに誘導しようとしているからなのである。

きことをしても救済することがある。それは、神が一方的に断罪することであって、天地創造の時に決まっており、人智でくつがえすことができない。こんな思想がユダヤ教やイスラム教そしてキリスト教にある。

言葉

アナウンサーは、いま読んでいる所のはるか先の文章にいつも目をやっている。決して一語ずつ読んでいるわけではなく、一息でしゃべれる分量の文章が、脳の中で予め音声に変換されていて、口はそれをなぞっているだけなのである。一種の予定調和の世界に良く似ている。だから、どんなベテランアナウンサーでも、予定調和を起さぬ悪文はすらすら読めない。予定調和を拒む名文もすらすら読めないのである。

外国語

言おうと思ったことが、脳内で言葉となつて、それが口から発せられている内に、脳が次の言葉を作り出せなければ、物理的に会話は続かない。なめらかに喋るとは、脳内の拘束を離れて、口から音が勝手に出る状態を意味している。だから、無意味なフレーズでもいくつか暗記して、勝手に口から発せられる状態を作ることが、外国語上達のコツのようである。そして、聞き取り能力は、次の言葉が予測できるように予定調和が始まつて完成する。

自己評価

人はそれぞれ、自分に對して、自己評価をくだしながら生きている。それと同時に、自分が周囲からどう見られているか」を気にしながら生きてもいる。普通、自己評価と他者の採点が大きく掛離れることはないが、その差が大きくなると大変なことになる。たとえば、鬱病になる。予定調和による心の安らぎが得られず、心のバランスが崩れてしまうのである。

自己評価はやめ、現実をありのままに受け入れる。これが最良な処方箋だという。しかしこれは、悟りの世界であり、凡人のなせるわざではない。それならば、自己評価にも多様な世界を取り入れてはいかがであろうか。他者の評価さえ、自家撞着の世界にしてしまえば、心に安らぎが戻ってくる。

ストレス

るべき姿と現実との差がストレスの原因である。現実をありのまま受け入れれば、ストレスは生じない。だがそれがむずかしい。もともとストレスのない人生なん

か、何の意味もあるまい。

話術

知っていることを聞くのは心地よい。その極まりは、自分のことが話題にされる時である。誰でも自分のことは一番良く知っている。その自分がことが、話題になれば、良かれ悪しかれ脳細胞が刺激される。だから、話題が途切れて、間が持たない時には、相手のことを語るに限る。これが話術の要諦である。

比較

人をおだてるのは簡単だ。他人と比較すれば良い。人を傷つけるのも簡単だ。他人と比較すれば良い。ただし比較対象者をまちがってはならぬ。

初心者

何事であれ、初心者ほど早く進歩するのが道理である。それなのに老人は、過去の世界に閉じこもり勝ちで、初心者の所まで降りて行きたがらない。だから予定調和の世界を増やせない。新しいことを始める。それが若さの証拠なのである。

知識の増殖

知識や情報の世界は、間違えなく複利計算を越えて、

成長拡大する。シャワーのごとく降り注ぐ情報が、手持ちの知識に比例して歩留るのは、当然として、異質の知識や情報が合体すると、新たな知識や情報を生み、加速度的に保有する知識を増大させるからである。すなわち、知っていることに調和する知識だけが、知識の増殖過程に取込まれるのであるから、知識に対する初期投資を惜しんではならない。

夫婦

世の中の奥様方には、だんな様との旅行などまっぴらだという方が多い。もともだと思ふ。しかしもったいない話だ。ふたりの経験は自乗で楽しめる。一緒に見た風景がテレビに出てくれば、トイレまで呼びに来る。

成功

成功者のまねをしたら必ず失敗する。同じ事をしても百人に一人も成功しないからだ。しかし成功者はもう一度同じやり方で成功したがる。それが予定調和して心地良いからだ。そして失敗する。

会社

会社を失うと予定調和の世界を失ってしまうひとがいる。恐ろしいことだ。

論語の解釈・一千年の誤りを糺す ——学説、通説の盲点を衝く——

鯨

游

海

「君子の器は不きい」君子たる者は不きな器であるべし」と訳したい。

論語卷第一爲政篇第十二章のこの文は六字から成る。

論語十巻二十篇五百十二章中の最も短かい章の一つである。うち四字は常套句であるからキーワードは不と器の二字をどう解釈するかにかかる（歴代の論語学者にとつては不も常套句であったが）。

定説でいう器の意味は、易經・繫辭上傳の「形而上の精神的なものを道、形而下的外形的なものを器といふ」を典故として引用したものである。敷衍して述べると「農業は百姓のやる仕事で、君子たる者はこのようないふ事に多能であつては却つて良くない。学びて道を致し、政治や道徳に専心すべきである」の意となろう。

私が定説を採らない理由は後述するとして、先ず私見

私はこの説を採らない。古今東西の先賢に対し誠に不遜ではあるが、この定説は誤りと断じざるを得ないからである。

凡そ論語は字句通りストレートに読んで而も深い哲理を含む。現代の我々には驚きだが不の字には「大きい」の意があった。そこで（君子は不な器なり）と訓じ、

の論拠から述べよう。

一、不の本義は「大きい」であった。

春秋時代まで、不は「打消し」の意味もあったが、併せて「大きい、多い、はなはだ、偉大な、盛大な」等の意としても使われていた。

漢和辞典を引くと「ふくらんだ英が垂れている象形文字。芣（花の盛んなさま）の原字。音のヒ（非）を借りて打消しの助辞。」

①：す。：せず。：に非ず。否や。

②：大きい。丕に同じ」とある。

「打消し」の意は、音のヒ（非）から借りた派生的な意味で「大きい」が本義であったが、時代が下るにつれ本末が顛倒していったと思われる。

次に丕を引いてみよう。

「もと不と同じ。①大きい。②はじめ。熟語として丕業

||大事業。丕顯||大きく明らか。丕績||大功（韓愈・貞

觀開元の丕績」とある。唐の韓愈は、丕を大の替りに使っている。

思うに春秋の頃迄、不は「大きい」と「打消し」の両意あつたが、徐々に「大きい」は丕に統一され、論語の注釈が書かれ始めた前漢の頃には「大きい」の意は既に失なわれて了つたのである。その為か、論語の注釈書に不を「大きい」と訳した例は長享、長毛（前漢）にも、

注釈が書かれ始めた後漢の頃には「大きい」と「打消し」の両意は既に失なわれて了つたのである。その為か、論語の注釈書に不を「大きい」と訳した例は長享、長毛（前漢）にも、

注釈が書かれ始めた前漢の頃には「大きい」の意は既に失なわれて了つたのである。その為か、論語の注釈書に不を「大きい」と訳した例は長享、長毛（前漢）にも、

注釈が書かれ始めた後漢の頃には「大きい」と「打消し」の両意は既に失なわれて了つたのである。その為か、論語の注釈書に不を「大きい」と訳した例は長享、長毛（前漢）にも、

王風・君子于役（中国名詩選・松枝茂夫編・岩波書店）

君子于役 君子役に于く

不日不月 不日不月（注）

曷其有佸 疲か其れ 佸うこと有らん

……

「貴男は徵用されて戦地に行つて了つた。

月日は數え切れぬ程過ぎ去り、

何時また逢えることやら。……」

不は「数え切れぬ程」と訳されている。（注）松枝茂

夫先生は「日不月不」と読んでおられるが、訳文では「数え切れぬ程」なので私なりに読み変えた。日不で

は「直ぐに、間もなく」の意となつて了う。訳は正しく訓読が誤っているケースである（本稿にとつてこの事実は多分に示唆的である。不は「打消し」の意味しかない、という固定観念が我々を束縛している一例として）。

さて、同様に不を大とする例が論語にもある筈である。論語には不も非も到る所に出てくるが、注釈書が全て前漢以降に成ったものなので、前述の通り不は全て「打消し」として読解されてはいた。しかし丹念に読んでいくうちに「大」の方が意味がすつきり通る章があった。卷第四述而篇第二十七章である。

子曰、蓋有不知而作之者、我無是也、多聞擇其善者而從之、多見而識之、知之次也。
（子曰く、蓋し知らざるに之を作す者有らん。我は是れ

鄭玄（後漢）、何晏（魏）、皇侃（梁）ら古注にもない。

以後この間違いが踏襲され、朱熹（南宋）の新注にも江戸時代の錚々たる儒者にも、近現代日中の碩学らにも皆無である。當時を鑑みればこれは却つて不自然である。

本稿を草していた一日、横浜美術館に中国文明展を開催しており、長方形の底面にはびっしりと漢字が刻まれていた（號子白は將軍の名。季は末子の意）。二行目に「不顯子白乎孚武子蕃……」とあり、訳文には「偉大なる號子白は夷蕃に戰勝し……」とあった。

不顯は「偉大なる」と訳されていたのである。

次に論語より古い詩經には、不を大とする例がある筈だと探してみると、早々と四例が見付かった。

雅・文王（古詩選・入谷仙介訳・朝日新聞社）

文王在上 文王 上に在し

於昭于天 於 天に昭かなり

周雖舊邦 周は 旧き邦と雖ど

其命維新 其の命は 維れ新たなり（注）

有周不顯 有周は 不顯らかなり

帝命不時 帝命は 不 時しきなり

……

不は「はなはだ」と訳されている。なお（注）は我が明治維新の典故となつた語句である。

……

不は「はなはだ」と訳されている。なお（注）は我が明

治維新の典故となつた語句である。

論考を引用させて戴こう。

「この章はどのように解釈しても靴挫痒の感があつてすつきりしない。『知之次也』が決論であるからには、

当然上位の「知」がなければならない。文章の構造上からは「不知而作之者」がそれに当るのが普通だが、これでは文意が通じない。孔子が自己省察する時は、先ず理想像を掲げ、それに照らして自分の及ばない事を述べる

のが定石である。所が本章は逆になつている。低級な事

の「不知而作之者」を挙げ、自分はそんな低級な事はしない、という形式になつてゐる。本来は「不知而作之者」

が上位の「知」に相当しなければならないのに」と疑問を提し、半ば匙を投げておられる。

この「不」を多として読むと忽ち解決する。

「多くを知りて且つ之を作す者」の理想像が在る。私（孔子）は元よりそんな聖人の如き知者ではないが、せめてより多く見聞してそれに近付きたい。でもそれは所詮下位の知で、セカンドベストに過ぎない事ではあるが」となり、論旨はすつきりと明確になる。

別の例を挙げよう（但し以下の事例は、未だ仮想の段

階で考察不十分のままであるが。卷第一学而篇第四章、

曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交言

而不信乎、傳不習乎。

(曾子曰く、吾れ日に三び吾が身を省りみる。人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝うるか) (注)

右は古注に基づいた金谷治先生の読みで定説である。

(注) 新注では「伝えて習わざるか」と読む。

さて私は不を形容詞として次の如く読みたい。

(……人の為に謀りて不^おいに忠なるか、朋友と言を交え

て不^おいに信なるか、伝えられしを不^おいに習いたるか)。

この文は曾子の自省であつて他者を忖度推量したものでない。忠や信（誠心誠意）であろうとした事は自明の事で、唯その程度が十分であつたかを内心忸怩たる思い

で反省し、半ば嘆いているのである。乎は定説のいう

自問自答の疑問詞（不と共に使って強調する用法）とい

うよりは、幾許かの反語を含んだ詠嘆詞ではないのか。

少なくとも文法的には適つていて互角である。更に最後

の文は「伝えられた先生からの教えを自分は十分に復習

したであらうか」と結ぶ。最終文に關する古注、新注の

論争にも、私見ならより合理的に決着がつくと思うが如何であろうか。

もう一例を挙げよう。卷第三雍也篇第二十五章である。

子曰、觚不觚、觚哉、觚哉。

（子曰く、觚、觚ならず。觚ならんや、觚ならんや）。
觚とは儀礼用の酒器。礼制がすたれでこの当時大きくなっていた。古注及び金谷治先生を始めとする定説は次の通り解釈している（新注では角の丸くなつた器と云う）。
「飲酒の礼で觚の盃を使うのは、寡^寡ない酒量の為であつたのに最近では大酒になつて」觚が觚らしくなくなつて了つた。これでも觚と云えるであろうか「云えない」觚と云えるであろうか「云えない」。古注も新注も金谷説も哉を反語としている。

これに對し私は不を大としてまた哉を詠嘆として次のようになに讀解したい。

（觚も不^お觚も、觚なるかな、觚なるかな）「昔の」觚も「今^おの」大きな觚も、「觚は」觚に違ひはない、觚に違ひはない。

この哉が反語か詠嘆かに關しては前述合山究先生の詳細な論考がある。反語ではなく詠嘆であることを説かれた卓見である（九州大学文学論輯第三十二号一九八六年十二月）。

さて一般に形が多少大きくなつたからといって「觚ならず」と表現するであらうか。「不似觚」—「不類觚」ではないのか。ここはやはり私解のように「不^おきな」と読む方が文章として明解且つ合理的であろう。

さて、もつと他にも丹念に讀めば「打消し」ではなく「大きい」が正しい章やベターな章がある筈であるが、学者達の困惑が判るような気がする。彼等はここでもう少し深く不^おが混用されるようになつた悪しき例なのかも知れない。

論語は儒教最高の教典で絶対的權威であり、儒者、漢学者達の困惑が判るような気がする。彼等はここでもう少し深く不^おが混用されるようになつた悪しき例なのかも知れない。

但し、不^おの語法の後段に「述語になつていれば名詞も直接否定する」とあり、「君子不^レ器」（論語）と例示されている。何の事はない。この文章が嚆矢となつて後世不^レ非^レが混用されるようになつた悪しき例なのかも知れない。

「打消し」ではなく形容詞であった事に。

四、典故を引用する際、通常一字では意を尽くさない場合が多い。二字以上の成語で引くのが通例ではないか。

諸葛孔明を喻えるのに龍一字では不十分である。臥龍または臥龍鳳雛と熟して意味が通じる。件の文章も若し易經の故事として引用するのであれば「君子非器而可爲道」（君子は器に非ずして道たるべし）とでも記すべきではないか。何れにしろ器一字で易經の中で述べられた道と関連した概念を喻えるのは無理である。つまり所、易經でいう所の器ではなかつたのである。

三、非器とせず、何故不器としたのか。

語法では、不^レは「行為、動作、状態の打消しに多用する。從つて動詞等働きのある字にかかる」。一方非^レは「是の對義語で判断的否定を表わす。存在の在り方や概

形という。容器の意の他、役に立つ事から働くべき、才能、重んじる、等の意が派生した。禮記には「玉不琢不成器」「不^レ器」とがどうしても結合しないのである。

現代でも「あの人^レは器だ。器が大きい。器量が良い」等称賛に用いられる。私には人の理想像たる君子と「不^レ器」とがどうしても結合しないのである。

三、非器とせず、何故不器としたのか。

五、卷第三公治長篇第四章「女器也」と本章との矛盾が氷解する。

子貢問曰、賜也何如、子曰、女器也、曰、何器也、曰、汝は器なり。曰く、何の器ぞ。曰く、瑚璣〔祭祀に用い

る瑚で出来た貴重な器〕なり。

孔子の高弟である子貢は「女器也」と孔子にいわ

れた。これは「君子不器」と照らしてみると「子貢よ、お前は君子ではない」といわれたのに等しい。古来、こ

の二つの章の矛盾について多くの学者が解決を試みたが何れも失敗した。最近の金谷治や貝塚茂樹、吉川幸次郎等の注釈書では全く無視している。僅かに合山究の論考があるが（論語解釈の疑問と解明・明徳出版社）説得力は弱い。

子貢は弁論、洞察力、理材の才に卓越し、政治外交に大活躍した孔門の秀れた学徒であった。孔子の死後、孔門最高の地位に置かれ、門弟達から尊崇された俊才である。「お前は一つの事にしか役立たぬ融通の利かない人間だ。君子の資格はない」等と云われる筈がない。

古今東西の碩学が誰一人として答えられなかつた二千年來の疑問であったが、私解によれば即座に氷解する。

論語は五百十二章から成る（四百九十九章に数える説

一步相手の個性、能力に応じ、倦まず絶ゆまず、情熱と愛情を持つて……等）似たような安直なやり方が他にあるものではない。如何であろうか。学ぶ側にはそれこそ種々の方法があるであろう。独学とか塾とか通信教育とか自分に適したものか。しかし教える方法、先生としてのやり方には唯一つの正道あるのみではないのか。とまれ山本七平はいう。「自からの俗説を持つ事こそ論語の読み方の本道である（論語の読み方・祥伝社）」と。俗説には権威は無い。しかしより合理的であれば、何れは定説にとって替る。正論は権威に勝る。

この私の仮説がやがて認められる所となり、論語や孟子の注釈書の幾章かが書き直される日が必ずや来るであろう。博雅のご叱正を待つ。

（主な参考文献）

- | | | | | | | |
|-----------------------|--------------|------------------|------------------|-------------------------|---------------------|------------------------|
| 合山 究 論語解釈の疑問と解明 明徳出版社 | 金谷 治 論語 岩波書店 | 山本 七平 論語の読み方 祥伝社 | 貝塚 茂樹 論語の読み方 祥伝社 | 吉川 幸次郎 講演集・論語について 朝日新聞社 | 今泉 正顕 論語に親しむ PHP研究所 | 色部 義明 指導者論としての論語 ハ岩崎書店 |
|-----------------------|--------------|------------------|------------------|-------------------------|---------------------|------------------------|

（追記）

本稿を九州大学大学院合山究教授にお送りした所次の要旨のご返書を頂戴する榮に浴した。

「……『君子不器』と『女器也』とは、器に関するが、種類「の差別」はない。「誰でも教育によって立派になる」。類を人間の種類＝身分や才能、性格等の差と解しているが私は大いに疑問を持つ。そもそも孔子は人間の生まれながらの才質には差別がある事を認めていました。詳論は別の機会に譲るが私は次のように解したい。「教育の方法には唯一つの正道しかなく「基礎から一步

しかし現存の文献を見れば不を丕にとつて読むのは詩經や書經のような古い文献にほぼ限られています。勿論、本来の論語には、御説のような通用、混淆があつた可能性のあることは疑いないと思われます。しかしこれを証明するのは今となつては不可能であることも事実です。……

文字の読み換えはよほど根拠のある場合にのみ行なうべきだとする立場の者もいます。また眞実は確かめようがないのだから蓋然性を重視し思いついた解釈をすべきだという者もいます。御説は、前者の立場からすれば根拠が乏しいと感ぜられるでしょうが、後者の立場からすれば十分可能性があります。

もある）。うち最も多く出て来る単語は「君子」で、実際に七十五章を占める。君子の対義語「小人」が十九章。

仁が五十、禮が四十二、德が十八、義が十七の章に登場する。故に論語とは「士大夫に示す指導者論」で、仁礼徳義がキーワードを為す。そして実行し実現する事の大切さを折々述べる。

実行し実現するには人が隨いて来なければならぬ。その為には寛容な事、つまり大きな器でなければ人は随いて来ない。かくして「君子は大器たるべし」は、論語の核心を成すフレーズと云えよう。

大器は定説でいう「融通性」をも包含する。縦い定説が読解として誤っていたとしても二千年間人々を納得させて来た事実は重い。私解によればそれをも包容し得る。

私は永年次の章の解釈にも疑問を持つ。卷第八衛靈公篇第三十九章「子曰、有教無類」である。

（子曰く、教ありて類なし）

定説は次のように解する。「教育「による差別」はあるが、種類「の差別」はない。「誰でも教育によって立派になる」。類を人間の種類＝身分や才能、性格等の差と解しているが私は大いに疑問を持つ。そもそも孔子は人間の生まれながらの才質には差別がある事を認めていました。詳論は別の機会に譲るが私は次のように解したい。

配達

柴田富佐子



土曜日の夜は、飲食店から返ってくる空壠の函が多い。

一列に五函、四列も積むと、もともと一杯一杯の店内に、

バイクを入れる余地はなくなる。

その晩も食み出したバイクを軒下に停めたまま店を閉めた。鍵は勿論かけておいた。

所が月曜の朝、店のシャッターを上げてみると、ガラス戸の向こうにバイクの姿はなかった。

裕一の店の前は、問屋のトラックが入ってくると、人一人も通れないほど狭い横丁である。その狭い通りの両側に、居酒屋・蕎麦屋・ラーメン屋・寿司屋などの飲食店が点在している。どの店も配達用のバイクは、軒下に停めている。裕一のバイクもそうだが、どれも商売用だから汚れ放題で、だれも盗まれる事など考えてもみなかつた。

「えっ、酒屋さんも」

の方へ持つてくらしいですよ。夜はお店の中に入れるようにして下さい」

盜難届を纏めて警官は帰っていった。

どうせもう買ひ替えようと思っていたバイクだから、少しも惜しくはない。寧ろ、早く新しいのを買うきつかけが出来てよかったです、とさえ裕一は思った。配達の途中で故障はするし、少し余分に荷を積むと、ギイギイ悲鳴をあげて坂の途中で動かなくなるので、押して上がりなければならぬ事も多い。もうそろそろ買ひ替え時だと

は、ずっと考えていたが、物のない時代に育つたせいでもなかなかその踏ん切りがつかないでいた。

バイク屋に電話して新しいのを注文し、届くまでは自転車での配達を我慢しなければならなかった。前より力の強い70ccのバイクは、急がせたので五日目に届いた。配達用だからね、と断つておいたのに、新しいバイクは前の風除けにブルーの横線が入った洒落れたものだった。

「何だか目立つて恥ずかしいよ」

そう言いながらも裕一は悪い気はない。

うん、なかなかいい、それに力もありそうだ。実際新しいバイクは、ビール函を二つつけても、坂をぐんぐん上っていく。暖かくなつて來たので、ジャンパーの衿元から入つて來る風も気持ちいい。

大体が店の中で客の相手をしているよりは、配達に出

店先で憮然と突立っていた裕一に、向かい側の蕎麦屋の主が声をかけた。

「あっちも、こっちもだ」

この横町に停めてあったバイクのうち、同じ機種の三台が、日曜の夜の闇に紛れて姿を消していた。ただでさえサラリーマンや学生が休みの日曜は人通りが少ないので、昨夜は雨降りであった。

やがて誰が知らせたのか、自転車に乗った警官が来た。「今ね、バイクの盗難が多いんですよ。鍵なんか、かけあってたつて駄目。トラックで来て積んでっちゃうんだから」

「だって、あんな汚ねえの、盗んだって仕様がないだろうにねえ」

と蕎麦屋の主。

「塗り直したり、部品を取つ替えたりして、東南アジア

で走り廻っている方が性に合つている。あの古いバイクも、下町のこんな狭い道を走っているより、どこか知らないが東南アジアの広い広い埃っぽい道を、風を切つて走つていた方が楽しいんじやないか、と思う。椰子の並木を吹き抜けてくる涼しい風の中を、スピードを一杯にあげて走つてゐるバイクを想い描くと、裕一の頬はひとりでに弛んでくる。

「いいなあ、オイ、羨ましいよ」

そんな気分である。

空壠のぶつかり合う音を立てて坂を下りて来て、裕一は急に速度を落とした。歩道で立ち話をしているお得意さんの奥さんが、大きく手を振つてゐるのに気が付いたからである。

「丸金さん、夕方でいいから、いつものお酒とお醤油、持つて来て」

「はい、後で伺います」

店へ戻つて空壠の片付けをしていると、母親の呼ぶ声が聞こえた。

「お茶が入つてゐるよ」

裕一はレジ台脇の丸椅子に腰を下した。

「お前、河合製本って、知つてゐるかい」

「河合製本ねえ、名前は聞いた事があるような気がするけどなあ」

「三丁目だつてさ」

「じゃ、達ちゃんの店の近くかな」

「うん、三河屋さんの先を曲がったとこだつて」

「どうしたの、その製本屋が」

「ビールと酒の注文に来たんだよ」

「だって、達ちゃんの店の方が近いじゃないか」

「何だか知らないけど、わざわざ注文に来たんだから、

持てかなきゃなんないだろう」

「何があるんじゃないの」

「借金かい」

「達ちゃんとこと喧嘩したとか」

「そんな事もないと思うけど、現金ですぐ払うって言つてたよ」

「変だなあ」

「まあ、折角来ててくれたんだから、一度は持つてってやんなきゃねえ」

納得のいかない表情の裕一に母親は重ねて言つた。

近くの酒屋を飛び越して、わざわざ遠い酒屋に注文を出すには、必ず何か訳があるものだ。飲食店なら払いが溜つて、これ以上貸せない、と断られたとか、素人の家なら酒屋と何か揉め事が起きたとか。納得のいかないまま、裕一は母親の言葉通り、折角来てくれたのだから、一度は配達しなきゃ悪いだろう、と思つた。

夕方の配達が終わった後で、裕一は河合製本へ出掛けた。

達ちゃんの店の前を通り越して右に曲がると、河合製本の看板はすぐ目に入った。思ったより大きな製本屋だった。裏に廻ると、住居用の玄関があつたので呼鈴を押した。ガラス戸が開いて、何と、さっき坂の下で印刷屋の奥さんと立ち話をしていた人が立っていた。さっきは後ろを向いていたので顔は見なかつたが、ベージュ色のセーターに黒いズボン、白い割烹着を着た姿に見覚えがある。「丸金です。ビールと酒を持ってきました。ここからでいいんですか、お勝手口があるなら、そっちへ廻りますけど」

「いいの、ここで。勝手口って別にないから」

奥さんは、「まさ子、まさ子」と呼びながら茶の間の方へ行つたが、じきにビール一打入りのカートン箱を抱えた娘さんが出て來た。腕も脚も細い背の高い娘だった。細面の顔は十人並以上だが、若い娘らしい華やかさも愛嬌も感じられない。

こんな寒い感じの娘は、やだな、裕一は思った。

「いくらですか」

娘の声にも暖かさはない。

空疊代を引いたビール一打分と、日本酒一級一本の代金がきちんと袋に入っていた。

「御苦労様でした」

えらく丁寧なお辞儀をされて裕一は外へ出た。やれやれ、という気分だった。

その後も週に一度の割で、ビール一打と日本酒一本を届けた。たまに娘さんが直接出て来る事もあつたが、大

方は母親が出て来て裕一の顔を見ると「まさ子、まさ子」と娘を呼んで自分は奥へ引っ込んでしまう。

総てにきちんとしている家らしいから、酒屋はある娘さんの係、と決まっているのかも知れない。

或る時、遠い配達があつて、近くの配達が遅れてしまい、夕飯時になつてから河合製本に行くと、いつもの「まさ子」さんでなく、見た目には五つ六つ年下の娘が出て來た。

「あら、酒屋さん、遅かったのね」

「可愛いいい声だ。

「あ、空き壇ね」

ドタドタした足音をたてて奥へ入り、いつものカートン箱を持って來た。

「お母さん、お母さん」と大声で呼びながら奥へ駆け込んだ。

「はい、どうもお待たせ。御苦労様でした」

代金を手渡してくれた時の笑顔がいい。

「まさ子」さんより背は低いが、いかにも若い娘らしい柔らかそうな肉付きの体をしている。しゃべる度に、ふつくらした頬に小さなえくぼが出来るのも愛らしくていい。姉さんは、随分違う妹だ、と思った。俺は妹の方が

いい、とも思つた。

達ちゃんとは青年部の集まりで一緒になつたが、河合製本へ配達を行つて、とは言い憎いので黙つていた。こっちから売り込んだ訳でなく、向こうから頼みに來たんだから、仕方ないや、と心の中で弁解していた。

ジョン・プライドがいいという京子の強い希望で、裕一と京子の結婚式は、六月に決まつてゐる。

京子は妹の高校時代の同級生で、高校生の頃からよく妹のところへ來てゐるうちに愛が芽生えた。古い和菓子屋の娘で、子供の時から店を手伝つていていたから、客扱いも帳簿づけも慣れてゐる。結婚式の翌日、一日休んだだけ店に出てゐる。京子のその働く姿は、商売を嫌つて勤め先で相手を見つけると、さっさと店を出でていった妹よりもずっと、この店で生まれ育つた娘のようであつた。

「私ね、子供の時から酒屋さんていいな、って思つてたの」と京子は言う。

「何でもかんでも重たい上に毀れ物でさ、こんなやりにくるい商売はないよ」

「いいえ、なんたつて、男らしい商売よ。和菓子屋なんて、ちまちまして、女っぽくて、金高だって高が知れてるわ」

「金高の張る割には、儲けが少ないんだよ、酒屋は」

「でも、私は好き」

幸せ一杯な顔で気持ちよく一日中動き廻っている頬も
しい相棒を得て、裕一も幸せであった。

お中元の贈答期を控えているので、新婚旅行はお中元
が終わつてから、お盆休みに三日間ハワイへ行く事になつ
ている。

面倒で苦手な帳簿仕事から解放されて、裕一は一層の
びのびと新しいバイクで得意先を廻つてゐる。売り上げ
は目に見えて増えてきた。店内の冷蔵庫を二台ふやして
三台にした。

缶のビールやジュース類の種類が激増したが、京子が
こまめに補充するので、冷蔵庫はいつもきちんと隙間な
く、色どりよく飾られている。

若い娘がいるというだけで、店の空気は華やぎ、それ

に相応しい若い客の姿が多くなった。

幸せな日々は経つのが早い。

朝から昼までは例年通り中元の配達をこなし、昼食後
は近辺の飲食店の御用聞き、空壟の引き取りに廻り、帰つ
て伝票を整理して夕方から配達、若さにかまけて休む間
もなく働き続けているうちに、中元商戦は終わった。

働いた後のビールはうまい。京子が毎日工夫して用意

してくれるつまみが、これ又うまい。中壟一本を飲み了
えた時、裕一はその日、配達の途中で出会つた河合製本
の娘の事を思い出した。

ビルの地下にある居酒屋から空壟二函を抱えて上がつ

て来た裕一は、通りかかった人とぶつかりそうになった。

「ああ、済いません」

体をそらしてその人を見ると、思いがけずそれはまさ
子であった。まさ子は裕一と目が合うと慌てて踵を返し
た。紺色のスカートから出た脚が、どんどん遠ざかる。

まるで逢いたくない人間に出会つて逃げてくみたいじゃ
ないか、失礼な奴だ、そう思った時もう一ヶ月以上も河
合製本には行つていない事に気付いた。ビールはどうし
ているのだろう、達ちゃんの店へ戻つたのか、俺の方に
は何の落度もない筈だから、それならそれでいいけど。

裕一は店番をしている母親に声をかけた。

「忙しかったんで、すっかり忘れてたけど、この頃河合
製本から注文が来ないね、どうしたんだろう」

新聞を読んでいた母親は、老眼鏡を外し、一寸背伸び

して奥の台所を見た。京子が洗い物の水音を立てている
のを確かめてから言った。

「来る訳ないじゃないか」

「どうして」

「お前も随分と鈍い男だね」

「何がさ」

「あそこに娘が一人いたろう」

「うん、上の娘はやたら細くて、美人だけど愛想がな
くってさ、下の子は丸っこくて可愛いが、まるで子供だ」

「そのどちらかを、お前に押しつけたくて、わざわざこ
の娘の事を思い出した。

ここまで注文に來たんだ、とわたしははなつから睨んでいたよ」

「まさか」

「お前が結婚したら、ぴったり注文が来なくなつたじや
ないか。何よりの証拠だろうが。いい年してそんな事も
気がつかなかつたのかい、バカだね」

空のコップを口に当てたまま、裕一はまさ子の逃げて
いった長い脚を思い出していた。

「最初から判つていたんなら、どうして言つてくれなかつ
たんだよ。知つてりや、俺、配達になんか行かなかつた
のに」

「そうだろう。お前の性分じや、そう言うだろうと思つ
たから、わざと言わなかつたんだよ」

「俺は、結果的に、あの人達を傷つけちゃつた事になる
んだ」

「だってお前、あっちがそう言つて來た訳じゃないんだ
から、先走つてこっちから、俺の嫁はもう決まつていま
すよ、なんて、言える訳ないだろ」

「なら断りやよかつたじゃないか。ビールの一打や酒の
一本位、断つたつて、どうつてことないよ」

「何言つてんの、お前。商売だよ。例えビールの一打だつ
て、ちゃんと金を払つて買つてくれるんなら、売るのが
当たり前だろう」

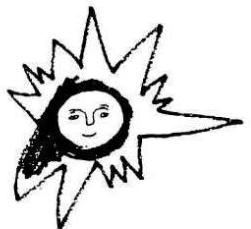
「まんじ」季刊発行内規

(発行日)

(原稿締切日)

春季号	一月一日	十一月三十一日
夏季号	五月一日	三月三十一日
秋季号	八月一日	六月三十日
冬季号	十一月一日	九月三十日

空に祈る



瀧澤

中

1、

「立花少尉どの、」
童顔がまだ抜けきらない井田公平は、滑走路脇の草むらにしゃがみこんで、空を眺めている立花貞一に、声をかけた。

「おう、井田か」

二十歳を迎えたばかりなのに、たいそう大人びた面構えの立花貞一は、井田公平に「二等兵」という階級を付げに応えた。

「どうしたんですか？」

井田はニコニコしながら尋ねた。井田はまだ十六歳だ

が、整備兵としてここ鹿児島の知覧陸軍航空基地に配属されている。
昭和二十年七月という時を別にすれば、薩摩半島の中央に位置するこの知覧は、いつもの夏と同じように、暑く物静かな場所であった。

「いや、べつにな」

と言つて、立花は井田から一瞬目を逸らせたが、すぐ

に井田の方に向き直して、「そうだ、これ、さっき配給で受け取ったのだが」と言いながらポケットから羊羹を取り出して、井田の方に差し出した。

「ほら、持つていけ」

「え、でも」「いいから」

井田は、ありがたく押し包むようにして、立花の手から羊羹を受け取った。

立花は、（自分は酒飲みで、甘いものは好かん）と言つて、いつも配給の菓子などを井田に与えていた。
何でも、井田と同い年の弟が、故郷にいるということだった。そのせいだろうか、立花貞一は井田公平を、何くれとなく可愛がった。

「立花少尉どの、何をご覧になっていたのでありますか？」

夕暮れから、間もなく夜の帳が降りようとしている。
雨でも降るのだろうか、どんよりとした雲が、夏の空を覆つていた。

立花は、井田に座るように言って、また空を眺めた。
そして、しばらく無言でいたが、風が一人の頬を撫でた時、

「明日、だ、そうだ」

ボソリ、と立花が言った。

井田は立花の顔を思わず見つめた。

「立花少尉どの、お、おめ」

そこまで言って、「おめでとうございます」という言葉を飲み込んだ。

言えなかつた。軍人が出撃することは、おめでたいの

「井田、俺はな、大学で天文学を学んでおつた」
その話は何度か聞いたことがある。井田は、月や星の話を、立花から詳しく聞かされていた。

あれが何星、あれは何の星座で、月の満ち欠けがなぜ

起きるのか……。星空の話をする時、立花は一層、優しい眼差しになった。

（将来、もし月に行けばたら、俺はそこで死んでもいい）

そんなことを、立花は井田に語っていた。

「きょうはな、最後だから、星が見たかったんだ」

井田は、立花がどうして一人で、空を眺めていたのか、初めて合点した。

「そうでありましたか」

井田はそう言って、空を見上げたが、あいにくの曇天で星一つ見えない。

生暖かい夏の夜風が、二人を包み込むように吹いている。辺りは、夏虫の鳴く声以外、何も聞こえない。

今が戦争中で、ここが航空隊の飛行場であることを、忘れさせてしまうほど、平和な夜だった。

立花は大きく息を吸って、それから、

「フー」

と息を吐いた。

「どうやら、今夜は、お目にかかるそろはないな。行こ

う」

立花は立ち上がって、井田をうながした。

井田も立ち上がり、ズボンの砂を払うと、無言で立

花の後についていった。

三角兵舎、と呼ばれる木造の兵舎は、半ばまで土の

中に埋めて、滑走路手前の、松林の中に隠れている。

首が痛くなってきた。が、井田は空を見つめ続けた。

2、

ないのか）

朝になつた。

曇天は、ついに晴れることはなかつた。

井田は念入りに、立花の搭乗機を手入れした。

しかしその顔は浮かなかつた。

（自分の祈りが、弱かったのではないか。もつと熱心に探せば、星はみつかったのではないか）

誰が悪いわけではない。しかし、自分を責めずにはいられないのだった。

やがて、出撃の時が近づいた。

隊員たちが整列する。

近所の女学校の生徒たちが、花を手に、門出を見送りに来ていた。

三〇名近い隊員たちは、基地司令訓辞の後、訣別の盃を交わし、搭乗機に小走りに向かった。

凄まじいエンジン音に、見送りの人々が歌う軍歌の歌声もかき消されて、静かな飛行場は一転、戦場の様相を呈してきた。

立花貞一が、井田公平の待つ搭乗機に駆けて來た。立花は井田の姿を認めるとき、すぐに笑顔になつた。

兵舎の前まで來ると、立花は右手を出した。

「ありがとうございます」

井田は泣きそうな顔をしながら、無言でその右手を両手で握った。

立花は温かな表情をついに崩すことなく、兵舎の中に消えて行った。

井田公平は、しばらく三角兵舎の前に立ち尽くしていくが、消灯ラッパの音を聞いて、踵を返した。

井田は再び、滑走路に向かった。そして、つい今しがたまで、立花としゃがんでいた草地に腰を下ろし、空を見つめた。

（お願いです、どうか、星が見えますように）

井田は、ずっと起きているつもりだった。もし星が、一つでも見えたら、すぐに立花に知らせに行くつもりだった。

（もし、もし神様が本当にいるのなら、どうか、どうか、お願いします、星を、月を、見せて下さい。どうか）

井田は祈り続けた。立花のために、いま井田が出来ることは、ただ祈り続け、空を見つめるしかないのだ。

井田は、自分がいかに無力で、頼り無く、無意味な存在であるのかを、曇天を見つめるたびに思つた。

（立花少尉は、命と引き換えに国を守ろうとしている。なのに、自分はたった一つの星さえ見つけることが出来

た。そして、搭乗席に上がる前に、井田の耳元でこう言った。

「井田、昨日の夜、俺は星空よりももっと素敵なものを見た。

滑走路の脇に見たぞ」

井田は、「えっ」という顔をした。

井田は、泣くまいと誓っていた。その目にあふれそうな涙をこらえながら、「はい」とうなずいた。

立花は深夜、諦めきれずにもう一度、滑走路の脇まで出てみたのだ。そしてそこで、井田の姿を目にしていた。

立花は井田に近づいたが、必死に夜空を見上げている

井田は気がつかなかったのだ。

その懸命な姿に、立花はなぜか、声をかけることが出来なかつた。

「立花少尉どの、申し訳ありません」

星を見つけることが出来なかつたことを、井田は詫びた。が、立花はまだ微笑むばかりだった。

井田は駆け寄った。

立花は搭乗機の翼から、搭乗席に入ろうとした。

しかし、翼の上で立ち止まって、井田を手招きした。

井田は駆け寄った。

「井田、俺の残りの年をやるから、お前、長生きをしろよ」

井田は、もう、涙を止めることが出来なかつた。

立花は、もう一度井田に微笑むと、搭乗席に乗り込んだ。

井田は、泣いたまま敬礼し続けた。

立花も、返礼した。

機は、エンジン音を轟かせて、南の空に飛んで行った。

その夜、知覧の空は、満天の星月夜だった。

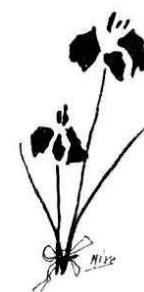
井田はただ一人、滑走路の脇の草むらで、夜空を眺めていた。

帰るなき 機をあやつりて 征きしはや
開門よ母よ さらばさらばと

鶴田正義

(知覧特攻平和会館前歌碑より)

おわり



泥めんこ

紙透寛夫



パパが見付けたのより、いいのをね

「おれは鬼を拾うんだ。まだ一つも無いもん、欠けてないのを見付けなきゃ」

「そんなのより、昔のお金の方が、いいんだぞ」

息子たちは大はしゃぎである。

「じゃあ出発だ。みんなポリ袋は持ったな」

私たち親子は泥めんことを探しに、この貝塚を行った。もう三十年も前の話である。

「パパ、今日は日曜日だから、会社に行かないんでしょ

う、貝塚に行こうよ」

「そうだ、そうだ」

「ねえ、行こうよ」

三人の息子からせがまれ、私は貝塚に行くことにした。

「よし、行こう」

「ばんざい！僕は達磨の泥めんこが欲しいな。この前、

その頃、私は町会長Mさんの家を何度も訪れていた。Mさんは昔の京都帝大卒の論客で、考古学・歴史にも造詣が深く、また、いろいろな物を収集している趣味の多い人だった。私は親子ほども歳が違ったが、相性がよかつたのか、訪れる毎回喜んでくれた。私が聞き上手？だったのか、Mさんの恰好な話し相手のようだった。

その日も、町会の用件が済むと、何時ものように、よもやま話に移り、たまたま、泥めんこについての詳しい説明が始まった。

「泥めんこは、江戸時代の中期、享保年間、一七一六年から三六年に登場し、子供のおもちゃとして一文駄菓子屋で売っていました。今のもんこは紙ですが、そのころは粘土の素焼きでした。作られた場所は、おもに江戸浅草の今戸が中心だったと言われています。大きさは、直径にして二、三センチぐらい、厚さは一センチそこそこの小さな物です。この片面だけに、ひょっこ・おかめ・七福神・鬼・家紋・役者絵などや、金・吉・富といった縁起のよい文字から、ひらがな・力士のじ�名などを彫った円盤形のものです。ほかに動物・怪物・野菜・魚類などの姿を型抜きしたものや、人形・道具・碁石・さいころ・泥玉などの立体的な物まであり、数え上げたら、きりがありません」

Mさんは蘊蓄を傾けて、滔々と話した。

「そつだ、私が集めたのを、一部見せてあげよう。ちょっと待っていてください」

蔵に行つたのである。しばらくたってから、箱を一つ持つて戻つて來た。

「これですよ」

大事そうに蓋を開けると、なかには泥めんこが一個ずつ入るように仕切りがあり、綿を敷いた上に、二、三十

ここまで話が進んだ時、来客があり、私はこれを潮時にMさん宅を退出した。

帰り道、

(私にも集められそうだ)

人知れず値打ち物を掘り当てようという思いが、むらむらと涌き上がってきた。

その後、あの貝塚に行けば、何かあるだろうという單純な考へで、日曜日ごとに子供を連れて通うことになり、いつしか、『貝塚に行こう』は、私たち親子の合い言葉になつた。

初めのうちは、探す要領も分からず、ただ、なんとか下を見て歩き回るだけで、何も見付からなかつたので、そのうち子供たちは飽き出した。

「つまんないや、田圃たけいの方に行つてザリガニを取ろうよ」

「そのほうが、よっぽどいいや、パパも行こうよ」

と、いう結果になることも、しばしばあつた。

その道の専門家たちが入れ代わり立ち代わり探したであつてから、もう無いのかも知れない。Mさんも町会の人々に公開したのは、もう、そんなにいい物は無いと判断したからではないかななどと私は思った。しかし、(いや、まだあるはずだ、探す範囲を広げることだ。)

と思ひ直して、人跡未踏?とまではいかなくても、余

個の鬼の面ばかりが整然と並んでいた。種類別に分類し整理したのである。しかも、ほとんど傷が無いのである。

「へえー、見事なものですねえ。よく、こんなに集められましたね」

私は感心して、

「こういう泥めんこは、どこを探せばあるんですか」

ふたたびMさんの説明がはじまつた。

「煙ですよ。煙の畝などに散在しています。雨あがりの台地の煙を散歩すると、雨に洗われた泥めんこを見付けることが出来ます。一見すると植木鉢の破片かと思つてしまいがちですがね」

「へえー、なんで泥めんこが煙にあるんですか」

「いい質問です。これには、いろんな説があります。

江戸から周辺地域に、舟で大量に運び出された下肥に混ざつて煙にまかれ、泥めんこだけが最後に残つたという下肥混入説」と、豊作を祈つて農民が煙にばらまいたとする「祭祀説」が代表的です。が、作物の成長のうえで、邪魔になる大量の泥めんこの存在には首をかしげますので、私は「下肥混入説」をとります。分布地域は今後の調査によつては、更に広がつていくと思いますが、今のところ、千葉県では、おもに木更津市から千葉・習志野・船橋・市川から野田市に至る北西部にわたつています」

り探索されてない所に行くこととした。果たせるかな、回を重ねるうちに追い追い泥めんこが出てきた。

「おい、見付けたぞ」

「どれどれ、僕にも見せて、何だろう?」

「待てよ、泥を取るから」

「早くしなよ、あつ鶴だ」

「僕も欲しいなあ、あつ、見付けた、これ何だろう

「どーれ、鰐たいだよ、鰐の頭の方、半分だ。しつぽの方

が欠けてるな」

かくして、子供の方が興味を募らせ、私は誘われる立場になつた。

収穫は、魚・も・百・松・福などの字と、絵では釣り鐘・大黒や亀・蝙蝠・馬・蜘蛛などの動物で、字と絵の組合せでは、も組と纏で江戸の町火消しを表わしているものや、十二支の一つ、子の字と鼠の絵などいろいろ、きれいな珍らしい石も一緒に持ち帰つた。

さて、今までに収集した石や、泥めんこを一通り見直したところ、みんなガラクタなのかどうか疑問が起つり、とにかく、全部を持参して、Mさんに鑑定をお願いした。「藤崎貝塚からも縄文土器が発見されており、古代の住居跡もあるはずですが、最近の宅地造成で見ることが出来なくなつたのは本当に惜しいことです」

と言いながら、私の持参品をさすがにものなれた素

早い手つきで分類した。とくに数個の石と三つの泥めんこをひざの前に置いたので、私はあれが値打ちものなんだなと思った。Mさんは、その数個の石を手にして、

「これは一万年ほど前に矢尻にするために選んだ瑪瑙の剝片ですね。それから、このオレンジ色のは勾玉にしようとした原石らしい。この二種類の石は、ほかの石と区別して保存した方がいいですよ」と教えてくれた。更に残っている三つの泥めんこについて

「二つは、だれが見ても男性のシンボルそのものです。これが値打ちものです。どこで拾いましたか？私も泥めんこは完全なの三百個も持っていますが、こういうものは、話では聞いていましたが、見るのは初めてです。

一つずつ小箱に入れ、綿に包んで傷がつかないように保存した方がいいですよ」と、言われたのが男女和合の像だった。

翌日、Mさんから、もう一回よく見せて欲しい、と電話があったので、早速、小箱に入れてご覧に入れた。

Mさんは、しげしげと見ながら私に、

「あんたは探すのが上手だね。こんどは、女性のシンボルを見付けてくださいよ」と言った。

孤

独



鍋屋次郎

亡き父から

「お前、あの家に嫁ぐのは苦労するぞ、それでもいいのか？」

と念を押されたことがあった。また、同じ職場の大先輩で、当時女子社員のお母さんの存在だった女性からも

「あんた、ほんとうに小柳公平さんでいいの？」

といわれたことがあった。しかし純子は聞く耳持つていなかつた。

という思いが、結婚以来の純子の日々を回想していた。

三十年前、純子は横浜市内の老舗デパートに勤め、宝石売り場で充実した毎日を過ごしていた。そして同じデパートの外商部花形社員の小柳公平と結婚した。

今思うと、純子は「恋」を恋した若かった自分をはっきりと見ることが出来る。その時は舞い上がっていて、

社会（内規）

☆ 同人参加へのお誘い
私達はひろく同志の参加を歓迎しております。

「まんじ」は作品発表のための共有の「ひろば」として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会員へのお誘い
本誌の經營を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申出でがあり、誌友として維持会員になっていたいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内などを差し上げ交流を行なつております。

* 同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座 〇〇二七〇一〇一六四五九二
加入者名 まんじ

雨の夜、遠くの船の灯かりがかすかに見えるだけの湘南の海は、静かな中にいかにも侘しさを感じさせている。渚に面して建っているこのホテルに、一時間ほど前にチエックインした小柳純子は、部屋の窓のカーテンを開けて海を見つづけている。

「私の三十年の結婚生活って、一体何だったのだろう。自分の歩いてきた道はどこで間違っていたのだろうか。どうしてこうなったんだろう」

という思いが、結婚以来の純子の日々を回想していた。

公平の実家は横浜から一時間ほど南へ行った三浦で広い農地を持つ農家だった。そして横浜市内の鎌倉街道沿いに公平の祖父が買い占めた土地があり、昔は畠であった今は立派な住宅地となっていて、そこからは多額の家賃と地代の収入があった。

新婚旅行から帰った翌朝、公平の厚い胸に手を置いた

まま旅行に続く昨夜の甘美な余韻に浸って眠っていた時、突然、母屋の雨戸が開けられた。まだ外は薄暗い。公平の母シメが

「嫁が何時まで寝ているのか」

といわんばかりの大きな音を立てて、長い廊下の雨戸を開けている。驚いた純子は起き上がって公平の顔を見たが、公平は何も言わず、掛け布団を顔の上に引き上げたまま知らないふりをしている。

仕方がないので慌てて起きて、既に台所で湯を沸かしているシメの所に行き

「おはようございます」

と挨拶した。その時、シメの返事はただ一言

「遊びに来たんじゃないんだ」

だった。

翌日から、純子は慣れない農作業をシメの後について一生懸命に手伝った。

純子の描いていた甘い新婚生活は、現実には姑に隸属するかのような農家の嫁として過ぎていった。長男の洋一が生まれたが純子の生活はシメの支配下にあり、デパート勤務時代の可憐な美しさは面影も残さず、日焼けした顔と、農作業で荒れた手足と、疲れ切った体は、毎晩遅く帰ってくる公平が床につくまで起きているのが精一杯

と聞いても
「可愛いさ」

と言うだけで絶対に子供に手を差し伸べなかつた。それはその後の長女、次男の時もそうだった。

洋一が生まれて半年くらい経った時から、公平は時々外泊するようになった。夜遅くなつても電話も架けて来ない。たまりかねて聞いただと

「課長に誘われて徹夜マージャンだ。男の世界で断りきれないこともあることは知っているだろう」

そして、それから二ヶ月後、給料日が過ぎても純子にお金が渡されないのでどうしたのか聞くと

「俺、先月デパートは退職したよ」

啞然とした純子は、嫁いで来てから初めて口論した。公平の父も母も退職したことは知らない。後で分かったことは、職場の三歳年上の女子社員との不倫がばれて退職させられたものだった。

こんな純子の生活を見ている公平は、夜寝てから流す純子の涙を見ても何も言わず、母親のシメに対しても純子を庇う一言もなかった。

家計はシメが握っていた。公平の給料は家計には一切入れていない。公平は純子にささやかな金額を渡すだけでも、残りは全て公平の小遣いになっていた。

だった。

一度だけ、純子は実家の父にこぼした事があった。それは洋一が生まれて三ヶ月が過ぎた時、何の用事があつて実家に戻ったのか忘れたが、余りにも疲れている純子を見た父が、純子と一人だけになった時、そつと

「帰ってきたから帰ってきてもいいぞ」と声をかけてくれた。

「父は全て分かってくれている」と思つた瞬間、涙があふれ声が出なくなつてしまつた。

暫くして涙を拭きながら、純子は

「お父さん、心配かけてごめんなさい。私、頑張るから」といったことを覚えている。

デパートの休日、公平は家にいても洋一をあやそうともしない。勿論、農作業を手伝うわけでもない。純子が

たまりかねて

「可愛くないの?」

の下着一つ買うことは出来なかつた。仕方がないので実家の母にそっと都合をしてもらつた。

その頃シメが突然亡くなつた。死因は心臓麻痺。その葬儀の時、近くの民宿の女将「山根サキ」から恐ろしいことを聞かされた。葬儀のお手伝いにきた近所のおかみさんたちが帰つた後、山根サキは
「あんた、お舅さんの松吉さんより二十歳くらい年下で、松吉さんの腹違いの弟の龍チャンには気をつけなさいよ。公平ちゃんの妹の京子ちゃんが自殺したのは知つていてるでしょ。自殺の原因は、龍チャンに犯されて妊娠したのよ。それも松吉さんとシメさんが畠に行つている留守を狙つて何度も來たらしく。當時高校生の京子ちゃんは誰にもいえなくて、それをいいことに何回も。自殺して何ヶ月か経つてから京子ちゃんの日記が出てきて分かつたんだって。その時、龍チャンは知らぬ存ぜぬで押し通したものだつて」
更に続けて
「そして大人しい松吉さんはそれ以上追求しなかつたんだつて。だけど、それがあつてから、このうちにやつて来るのは今日が初めてじゃないかね」

それを聞いた時、純子は
「この家には家族の団欒が全くない。ただひたすら働い

しかし、純子は公平から渡されるお金がなければ子供め駐車場として貸してある鎌倉街道沿いの土地からの收入で、生活にはゆとりがあった。

小柳家の収入は農業収入に頼らなくても、貸家と月極

て、黙々として食事をし、必要以外のことは互いに一切語らず、干渉しない。この小柳の家は、家族間の愛情という絆が欠落している。自分の思い描いている家庭ではない。平凡でも、せめて家族だけは暖かい絆で結ばれた家庭を作らなければ」

と思っていた。

葬儀が済んで一段落した頃、純子は松吉に仏間に呼ばれた。何事かと行ってみると、「純子、これが小柳家の全財産だ。権利書と預金通帳がここにある。俺の実印も。これからシメに替わってお前が持つていてくれ。公平にはお前が預かっていることは言わなくてよい」

その日から小柳家の全財産の管理は純子の肩に掛かってきた。鎌倉街道沿いの土地から上がってくる家賃と駐車場収入は純子が想像していたより多額だった。一家の生活のために公平の給料などまったく當てにしなくても良かった。

公平は大学時代の友人が大手の建設会社の横浜支店に転勤してきた関係で、その建設会社の下請けの会社に勤めていた。

相変わらず夜は遅く、給料は全て小遣いで、場合によ

「貴方は家庭をどう思っているの？」

と問いただしてみた。その結果は、公平には暖かい団欒のある家庭の必要性は理解できず、純子との話合いが全く噛み合っていない寂しさだけが残っていた。

純子なりに今まで感じていたことではあるが、公平との短いその会話を通して、公平が子供の頃から松吉やシメに遊んでもらったこともなく、表現される親子の情愛の交流もなかったことが想像できた。

現実的な日々の生活の中で、公平は純子のことにも、子供のことも一切我関せずの状態で、一緒に遊ぶこともなく、学校のことを聞くでもなく、純子には全く理解することの出来ない父親だった。

子供たちも幼い頃からそのような生活のため、父親に対しては必要最少限の言葉を掛けるのみで、親子の交わりを求めようとしたかった。

近隣は、どこにもいるような詐索好きの主婦ばかりで、純子は表面的な付き合いに限定していた。

どうしようもない寂しさを紛らすため、三人の子供たちがそれぞれ小学校や幼稚園に通うようになつた頃、午前中だけ三浦市の郊外に出来た老人ホームにパートに出掛けた。

れば純子から何がしかをせびって行った。

松吉は、シメが亡くなつてから農作業の規模を少なくしていたが、松吉の死後、純子は農業から一切手を引いた。と言うよりも実際に出来なかつた。

幸い、家の近くの畑は、民宿の「山根サキ」が夏場だけ来客用の駐車場に貸して欲しいというので整地して貸すこととした。

その頃の純子は、三人の子育てをしながら、鎌倉街道沿いの貸家の家賃と駐車場の収入で生活する平穏な日々ではあつたが、夫の公平の、家庭で家族らしい会話もなく、そして人並みの一家團欒を作ろうとする姿勢に精神的に参っていた。書店に「食卓のない家」と言うようなタイトルの本が並んでいるのを見つけたときに、「我が家にも團欒の食卓がない」と感じて涙が止まらないこともあつた。

ある日、公平に

それから十年間、傍目には平穏な日々が続いていた。しかし、公平は家の事は何一つ手を出さずことがなく、給料の全てを小遣いとしていた。そして本来松吉の後を継いでやらなければならないお寺や神社の付き合いも、全く出ようとしないので全て純子が出て行つた。それも家格に応じた付き合いがあつて何かと大変だった。

鎌倉街道沿いの駐車場として貸してある土地は、周辺が住宅地として開発され、マンション建設に好立地の場所に変化していた。

大手建設会社の横浜支店に勤務している、公平の大学時代の友人岩崎がこの土地に目をつけ、公平にマンションを建設するよう接近してきていた。

マンションを建設してみると、収入面では駐車場に貸しているよりも大幅に好転した。

そして、純子はそのマンションの一階で洋品店をはじめた。

公平に潤沢な収入があることを知った岩崎とその取り巻きは、公平を「お施主さん」としてチヤホヤし、毎晩のように花札、マージャン、またはナイトクラブと遊び歩き、公平は彼等の遊びの金蔓になつていた。

長男の洋一が高校二年の時、公平は突然純子に参百万円の金を要求した。月給もボーナスも全て自分の小遣いにしていて更にお金を要求する公平に

「何に使うの？」
と問いただすと、

「博打に負けた。殺されるかもしれない。もうしないから」
と言うので、純子は仕方なくお金を渡した。

しかし、その日から一週間、公平は帰って来なかつた。

会社に電話すると
「忙しくて帰れない」

と言う。

一週間後に帰ってきた公平は、アイロンのかかったハンカチを持っていた。純子はピンと来て聞いたが、何も言わずに寝てしまつて、一切無言。翌朝、何か自分の物を鞄につめた後、朝食もしないで出て行き、その後も帰つてこなかつた。翌日昼間、会社に電話すると会社にはいた。

中学生になつて多感な美也子は、そんな父と母を見ていて

「あんなお父さんなんて要らない。あんなのお父さんじゃない」

筋などへ形式的な挨拶をするだけで、後は全て管理を純子に任せていた。

純子は、公平がどんな女と、どこのマンションで暮らしているのか全く知らなかつた。純子は、自分で探すことのミジメさが耐えられなかつた。公平に聞いても答えはなかつた。しかいつまでもこのまま放置することは出来ないと思い、どうすればよいかを権藤にざっくばらんに相談した。

権藤は大体のことは察知していて、純子が何も手を打つていなことをそれとなく注意すると共に、純子の提案の、探偵社を使って公平と女との住まいと、女の正体を調べることとした。

権藤の知り合いの弁護士事務所に探偵社の紹介を依頼して、二週間後には全てが判明した。

マンションは、公平が純子から持つていった参百万円で借りたもので、女は、岩崎と一緒にちょくちょく行つていた横浜のクラブにいた東南アジア系の女だつた。

この頃、公平が家に戻るのは二ヶ月に一度の割合になつていて、帰つてきた時、調査の結果をもとにしても詰問すると、黙つてそのまま出て行つてしまつた。

公平が出て行つた後、女としての純子を放置して、家庭も子供も顧みず、自分ばかり放蕩の限りを尽くしてい

と泣きながら純子に訴えた。

それから二年、公平は一ヶ月に二、三回自宅に戻つてくるのみだつた。

その間、お寺や神社の付き合いはすべて純子がやつてゐた。親戚の冠婚葬祭だけは純子の連絡により公平が帰つてきて、純子と二人、傍目には「普通の夫婦」として出席していた。

公平が常に家にいなることは、いつの間にか親戚や近隣の人達の知るところとなり、純子は周囲の複雑な視線を感じていた。

その頃、取引銀行が順子の所へ日参して、鎌倉街道沿いの、もう片方の貸家が建つてゐる約千坪にマンションの建設を勧めていた。

それを公平から聞いた岩崎は、当然自分の勤務する建設会社で建設するものと決め込んで公平に早期実行を迫つていた。

純子が顧問税理士の権藤のアドバイスを受けて、経営上の安全を確認して承諾し、銀行から十億円を借りて建設した。

最初に建設したマンションも、今度のマンションも、公平は地鎮祭と竣工式だけ施主としてやつて来て、銀行

しかし、純子は、周囲の目が
「あの人は小柳家の財産からの豊かな収入を手放せないから、あまま居座つてゐるんだ」
と見られていることは知らなかつた。

それから五年が経つた。鎌倉街道沿いのマンションは全て公平の名義のため、公平の年間所得は数千万円となり、地域での高額所得者となつてゐた。

相変わらず金遣いは荒く、自分の給料とボーナスでは足りず、純子の所から一年に数回百万円単位で持ち出して行く。純子が断ろうとすれば、「俺の金を俺が使うのに何が悪い。お前なんかぶつ殺すぞ」と喚き出し手がつけられなくなつてゐた。

ある日、女の身内と名乗る女性から純子の所に電話が

あり、

「公平と同棲している女が妊娠した。間違いなく公平の子だ。今後のこと話し合いたい。お腹の子はもう三ヶ月にはなっている」

という。受話器から伝わってるのは片言の日本語だ。

公平に電話すると

「本當だ。困ったことになった」

と他人事のように言う。純子はこの公平の言葉の無神経さに腹が立つた。というよりも呆れて言葉もないといったほうが適切かもしない。公平はその日も帰つてこなかつた。

その夜、既に大学を終えてサラリーマンになつてゐる洋一が帰宅するのを待つて全てを話した。しかし、洋一は

「お袋が親父さんことを今までほつて置いて、今更何だよ。夫婦の問題を俺に押し付けるなよ」

「お袋は、親父さんに家に居られるよりも、金と時間が自由になる今のはうを選んでいたのではないか?」

と純子の想像もしていかない返事が返ってきた。

純子にはかつて経験したことのない大きなショックだった。子供だけは自分の理解者であり絶対的な味方とばかり思っていたのだが、子供は自分の味方ではなかつた。

今では、公平が帰つてきた時、純子は自室に鍵をかけて寝ることとしている。

しかし、公平は帰つても、「一家の主」としての居場所はなく、公平も落ち着かない様子だ。

純子は二年前のあの時の洋一の言葉が頭から離れない。そして心に深く重く突き刺さつていて、二度と洋一に相談する勇気がなくなつていて、

娘の美也子は、「こんな家に居たくないから、フランス料理を勉強する」と言って、大学を二年で中退、先輩を頼つてパリに行つてしまつてゐる。たまに

「生きているから大丈夫」程度の電話があるだけ。次男の勝之は高校を出て大手の情報通信会社に勤務、会社の独身寮に入り、夏と正月くらいしか帰つてこない。

翌年、洋一は勤務先で知り合つた道代と結婚して、鎌倉街道沿いのマンションの空室に新居を構えた。

夫婦とも、純子と公平のことには一切タッチしないし、また、純子との会話の時にも一切触れないようにしている。

ある日、純子が嫁の道代を連れて横浜のデパートに買物に行つた帰り、純子の方から言い出して話が公平のこ

そして子供だと思っていた我が子が、事態を冷静に見つめていた。そして更に、自分がこんなに苦労しているのに、自分が好きでこうしているという。何のために今まで自分は孤独に耐えてやつてきたのか。朝まで泣き明かした。

公平の子を妊娠した問題で、その身内と名乗る女と公平が純子の経営する洋品店にやつてきた。女は

「子供を産んで、財産分けの資格を持つか。それとも一千万円で子供を堕すか、どちらをとるか」と凄んだ。背後に組織がありそうな気配させ感じた。

数日後、純子が銀行小切手で二千万円を女に渡し、子供を堕すことを約束、純子が書いた紙切れに受け取りのサインをして帰つていった。

それから二年、公平は懲りもせざ相変わらずその女とマンションにいる。三ヶ月に一度くらい帰宅して、翌朝出て行く。純子には、公平が何のために帰つてくるのか見当もつかないが、多分

「全ては俺の財産だ」

ということを示すゼスチュアではないかと思つてゐる。公平との夫婦関係は、公平が参百万円を持ち出した時から一度もない。

二ヶ月前のある日、純子の洋品店に、デパートに勤めていた頃の大の仲良しだった高木房江がやつて來た。房江は、ここが純子の店とは知らずに入つて來た。

お互いしばし見つめあって
「房江じゃない?」
「お純?!」
と言つて出会いがあつて、房江はその日遅くまで話し込んでいた。

二週間後、横浜のホテルで房江と食事をした時に、房江に純子の一部始終を話したところ

「お純、まだ人生三十年あるよ。子供は所詮他人の始まりよ。結婚してしまえば親のことどころではないのよ。早く子離れしなさい。今、お純は女としてまだまだ燃えたいと言つたでしょ。今まで燃えることを我慢してはいたつて。今からでも大丈夫よ、遅くない。これからは自分の納得できる人生を歩きなさい。さつさと離婚しちゃいいな

さいよ」

と離婚を勧めた。

純子は、家族はあつても自分が「孤独」である寂しさに耐えられなくなってきた。この「孤独」をもたらす桿から抜け出るのは離婚しかないと考えるようになっていた。

純子は税理士の権藤に電話して、人目につかないように東京の一級ホテルのロビーで待ち合わせした。

「権藤さん、貴方が推薦できる弁護士を紹介して頂戴。私、夫と別れようと思うの」

と切り出した。

時計の針は午前二時を指している。

弁護士事務所を訪ねて、離婚という新しい人生を歩み始める決意を決意したはずの純子だが、暗い夜の海に、「誰もいないただ一人きりの自分」を見つめていた。

完

演劇台本 箱根畠宿

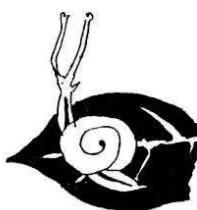


相原精次

舞台

寄木細工師、藤兵衛の細工場。上手側には、奥の部屋に通じる戸があり、舞台中央は一段高くなつた細工場。下手寄りが土間となつていて、外とを隔てる入り口がある。外には、畠仕事用のかごが置かれ、鍬などが壁に立てかけてある。

幕が開く。
舞台中央。細工場で藤兵衛、黙々と仕事をしている。妻のお兼は木くずの整理をし、娘お千代は父親の造った細工物を手にして、眺めている。



(140)

(141)

千代 駒形神社の裏にあるヤマボウシの木の枝に、モズが巣を食つてた。

兼

千代

ずいぶん高エところに作つてたよ。

兼

千代

ふーん。じゃ、今年の冬は珍しく雪が多いかもしねエな。

兼

千代

どうして？

兼

千代

(千代の顔を見て) おっ母の育つた湖尻の村じや、モズが高いところに巣を作るとよ、雪が多い、なんて言つたもんだ。

千代

ふーん。それでかねエ。木の葉も、早く散つて行くみてエだもんな。冬が早く来るのかもしねエなア。

兼

千代

そういえば、そうかな。まごまごしてらんねエな。冬の支度もいそがねエと。一間一

ソリヤ

千代

そりやうと、お父よ、節々の痛みはどうかね。

藤兵衛

千代

(ボソボソと) 今、そんなことも、言つてらんねエ。仕事が、間に合わなかつたら大変だ。

兼

千代

庄蔵が細工仕事も手伝つてくれりや楽なんだけどな。一間一

千代

なア、おっ母よ。この前、兄ちゃんが言つてたけど、本陣に、お豊さんが行くのおもしろくねエんだつて。

兼

千代

何で？

して、滝を造つているって。

兼

千代

そうさ、この畠宿のモンは村あげでお迎えする気でいなきやな。この村ん中で嫁になりや、おめエも、こんな時はその家から、手伝いにやらされるんだぞ。

兼

千代

おら、この村でなんか、嫁にはならねエよ。

兼

千代

それはどうかなア、縁のもんだから。そろそろおめエを嫁に、ツテ声、聞かねエでもねエしな。

千代

千代

やだ、おつ母。やだってことはねエぞ。そんな話が本物になんのも、もうすぐだろうよ。早エモンだよな。

千代

千代

あゝ、やだやだ。嫁になんか行きたくねエ。

兼

千代

そういういかねエぞ。おめエにいつまでもうちにいらしてみろ、お豊さんも氣づまりでなんねエだろう。

千代 そんなもんかな。……お母も、お父も、おれがうちにいねエ方がいいか？

兼 誰だって、娘を憎くつて出したがる者はいねエ。けどなア、いつまでも家に居つかれても、これは困るわ。なア、お父。

藤兵衛

…

そのとき、下手入り口のところに、一人の男が入つてくる。

甚吉

藤兵衛さん。仕事は扱いっとるかね。

千代 兄ちゃん、心配してんだよ。本陣で働くの。お豊さんにあんまりいいことはねエはずだつて。本陣に出入りする宿役人ろくなもんはいねエ、ッて。おつ母も、昔は行つてたことあるんだろ？ 兄ちゃんがしんペエするようなこと、少しはあるのか？

兼 (ちらつと藤兵衛を見て) 千代、あんまり子供がそんなこと気にするもんじゃねエ。

千代

不満

そうにする。

兼

千代

そりやな、宿役人の中にも、いろんな人がいるからな、少しばは我慢しなけりゃなんねエこともあるさ。

千代

でもな、そんな不満は口に出しちゃだめだぞ。そんなこと噂にしてみろ、どんな風に、お役人さんの耳に入るとかわかりやしねエ。いいか、おまえも、もう少し大人になりやわかる。

千代

このごろ、お豊さん、本陣の手伝い仕事が多すぎるんじゃねエの？

千代 今、すぐ忙しいんだよ。今度はな、松平肥前守様のご一行が、関越えなさるんだ。そん時、小田原だけじゃ間に合わず、この宿にも、御家中の方々が大勢お泊まりになるんでな、粗相があっちゃなんねつて、小田原の大久保様からおめエ、きついお達しだそだ。名主さんも近頃は本陣の庭の手入れから、大忙しだ。

千代

名主さんのところじゃ、お庭に飛竜の滝をまね

三人、一齊に下手の入り口を見る。

兼

千代

おや、甚吉さん。

兼

千代

甚吉土間に入り、細工場の隅に腰をおろす。

兼

千代

今、お茶でも煎れるから。(立ち上がる)

甚吉 (制して) あゝ、いらねエ、いらねエ。すぐに行かなきやなんねエから。これで畠仕事もおおかたしめエだからいいけど、ほんと毎日、うちの仕事どころじやねエよ。

兼

千代

でも、お陰さんでき、橋も、ずいぶん立派になつたじゃねエか。

甚吉

千代

そうよ。今度は、石でしつかり造つてあるから、孫子の代までこわれたりはしねエベ。なにしろ、松平肥前守様のご家中もお泊まりなさる宿場の、入り口の橋だからな。

兼

千代

まだ何日もかかるのかね。

甚吉 いいや。あと一日二日で出来上がるだ。それにしても、忙しかつた。宿場で生きる者にとつちや、村中の普請に文句も言えねエけどな。

藤兵衛

…

兼 どうにか目鼻がついたみてエだ。まさか、間にあわねエなんてことになつたら、てえ変なことになるもんな。

甚吉 そりやそうだ。でも、藤兵衛さんも偉えもんだ。

畠宿の細工モノの誇りを一人でしょっちまつてゐるんだからな。

甚吉 ほんとによ、ありがてエことだよ。こんな細工モンもよ、じかにお武家さんの目に止まる時代になつたかと思うとよ。お父の苦勞のし甲斐もあるつちゅうもんだ。

甚吉 藤兵衛さんの物つて、名ざしだったそだだからな。

兼 （嬉しそうに）なんでも、以前、小田原の本陣にお泊まりになつたとき細工物を目にされて気に入つたそうでな。細工師藤兵衛の名を覚えておられたんだそううな。

甚吉 そうかね。えれエもんだな。松平肥前守様のご家中が、わざわざこの畠宿に分宿されるのも、ここのが細工を藤兵衛さんからじかにもらつて行きてエからだとよ。

兼 本当に、もつたいねエよ。たしか副島源三右衛門とかいいなさつただよ。なア、そうだつたろう。お父よ。

藤兵衛 あゝ、そうだ。それに、御家老の鍋島何とか、

ちゅう方もだそだ。

甚吉 御家老がね。てエへんなことだよ。（細工を手にして）藤兵衛さんは、やっぱり弟子はどらねエのか？

藤兵衛 ……

甚吉 それなんだよ、せがれの庄蔵がもうちょっとと手先の仕事に向いていりやなア。あれでもちいせエ頃は、ちつたア細工場へ来て、まねしたこともあったのに、いつの頃からかなア、ハイツこの仕事には見向きもしねエようになつちまつてなア。

甚吉 そりや、炭焼きの方が、金になるからなア。嫁とつてもう半年になるかな。庄蔵さんも張りきつてらんだベエ。弟子とりたきや、いつでも世話をすると、らんからそろそろ考えてもいいんじゃねエか。

藤兵衛 （むつとして）うるせエ。

兼 いつもあれだ。

藤兵衛 昔からのモンだ。よそ者には継がせねエ。

甚吉 よんどころなけりや、お千代坊に、婿取らせりやいいんだ。なア、お千代坊よ。

千代 やだア、おじさん。

甚吉 やだア、ってことはねエぞ。

兼 千代は、その点まだ子供でだめだ。そのうち、甚吉さん、よろしく頼むよ。

甚吉 あゝ、心がけとこう。（千代の方を見て）お千

代坊の器量にめつたな男はおつけらんねエからなア。

（恥ずかしそうにする）

甚吉 それにしても、近頃、またやりにくくなつたなア。山が狭くなつちまつてよ。このめエな、関所の近くの三島村でな、御要害の山に行って木を切つたつてとがめられた男がよ、山に火をつけたとかで、大騒動があつたんだとよ。

兼 ヘーッ、そうかね。

甚吉 大きな声じや言えねエが、火をつけたくなん気

持ちもわかんねエじゃねエよ。近頃じゃ枯れ枝一本拾うのもこわごわだよ。

兼 そうだらうなあ。近頃二子山だつて、弁天山だつて、ちょっと奥行きや、もう御要害なんだわ。

甚吉 そうよ。見回り役人に見つかつてみろ、有無を言わさず、関所破りにされちまわア。藤兵衛さんも、木を使う仕事だけに、てエへんだわな。

藤兵衛 わけエ頃は、御要害の山も、これといつて、俺たち村のモンにはうるさくなかった。（思い出すように）木の枝一本拾うのも、お関所へ届けるようになつたのはいつ頃からだつたかなア。

甚吉 確か、三年ほどめエに、ほれ、伊豆のどつか浦に異人の船が流れ着いたつて騒動があつて、それ以来じやねエか。様子がおかしくなつたのは。ついぶん見回りもきびしいんだつてね、近頃は。

甚吉 炭焼きやっている庄蔵さんも、苦勞だベエな。それに、細工のための木だつて、なかなかだつて言うじやねエか。たまには、庄蔵さんが、お父のために木を切つてきてくれることもあるんだろう？

兼 いいや、それくらいの気づかいがありやいいんだけどよ、見向きもしなくなつたら、まるつきりだ。

甚吉 ヘーッ、そうかい（ちよつと探るようにする）。

兼 庄蔵がなんか言つてたかね？

甚吉 いやね（言いよどむ）、このめエ、飛竜の滝の方から来る、庄蔵さんに会つたんだよ。

兼 飛竜の滝？ 芦の湯へ抜けるあの道でかい？

甚吉 そうだ。

兼 そりやア変だね。いつもは弁天山の方だ。あつちへはいかねエはずだよ。

甚吉 朴の木切つて担いでいたからよ、炭焼き用とも思えねエから、お父の頼まれモノか？ つて聞いたら「いやア」なんて言つてたけんどうよ、たまには藤兵衛さんのために、材料集めもやってんだベエ、と思ったんだけど。

兼 いいや、そんなことは近頃一度だつてなかつたよ。なア、父ちゃん。

甚吉 ふん、そうか。（急にたちあがつて）あれあれ、つい長居しちまつた。俺が遅エで、みんな怒つてベエ。

どうも、お邪魔さん。

何もかまわねエですよ。

いやいや。（そそくさと出て行く）

兼
甚吉

お兼、片づけ物をつづける。お千代もそれを手伝い始める。

お母、おれの婿取りの話なんか、もうこれからしゃだめだよ。

でも、おめエ、場合によっちゃ、

千代 いいよ、おれ、小田原へでも奉公に行くから。

兼 千代 どうして。急に……おめエを奉公になんかやりやしねエよ。それに、おめエみてエなもんに、奉公が勤まるもんか。

千代 大丈夫だよ。それより、兄ちゃんやお豊さんとこれからもうまくやってよね。

兼 千代 また、急に、おめエ、大人びた口きくじやねエか。

千代 兄ちゃんだって、いろいろ考えてると思うよ。何を？

兼 千代 兄ちゃんね、この前、言つてたよ。

兼 千代 なんて？

千代 ……ううん、なんでもねエ。（片づけに気を取られる風を示す）

奥から千代出てくる。

藤兵衛 いたいどうしたっていんだ。

豊 藤兵衛 お父さん、どうしたらいいんだろう。（泣く）

豊 藤兵衛 だから、どうしたというんだ。

千代 お父、お茶が冷める：（豊をみて驚く）お姉さん、どうしたのよ。

豊 藤兵衛 うちの、庄蔵さんが……（つまる）

豊 藤兵衛 庄蔵が？……庄蔵が、どうしたんだ。

豊 庄蔵さんが、関所の、御要害の山で、木を切たらしい。

藤兵衛 誰が言った？どこで聞いた？

豊 御本陣で。掃除仕事をしていたら、お吉さんが知らせてくれた。御本陣に詰めていたお役人さんが、そう言ってたって。今日も山で見かけたって言う人までいて、

藤兵衛 お役人さんが言つてた、ってか。（すわりこんで）全く、あの馬鹿、何てことをするんだ。

豊 どうしたらいいんだろう。

藤兵衛 （頭を抱え込んで）もうおしめエだ。

豊 （泣きながら）どうなるんでしょう？

藤兵衛 わしらまで、世間様へ顔向けできなくなっちまう。

兼 あれは、お父の血、つがねエで、ブキッヂョだからな。じゃ、お母は、ちょっと畠へ行って来るからな、あとでお父にお茶煎れてやってくれよ。

千代 わかったよ。

お兼下手出口に行き、外にあつた鍬を持って、下手へ消える。千代も、しばらくして上手側の奥へ消える。

ライト、藤兵衛だけに当たる。藤兵衛、黙々と仕事を続ける。

ライト、再び明るくなる。

千代 （奥から）お父、奥に茶がはいったよ。

藤兵衛 あゝ、仕事のキリをみて、すぐいくからな。

藤兵衛、しばらくたってから手を休める。腰を伸ばしつつ、ゆっくり立ち上がる。そこへ下手から嫁のお豊が元気なく入ってくる。

藤兵衛（一瞬びっくりして）なんだ。お豊じゃねエか、なんだって、お化けみてエに突つ立つてんだ。びっくりするじゃねエか。

豊 藤兵衛 （なお黙つて、力無く上がつてくる）

豊 藤兵衛 どうした？なんかあったのか？

（そこにひざまづき、泣き始める）

千代 それで、今、兄ちゃんはどうしているの？

豊 ……

千代 ねエ、お姉さん、本当にそうなの？ちゃんと確認したの？

豊 ……

千代 そんなはずないよ。なんかの間違いだよ。兄ちゃんは、そんなことしねエよ。

豊 確かに山で人影をみたんだって。今、お役人さんが山へ確認に行つているらしい。実際に人がいたら、すぐその場で括つて来るだろう、ッて。

千代 それじゃ、まだ、本当は誰なのかわかつてないんでしよう？兄ちゃんのはず、ないよ。

藤兵衛 前からしんペエしてたんだ。こんなこともありやしねエかと思っていたんだ。

千代 お姉さん、お役人さんは、どうして兄ちゃんだけ言つて言ったの？

豊 御要害でわざわざ木を切るのは、炭焼きに決まつているって。炭焼きなら、庄蔵に違いねえ、って言つたって。

千代 お吉さんがそう教えてくれたの？

豊 （頷く）

千代 そんな馬鹿なことつてある。炭焼きしているのは、兄ちゃんだけじゃないよ。千鳥橋の源治郎さんだ

つて、須雲の武八さんだつて、炭焼きしてるじゃないか。それに、炭焼きばかりじゃない、山の木をほしがつてゐるのは。（お豊に寄つていって）どうして兄ちやんだつて、決めてかかつちゃうの？

豊 藤兵衛

さつき甚吉が来て、変な話してたな。

豊 甚吉さんが？ 変な話？

藤兵衛 帰り際によ、庄蔵が、近頃、必要以上に木を切つてゐるみてエなことをよ。俺は、あの話を聞いて、いやな気がしたんだよ。

千代 あの話と、これは関係ないよ。

豊 お父さん、やっぱりなんかあつたんでしょうか。

藤兵衛 お豊。きっと、庄蔵は大分前から、お役人さんに目でもつけられていたんじゃねエかと思うよ。豊、

さつき甚吉が来て、そんなようなことを言つていたんだ。村じや、もう、このことがある前から、庄蔵の噂していたにちげエねエ。しらねエでいたのは、うちのモンだけだつたんだ。

豊 （また泣く）

千代 （確信を持つて）お父、それは違う。お父のその話は全く違う。おらは知つてゐるんだ。兄ちゃんは、そんなつもりで木を切つっていたんじゃねエ。お父の言つてることは全く勘違いしている。（さらに何か言おうとするが口をつぐむ）

場。お豊、びっくりして、庄蔵のところへ走り寄る。

豊 あんた。

千代も立ち上がる。庄蔵、家中を見回して、みんなの様子がおかしいのに驚いた様子。

どうしたんだ？ みんなして。

あんた、変わつたことはないんだね。

なんのことだ？ 変わつたことって。

（言い淀んで）ううん、なんでもない。

豊 変だなア。お千代もお父も変な顔をして。豊、

庄蔵 何か変だなア。どうかしたのか。（キッとにらんで）豊！ なんか本陣でいやなことでもあったのか？

豊 ううん、あんたさえなんでもなきや、それでいいんだ。

庄蔵 何がいいんだ。いいもんか。

千代 兄ちゃん、本陣で、兄ちゃんが……

（制して）お千代ちゃん。

豊 千代 だめだよ、話さなきやわかんないよ。兄ちゃんも知つた方がいいんだ。

庄蔵 何だよ。

千代 本陣でね、兄ちゃんが、要害の山で木を切つた

つて噂しているんだって。

庄蔵 何だつて！ この俺が？ 誰だ、そんなこと言つたやつは。

千代 お役人さんがそう言つてたって。

庄蔵 お役人さんが？……いつたい何でまた、この俺の名が出たんだろう。……そうか、炭焼きしてりや、木は切るだろうっていうことか。役人のやつめ！

藤兵衛 これ！ 庄蔵、口を慎め。めつたな言い方をしちゃいけねえぞ。

庄蔵 何が怖えエもんか。いや、俺もな、この二三日めエから、二子山の中で、木が何本か切られていたらしい、とかいう噂は聞いていた。関所役人の見回りで気づいたらしい。

藤兵衛 近頃、そんな噂ばかり、よく聞くようになつた。おめエ、近頃、芦の湯へ抜け道へ行つたことはねエか？

庄蔵 行つたことは、あるよ。滝まで。

藤兵衛 何でそんなとこへ、行つたんだ。弁天山とは方角違エじゃねエか？

藤兵衛 それで、お豊、お役人が、今山狩りに行つているっていんだな。

豊 さつきの話じゃ、もう一度話を確認してから、大勢かり出して山狩り始めるつて。

藤兵衛 それじゃ、こうしちゃいられねエ。俺も、見てこよう。（立ちかける）

千代 お父、待つて。あわてないで。ねエ、お姉さん、まだ、兄ちゃんだつて、決まつたわけじゃないんだよね。兄ちゃんだつて、証拠があつてそういうわれているんじゃないよね。

豊 ……

藤兵衛 お役人さんがそう言つてはいるって、言うじゃねエか。

千代 おれはそんなこと信じねエ。

豊 お千代ちゃん、ごめんね。私だってね、庄蔵さんは思つてはいても……（しばらく千代と顔を見合せ

る。毅然として）私もこんなことしていちやいけねエんだよね。お父さん、お父さんは家にいてください。私が小屋へ行つて庄蔵さんを見つけてきますから。

豊が立ち上がつた時、下手入り口のところへ庄蔵が登

豊

お吉さんが教えてくれたことで、私もよくはわ
かんねエ。ただ、御要害の山で木を切った者がいて、お役人さんが山狩りをするんだって。それで「やったのは庄藏にちげエねエ」って、お役人さんが騒いでいたとか。

庄藏 クソ、おもしろくもねエ。何のために俺だって

言われなきゃなんねエんだ。

藤兵衛 人が不審がるようなところへ行きやおめエ、

庄藏 名主も、代官も、何かありや自分の責めを負わ

ねエようにして、誰かに事をおっ被せちまうんだ。身

の安全ばっかり考えやがって。いつもやる手だ。結局、

いつもバカ見るのは百姓だ。この箱根山の百姓はよ、

みんな大昔から山で生きてきたんだ。それを近頃じや、

どんどん山を取り上げちまおうとしてる。実際、枯れ

枝一本拾うのも、ご用の薪を盗むような気がしてよ。

ご用の木、ご用のお水、ご用の魚、須雲川の鱈まで取

り上げられちまつた。百姓には大昔からの入り会いつ

ていうもんがあるはずなんだ。それを何かついていや

「大久保様が……」って言えば、無理が通つちまう。

俺たちの収穫はみんなとりあげた上に、山ちゅう山は、

要害だ、何だつて言つて登ることさえ許さなくなちまつ

て。

豊 ネエ、あんた。お役人は、あんたを捜しに山に行くって、言つてたけど、途中で何にもなかつた

んだね。

庄藏 何にも気づかなかつたな。

豊 山にいないとわかつたら、お役人はさんはこの家にまで踏み込んで来るんじゃないかね。

庄藏 誰が来ようと、何もしてねエんだから、かまやしねエ。

豊 でもあんた、もし、お役人さんが、あんたがやつたと決めちまつていたら、……

千代 じゃ、お調べもなく、ただ兄ちゃんは罪人にされちまうのかい？

藤兵衛 事によっちゃな。小役人はよ、番所に、誰それが犯した不始末、今後気をつけます、って報告しなきやなんねエからな。この氣ぜわしいときに、いちいち

お調べなんかに時間をかけているわけにもいかねエだろう。

庄藏 ちきしおう。どこのどいつだ。俺がやつた、な

んて言いふらしやがッたのは。そんなやつはただじやおかねエ。

豊 あんた、そんな怖えエこと。

庄藏 だってそうだろう。あと、どうすりやいいんだ。

もし、ここへ役人の奴らめ来やがつたら、かまうもんか、ぶつ叩いても身の潔白を証してやるんだ。

三人、しばらく黙り込む。重苦しい空気が流れる。

豊

あんた、もし、もしここにお役人さんが来ても、

今言つたみてエなことはしないでおくれよ。何とか、わかつてもらえるようになきゃ。

千代 兄ちゃん、わかつてもらえるよ。きっとわかつてもらえる。おらが、お役人さんに訴えて、きっとわかつてもらえるようにする。

庄藏 （顔を上げて）お豊、お千代、しんペエすんな。

俺もそんなバカじやねエ。おめエたちを困らせるよう

なことはしねエからよ。さっきのは冗談だよ。それくらいの気構えはある、ていう冗談だよ。これくらいの事じやへこたれねエ、つて、そういう冗談だよ。

豊 あんた。（目頭を押さえる）

庄藏 豊、本陣へ出向いて仕事手伝うのは、できるだけ早くやめろ。おめエ一人で決められることでもねエ

だろうが。……いい噂は聞かねエ。特に来たばかりの役人の中に、癖のわりいのがいるとか。おめエ、は

まさか、とは思つているがよ。

豊 あんた、……私は、あんたを裏切るようなこと

はないよ。私の身にもしそんなことがあつたら、私もこんなことはしていないよ。平気な顔して、あんたに顔向けできまますか。そんなことになつたら、飛竜の

滝か、お玉が池にでも身を投げちまう。

庄藏 何てこと言うんだ。

豊 庄藏さん。これは言葉よ。そのくらいの気持ちで毎日やってるから、安心してくださいってこと。

庄藏 これはいけねエ。一本とられたか。ハハハッ。

庄藏の笑いにつられて、お豊も力無く笑う。しかし、笑いもすぐに引っ込んで、また、皆、急に暗い表情に戻る。皆、何となく落ち着かない。

下手の外で、ことごとく音がする。皆、ギクッとして、一斉に入り口の方を見る。

兼 どっこいしょ。（鍵とかごを置く）今帰つたよ。

入り口に立つたお兼の姿を見て、みんな安心した表情に戻る。

兼 どうしたんだね。（見回す）みんなうちそろつて……みんなして、妙な顔してさ。

千代 お役人さん、そのあたりにいなかつた？

兼 お役人？ どうしてまた？ 誰も見なかつたけ

ど。 千代 御要害の山で、誰かが木を切つたって……

兼 あゝ、そのことね。何でも、名主さんのところで、今日はひと騒動あつたんだとか。

豊 名主さんのどこで？

兼

あゝ、今ね、畠からの帰りに聞いたよ。何でも、名主さんがね、千鳥橋をなおすのに必要だからって、大分前に切られた木の切り株をに三日前に、見回りした役人が見つけて、「畠宿に不心得者がおるから、すぐ調べよ」って連絡があつて、あわてたんだよ。その後な、よくよく確認したら、おめエ、その木につけ書が送つてあつたってよ、関所からは「要害に障りなし」ってお許しも出していたのに、見回り役人がそのことを知らねエでいたんだとか。

千代 お母、その話はほんと？ ほんとに誰かそう言ったの？

兼 あゝ、名主さんも、この数日来、特に今日は、そのことで大分忙しかったんだとか。

千代 （ワーッと泣き伏す）

兼 （びっくりして）どうしたんだ？ お千代（周りを見回す）

庄蔵 いや、ちょっと話の行き違いで、木を切つた犯人は、この俺だってことにされそうだったらしいんだ。

兼 何！ おまえが犯人？

庄蔵 お豊が、本陣で、そんな噂しているのを聞いてきて、今、うち中で、みんなが心配してくれていたところさ。

豊 （顔を覆つて）ほんとに、人騒がせして申し訳

兼 （びっくりして、庄蔵を見る）庄蔵、本当にそう思つたのかい？

庄蔵 あゝ、ほんとだよ。少し回り道をして、年をとつちまつたけどな。

千代 お母、兄ちゃんはね、ほんとうに大分前から、

庄蔵 そのこと考えていたんだよ。

千代 千代にはちょっとと言つてあつたんだ。ただ、自信もなかつたし、みんなを驚かしてやろうとも思つていたんで、黙つてろ、って言つてあつたんだよ。千代も、もう子供じやねエ。嫁に行くことも考えているだろう。好きな男の一人もできる頃だ。（間）俺がしつかりしねエと、みんなを不幸にしちまうからよ。

兼 炭焼きは、今日のことでもう懲りちまたのかい？

庄蔵 とんでもねエ。たかがこんなことで、懲りたりするもんか。山の窯も大切なもんだ。そんなあっさり、閉じちまうわけにはいかねエ。

兼 （不満そうに）それじゃ、細工師と窯と両方や

ろうって言うのかい？

庄蔵 お母、俺の話をちゃんと聞いてからにしてくれよ。俺だって、細工師が、生やさしい仕事じやねエことぐらい、わかっているよ。そんな二股かけたようなことじや、だめだつて言いてエんだろう。（豊に向かって）豊に手伝つてもらわなくっちゃ。いいか、豊、

兼 ありません。

豊 ふーん、そうかい。全く、とんでもねエことを言いふらすバカもいたもんだ。そんなこと言われたモノの気にもなつて見ればいいんだ。全くなア。千代も、かえエそうに、そんな泣くほど、兄ちゃんのことしんペエしてたんだ。（千代の肩をさする）絶対やつてねエって。

千代 （泣きながら）おれ、わかつてた、兄ちゃんはお千代ちゃん、本当にごめんよ。今日は、私あんたにいっぽい教えられたよ。お千代ちゃんは、優しくて、強い子だね。お千代ちゃんが一番しっかりしてた。私なんか、つい万一そうちったら、つて思つたりしたのを、あんたは信じ続けていたんだ。

千代 おねエさん。（泣きながらお豊にすがりつく。お豊も泣く）

庄蔵 （目頭を押さえながら）もういい。その話は。俺もそうじゃねエってこと、世間に言つて回る必要がなくなつて安心した。もうそのことはいいよ。（改まつた感じになり）お豊、聞いてくれ。

豊 （顔を上げる）

庄蔵 お父も、お母も。実はな、俺、お豊と一緒になつてからここ、ずっと、考えていたことがあるんだ。今日のこの騒ぎで、たつた今、言う決心も付いた。俺はな、親父の後を繼ごうと思う。

なるべく早く、本陣の方の仕事は切り上げて、俺の代わりに、おめエ、山の窯を守ってくれ。もうお袋は年で、無理だし、窯は閉じたくねエ。おめエならできる。しばらく慣れるまでは、俺も見てやる。ただし、俺のこれから仕事は、お父の寄木細工の後継ぎだ。

豊 あんた、よく決心してくれたね。（庄蔵の膝にもたれて泣き崩れる）

兼 お父、よかつたね。あんたの息子が、後を繼いでくれるとよ。

藤兵衛、うなずきつつ、そっと涙を拭う。

幕

破竹の唱

(上)



中　泉　聖　司

(一)

僕は、昨日から箱根にいた。

さっきまで仕事のつき合いで、Hカントリークラブでゴルフをした。僕は小さな不動産会社を経営しているので仕事柄ゴルフの接待が多い。ワンラウンドをこなし、シャワーを浴びて、不動産の仕入れ先の招待客をゴルフ場のレストランの軽食でもてなし、持参した手土産を渡し、それなりに喜んで頂いたと自己満足をしながら、急いで箱根プリンスホテルに戻ってきた。

夏に終焉をつけた芦ノ湖湖畔にたたずむホテルを囲む庭の樹木が、早くも若干色づいていた。

避暑地のトップシーズンを終えたこの時期は客足も少なく、閑散としたホテルに、僕はスイートルームをエントリードしたが、昨日までひとり寝だった。

例年、真夏に計画をして、本来なら家族が同伴の予定

だったが、今年は妻も娘も予定があわなかつた。

「田舎の叔父が来るから。」

そういえば、何時だったか、たまには叔父に付き合つてよと、妻のグチっぽい小言を、朝食をとりながら聴いていたことを思い出す。またその日はゴルフなのね？眉ねに皺をよせて、無言で言う。

日頃から妻は接客が嫌いだった。若い頃、勤務先の上司から言葉のナマリを揶揄されて以来、コンプレックスをもったのだろうと僕は思っている。それ以外の理由もあるかも知れないが。

女子大の娘は友人とホンコンに旅だった。

「ゴルキチの話はたまいくつでイヤシヨ！」と、捨て台詞。

それきた、きた、きた！イヤがられることは予測していた。僕は少し残念な顔をつくる。

「寂しいな」

慣れていてもいつもこの寂しい表情を作るのが難しい。ゴルフをふたりに教えなくてよかったです！ラッキー！本音では寂しいものがあるが、長年の経験から、すぐに逆転の発想をもって自分を切り返す術を僕は心がけている。

この時、僕は決断した。

車を会社に走らせながら携帯電話を、佳子につないだのだった。

この春、僕の友人が主催の小さなゴルフコンペの帰り道でパーティを開催し、そのレストランを知った。

佳子は、そこで働いていた。

色白で、微かに栗色に毛染めをしただけで、ノーメイクの娘の未成熟さに惹かれた僕は、接待や仲間内のパーティを企画して何度もそこに足を運んでいるうちに、他の客が帰った後、二人で酒を酌み交わす仲になつた。

そのうち店の閉店を待つて、佳子を車で送るうちにカラオケボックスやスナックで飲みながら夜半まで二人で遊ぶようになっていた。

歳を訊いたら二十三歳だと言う。僕と二十歳も離れているが、これも近年の流行だ。

僕の魂胆は解っていると思う。妻子もちの男のやる事といえば、世間一般、マスマディアが周知させているとおりの不倫関係だ。

ただ、佳子はそれまで僕が交際した娘と違つて清楚で無欲におもえた。お小遣いを（ねだる）強請ることもなく、ブランド物の洋服やバックにこだわることも無い。

ただ時折みせる哀しそうな瞳の陰が気になつっていた。過去に何かがあったのだろうか。

ある夜、楽しく盛り上がつた帰り道、誰も居ない駐車場の車の中で唇を合わせながら僕が佳子を求めた時、こんな場所ではイヤだ、と言う。モーテルもダメと哀願し

ホテルのフロントに寄ると、佳子はすでにチェックインをして、ルームで待っていると言う。

顔なじみのフロントに予め、手をうつて出かけたから、何の支障も無い。

ルームドアのチャイムを鳴らすと、佳子の白い顔が覗く。僕が入っていくと、佳子はリビングルームの窓を開けて、バルコニーに出ていった。

恥ずかしいのか、少し照れている様子だ。そして芦ノ湖の夕暮れに見惚れている。

「ステキな景色だわ……」僕を振り返り微笑んだ。

「よく来たね！キミのおかげで楽しいな！」僕もかなり恥ずかしい。

初めての、デートだ。だから、来るか来ないか僅かな不安もあった。

「どこか遠くへ、連れて行って？……」

僕は、そのとき自分の都合がつけば箱根で密会することをイメージしていたのかも知れない。

Hホテルのスイートルームは、あの日に家族を除外して、接待ゴルフと絡めて綿密な計画を立てたのだった。ホテルのレストランでのフランス料理のデナーに佳子は感激した。

「太っちやいそう……でもいいわ！帰つてから、ダイエットするわ……」

無邪気に食べる表情がかわいい。

僕の親友の支配人が同席して、料理やワインを説明した。料理について聴くこと、食感、香り、全てが初めての経験に佳子の眼がいきいきときらめいている。いまの佳子には、陰が消えていた。

デザートとコーヒーでデナーを終わって僕達は腕を組んで部屋にもどった。今夜は、都内のベッドタウン、居住の街を離れたせいで大胆になっているのか。

支配人はこういうのに慣れているから揶揄（やゆ）もせず、丁重に謝辞を述べたうえ、僕の好きな銘柄のワインを一本、部屋に入ってくれていた。

僕は、グラスボードから二対のワイングラスを取り出してDシャンベルタンをそそぐ。クリスタルグラスに刻まれた紋様に灯りが差し込んでルビーのような色をなし、芳醇な香りを漂よわせた。

佳子の胸にはそれは見てとれない。

「僕も、乗つて見たい！」佳子の船に！と彼女の秘部の形状に想像をふくらませて、言葉を飲み込む。

佳子の背後に回つて、右手で胸の膨らみを押さえ、首筋に唇をつけた。

芝生の影がひとつになつて、揺れた。

「アッ…ン…」佳子は小さな吐息を吐いた。初めての経験ではないので、予測はできていたが、からだが硬直していくのを感じていた。

そして足元から力が零れてゆくような不安を憶えていた。その時、あの高校時代の経験がチラッと頭の隅から胸の中に甦ってきた。

僕の掌を胸から離しながら、

「……待つてね、……少しだけ」ワイングラスを僕の手に戻しながら、瞳を伏せて僕の肩に顔を埋める。

僕は湖面に目を向けて佳子の肩をソッと抱ぐ。

中空には見えない雲の帯びが激しく流れているらしい。

雲の陰から十六夜の月が淡い輪郭を描いて見えてきた。

間もなく、月が透明な夜の空を裂いて、再び湖面に黄金の乱舞を演出するだろう。

僕はどんな演出を佳子にすれば良いのか、シャツを通して伝わる温かい胸のぬくもりを肌で受け止めながら考えていた。

佳子の唇に一つのワイングラスを運んで乾杯のボーズをとる。

再び、ゆっくりとワインが二人の体内に沁みとおつてゆく。身体に熱いものが湧いて、僕から見れば若葉のように、新鮮で成熟まえの佳子のボディラインに欲望をおぼえて来る。ベッドルームに行きたい、のを少し押さえて夜の芦ノ湖の湖面に眼をむけた。

しじまの湖面は十六夜の月を飲み込んでいた。湖面の揺らぎに合わせて月光が無数に千切れ、キラキラと漂つている。

一杯目のワインを佳子に注いで二人はバルコニーに立つてこれを眺めている。

まもなく月が雲の中に消えていった。天空から墨汁を流したように眼前から湖面が消えた。

やがて、暗い湖面を割つて船がやって来た。

「す、ごい！ 海賊船！ きれいね」

「ディナーをやっているんだよ、夜はね。」昼間はたくさん観光客を乗せて芦ノ湖を周回している観光船なのだ。

「ステキ！ 乗つてみたいな」佳子が呟く。が、すぐに佳子の瞳に陰が浮んで消えた。佳子の白いうなじに惹

きの時すでに佳子の胸には堰を切つて解き放たれた記憶の核が、芽生え、育ちはじめていたのだ。

その時僕は、それを気づいてはいない。

佳子は湖面から急に背を向けて、僕の腕を取ると窓を閉めて、リビングのソファに導いた。

(二)

日曜日の体育館。高二の夏休みが、もうすぐやって来る。期末試験はまあまあのでき具合。憂鬱なアンネちゃんにも今月はバイバイ、またね！

昨日まで蟬の鳴き声が頭にギンギンなのが、今日の佳子にはD.Jの大合奏。もつともっと歌うのよ！ ジャズダンスのステップ踏んで、踊つてあげましょーね！

真由美が、

「ボート部のケンちゃんが、日曜日に合宿の壮行会やるってさ、行こうよ。ヨシも行くって、約束しちゃったヨ。」

二日前、部活を終えて下校する佳子を校門まで追いかけてきた。

三年生のボート部のキャプテン、山口賢治は、真由美的ボーライフレンド。勝手に約束なんかして、真由美はいつもこれだから！ 姉妹だったら喧嘩だよ！ でも、今回はチョッピリ真由美に感謝かな？ 駿介さんに会えるわ！

「また、マユったら」勝手に決めないでよ、と言
いながら、胸にキュンと来るものがあった。真由美には、
自分の気持ちを悟られないように夕暮れに紅く染まった
校舎の時計を見た。

長身で色白の田宮駿介のソフトな顔の輪郭が時計台に
シルエットのように重なった。

彼は二年生。進学クラスで、唯一ボート部に入部した
秀才だった。山口賢治とT中以来の仲良しで彼を強引に
ボート部に誘い込んだのだ。他のクラスにもたくましく
成長した田宮駿介の人気は拡がって憧れの噂話は伝染
してクラスメイトの女子生徒の胸を疼かせはじめていた。

「駿介君いるわよ、コックスで、レギュラー候補だっ
て！」真由美がいたずらっぽい目で佳子をのぞき込む。
意地悪うー。マユに何も頼んでないわよ！わたし何で
もないよう、と。目で返しながら、胸のトキメキを押
さえる。

「慶子が狙っているのよ、ヤツ本気なんだから。」と、
男口調で真由美はたき付ける。

「どうしてそんなことを知ってるの？マユは……ケ
ンちゃんから？」佳子は、少し不安。

「多摩川の土手に陣取って、クルーの練習を見ている
んだってさ！ユウも一緒に歩いちゃうわ」

町田慶子、黒西優子は、体型はすでに大人びていて、
ガングロメイクを凝らして原宿通りを闊歩し、他校の生

「遅かったじゃん……」側ドアをくぐって、ロビーを
歩きながら真由美が顔を覗き込む。
「待っているよ、二人で」香水の香りが甘い。

「二人って？……」壮行会でたくさんの部員が来てい
るんじゃないの？それにしては静かだな。物音がしない。
「チョー二ブイ、佳子って！きまっているじゃん、ケ
ンヒションよ」

「エッ！」急に心臓の鼓動が音をたて始める。真
由美の耳に聴こえないで……。
「サア、入つて！」佳子の腕をとって、フロアーノ
ドアを引いた。

講堂のフロアーには誰ひとり見えない。明かり取りの
窓を通して午後の陽光が床のワックスに反射して天井に
揺れていた。

「来たわヨー」真由美が講堂の中央に歩きながら、舞
台に向かって小さな声で呼びかけている。佳子の脈拍は
未だ速い。

「ヤアー、……」舞台のソデから賢治が顔を出した。

段尻（垂れ幕）を賢治が押し開きながら、真由美を導き、
佳子が上がるのを待った。佳子は少し躊躇したが真由美
の後に従うしかなかった。ほの暗い舞台のソデ、そこを、

一段下がると舞台装置を動かす機械室。その奥に物置部
徒とハデなコスチュームを競い合う。ディスコライブで
お金持ちの学生を漁り、落とされたフリをして、プラン
ド物やお小遣いを稼ぐ、評判の不良だった。

「アナグマみたくってさ！なにやっているんだか、わ
からないよ！」

「穴熊？」と佳子。

「なんでも漁るアナグマが、多摩川に出没！モテモテ
の駿ちゃん食べられちゃうなのよ！」

「そんな！ダメよ！佳子はガングロメイクの二人に敵意
を覚えてきた。

日曜日、校門は開いていた。校庭には何人かがバレ
ーボールで遊んでいる生徒が見えた。

佳子は、なんとなく慶子と優子の大人びた体型を思
出して、自分と対比しながら歩いて体育館に向かってい
る。

ガングロに興味が無いわけではない。でも好きなメイ
クではないし勇気もない。

今日の佳子はスッピンに近い。Tシャツにノンブラン
ドの半ズボン。アナグマの方が魅力あり、進んでいるの
かな、わたし、まだ子供だし、晩生（オクテ）なのかな
あ。

「オッハー……」向かっていた体育館の玄関で真由美
が呼んでいる。

屋がある。機械室の古びた机にはコンビニの袋が二つ置
かれて、田宮駿介が椅子に凭れて、缶ビールを胸にあて
て、佳子を見つめた。

「われら、の、パーティーにようこと！」

ビールの匂い、が漂って、機械のグリスの匂いと混ざっ
て異様な芳香を（かもし）醸し出していた。駿介は酔っ
ているのか目が笑っているように細い。

「暑いから……」駿介は立ち上がって、ビールの缶を
取り出して、

「ビールで乾杯！しようぜ！」不良っぽく、ふざけて
いるのかな、佳子は今まで描いていた駿介の美顔を胸で
なぞっていた。

「マユも！」

真由美が先に缶ビールに口を付けて、

「にがーイ！」賢治にその缶を渡す。

汗が噴出していた。暑いなあ、先生に見つかりはしな
いか、誰かが講堂に入つて来ないか頭の片隅に不安が
芽生えていた。起きてはいけない何かが今から起きよう
としていることに気づいてはいたが、佳子の胸の一方で
未知の闇の中に魅惑の好奇心も蠢いている。

真由美と賢治は交互にビールを飲んでいる。

「飲ませてやるよ……」賢治が真由美に口移しでやり
だした。

「アアー……」賢治の腰に手を回して、直に唇を重

ねたまま積み上げた体育用マットの壁に寄りかかっている。

「こっちにおいでよ……」駿介が佳子を促す。ドアのない物置部屋の方を顎で指図した。汗が脇の下を滑るのを感じていた。佳子は動けなかった。

駿介の手が伸びて、佳子の腕をつかんだ。

「イヤッ！」本能的に反射して駿介の手を逃れようとしたが、ボート部の腕力に適うはずも無い。佳子の身体は夢遊病のように、徽の匂いのする小部屋に倒れこんでいた。だめよ、だめよ、と叫んでいたが声にはならなかつた。

今まで経験したことのない男の臭いが佳子の顔に被さってきた。駿介の鼻が目の前に迫っている。

駿介の口で塞がれた唇の間からビールが流れ込んできた。佳子は歯を噛んでこれを拒絶しようともがく。ビールは頬にながれ、駿介の舌が唇と頬から耳元にかけて這い回る。液体の苦味が咽喉元に走る、咳き込む。

間髪をいれず開いた歯と歯の間に駿介が指を挟み舌を差し込んで来た。今までのガールフレンドとは違うやり方に駿介自身興奮していた。学校の中で、しかも賢治のフレンドとペアだ。賢治のエッチも見てみたい。

「やめて……お願い！」佳子は顔を背けて俊介の唇から逃れようと必死になつてている。

が真っ白になった途端に、霧中から黒い影が飛び込んできて胸の中を搔き筆（むし）られているような、幻覚の中にいた。

「見ろよ、あれが男と女の原点なのさ。先コウだって、偉ぶった奴だって、皆同じさ！」

耳に響いてくる。

耳穴に駿介の舌先が入つてくる。アッと異様な感触に仰（の）け反ったとき、開いた佳子の目の前に、賢治の裸体を挟んで真由美の脚が天井にのびて揺れている姿が飛び込んできた。

眼が凍りついたように開いたまま、頭の芯がヌルリとした何かに包み込まれていて、感覚に浸りはじめている。

こんなのがいいの、誰かに叱られちゃうよ。全身の力が緩んで来るのを覚えていた。

駿介の熱い息も絶え間なく頭の芯に纏わりついてくる。

駿介の指が汗でベトベトになった佳子の腿の間から陰部の柔らかい茂みに滑り込んできた。

はじめて触れられた男の指を本能は拒絶するが、耳目、全身があまりにも咄嗟の行為に対応できず意識とは反対に無力感が湧いてきて、佳子は動けなくなってきた。

ただ、ぼんやりと、真由美と賢治の行為に眼を向けていた。

「大丈夫、大丈夫、静かにして、キスできないからさ」両手で佳子の頬を戻して、唇を吸い始めた。舌がまた入ってくる。ビールの臭いに混ざった男の唾液の臭いに気づき始めた。

ほのかな恋心を抱いていた駿介ではあるが、こんな形態ではイヤだ。夢で画がっていたラブラブと違うよ。舌の先端で佳子の舌を弄り、駿介の右手が佳子の半ズボンの下から這い上がってくる。太腿が反射的に硬直して彼の指を拒絶する。

「力を抜けよ……」

「こんなのがいいよ。はじめて会ったのよ、今日……」

「マユ……」

その時、真由美の嗚咽のような声が、被さった駿介の背中の向こうから聞こえてきた。

「ケンジたち、もうやっているよ。見たいな……」佳子の首に腕を巻いたまま、

「あいつら、毎日ラブラブだから……」何を意味しているのか佳子には分からぬ。少女マンガで見た男と女の絡み合いの情景が一瞬浮かんで消えた。

駿介が身体を一回転して物置の入り口から腹這いに機械室を覗いている。佳子の腕を掴んで引き寄せる。擦れた背中が痛い。見たくないよう、駿介の掌が眼を閉じた佳子の頬を引き上げる。頭の中はパニクッテいる。脳裏

いつのまにか白い液体が真由美の下腹部から陰毛に滴り落ちている。賢治の股間から更に滴る精液を真由美の白い掌が伸びてきてそれを掬うように受け止めている姿態がみえた。見てはいけない！ものを、混濁した意識は何かを模索している。

そして、真由美が上半身を起こすと賢治の下腹部に突きできた性器を口の中に含んだ。

「マユミ！いい！」賢治が唸り声をあげた。

駿介の動きに変化が現れた。佳子の顔を持ち上げる。

駿介の膝に移すと佳子の身体を抱きかかえて床から浮かせ、何時の間にか敷かれたバスタオルに移された。Tシャツをまくりあげられて、駿介は佳子の胸の乳房を交互に吸いはじめている。くすぐったい、痛い、時折佳子の手が駿介の顔を拒絶する。が、もう既に抵抗する気力も弱まってきていた。

更に、何度も何度も佳子の唇を塞ぎながら、駿介の手は佳子の半ズボンを引き下げて脚から外し、ピンクの下着ももぎ取っていた。片方の足先にルーズソックスが半脱げ状態で下半身を晒していた。とても恥ずかしい、それでも何時かはしなければならない。男女の原点、赤ちゃ

ん産むために。

「いいよだわ、佳子は覚悟を決めた自分を感じ取っていた。仕方ないわ、好きな人なんだし。」

「怖いわ、痛くしないで……」

「大丈夫、心配しないで……好きだよ、ずっと前から」

「…………」涙が流れる。

駿介の唇が優しくそれを飲み込む。

佳子の下半身に熱い痛みが走りぬけた。苦痛の表情が顔を覆った。更に熱いモノが腹部の深い奥へ注ぎ込まれた。初めての経験だった。やがて駿介を受け入れた動物的な感動が少しずつ湧き起こった。

更に波のうねりのように間断なく痛みと一緒に交互に押し寄せてくる。

「うまくやったみたい……」頭上から賢治の押し殺した声が漏れてきた。

「さっき、見ていたのよ、私達」と真由美。

見られているわ。佳子は途端に駿介の胸に潜り込んで、片掌を顔に当てる。

「ビールくれよ。缶ビールを、開ける音。

「バージンよ、ヨシは」

「処女?」

「この娘はマジだったから……昔から」

そんなに長くない時間が変化を造りあげる。

暫らくすると、駿介との初体験によつて、生まれ始めて女の情念が、その部分から痛みを消し去つて、ゆっくりと、せつなく深い哀感を呼び覚ましてき。そつと、指でそのあとを探つて、自分のものに触れて見る。

ぬめぬめとした体液が陰唇から伝つて、佳子の指先を濡らして、臀部の割れ面に流れ下りている。

佳子の体液と交わつた駿介の精液だろうか?

真由美が賢治の白い体液を受けていた先刻の光景が、浮かび上がつてくる。

「シユンちゃん……！」真由美がテッシュを摘まんで駿介に投げた。

「サンキュー」

振り返つて、佳子の濡れたところを拭き取りはじめた。

「V、ブイ？」賢治がおどけて、バージンだったか、と指を一本立てて訊いている。

「アイム、ベリー・ハ・ピー」駿介が拭き取つたテッシュを丸めて、賢治に投げつけた。

「ヤダー、止めなさいよ！」真由美が怒つてている。

賢治がそれを拾うと、指先に摘み上げて、丸まつたテッシュを振っている。

垂れ下がつたテッシュに二筋、三筋に擦れた、鮮血のアトが白い紙面中に滲んで見えた。

「いいなあ、処女膜やぶりタ／＼」

「バカッ！私のやつといて！」

「そなんあし、でないコもいるんだよ……保健の先生が教えたよ。私はケンちゃんが初めてなの！」

「ジョークだよ……すぐにマジになるんだから、マユは」

真由美は内心ホッとしている。中一の時、私のバージンは破壊されたの。T大学を卒業したばかりのロングヘアの似合うロックシンガーの風貌を持った先生に音楽教室で指によつて破壊されたと信じている。痛い、痛い、と叫んだ時、S先生の指に滲んだ真由美的体液の中に血の色を見たようだ。『めんよ、と言ひながらその指を自分の口に含んで、誰にも言わないで、内緒だよ、ネ、ネ、ネ……先生の泣き出しそうな表情が胸に浮かんで消えた。

駿介が佳子から身体を離した時、急に胸の奥にせつない哀しみを覚えていた。涙が眼に溢れた。駿介を受けられた粘膜の感触が、熱っぽく、沁みるような微かな痛みによって、失つた処女の現実に目覚めてきたのだ。

脈々と心臓の鼓動に併せて佳子の秘部が疼いてくる。

しばらく、顔を伏せて胸を抱えて泣いていた。

駿介がそつとタオルで佳子の身体を覆つた。

(三)

体育館を出て、四人は校庭のポプラ並木に沿つて校門に向かつた。誰も無口で、背後から夕日が四人の長い影をつくつて、さんざめく木立の陰と揺れて交錯している。

校庭に人影は見えなかつた。誰も今日のことを知られなくて済みそうだな。佳子は少しだけ安堵している。しかし何とショッキングな一日だったことか！

いま、また愛憎の交錯した感情が徐々に胸に突き上げてくる。

あのあと、再び駿介が伏せたままの佳子を求めた。濡れたままの陰唇を俊介が口で愛触れられて再び駿介の膨脹したモノを受け入れたのだった。

賢治と真由美も横並びで性技を交わして見せた。高校生離れの激しい男女の営みの姿に眼を見張り、自分も搖れながら奇妙な陶酔に浸つっていたような気もする。先刻までの記憶に呼び覚まされていた。「二人はいつもラブだから！」駿介の言葉を飲み込んだ。

自分を奪つた人は、この男なの！前を歩いている駿介の背中を恨めしく見つめると、途端に、後悔に似た切なさも込み上げてくる。が、悄然としても、すぐに太腿の奥のほうに駿介の肉棒が挿まつたまま、いまも動いているような錯覚にとらわれてくる。

次々と感性が乱れて、また沁みるような羞恥心が湧いてくる。

てきて、うな垂れて歩いていた。

真由美がそっと横に並んで、佳子の掌を握った。

「……うん」当然、でしょ、真由美の眼を横に見て、

掌で伝えた。先刻、行為の最後に濡れて光った、突起した賢治の陰茎を口に頬張りながら動いていた情景が真由美の唇に重なり合う。

やがて、自分も……？あれが本当の、愛のかしら。

駿介の愛は本当のかしら？こんな形で男女のスタート

が普通なのかしら。これまで誰も教えてくれた人はいない。ガングロの慶子や優子は、噂話では、半端では無い

性行為の経験をしているらしい。

性交について考えた事と言えば、少女マンガや深夜テレビの裏番でしか見ていないから……。

性教育の記憶と言えば、たまに、女生徒を対象にした保健の授業で、（スキンと性病予防講座）で独身の中年女教師が文部省の作成したマニュアルを棒読みして、モデルの男性性器の図柄を説明しながら自分で顔を赤らめている位のことだ。

処女を与えた初めての男、駿介さんがわたしの愛する人になったのね！

そのとき、校門から一台の自転車が進入して来るのが見えた。二人が跨って、向かって来る。慶子と優子の姿だ。佳子は嫌な予感がした。

をするなと言っているのだ。駿ちゃんに合いっこないのに、もう遅いよ、って言つてやりたい衝動に駆られていたが、「このこ、だれ？」慶子が回していた指先を、佳子の顔に向けた。

「三組のヨシコとちがう？」優子が顔を覗き込む。

「佳子だよ、どうしてここにいるの！」佳子の足元が震えて、身体が揺れた。

「なんか、におうよ。チヨーくさいよ！」慶子が叫んで、優子に訴えている。

「感じない？ね、ね、ハッキリしなさいよ！田宮くんとラブラブなの？」ドギマギしている佳子にも答えを求めている。

「ヨシコ、は、壮行会のお手伝いで、わたしが、連れてきたの！」ゆっくりと、唇を動かしながら、真由美は、

「何も、ないわよ、冗談ビーはオナラで、してね！」二人を睨んで、

「ケンちゃんとできている？ってどうゆうこと！キミたちと同じ不純関係じゃないよー、キヨイ、ケンジって

ニックネーム知らないの？清純なイメージが売り物のボート部の二人にバカなこといわないで！」涙んで見せる。ウマく差し込んだ優越感にニヤッと笑いがこぼれて、賢治を振り返って、

「ケンちゃん、何か言ってよ、ふたりに！」賢治が黙つた。

慶子がペダルを漕いで、慶子の肩に手を置いた優子は後ろに立っている。

「ヒヤホー！なにやつてんの！」優子がピヨンと降りて、

「ラブラブ、カップル！……おデートちゅうの？」テレビで売れっ娘の猿真似にしては口元がこわばっている。

真由美が賢治の脇に出て、

「ボート部の応援よ。今、練習と壮行会が終わったところよ」平然とウソを投げて賢治を振り返った。賢治は駿介に肩にかけていたスポーツタオルを手渡しながら、

「多摩川で遊んでいるコたち、キミのファンだってサ」冷静を装う。

駿介はタオルで顔を拭いながら、軽く頭を下げた。勿論、覚えている二人連れだった。大人びたボディに、超ミニスカート。ボート小屋から土手を上がりて行くと、二人が草の上に足を組み、紅色のパンティを曝して、ワザとらしい奇声を駿介に投げて來ることが多かった。

「君たちは、できているからサ、仕方ないけどサ」慶子がサドルに跨ったまま、真由美と賢治を指して人差し指をクルクル回している。

「田宮くんは、チヨーマジだから、スケベなんかスケルンじゃないのよ。」真由美に目線を当てる。子の娘たち、独特の話し言葉なのだ。女のやりかたを教えたり、女の子を紹介したりして、駿ちゃんのラブの手助け

ているのが真由美は歯痒い。

「シユンちゃんのファンなんかじゃないよ！このコたち」ただ、誰とでもやりたがっているだけよ、最後の言葉は飲み込んだ。

「ちょームカつくわ！真由美は酔っ払っているよ、何よ、その袋は？」賢治がぶら提げてコンビニの袋に慶子が近づく。あわてて、賢治が袋を引いた時、駿介の膝に当たって手から離れた。ビールの空き缶が音を立てて転がり落ちた。

賢治がバツの悪そうな風に、それを拾い上げて、

「午前中の練習の後で、ボート部の壮行会やったのさ、どうってことないさ。」

どうせ、この二人は、教務に、ニラまれているヤツだから、つげぐちなんか出来ない。しかし仲間にウワサを売つて佳子と真由美を学校でイビるのは彼女たちの遊びのうちだ。噂になつて佳子と真由美に嫌な思いをさせたくない。一緒に遊んでやつて、飲ませてやるか？

「出ようよ……」賢治は顎を校門の外へ、向けてしゃくっている。当直の先生が間もなく登校してくるはずだ。見つかれば厄介だ。

真由見も黙つて、今更ながら息を殺して臭いが漏れないと、プリッコしている。

おとなしくなつた、真由美に勝ち誇つたように、慶子が、

「わたしたちが、これから二人の壮行会やるよ、二次会ツーノ！ホホホホ……」

駿介の表情を伺うように、目尻をながしている。ラメの金粉が夕日に反射して光る。

そんな！佳子の顔が曇る。耐えがたい、嫉妬心が湧いてくるのを覚えていた。

佳子は切ない想いで、真由美と掌を結んで歩いていた。

遅い、初夏の夕暮れが、うすい紫に染まりはじめた。真由美も無言のまま、うな垂れて、小川の橋の袂まで来ると、脚を止めた。小川のせせらぎが佳子の涙を誘うようになっていた。

川面はほのかに白く、泡立つ波線の陰影を浮き立たせて抑揚を続けながら流れ下っていく。

欄干に凭れて、二人はそれをながめていた。佳子は先刻から涙が止まらない。

「クヤシイね！」真由美が吐き出す。佳子は先刻から

「…………」

優子の姉がバイトをしている、と言う歓楽街のSレストランに四人は入って行った。個室があるので酒が飲める。と慶子が自慢げに俊介に告げていた情景が胸に突き刺さって痛い。

「君たち！今日のことオフレコにしてやるよ！」慶子が真由美と佳子に帰れと言う合図代わりに手を振りながら泣けばいい、泣き虫女は血の涙を流せばいいわ、私と同じだけ！

取る術も無いが。

真由美の瞼の奥では鮮烈な回想のフラッシュを浴びていた。昼間から飲みつぶれていた賢治の母親の顔。テレビに頬杖をついたまま上目使いに真由美を見上げ、若さを妬むような眼の色。

誘われるままに、母親の冷たい視線に挨拶を交わして、賢治の部屋に入った途端に、気持ちの荒んだ賢治に犯された影像が浮かび上がる。音楽教師に処女膜を破壊され、賢治の豪腕に自由を奪われて、肉棒を差し込まれ、初体験の洗礼を受けた真由美の傷口が求めているものは、同じ運命に落ち込んでくる同類の雌鹿たちなのだ。処女なんか失えばいいよ！どうせ何時かは無くなるのよ。そして泣けばいい、泣き虫女は血の涙を流せばいいわ、私と同じだけ！

汚れを持たない、幸せ家族なんか、私には関係ないわ！

佳子も今日から、同じアナの格（むじな）だよ。真由美は倫理のない奇妙な理屈と計略に自己満足をおぼえている。

一人は歩いてバス道路まできた。日はとっぷりと暮れて、蒸し暑い街路には人が溢れている。暑い、暑いと挨拶を交わしながら、夜の舞台の幕開けなのだ。屋台の組み立てが、始まっている。別の角では呼び込みの男たちが「生ビールが半額だよ」と叫ぶ。

ら、店の前で、男言葉で告げたとき、佳子の瞳が、駿介の目に哀願のシグナルを送っていたのだが、店の灯りに背を向けた駿介の顔の表情は見て取ることも出来ないまま、真由美に促がされてそこを離れ、いまここにいる。

「ゴメンネ！」真由美が小声で耳元に囁く。

「シユンちゃんは、大丈夫！ヨシのこと守ってくれるよ。賢治と違って、駿ちゃんはデキがちがうから」何を守るの？秘密にするってこと？そんな問題ではないよ！もっと大切なことが有る筈よ！深い意味はまだ分からない。

「どうしたらいいの？これから」真由美の本音が急に知りたい、と考え始めている。

「あんなこと、いつもしているの？どうして誘ったの？」マユは……

どうして？と訊かれても、真由美には明確な答えは言えない。賢治に仲良しの佳子を連れて来い、と相談を受けたその時、賢治に聴いた話がきっかけと言えばそれだろう。

U高校のテニス部にいた駿介のガールフレンドが彼女の父親の転勤で居なくなつたこと、佳子が駿介に好感を抱いているのを知っていたこと、未だに佳子にボーラーレンドがないことが理由と言えば理由になるのかな。

もうひとつ……、ハッと気づいた。闇が迫ってきて、真由美の瞳の奥に浮かんだ陰湿なものを、佳子には見て

いよいよ、夏休みだなあ、駿介君はいつから合宿なのかな、と佳子は気にかかりはじめていた。携帯電話を買おうかしら、はじめて、欲しくなってきた。父の怪訝そうな顔が浮かんで消えた。何のために？ウソをつくらねばならない。

「明日、会ってくれるかしら？」
「モチよ、どこで会う？」真由美に、ではない。
「駿介君……」自分では何も出来ない。マユに頼むしかないか。

明後日の終了式までには、駿介とコンタクトの方法を見つけなければ……。少しずつ、芽生えてくる、何かに佳子は気づきはじめていた。

（四）

駿介はもう飲めない、我慢の限界だった。帰りたい、とおもった。疲れをおぼえた。何杯飲んだのか、ジントニックの香りがわからなくなってきた。優子と慶子に羽交い締めになつて、ジョッキグラスを口に押し付けられて、「イッキ！イッキ！」と二人が楽しそうに喚いている。しかし、駿介の心は別の記憶に占められていた。

悲しい瞳を残した佳子の心が気になつていて。さらに、可憐な白い肉体と、初体験にと感う苦痛の反応、セクシーな表情、男の性欲をかきたてる肌の匂いや悩ましい身体

の動き、あそこの青臭い匂いが鼻腔に浮かんできて、胸が押しつぶされそうになる。どうして、ここに居るのか、もう少し佳子と一緒に居たかった。

大阪に去って行つた、何をしても無表情なA子とは、全てが違つて居るように感じていた。心とともに動く佳子の唇、胸、下腹部、しつとりとソフトな肌の感触が駿介の皮膚に鮮烈に甦つてくる。

賢治がトイレから帰ってきた。醉眼でドタリと慶子の脇にへたり込むと、手を慶子の股座（またぐら）に伸ばしながら、優子に向かって、

「姉貴がカラオケしたい、ってさ。十時でオフ、ここを出るつてサ」優子の姉の京子がバイトの帰りに、カラオケボックスに行くことを賢治に約束させたらしい。

「いやあだー、だめー」と慶子が腰を引いて、賢治の腕を引っ叩いた。ピシッと音が響いて、

「自由美がいるでしょ！君には！」言葉とはうらはらにメイクで逆立てた睫毛の奥に淫な瞳が半開き、賢治を挑発している。

「高いのよ、わたしたち！」指を丸めて、笑つた。

「カネないよ、俺たち」賢治がおどけて、慶子の丸めた指の中に自分の人差し指を突っ込んで片手を添えてしごいている。

「やあだー、エッチ！」まんざらでもない。カラオケボックスでやる気になつてているのがミエミ工だ。

「優子オーレあとで替わつてヨー！ケンよりウブなコがいい」

「四ピース、アネキも入れてやるか！五ピースよくん

賢治が指をひろげた。

駿介はそれを見ながらうんざりしていた。壁に凭れてトレーニングパンツの上に置かれた優子の指攻撃に耐えている。

佳子とは違う、まるで正反対のタイプだ。萎えた陰茎はまるで反応しないのだ。

先刻の、別れ際の佳子の寂しそうな瞳が優子の顔に重なり優子の姿を消していた。

もう十時なのか、左手のグッチの時計盤が揺れて見える。駿介には初めての経験だった。こんなに飲んだことはなかつた。優子が耳元で何かささやいているのだが、解らない。ヌメヌメとしたものが耳穴の中に入つてきた。優子の舌先がくすぐつた。

「何やつているのヨ！もう終わつて！」京子が隣室の襖を押し広げながら入つてきた。

「かたすから、手伝つて！」今まで、隣室を後片付けしていたようだ。

片手に持つていた布巾をテーブルに投げた。

賢治は慶子を押し倒して、尻のほうから天真似をして、クンクンしている。慶子は笑いながら転げまわつている。

「高校生のやることなの？メチャピース、いまどきの

コは」メイクの違いか、青白い顔のせいか優子の姉とは見えない。今年の春、F大学に入学したばかりらしい。

「未成年に飲ませると、店がメンテイなのよ！店長の首が飛ぶの！だからサ、もう飲まないで冷ましてから、出て行くのよ。ケンちゃんわかってる？」

「ワン、ワン……わかっているワン！」賢治が犬のちんちんスタイルで答えて、

「おねえさんとカラオケしたいワン！」

「大丈夫なの？優子、そのコ悪酔いしてない？」駿介は何時の間にか、優子の胸に凭れて眠つてゐる。

「カワユレイ！このコうぶなんだよ……。ケンちゃんみたくないもん。」

「このコが手を出さないのは優子にミリキ、無いからかもー？」京子がテーブルを片付けながら煽（あお）る。

駿介さんはお疲れなのさ！「発やつたから！でもオレは、一物のデキがちがうのさ！」賢治は昼間の体育館での光景を想い浮かべてクスクスと笑つてゐる。

「そんなん……ユウさんのミリキ、知らないのね！強チンだわ」強姦の逆イミらしい。

「スゴレイ！みたしイ！みたしイ！」慶子がのつて来る。

しく、店内のテーブルは五卓のうち四卓の客で埋まつていたが、京子の繋ぎのバイトが未だに来ていない。客の大体が、酔っ払つて、サワー、水、酒だと忙しい。部屋の方は、京子の紹介の高校生。紹介運動で売上倍増！オーナーの方針だから入れたが、本来、飲ませてはいけない客で、誰かがクレームを付けないかと、気疲れするし、だんだん騒ぐ声も激しくなつてゐるようだ。何をしているのか、女性徒の艶めかしい声が乱れて漏れてくる。後片付けに行つた京子も出てこない、十時過ぎては、勤務時間外で小言も言えない。いまの娘は、たつた一分のサービス残業もしようどしないし、怒るとスイーといなくななりバイトをやめる。

「店長！水が無いよ！」ふと我に返る。近くのM工場の職長が叫んでゐる。

「ハイ！すぐに！」常連さんには、笑顔だ、が調理場にはだれも居ない。この時間になると、料理の注文がないから、たつた一人の老調理人は裏口でタバコを吸つてゐるに違ひない。慌てて、水を入れて、

「お待たせしました」

「どうなつてゐるの、店長ひとり？」

店長の吉村は苛立つてゐた。日曜日の夜半にしては珍

「すみません。バイトのコが遅刻していまして、もう思ひ暗くなる。

「京子ちゃんがいたよ。さっきまで見たけど」職長が上目で訊く。

「十時までなんです、今夜の彼女は」

「もそっと、やってもらえや、おんながええよ！」早くから一人で職長が来るのをまっていた、連れの一人が赤い目で吉村に浴びせる。小太りの赤ら顔は新顔だが、酒を運びながら見ているうちに常連の職長の上司らしいことが、わかつてきたから無下には出来ない。工場の若い男達、三人がウンウンと同調した。

「基準局がうるさくて、ダメらしんです。特に、最近は」

「そんなことゆうたら、店がはやらんよ！わかい娘がおらんとおもうないよ。そこが店長の営業努力だろうに」職長が困った眼で、うつむいて、水を飲み込んでいる。

「工場長！奥の部屋では若い娘が一〜三人で飲んでいるみたいですよ。」一人が油汚れした指を奥に向かって。

工場長がその方を振り返って、ニヤッと笑った。職長の野田村が店長の吉村の耳元に何かを告げた。陰りを帯びた吉村の目の奥がすぐに安堵の色に変わり、そそくさとレジに向かった。

「まだ帰らんよ、勘定なんか、まだせんでええ！……ノダムラくん、キミだけ帰つてええよ、勘定はワテがやりま」工場長がレジの吉村の手を止めた。各地を歴任し、

「キミら管理職も、そっくり同じ冷蔵庫の中身やで、自己本来の品質管理がいきとどいているやろか、そのうちジックリ見せてもらうじゃろうよ。」

今日、野田村は、早や番の若い部下の上がりに合わせて、四人でこの店に入った時、待ち伏せられたよう、工場長が六人テーブルを一人で占拠して、生ビールを呷っていたのだ。

やむを得ず若い部下は、緊張しながら同席していた。やがて飲むうちに、職長と違う体臭を持った、小男で脂ぎった工場長に感激し始めたらしい。権力に迎合しやすいこの年代の特徴なのか？それでも、野田村職長もこの店の料理、飲み物に気遣いながら、工場長をもてなしていたつもりだった。

勘定くらいの職長の自分が支払うのが当たり前で、そのあとで駅前のスナックで歌でも唄わせて、工場長との溝が少しでも埋まれば、と考えていたのだ。

お前だけ帰れ、と工場長が平気で言っていることに、野田村はこの男との落差を感じていた。人事権を持つた人間の奢りだと思うが、それに逆らえない。部下の三人も現に野田村を意識に置いていない素振りをし始めている。盛んに交互に酒を酌み交わし、たいして面白くも無いことに同調し、大声で笑っている。

水を飲んでいる職長には、興味を外している様子だ。

「コイツ、ナンパがうまいんですよ」チャ髪の工員の

方言で染まつた工場長の奇妙な発音に隣席で飲んでいる中年の夫婦者らしい人が物珍しそうに笑つて見ている。「職長！まだいいじゃないですか」部下の一人が気づかう。生真面目な職長は、最近、赴任してきた工場長とシックリいっていない。何か、気持ちの中に融合しない溝のようなものに隔てられて、（さいな）苛まれている。前の伊丹の工場で工員のリストラに成功し、先月この工場に来た。リストラのウワサが工員の耳に瞬時に伝播し、工場中に緊張が（みなぎ）漲っていた。

野田村は職長会議での工場長訓話の光景を思い起こしていた。

「品質の悪い者は切りとつて捨てる事や。なんでかいうと、そいつが、やがて品質のいいもんまで腐らせるからや。ムラがあつたらあきまへん！皆の家にある冷蔵庫の中身をよう考えてみい。新鮮な物と腐ったものを隣り合わせにしてみい！見る見るうちに新鮮なもんにばい菌がうつりまっしゃろ！工場にも、煮ても焼いても食えん腐りかけの従業員がそのままになつとると違いまつか！ようけいあるじゃろうが。無理してこれを使うたらあきまへん！やがて会社も腹痛おこして死ぬ。こいつを思い切つて捨てて必要なものだけ置いて、無駄を省く。品質管理ちゅうのは、これが第一歩や、キミらの職場は……」

ギロリとまなこを（へいげい）睥睨して、

肩を揺すりながら、工場長に紹介し、別の工員に眼で同意をとりつけ、

「シンちゃん！行つてこいよ、この前みたく！」

「T校の（こ）娘だらう？さつきトイレで見かけたけどガングロだよ、ハンパな娘じゃあないぜ、金あるのかよう！」シンちゃんと呼ばれた男は茶髪を搔き揚げて、不満そうに口を尖らせた。

「錢のことなら、心配せんでええよ！」工場長が胸を叩く。

「京子も、いいよ。バイト終わつているらしいから、小遣い稼がせてやろうよ」

「男だけ帰しちゃえよ！例の手で。」別の男が酒で座つた眼を茶髪に向けた。

「いつも、これだから！アミダにしようよ」

「俺たち、キミの先輩なの！いわばシンちゃんは歩兵なの！その後で俺たち兵長のお出ましさ」

工場長に敬礼をして、黒い指で茶髪の頬を突いた。

「それから将校がゆっくり登場するんだよ！」アブラオレがかわるさ！」

「いい部下に、恵まれてはりますなあ。こういう部下に恵まれると若い娘の匂には不自由しましまへんな」

ニンまりとした工場長が野田村職長に目を向けて

屈みで部屋に一歩足を入れた。

そのとき、駿介がゆっくりと立ち上がった。

同時に激しい打撃音が響いた。下から振り上げた手の甲が見事にシンちゃんの顔にヒットして、背後の襖のドアもろ共、カマチに飛んでいった。

駿介の手の甲から血が吹き出た。殴った時相手の歯先で切れたらしい。

店内が妙に静かだ。俄かに発生した物音の実態を把握するまでのほんのひと時ではあったが。

「コノヤローウウウ……」シンちゃんの口から血が溢れた。掌で唇の血を拭いながら、ゆらりと立ち上がったとき、駿介が下腹を蹴り上げた。ボディがドスッ！と鈍い音をたてた。

「ゲッ！……」

倒破された襖の面に血へドが飛び散った。その上にシンちゃんが胸を抱えて倒れていった。

もう、動かなかつた。茶髪が微かに痙攣を起こしている。

工場長が喚いている。

「百十九番や！ 店長！ 救急車や！ 救急車が先や！」

店長の吉村が駆け寄って、真っ青になつて状況の見極めをはじめた。イヤなことが起つた、自分の責任がどうなるか、脳裏を駆け巡る。ここに至るまで高校生を飲んで彼らの到着を待っていた。

佳子は演壇の据えられた舞台の左奥に眼を動かした。胸の動悸がさざなみのように生まれて脳裏を波打つ。駿介に剥ぎ取られた自分の下着が、いま、そこに付着した血の跡を残して存在しているような錯覚にとらわれて、顔から耳にかけて熱い血液が流れていった。

真由美はどうなの？

斜前に立つた真由美の横顔を伺つた。白い顔を傾けて、同じ方向を眺めているように見えた。あのときの真由美と賢治との姿態が重なり合つて、すぐに眼を反らせた。

「ゆめをみているのか……だつたらいいな、この一と三日のことが、みんな消えてくれないかしら。」

一昨日から何度も、呟いてみては現実に引き戻されて、何回も逡巡した。

校長が演壇に立つて、扇子をバタバタやつて。ハンカチで汗を拭うと、パタリと扇子を舞台に落とし、両手で白いハンカチを持ち替えて両目にあてて、押さえた。

嗚咽のような声が漏れてくる。泣いているのか？ 苦痛のうなり声を漏らしているのか？ 場内が、一瞬、凍結し、これに注目した。

「……皆も、すでにテレビや新聞で知つて居る通り、

ませた責任を指摘され、怒り狂うオーナーの赤ら顔が脳裏をかすめた。

店の客が輪をつくり恐ろしそうに見つめてささやいている。

「どうしたの……？」

「ケンカ？」

「誰がやつたの！」

若い工員の同僚の一人が、店長の前に出てシンちゃんを抱きかかえた。

「どうした？ だれがやつた！」シンちゃんの瞳がつりあがっている。

同僚が部屋の入り口に立つて、駿介を見上げた。

救急車のサイレンが近寄ってくる。

誰が、呼んだのだ！ あいつめ！ 店長の顔に絶望の表情が走りぬけた。

「そこの、男達を逃がしたらあかんで！ いま、警察も呼んだかいに！」

携帯電話を口に当たまま、工場長が叫んだ。

(六)

体育館の講堂で夏季の終業式が始まった。

全校生徒が肅々と集合して整列した。

いつもの華やいだ女生徒らの（かしま）姦しい私語もなく構内の空気は沈鬱に沈んでいた。

当高校で大変残念な不祥事が発生した……

朝の挨拶も、敬礼もなく校長の涙声で終業式がスタートした。

校長が事件の概要を、当高校の歴史上初めて、汚点、イメージダウン、警察のお世話、と何回も単語を並べて説明しているのを、佳子はボンヤリと聞き流していた。

哀しみが本能的に、校長の説明を拒絶していた。いま途端に駿介たちの事件を知らされた朝の情景が胸に突き刺さってきた。

その日、月曜日の朝、いつになく、登校時間にストレスで、佳子は食欲のない朝食をとつていた。母がキッチンに入つてくるなり、

「佳子の学校たいへんよ！ ポート部の生徒が、殺人だつて！ 酔っ払つて殴りころしたって！ 今朝から何回もニュー！ やっているわ

「だれが？」

「名前は言わないわ、未成年だもの。学校に行けば、わかるわね。今時の高校生って怖いな。佳子も気をつけよ！ 不良とつきあわないでね」

そういうえば近年、十七歳の殺人事件、高校生の傷害、暴行事件は頻繁にニュースになつて流れている。テレビのスイッチを地元チャンネルに切り替える。

顔なじみの民放のアナがメモを片手にマイクに喋つてゐる。

「……レストラン（ゆうき）で、K高校の生徒二名が飲酒の上暴行を加えた。被害者の栄光製作所M工場の社員、山本信吾が重症、犯行の動機は一名のボート部の男生徒が同伴した女生徒と被害者との交際に逆上しての犯行だと思われる。加害者らの共謀、計画性も否定できないとの、情報に基づいて殺人未遂も視野に入れて、県警が取り調べ中、……」

テレビ画面に事件の起きた場所のテロップが流れ、アナウンスの声が鼓膜に突き刺さってきた。

佳子は愕然とした。

カップのコーヒーが手の震えに激しく揺れて零れ落ちる。膝の上に熱い刺激が走った。それが、脳神経を麻痺させた。

失神するわ！佳子は予感した。洗い物に勤しむ母の背中がゆっくりと視野から消えていった。

その時、校長の訓話が変調し始めた。佳子は我に返った。佳子の後列の方から波のように生徒の顔が逆転はじめてザワザワと整列が崩れはじめた。

佳子も後ろを振り向く。

優子と慶子だった。女教師が彼女たちの腰に手を回し

だからと言って今から教わってなになになるの？あの優子と慶子の二人のせいで駿介を失った今になって、とおもった。

それにも同罪の二人が何故、ここに居るのよ！何をしに来たの？駿介と賢治は警察にいるのに、どうして？彼女らは被害者とだけ交際していれば良かったのに！

不信におもい真由美に眼を向けると、何時の間にかマユが側に来ている。

「退学ね、あいつらは！」佳子の耳にささやく。

そしてニヤニヤと後ろの成り行きを見つめていた。大人なんだな、マユは！賢治を彼女らに取られても動じない真由美が少し頬もしく見えた。

教頭が校長に耳打ちをしている。教頭がマイクを取り上げて、

「……その生徒は校長室に連れて行きなさい。静かにしてください、皆さん静肅に！」

教頭の事務的で、神経を逆なでするヒステリックな声が今までの生徒たちの緊張をイッキにほどいた。

私語が構内に渦巻いてゆく。演壇にヤジがとぶ。

「コーコーってなんだよー？」

「飲むとフローになるサワードリンクみてえなものさ！」

苦笑が湧いた。

「フレゾクのフレキもかんがえてみろー！駅裏のソープ好きな先生にサー！」嘲笑に包まれた。

て、二人が前に向かおうとする動きを止めている。

すぐに後方で整列していた教師の一人が応援に駆けつけて反対側から背中を押されて、二人を小声で説得しているようだ。

スッピンの二人の顔は青黒く、教師の顔が真っ白く見えた。

「静肅に！」校長が怒鳴った。ハンカチを握った右手で演壇のテープルを叩いた。

「風紀が乱れたのです！何故か？本校の校風はどこにいったのか？諸君と、これをいまから考えないか。私が赴任して、一年にしかならないが、今回の不祥事は、校則を守らず、校風のない、いや、十年前からのけじめの無い自由奔放の校風に溜ったウミがいま噴出したといえます。今日から始めるのだ、二度と、この不幸を本校から出さないように！……」今までの校長の風紀更生の怠慢で、自分の責任は薄い、と校長は考えている。

講堂内がダレはじめた。俊敏な生徒は自己弁護ミニエミエの説教や、生まれて此の方、道徳や規律の教育を持たないタイプの生徒にとつてもこんなオヤジパターーンの演説に耐えられない。さらに言葉の意味すら理解出来ない者もいるらしい。

校風って、何？佳子は考えて見た。誰かに教わっただろ？？質実剛健とか自由闊達とか言う言葉を何処かで聴いた気もするが真意は解らない。

女生徒の大半は駿介の相手が優子か、慶子か、の疑問で溢れた。

忽ち、そのおしゃべりは、札付きの不良女性との不純交際を蔑み……、それでもいち度はスターのように美顔な駿介に抱かれてみたかったと嫉み……、わたしを選ばないから天罰よ！に笑いざめいて変貌していった。

佳子は寂しく、耳に入る雑言を聴いていた。

しかし一方で、いまも、体内に残って消えない駿介の肉棒の感触と、汗にまみれた体温の温もりが佳子の身体に呼び戻されていた。

駿介に会いたいな。疼いてくる哀感の胸を両手で押された。

「ちがう！ちがうよー、バカヤロー！先生なんか信じないヨー！」

優子が大声で叫びながら、女教師の手を振り切る。

「どいてー！あけてよ、そこーおー！」

慶子の腕に手を差し込むと、二人は小走りに生徒の輪

溜まりを抜けて舞台に駆け上がった。

「みんなー！ちょっとだけきいてよー！」

演壇のマイクを取って優子が叫んだ。

たちまち、私語が止んだ。

校長がその側でウロウロと、咄嗟の対応に苦慮して、教師達にハンカチを振りかざして助けを求めている。

それを教師らは呆然と見てゐるしかない。どうしたらいいか、経験が無い。不用意に対応して処置を誤り、ケガや事故でも発生させたら責任問題になり元もこも無くなる。

生徒らもハッと息を飲んで舞台に集中した。

じまの、一瞬を破って、更に後方から怒声がどんでもきた。

「報道の自由だ！キミには止める権利はない！そこをドケ！」

一人が、首から紐でぶら下げた身分証明カードを掲げていた。

地元テレビの取材クルーが入ってきたのだ。ビデオカメラを担いだ男、ケーブルやライトを持ったのが従いながら、後方出入り口の教師たちを威嚇しながらなだれこんで素早く舞台にライトをあてた。

優子の声がスピーカーに響いた。

「本当のこと言うよー！被害者のほうが悪いのよ！私は、被害者とはつきあっていないよー……テレビもきたからちょうどいいよー」

その時、厳つい大男で柔道部の部長が舞台のソデから飛び出してきて、二人の腕を捕つた。

マイクの電源を切つたらしく、スピーカーは切れ、優子と慶子の悲鳴が舞台の方からきこえてきた。

部長は無言で舞台の奥に一人を引き込んだ。

るには充分だった。

校長は、度々登場しては、当校の生徒に限つて飲酒はないのではないか、事実については司直の捜査を待つてだの、学校に調査委員会を設けて事実関係を調査して、とか責任感の伝わってこない弁明を繰り返すだけで大概のPTAもシラけていた。

佳子の母もあり外出しなくなつた。

「T高校に入れなければ良かった。」

心配して架けてくる母の姉妹に対して電話に出たたびにぼやいている。

「何も、関係ないわね！あの生徒たちとは」

母性の臭覚なのか？今までの佳子とは少し変だな、と母は心配していた。あの日の朝、失神したのは異常だと考えていた。思春期の不安定な肉体的、心理要因では片付けられない。

その反面、佳子はそんな娘ではない、と疑問を打ち消している。

堂々巡りの思考の中に、気になることを思い出していた。

日曜日の夜のことだった。夕食まえに佳子は珍しく、入浴していた。

「ついでに、ヤヨイも入ってきて、お父さん、もう帰つてくるから……」

中学一年の次女で、弥生が母に急かされて入浴のため

テレビカメラがこの全てを録画した。

夏休みにはいって、街はT高校のウワサでもちきりになっていた。

全国で高校生の事件が多発して話題の切れ目の無い時期に起きた身近な事件に、井戸端会議の主婦らの顔にはT高校の生徒を見ると、今更ながらその実態を認識し、汚物を避けて通るような蔑視の表情が表れた。

新聞、テレビが連日この不明年代の特集報道を繰り返していた。更にローカル番組で荒れる高校生をテーマにしてT校の生徒やPTAを登場させて、あいも変わらず興味本位の番組を流していた。

優子と慶子が顔モザイクに保護されて、講堂の舞台で叫ぶ姿がテレビ画面に何回も登場した。新聞も同様な記事でローカル紙面を埋めている。

判明した事実は、被害者が突然部屋に侵入してきて女生徒の二人をナンパにきたこと、被害者と女生徒とは面識もなく、交際もしていない、加害者の駿介が女性二人を守るために、暴行行為をしたこと。

これを信じるか信じないか、そんな事は一般市民にはどうでもよかった。

なにより高校生が、部屋で酒を飲んで女性と遊んでいたことを認めたために、これだけで不信感を市民に与えた

脱衣場にはいった。弥生が脱衣場のドアを開けて、覗いた様子。

「お姉ちゃん背中！どうしたの？……真っ赤よー、痛くないの？」

弥生の驚いた大声がキッキンの母の耳に入ってきた。

すぐにドアは閉められたので、あとの二人の会話は聞き取れなかつた。

暑い日が続いた。

七月もあと僅かで終わりだ。朝顔が垣根に縦横無尽に伸びて満開になつた。

「佳子と植えたのが昨日のようね……元気に育つたわ！まるで佳子のようにきれい！」

紫露草が朝顔に散水した（こぼれ）零れ水を受けて、水玉を滴らせて、キラキラと朝日にきらめいている。佳子は母には何も答えずに、それを眺めている。ふと感傷が佳子の胸に小さな痛みを蘇らせた。

清らかな乙女は朝顔の花に似ていて、処女を失つた今の自分の立場は草むらに咲く露草のように思えた。佳子は目立たない。でも、良いじゃない。

可憐に、精一杯、生きているよ。軽蔑して（むし）筆

り取らないでね、雑草だからって！そう考えることで気持ちを納得させると、朝の涼気が身体を包んで快適なひときにも感じる。

あの日から母との距離が少し遠くなつたような気がした。あれから、母の仕種に同姓の女を感じるときが生れたようと思う。

駿介とのことは、なにも母は気づいてはいない、とおもうが、初めて女の子宮が男の性器に接続され精子を受け入れる経験を持ったことについては、不安だった。

赤ちゃんができたらどうしよう……。

月曜日の朝、失神して母に抱きかかえられた時のことを、何も覚えてはいない。何かうわ言でも言わなかつただろうか？背中や肘の辺りの擦り傷に疑問を持たれはしなかつたか？

妹の弥生すらも、背中の擦り傷に想像を膨らませているように思えた。

「お姉ちゃん！電話よ！」弥生がコードレスの受話器を持つてくる。

「だれから？」母が訊く。散水器のホースを巻き取りながら。

「真由美さん……」

佳子はあわてて、受話器を弥生から引っ手縛るトリビングルームに駆け込んだ。

「な、あの態度！チョ～むかつくよー！ね、お母

「ホント？……大丈夫だったの？ケガをした人……。」

（ホントよー！賢ちゃん、お見舞いに行つたのよ。駿ちゃん、それに彼のパパとママ、ポート部の部長、皆でお詫びに行つたんだってサ！）

被害者のその後については、ニュース報道で何も報じていない。世間一般では今も、重体危篤だと考えているのだ。なぜなの？どうしてニュースにしないの？

マスコミに対する疑問は残るが、真由美が賢治から受けた情報に佳子の胸の黒雲がゆっくりと取れていくように思えた。

母がリビングルームに胸のエプロンを外しながら入ってくる。

ああ……暑い、暑い、と言いながらタオルを胸の中に入れて汗を拭っている。そのくせ佳子の電話に聴耳を立てている様子だ。

佳子は母を背にして途端に笑い出した。最初は母を誤魔化すつもりで、笑い始めたのだが、本当に可笑しくなってきたのだ。バカみたい！指で涙の跡をぬぐいながら。大した事も無かったケガ！真由美のもたらした事実！に安堵して、マスマディアに踊らされた空しさ！に気づいたことが、笑気の神経に刺激を与えたらしい。

「……じゃ、マユー！午後三時、ええーそうそう、行くよー、いつものところで！……バイバイ！」

真由美が受話器の中で笑い始めた。

（……賢ちゃんも、駿ちゃんも警察から釈放されたわ、駿ちゃんのパパが弁護士の先生をたてて、相手の人と示談とかで、うまくいっているんだつて……）

ウン、ウンと真由美の声に答えながら、たちまち佳子の瞳は涙であふれた。

（賢ちゃんは何もやってないんだつてサ、でもあの店で飲んでいた変なオジンが警察に通報してサ、二人がかりで暴行したと言つたらいいの、で、ケンもオトコ気をだしてサ、一緒に殴つたって言つたので、逮捕されたんだつて！バカみたく、へんなの！そう思わない？）

佳子は何と相槌をしていいのか、賢治のこと以上に駿介のことが心配になる。黙っていた。その動搖に気づいてか

（……ごめんね、でもサ、駿ちゃんは大丈夫！ケンと違つて成績も良いし、先生も頗るめだし弁護士もついているから。パパさんは会社の社長だし、お金持ちだから……。ケガをした人も、たいしたこと、無かつたらしいよ。その人が、病院で回復してから、刑事にハクジョウして、ホントのことが解つたわけ！）

（フッフフ……だれか居るのね？そばに……わかっただわー、あとでね、『ボワール』で待つていいよ）

朝の天気ニュースの予報通り、午後になると気温がぐんぐん上がり、三十度を超えて來た。

太陽が真上から照りつける。焼けるような陽光を浴びて垣根の朝顔の花びらも、もはや萎えている。

妹の弥生が隣家の級友とあわただしくブールに出かけた。クローゼットの中は弥生の脱衣で乱れている。後片付けくらいしてよ、と一人でぐちる。

それらを手で片寄せて、佳子は薄紫に白抜きの花柄模様をあしらつたワンピースのブラウスに着替えていた。大鏡の前で、ブラジャーの位置を微調整しながら、横から胸の膨らみをチェック、帽子はどうが似合うかしら、と白く脱色したイグサをメッシュに編んだのを被つてみた。

アクセントをつけたピンクのリボンが背中に垂れている。少し子供っぽいかなと思う。大人っぽいウエアーが欲しいな……鏡に向かって話しかけた。

母と一緒に日傘を差して附いて出る。バス通りのコンビニまで行くという。

母が一緒に日傘を差して附いて出る。バス通りのコンビニまで行くという。

「真由美さんのお母さんは、夜の仕事なんだつてね？」佳子は黙つて歩く。何が言いたいのか分かっていた。真

由美の父親と三年前離婚して、母が駅前の路地裏でスナックをやっている。

「最近、真由美さんの服装はハデよね！佳子は高校生らしくっていいな。」

誉めている。が、母の言い方にはトゲで刺されるような嫌味を覚えた。真由美との交際に不快なのだ。ハッキリ言えば良いのに、と思う。あの日、真由美と秘密を抱いたときから、佳子は更に彼女と、親友の絆で結ばれたと考えていた。真由美的計略には、まだ気づいていない。

大通りに出たところで、扇子を手にした一人の中年の男が近づいてきた。半そでのシャツに、夥しい汗が滲んで背中に張り付いている。

「堀内、堀内四郎さんのお宅はこの先でしたか？」汗を拭き拭き一人が声をかけてきた。

「そうですが、うちですが。……でも主人は役所ですか。」

「それはどうも、丁度、良かつたです。……いえ、かまいません。私ども、こういう者です。」

ズボンの後ろから手帳を取り出して見せた。地元の警察手帳だった。

「少しだけ、お話を伺うだけです。お嬢様の学校の、例の事件の関係で……」

「佳子の……」

その時、佳子はコンビニ前のバス停に丁度到着した、

「……朝は、ごめんね、あのときお母さんが傍に、來たから。」

「わかっているーって、ヨシ！……焼けてないね、真っ白だよ、顔が。でも、仕方ないよね、うるさいの？親ママが？」

「そうでもないけど、何となく出かける気にならなくて、お母さんも出かけなくなったり、……マユの電話待っていたのよ！」

「氣絶したんだって？」

「どうして！……それを？」佳子は驚いた。

「フフフ……ヨシに替わるまで弥生ちゃんとおしゃべりしていたのよ。……大丈夫なの？身体のほう……」弥生のおしゃべり！帰ったらお仕置きだよ！ムカつきながら不安が胸をよぎる。

「他に、何か言った？」

背中の擦り傷を弥生に見られている。

「ヨシも逆質問なの？」屈託も無く可笑しそうに笑っている。

あの日の優子らのせいで起きた傷害事件の後遺症も何も感じさせない。真由美は無神經なのか、余程、大人なのか、迷い顔で佳子は困っている。

「大丈夫！弥生ちゃんが心配してサ、真由美さんも貧血ありますか？だって！中学生にしては鋭いクエッショノ！ヨシが貧血で倒れたと考えたのね、弥生ちゃんは」

バスに走り込んだ。

母が、佳子に声を掛けようとして、振り向いて手を上げたときバスは発車した。

それを見て、二人の男の顔が妙に暗くなつた。

喫茶ルーム「ボワール」に入ると、真由美がいつもの奥のテーブルで待っていた。

携帯電話で何か話している。眼で佳子に合図をして笑顔で迎えた。

「佳子、今来たし、ウン、ウン……いいよ。待ついるわ、早く教えてね……」

賢治との遭遇取りに違いない。真由美的前に置かれた同じフルーツミックスの搾き氷をオーダーして、窓の外、ポプラ並木の歩道を眺めていた。

午後の暑い歩道を行き交うのはサラリーマンの姿が多い。ビルの出入り口にアリの様に、出たり、吸い込まれたりしている。

ふと出掛けのバス停での光景、母と、汗まみれの二人の男の姿が瞼の奥に浮かんだ。

佳子の乗り込んだバスを指差して、暗い顔をした男達が信号の交差点を曲がり視界から消えるまで見ていたのは、何故だろう。

「久しぶりね！……どうしたの？」真由美の声で、われに返る。

佳子は真由美の口の動きを注視した。何を言ったの？

「子供相談の先生みたく、答えたわ！貧血はねー、青春だよ！女のしるし！弥生ちゃんも立ち眩みがあるでしょ？そうならない為にミネラルをたくさん取るのよ！って、答えておいたわ。」

携帯の着信メロディーが鳴って真由美がスイッチを入れた。

真由美が携帯電話をテーブルに置いて、佳子に顔を近づけた。

「湘南に行こう！これから

「エッ！……」

「駿ちゃんが、車で来るの！賢治もね、早田パークイングで待つの。二十分位で来るよ。」

ここから、湘南江ノ島に二時間はかかるだろう。胸がときめいた。でも母の顔が浮かんですぐに、ショーンボリ顔になる。それを、察してか真由美が、

「パイシンしないで！八時には帰れるわ！ドライブしよう？」心配するなと言う。八時は夏の日暮れだ。

「電話入れようか？ママに」それはダメだわ。佳子は母のグチを思い出す。余計な心配を与えてしまう。首を振って拒絶した。

真由美は、その気になつて、バッグの化粧セットをだして手鏡を覗いて、メイクを治している。佳子の心は揺れていたが、あれこれと母に言い訳を考え始めた。駿介

に会いたい気持ちが湧き上がる。血液が全身に巡りめき、身体が熱くなってきた。

駿介との初体験がもたらした、未だに消えない下腹部の感触を脈打たせた。

太陽が舗道に写す、さざめくボプラの陰に反射して、真由美的瞳が妖しく揺れている。同じように佳子の瞳の奥にも情念がゆらゆらと生まれ始めていた。

マユのように大人になるわ！ 夏休みだもの！ 楽しまなくては、と考える。

佳子も真由美的前で、淡いピンクの口紅を引いた。

真夏の太陽を浴びて、寄せては返す湘南の波が、幾重にも重なり合って散り彈ける景色を思い、心がはずむ。去年は近所の家族とみんなで楽しんだ。今年は水着も買ってはいない。

砂浜で賑わう水着の流行り具合を、見ているだけでも楽しいな。駿介と一緒になら、さらに何かが発見出来そうだな！

(八)

早田パークリングの入り口にシルバーメタリックのBMWが止まった。

右前のドアが開いて賢治が降りてきた。

「ヒヤッホー！……お待ちどう！……佳子ちゃんは前だよ！」自分の降りた席に佳子を導く。

真由美は自分で後部座席に滑り込んで、賢治を待つている。

「オーケー、駿介、レッツゴー！」

二人とも黒いサングラスで、マリンブルーのTシャツ姿。ショートパンツから毛脛の逞しい足を曝（さら）して、外車のハンドルを駿介が握っている。

「ヤー、しばらく！」駿介が佳子に言つた。唇が微笑んでいた。眼の表情が見えないが、はにかんでいるのか、硬い表情におもえた。

佳子は涙ぐみうつむいた。何を言つていいか、言葉を探す。賢治が沈黙を救う。

「あの晩、サツに泊められてサ、二日間もロスタイルミガミやられたさ……俺達謹慎中の、今日まで！ あとは学校の処分待ち！」

「ケイコらに附いて行つたバツだよ！」悔しそうに真由美が言う。

「しょうがねえよ、体育館のことがバレないようつて、キミ達に気を使つたのサ」

「でも、結果はお酒飲んだのがバレたことで、ダブルパンチ食らつてキャイーン！」笑つた真由美的顔が、すぐには戻る。

「退学になるのかなあ？……」

込んだ記憶がよみがえる。

同時に、母と街路に佇んでいた二人の男の残影が、また瞼の裏に浮かび上がった。

「どうつてことないよ、休学でも停学でも持つて来い！ てんだよ。たいした学校でもないわ！……何でお酒飲んで悪いのさ！ みんな飲んでいるよ。飲むために売つているんでしょ！ どこのカラオケボックスでも、みんなやつていいわ！」

真由美が喚く。

「そうだよな、高校生と判つても店員が運んでくるもんな。クソヤローの言い分に負けるな！ マユはえらい！ 夏はビール、イッパツ！」賢治も何故、何が悪いのかがよく分かっていない。テレビCMの真似をして、真由美的身体を引き寄せる、自分の下腹部を突き上げてセクシャルにイッパツの仕草をしてみせ、笑い転げた。

佳子は、間違っている、と思う。父は眞面目な公務員で日常は酒もタバコも飲まない。無口で、生真面目に仕事をこなし、これまで娘二人を大きい声で叱り飛ばすことも無かつたし、説教じみた小言もなく今日まできた。

母に全て、教育を任せていたが、発ガン物質の話題が出ることに、酒もタバコもガンを引起し不健康だ、と教えられた。

スポーツをやっているせいで、賢治も駿介もタバコはやらない。

「刑事がね、事情聴取とかいうやつさ、その日の全てのことを訊くのさ、……俺たちは、君らの名前は出さないさ、けど、あいつらは校門で会った時、俺たち四人で飲んでいたことを喋っていたとしたら……申し訳ない、ごめんな！」

佳子に謝っている。駿介の口移しで苦いビールを飲み、佳子に謝っている。駿介の口移しで苦いビールを飲み

駿介は、どう考えているのだろう？横顔を眺めた。

ハンドルをさばきながら、FMから流れているニュー

ポップスに耳を傾けているようだ。

落ち着いた姿が魅力的だった。じっと横顔を眺めていると、駿介が佳子の左手を引き寄せてオートクラッチャーに置いて、自分の掌を重ねて置いた。体温が伝導して佳子は心地よい痺れをおぼえた。掌に汗が滲んだ。

「暑いかい？……」掌の汗に気づいたのか。クーラーは効いている。

「…………」首を振る。

「後ろのお二人さん、暑いよ！」

バックミラーを覗いて、賢治と真由美に言った。二人は既に後部のシートに倒れこんでいた。唇を弄（むさぼり）あう音が聞えて、真由美的吐息に艶めかしい喜悦の歎声が漏れはじめていた。

インター・エンジのモーテル街が前方に見えてきた。

横浜ICでおりて、藤沢バイパスへ向かうつもりだ。

「モーテルに行きたしい……」突然、賢治が窓の外に見えるモーテルを顎で差した。

「ラブ、ラブ……ラブラブしたくイ」

賢治の首に腕を巻きつけた真由美はいつも大胆だ。

「先に海に行こうよ。好きなんだ、夕暮れの海が……」

駿介が珍しく主張した。

佳子の手を握りしめた。そして指を絡ませ、口に引き

「着いたら、母に電話いれるから」

「これ、使えよ。」ポケットから携帯電話を出した。

「電話あげるよ、君に。今後の連絡用だよ、俺はオヤジの会社のものを別に貰うから、心配しないで！」

「でも……」妹の弥生は自宅に携帯電話持参でクラスメイトを呼んで母に圧力をかけて、早々と買わせた、佳子はそれまでは不便も感じなくて必要としなかった。が、今度は賢治との連絡に必要だった。

「俺が困るから。持ってくれよ……」

海の匂いがしてきた。

由比ガ浜に到着し、パークリングに入る。

夕凪（ゆうなぎ）になつたのか、青く、穏やかな海だ。

それでも波待ちのサーファーがオットセイのように揺れて戯れている。

すでに、帰り支度の若者も多い。

駿介はレストランに向かつて歩き始めた。

近くに父親の別荘もある。

駿介は子供の頃から度々この屋敷に逗留し逗子マリーナで父親とモーターボートに乗ったり、釣りをしたり家族で夏を過ごしたから、鎌倉の地理には明るい。

今年は駿介の起こした事件のために家族全員で謹慎していた。別荘は父が弁護士の家族に貸した。ボート部の合宿も中止、秋の関東レガッタにも参加取りやめ、部活

寄せて佳子の指にキスをして同意を求めていた。くすぐったい、けど気持ちいい。

車は藤沢方面のバスに入していく。反対車線に車が多い。いつもの夏のようになりは大渋滞になるだろう。

家に帰るのは遅くなるだろうな。佳子は少し不安になる。賢治に悟られないように西方に目を移すと、ブルーのスマーケウインドウを通して太陽が未だに西空に高く、鮮やかに燃えている。日が落ちるまで、あと一と二時間はあるだろう。

駿介に従うしかない。

空と海が瞬く間に紅く染まっていく夕暮れを見ながら砂浜に佇む二人のシエルエットが主役を演じるヒロインのようにならび上がり、佳子の気持ちに甘い感傷を植え付けた。

もう私は大人よ、駿介さんと結ばれたんだもの。

どこまでもついて行くわ！幸せになるの！

母の心配そうな顔の表情に、ごめんね！と、胸の内に呟いている。江ノ島に着いたら、電話を入れるわ。

何時の間にか、後部座席がおとなしい。賢治と真由美が馴れ合って眠り始めた。

「知っている？……海岸に有名なカレーのウマイ店があるんだ！見晴らしも良いし、そこに、まず行くさ」

「わたし、何も知らないから、おまかせ！駿介さんに」

「少し遅くなるけど、構わないか？」

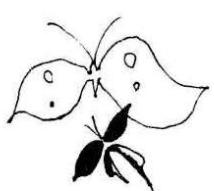
そのものが廃止の憂き目にあっていた。
一週間も経つと、兄の洋一がもはや駿介の謹慎に付き合う意味がない、と、言って父が出かけた後、すぐにK大のガールフレンドと北海道に旅立つた。いつも父に叱られるのは母だ。事実を知ったら父は母を責めるだろう。兄弟は母の優しさに救われていた。暖かい家族に何の不満もない。優しい母にだけは苦痛を与えてはいけない、と思うが身体の中からムクムクと湧いてくる不可解な反抗に負けてしまう。そして結局母に甘えてしまう。駿介も暑い夏の太陽が中天に座した午後、賢治の電話でキレ、謹慎に決別した。

兄の愛車の鍵を取ると、車庫に向かつた。食卓のテーブルにメモを残して。

「ママ、ごめんね、海を見に行きます。海を見て将来を決めます。心配ばかりかけて、ごめんなさい 駿介」

カレーを食べながら、今日は帰りたくないな、駿介は思った。

北条時宗とその時代(二)



島 津 隆 子

三、祖父と父の相次ぐ死

1 祖父・重時の怪異な病

弘長元年(一二六一)五月十二日、僧・日蓮が、鎌倉の由比ヶ浜から伊豆へ流された。

八年前の建長五年(一二五三)五月、自ら「法華經」の悟りを得て日蓮宗の開祖となった日蓮は、鎌倉入りをして自宗の布教を始める。しかし、すでにこの地には念佛宗と禅宗が根を下ろしていた。幕府の執権は時頼、連署が重時の時代である。

宗教に理解を示そうとする時頼ならまでも、重時は熱烈な念佛信者だったため、この急進的な布教活動をはじめた伝道僧を危険分子とみなして憎んでいた。

それから七年後の文応元年(一二六〇)七月十六日、

り憑かれたようじゃ」

と言って、心身喪失の状態に陥ったのである。

娘の時頼夫人が、父に面会して言葉をかける。

「父上、どうなさいました。先日の将軍様お越しの折に

は、あんなにお元気でしたのに」

「自分でもどう説明したらいいのかわからない。胸、いや、心が痛むように苦しくなって、……体中から力が抜けて震えがくるのじゃ」

「京都時代の楽しかったことでも思い出しましょう」

「何も思い出したくもない。ひゅうひゅうと胸の中を風の吹く音がする」

やがて、重時の胸は錐にでも揉まれるように痛み出した。

そして耳には、沢山の人が近づいたり、遠ざかたりする足音が聞こえてくるという。

(これはきっと、争いに負けた者たちの死の行進の足音であろう。その足の群がわしの胸を踏みつけて行く)

重時は息苦しさを娘に訴えた。

(父上はきっと心身を擦り減らし、疲れが限界にきてしまったのかもしれない)

夫人は言葉を失って父の顔をみつめる。

思い返せば、父親の一生は子たちの成長に賭けた忍耐の連續だった。娘の自分も、時頼に嫁してからもずっと、父親に側で見守られ、力になつてもらってきた。

三十九歳になった日蓮は、全国に疫病や飢饉をもたらした鎌倉の大地震、それによって噴き出した社会の矛盾を衝いた『立正安國論』を書き上げた。そして、時頼の近臣宿屋光則に依頼して、すでに執権の座を退いた時頼に提出したのだ。

時頼は出家して最明寺入道となり、執権職は重時の子長時に譲っていたが、依然として実権は得宗の時頼にあった。日蓮にとって状況は七年前と少しも変わっていなかつたのである。幕政を批判した日蓮は、ついに配流になる。

しかし、日蓮を伊豆へ流刑にした張本人の重時も、それから半月余を経た六月一日、怪異な病に見舞われる。その日、重時は廁^{かわや}で物の怪^けを見たといつたきり、まるで魂を抜き取られたよう^けい惘然^{ぼうぜん}としてしまう。「何が何だかわからないが、わしは心身が氣鬱^{きうきう}の病にと

夫人は父の手を取つて優しく撫でる。

それでも、父のこの豹変ぶりは娘の理解を越えた出来事である。

(父はいつも自分の言う通りにすれば間違はないといつて、力強く子たちを説得していた。書き物にまでして、細々と注意を与えてくれたというのに……。この脆さは、一体どうしたことだろう。なんだか父上が壊れてゆきそうな気がする)

突然襲つたこの驚くべき事態に、夫人はなす術もなく、呆然と立ち尽くしてしまうのである。

確かに重時は、自著『極樂寺殿御消息』の中で、主

君への忠誠心、親・物領の命に従うこと、妻女・それ以外の女性にも思いやりが大切なこと、飲食の作法に心を用いること、百姓・商人を育むべきことなどを説いていく。さらに、自分の妻子がもの申す時は、よくよく聞くべきこと、不都合なことを言うのは、女子供の常と思い、卑しんではいけない。かりそめにも妻以外の女をもつことは、あさましい、もし犯したならば罪でかならず地獄に墮ちる、と記している。

(父上は女子供に対しても、寛大な温かい心をもつて遇してくれた模範的な家父長だったと思いたい。しかし……)

夫人の心は乱れる。倒れた父親の陰で囁かれた風聞を

耳にしたときの、胸に刺さった痛みが蘇るのだ。

「重時殿の『消息文』を読んだが、ずいぶん立派なことが書かれているものじゃ」

「わしも読んだ。女たちを大切にして、恥をかかせないように、などとな。だが、現実の重時殿はどうだ。わしの知るかぎりでも三人の妻妾がいる……ということは、妻に恥をかかせてはいるではないか。真っ先に地獄に墮ちるのは、重時殿ではあるまいか」

「どんな賤か女であろうとも、その女の欠点を言つてはいけない、などといながら、傾城、つまり遊女の扱い方など、まるで冷たいものじゃ」

全くそのとおりなのである。自分の屋敷にそういう種類の女を呼ぶときは、器量もよくなく、衣装も安物をまとっている者を選べというのだ。

その理由が振っている。そういう女には日ごろ客がつかないから、感謝感激してよく働くし、こっちも心を奪われる心配がないというのである。

その書き方には、あからさまに、一族の安泰と保身がみえている。謹厳、実直とみせかけながら、実は汚ない打算家だ。そう受けとられても仕方がない。

「あれは、重時殿の理想論にすぎまい。それも、かなり計算された綺麗ごとだ」

ついには、腹立ちまぎれに切って捨てられた父親の偶像。夫人は人間がそんなに綺麗に生きられないことはわ

かっているつもりだった。母親以外の女と関係があつたことも真実だろう。しかしそれも、人間臭い生きざまだとはいえまい。

「消息文」を書いたことで、父親が偽善者といわれようと、その表も裏も、弱さも強さも皆ひっくり返めて、娘にとれば愛する父親なのだ。みっともない父親でもいい。できることなら、今しばらくは生き長らえてほしいと、願わざにはいられない夫人である。

一日おいて三日、梅雨の前ぶれのような雨がしとしとと降る。

樹々の葉末から、愁訴のような滴がしたたり落ちている。

どうしたわけか、この雨の中を飛翔してきた海黒鳥、いや海鷗だろうか、御所の西端と台所の東の間に墜ちたのである。この鳥を捕えた二階堂行方の家人たちは、鎌倉の海辺に放つてやった。

そんな不吉な出来事を鎮めるため、翌日、御所では鳥の怪の占いを行い、七日には政所からの沙汰で、この怪を鎮める祭りが行われた。

しかし重時の発作は、毎日、決まって夜に起きた。ならば瘧病ではないかと、十一日から若宮僧正に加治祈禱を頼んだ。すると十六日の夜には、

「極楽寺重時殿は、この月の二十二日、病癒えてお元気になられましょうぞ」

している。他宗教を容赦なく破折するので、他から強い反感も買うのである。

「言えば、日蓮は声が大きいのじゃ。しかし、それが信念であるから、日蓮にとれば“以つて銘すべし”ということだろう。だが、恐れることはない。極楽寺殿の病は癒えよう。信仰は人の内面の問題だから軽々しく言うことはできないが、人は自身の信じる道を生きることしかできないのだ」

「では、仏の教えに優劣はないのですね。内なるわが心の捉え方によるのですね」

「そうだ、最後には、仏に肉薄する厳しい信心が問われるであろう」

重時の病は若宮僧都のお告げのとおり、二十二日の夕べには、回復の兆しをみせ、心身は平癒したかのように見え、回りの者はほっと胸を撫でおろした。

しかしそれも束の間のこと、重時の病氣は再発。この年の十一月、六十四歳で帰らぬ人となつた。

他人の目をくらませるぐらいの芸当ができなくて、なんて天下など動かせるものかと思っている時頬である。宗教に優劣や強弱があるのでしようか……。もしもあるとすれば、念佛宗は日蓮宗に負けたことになるのでしょうか

夫人は時頬に問うた。

「人それぞれに信ずる宗教があつてよいではないか。優劣などつけ難いものじゃ」

ただ、日蓮が辻説法などでみせる論法や気迫は他を圧

2 死の重み

片腕のようによく頬みとする舅の重時を喪った時頬と、父を亡くした夫人の嘆きは深かった。

時宗も、人の死の無情を幼い心に味わっていた。その苦衷を、時宗は涙で母に訴える。

「それがしの生れた時は甘縄の産所で、元服の時は御所

の廊で、姫が来た婚姻の宴はこの新邸で、小笠懸の時は極楽寺の山荘で、お祖父さまは、いつも慈愛の眼差しを注いでくだされた

祖父の姿を見ると、時宗は心が落ち着いて何でもできるような気持ちになった。それなのに、その祖父がこの世からいなくなってしまったなどと、信じたくないのです。ある。

「それがしは、これから自分がどうしたらしいのだろうと、途方に暮れた心境に陥っております」

「人には必ず死がくるもの。時宗殿は亡きお祖父さまの慈愛に守られて、独り歩きができなくてはいけません。

どこから、お祖父さまの魂魄が見守っていてくださいます」

と時宗は母に慰められた。しかし、時頼は夫人をたしなめた。

「ひととき傷を嘗め合うのもよからう。だが、人はいまわの際に生の人間が出るものじゃ。良くも悪くも、それまでの生きざまの総決算が死であることを子にも教えなければなるまい」と。

それでも夫人は、独り悔恨の思いを自身に呟く。

（人の一生はまるで樹木の下草のようなものだ。この庭の水引草のように、小さな花をつけてひっそりと咲いても、一陣の風が吹けばあとかたもなくなる。わずかな時間が経てば、思い出す人とてもない。）

所は男も女もみな仏法者だったそうじゃ」

「ああ、それで、禅尼さまのお屋敷にも、仏さまを信じる人しかいなかつたのですね」

「彰子さまの父・道長殿は、極楽浄土をこの世に出現させようと法成寺を建立した。道長殿の住む寝殿は、淨土はかくこそ見ゆる」というほど壯観だったそうな」

「ご自分の恵まれた境涯を、

この世をば わが世とぞ思う望月の

かけたことのなしと思へば

と詠まれたのでしょう」

「しかし、老いと死は避けられないものじゃ。死が迫ってきたとき、道長殿は枕を北にして西に向き、阿弥陀仏の像の御手に結んだ糸をしっかりと握りしめ、口元にかすかな念佛を唱えながら身罷つたと聞くが……。その死にざまを弱さとみる者もいよう。しかし、赤裸々な自分と仮に向い合う姿こそが、その人の信心なのであろう」

「あなたさまは、信仰深いお母さまの掌中の玉のようなお方ですもの。信仰心も厚く、弓馬にも長けて、蹴鞠もお上手だし。何事にも打ち込まれるところは、お母さまゆずりなのでしょう」

「おいおい、おだてているのか。母に頭が上らない、青臭い奴と思っておるのではないのか」

「とんでもない。私はお母さまがあなたさまを育てたように、時宗が育っているのか、こころもとないのです」

父を頼りすぎ、甘えすぎていた娘の私を赦して欲しい。どんなに強制にみえても、人間はいつまでも頼りにできるものではないことを父に知らされた

確かに、時頼の受けた痛手も大きかったが、鋼のような意志は失っていなかつた。重時の死に至るまでの姿を、わが身に置き換えて反芻した。そして、萎れかけた夫人に、

「これからは、極楽寺殿のぶんまでそちを大切に守るぞ。安心するがよい」

時頼は力をこめ、熱く夫人を抱擁した。

3 時頼の信仰

時頼は夫人にしみじみと語りかける。

「わたしの母、松下禅尼は上東門院・藤原彰子さまをお慕いして、いつも『わたしもあの方のようになります』と申しておった」

「藤原道長さまの娘で、一条天皇の妃になられたお方ですね。宮廷には彰子さまを中心に、才豊かな和泉式部や紫式部など大勢の女御が詰めていて、さぞ、高貴な雰囲気に彩られていたことでしょう。とても華やかな印象がございます。信仰心が篤く、誰からも慕われるお方だつたのですね。私とて憧れています」

「そうじゃ。仏法を信じ行じない者は信用できないと言われて、召し使わなかつたという。だから彰子さまの御

「こんどはばかりに殊勝な口ぶりじゃが、心配いたすな。男はいつの間にか親離れをして、一人前の男になるものじゃ」

「このように、時頼の信仰心は幼い頃より母・松下禅尼から育まれたものであった。

時頼が執権になつた寛元四年（一二四六）九月二十七日には、まだ在京中であった護持僧・隆辨を招き、薬師如来を造らせ、大倉薬師堂に安置した。

それ以後、薬師如来への帰依は深まり、自身の病気平癒、夫人の安産祈願など、薬師堂への参詣も多かつた。

時宗が生れるときの隆辨の祈禱と、その予告のみごとの中はすでに記したが、隆辨は宝治元年（一二四七）六月二十七日、鶴岡八幡宮の第九代目の別当に任命され、重用されるのである。

建長五年（一二五三）四月二十六日、時頼は像立した七仏薬師像の供養の儀を行い、二人の子息の息災延命の御祈請をした。もちろん導師が隆辨であることはいうまでもない。

しかし、それでも安心できない時頼は隆辨と相談して、二子のために新たな寺院を建立するのだ。その場所を大庭の御厨内に選んで、二人の子息の名にちなみ聖福寺とつけた。そして、この聖福寺に鶴岡八幡の御正体や御正宝などを移し、鎮守諸神殿を設けたのである。

ちなみに諸神というのは、神験・武内・平野・稻荷・

住吉・鹿島・諏訪・伊豆・箱根・三島・富士・夷社などである。そして、寺の神験宮で舞楽を催して、子息の安泰と関東長久を祈願したのだ。

その他にも、時頬は仏事を頻繁に営み、鶴岡八幡宮は真言密教としての役割を果たしていたのである。

建長六年（一二五四）六月十五日、真言密教によつて泰時の十三回忌を青船御塔で行つた。

時頬には、祖父・泰時に寄せる深い感慨があった。

ある僧が泰時に一寺を建立するべきであると説いたが、時代とともにどんな宗教も弊害を生むことを知る泰時は、生涯、寺を建立することはなかつた。

奈良朝では華嚴俱舍三論が最も盛んだつたが、時代に合わなくなると、天台真言がこれに代わつた。そして、新たに禅宗が来た。もたらしたのは僧栄西（臨濟）であり、次いで帰朝した道元（曹洞）であるが、根は一つである。

泰時は明惠という僧を師として、「あるべきよう」の六字を学んだのだ。明惠は、泰時に論した。

「君は君の、あるべきよう。臣は臣の、あるべきよう。父は父の、母は母の、子は子の、あるべきよう。」に振舞うのがよい。

泰時殿が執権として、民の財を集め無用な伽藍を建てることは、執権に「あるべきよう」な道であります。

はなかつたのである。

この時代はまさに「宗教の時代」といわれるが、宗教も所詮は人間の繰る仏の法である。時代の申し子時頬は、広範にわたつて貪欲に、時代にマッチする僧侶を求めていた。

だから、隆辨とのかかわりに留まらず、僧叡尊にも帰依したのだ。しかし、なんといつても、時頬の仏教的手腕は建長寺の建立によって、北条政子と栄西に始まり、泰時を経て、長くつづいてきた臨済禪と幕府とのかかわりを具体化することに発揮されるのである。

まさに仏の手引きであろうか。

その端緒は、寛元四年（一二四六）蘭溪道隆が宋の国から渡来、博多に來たことに始まる。翌年には鎌倉の壽福寺に入つた。

これを伝え聞いた時頬は、道隆を大船の常楽寺に招き僧堂を開いたのである。ここで宋風に純化された禪の作法は、人々の注目を浴びて、法儀が盛んに行われた。道隆は京都で活躍していた円爾を鎌倉の壽福寺に呼び、共に禪林の規式を整え、鎌倉禪を確立していくのである。

時頬は道隆に禪についての教えを請い、いつか禪宗の寺の創建を考え、願うようになつていつた。

それから五年後の建長三年（一二五一）十一月八日、

か」と。

泰時は当時、起草委員をつくり「貞永式目」という法典を制定したが、これは民事・刑事・訴訟などを五十一ヶ条に定めたもので、武家、道家、守護地頭、主従、親子の「あるべきよう」を示して、泰時の面目を施している。

仏遊びをしていた頃、微笑で見守ってくれた祖父がいたから、仏に守られている今の自分があると、時頬は信じて疑わない。

思えば、軟弱な子供を武芸の道に導き、鍛えてくれたのも祖父泰時であった。そして、何よりも武将として硬軟、清濁を合せ飲む帝王学を授けてくれた。それも、時頬に時頬の「あるべきよう」を教えてくれたのであろう。お陰で北条氏は今日までその存在を誇っているが、これを後に引き継ぐ責務を全うできるよう見守つて欲しいと、合掌して祈る時頬の横顔は、真摯な佛教者の顔である。

また時頬は、幕府の始祖・朝頬公に対する供養も欠かさずに行つた。

寛元四年（一二四三）十月十三日には、朝頬公の法華堂に参詣して供養した。宝治元年（一二四七）九月、同二年十二月、そして建長四年（一二五二）一月、同六年十二月にも法華堂参詣を行い、朝頬公の供養を怠ること

建長寺造営の事始めが行われた。そして、二年を費やして、工事が終る。

建長五年十一月、山内荘の入り口巨副呂坂に、中国の徑山を模した巨副山建長寺が完成した。ここに、宋僧による最初の寺の建立をみたのである。これが、どれほど人々の精神的な支柱になつたことかはかり知れない。

道隆が將軍家の安寧と国家の安泰、仏法の隆盛を願い、「伏して願わくは」から始まる一文を碑に刻み、時頬もまた、この碑に「公武の長久と、幕府の繁榮の御祈願」を刻んだ。

十一月二十五日、建長寺造立供養の儀が行われた。もちろん供養の導師は道隆である。

本堂の前に植樹された柏樹の苗木を見ながら道隆は感無量である。

「この拙僧、得宗殿にお願いがござります」「なんなりと……」

「拙僧は國を出るとき、気に入っている柏樹の種子を持参しました。そして、こっそりと前の寺の庭の隅に蒔いておいたのです。するとどうでしょう、すぐ芽が出て、立派な苗木に成長しましてな。それをこの建長寺の庭に植えさせていただきたいと思いますのじゃ」

「そうでしたか。ぜひ、植えてくだされ、お願ひ申す」こうして根づいた柏樹は大樹となり、その奇怪な枝振りは、仙人でも見るような高雅さだと、後世、寺を訪れる。

る人々を感嘆させるのである。

今も建長寺の仏殿前に立つと、真っ先に、和名はイブキ、別名、伊吹柏樹ともいわれる巨きな古木に目を奪われる。

これが開山蘭溪道隆お手植えの樹と伝えられている。

そして、山ノ内にある時頬の私邸に造営を進めていた最明寺が完成した。康元元年（一二五六）七月十七日には、將軍も参詣して落慶法要が営まれた。

この最明寺は時頬の死後、廢寺となつたが、時宗が父・時頬の冥福を祈るために、最明寺を前身として禅興寺、正確には「福源山禪興仰聖禪寺」を再興したのである。

今、禅興寺はないが、支院の一つであつた名月庵が「名月院」と名をあらためられ、その姿を今日に伝えている。

名月院には南北朝時代の作といわれる、法体で禅定印を結び、安座する時頬の塑像がある。時頬の墓もあるが、これらは禅興寺から移されたものであろうといわれる。

十一月二十二日の寅の刻、時頬はこの精舎で、道隆を戒師として出家するのである。法名は覚了房道崇となつた。すべてが予定の行動であり、日ごろから抱いていた願いが叶つた時頬本懐の瞬間であった。同時に、時頬は執權職を辞すのである。

「その時によつて違うが、修行をつづける行脚僧になつたり、民・百姓に身をやつして、人々の生活を垣間見ることもある。東北を鄙びた地方などと言うと、認識不足を笑われようぞ。昔から、名だたる武士どもが、都を定めて統治した町が東北には沢山あるのじや。整つた道もある。海岸道路は国司や郡司の赴任路でもあるし、貢ぎ物を運ぶ道でもある。山合の街道もある。わが頬朝公の奥州遠征の折に、兵士たちが通つた道でもある。傷つき倒れた兵士たちの鎮魂の道でもあるのじや」

かつて時頬が訪れた象潟は、その昔、比叡山延暦寺の円仁（慈覚大師）が布教の旅の途中に立ち寄つた折り、この地が嘉祥年間（八四八～八五一）の震災で疲弊しているのを見て、復興を願い、仁壽三年、蚶方寺を建立したという。また円仁が、象潟の地を氣に入つたことが、寺を建てた由来とも伝わる。さらに時代をさかのばると、三韓征伐の神功皇后がここに漂着し、御子（後の応神天皇）を生んだとの言い伝えも残る。

寺域も広く、象潟湖の遠浅の入り江に、八十八潟、十九島を浮べるみごとな絶景は、陸前・松島に似ているといわれた。時頬も、この景勝の地をことのほか気に入り、歌を詠んだ。

4 象潟の追憶

「いつぞや、わしには夢があると言つたな。覚えておるか」

もちろん夫人は覚えている。

ふと、その夢とはどんなことなのかと思うときもあった。

「わしはもう一度東国へ心ゆくまで旅をして来たいと思う」

今までにも何回か、お忍びの急ぎ旅をしてきたが、今度はなぜか、夫人に告げて行きたくなつたのだ。

今までの旅は、どんな旅だったのかと興味を示す夫人に、時頬は秋田の象潟の蚶満寺（秋田県本荘市由利郡象潟町）まで足を延ばした時のことを話して聞かせた。

「知つてのとおり、東北地方には三浦氏滅亡の後、わが北条氏の得宗領になつた所が多くあるのじや。だが、それらの地は鎌倉から遠く離れてるので、守護・地頭の施政に目が届かない。だから彼ら御家人たちの苦情や悩みに耳を傾け、救済の手を打つ必要がある。つまり、為政者、仏教者としての目配りをすることが、わしの旅の大きな目的なのじや。そのためには、幕府の祈禱所である臨濟禪や真言密教の寺院を中心地に造営しなくてはならないのじや」

「あなたさまの旅のお姿は？」

おしまれぬ命も今はおしきかな

また象潟を見んとおもえば

象潟の汐干の磯に旅寝して

袖にぞ月をやどしめるかな

そして、本堂や山門を建立し、天台宗から禅宗に改宗させ、寺の名を千満寺と改めさせたのである。その上、二十町歩余の土地を寺に寄付するお墨附きを与えた。寺の庭にはツツジも植樹したといふ。

また、それだけに止まらず、時頬は正嘉元年（一二五七）八月十三日、神功皇后にちなんて象潟に四靈の地を定めて、殺生禁斷の令を宣し、手厚く保護したことでも夫人に語つて聞かせた。

ちなみに、この名勝の地は、文化元年（一八〇四）六月四日、出羽を襲つた大地震によつて象潟湖が崩れてしまい、風景は一夜にして平地と化し、一変してしまつたといふ。

まさに、伽藍も地形さえも長い風雪に朽ち、形を変え人々の記憶からも消え去り、このように歴史の塵の中に埋もれてゆくのである。

こうして、時頬が夢みる津軽への憧憬はますます募つていった。

時頬はしきりに、どうしても津軽まで行きたいと思うようになった。なぜか、これが北限ぎりぎりの処に行く、最後の旅になるような気がするのである。

夫人の目には、そんな時頬の姿は、まるで夢を追いかける少年のようにも映ったが、反面、仏道修行に身も心も打ちこむ老僧のようにも見えた。

5 津軽へ旅立った時頬

弘長二年（一二六二）、時頬は廻国のために、北の津軽の地へ旅立つた。

時頬が津軽の地へやつてきたのは、二度目のことになる。ここには昔、常陸安闇梨ひたちあじやりという僧のいた寺があつたといふ。時頬の片腕となつて補佐してくれた夫人の父・北条重時が、領主であつた時代、この常陸に帰依したことを見き知つていた時頬は思う。

（再びこの北限まで私を働き動かしのは、伯父であり舅であつた重時殿かもしれないな）

重時は荒れていた寺の殿堂を華麗に普請し、多くの田畠を寄進して、靈台寺と改名したのだった。しかし、それから幾ヶ月が流れ、美麗だった靈台寺は寂れ果て、今は見る影もない。

（……ああ、夢にまで見た最果ての地に私を誘つたもう一人は、愛しい唐糸だ……）

かつて、時頬がこの地を訪れた時、唐糸という美しい女を寵愛した。しかし再会を果たせぬまま、無情な歳月が流れるだけだった。唐糸は無残に衰えた自分の容色を嘆き、風の便りに愛しい男の廻国を聞くにつけても、（色香も失せ、枯れ果てたようなこの身、なんの面目があつて時頬さまに再会できようか。かつて、愛を交した瑞々しい私だけを覚えていて欲しい）

と唐糸は一人嘆き悲しんだ。

人は時として、魅入られたように一時に凝縮して命を燃やしてしまうものだ。そうならば、今の唐糸は燃え津のようなもの。怠惰に永らえてもつらいだけだ。

（陽炎のような現身なら、いっそ消え失せたほうがいい。でも、あの方に逢えて、契りを交した私は幸せ者だった。この満ち足りた追憶を胸に、いっそ……）

思いつめた唐糸は、冷たい石を抱いて入水してしまつたのだ。

（この東奥の藤崎村にいた唐糸よ、僅かな逢瀬だったといふのに、私を慕い、思いつめて、死を選ぶとは。生きていればこそ、また逢えたかもしれないものを）

「こんどまた、いつ逢えるやもしれない唐糸に、この毘沙門の像を与えよう。きっと守られようぞ」

かつて別れの日、時頬はこんな言葉を唐糸に残した。

「うれしい……わたしの一生の宝物にいたします」

（わしは忘れまい。毘沙門像をそっと持つた唐糸の白い

指先、それを拌んだ時、はらりと降り懸かつた細い髪の毛の一本までも。そして、憂いを含んだ切れ長の薄い瞼も、紅色の花の唇も、きめ細かな滑る肌もだ。静かに眠れ、唐糸よ……）

哀哭した時頬は唐糸の冥福を祈り、せめてもの償いにと、廃れている旧跡を興して精舎を建立、臨濟宗護国寺と改名したのである。加えて、田舎、花輪、平賀の三郡を寺に寄進した。それでも唐糸恋しさの募る時頬は、鰯ヶ沢の八幡太宮に熊野祠を建て、唐糸をねんごろに弔つたのである。

それから九十九年後の延文四年（一三五九）、南北朝時代、奇特な人物が、唐糸の百遠忌を営み、碑の銘に刻んでいる。

「藤崎の野に、唐糸御前の古い碑が半ば土に没して埋まっていた。鎌倉最明寺時頬殿の妾、唐糸妃の古墳である。これははじめ堀越（地名）に建てた祠だが、後にここに來たものである」と。

その風景を、津軽の俳人石亭が、詠んでいる。

からむしや、幾夜さらしの塚之松

青森県藤崎町は、古い歴史をもつ地であるという。前九年役、厨川の戦で北地アイヌの酋長阿部一族は、

戦いに敗れ分裂した。この時、郷地藤崎に逃れた陸奥国の豪族阿部貞任の子高星は、ここを定住の地とし、代々子孫を繁栄させた。高星丸は津軽各地で大竹丸と呼ばれる大酋長で、当時の藤崎の旧城址は、今ふるだての古館のことだという。

中央政権は、高星の後、この地で勢力を奮つた安東家に全津軽の統治を委任し、安東家は十三代にわたり藤崎を都とした。

現在も藤崎町には、八幡森と唐糸御前の舊蹟が残つてゐる。

唐糸の眠る護国寺は、その後、幾星霜を経て曹洞宗満藏寺と改められた。里俗禪宗の三十三ヶ寺の中に満藏寺の名をみつけることができる。そして、「ここに、平時頬妃、唐糸御前が所持していた毘沙門の像があつた」と記されるが、今、寺跡は残っていない。

時頬が自ら叡尊を招きながら、実際に会うまで、四ヶ月ぐらいの間があった。

「お呼びしておきながら、何ともすまないことであつま

6 時頬の死

弘長二年（一二六二）六月、時頬自らが願つて奈良西大寺から鎌倉に招いた僧・叡尊を訪ねたのを皮切りに、時頬は忙しく僧たちと対面した。

時頬が自ら叡尊を招きながら、実際に会うまで、四ヶ月

した

「何の何の、拙僧も忙しくしておりましたので。何かございましたか」

「私は政事に忙殺されることばかり多くて、現に叡尊殿に会う時間も惜しむようであった。しかし、それは恥すべきことだと、ふと思ひ当りましてな。今日はこうして飛んで参りました。ご無礼を許して下され」

「何の何の、それぞれの立場というものがございます。忙しいということは、それだけ仕事に身が入っている証拠なのですから」

「いや、名聞名利に流されているのかも知れない。お恥ずかしいが、仏法のために命を捨てるなど、思いもかけないことであったと、気づいたのです」

「お噂に聞くと、仏法には深く帰依されていると伺っております」

「いや、それも、一步外に出ると、命を狙われておるよう、危ない目にも遭う身なので、得手勝手な仏頬みかもしれないませぬ」

時頬は懺悔ともとれる言葉を残して、叡尊のもとを辞した。

十一月十六日には、宋から招請した無準の法嗣兀庵

普寧を鎌倉に招いて、建長寺の第二世の住持とした。

もちろん幕府の要人として、普寧から外情を探る目的もあったことは否定できないが、時頬は熱心に普寧に参

と見ないうちに背丈が伸びて、一段と美くしくなった堀内殿がいた。

堀内殿ははにかんだ表情をして、時頬のそばに座ると、「お大事になさってくださいまし」と声をかけて、静かに立ち去った。

「ほんとうによくできた姫でございますよ。童心と大人びたところがほどよく同居していて、そばにいるだけが心が和みます」

時頬は、夫人の言葉を黙って聞いた。

だが、周囲の望みも空しく、時頬の病は密かに進行していった。

十一月八日には等身大の千手菩薩像を彫らせて供養をおこない、導師松殿僧正良基は伴僧十二人と共に、昼夜にわたり、千手陀羅尼の御経を読誦し、五穀を断つた。

伴僧たちは一日三度の行水をおこなって病の平癒を祈禱したのである。

十三日には尊家法印は「法華護摩」を修行し、松殿僧正は時頬邸で「五穀断食の行」を修した。

十五日からは真言密教の秘法である「不動護摩・三時護身法」の修法も行われた。

しかしその甲斐もなく、時頬の病はよくなることがなかった。

十九日、容体は危急に及び、時頬は最明寺の北邸に移つた。

禪して、大悟を得たのである。

そして、建長寺開山の蘭溪道隆は京都の建仁寺に移つた。

時頬は蘭溪に与うる書のなかで、別離を惜しみ、「大師和尚蘭溪の恩徳を思うと、どのようにその報いに感謝しようか。いたずらに往時を思うと、心が痛く、ご遺徳を忍ぶととめどなく涙が落ちる。和尚が指示してくれた一句を胸中に抱き、念々に教えをひっさげて呼び覚ましてゆく。和尚とこの弟子は、二無く、分れ無し。別も無く、断も無し」

と往年の恩徳を偲んだ。

自らの死を予感したのか、時頬は縁した僧たちと面会し、それとなく別れを告げたのであろうか。

翌弘長三年（一二六三）八月ごろから、時頬は体の不調を訴えるようになった。

「津軽への旅などで、お疲れがたまたのでございました。うごゆるりとおやすみ下されませ」

夫人は横たわる時頬にうちわで風を送りながら、せわしごぎた夫を労う。だが、庭の樹木の緑が時頬の顔を染めてでもいるかのように、頬に血の氣のないのが気がかりだった。

堀内殿が、庭のほたる袋の花にとくさをあしらった生花を、そっと床の間に置いてくれた。

瞑目していた時頬が、人の気配に目を開けると、ちょっと

二十日には、時頬自身が尾藤太・法名淨心と、宿屋左衛門尉・法名最信の二人に命じた。

「最期の刻がきたようじゃ。もうこの上は、心静かに身罷りたい。看病のため六、七人の身内の者以外は、見舞いの人々を遠ざけよ」

言葉を失った二人の御家人は、とうとう来るべき時がきてしまった絶望感にうなだれたまま身動きもできなかつた。

「よう尽くしてくれた。最期まで、よろしく頼んだぞ」

二十二日、時頬は袈裟衣を着け、禅僧が使う、木綿を張った椅子の形をした繩床に上つて端座した。

少しの動搖も感じさせない姿である。

（今、わしの人生は終る。思えば人生は旅のようなものだつた。

様々な事もあつたし、いろいろな人にも出会えてよい旅であった。不肖な身でありながら、得宗となり執権の地位にもいた。

若い身空で権力の座についたため、過ちもあつたろうが、國家を擁護するのは神仏の明徳であると信じて、職分の大過なきように、仏教者として悟道を求めたものだ。仏法の師、隆辯、道隆、普寧よ、さらばじゃ。

そして、出家、退任後も幕府の後見人として、庶民救濟のため、疾病祈禱を命じる教書を諸国に発したりもした。

だが、力不足であったことは痛感する。しかし、それが愚かな人間の所業というものであろう。

よい妻と子にも恵まれた。あとは時宗にまかせ、従容として旅立とう。

ああ、夢をみているように、あの場面この場面が浮んでは消える。对抗馬ゆえに敵対し、追い詰めた三浦氏の人々の菩提を弔うため、わしは建長寺をも建てたのだ。三浦の者どもも許せよ。

母の松下禅尼が手招きをしている。……極楽寺重時殿も、安達義景殿も……。

最後の旅になつた津軽の山々が霞の中にみえるようだ。縁薄かった唐糸よ、忘れまいぞ。ああ、わしが寄進した護国寺の伽藍が華のよう輝いている……）意識がだんだんに遠のいてゆくなか、時頼は低い声だが、明確に頌した。

業鏡高く懸る三十七年
一楕打碎 大道坦然

弘長三年十一月二十二日道崇珍重云々。

戌の刻（午後八時）であった。まるで禪を行じているかのように端座したまま時頼は瞑目した。即身成仏である。

これは、中国阿育王山の笑翁妙湛の句の七十二年を、

同二年、時宗が元旦の焼飯の儀の沙汰をしたのは、父・時頼から引継いだ嫡流の役目を果すためだった。

三日、將軍の御行始の儀は、時宗邸で行なわれた。

五日、時宗は十五歳で從五位上に叙せられ、三十日には但馬權守を兼任させられる。

そして、三月二十八日、相模守を兼任するのである。

はたからみたら、時宗はまさにこの世の寵児の観があつた。

7 深秘の沙汰
文永三年（一二六六）三月六日、幕府の密命を受けて上洛した木工権頭親家が、六月、鎌倉に帰参する。そして、後嵯峨上皇が將軍夫人について諷諫の言葉を述べたと報告した。

このことを受けて、六月十九日、御家人・諏訪三郎左衛門が大切な使命を帯び、飛脚として上洛する。

二十日には、時宗・執権・北条政村、評定衆の一人で小侍所別当・北条実時、時宗の妻・堀内殿の兄である安達泰盛の四人による「深秘の沙汰」の会合が、山ノ内の時宗邸で持たれた。

洩れ聞くところによると、時宗殿謀殺の動きがあるらしく……」

まず政村が重い口を開いた。

「將軍宗尊の取巻きのなかに、密かに画策する者がいる

自分の年齢におきかえたものであるが、死にのぞんだ時頼の心象にぴったりと当はまったのだろう。

二十三日、冬晴れのこの日、酉の刻（午後六時）、時頼の葬礼が営まれた。武略をもって君を輔け、仁義を施して民を撫す、武将・時頼を慕う一門、御家人、被官の弔問は引きも切らず、出仕を止められるほどであった。

その後、時頼を追慕して出家する者も多く出たので、幕府は守護に命じて出家を禁じたほどだ。

十三歳の時宗にとれば、亡くした父の存在はあまりに大きい。

だが、まるで早い死を予感していたように、父・時頼は、時宗のために、打つべき手は打つて逝ったようだつた。

思えば、時宗は天下の栄光を一身に担つて、ここ数代全盛を極める執権北条家に生まれ、七歳で元服した。弘長元年（一二六一）、朝廷から十一歳で從五位下・左馬權頭の官位を贈られた。

時頼の死の翌文永元年（一二六四）七月、執権・長時間が病氣になり、執権は泰時の弟であり、北条一門の長老も死んだ。ここで若い時宗殿を亡き者にすれば、北条の力はぐんと弱まるというわけじゃ

「そこで一举に、政治の実権を京都に奪い返そうという魄胆でござりますな」「それは、何としても潰さねばなりません」「たった今、松殿僧正良基が、行方をくらましたといふ知らせが……入りおった」「將軍の護持僧である奴は、將軍とはもつとも近しい関係にある」「京都へ行つて、幕府打倒を説くのだろうと、世間に思わせておけばよいのじゃ」

「宗尊親王もまだ若く、周囲からそそのかされれば、その気になる危険性は十分にあるというもののじゃからな」「僅かなりとも危惧あるものは、後顧の憂いなく、取り除くべし。これで何の不都合もないであろう」「政村がとどめを刺すように言い放つ。
「それに、將軍の御息所宰子と良基との間に密通の噂もござる」「それはもう京へも届いておる。上皇からの諷諫もあつたことじやし」

「いずれにせよ、良基を逐電させたこと、いや、良基が

逃げたことは、自ら墓穴を掘ったようなものだ。そのような噂は、たちまちひとり歩きをはじめるから、今さら良基の扇動に乗る者などいない。当方としてはまことに好都合にことが運んでおるというわけじゃ」

「時宗殿よ、父亡き後の、第一の試練じゃ。心して事に当られよ。だが、いたずらに心配は無用じゃ、わしらがついておる」

緊張がとけ、時宗の表情に安堵の色が浮ぶ。

それもそのはずである。今日の会議は、時宗邸で時宗主催で行われているが、まだ若い時宗にそれだけの力があるわけではなく、得宗・時宗の独裁を支える実力者の側近たちが、回りを固めているおかげだ。

この頃は、公的な幕府の会議も、評議機関である評定衆も形骸化して、秘密の形で持たれる。“深秘の沙汰”が、政治のすべてを動かしていた。

政村が執権になり、その職にあったのは文永元年（一二六四）八月から同五年（一二六八）三月までだが、すでに齢六十歳であった。人格識見にすぐれ、時頼の亡き後の幕政に手腕を見せ、よく少年時宗を導いて次期執権へとバトンタッチしたのである。

政村は文永の役の前年に逝ったが、その折は龜山天皇から勅使を賜ったほどである。

会議は長時間にわたり、細部まで慎重な協議がなされ、将軍追放のシナリオは完璧に練られた。

二十三日、酉刻（午後七時）深秘の打ち合わせどおり、時宗は慌ただしく、將軍宗尊親王御息所宰子と、姫宮・倫子女王を鎌倉・山ノ内の最明寺邸に移し、若宮・惟康親王を自分の邸に引き取ったのである。

將軍の御息所宰子と僧・良基は、慌ただしい中で男と女の別れを演じていた。

「とにかく私は、政村殿の言うとおり京都へ行く。私たちはもし運があるなら、また逢えよう。この大きなうねりに逆らってみても、呑み込まれるだけだ。次に出会えたなら、私たちは死ぬまで共に生きよう。宰子さまのご無事を祈つておる」

「ああ、良基さま。お別れを言う暇もないのですね。どうぞご無事で。私も必ず京にまいります。きっと、きっとまた逢えますわね」

東の間、からめた指も視線も、絶望に打ち震えながら

交した別離の挨拶であった。

8 将軍交代劇

この異様な空気を嗅ぎつけた人々が集まつてきて、鎌倉中は騒然としてきたが、その理由は誰にもわからない。

二十四日の子の刻（午前〇時）、大地震が起り、騒ぎと不気味さに拍車がかかる。その上、どこからどう伝わるのか、噂は人々の間を飛び交う。

「こんな時に大地震が来るなど、地底も地上も、この世の終りを告げているようで、何とも心細いかぎりじゃ」
「左大臣法印敵恵も姿をくらましまつたらしいのう」「どうしてだろうか。いったい何が起きているというのか？」

二十六日、とうとう近国の御家人たちが、

「お家の一大事らしい。“すわっ、鎌倉！”とばかり駆けつけたが、何がどうなつているやら、皆目わからねえ

集まってきた人々は屋内に入りきれず、巷に満ち溢れる有様である。

七月三日、ここが戦場になることを恐れ、落着きを失った民人たちが、夜明け前から家屋を壊したり、資財を運び出して隠したりし始めた。

また、甲冑をつけ旗を掲げた武士たちが、東西から馳せ集まり、時宗邸の門外を窺い、政所の南の大路で鬨の声を上げる始末である。

その間にも、武藤入道心蓮・信濃判官などが時宗の使者として、屋敷と御所の間を何度も往復する。

「御息所と御子を将軍のお側にお帰しくだされ」

「ならぬ」

「何故に」

「申し開きが要領を得ぬからじゃ。松殿僧正は何かやましいことがあるゆえ姿を隠したのでござろう。その理由をお聞きしたい」

「では、この私が将軍職を辞せばよいというのか」

“という親王の一言によって、宗尊親王の将軍職は廃され、三歳の惟康王が新将軍に決つたのである。

この間、幕府方、つまり時宗は将軍辞退を促す表現を

用ひず、親王自らが辞退表明をするようにもつていった。

そして、親王の言質に、すかさず言い渡す。
「即刻、親王は時盛入道勝円の佐介の邸にお入りくださいますように。何とぞ、これが御所より御帰京の出門と

思し召しくだされ」

これを受けた親王は、戌の刻（午後八時）、女房の輿に乗ってひっそりと御所を出たのである。

宗尊親王の父・五代将軍九条頼嗣は、建長三年（一二五一）、僧了行の陰謀事件に巻き込まれて、名目だけの將軍の座を追われ、元服したばかりの宗尊親王がその座に着いた。

それから十四年を経て、また同じような経過を迎って將軍交替劇が起こり、今、幕が引かれたのである。

親王は、心に呟く。

（思い起すと、仙洞御所で元服をしたばかりの十三歳の私が、北条時頼、重時などの群議によって鎌倉に下向することになり、京を発つたのは建長四年三月十九日であつた。あれから十四年間、將軍として鎌倉にあつた日々、こんな風にわけもわからぬまま、將軍職の終りの日がくるなど、思いもよらなかつた。

良基奴、宰子との仲を隠すため、私に謀反の動きがあるなどという噂を流しあつて、衆目を自分から反らせるためとはいゝ、何と汚い手を用いたのか。そんな男を何年間も身近においた私の、何と呆れるほどの愚かさ加減だ。

なるほど、世の中が分かりかけてきたとき、幕府はこの私を退場させる気なのだ。邪魔者というわけか。人間とした。

うな

「良基は高野山に登り、断食をして果てたそうじゃ。自業自得といふものじやろう」

「いや、二人は夫婦になつておると聞くが……」

幕府は翌年、親王に所領を献じて、せめてもの罪滅しとした。

四、蒙古襲来の予兆

1 世祖チンギス・ハンの登場

「天より命をうけて生れた蒼い狼があつた。その妻は色白の雌鹿で、大きな湖を渡つて來た」

蒙古の創始者テムジン、のちのチンギス・ハンの先祖は、この青い狼と雌鹿だという。

誕生も神祕的であった。

母のホエルンが生み落したばかりの赤子は、小さな拳

の中に血の固まりを握りしめていた。ぱつぱつと見開いた目には火がともり、顔は艶やかに光つてゐるのである。

だが、こんな不思議な子テムジンを授かりながら、モンゴル部族、つまりモンゴルウルスの父は、テムジンが幼少のころ、当時、勢力を拡大していた隣国・金の謀略によつて殺されてしまつたのだ。金は農耕と狩猟にたよつていた女真族が、阿骨打皇帝

の恨み辛みの屍が累々と積み重なつたそれが、歴史といふものか。

ばかりに大人びた七歳児・時宗の烏帽子親を勤めさせられたのも、ついこの間のことのような気がする。

子供とばかり思つていたに、彼奴にしてやられたな。

彼奴が、これからも重ねる経験の上に立つて、執權役を演じると思うと、少しばかりいまいましいが、それもよからう。

彼奴のお手並みをとくと拝見することにしよう。その密かな楽しみのゆえに生きられるというものだ。

いたいけな惟康王は人質にとられたようなものだが、人間の運命など、わからぬものだ。賢く、図太く生きよ、惟康王）

京に帰つた宗尊親王は詠じた。

なほたのむ 北野の雪の朝ばらけ
跡なきことに うづもるる身は

なるほど、京では噂がひとり歩きをして、人々の興味を誘つていた。

「將軍さまは御謀反を企てたということだ。それゆえ鎌倉を追われ京に帰られるとか、もう帰つてこられたとか」「悪いことは重なつておきるものらしい。御息所宰子さまは僧正良基と不義密通をして、ご夫婦はばらばらだそ

のもとに建設した国である。モンゴルにとつて、もう一方の隣国・タタールも強敵である。

寡婦となつた母・ホエルンは、生来の男まさりの性格に拍車がかかつた。

（この自分を、影よりほかに友もなく、馬の尾よりも鞭もない、貧しく孤独な境遇に陥れた、憎き敵どもよ）復讐の鬼と化したホエルンは、長男テムジンを頭に三人の息子を、誰にも負けることのない強い男に育てよう決心する。

母親思いと、一家の長として責任感のつよいテムジンの頼みの綱は、母親と自分の力だけだ。弟たちはまだいかにも小さい。

父を殺されて没落した女子供だけの一家にとつて、血を分けた一族も、それまでの親友も、すべてが敵に廻つた。

そんな時、馬泥棒事件がおきて、テムジンと義兄弟は大草原で合戦を開戦することになった。

広い草原を舞台に、お互いの軍勢が入り乱れての混戦の中で、身に甲冑をまとつた母ホエルンも、兵を率いて勇ましく戦つてゐた。その時、テムジンは視線の隅に、母の馬が敵兵の槍に突かれるのを見た。瞬間、馬は血を吐き、どうと倒れたのである。母が馬上から転げ落ちるのと、駆け寄つたテムジンが母を自分の馬上に拾いあげたのは同時であつた。まるで神業のような素早さである。

この母にしてこの子ありの阿吽の呼吸であるが、息のあつた連携はまだまだ続く。

「テムジン、お前に下ったあの首族には、子供がいたわね」

「ええ、おりますが……」

「その子らは私が引取り、養子にする」

「テムジンは母の言葉を解しかねて、次の言葉を待った。私が教育します」

「それは、どういう意味でしょうか」

「やがて長じたその子らの、テムジンへの復讐を絶つためよ。考えてごらん。父を失って孤児になった子らを、そのままにしておくのは、かつての私たちの二の舞です。」

お前の父親が殺された時、私たちは熱く復讐に燃えた。人間の復讐心ほどすさまじいエネルギーはない。そして、そのため無用の血が流れる」

母の卓見にはただ感服あるのみである。二人は信頼の笑顔を交し合った。

こうして、鎌倉幕府二代執権・北条義時であった頃、東北アジアの草原を所狭しと駆けめぐっていたテムジンは、建永元年（一二〇六）、モンゴル族を統一したのである。そして、オノン河畔において、多くの集団から王者に推薦され、この国家の首長となり、民の君主になった。

隣国高麗でも、佛太子が即位をして元宗となり、それまで争いの絶えなかつた蒙古と高麗との関係は、平和的で新たな局面に入つたかに見えた。しかし、それは表面的なもので、蒙古への服属を表明した高麗は、蒙古の日本侵略への手先として、この先、苦境に立たされることになるのである。

そのころ、日本は黄金の国ジパングとして、蒙古や宋や唐などの垂涎の的になつていた。

「ジパングの平泉にある中尊寺には、黄金で造られた金色堂があるという。それは、目にもまぶしいばかりに輝いているそうだ」

「聞くところによると、ジパングの王宮の屋根は純金で葺いてあるそうだ。それに、部屋の床は純金で敷きつめられていて、窓も黄金造りだというではないか」

事実、当時、唐への留学生や留学僧の学費には奥州の砂金を使われていたといふ。貿易相手の宋や唐の商人の間で、まことしやかに語っていた黄金伝説は、征服に燃える貪欲なフビライを刺激しないではいなかつた。

案の定、文永三年（一二六六）十一月、蒙古の兵部侍郎黒的（れいぶ）と礼部侍郎殷弘（いんこう）という二人の人物が、フビライから二通の詔書を持って高麗に来たのである。

一通は高麗国王宛で、蒙古の使いを日本に案内するよう命令口調で綴られている。

「風濤の剣阻にかづけて朕の頼みを辞退してはいけない。

テムジン変じて伝説的征服者チングス・ハンの誕生である。

やがて一二一一年から一五年には、金国の首都燕京（えんきょう）を陥落し、そこから進路を西にとったチングスは一二二二年、西アジアのイスラム帝国を滅ぼし、次いで西夏王国をも征服したのである。

こうして、「國を滅ぼすこと四十、朽木を抜くが如し」のチングスだったが、やがて命の尽きた。その征服に終止符をうつて、チングスは一二二七年にこの世を去つたのである。

テムジン変じて伝説的征服者チングス・ハンの誕生である。

2 憧れのジバング

「まず手始めに、お前は東南アジアから侵略を開始せよ」チングス・ハンの死後、後を継いだ子のオゴタイ・ハンは、一二三一年に高麗を征服した。そして、四代目のメンケ・ハンは、
「これまで西に向つていたわがモンゴルの進路を、今後は東に向けようと思う」と弟フビライに告げる。

「まず手始めに、お前は東南アジアから侵略を開始せよ」
フビライは兄の言にしたがい、雲南、チベット、ベトナムと次々に攻略し、支配下においた。
しかし、南宋に行き着いたところで、文応元年（一二六〇）、兄メンケ・ハンは死んだ。

いよいよ、フビライが帝位につき、彼の時代となる。

日本が末だかつて通好しないからといって、そのまま鵜呑みにしてはいけない。日本が、使を阻むことを恐れて、かの国と共生になつてはいけない。今こそ、卿の忠誠心が奈辺にあるかを見極めたい。卿よ、朕の言うことに勉めよ」

もう一通は、日本の国王宛てである。

「高麗は朕の東藩である。日本は開国以来、時には中国にも通じてきた。朕のときに至つて、和好を通ずることがない。恐れるのは、王の国が、いまだ朕の帝国が強大なことをつまびらかに知ることがないからであろう。ゆえに、このたび使いを遣わし、書を持たせて朕が志を布告するところである。ねがわくは今より以後、好んで親睦をいたそう。聖人は四海を家とする。広く通好しないことは、一家の理に背くことである。兵を用うるなどということは、誰が好むところであろうか。日本國王よ、朕の意を汲んでよきように図つて欲しい」と、強く通好を求めている。

さすが蒼い狼の血を引く、フビライだけのことはある。黒的と殷弘は、高麗の使者に案内されて合浦を発ち、巨済島まで行く。だが、風濤があまりにも険しく、そこのから先に行こうとする彼らを拒んだ。

「ここから対馬を目指して漕ぎ出だすのは、みすみす死に赴くようなものでござります」

「しかし、ここで引き返したら、帝王フビライの怒りに触れる。おめおめと帰ることはできない」

「それならば、わが国の宰相李蔵用殿にお会いください」「こうして、高麗の宰相李蔵用は黒的たちをなだめ、フビライに宛て苦しい弁解の書を認めたのである。

「お察しください。危険はかくの如しです。どうして貴国蒙古の使者を奉じて、危険を冒してまで日本に向けて軽々しく船を進めることができましょうか」

だが、怒りを募らせこそそれ、それで納得するフビライではない。ますます征服欲は燃えきり、翌年には、高麗の責任において、日本との交渉をすすめるよう命令してきたのである。

蒙古の使節が高麗の使者のおどしに乗って、ここから引き返したことが、対馬の島主・宗助國から幕府に報告された。

3 フビライの使者、日本に上陸

少年から青年にさしかかる頃、時宗は自著『途の草々』の中で、自分の膽力の小さいことを憂えている。

「年齢の長ずるにしたがい、心はますます精緻になり、才覚も巧みに働くのだが、意氣が柔弱で、あたかも処女のごとくである」と、膽面もなく告白するのだ。

「下臣どもの处置や、家臣の言葉が引っかかるつて心が静まらない。

だが、自分の念に貪欲に執着するゆえに、ますます息づまるのだと悟つてからは、心も静まり、日常の立居振舞いに無駄な心を奪われないようになった。なお、修行してゆくうちに、いつとはなく心も晴れ、鏡のように静かになるのを感じて、喜びを覚えた。

しかし、しばらくすると妄想がおこってきて、ひとたびはあんなに晴れた自分の心が見えなくなってしまう。

さらに、また仏の道に近づき、禅師の話を聞き、鉄槌を打ち込まれると、心膽が狭く小さいことを憂いた自分の心が恥かしく、何ゆえに凡夫であることを悲しむのか、残念に思うようになった。

当今は、膽の小さなことも打ち忘れ、また、怖がるものは一つもないようになつた

膽の量が豆粒ほどだった時宗は、人しつけ苦悩したが、禅の道に救いを求め、練磨の末、大丈夫の境地に達する

4 時宗執権となる

そして、文永四年（一二六七）の暮れ、もしくは五年一月、高麗国の役人潘阜が、蒙古の国書と高麗の副書をもって、九州の太宰府に着いた。

蒙古の国書は、

「上天の命を眷み、大蒙古国皇帝書を日本国王に奉る」から始まる。

折しも、後嵯峨上皇が亀山帝の御所で御年五十歳の祝賀の舞楽を観賞する日、幕府の差し出した国書が朝廷に届いた。

祝宴はただちに中止された。

それから朝廷では前関白二条良實、前太政大臣徳大寺實基、関白近衛基平などを集めて元老会議を開いた。

「返書を与えるべきか、どうか」

の評定が、長時間、繰返された。

しかし、高圧的な文書は礼を欠いていると判断した朝廷と幕府は、返牒を出すことなく、数か月も太宰府に止め置いた使者・潘阜を高麗に帰したのである。

「方々に嘆願などして努力したのですが、さっぱり要領を得ることができずに帰ってまいりました」

復命を聞いたフビライがそれで納まるはずはなかつた。

さすがに難局を覚悟した朝廷は、蒙古のもたらす難を伊勢の大神宮はじめ二十一社に告げて祈誓した。

幕府も讃岐はじめ西国の御家人に蒙古の来襲に備えるよう命令を発して、外敵に備える準備を始めたのである。

迷いの邪念を払い、十八歳になった時宗は、文永五年（一二六八）三月、老齢となつた政村の辞任にともない、執権・相模守時宗となつた。連署は左京太夫政村である。

幕府はかつてない難局を乗り切るため、国内の防衛意識の統一を計り、对外に向つて迅速な対応ができるように、若い時宗を表面に押し立てたのだ。

こうして、頼山陽が漢詩『樂府』の中で、

「相模太郎の膽龐の如し」

と詠んでいるように、時宗は闊達な活躍を見せるのである。

文永五年（一二六八）十一月、約一年前、巨濟島から引返した黒的と殷弘に新たに六名が加わり、またもやフビライの命を帶びて高麗にやって來た。そして、高麗政府に再度、日本上陸を促した。

その結果、日本との間を往復した経験のある高麗人の高官潘阜と、他三名が案内役となり、従者七十余人を引き連れて、十二月四日、江都を発つた。やがて、翌年三月初旬、対馬に到着する。

しかし、埒が明かずに塔二郎と弥三郎という二人の島民を捕えて帰り、フビライに差出したのである。

喜んだフビライは、一人の島民に満壽山の玉殿や主だった城郭や宮殿を見せてなし、日本の国情を聞き出そうとするが、漁師の彼らに答えられるはずがない。

業を煮やしたフビライは、使者ウルタイに中書省から文書を持たせ、高麗に命令する。

「この日本の男たちを案内に立て、日本国に使者を出せ」

高麗は二人の日本人と金有成、高柔ら一行を日本に差し向けた。

一行は九月十七日、対馬の伊奈浦に到着し、太宰府の守護所に蒙古の文書を差出した。

幕府は、この文書を急いで朝廷に届けるが、二ヶ月経つても朝廷からは何の音沙汰もない。

太政官から蒙古の中書省宛てと、太宰府守護所から高麗国政府に宛てた二通であったが、文案は文章博士菅原長成が書いたものだった。血は争えないもので、彼は菅原道真六世の孫・高辻是綱の末裔で、後深草帝、龜山帝に仕えている人物である。その文書は、

「蒙古などという国は未だ聞いたことがない」という書出しじる。そして、

「何ゆえ蒙古国は日本に武器を用いようとするのか、實に不埒千万なことである。日本は世界無比の神國である

願を繰り返すよう命じた。

5 滝の口の法難

文永八年（一二二七）九月、僧・日蓮の「竜の口の法難」が起きる。

鎌倉・松葉ヶ谷にある日蓮の法庵が、自衛のための武器を貯えていることを知った平左衛門尉頼綱は、数百名の兵にこの小庵を襲わせたのである。頼綱は北条家司と侍所司を兼ねる幕府の実力者である。

襲撃された日蓮は、かつての弟子でその後破門した少輔房に法華經の一巻で強く殴打された。兵士たちは残りの法華經を足蹴にし、庵の中の仏像や經典をことごとく散乱させた。

縄を打たれ市中を引きまわされた日蓮は、幕府の処刑

場である竜の口に引き立てられ、頼綱の一存で斬首されることになっていた。

だが、どうしたことか、依智三郎なる人物が日蓮の首を刎ねようとした瞬間、光ものが三郎の両目をくらませ、三郎は構えた刀をとり落とし、その場に倒れた。控えていた兵たちも、恐怖のあまりほうほうの体で逃げ出したのである。

その知らせは、すぐさま時宗にもたらされる。時宗は立腹した。

「日蓮を斬れとは命じていない。佐渡へ流罪せよと申し

から、知で競うことも、力で争うことも受けつけることはない」

と緩られた、強硬で無礼な文書であった。

血の氣の多い政村や泰盛は読み終って、溜飲を下げる思いを抱いたが、時宗の胸中は複雑である。

建長寺の禅堂で座禅をくみながら、時宗は長い間、黙考する。

（もう二度に及ぶ強気な蒙古の国書に、返書を出さなければ、怒りをかい、礼儀にももとると朝廷では考えているようだ。しかし、このような返書を出すことにより、かえって相手は日本の反撃と取るかもしれない。返書を出しても出さなくても、同じ結果を招くことになるであろう）

結局、幕府の判断で、返書は取り止めとしたのである。こうして、さんざん足留めを食った金有成らの一行は、今回も手ぶらで空しく帰国して行ったのだ。

一方、迫りくる事態に、安穏としていられなくなつた幕府は、幕府の評定衆を補佐する引付け制度を復活した。この復活は、北条一族が、訴訟や庶務を握つて、一族の結束をより強固にするための措置だった。

また、九州の御家人たちには海防の備えを固めるために下向を命じて、守護人の指揮下に入るよう通達を出した。さらに、各地の大社や大寺には国家安泰の祈禱・祈

たはずだ」

頼綱は日頃の日蓮の言辞を申し立てる。

「自分の宗旨のみが正しく、あとは邪宗ゆえ、鎌倉の寺のすべてを焼払い、道隆和尚や良寛上人の首を刎よとまで申します。しかも、日蓮はわれを失うのは日本国柱を倒すことになる、と大見栄をきつたのでござります」

「それが日蓮の信念であろう。信念の上に立つて日本の国を救おうと申すのじゃ。その者の首を刎ることはあります。困難の折、日蓮のような傑僧は何ほどか国の役に立つやもしれぬ。侍所司といえども執権に無断で事を運ぶのは僭越であるぞ。心せよ」

事実、日蓮の言うとおり、この五十年の間に約百回の地震、八十回の大風雨、約三十回の洪水、さらに七回の陰陽師北条泰房も、天地の災禍は合計五百件にもなると宣示するほどだった。

それに加えて、蒙古襲来の危機感は否応なく、朝野はじめ民衆の心を暗くおおっていた。

「天地の怨霊が怒っているのか、それとも蒙古が攻めてくるという天の暗示なのであろうか」

こうして、時宗の厚意に救われた日蓮は、佐渡の地頭・本間重連の館の一つ相州依智に二十日余り幽閉されたのち、二年半の間、佐渡に流された。そして、文永の役が

起る半年前に許されて、鎌倉に帰るのである。

6 フビライの作戦

日蓮の騒ぎと時を同じくして、文永八年（一二七一）九月十九日、またもや九州博多今津港に蒙古の使節が到着、奉行所に来た。

趙良弼なる人物が引き連れた一行の数は、何と百余を数えた。

女真人の趙良弼は、フビライから日本国信使に任命された老臣である。対するは鎮西探題の少弐景資は蒙古の使者が始めて国書を携えてやって来た折、父親の覚恵とともに交渉の任に当った人物である。

蒙古対日本の代表者の間では「国書」を挟み、まさに命がけの丁丁発止のやりとりが交された。

今まで幾度足を運んでも、国書に対しても返書をもらっていない。今度ばかりは、私自身が京都にゆき、直接、国王ならびに將軍に国書を手渡したい

「それはならぬ。国書を私に渡すか、さもなくば直ちに帰國なされよ」

と少弐は強硬に突っ撃ねた。

趙良弼にすればこれは、自らが熱望して日本に派遣された任務なのである。

「たとへかの地に死すとも、絶対に君命を辱かしめるようなことはありませぬ」

「返牒をいたすべきである」

という結論を出した。だが時宗は頑として、「返書をあたえず」の方針を貫いた。

高麗の隠された作戦を読み取った時宗からのきついお達しで、太宰府から一步も出ることを許されない趙良弼らは、この地に留め置かれたまま、固唾を飲んで成行きを見守っていた。

百余名からなる異邦人の使節たちは、太宰府の役人の目をかすめてはよく動き廻り、誰彼をつかまえてはよく話しかけていた。しかし、翌年の正月、一行は行きがけの駄賀とばかりに、弥四郎など対馬の島民十二名を連行し、自ら高麗に帰つていったのである。

使者たちが日本逗留中の十一月十六日、蒙古は国号を元とした。

高麗に着いた趙良弼は、元の都・大都には帰らず、書状官の張鐸に日本からの使者と触れ込んだ十二名をつけ、フビライに謁見を求めさせた。だが、そんな言い訳はすぐに見破られてしまった。

「そんな日本人どもは早々に追い返してしまえ。趙良弼と張鐸は再度、日本へ行け」

趙良弼一行は、将来の日本遠征に備えて、日本の国情を探るスパイの役目を帯び、情報収集のために、大人数編成で日本に上陸したのだった。時宗はこの作戦を先刻

とフビライに誓って出てきた立場もある。
(老いの身をもう一度飾って死にたい)

という思いも交錯する。

「国王に会わせないならば、私のこの首をとつてくれ」

趙良弼は国書を渡さずに、その写しを経資に預け、十

一月中の回答を要求した。その写しには、

「それでも返事がなく黙殺するならば、兵船を動かすことになろう」

とつけ加えられていた。

この交渉以後も、少弐一族の対蒙古への奮闘振りは目覚ましいかぎりであった。

二年後の蒙古軍来寇の折、少弐は九州軍の総指揮官として知略をめぐらし活躍した。また、弘安四年、再度の蒙古軍来襲の時には、八十四歳であった父覚恵が戦死。十九歳の息子・資時も壱岐で戦死した。少弐を助けた弟景資の戦闘も華々しく、勇将の名を欲しいままにしている。

九月末、国書の写しを受け取った時宗の胸の内は決つていた。

蒙古軍撃滅の応戦の順序は九州軍、中国軍、関東軍、最後には幕府麾下の精銳八万騎を出動させる。しかもその作戦計画は着々と練られていたのだ。

しかし、朝臣たちは今回も国書を前に百官で協議を重ねた結果、

見通していたのだ。

趙良弼と張鐸は、捕えた十二名の島民とともに再び日本に来た。

そして、文永十年（一二七三）五月、大都に帰るまで、約一年間日本に滞在するが、やはり太宰府から京都に上ることなく帰国している。

趙良弼はフビライに謁見がかなったとき、苦労の末に調査収集した日本の爵位の称号、地方の州郡の名や数、風俗などの報告書を提出し、フビライから「君命を辱めざる働き」と認められるのである。

日本の国情を尋ねられた趙良弼は答えた。

「私の調査によりますと、倭人は狼のように猛々しく闘争を好み、殺人も平気でおこない、常に大小の剣を腰にして歩いています。およそ人間としての親子の情愛も上下の礼儀も認められない、恐るべき野蛮人です。国土は山や川が多く、耕作に適する土地はありません。いつも波風が荒れている大洋を越え、危険を冒してまで、かの島国を征服する価値はないと思います」

フビライに日本遠征を断念させるため、趙良弼はさまざまの困難や危険を並べたてた。だが、一度までも荒海を渡り、辿り着いた日本での扱いが腹に据えかねた趙良弼の忠言に、耳を傾けるようなフビライではなかった。「お前が行つてさえ、そのような態度をとるならば、軍をもつて征服するよりほかはないであろう」

フビライの侵略の欲望に拍車がかかり、軍備が整えられたゆく。

そして、文永十一年（一二七四）三月には、諸将が集められ、

「七月をもって日本を征伐すべし」

の宣言が下った。

総司令官は忻都、副司令官は洪茶丘。大軍が高麗南部の合浦に集結を始めたのである。

7 時宗の憂鬱

「禍福はあざなえる縄のごとし」という言葉があるが、次から次へと悩みごとの多い時宗にとつては、妻・堀内殿の懷妊は大きな喜びをともなつた福の訪れであった。

一対の雛のような二人だったが、十年の間、まったく子宝に恵まれなかつたのだ。時宗の誕生の時がそうであつたように、当人はいうにおよばず、一門あげて嗣子の誕生を神仏に祈願していたのである。

そして文永八年（一二七一）、時宗は二十一歳で、めでたくも男子を授かつた。

子は幸壽丸と名づけられた。

後、時宗の後をついで十四歳で執權となる北条貞時の誕生である。だが時宗は、いつまでも喜びにひたつていわるわけにはゆかなかつた。

の執権であり現在の連署・政村と泰盛、侍所の綱頼などが寄り合い、深秘の会議がもたれていた。
「どうも名越教時の言動が臭い。謀反の疑いありとみえますぞ」

「教時は謀反の前科者であるからな。用心するにこしたことはない」

鎌倉・名越の住人なのでこの名がついた教時は、評定衆の筆頭で北条時章の弟である。この人物で思い出すのは、今から六年前の將軍宗尊親王の交替劇である。この時、教時は親王を奉じて、北条一族を討ち滅ぼそ

うと企んでいた。しかし、このことを知つた時宗は使者を走らせ、この軽舉妄動を思い止まらせ、以後、謀反をせぬという誓書を取つたのだ。

（あのことを、まだ遺恨に思つてゐるのか）
時宗は愕然とする思いである。

怒り心頭に発した頬綱は言う。

「寛大なご処置により、身分を保ちながら、ご恩を仇で返すような不埒な奴を生かしておくことはなりませぬ」

「ところで、教時と庶兄時輔との関係はどの程度の親密さであろうか」

時宗の夫人堀内殿の兄泰盛が情報を提供する。
「教時の使者が頻繁に六波羅に参るようじゃ。また、六波羅からも密使がよく来るという報告が入つておる」

（教時と時輔の二人は東西で謀反を起こす心算でござろ

元国からたびたび訪れる“招かざる客”的対応の前に、乗り越えなければならない思わぬ出来事が持ち上がつたのだ。あざなえる縄の災禍の方である。

時宗の庶兄・式部大夫時輔は、京都南六波羅探題である。

時宗の誕生の際、母・時頼夫人がその存在に杞憂を抱いた男子であり、その折の予感ははずれていなかつた。（このおれは時宗と同じ父親を持ちながら、母の出自が卑しいばかりに、兄の立場にありながらずつと疎外されつづけてきた。これは不条理というものだ。だが、二十年も経つと、そんなことはどうでもよくなつてきているのも事実だ。

世の中には条理にかなわないことも、矛盾に満ちたことも山ほどあることは、おれも見聞してよく知つてゐる。

葛藤の過程では、時宗憎さに気の狂うようなときもある。また、北条の一員として、幕府のために近くそそうと考えたときもあつた。

海の向うから元が来襲するのではないかと、京も騒ぎになつてゐる。その混乱を衝いて、またぞろ幕府の勢力を削ごうとする朝廷がわの動きがあるのも事実だ。このおれに御輿に乗れとけしかける家臣もいる。

確かに、やるなら時は今かもしれない。だが、いまさら謀反など……

文永九年（一二七二）二月始め、時宗の本邸では、前

つまり、鎌倉の教時は時宗を討ち取り、執權屋敷を占拠する。

片や時輔は北六波羅探題・義宗の首を取り、西の軍を率いて鎌倉にくだる。そこで合体して北条一族を殲滅する、という図式であろうのう」

政村が断定を下すように言った。

「北六波羅の左近將監義宗とは仲がよくないようじゃ、

この忠義者に時輔を討たせればよいのじや。教時も速やかに討つてしまえ」

執權・時宗は、少しでも反逆の疑いある者は、その芽を摘み、徹底して成敗しなければならない立場にいた。そうしなければ、得宗の権力を維持できないし、これから予測される外敵に対し、後顧の憂いなく戦うことできまい。

時宗は丈夫の心に決断したのである。

8 二月騒動

二月十一日の夜更け、大蔵頼季を討手の大将とした幕府軍の精兵八百騎が、教時の屋敷を取り囲む。

すると、風上から燃えあがつた炎とともに、表門と裏門の二手にわかれた軍勢が屋敷内になだれ込んだ。それは疾風のような動きであった。

不意をくらつた教時は全く手の打ちようもなく、自刃

して果てたのである。

だが、驚くことに、あれほど見事に鮮やかな戦勝ぶりを見せた大蔵頼季を始め、討手五人が、翌朝には、後ろ手に縄をうたれ、執権本亭の庭に引き据えられていたのだ。

庭隅の松の木には、罪人を乗せる五頭の裸馬がつながっている。

何としたことが。誰もが目を疑う光景である。

しかし、これには理由があった。

昨夜、出陣に先立ち、名越の屋敷にいる教時の兄・時章を斬ることがないようにと、時宗からくれぐれも申しわたされていたのだ。

時章は時宗の父・時頼の死の際、髪を剃り出家したほど忠臣であった。その後も厚く菩提を弔ってくれていた。

その時章の寝所に踏み込んだ頼季は、弟・教時と間違えて兄・時章に初太刀を浴せ、つづいて他の者が滅多斬りにしてしまったのだという。

頼季から事の次第を聞いた頼綱は、時宗に取り成しを言上した。

「猛烈な火の手が上がり、火の海の中での激しい合戦でござりました。まして教時の本邸に武藏入道時章殿がいようとは思いもよませぬ。頼季が見誤るのは致し方のないことかと……」

た兵士たちも孔明の心を思って泣いたという。

やがて、十五日の朝暁、鎌倉からの早馬が六波羅北方の北条義宗のもとに到着した。時を移さず義宗は南方の時輔を急襲。

六波羅にもまた火の手があがり、幕府兵の味方同士の激しい戦闘が繰り広げられた。

そして、時輔はじめ多くの戦死者が出て、兵火は鎮まつたのである。世にこれを文永九年の二月騒動という。

建長寺の禅堂で座禅をくむ、いつもと変らぬ時宗の姿があった。(時輔とは、兄と弟に生れながら、長い確執がつづいた不幸な生れ合せであった。しかも、謀反者の兄と対立しなければならないとは、悩みの時、道隆師は一言、「時宗を去れ」といわれたのだ。

私は目前の小事である私事を捨て、国家の大事に立とうと決心した。兄弟、主従であろうと国に災いをもたらす者は情容赦なく斬ると。そして、國家または幕府の威令を保たなければならないと誓ったのだ。そうしなければ、どうしてこの未曾有の国難の時を乗り切れよう。もしも、この考えが誤りなら、蒙古から国を守った後、私はどのような仏の裁きをも、独りで甘受する覚悟がある)

一寝込みを襲うのは武士にあるまじき行為である。顔も見ず、名乗りもかけずに斬るのは、鎌倉武士の名折れであろう。

それと、絶対のものである軍令に背いた罪は重いぞ。「いかにも権威を嵩にきて、それを天下に示す意志統一の慘さであるが、私は哭いて馬謖を斬った諸葛孔明と同じ心境である。頼季と四人の兵たちよ、許せ！ 執権としての責任において、蒙古の軍隊を撃退して後、そもそもたちの無念の恨みは、いかようにもこの時宗にかぶせてくれ）

時宗の目は赤く充血し、表情は苦汁に満ちていたが、この五人の武士は滝の口の刑場に送られていった。

ちなみに、諸葛孔明は、刎頸の友であった馬良の弟を刑に処した。

孔明を慕う利発で有能なこの若者は、孔明の宿敵司馬仲達との決戦の時、自軍の輸送路を守る役を買って出た。

しかし、作戦の失敗からこの輸送路を絶たれ、戦は大敗してしまうのである。孔明は大義のために泣いて馬謖の首を斬り、三日の間、陣中にさらしたのだ。それを見

9 日蓮と会見

佐渡ヶ島へ流罪になつた日蓮は文永八年（一一七一）十月二十七日、越後・寺泊から小舟で船出した。

荒れ狂う日本海の荒波は小舟を木の葉のように翻弄し、舟人も日蓮に従う役人も生きた心地がしなかつた。しかし、翌二十八日には島の東海岸・松ヶ崎に到着する。日蓮が落着いたのは、死人を捨てる塚原といふ所にある三昧堂であった。

板の間は隙間だらけ、壁からは雪が舞い込むようなあばら屋である。日蓮は床にうち皮を敷き、簾を着て夜を明かす、心細い日々をここで過したのだ。

しかし、阿仮房・千日尼夫妻、最蓮房、地頭の本間重連などをはじめ、日蓮に帰依する土地の人々など、来訪者の数も増して、やがて、日蓮は居を国府に近い一の谷に移した。

塚原とはうつて変り、小高い丘に囲まれた盆地のようなこの地で、日蓮を信じ慕う人たちの心こもる給仕を受けたり、また、本土からも四条金吾などの信者たちが来る島し、日蓮を見舞つたのだ。

こうして、日蓮はひるむことなく、佐渡ヶ島での二年半の歳月を布教活動に費した。

沢山の書簡文と、日蓮の教義でもっとも重要な『開目抄』と『観心本尊抄』人開顕と法開顕の書である『開目抄』と『観心本尊抄』

がこの地で書かれた。

文永十一年（一二七四）春、日蓮は赦免され、鎌倉の夷堂に帰って来た。

そして、四月八日、幕府は日蓮を時宗の本邸に迎えたのである。

時宗二十四歳、日蓮五十三歳で、ここに相まみえることになったのだ。片や天下的実権を握る青年執権として、その面魂は、怪僧日蓮に勝るとも劣らない。いや、むしろ少年の頃からの禅修行で、心を研ぎ澄せた禅僧のような風貌である。

片や日蓮は、一介の僧侶といえども、迫害に次ぐ迫害に勇猛に立ち向かい、民衆運動をリードする政治家の貌をもつ、たくましくも不敵な風貌である。

かつて、日蓮を滝の口で斬ろうとした平頼綱が、この会見を仕切る役目だ。頼綱は穏やかな口調で日蓮に問う。「本日御坊を呼んだのは、蒙古はいつ来襲するのか、聞かせてもらうためである」

「すでに日蓮の考えは、何度も幕府に言つたはずだ。つまり、法華宗を天下の宗旨としてお認めになるのか、ならぬのか。念佛宗、禅宗、真言宗、律宗を邪宗と思し召すか、どうか。それを承つてから、蒙古調伏のことは申し上げる」

時宗はじめ、控える幕府の面々をねめ廻すように一瞥すると、日蓮は言葉を継ぐ。

のも宣なるかな。だが、宗旨の相違で喧嘩が定まつたまらぬことだ。私が北条という衣をまとい、執権という鎧をつけていなかつたら、あるいはお互い、手をとり合つて熱い胸の内を語り合い、共感を分かちあえたかもしれない。

現に私の身の内には法力がみなぎり、覚悟が定まつた。快僧、日蓮よ。御坊が他宗派を邪宗だと決めつけるように、この時宗にも、執権として歩みつけなければならぬ一筋の道があるのだ

三度目の諫言も幕府に入れられなかつた日蓮は、波木井実長の誘いで五月十二日には身延に旅立つて行つた。日蓮は、防ぎようのない蒙古来襲から遠ざかり、山中深い身延に法華経の道場を建て、日本国の大濟を祈願しようとしたのであろうか。



「今から十四年前、日蓮は最明寺入道時頼殿に『立正安國論』を提出した。その中に内に反逆する者、外から侵略する者のあることを予言した。それから十年を経ぬうちに蒙古から使者が国書をもたらした。他国侵略の災いが事実となつたのだ。二年前の二月には、南六波羅探題の時輔殿が謀反を起された。この日蓮の言う通りになつたではありませぬか」

「それゆえ、その他国の侵略はいつなのか、尋ねておるのじや。御坊の予言を承りとうござる」

日蓮は得意の舌鋒鋭く、滔々と自説を披瀝したが、肝心のことには答えようとしない。

「日蓮は法華經を広めて、この末法の世を救い、日本国を守る。そして、法力をもつて外敵を防ぐ。執権・時宗殿は武力をもつて蒙古軍から日本国を守られよ。そうならば、日本国を思う両人の心は同じである。法華經の弘布をお許し下さるのか、下さらぬのか、ご返答を承りたい」

「後ほど評定の上、改めて申しつたえる」

結局、日蓮は蒙古の来襲を、

「今年を過ぎることはないであろう」

と言い置いた。

（傑僧、日蓮よ。どんな時もどこでも、その揺らぐこと

のない心魂で、民衆を思い、国を憂えて、法華經を訴え

る情熱に私は感服する。自らを釋尊の御使いだと名乗る

師恩・唐詩の淨書

金子正義

二年の国漢はH先生であった。ニックネームは「仙人」。由来は定かでないが、始業の鐘と同時に教室に現われ、鐘の鳴り終る時には教壇に立つ。別に急ぎ歩む訳でもなく仙人がスーと雲から降り立ったように自然で悠々としている。暴れん坊共も何處か人間離れしている先生に畏敬の念をもって仙人と称し奉ったものと思う。

始業の鐘も仙人の出現によく合っていた。正面玄関左側の古色蒼然とした吊鐘を印半纏の老使丁が心をこめて一音一音衝くのである。雨が降ろうが、風が吹こうが一日たりとも休まず少しの狂いもなく、授業の終始を知らせていた。始業は五点鐘、終業は三点鐘。老使丁は一点鐘ごとに間を取って余韻を残す特技を持っていた。

さて、H先生は教壇に立たれると必ず国文法活用表を全員に一斉に読み上げさせる。一人残らず憶えるまで毎日やる。動詞活用が暗誦できると次に形容動詞活用とな

り、更に助動詞活用となる。「セル・セ・セ・セル・セレセ」と蛙の合唱よろしく生徒全員が大声でやる。その間先生はピンと背筋を伸ばして能面のように冷厳な顔を真正面に向けて微動だもしない。腕白盛りの生徒達も学期始めは馬鹿にしてガヤガヤしていたが、一ヶ月もすると表を見なくとも自然に口に出るのが面白く節をつけて暗誦していた。

蛙の合唱は文法表だけではない。教科書に出る漢詩や徒然草のような名文も同じである。特に土井晩翠の天地有情は先生が抑揚をつけて朗誦され、生徒に反唱させ暗記は宿題であった。生意気盛りであった私はこれを愚劣と思いつつ故意に口を詰まっていた。或る朝例の如く杜甫の春望を朗誦暗誦していた時である。半眼を閉じて凝つと聴いておられたH先生は、暗誦が終ると眼を見開いて「金子、もう一度暗誦しなさい。他の者は着席」と言わ

れた。既に空んじているので内心得意になつてすらすら

と暗誦したのだが授業後呼ばれて、「七言が誤っている。明日まで教科書にある杜甫、李白十篇を二十回淨書して來なさい。ノートでなく半紙に鉛筆で書きなさい」といわれた。

何程の事有らんやと家に帰つて早速書き始めたが、さあ大変。薄い半紙である。毛筆ならともかく、鉛筆で書くのは容易でない。強く書けば穴があき、消ゴムを使えば破れる。嫌でも一点一画丁寧に書かなければならない。

十篇二十回の淨書は深更になつても終らない。折から夏休み前で蚊帳がブンブン攻めて来る。蚊帳の中に机を持ち込んだが、薄暗い電燈なので鉛筆の字面が光つて良く見えない。「意地の悪い仙人め」と恨めしく思い乍ら暁近く漸く遺り遂げた。

登校して半紙五十枚の淨書の束を昂然としてお渡しする。先生はすっと目を通され、「最後の一字に誤りがある。更に二十回書いて來なさい」と言われた。

杜甫の『渾欲不勝簪』の簪が草冠となっていた。其の夜も目を擦り淨書したが、その二十回はもう本を見なくともすらすらと書けた。春望だけでなく杜甫李白の数十篇も同じであった。

夏の夜が明けると東天に明けの明星太白が燐然と輝き、西の青磁の空には残月が淡くあつた。私は魂を吸い取られるように感動し、大唐の詩人の悠々たる心情が分った

ようと思えた。

後年敗戦の廃墟に立つて、國破れて山河在り、城春にして草木深し、時に感じては花にも涙を濺ぎ、別れを惜んでは鳥にも心を驚かす……と感を深くし得たのは四十回淨書のお蔭であるとH先生を慕い、白頭を搔けば更に短く、渾て簪に勝えざらんと欲すと低吟しては師恩を深く感じた。今は先生既に亡く、幽明を異にして報恩しえない。

合掌



千篇萬律

☆まんじ八〇号をお届けする。一号から満二〇年！途中一回の欠落もなく継続し得た事を率直に喜びたい。同人は今一八名。メンバーの多い事はもとより近年唯一人の退会者がないのも嬉しい。先ずは「めでたし、めでたし。千秋万歳、万万歳」

☆「陽春白雪」に喻えられる詩文の秘める高邁な理想はともかくとして、私達は創作行為そのものが楽しい。また他者の作品の発想等の凄さに感動し共鳴するのも嬉しい。自作の出来映えは取敢えずは二の次であり、創作中の精神の躍動や完成時の充足感が嬉しい。だから私達は書き続ける。

☆ここ迄陰に陽に応援戴いた読者諸兄、就中まんじ維持会員の皆様にお礼申し上げたい。そして九〇号、やがて一〇〇号をお届けする事をお約束しよう。勿論皆様を驚喜、感嘆、愛憐せしむるに足る完成度の高い作品を目指し努力する事も。

☆さきやかな「祝八〇号記念パーティー」を催す事とした。日頃まんじのみの一方通行なのでこの機会におめにかかるて直接ご卓見ご叱声を承わり明日への糧と致したい。何卒万障お縁合せの上ご来駕賜わらん事を……。(別途ご案内状送付済)(く)

まんじ 第 80 号

平成 13 年 5 月 1 日発行 (非売)

発行人 三戸岡 道夫 (みとおか みちお)
編集長 鯨 游 海 (くじら ゆうかい)
事務局長 鍋屋 次郎 (なべや じろう)

(事務局) 〒223-0056 横浜市港北区新吉田町2477-3 太田善朗方
TEL・FAX 045 (544) 5947

(郵便振替口座) № 00270-0-64592 加入者名 まんじ

(印刷製本) 大和印刷株式会社
〒332-0031 川口市青木 1-12-20
TEL 048 (254) 3311 FAX 048 (254) 3313

〈お知らせ〉

今般、都合により事務局を上記所在地に変更致しました。
郵便振替口座のNo、加入者名にも変更がありましたのでご通知申し上げます。

まんじ

No. 81

2001.8.1

まんじ 第八十一号 目 次



多率寺にて	新井 宏
六月の雨	森 実子
演劇台本走馬燈	相原精次
爽やかにハレルヤ	大和楨人
サラリーマンとしての鷗外	見勝弘
詩誤差ゼロの・他	51
報徳の人二宮尊徳(一)	46
破竹の唱(下)	29
北条時宗とその時代(三)	29
島津隆子	12
中泉聖司	4
三戸岡道夫	12
青木昭成	12
宅見勝弘	12
千坂精一	12
伊澤敏夫	12
紙透寛夫	12
太田和貞	12
鈴木昭三	12
金子正義	12
鯨游三	12
泰山木(十)紙透小太郎の一生	12
方解石の出る楠峠(十三)	12
笹ヶ崎村(最終回)	12
ねずみ小僧丸楠(二十)	12
漢詩 潮騷錄(二十九)	12
近藤重蔵・富蔵の生涯とその時代(三十)	12
清鈴宮編水木城集ト國正ム男彦子	12
表紙・カット	12
カット	12
千篇萬律	12
体当たり戦法を強制された 神風特別攻撃隊の人びと(四)	12
泰山木(十)紙透小太郎の一生	12
方解石の出る楠峠(十三)	12
笹ヶ崎村(最終回)	12
ねずみ小僧丸楠(二十)	12
漢詩 潮騷錄(二十九)	12
近藤重蔵・富蔵の生涯とその時代(三十)	12



たそるさ 多率寺にて



新井 宏

韓国に来てからというもの、多少むきになつて、海印寺、通度寺、松広寺、梵魚寺、双谿寺など慶尚南道の有名な古寺を歩き回っている。いずれも渓谷の奥まつた森林の中もあり、その薄暗さの中で、伽藍部たけがスポットライトをあびたかのように輝いていて、散策を兼ねた「古寺巡礼」には好適である。

もっとも、この地方の寺院は、たいてい壬辰倭乱（文禄慶長の役）の時に一たん廃墟と化しており、比較的に新しいものしか残っていない。しかも戦禍の疲弊を物語るかのように、建物には粗末な木材が使用されており、それらが青、赤、黄、緑などの原色で豪華に装われているのを見ると、多少の興ざめは否めない。かえって、荒廃と調和させてしまつた方が、日本的な感覚では味わいがあるのではなかろうか。

しかし一般に、これらの古寺は今もしっかりと生きてい

るかのように思えた。商店では、約束事かのように読経にテープを流しており、本堂では多くの信者たちが立伏礼を繰返していた。たしかに観光化的流れが押し寄せてはいるが、それでも信仰の場や生活の場としての第一義的な意味は失っていないよう見受けた。あるいはのためにこそ、鮮やかな彩りが必要とされているのかも知れない。勝手な感想は慎まなければなるまい。

六月六日（水）は韓国の顯忠日。休日なので、晋州市から西三十キロのところにある多率寺に出かけることにした。双谿寺とともに中国から初めて茶が入ってきたところで、般若茶の故郷とも言われている寺である。茶道を趣味としている妻と、共通の話題にできるかと思うと心が弾む。異国に離れて生活していると、そんな工夫もふたりを近づける。

地図を調べると、列車なら行けそうである。列車の時間がわからないが、いつもの登山帽に古びたザックのスタイルでとにかく晋州駅に向う。

たまたま一時間位待てば八時半の列車があるという。多率寺駅に止まるのは、一日に三本しかないというのだから、全くついていたと言うべきであろうか。駅の周辺を散歩しながら時間をつぶす。もちろん列車で行くのは初めてである。料金はわずか千百ウォン（約百円）。

普通ならどこに行くのにもバスを使う。安いし、近郊都市間のバスでさえも大体は十分間隔で運行しているからである。自動車の普及と共に近代化が始まつた韓国では、鉄道の近代化を完全に素通りしてしまつた。いくら国策としてバスよりも安い料金を設定しても、一日数列車ではどうにもならない。ソウルと釜山の間に新幹線を建設中であるが、はたしてバスに対抗できるのであろうか。そんな議論が韓国でも持ち上がつているという。

四十分ほどで多率寺駅に到着したが、降りたのは三人だけ。もちろん無人駅である。帰りの列車を確かめると一時間後に一本あるが、それにはとうてい間に合わない。そうすると午後の六時過ぎまで全く列車はない。やはり帰りはバスにならう。

左に川、右に小丘陵の地形に細長い段々状の田圃が広がつてゐる。その中をダンプカーの行き交う歩道のない

道が通つてゐる。ちょうど田植えの真っ盛りであつた。九十年ぶりの早魃だと新聞は騒ぎたてているが、この辺には十分の水が供給されているようで、水面が輝いてゐる。もつとも、この田植え時期になると、一举に水がめが空になつてしまふのが、米作地帯の宿命で、足りないとなると余計に確保するような現象も発生しているのかも知れない。

そういうえば絶えて日本では田植えを見ていない。田植機とはこんなに簡単でこんなに威力のあるものだったのか。この農業革命によって韓国も大幅に労働人口を工業化に振り向けることができて、急速な先進国化に成功したのである。働き手が皆な都会に出ていったのも日本と變るまい。だから休日こそ稼ぎ時で、若者も多く混じつてゐる。その中で、おばあさん達が手植えをしている。

そうなのである。韓国は先進国でもあり後進国でもあるのだ。道路にござを敷いて日ながら手作りの野菜を並べて売っているアジュモニたちの商売は、どう考へても人件費も商品もただでないと成立しない。それでも彼女たちはたいてい携帯電話をもつてゐる。このアンバランスが韓国を象徴している。

道路沿いの山裾には巨岩が露出している。韓国では山や渓谷に入ると巨岩だらけで、山といえば全て岩で出来ているかのようである。それがこの近辺では山裾まで広

がつていて、まるで巨大な岩盤の上に表層だけ一皮土を被っている状態である。これでは大きな木が育つはずがない。すこし根を張れば、岩に突き当たってしまうからである。それでも根はたくましく伸びている。

だから、韓国の寺院の木材が貧弱なのは、何も秀吉のせいばかりでもなさそうだ。このような地質地形では、捩れた木でも大切に活用しないと建物を造ることができないのだろう。それにしても、これだけ豊富な石材があるのに、なぜヨーロッパのように石の文化が成立しなかったのであろうか。岩質に問題でもあるのであろうか。寡聞にしてこのようなことをまともに議論しているのを知らない。もっとも、古代韓国では城壁造りに素晴らしい築石文化をもっていたし、現代の韓国はコンクリートとレンガと石で町が成り立っている。

一時間ほど歩くと、多率寺の参道入り口に至る。ここから右折して多率寺入り口まで二十分ほどかかる。

途中、珍しく漢字で「鳳鳴山多率寺参道」と書かれた石柱があった。乙巳年とあるから、一九〇五年であろうか、あるいはもっと古いものかも知れない。ただ、多率寺の山号は他の本では方丈山となっている。何か事情があるのだろうが、ひとり歩きでは確かようがない。

それにしても、韓国の漢字廃止は徹底している。ワールドカップを前に、英語と漢字で併記する動きはあるが、

今はどこを歩いていても、ハングルしか見かけない。参道に入つてからも、ハングルでいろいろと書いてあるが、それが南無妙法蓮華經であつたり、南無阿弥陀仏だつたりするので奇妙な感じがする。

多率寺の門から、伽藍までは六百米くらいある。他の寺院と同じく、渓谷沿いに木々のトンネルが続いている。見あげると、木の葉が光を通して柔らかな緑に輝き、それが風にそよいで、時に裏面を白く反射させている。その光のゆらぎの中で、突然、精神を病んでいま病院にいる弟のことを思い出す。幼い彼を連れて、鎌倉の森を歩いた日にもこんな光を見たことがあった。

ひと回り以上も違う弟は、有名私大を出て、大手商社に入り、美人の妻を娶り、愛らしい息子にもめぐまれ、傍目には順調そのものであった。しかしそれが重荷になつた。いつも人の目を意識して、仕事の上では上司や同僚から咎められることを極度に嫌つた。だから、与えられた仕事は、必要以上に完璧に行つて、自己満足していた。しかしそれでは、仕事がさばけるはずがない。地位が上がれば上がるほど、毎日の雑事をさばくのが仕事になるのに、さばけなければ自然と置きざりにされてしまう。同僚たちから避けはじめた。

それを本人は、学歴のせいだと勘違いしていた。有名

私大出身とは言え、まわりにはもっと有力校出身者がうようよいた。劣等感に苛まれるようになり、野球をやめ、ゴルフをやめ、友達付き合いを絶ち、ひたすら仕事と妻子供に心を集中し、将来に備えるため、異常なほどにお金に執着しはじめた。

やがてお金や妻や子供に対する過大な関心は、ひとり相撲となり、ちょっとしたことにでも怒りを爆発させるようになつていった。愛する妻や子との間に溝がひろがつた。そしてリストラの季節を迎えた。

大手商社では、社員の一生を面倒見る仕組みが出来上がりつていた。弟はその仕組みを信じようとしていた。しかし時代の流れはもつと早く激しかつた。さすがに既得権をそのまま無にはしなかつたが、時間を切つて、それまでに退職すれば旧制度の恩恵を受けられると迫られた。力の有る者と力の無い者から去つていった。その中に弟もいた。

退職がきっかけであった。愛する妻が去つていった。

最初はお金の威力で引きとめようとした。しかしそれが足かせになつて、結局は退職金まで与えて別れることがなつてしまつた。親からの遺産と会社からの年金程度は残つたが、再就職もままならず、孤独と将来への不安の中で、精神に異常をきたした。

弟にはしばしば海外旅行を勧めていた。異文化に触れ

ると、今まで拘つていたことが小さく見えることがあるし、まして貨幣価値の異なる国に行けば、お金の心配も和らぐであろう。それには、ポルトガルやスペインが良い。いやタイの方が暮らし易いとも聞く。

ああ、そうだ。弟を韓国に連れてきて、一緒に生活してみたらどうだろうか。その時は「こうして、ああして」と思ひが駆け巡る。

参道が行き止まりになつたところに駐車場があり、そこから階段を上ると、傾斜地に伽藍が広がつてゐた。大雄殿（本堂）らしい位置に寂滅宝宮と額の掲げられたお堂がある。ハングルで「佛紀二五四五五年」「舍利塔重修佛事百日祈禱道場」と垂れ幕が出ている。韓国ではどこでも垂れ幕の洪水であるが、寺院も例外ではない。参詣者には女性が多いようである。堂内でさかんに立伏礼を行つてゐる。

普通なら本尊の安置されるべき場所には何もなく、その後ろに大きな嵌め殺しのガラスがあり、それを通して裏にある舍利塔が望める。最初は巨大な鏡かと思つたが、ガラスを通してかすかに歪んだ舍利塔が、暗い堂内を額縁に見立てて浮き上がつてゐる。平等院鳳凰堂や奈良淨瑠璃寺では、尊佛のお顔を小さな覗き穴を通して池に写して拝する趣向があるが、それに比べたら何と大らか趣向であろうか。説明によると、やはりここはもと大雄殿

であったが、一九七八年に、弥勒菩薩画から舍利塔を作つて安置して、こ
が発見されたため、それを舍利塔を作つて安置して、こ
ちらを拜礼殿に改称したものらしい。

寂滅宝宮のまわりには、応真殿（羅漢殿）や極楽殿がある。こちらの方が由緒ある建物らしくハングルと英文の案内板が立っている。いずれも似たようなことが書いていて、新羅智誼王四年（五〇三）に縁起祖師がここに麗岳寺を創設したが、善徳女王五年（六三六）にこれらの二堂を建て多率寺と改称したという。ここも例にもれず、壬辰倭乱で完全に焼失し廃墟に化したとある。

そんな説明文を読んでいるところに携帯電話のベルが鳴った。一応「ヨボセヨ」と応えるが、妻からの電話であった。妙子のところに予定通り男の子が生まれたとい

う。初孫である。気分が高まり息せき切つて質問するが、どうもこちらの声が聞えていないらしい。そういえば、山地や人里を離れると、携帯電話が繋がらなくなるという。電波中継所が近くないと、使えなくなるタイプらしい。そうこうしているうちに結局切れてしまった。こちらからかけ直したり、向こうからの電話を待つたりしたが、状況はますます悪くなるばかり。とにかく、無事出産したらしいので、あわてることもあるまい。

しかし、もうゆっくり境内を見学している氣にもなれない。新聞の切抜きによれば、多率寺は、日本の統治下

にあって、反日抗争の拠点となっていた。一世を風靡した思想家や詩人、小説家、画家それに政治家たちが、三國志の豪傑志士の如く、集まっていたという。そんな面影を探してみようと思ったがやはり落ち着かない。

売店に立ち寄って、茶器を見る。茶の歴史では由緒ある寺らしく、味わいあるものが無造作に置かれているが、買うのは妻と一緒にした方が無難である。資料を読んで見るが言葉が難しくてよく判らない。おおよその意味は、この茶は竹向茶といって、油っぽいお寺の食事にあわせて、胃の負担にならないよう、竹を使用して作った香り高くソフトなものということらしい。後で思えば、初孫の誕生に合わせて何でも良いから買っておけば良かったと思う。

多率寺の門まで戻ると、休憩所があった。まだお昼にはちょっと早かったが、とりあえずひとりで乾杯をすることにした。電話はまだ通じない。

ビールと軽い食事をとつて外にでると、心地よくふらつく。暑い日差しがあった。

そういえば、妙子の生まれた日もこんな日差しがあった。たまたま日曜日で子供達をふたり連れて妻の実家に出かけたところであった。実家に着くと、前置胎盤で異常出血があり、国立相模原病院に緊急入院したとの連絡

が入っていた。

様子が全くわからない。とにかく病院に急行しなければならない。車よりも電車とタクシーの乗り継ぎが早いと考えて田園都市線で長津田に向った。そこまでは順調であったが、長津田には一台もタクシーがいなかつた。子供は駄目かも知れない。妻はどうしているだろうか。十分、十五分、二十分。まだ来ない。もし電車が来たら隣の町田駅まで行つた方が早いだろうか。いや、もう少し待てば来るに違いない。三十分、四十分、まだ来ない。七月の初めだと言うのに、真夏の日差しであった。駅前は死んだように暑く静かであった。

やっとの思いで相模原病院に到着した。受付に駆けつけると白帽の看護婦さんがこちらを振り向いた。たまたま妻の帝王切開手術を終えて、いま休憩中の看護婦さんだという。帝王切開で生まれた胎児は、酸素が欠乏して蒼白だったそうだ。危ないところだったという。美しい人であった。白い帽子が良く似合っていた。絶対にこの顔は忘れない。

その妙子が男の子を産んだという。異常がなければそれで十分だ。いや異常があつたって良いではないか。

参道入り口の国道まですると、あいかわらずダンプが往来していた。やっと電話が通じた。今度は大丈夫だ。予定日よりも一週間近く早く生まれて、体重は二八五〇

グラム。お父さんに似ていたらどうしようと心配している妙子、相手側に似ていて一安心しているらしい。苦笑する。

さて、バス停を探そう。もっとも今日は歩くための外出だ。この前の土曜日には、登山好きの教授や学生達と智異山に登つて來た。韓国ではもっとも険しい山で九時間かかりた。日曜日には、慶州まで遠出して、主要な遺跡を歩きまわり、ついには念願の南山新城跡にも登ってきた。一日平均一万五千歩を目指しているが、今月に入つてからは、平均二万歩を超えるペースだ。今日もできるだけ歩こう。そのため、バス停のある駅の方とは逆の方向に向つて歩き出す。

家並みが途絶えて久しくなつたころ、突然、高層アパート群が目に入った。韓国はどこに行つても高層アパートばかりだ。こんな田舎にまで、高層住宅を建てるとは何たることか。

近づくと、それは韓国軍八二六五部隊の宿舎であった。顯忠日は、国のために命を捧げた人たちを偲ぶ日、軍隊に休日があるのかどうか知らないが、迷彩服の守衛兵が、不動の姿勢で立っている前で、私服の青年たちが何か談笑していた。垂れ幕には、天下無敵白虎隊とある。ここだけは漢字で書いてある。そうでないと感じがでないの

かも知れない。白虎隊。どこかで聞いたような気もする。

道は、南海高速道路がすぐ近くに見えるところで町に入った。町といつても道路沿いにいくつか商店が連なっているだけである。バス停が町並みのはずれにあった。しかし、もう少し歩きたい。

歩いていると車が止まってくれる。乗って行けと言う。もっとも、自動車道路を歩いているものなど皆無である。韓国ならヒッチハイクは容易であろう。まして、道路が山間部になると、次の停留所まで三十分以上もかかるてしまい、当てにしていたバスも行過ぎてしまった。

また、弟のことを想った。彼はいつも「もし……」「もしも……」と仮定の心配ばかりするようになっていた。大手商社に勤めていることを誇り、美人の妻を勲章とし、いつも自分よりも上ばかり見て生活し、そうでない人達を見下している風さえあつたことへの反動であろうか、とにかく脱落するのを恐れていた。

世の中には、恵まれない人たちの方がはるかに多いのだといふら言っても、けつして耳を貸さなかつた。事実、今でも弟はまだ恵まれているし、これから的人生も閉ざされてはいない。そこから抜け出すには、早く落ちるとここまで落ちなければだめだというのが、妻と私の意見であった。底を見たことのない弱さなのだ。

私たちには武という知的障害を背負つた子がいる。この子が果たして、ひとりでバスに乗れるようになれる日が来るであろうか。それが、初めて異常に気づいた時の想いであった。

その武が今では、社会福祉法人の工場でお給料を貰つて働いている。とても他人との比較にはならないが、以前の彼と比較すれば、確実に一步づつ進んでいる。その進歩を見つける度に、私たちふたりは喜び合ってきた。武のお陰で、私たちはより深く人生を味わえたとも思つている。将来に不安がないかといえば、そんなことはないが、弟などには、この気持が全く分らないのである。

✓恵まれすぎていると人の心が分らず、恵まれないと人生を深く味わえる。人生とはそんなものであろうか。

だから、初孫に何かあっても、妙子は強く生きて行けるはずだ。

やっとバスに乗る気になった。田舎のバスに乗つて、また思い出した。

日本語もおぼつかない武がなんとか公立の中学校に入れてもらえた時のことであった。英語の授業が始まつた。せめて、読み方だけでもと思い、毎朝一時間、武と一緒に英語の教科書を読み続けた。その中に「黄色いハンカチ」という物語があった。

刑を終えて、バスで故郷に向う男がいた。もし妻子が迎えてくれるなら、バス停の桜の木に黄色いハンカチを揚げて欲しいと手紙を送つた。ハンカチが出ていなければ、そのまま通り過ぎる。そんな不安の中で男が見たのは、桜の木いっぱいに結ばれた黄色いハンカチの群であつた。

毎朝、おなじところを読みながら、同じように感動した。そして武がはじめて普通の生徒みなみの成績を得たのが英語であった。

その武と離れていま韓国に来ている。大学の金属系招聘教授という立場は作つてもらつていて、いわば趣味の歴史と考古学のためである。武のために、こんなことをしていてはたして良いのだろうか。

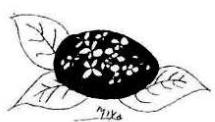
しかし、武がまた少し成長したという。それを知らせてくれる妻とは心が通う。そうだ。この次は、妻と一緒に多率寺に来よう。やはり茶器は買わなくて良かった。



K.-Suzuki

結局この日は、二十五キロ近く歩いた。宿舎のアパートではまた乾杯が待つていて、そして今日一日が終わる。いつかきっと、これを読んでくれるかも知れない初孫を想いながら。

六月の雨



森 実与子

依然として雨はやまない。

さっき電車の中から見たときは、あんなに晴れていたのに。一瞬のうちに空は雨雲に覆われ、太陽は姿を消し、雷鳴が轟いた。そして、地上のあらゆるものを受けようなどしゃぶりの雨が降りだした。

毎年、夏の到来を告げる頃になると決まってやってくる、気まぐれな雨である。

汗ばむほど蒸し暑い昼下がり、渋谷駅東口のバスタークニナルには、雨宿りの人がいっぱいに群れている。激しい雨脚が、コンクリートの地面を叩きつける。道路を隔てた目の前の東急文化会館の屋上には、プラネタリウムの銀色のドームが、湿っぽく震んでいる。

私はかれこれ三十分も、バスタークニナルにたたずんでいた。その間に、バスは五台出ていった。でも乗客は少ない。ちょっと不安になつた私は、小刻みに腕時計をの

ぞいた。

五年前のあの時も、こんな雨の日だった。

電車から降りて、駅から家へ歩き出そうとした途端の雨だった。

傘の用意もなく、濡らしてしまうには惜しい高校制服を着ていたためか、あるいは、ウェーブした髪の毛に雨がかかるのが嫌だったのかは定かでないが、私は駅に隣接するデパートの入口に立って、雨脚の過ぎるのを待つことにしたのだった。

見上げると、鉛色の空からさめざめと雨が降っている。駅前の街並みに目を移すと、街の灯が、かすむように光を増している。雨は一向に止みそうになく、それどころか、徐々に大粒になっていく。デパートの入口には、雨宿りをする人たちがいっぱいにあふれ、あたりはいつそ

う混雑してきた。意を決して歩き出す人、時間を気にしながら雨宿りする人、雨をかきわけてゆっくりと進む車……。

迎えにきてもらうあてもなく、タクシーを使うお金の余裕もなかつた私は、人だかりの中でかなりの時間、ぽんやりと雨脚に流れる車や人々を眺めていた。

二十分ほどたつただろうか。私は雨宿りするのをあきらめて、黄昏の雜踏のなかに混ざり、歩いて帰ることにした。

信号が赤から青に変わり、どっと動き出した人の群れに押されて、歩き始めたちょうどその時だった。不意に後ろから、黒い傘が開いた。

「……送つてあげるよ」

振り返ると、白い半そでシャツにチャコールグレーのズボン姿の、どこかの男子高校の制服を着た、瘦せて背の高い男の子が立っていた。

彼の言葉に、私はちょっと戸惑いを示した。近所で見かけたこともなかつたし、もちろん私は、その男の子の名前も住所も、電話番号も、両親のことも知らないのかもしれない。しかし送つて貰うということは、女の子にどう迷惑どころか、楽しい出来事にちがいなかつた。ただ

その当時の私は、男の子からの誘いは、受け入れるよりも断るほうを優先して考えていた。

▽

その男の子は、日に焼けるのを嫌っているような、青白い顔色だった。でも、多分私より年若い女の子でも、彼にはすぐに親しみを感じたと思う。はにかんだ表情が妙に優しく、憎めない感じがしたからだ。

私は男の子の誘いに頷いて、好意を受けることにした。そして、駅から私の家まで十五分ほどの道のりを、一人で一つの傘に入つて歩きはじめた。

ドシャ降りの雨が、傘のなかに霧となつて立ち込める。彼の腕と肘は、傘の向こう側からはみ出て、びしょ濡れになつていた。

二人とも沈黙したままだった。

（どうして黙っているの？ 無口なの、それとも恥ずかしい？）

何か気の利いた話でもしなければ、そう思うとあせりだけが先走り、逆に、思うような言葉が出てこない。喉はカラカラに乾き、体は固くなつていて。心がどぎまぎして、ひたすら前を向いて歩くことだけしか、頭になかつた。

やがて、私の家の黒い門が見えてきたところで、別れを告げた。

彼は口のなかで、「じゃあ……」というような言葉をはいた。私もつられてなんとなく口を動かしたが声にならず、お礼の言葉も言えなかつた。彼とはつきり面とむかったのは、別の時ほんのわずかな間に過ぎなかつた。

た。

二人で歩いた十五分は、何だか息苦しい気分だった。彼が眞面目そうだったからかもしれないけれど、半面、妙にほの暖かい目つきでじっと見返されると、私は奇妙にあわてていく自分を感じた。

（こんなにあやしく心を取り乱してしまって……）

雨が降ってくれたことに感謝して、コーヒーの一杯くらいい、飲んでも悪くないな

それは高校一年生の、夏休みも間近い頃のことだった。

「よく覚えているよ。雨のなかを一つの傘に入つて歩きながら、今度どこかへ行かないかと、デートの申し込みをしよう、何度も思つたんだ。……なのに、結局何も言えなかつた。さよならの挨拶もできなかつた」

「私もそうだったわ。せっかく雨のなかを送つてもらつたのに、『ありがとう』の一言も言えなくて、随分、後悔したわ」

それから三年後、彼、戸川良介はT大生、私はK大生となつてそんな会話をかわしていた。

「……やあ、すっかり遅くなっちゃつて……」

ぼんやり思い出に浸つていると、突然、背中で声がした。

振り向くと、待ち合わせ相手の田上守男が、人込みのなかからひょっこり姿を現した。しばらく見ないうちに、路上に跳ね返る雨滴に濡れている。

（ああ、もうすぐ夏の盛り……）
田上の濡れた革靴を見ていると、真夏のカラッとした性欲とは違う、暗く渾沌した官能的な季節の漂っているのが感じられてくる。

（でも私はまだ二十一才。結婚だの未来の夫だの家庭なんて、まったく考えられない。寝たい時寝て、起きたい時起きて、食べたい時に好きなものを食べて、一年中ずっとるべったり、節目のない日常を暮らしているんですね。だから、束縛されることがたまらないやになってしまった）

（ううん、いい。なんとなく、今日の日にふさわしい沈んだ容貌がいい）

そんなことをちまちまと心に呴きながら、田上の横顔を見上げるように覗いた。卵型の彫りの深い顔立ちは、陰影を帯びている。とりわけ、ちょっとめぐれただけの肉感的な唇が特徴的だ。

（ううん、いい。なんとなく、今日の日にふさわしい沈んだ容貌がいい）

「オムネアニマル ポストコムイツ トリスティ……」

突然、習いたてのラテン語が口から発せられてしまつた。

少し太ったみたいだ。グレーのスースに白いワイシャツ

を着て、クリーム色に緑色の細かい柄が入つた派手なネクタイをしている。肩からは、ナイロン製の黒いショルダーバッグをさげていた。

「待たせちゃったかな。この雨で、電車が遅れてしまつてね」

あわてたように言うと、芸術家のような長い髪をかきわけながら、顔に吹き出した汗を、ハンカチで懸命に拭いている。私は、

「いいえ、こんな日によくおいでくださいました」

そう言つて首をわずかに傾け、遠慮深げな微笑を口元に添えた。

「タクシーも満員みたいです」

目の前のタクシー乗り場には、長蛇の列ができる。

「ええ。でもバスがあります」

優雅な口調が口をついて出た。くすぐったいものが、心の底から湧き上がつてくる。

普通料金より安い『日赤医療センター行』のバス停に、田上と並んだ。

夕方までにはまだたっぷり時間があるというのに、辺りは薄闇のようだ。美しく装つた街の照明が、路上の水面に反射してキラキラ輝いている。

今度は、バスがなかなかやつて来ない。私たちは肩を寄せ合うように、しばらくたたずんだ。

少しおしゃべりだつたのだろう。

もちろん、その粘りのある特有な語調の意味を、田上に伝えるはずがない。

（性交とは、まさしく動物的行為に他ならない。その行為のために、動物的でないもの、つまり、束の間の精神的なものが浮かんでくるのだろうか……。まったく普通に考えれば、はじめは精神的恋愛が芽生え、次第に接近して肉体関係に入るということになつていて。だが、肉体関係が終わつた後に、遅ればせに精神的な恋愛がやつてくるとはいえないだろうか……）

（美佐さんは文学部でしたね）

「ええ……」

「専攻はなんでしたか」

「哲学ですけど」

「哲学か、いいですね」

「そうですか」

（そうですねとも。これからの時代の学問です）

知的で涼しさを説く声だが、退屈で淡白な会話など、私は少しも面白くなかった。

そうこうするうちに、バスがやってきた。満員の乗客が次々に降りていくが、その多くは、女子学生だった。

私たちは空っぽになったバスに乗りこみ、後から三番目の二人掛けの座席に座った。私たちに続いて、一組の夫婦らしき老人、修道院のシスターが一人、それにお腹の大きい妊婦が一人乗り込んだ。一人は肉感的な女、もう一人は中性的な感じの女だった。妊娠すると、皆こんな風になるのだろうか。

座席の真下に車の後輪のタイヤがあつて、床面を大きく盛り上げている。私は足を折り曲げて、狭い床面の上に夏物のサンダルをはいた両足を乗せ、行儀よく揃えた。ナイロンのストッキングから透けて見える足は、小さくて形良く、指先のワインレッドのマニキュアが浮いて見える。座席は床面同様小さすぎて、田上の身体が、ぴったりと密着してくる。大きな体を、無理に押し込めているみたいだ。

「人生って、いつになつても思いがけないことが起こる……」

「いや、なんでも」

「いや、なんですか？」

「えっ、なんですか？」

「いや、なんでも」

田上は、はにかみながら笑みをもらした。しかし私の顔がすぐ近くにあるのに気づくと、一瞬うろたえたようだつた。

沈黙を恐れてか、田上はまた野暮な質問をしてきた。

「行けばわかりますから……」

私の言葉に、田上は今度こそ黙り込んだ。

するすると自動扉が閉まり、発車のブザーが鳴る。それに続いて、テープに吹き込まれた、女性の声のアナウンスが流れる。ワイパーが左右に動き、運転席の大きなフロントガラスに吹きつける雨滴を、かきわけている。バスが走り出した。相当なノロノロ運転で、目的地とは反対の方向へ向かう。駅前の広場は、雨のせいもあって、車がびっしりと詰まっている。まず信号を右に折れ、次に左に折れる。その度に田上の腰部と腿が、私の全身に強く触れて寄りかかる。

高速道路の下をくぐる時、瞬間、暗いかけりが車窓を覆う。車の振動の度に、私は窮屈な座席から身を乗り出そうとしていた。不意に、自分の心情をなんとか説明しようとする田上に、いいようのない親しみを感じていた。(正直な男なんだ、きっと)

つらつらと思いつにふけりながら、こうして悠長に過ぎていくわずかな時間に心を任せることができ、私は好きだった。

「夕立みたいですね」

「ええ、そんな感じですね。涼しくなってきたみたい」

「しかし、夕立にしては少し時間が早いですね」

その時、青白い閃光が走った。

(思いがけないことだなんて、気取った言い方。本当は予期していたくせに……)

私が黙って車窓の外に目を向けてしまうと、田上はなんともいいようのない顔をして、時々、私の横顔に視線を走らせる。手持ち無沙汰というか、沈黙を持て余して困惑している表情が、薄暗い外をバックにガラス窓に映っていた。

「哲学でも、どの辺が一番好きですか」

（またまた色褪せた話題を持ち出して。そんな事、本当に興味があるの？ もっと内密な話があるんじゃなくて……）

「うーん、まだそんなに勉強していないんです。大学の授業、あんまり面白くなくて」

私は興味なさそうに答えた。

（大学なんて、広く浅くの耳学問、目経験だけの聞きかじりの半端な知識を、もつともらしくお喋りしあうだけの悪い癖を持つ若者を、大量に生産するところよ。伝統、建物、校歌……、そんなロマンチズムの装飾品の宣伝文句につられて入ってくる場所にすぎないでしょう。中身はからっぽなんだから）

田上が無理に私に話を合わせようとしているのがわから、私はそれっきり黙ってしまった。

「美佐さんのためにも、お母さん早く元気にならなくてはね。ところで、その後の様子はどう？」

「ほら、雷」「やっぱり……」

窓の外は、急速に暗くなつた。稻妻が、再び青く光る。それを追いかけるように、遠くで雷鳴が重くとどろいている。大粒の雨が、バラバラと音をたてて落下し始める。見る間に、流れゆく風景のあらゆるもののが、ずぶ濡れになっていく。バスの屋根をたたく雨で、車内に激しい雨音が充満する。

バスは緩やかな坂道を走る。それから、吸い込まれるように地下道に入り、オレンジ色の常夜灯が、闇のなかに美しく浮いている。その時なぜか、二十才になつたばかりの戸川良介の言葉を、思い出した。

「どうせ死ぬなら盛大に死にたい」と、病床のなかで喘ぐように言つた言葉を。

そうだった。

鮮やかすぎるほどの記憶が甦ってきた。このバスの路線の辺りは、良介と何回もデートで歩いた道だった。

その時も、今日のような天気の日だった。
……それまで晴れ渡っていた空が、いつの間にか厚い雲に覆われていた。すがすがしく乾いた空気までもが、ムッとした生暖かく重い風に変わっていた。

「雨になるかもしれないわ」

身を包む重さを振り払うように、私は横を歩く良介に

声をかけた。

「何?」

夢からさめたように、良介はハッとして言う。

「うん、雨になるかもしれないって。降ったら困るわ。傘、持つてないの」

「雨か、まあ大丈夫だろう。この先が神社だろう、行つてみないか」

あまり気乗りがしなかつたけれど、私は誘いに応じた。

鬱蒼とした森に囲まれた境内は閑散としていて、私たち以外にはいない。神殿の正面の鳥居のところで、私は思い切って良介に言った。

「私、今はあなたが好きよ。だから、あなたが自分の家族や親戚のことをどう思つてもいいけど、私には絶対に聞かせないで」

「まあ、その話はもうやめよう」

不用意に親の話を持ち出されて、良介は少し不機嫌な顔つきをしたが、話を変えるように、「神社のおみくじって、すごくいい紙が使ってあるんだ。和歌なんか書いてあってね」

と言う。

本殿横の出店みたいな小さな木造の建物のなかで、巫女の服装をしたきれいな女人人が、おみくじを売っていた。私は六角柱の木箱をガラガラ振って、一本の木の棒を選んだ。棒の先に書いてある番号を、良介が女人人に

大きな木を選んだつもりだったが、雨を避けるには不十分だった。私たちは、自然と体をくっつけ合うような格好になっていた。

良介の腕が、私の濡れたむきだしの腕にからまつた。彼の腕を感じている部分から、次第に熱が全身に広まつ

ていくような気がする。そんな私の心のなかを知っているかのように、良介は体を、私に押しつけてくる。

「寒い?」

「ううん、そうでもないけど」「さっきのこと、まだ気にしてるの?」

「もう忘れたわ」

そう言って、私は良介の胸に顔を押しつけた。彼は私の肩に手を回し、そっと抱き寄せる。そして耳元で、「どうする?」とささやいた。

「そうね……」

こんなとき、私はいつも心とは裏腹に、さめた返事をしてしまう。

ほんやりと、眠るように私は目を閉じた。まるで私たち二人は、夢のなかを漂っているような錯覚にとらわれた。そうやって抱き合ったまま、ずっと雨宿りをしていった。しかしくら待つても雨は本格的に降り続け、やみ

そうになかった。体が段々冷えてきて、時々震えるようになっていた。

「寒いわ」

告げると、おみくじを渡してくれた。それを見ると、"小吉"と書いてあり、"日頃の努力が大切なり"と注釈してある。

「日頃の努力が大切なんですって」

「ふーん、日頃の努力ね。……努力って言葉の使い方、知ってる?」

「知らないわ。あまりに安っぽくて」

「努力っていう字は、女のマタにチカラって書くだろう。だから夫婦に子供ができるときに、姑が『あんたたち努力してるの?』っていうことさ。つまり、すばりやりまくってんのと聞かずに、婉曲に表現するための言葉なんだ」

私は良介の顔を正面から見て、「あんたって、案外バカなのね」と言い返す。

神社を出て石段を降りようとするとき、突然激しい雨が降りはじめた。たたきつけるような雨は、私を、そして良介を、冷たく濡らした。

私たちは、薄暗くなつた木立ちのなかから雨宿りできそうな木を選んで、その下に駆け込んだ。

「どうしよう……」

ハンカチで肩や手をふきながら、私は彼に言つた。

「そうだなあ、ひどい降りだから、すぐに止むだろう。ここまで止むまで待つていよう」

「やっぱり帰ろうか。そうだよな、ここから渋谷の駅まで、走つていけばそんなにかかるないだろう。行こう」「私、走るのは、小学校のときから得意じゃないの。だから歩くわ」

私の言葉を聞くと、良介は先に歩き始めた。彼の体と接触していたところが、急にスッと冷たくなる。雨の冷たさは私の体から熱を奪つていたが、私の体を抱いている良介の腕と心は、確かに暖かだつた。

こうして渋谷の駅まで、私たちは濡れながらトボトボ歩いた。

駅に辿り着くと、ホテルに入った。濡れてしまつた洋服を乾かすには、ホテルで時間を過ごすのが、一番都合がよかつた。

ホテルの部屋に入ると私はバスルームへ直行し、浴槽のコックをひねつて熱湯を出した。

部屋に戻ると、良介は大きなベッドの上に、仰向けに倒れこんでいた。

「ここで思い出に浸つて、死ぬのを待つか」

良介は何気なく言つたつもりだろうが、その言葉は私の胸に鋭く突きさつた。

今私たちが抱いている青春の欲望の消え果てる日が、近

い将来、必ずやつてくることを、私に実感させたからである。見かけだけ若くても生きる目標が何もなければ、同じだ。寂しいけれど、人間はいずれ誰彼の区別なく、年をとつて死んでいく。

そう思うと私は無性に切なくなり、良介と一緒にいるのに、冷たい風が心を吹き抜けた。そして良介の横に横たわり、そっと彼の肩を抱きしめた。冷えきった体は、こうやつてお互いの体を寄せ合うことでしか暖かくならない。体を触れ合ってわずかな体温を感じ取ることだけが、自分の存在を知る唯一の手立てであり、人間はみな、そんな寄る辺のないちっぽけなはかない生きものだと感じていた。

良介が私の唇を塞ぎ、私たちはキスを交わした。心の片隅に抱えている孤独を埋め合わせるために、激しく求め合っていた。

ホテルを出た私たちは、高層ビルの最上階のレストランへ入った。

雨はすっかり止んでいた。

私たちは、窓側の席に向かい合つて座った。そして食事をしながら、眼下に広がる無数の灯火のきらめき眺めた。

ひときわ際立つて、灯りの渦のような輝きが見える。それは繁華街のようであり、野球場のようでもあった。

さらによく映る光の粒のなかに、一筋の灯りの河がある。高速道路なのだろう。

良介は何度か席を立つて、家に電話をしているようだった。

食事の最後にコーヒーが運ばれてきた。カップから立ち上ぼる湯気の白さと、良介の指にした紫色の煙を、どれほどの間、私は黙って見守っていた。

良介は、食後、いつも盛んにタバコを吸う。煙が肺を一巡して、小さな苦しみとともに口と鼻から出て行き、その灰色の煙が私を包み込む。

「ブルーの絵柄のみかけない箱ね。ちょっと見せてくれない」

私は、良介の手元からタバコを取った。

「ふーん、これどこのタバコなの?」

「これは映画のなかで、俺の好きな女優が吸つてたんだ」「なんという映画なの?」

「パルプフィクション」だよ

「それならわかったわ。エマ・サーマンでしょ」

「その通り」

「でも私、あの女優好きじゃないわ」

「クリスタルの灰皿は、ピカピカに磨かれてきれいなのに、ジユースの入ったグラスには、どぎつい口紅がついている。そしてまだグラスに残っているオレンジ色の液体に、頭を突っ込むようにして、タバコの吸い殻が捨て

に出張、妹は修学旅行中、母親は親戚の家の留守番を頼まれているから帰らない

「誰もいない家の、孤独者のお相手ね」

「そう皮肉をいうなよ、いいだろう」

「いいわ」

てあるのを見たとき、俺、急に死にたくなった」
良介は私に向かって、またしてもホテルのときと同じような言葉を投げかけた。

「何故なの?」

「何故かな。……とにかくその時、そう思つたんだよ」

私は少しムッとした。

「その女は多分、考え事をしていて、灰皿に置いたつもりで、タバコをグラスのなかに落としちゃつたんだと思う」

「そうかな」

「それでいいじゃない。あなたはどうして、死という言葉を発するのが好きなの?」

「好きなんじゃない。実感なんだよ。……今朝気がついたら、部屋中至るところに、俺の指紋がいっぱいついていることがわかつたんだ。俺の触るものごとに、指紋がついてしまう。俺は期待されている人間なのだろうか。……ああ、これじゃあ逃げられないと観念したら、無性に死にたくなった」

「死なんて、非現実的な奇妙な感覚だわ。この世に生きていることの喜びのほうが、実感じやないかしら」

「俺は孤独なんだよ」

「随分、都合のいい孤独ね」

「孤独だから、美佐を離せないんだよ。今夜は俺の家に泊まつていってくれ。誰もいないんだ。父親はアメリカ

熱があった。往診に来た医者は、良介の身体に聴診器をあてて診察すると、風邪だといった。しかし良介は、一瞬、医者が首を傾げたことを覚えていて、医者が帰る

と、「俺もこれで一貫の終りか」といしながら、注意深く笑ってみせた。

「親父の財産、一円も使わずに死ぬのも情ない話じゃないか。美佐、俺と急いで結婚するか。そうすればいくらでも金を貰えるぜ。どうかな」

「あなたが私と結婚したいと思うのは自由だけど、そのことで私がいうべきことは、何もないわ」

「その意志なしか、俺とは」

「誰ともないわ」

「それはどういうこと?」

「だって、他の人と結婚したら、もうあなたともお付き合いできないでしょ。そんなの不便だと思わない?」

「不便かな」

「私、結婚なんて愚劣だと思うし、そのこと自身に興味ないの。……共に白髪になるまで、なんて嫌だわ」

「じゃあ、五年あたりが適當かな」

「テレビは、大体三十分か一時間。映画は二時間、食事も一時間。山手線一周は一時間四十分。セックスしても、一時間以内で終わる。結婚だけが死ぬまでなんておかしいし、契約としても長すぎるわ」

「それなら五年契約でいいか。そのあともお互い続ける気があれば、契約更新すればいい」

「そうね。一生、私のそばにはこの男がいるらしい、なんて心配する必要ないもの」

「結婚には魅力はないけど、男には興味があるというわけか」

「そうみたい」

「女は?」

「まったくないわ。嫌いだわ」

「それじゃあ、俺とも長くないな」

「お母さんと妹のことね」

「今、美佐が話したこと、全部創作であって欲しいな」

「おかげとスープを作つて良に食べさせ、その日は一日中、彼の看病をした。夜になつても熱がなかなか下がらず、もう一晩泊まつていこうかと思っているところへ、不意に彼の両親が帰ってきた。

二階の良介の部屋にいると、階下から、激しい声が聞こえてくる。

「あの方、いらしているのかしら」

母親の声である。

「美佐さんという方、またきているのね」

低い父親の声がした。しばらく声がとぎれてから、また二人の会話が続いた。

「お前は嫌いかね、あの娘が……」

「好きとか嫌いとかいうことより、何かあなたが、あまりに警戒なさらないものですから……」

「警戒? この私が、あの若い娘にか……。アハハハハ……」

父親の磊落な笑いで、会話は終わつたようだつた。

頃合をみて、私は階下へ降りていつた。

忍び足で階段を降りて、廊下の先のリビングをのぞく

と、母親は台所にいた。

「こんばんは。留守中にお邪魔して……」

私の言葉を遮るように、母親はキッととした目で私をにらんだ。

目鼻立ちのはつきりした怖い顔だった。なかでも大きなメガネの紫色のレンズの奥の目は、目尻が上がり、鋭くきつかつた。

「良介さん、風邪をこじらせたみたいで、熱があるんです。……それで気になつて、つい、長居してしまつて」

「それは、ありがとうございます。……あなたと遊びすぎて、風邪をひいたのかしら」

まるで他人事のような素っ気ない口ぶりと、挑発するような悪意のある言葉が、私の心をグサリと刺した。

「遅くまでお邪魔しました。失礼します」

私はこくりと頭を下げると、逃げ出すように家を出た。けれども、駅へ向かう線路沿いの夜道を夜風にあたつて歩きながら、私は良介のいう孤独など微塵も感じていなかつた。母親の態度など何ほどのこともない。こんなことぐらいで、私は心のどこにも深い傷跡など刻みはしな

い。そう、自分に言い聞かせていた。

それから二ヶ月後、良介は入院した。

私は絶え間なく彼を看病し、病院に通い続けた。良介の母親と私は、お互いに相手を避けっていた。母親はお昼前後に見舞いに来ていたが、私は夕方から夜にかけて訪れた。

ある夜、私が病室に入ると、目覚まし時計か電話のベルで目を覚ましたように、良介は突然ベッドから身を起こした。そして、ゆっくりとベッドから降りて私の傍らに立ち、うつろな表情を見せた。頭から血がひいていくようなぼんやりした様子で、明らかに眠気とは違う意識の薄らぎとか、けだるさを示していた。すぐに口に手をやつて、胃の底からこみあげてくるものを、喉の奥に押さえながら病室を出た。トイレに向かう足が、よろめいている。その様子を、私は冷感に見つめていた。

口にあふれた、生臭い液体状のものを便器に吐きながら、良介は目をむいた。病棟の灯の薄暗い光のなかでも、白い陶器に飛び散ったものが、血であることは明らかだつた。その塊は、コーヒーかすそのままの濃い茶色の液体だった。それからなおも続く寒寒に、良介は便器の上に両手をついて、身を震わせた。目に、涙が浮かんでいる。

「苦しい?」

良介の背中をさすり、差し出した私の手を払いのけて、

良介は両足に力を入れて立ち上がる。そうしてふらふらとした足取りで、夢遊病者のようにゆっくりと廊下を進む。ようやく戻ったベッドのなかで、良介は深い眠りにおちようとしていた。しかし頭脳の一隅は冴えて、自らの病魔への恐れを、煽っているようだった。

「何故、そんなに不安そうな顔をしているの……」

私が耳元で囁くと、良介は何も答えずに、混濁する意識の中へ落ちていった。

良介も私も、胃癌ではないかという恐怖がわいていた。でも彼は、なんの前兆もない喀血は九割九分までが胃潰瘍なのだと、自分にいいきかせるように私に告げた。そんな暗澹とした感情に覆われた日々が、数か月続いた。

それから次第に回復の兆しが見え始めた、ある日のことだった。

日曜日の昼下がり、いつもより早目に私が果物を持って病室を訪れるとき、良介は寝ていた。

寝顔を見るのは初めてだったが、そこにはまぎれもなく、私が馴れ親しんだ彼がいた。目を閉じた青白い面長の顔が、静かな寝息をたてている。ベッドの脇の椅子に座り、私はホッと溜め息をついた。時々、私は良介の顔を撫で、彼の体にふれた。子供のような穏やかな寝顔は、私がそばにいるせいだと思わせた。まるで、この世に私たち二人だけしか存在していないような静寂の時が、妙に私を安心させていた。

うれしかった。

しばらくすると、良介の両親と妹の三人が病室に現れた。私が急いでお辞儀をすると、彼の母親は挨拶もそこに、

「いつ見ても、ここからの眺めはよろしいですね」

と、窓際を眺めてから椅子に腰を降ろした。私がいったお茶を、ズルズルと音をたてながら一気に飲み干すと、「すみませんが、もう一杯いただけます。お茶は熱くなっいといけませんね」と付け加える。

「飲んでしまったら、どうということはないだろう。熱いものは、喉に悪いっていうぞ」

戸惑い顔の私に、父親が助け船を出してくれた。だが母親は平然としている。

「いいえ、お茶は熱くないといけません。だいいち、縁起が悪いですから」

その言葉から逃げ出すように、私は慌てて厨房室へ向かった。狭い厨房室のなかで、湯沸かし器のお湯が沸騰しているにもかかわらず、バツの悪さを感じた私は、少しの間たたずんでいた。二十分くらいしてからお湯を持って病室に向かうと、なから話声が聞こえてくる。

「いいじゃないか、良介の恋人なんだから」

母親の声だ。

「いいじゃないか、良介の恋人なんだから」

それから三十分か、小一時間もたつただろうか。だしぬけに、良介は目覚めた。目覚めの一瞬、悪夢でも見たのか、彼は小さな、しかしうるしげな呻き声を発した。そして目をうつすらと開け、荒い息をついて身悶えた。私は腰を浮かせて、良介の顔の上に身を乗り出す格好になつた。

良介ははっきりと目を見開き、しばらくのあいだ、不思議そうに私の顔を見つめていたが、不意に、表情がなごんだ。張りつめていた水が溶けるように、全身から緊張感が抜け、無邪気な笑顔が覗く。

その時、良介は口のなかで何か呟いたが、言葉にならなかった。誰かの名前を呼ばうとしたように私には感じられたが、誰を呼ぼうとしたのかは聞き取れない。しかし彼は、私の名を呼んだのだ。そう思つて微笑みを返すと、良介は一瞬ためらいながらも、安心したように小さく肯いてみせた。そして片手を私の前に差し出した。反射的に、私がその手を握りしめると彼はもう一度肯き、低いかすれ声で、

「……ずっと、俺のそばにいてくれよ……」

と囁いた。

その言葉が、今晚この病室に付き添ってくれという意味なのか、それともこれからもずっとそばにいて欲しいという意味なのか、私にはわからなかつた。しかし、とにかく彼が私の名前を呼んでくれたということだけで、

父親が答える。

「それにしても、あんな若い娘じゃ、役に立ちませんよ」「そうよ、お父様の会社関係の方もお見舞いにくるのよ。得体の知れない女が出入りするなんて、許せない」

母親と同じように甲高い、妹の声が続いた。

私は病室の外で、じっとしていた。気がつくと、お盆を持つ手が震えている。半ば開いたドアの前に立ち尽くしたまま、私はしばらく、なかに入していく決心がつかなかつた。

「母さんに、ずっと、そばにいてもらいたい……のが、希望だけど……」

良介の声だった。かさかさにかされた声だったが、私の耳にははっきりと聞き取れた。

「……さっき、あの娘が来る前、母さんの夢を見てた。……母さんの名を呼んだみたいだった」

私はためらわずに、病室に入った。

病室のなかで、皆、おやつという戸惑いの表情を浮かべる。良介は、半ば夢のなかにいるようなぽんやりとした目で、私を見上げる。それから、なぜ君がいるのかと訝かるような表情を浮かべた。

私は、私の顔がよく見えるようにベッドの横に進み出て、無言のまま、自分の顔を良介の顔に思い切り接近させた。背後で、母親がまた私に、二、三、注意を与えた。しかし、何を喋っているのか耳に入らない。不意

にベッドから離れると、私は上着を持って、そのまま飛び出すように病室を走り出た。

病院からの帰り道、目に涙が溢れ、頬を伝って流れた。もともと、良介のことがすっかりわかつていたわけではなかつた。むしろ戸川良介という人は、わからないところが多かつた。けれども私は、自分の判断に自信があつたのだ。彼の話す言葉も考えも、私にはうまく飲み込めない部分があつたにもかかわらず、自分ほど良介という人間を知り抜いている者はいないと、何の疑いも抱かず信じていた。それだけに、この日の衝撃は大きかった。良介という人間が、一举に自分から遠ざかっていくような気持ちになつていった。

その後、私は一度だけ病院を訪れた。

でも恐ろしかつた。彼が死ぬという危惧もあつたが、それ以上に、病室に母親がいると思うと恐ろしかつたのだ。良介の病室のあるフロアまでは足を進めることができたが、彼が眠っている病室に入つていくことが、まるで見知らぬ人の部屋へ入つていくような不安を覚え、結局そのまま帰つてしまつた。

三ヵ月後、友人からの電話で、良介の遺骸が病室から運び去られたことを知つた。

夕食時、私がママに、彼が亡くなつたことを告げると、ママは「えっ」と絶句した。それから涙をこぼして、

(でも、ママがそんなもの食べるかしら……)
バスがG女子大の前で停車した。

外人の老夫婦が降りると、バスは急に発車した。するとどうしたはずみか、田上は膝から紙袋を落とした。それを拾い上げるとき、田上の手が私の足に軽く触れた。と同時に、交差点でバスが止まつた。田上が顔をあげた瞬間、田上の唇と私の唇とが触れ合いそうになり、田上はあわててその場を濁した。

「お母さん、早くよくなつてくれるといいですね」

またありきたりの言葉を吐いている。

(何、それ。どんな意味かしら。ママがよくなつて、何がどうよくなるの?)

無言の私に、田上はいかにもきまりが悪そうに、横を向いた。

(ママがよくならずに、死んだらどうするの? ママの代わりに、私が恋人じゃいや? 女はたとえ母娘でも、本能的に嫉妬を抱き、男なら、私たち母娘に劣等感を持つのではないかしら。いづれにしても同じことだけど)

バスがS大学の坂を上がり、H神社の前を左に曲がっていく。これほど坂道を上つたり下つたり、右に左に曲がるバス道路は、都内にあるだろうか。白い袴に威儀を正した学生が三人、蛇の目傘をさして通つて行く。とても清潔で、嚴肅な感じだ。

バスが下り坂にさしかかる。

「若いのに……」といいながら、部屋にひきこもつてしまつた。

その夜、私は部屋でフルートを吹いた。いつもと同じ曲であり、やさしい調べには何の変わりもなかつた。その調べに合わせながら、私は心の中で、良介に話しかけていた。

「……私だって、死ぬときは多分、ママっていうでしょう。ママの許へ行きたいっていうかもしない。でもあなたがそれをいうのは、やっぱりふさわしくなかつたわ」と。

トンネルを抜けて坂道を上りきると、バスは急に右にカーブを切つた。私の上半身が、田上の膝の上に崩れかかる。

「少し乱暴な運転みたいですね」

田上の言葉が終わらないうちに、バスは左にカーブを切つた。今度は田上が私に倒れかかる。中年男のふくよかな肉づきと暖かさが、洋服を通してぐんぐんしみわたつてくるようだつた。

田上も私の体温を意識しているのだろうか。

(意識している、きっと)

田上の膝のうえには、ピンクのリボンを結んだ、コンパクトなクッキーかなにかのお見舞い品を入れた紙袋が置いてある。

そのときピタリと、騒がしく動いていたワイパーが止まつた。

病院が近いためか、田上の腰の辺りがなんとなく浮き立つようだつた。メッシュの靴先を、しきりに床面に打つている。

こんどはバスが、T女子学校の上り坂にかかつた。
(ねえ、もうすぐ着いちゃうわ。本気で好きなのかしら、ママのこと……)

坂の上でバスが左折するのを利用して、私は無理に、田上の手の上に自分の手を滑らせた。でも田上は私の痴戯には心をとめず、しきりに運転手のハンドルさばきをみつめている。

(ね、ママの素敵なおじさま。婚外的の性的行為を不倫と呼ぶの、ご存じかしら。これを拡大解釈すると、一体どうなると思って?)

運転手が力一杯にギアを入れる。その手が振動に震えている。

(つまり、ママとあなたは完全な不倫、愛人関係ね。独身同士のあなたと私なら、まったく問題ないのよ。目下ママは、離婚という冒險に身を投じようと考へてるみたい。でもママは、あなたが現れなくても、いずれパパとは別れる事になると思うけど……。そうすれば、不倫は解消というわけね。あなたとママが一緒になつたら、そのときのあなたと私の関係は、これはもう立派な不倫

ね。どっちがより魅力的かしら……)

ガラス窓を通して、西日が田上の頬や首筋を斜めに照らしている。煉瓦造りの建物と塀が、暖かい陽射しに映えている。

雨上がりの歩道の両側には、銀杏の木々が並んで、濡れた青葉を照らしている。時々、道路の水溜まりに陽が反射して、光が車内のエナメル質の天井に、細かい光の斑点を散らしている。車が動き出すと、光の粒は大きな渦模様に変化する。

何となく絵になる風景とは、こんなことをいうのだろうか。

病院の正面玄関に、バスは止まった。

乗客が、ゆっくりと降りていく。後部座席に鎮座していた妊婦一人も、難儀そうにバスを降りる。外に出ると、初夏の香りを含んだ生暖かい風が吹きつけた。まるで、田上の背中を病院の建物のほうへ押しやるみたいだった。

田上は一瞬、身震いした。軽い恐怖が、心の底を撫でたのかもしれない。

「私、ちょっと他に用事があるので」

私がそういうと、田上は口元を歪めて微笑みながら、「じゃあ僕は先に見舞ってますから、あとで来てくださいね」

そう言うと、長い髪が乱れるのもかまわずに、足早に

演劇台本 走馬燈



相原精次

登場人物

少女
労務者A
労務者B
若い男
若い女

舞台

木々に囲まれた公園の中。中央にベンチ一つ。その回りの植え込み少々。上手よりにしゃれた感じの街灯一つ。夜の感じで。

一人の労務者、ベンチ脇の植え込みの側に横になつている。

上手側より若い二人連れ登場。の方は少々ツンツンした感じ。男は女の氣を惹こうとして一生懸命の態。二人は行きかかろうとして立ち止まり、の方からベンチに腰を下ろす。男は、あわてて女に合わせてベンチに座る。ベンチの女の側、下の所に労務者が寝ているが、二人は気づかない。

産婦人科のほうに向かった。ジャケットの裾を、大きく風にひるがえしながら。

その後姿に向かって、私は大声で叫んだ。

「明日から、あなたが主役よ。お気の毒さま……」

「えっ……」

すぐに田上が振り返る。

「たいへんね、ご苦労さまという意味なの」

そう言って、私はバイバイと手を振った。

今、飛ぶようにして産婦人科の建物に駆け込んでいった田上は、ママが流産したことを知つて、がっかりするだろうか。それとも、世間にバレずに済んだことで、ホッと安堵の胸を撫でおろすだろうか。



男 花火、すごかったね。

女 (気の無いように) そうお。

男 ……近いうち、いい映画あつたら見に行きたいね。

女 (冷たい間をおいて) 私ね、もう、あなたと会うのやめるかもしれない。

男 (あわてて) どうしてさ。

女 私たち、別のものになっちゃった氣がするの。

男 別のもの?

男 そう、違うものになっちゃったの。

女 何が、どう違つちまつたんだい?

男 説明しにくいのよね。

男 (不満そうに女を見ている)

女 (ややあって) 学生と社会人で、全然意識が違うと思うのよね。あなたは今、夏休みに入っていて気楽で

しようけど、私はお勤め。又、あしたは早いの。

男 だからさ、できるかぎり時間は、君の希望に合わせるって言ってるじゃないか。

女 私の言っていること、そんな時間に合わせるとかどうとかってことじゃないのよ。

男 ジャ、どんなことなのさ。

女 ようするに、世界が違つちゃつたって言うことなの。さつきから同じこと言って、ちっともわからないじゃないか。

女 (問をおいて決心したように) 子供のお遊びみたい

男 どんなやつなのさ。

女 ……妻子ある人なの。

男 サイシ? サイシって、つまり、まさか妻や子供?

女 そうよ。

男 何だつてまた、……どういうつもりなんだよ、君も、

その男もさ。

女 ようするに、そういうの、引っかかるやつたってあるきっかけから。

男 言うんだよ。だまされているんだ。

女 やめてよ、そんな言い方するの。……大人、つてい

う感じなのね、那人。何もかも。

男 ……
ベンチの脇に寝ていた労務者、ゴソゴソッと寝返りを打つ。

女 (ギョッとして、暗い植え込みの中を見る) ひゃーっ!

男 何かいるわ!

男 (あわてて立ち上がり、女をかばうように身構える)
(男の肩口から、植え込みの物体を探る) いやだ。

女 きたならしい。人が寝てる。(いまいましそうに)
気がつかなかったわ、今まで。

男 労務者だ。労務者が寝ているんだよ。

で、もうつまらなくなってしまったのよ。私。

男 子供のお遊び?

女 こういう感じって、説明しても分かってもらえないと思う。

男 僕にお金がないからかい?

女 バカね、そんなこと問題じゃないのよ。たまに私が、あなたのコーヒー代出してやることくらい、別にどうつてことないのよ。

男 ……(男、うなだれる。改めて女を見る)

女 どうしたの?

男 変わったね、確かに。

女 そう? どんな風に?

男 大人っぽくなつた、っていうのかな。

女 そうお、……(きゅうに向き直つて) 実はね、私、今、別の男の人とつきあっているのよ。

男 ええ! 別の男? それ、どんな人さ。会社の人?

女 そう。

男 それ、すごく格好いい男?

女 どうかな。

男 いい車なんかさ、乗り回すやつ?

女 私、外見気にしたり、車見せびらかして格好つけてるような若い人に興味ないのよ。

男 ジャあ、その人若くないの?

女 まあね。

男 一人で下手袖に向かって行きかかる。

女 (男を促して) 早く行こう。気味が悪いわ。

男、あわててその後を追つて行く。寝ていた労務者、上半身を起こし、伸びをして、去つて行った二人の方を見ながら「チエッ」と舌打ちし、再び寝転がる。

間

労務者、そつと身体を起こす。すわったまま、その走馬燈と少女を交互に見る。少女、ちっとも労務者の存在に気づかない。

間

労務者、そつと身体を起こす。すわったまま、その走馬燈と少女を交互に見る。少女、ちっとも労務者の存在に気づかない。

労務者A 走馬燈だね?

少女 (静かにその声の方を見る)

労務者A 走馬燈だね。

少女 (大して驚いた風でもないが) びっくりした。

人がいたなんて、ちっとも気がつかなかった。
労務者A (少女の顔をしげしげ見つめる) あんた、逃げ出さないのかね。

少女 え? 逃げ出す? どうして?

労務者A どうしてって、俺を見ると、大概は逃げ出す

がね。しかも、こんな夜、こんな人通りのないところ

だから、よけいな。

少女 そうなんですか。(クスクス笑いながら) 私、

これ見てたから、びっくりするの忘れちゃったんだわ。

労務者A 走馬燈だね。

少女 あら、これ、回り灯籠って言うんでしょう。

労務者A 同じことさ。走馬燈とも言うんだよ。懐かしいなア。ほら……ほら……その青い光が、何とも言え

ずさ。

少女 (ややあって) おじさんの小さい頃も、こんなものあったんですか?

労務者A あったさ。逆に聞きてえな。今時、まだこんなものがあつたのか、ってよ。お祭りかね、どつかに

縁日でもあつたのかね。

少女 あら、おじさん、知らなかつたんですか。

今夜、花火大会があつたんですよ。山下公園のところ

で。

んまり華やかすぎて、味気ねエって言うか、哀しくなつちまうのさ。

少女 哀しく……ですか?

労務者A そうよ、つぎつぎ打ち上がるからまだいいけどよ、パーッと開いて、すぐ消えちまうだろ。見ると、何か、やりきれなくなつちまうんだよ。それにな、あの音と光はよ……俺も一度、ほんとに目の前で見たことがあつたよ。でも、あんまりいい感じのもじやなかつたな。

少女 そうですね、あんなに音がすごいって思わなかつた。山下公園にいたら、怖かつたです。どこかへ吹つ飛ばされそうで。おじさんも怖かつたんですね。空襲のこと、思い出しちまうんだよ。空襲のことをさ。

少女 戦争ですか。

労務者A 燃夷弾がドン、と炸裂する音とかよ、照明弾

が空でパッと光るのとかよ。

少女 照明弾?

労務者A そうさ。暗いところを明るく照らす爆弾よ。

敵の飛行機が落とすのさ。空襲は、激しいときなんか夜も昼もお構いなしさ。……毎晩のようにラジオから灯火管制の放送が流れる。

少女 トウカカンセイって何ですか?

労務者A 家から明かりを外に漏らさねえようにすんの

労務者A そう言やア、さっきまで、ドンドン音がしてたつけ。

少女 すごい人でした。公園の中も、道も。これ、公園の中に出でたお店で買ったんです。……(間をおいて) こんなの持つていて、子供じみていますか?

労務者A (ジッと見つめて) いいや、とんでもない。

少女 浴衣ともびったりだしよ。

少女 (肩をすぼめて小さく笑う) このあたりからだと、花火は見えませんか?

労務者A ああ、ちょっと離れてるからな。昔は、こつからでも見えたんだが、近頃うんと高い建物が建つしまって……でも、このあたりでも、もうちょっと高いところまで行けば、どうかな。ここにいても、空が赤くなるのはわかつたからな。

少女 おじさんは、もう花火なんか、見たいと思わないんですけど? セっかくやっているのに。

労務者A こんなきたねエ男がうろつくとよ、みんなが嫌がるからな。そう思うだろう。あんただつて。

少女 え? ええ……(笑みを含んで) そうです、

労務者A ワハハハッ、そうですね、か。そうともさ。

(改めてすわりなおす) それにな、花火ってのは、あ

さ。薄暗い電気で、その上に、電気の傘の上から黒い、こんな筒みてえな布きれをすっぽりかぶせるわけさ。夜、空襲のときよ。電気の光が見えりや、目標にされちまうだろ。でも、そんなことしてもよ、敵は、東京はどの方角、横浜の町んなかはどこ、なんてちゃんとわかってらな。間違いなく飛来してくる。そして、照明弾を打つて、目標をもう一度確認して、爆弾を雨のようにならすのさ。……たちまちあたりは火の海よ。空襲警報のサイレンが鳴ると、防空壕に逃げ込むのさ。でも、あたりが火の海じゃ、防空壕になんかいられたもんじゃねエ。俺達は、逃げまどったのさ。どこのビルだったかな、ビルの地下室に避難した何人かがさ、まわりみんな火に囲まれて、逃げらんなくなつちまつてよ、そのまま地下室で全員蒸し焼きんなつちまつたなんて話もある。

少女 この横浜ですか?

労務者A そうよ、この横浜でね。東京、横浜、あっち

こっち大きな街は、むちゃくちやにやられたのさ。:

:ところであんたはいくつになるのかね。

少女 十五歳です。

労務者A そうかね。十五歳ね。……あんた、港の花火

大会は毎年見るのかね。

少女 いいえ、私、花火をあんなに近くで見たの初めてです。海にも写って、すごくきれいだつて聞いて

たんです。だから、一度見たいな、と思ってたんですけど、ようやく今年……のかね。

労務者A ホーッ、じゃ、あんたこの近くの子じゃないのかね。

少女 ええ、それじゃ、どうして、今こんなところにいるんだね。

少女 お父さんの車で来たんです。ついこの近所に、

お父さんの用事もあったもんですから。

……おじさんは、こんなところで、何してたんですか？

労務者A 僕か？ 僕は、駄目な男でよ。今夜はどこへ寝ようか、なんて、ここで考えていたんだよ。日雇い労務者さ。昔は二コ四なんて言つたんだ。

少女 ニコヨン？

労務者A そう。一日働いてよ、二百四十円て頃があったんだよ。信じられねえだろけど、二百四十円が、かなりの金だった頃もあつたんだよ。

少女 今は？

労務者A 今、いくら、ってか？ 仕事によりけりだな。多少いい仕事でもよ、毎日あるわけじゃねえしな。今、不景氣でよ。仕事にあり就くのが大変なんだよ。それにこの年じゃな。

少女 おじさんはいくつですか？

労務者A 僕の年か？ ……もう六十もだいぶ上の方だ。

あんたみてえな可愛い子に言っちゃいけねエな。ワハハハッ。

少女 何ですか、その、真金町、黄金町つて。

労務者A いやいや、あんたなんかは知らないことさ。

少女 大人の話さ。男だけのね。

労務者A いいんだよ。わからなくって。働いて、ちょっとお金持つと、ついつい出かけたところなんだよ。

少女 はア？（首をかしげる）

労務者A 横浜はね、町の名前に、めでたいのが多いんだよ。今の真金町にしても、黄金町にしても。あと、日ノ出町だろ。老松町、不老町、曙町、寿町つてね。

こんな名前が港のまわりには多いんだよ。江戸時代の終わりによ、港が作られて、埋め立てられて新しく出来た町ばかりでよ、そのころの人が、どうせつけるんならって、おめでたい名前を、その新しい町につけてたんだな。

少女 ハーッ、おじさん物知りなんですね。

労務者A ワハハハッ、僕もよ、だいぶ前に人から聞いたのさ。受け売りよ。ワハハハッ。そりゃそうと、もう帰った方がいいんじゃねエのか？ こんな遅くまで、こんな寂しいところにいちゃいけねエな。

少女 いいんです。お父さんの話まだすんでいないと思います。きっと仕事のことなんでしょう。ほら、

そりやそうと、もうお父さんのいるところへ帰った方がいいんじゃねエのかな。

少女 今、私にわからない込み入った話をしているんです。だから、私一人で花火見てきて、せっかく買ったから、これ暗いところで見たくって……

労務者A （少女を見つめて）あんたは面白い子だね。

少女 あら、どうしてですか？

労務者A 僕みてエな男と、平気で話なんかするからよ。だめだぜ、こんなとき、あんまり人を信用しちゃ。

少女 どうしてですか？

労務者A どうしてって……でもいいな。若いってのは、おじさんは、横浜生まれですか？

少女 プータロー？

労務者A そう、野毛のあたりでさ、その日のドヤ代もない日雇いの労務者がよ、野宿したもんなんだよ。あんたの知らない、ずーっと昔の戦後しばらくの間は、毎日、ゴロゴロしてたよ。このごろプータローって言葉も聞かなくなつたけどな。（思い出すように）真金町、黄金町、って言いながら鶴嘴を振り上げたもんだ。

少女 何ですか、その真金町、黄金町って言うのは。労務者A ワハハハッ、こりゃいかん。こんなことは、

あそここの高い建物。あのマンションの中なの。ここからすぐ近くだから、大丈夫です。

二人、しばらく走馬燈に見入る。

労務者A 走馬燈、火が消えちまいそうだよ。

少女 風です。風がローソクの火ゆらして。（走馬燈の中をのぞく）

労務者B ローソク、もうだいぶ短くなつているんだわ。

下手から又一人の労務者登場。少々酒を飲んでいる様子。走馬燈を見ている二人を怪訝そうに見つめる。

労務者B なあんだ、田中さん。

労務者A えつ（振り返る）なんだ、ツネか。

労務者B （下品な笑い声を立てて）今日はどうしたんですこんな小娘と。

労務者A おめエ、一杯やってんのか。ずいぶん景気がいいみてエだな。

労務者B 何が、全くクソみてエなもんよ。（その場にかがみ込む）今度の仕事、きたねエやつにひつかつちまってよ。ピンハネしてたんだよ。若エのにやり手でよ。この若僧って思うけどよ、こんな太エ腕しやがつてよ。……泣き寝入りよ。クソおもしろくもねエ。

やけ酒よ。（男、走馬燈と少女の顔を見比べて）あんた、可愛いもん持つてんな。あんたも、びっくりしちまうほど可愛いけどよ。（Aの方を向いて）姐さんが死んじまつてからこっち、いいことちっともねエよ。

今んなって思うな、つくづくよ。姐さんはいい人だつたよ。今んなってよ、お袋さん亡くしちまつたみてエに哀しくなつちまつてよ。（男、シクシク泣き出して、鼻汁をすり上げる）

労務者A そうだな、あの姐さんは、出来た人だつたよ。

労務者B 今となりや、相談できんのは、田中さん一人んなつちまつた（立ち上がって行きかかる）

労務者A 帰るなんか？

労務者B ドヤでよ、チンチロ約束しちまつたんだよ。

労務者A あんまり突っ込むと、又、泣きを見るぞ。

労務者B わかってるよ。じゃな。来るんだよドヤへさ。

労務者A ああ、後でな。もうちょっと、夕涼みよ。

労務者B （しばらく行きかかって、思い出したように戻つてくる。少女に向かって）この田中さんはよ、いい人でよ。俺が病気なつたとき、ずっと面倒見てくれてさ。俺達の仲間内じやよ、みんなが兄ちゃんて呼んでよ。頼りにしてる人なんだよ。じゃな。（ちょっとふらつきながら下手に下がる。）

少女 あの人、泣き出したと思ったら、すぐケロッとしちゃつて。

が風車みたいに回るわけだ」なんて、理科の先生みたいに話してくれたんです。

労務者A その男、きっと学校のころ、理科の時間が好きだったんだろう。

少女 ウフフッ、……きっとそうかもしませんね。

おじさんは、何の勉強が好きだったんですか？

労務者A 俺か、俺は、勉強には、あんまり縁がなかつたな。

少女 学校、嫌いだったんですねか？

労務者A ううん、そーやな、……そんな嫌いてんでもなかつたと思うよ。戦争だったから、それどころじやなかつたんだよ。そのころの学校はよ、国民学校つて言つたんだよ。

少女 コ・ク・ミ・ン学校？

労務者A 六年まであってよ、それが終わるとあと二年、高等科っていうところへ行くはずだったんだがね、六年生んとき戦争が終わつた。そのあとは、戦後のドサクサで、学校どころじゃなくなつちまつたんだよ。

少女 そんなようなこと、お爺ちゃんから聞いたことがあります。ということは、おじさんは、おじいちゃんと……家族はないんですねか？

労務者A いや、それを聞かれると、一番つらいんだがとあります。ということは、おじさんは、おじいちゃんと……家族はないんですねか？

労務者A いや、ねエわけじゃねエんだ。……でも、俺は駄目な男だからよ、今はいねエのと同じさ。（ジッと走馬燈をすり上げる）

馬燈を見る

少女 会おうと思えば、会えるんでしょ。

労務者A いや、遠くだからよ。……この走馬燈の絵は、珍しいな。よく見ると、春、夏、秋、冬が順に回つてくるね。

少女 ええ、別に花火の絵とか、いろいろあつたんだけけど、これにしたの。

労務者A これ、ジット見えてるとよ、一年の早さを知らされてるみてエだな。ほら、……夏が来た……ほら、又夏が来た。な、一年が、早いだろう。

少女と労務者、走馬燈に見入る。

労務者A プヨの一時、って話、知ってるかね。

少女 ブヨの一時？ 何ですか、それ。

労務者A 我のクニに古くからあつた話なんだよ。俺のバアちゃんから聞いたんだがよ。

少女 おじさんのクニって、どこですか？

労務者A 山形さ。

少女 東北ですか。

労務者A そうだ。

少女 ブヨって、あの小さな虫のブヨ？

労務者A ああ、そうだよ。

少女 変な題ですね、ブヨの一時だなんて。どんな

労務者A ああ、根はいいやつだ。

少女 どなたか亡くしたんですか？

労務者A いやな、あいつが長い間世話をなつたおかげさんが、一ヶ月ほど前に亡くなつたんだ。その人には俺も一時ちょっと世話をなつた頃があつてさ。自分のアパートに労務者を住まわせて仕事の手配もいっさいしてくれた。飯の心配、仕事の心配もいらねエ。天国だつたんだ。……走馬燈、だいぶ火が弱くなつちまつたな。

少女 （中をのぞき込む）もう少しで、ローソクがおしまいになるんです。

労務者A ローソクなくなつたら、真っ暗なつちまうじゃねエか。

少女 大丈夫。ほおら、まだこんなにあるんです。

（袂から数本のローソクを取り出す。思い出し笑いをしながら）あのね、これ売つてた人、すごく若い男の人でね、私がこれ買う、って言つたら、喜んじゃつて「特別のおまけだよ」って、ローソク五本もくれたの。だから消えたら、又すぐつければいいんです。

労務者A あんたが、可愛い顔してたから売り手も嬉しかつたんだろう。可愛いてのは得だな。

少女 その人ね、すごく親切だつたんですよ。「これ風で動くのかしら」って言つたら、「ローソクが燃えて、この中で上昇気流が起きるのさ、それで、これ

話なんですか？

労務者A 俺も、今、突然思い出したんで、うまく話せねエと思うけど……

二人の樵がいてよ、いつものように山へ木を伐りに行つて、疲れたんで休んでいた。人がうとうとしているとき、もう一人が、水が飲みたくなつて、近くの沢へ降りていったのよ。そしたら、川上から箸が流れてきたんで、上方に人がいるのか、と思ってよ、川をさかのぼって行ったんだ。そしたら、美しい娘が出て来たんだ。

かのほって行つたんだ。そしたら、美しい娘が出て

きたんだけだ。

きっと、あんたみてエな、な。その娘っこが親切にもてなしてくれた。男はいわれるままごちそうになつた。その家は、不思議な家でよ、四つの部屋があつたが、それぞれが、春と、夏と、秋と、冬の部屋でよ、春の部屋には春の花が咲き、春の食い物がある。夏の部屋へ行けば夏の花や食い物があるってなあんばいだ。男はもてなされるまま、その娘っここと結婚もしてよ、楽しく暮らしてよ、気がついたらおめエ、三年もそこで過ごしてたんだ。

ところがよ、三年目に、急に、その娘っこが死んじまつた。男は悲しんだが、家に残してきた妻や、子供のこどり出して、あわてて川をおりて、もとのところへ戻つてみると、一緒に木を伐つていた男がよ、怒つた顔して立つていた。「三時間もどこさふらついていた

んだ」ってな。男は「いや、俺は三年間もの間、これこれ、こういう生活してた」って説明しても、信じてくれなかつた。「どつかで夢でも見てたんだべつ」でな。男はその場所へ案内しようとしたけど、とうとう見つからねエ。水を飲んだ沢んところに、蜘蛛の巣にブヨが引っかかるで死んでいるのが見つかった。ところういう話だつた。

少女 わかったわ、ブヨの一時つていう意味が。つまり、ブヨみたいな小さな虫の一生は、人間の時間よりずっと早いっていうわけね。

労務者A そういうわけだ。

少女 浦島太郎の話と、逆になるんですね。確か、あれは、二三年竜宮城にいたつもりだつたのに、実際は、何百年も経つていたんでしょう。

労務者A 俺がクニに帰れば、浦島太郎と同じで「顔も知らない人ばかり」ってところかな。でも、今日は違うんだ。娘ちゃん、あんたのお陰で、俺は、今の話の樵と同じ、ブヨの一時みてエな感じがしてるんだよ。今こうしている間がさ。

少女 あら、どういうことですか。

労務者A ほら、走馬燈は、ドンドン年が過ぎて行くだろう。夏が来た……ほら、また夏だ、なア。それによ、今、俺は、話の中にあつたみてエにさ、可愛い娘っこと一緒にだ。……近頃はなくなつちまったくよな、こんな

思いで人と話をしたなんて、ことがさ。

少女 ということは、私、さっきの話の中のブヨの精つていうわけですか？

労務者A うーん、ブヨの精、か。ブヨじゃちょっと合わねエなア。今日の感じから言うと、そうだな……あんたは蛍の精つてところかな。

少女 私は、蛍ですか。そういえば、私、本当の蛍つてまだ、見たことないんです。

労務者A フーン、都會の子は蛍を知らねエんだな。田舎にはよ、きれいな川が流れててな、川岸の田圃には螢が一杯いたよ。でも、考えてみると、俺も、この横浜へ来て以来、螢は見てねエな。

少女 おじさん、横浜へは、いつ来たんですか？ 山形って言つてましたよね。でも、あまり訛を感じませんね。

労務者A おじさんはよ、あっちこち流れあるいたけどよ、生活した時間で言えば、横浜が一番長いんだよ。話は違うけどあんた本当におもしろい子だね。

少女 あら、私、どこか変ですか？

労務者A いや、変、つて言つちゃ、おかしなものになつちやうじやねエか。おもしろい子だよ。あんたは。

少女 おもしろい、つて、どういうことですか？ 労務者Aだからよ、こんな風に、俺みてエな男と話なんかしてさ。たいがい、怖がつて逃げちまうつていう

のによ。

少女 あら、おじさん、別に怖い人じゃないのに。

労務者A そうかい。でも、本当はどうかな。今はよ、こんなに暗いからよ、俺の陽に焼けた怖い顔もよく見えねエんだよ。

少女 （男の顔をのぞき込む）ううん、おじさんて、すごくいい顔してる。

労務者A （ひどくてれて）そうかい。そんなすぐつてエこと、近頃、聞いたこともねエな。そんなに、褒めてくれなくとも、俺は、あんたにやるような物なんか、なんにも持っちゃいねエぞ。

少女 いいんです。何にもくれなくつても。おじさんの話聞いてるだけで楽しいんですから。……おじさんは、いつ横浜へ来たんですか？

労務者A そうちだな、そんな話、しかかつていたんだ。……俺が、国民学校の頃俺の姉さんが、やっぱりこの横浜で奉公してたんだよ。

少女 ホウコウ？

労務者A そうさ。奉公さ。俺も、家にわけがあつてよ、山形あとにして、その姉のいるところで世話なんになるとになった。だから、九つかな、十かな、横浜へ來たのは。

少女 それじゃ、まだ小さい頃だつたんですね。

労務者A そうだな、そのうち戦争は、本土決戦になつ

ちまつて、まわりじや、子供達はよ、俺と逆に、みんな、疎開してこの横浜を離れていつちまつたが、

少女 ソカイ？

労務者A そうよ。でも俺みてエに疎開出来ねエ者は残留組って言つてたのよ。いろいろ手伝うつていう約束で來てたからよ。そのうち空襲が激しくなつちまつてよ、姉は、その空襲でやられちまつた。俺だけ、幸い、助かってな……この横浜中が赤く染まって、焼けちまつた。大勢の人が死んだ。焼け野原だけ残つて、終戦さ。生き残つた俺は、いわば浮浪児よ。

少女 フロウジ？

労務者A ああ、このあたりにや、戦災で家族なくした子供がゴロゴロしてたのさ。

少女 山形へは帰らなかつたんですか？

労務者A その頃はもう帰つたつて両親ともいなかつたからよ……。もともと、田舎の方がいいかと思って、戦後数年経つてから行つてみたけど、半年もいられなかつた。……子供心にも戦争は勝つと思ってたよ。そう教えられていたからな。姉さんの奉公先で姉さんのためにも迷惑かけちゃいかんと思って、俺も一生懸命やってたんだよ。きっといつか、いいことあるって思つてさ。でも、全部裏切られたって感じよ。大きな物からさ。

少女 大きな物つて？

を作つてさ。

少女 あら、私はまだまだ……

労務者A いやあ、もうじきだ。わけはねエよ。その頃はあんたも、多少は苦勞しなきゃなんねエな。今は夢んなかみてエな時代さ。……

少女 おや、走馬燈、消えちまつてるじゃねエか。

労務者A マッチはあるよ。（マッチを取り出す）どうだ、つけてやろうか？

少女 マッチって珍しいですね。私、マッチつけたことがないんです。

労務者A ヘーっ、マッチ使つたことないのかい。

少女 はい。（マッチをつけようとする）

少女 私に、つけさせて下さい。

労務者A つけてみたいかい？

少女 はい。（マッチを受け取つて不慣れな手つきでつける。）

マッチの明かりに少女の顔、照らされる。男、その少女の顔を見つめる。走馬燈に火がつく。再び回り出した灯籠の光が、あたり一帯に幻想的な光をまき散らす。ホリゾントにも、幻のよな影が回転する。

労務者A うーん、何だろう、大人かな、国つていうものかな……。そのこと以来、俺のまわりは、ずーっと裏切りの連続つて感じでな。信じられるものなんか、何もありやしねエって思つたよ。……半年、田舎にいたんだけど、身体一つありや何とかなる、と思つたら、横浜が恋しくなつちゃつてな。ごちゃごちゃした横浜は、誰でも受け入れてくれるつて感じだつたからよ。また戻つて来たわけよ。その後所帯も持つた。女房の里のある静岡へも行つた。子供も出来た。一時は、人を使う立場にもなつたさ、でも、俺は、根が駄目な人間だからよ、長続きしなかつたんだよ。それでよ、巡り巡つて、みんなまともな生活している今頃んなつても、まだこんな生活してゐるわけよ。

少女 おじさん、苦勞したのね。

労務者A ハハハッ、苦勞ね。本当は、苦勞なんかしちゃあいねエのさ。ようするに、自分が駄目な人間だったのよ。やりようによりや、いくらでもまともになれた。苦勞したなんてのは気恥ずかしくて言えねえよ。（走馬燈を見る）これだつて逆回りしねえからな。……今さら誰を恨んでみても……。

少女 あんたも、これからすぐだよ。すぐ、本当の大人になつちまうんだ。

労務者A そう。いい男を見つけてよ。それでいい子供

少女 （マッチを返す。）ありがとうございました。

労務者A 本当にあんたは、可愛い顔をしているね。俺は難しい言葉は知らねエけどよ、可愛いなんてんじやなくて、可憐、なんていうのはあんたみてエな子を言うんだろうね。

少女 （夢を見るように走馬燈を見ている）

労務者A （少女と走馬燈を代わる見て）ブヨの一時だ。ほら冬だ……もう夏が来た。

少女 ブヨみたいに、一生が短い生き物にとつて、一年がこのくらいの早さじゃないとかわいそうですね。労務者A でもよ、人間もよ、考えてみると、早えもんだよ。本当の一生なんか、すぐ経つちまう。気がついたら、俺なんか、三十なんかとつくな過ぎ、四十、五十もたちまちだ……（改めて少女を見つめる）

少女 どうしたんですか？

労務者A いやな、もつたいねエな、と思ってさ。

少女 何がですか？

労務者A あんたみてエに可愛い子は、このまま、時間が止まつて、ずーっとこのままでいればいいのに、と思つてよ。

少女　あら、そうなつたら、私は、どういうことになるんですか？まるで歳をとらないお人形さんみたいですね。

労務者A　なるほど。でも生きた人形だ。そういうのがたまにはあってもいいのによ。

少女　（ちょっと沈んだ感じになる。つぶやくよう）私の時間が止まる……

労務者A　どうかしたのかい？　お嬢ちゃん。

少女　本当は、私、あまり丈夫じゃなかったんです。

労務者A　そうだったのかね。

少女　本当は、私、私の時間、止まってほしくないんです。このごろ、ようやく自信がついてきたところなんです。

労務者A　ごめんよ、ごめんよ。俺が、あなたの時間が止まってくれれば、って言つたのは、全然意味が違うんだ、あんたの可愛しさを……

少女　おじさん、謝らなくていいんです。おじさんの言った、このまま時間が止まる、っていうの、死ぬことの意味じゃないことはわかっていますから。

労務者A　そうかい、わかってくれるかい？

少女　（快活を取り戻して）ええ、……私、命つて大切なものだなって、近頃強く感じているんです。

私、以前、本で読んだんです。今の私と同じくらいの年の女の子が、癌で亡くなつたんですが、その人が残によ。

労務者A　いや、ごめんごめん、お嬢ちゃん、あんたのことは別にしてさ。俺が今まで、会つたり、見たしてきた人の話なんだがよ。大概、どの女も、一時期、あんたほどじゃなくともよ、夢のように、綺麗な考えをすることがあるんだよ。でも、環境が変わり、年齢が増えるにつれてよ、変わっちゃうのさ。全く別人みてエ。

少女　それは、おじさんの、女性に対する偏見だと思います。

労務者A　うーん、そうかな。そうかもしねェ。でもよ、それをこえて実際そうなんだつて思えるのをいっぱい見てきたんだよな。男ってのは、歳をとっても、環境が変わつても、どこかに昔の姿つて、どどめているもんなんだけどな。

少女　それはおじさんが男だから、男を臚脣して見てるんだと思います。女だって、男を臚脣して見りけりじゃないですか。

労務者A　そうとも、人によりけりさ。ただ、大きくまとめて、女と男って、比較して見たとき、やっぱり俺には実際そう思えちまうんだよな。そりゃ、女人の人だって、歳をとってもその年齢にふさわしい、いい顔つきしてて、しかも、心の方も綺麗つていう人はいるがね。

（改めて少女の顔を見る）歳をとらないお人形さんじゃ、これ変だから、あんたも、歳をとつたら、とつたりして、しかも、心の方も綺麗つてよ。

少女　していった文章、その人の書いたもの、読んでいると、自分が治らない病気だつて知つてから、すぐ強くなつて、心が美しくなつて行く様子が、その文章に表れていました。残された数ヶ月、数日、数時間、その人、精一杯生きていたようです。残された時間何が出来るかって考えて。自分につながりのある全ての人に感謝して。……私、それ読んでいて、それまで、自分が身体の弱いの恨んでいたり、逆に、そのこと理由にして、自分を甘えさせていたことがわかつて、恥ずかしくなつちゃいました。……その人、生きていたら、今の自分のようにはしていなうだらう、なんて思つたりしたら、よーしして……私、長生き出来そうな自信が湧いてきたんです。

労務者A　なるほど、お嬢ちゃん、わかつたよ。あんたが、どつか、違うな、と思えたわけがさ。大切にしてもらいてエな。希にみる心がけだからよ。俺みてエなもんが言つても似合わねエ言葉だけどよ。

……これからも苦労するだらうな。綺麗すぎるだけに、世間にもまれるようになるとよ。あんたには変わってもらいたくねエな。

少女　そんなに人間つて変わりやすいものなんですとか？

労務者A　そうさな、特に、女つていうのはな。

少女　女は、ですか？

少女　おじさん、私の顔、そんなに見つめないで下さい。私、怖くなつてきました。……私の数年後つて、どうなつていてるのかしら。

労務者A　そうだな、まず、成人前後に、女は一度顔が変わるんだよな。童顔が、成人の顔にな。

少女　数年後、又、おじさんに出会つたら、私、どう思われるのかしら。

労務者A　うん、君ならなれそうだ。（又少女の顔を見つめる）

少女　おじさん、私の顔、そんなに見つめないで下さい。私、怖くなつてきました。……私の数年後つて、どうなつていてるのかしら。

労務者A　そうだな、まず、成人前後に、女は一度顔が変わるんだよな。童顔が、成人の顔にな。

少女　（顔を覆つて）わア、私、どうしたらいんでしょう。このまま、さっきの話じゃんだけど、時間が止まつてくれればいいと思えてきたわ。

労務者A　いや、いや、俺は信じるよ。お嬢ちゃんなら、お婆さんになつても、きっと、美しい顔と、綺麗な心の人だろうつてよ。

少女　おじさんて、何でも見抜いてしまう人みたいだわ。いくら取り繕つても、おじさんには見抜かれて

しまいそう。

労務者A おやおや、螢の精に、今晚は俺が、易者にされちまいそうだ。

少女 冗談じゃなくて、私、怖い気がしています。

労務者A ワハハハッ、お嬢ちゃんの前じゃ、俺も大変な出世だ。……そりゃそうと、俺は時計なんて物、持ち合わせていねエが、もう帰った方がいいよ。もうお

少女 そうですね。（時計を見る）それじゃおじさん、帰ります。（走馬燈を手に立ち上がる）さようなら。

労務者A ああ、さようなら。身体、大切にしなよ。

少女 （行きかかって立ち止まり）ねエ、おじさん、三年後、この花火大会の夜、今日と同じ頃、又、この場所でお会いしませんか。

労務者A ほほう、何だったかな。……エート、そうだ

「君の名は」みてエだ。

少女 何ですか、その「君の名は」って。

労務者A いいやね、昔、そんな題の、何かがあつたんだよ。芝居がよ。

少女 芝居、ですか？

労務者A 俺の三年後は、あんたの三年後とはだいぶ意味が違うそうだが、……いや、わかったよ。三年後だね。じゃア、螢の精さんよ、バイバイ。

私の後付きまとうのはかってですけど、私、あの人とは別れないわよ。それだけは承知しててね。

男 ……

女 ねエ、ちょっと、あのベンチの陰、まださつきの男、寝てるわよ。

男 毎日、こんなところに寝てるのかなア。

女 あんな生活するようになっちゃ、最低ね、男も。

男 気楽でいいと思つているかも……

女 いやだ、あなた、あんな男の生き方認めるの？ あなた、あんな汚い浮浪者の予備軍じゃないでしょうね。

男 まさか。

労務者、モソモソと動き、寝返りを打つ。

男女 いやだわ。まだいるわ。早く行きましょう。（女にせきたてられるように上手に消える）

照明、労務者のみ照らす。
溶暗して街灯のみ残る。

幕

少女 さようなら。

少女、走馬燈を提げて下手へ幻のように消えて行く。

ホリゾントの影絵も、次第に薄くなり、消える。労務者、夢を見るように少女の消えた方を見ている。あたりは暗くなり、街灯だけが一つついている。労務者、又横になる。

下手から、さっきの若い二人連れ、再び登場。

少女 あなた、もう少し自分でいうものを持った方がいいと思うの。

男 どういうことさ。

女 喫茶店に入つても、私が注文とするの聞いてて、まるで自信なさそうに、私と同じものしか注文しないでしょう。いつだってそうじゃない。

男 ……

女 今だってそうよ。私がココアをたのんだら「僕もココア」だって。私そんなあなたを見ていると、いろいろしてくるのよ。

男 そんなことが気に障っていたのか。

女 そんなこと、って、これ案外大事なことなのよ。一事が万事。

男 これからは気をつけるよ。

女 ……私、もう一度言つておきますけどね、あなたが

祝出版

瀧澤 中著

◎ 小泉純一郎危機突破
のリーダー学

ぶんか社

◎ 政治のニュースが
面白いほどわかる本

中経出版

1,400円

1,200円

爽やかにハレルヤ

大和禎人と

今日もハレルヤのコーラスが音楽室から流れで聞こえていた。この学年末、校歌齊唱に加えてあるいは異様とも思えることであった。各学年三クラス、都合、全校九クラスの小規模校であったが、そのクラスごとに、男子はテノールとバスの二班。女子はソプラノとアルトに班を分ける、つまり全校を四つの班に分けた混声合唱の指導がこのところ熱心に行われているのであった。

メロディーを聞いて、それがハレルヤであると知識になくとも、耳に障らず、むしろ快く、さざ波の寄せるようで、さすがの教員組合の諸氏も何ら怪しそうな気がなかつた。この学校の日教組の分会は近ごろ尖鋭をもつて鳴る定評があったのだから、不思議であった。

は、たちまち左旋回がはじまり、良識の教員グループまでもが、奇妙な仲間意識という枷に嵌り、あげく連帯協和という罠に陥るのに、あまり時間はかからなかつた。民主社会の危うさ、脆さをあえなくも露呈したのである。すっかり空気を一変していた。無残な雪崩現象である。互いにいつ知らぬ白蟻の食害に似たきさつだつた。

間もなく、職員会議に卒業式の次第が諮られる。

ハレルヤは式の最後に全員の唱和に組まれる案が提示された。

「なんですか、これは」

分会の委員長の左の君が声をあげた。

「なんですかではありません、ご存じヘンデル作曲の（メサイア）の第二部の（ハレルヤ）です、敬虔な曲で式をしめくくるのです」

校長の応酬はきっぱりとして、あとへはひかぬ響きをもっていた。連日、音楽室から流れていた混声合唱の練習はそのためのものであつたことが、ここではじめて明らかになつた。

「校長、ここはどこの国だと思ってるんだ」

蕪雜きわまる教員組合流の吠えかただ。

「そういうあなたこそ、どこの國のお人かな、外國の曲譜理解はご無理ですか、まあ式当日はメロディをお聞きなさるといい、心を洗われますよ」

そうした学校が学区としては山の手にあり、文士村などあり、区内屈指の知識階級の家庭が多く、その子弟も場合によっては教師よりもしっかりしていて、同区内の「学習院」と目される昔があつた。今ごろ学習院になぞらえるのも滑稽だったが、一面の評価として地区周辺もそれを認め、名門校の定評が生まれた。文士村の縁で依頼し、校歌は珍しくも室生犀星作詞、さすがの歌詞で、曲も名家による素晴らしいものであったから、名門に箔づけし、これも地域の誇りの種になっていた。

ところが、たつた一人の左傾教員が赴任してきてから

忍耐をもつた間髪の切り返しで相手を沈黙させた。

ステージ正面に飾る国旗は（右翼団体のようだ）といふ迫り方で、（国連の会議の席に見られるようなミニチュアで沢山）とこの男は言っている。赴任当初のことでもあって、この点だけは、百歩を譲ることにしたのが前のことだつた。どこでどう探ししたものか、その折のかれはそれを当日に間に合わせ調達したのだった。ミニスタンドまで添えて卓上に置かれている。

日の丸の旗に送られた軍歴をもつ校長としては敗戦の汚辱にまみれた国旗への一抹哀憐の心象もあって、一步を譲つたのである。虚々実々の始末であった。

（君が代）、（螢の光）、（仰げば尊し）についても異論が毎年繰り返される。四月の入学式、三月の卒業式を控える時期はきまつて学校の波乱の季節である。国旗国歌の法制化はもう少しきさぎのことだった。

それにもしても（螢の光）は陳腐、（仰げば尊し）は師恩の押し売りと、すべてお気に召さぬのである。したがつて（謝恩会）は（お別れ会）でなければならなかつたりする。仰がれることに教職員側はよほど自信喪失を自供しての言動であったようだ。

（螢の光）を歌わないなら、わたしは卒業式に出席をやめます

PTAの会長はそれとなく職員間にある空氣を察して、いそう言われた。（螢の光）以外にある阻止闘争の内容をもちろん承知の上の申し入れであった。

「そうおっしゃいますな、今年はヘンデルの曲をクラシックにおき、全生徒の混声合唱で圧倒する予定です」

「聞いています、全生徒混声でとか、画期的なことですなあ、」どもやはハレルヤの真義まではわからないでしょうが、メロディを口にのぼせることだけで、心を清められるでしょ、いいアイディアです」

「い出席いただけますね」

「いやあ、ちょっと駄々をこねたのは冗談です、会長は全面的にバックアップしますよ、そうでなくては、いやしくも会長の名に恥じますわ」

「ありがたいことです、」時世、学校職員間の自淨にはまだまだ時間がかかりましょ、現にお預かりする生徒諸君には申し訳ありませんが、幸い当校では「父兄の良識に支えられまして、」どもやはむしろしつかりしておりますから、その点では助かっております」

「やあ、校長さんは苦しい、世間一般から考えて理解の難しい社会です、驚くばかりですが、会長をお受けしてみて、つくづく実感しておりますわ」

「恐縮です、なにぶん式当日はよろしくお願ひいたします」

reign for ever and ever Halleljah!

これをあえて邦訳するならこうなる。あえてとするのは生徒の歌唱はもちろん英語そのものであつたからだ。

ハレルヤ、万物の支配者である、我らの神である主は王となられた。ハレルヤ！

(ヨハネ黙示録第十九章六節)

この世の国は主およびそのキリストのものとなつた。主は永遠に支配される。ハレルヤ！

(ヨハネ黙示録第十一章十五節)

王の王、主の主、主は永遠に支配される。

ハレルヤ！

(ヨハネ黙示録第十九章十六節)

H教頭は永く少年少女合唱団にかかわり、他面の活動に多く実績を積んでいた人だった。

音楽の友社から「秋刀魚の歌」と表題する作曲集を出していて、スキーシーズンにはその印税収入をあげて、壮者をしのぐ活動もする、河口湖畔を郷土とし、少年期いろいろゲレンデに親しむ一面をもつ異色の人だ。

くだんの作曲集は佐藤春夫の有名な詩を題名にしていれるが、内容は室生犀星「ふるさとは」「鮎のかげ」、島崎藤村「落葉松の木」「星の夢」「舟路」、丸山薫「北の春」

「ハレルヤの混声合唱の場面では、この歌唱に際しては慣例の起立を父母の皆さんに訴え、そうさせてもらいましょう」

「そのような慣例を存じでしたか、恐れ入ります」

ヘンデルの作品「メサイア」は一七四一年、ダブリンで初演され、翌年、イギリス国王ジョージ二世臨席のもと、ロンドンで再演されたが、この折、「ハレルヤコラス」にさしかかると、王は感動のあまり立ち上がり、これを見て聴衆全員もまた起立したという。この時いらいいのコーラスの折には全員起立する慣例ができたという故事があった。会長はそれを知っていたのである。名曲がおのずから人を起立させる、それは洋の東西を越えて、信仰とはかかわりなく曲のもつ神韻に呼び覚まさる感動であったろう。

ハレルヤのコーラスは英語で歌われるはず、正味わずか三分ほど、教頭のHが指揮をとることになつていた。

No.44 Chorus

Halleljah, for the Lord God Omnipotent reigneth, the Kingdom of our Lord and of His Christ, and He shall reign for ever and ever, Halleljah! King of kings, and Lord of Lords, and He shall

三好達治「乳母車」「松子」「浮雲」、加藤省吾「祭り囃子」、水谷まさる「夢の木」、そして佐藤春夫「秋刀魚の歌」、すべてで十二編。曲譜を主体として末尾に詩詞それぞれを掲載する編集になつていて。

作詞者のこの顔ぶれを見ても果たして今日的かどうか、危ぶまれるかも知れないが、作曲者はそれぞれの詩編に感動を覚えて、曲を編んだ情熱の所産であることは間違いない。表題にとりわけ佐藤春夫の詩編を選んでいるところにかれの思い入れがあつたと察せられるが、それがどういうものかは他人にはわからない。だが、少なくとも音楽人としての純粋なパッションをくみ取れる。

「ハレルヤ」の混声合唱を次第に組み入れる提案はH教頭によるものであった。

「校長の責任をもって、「君が代」は次第に、「仰げば尊し」も同様とします」

教頭が音楽教師であることや、この断言は搖るぎない裏打ちをもつものであった。

戦後の卒業式のありかたで著しく変わった一つに卒業証書の授与形式がある。各個授与を行い、総代授与を排除することで民主化とし、平等扱いを趣旨とするものだ。退屈な時間である。

さらに式辞、祝辞と長い時間が流れ、ようやく歌唱に移り、「仰げば尊し」「螢の光」と続く。なにやら、心な

しほっとする空気が式場に漲る。

「最後に卒業生、在校生一同にてヘンデル作曲「メサイア」の第二部「ハレルヤ」を混声合唱をもって披露いたしまして、本日の式を閉じたいと思います。ピアノの伴奏は二年生女子○○さんです」

地域の子弟でピアノを習うものについてこと欠くことはなかった。

澎湃として歌声が起こった。しかもそれは中学校生徒の若者らしい、清らな、しかも混声で式場を圧するものであった。

PTA会長の起立する姿が見えた。
「父兄の皆さん、起立いたしましょう、こどもらの栄えを祝つてあげましょう」
異議のあろうはずはなかつた。感動をもつて父母らの起立する姿がこれに応えた。

(H一三・六・一五)

〔発行日〕		〔原稿締切日〕	
春季号	二月一日	十二月三十一日	〔注〕
夏季号	五月一日	三月三十一日	
秋季号	八月一日	六月三十日	
冬季号	十一月一日	九月三十日	

〔注〕円滑な発行を期す為「一週間前編集長宛到着」に努めましょう。

サラリーマンとしての鷗外

宅見勝弘



一、はじめに

鷗外の本業は作家でなく、陸軍の軍医というサラリーマンであった。

鷗外は在職中に屈辱的な左遷をされたが、軍医総監として最高の地位にまで出世した。

私はサラリーマンとして挫折を経験してから、鷗外の苦悩に非常に愛着を感じるようになつた。

二、鷗外のサラリーマン人生

鷗外の人生を、サラリーマン（陸軍）での出世の過程を隨時に挿入して記すと次の通りになる。

なお、陸軍の軍医としては軍医総監（陸軍省医務局長）

が最高位で中将格である。軍医の階級は特殊な名称であったが、大将・大佐等の一般に相当する階級で表現する。

鷗外（本名は森林太郎）は明治維新の六年前の一八六二年に現在の島根県に生まれた。

十二歳で年齢を偽り、現在の東京大学医学部に入学した。

十九歳という最年少で東大を卒業すると、五ヶ月後に陸軍に軍医として入隊した。

〔入隊時は中尉であった。〕

二十二歳の時に、衛生医学を学ぶために、ドイツに留学した。（ドイツでの生活は四年）

〔留学中に大尉に昇格した。〕

二十六歳で帰国し、軍医学校の教官になった。

二十八歳、事実上の処女作『舞姫』を発表した。

「この年、少佐に昇格した。」

三十一歳、軍医学校校長となった。「校長は中佐に相当する。」

三十二歳、日清戦争で韓国・中国に出征した。(出征は一年二ヶ月)

「戦争中に大佐に昇格した。」

三十七歳、北九州小倉の第十二師団に左遷された。

「少将として赴任した。」

(左遷された期間は二年九ヶ月)

四十歳、東京の第一師団に転勤した。

四十一歳、日露戦争で中国に出征した。(出征は一年九ヶ月)

四十五歳、軍医として唯一最高位である軍医総監になつた。「中将に相当する。」

(軍医総監の地位は八年五ヶ月)

五十四歳、陸軍を引退した。

五十五歳、現在の国立博物館の館長になった。(死ぬまで在職)

六十歳、死去した。

鷗外の人生に対して、サラリーマンという表現を使うのは異論があるかもしれない。

しかし、軍医という専門職であったが、俸給(サラリー)

前と決別するようなことも書いている。

「鷗外」という名前は事実上の処女作『舞姫』で「鷗外森林太郎」と署名しており、友人の鷗外斎藤勝寿の雅号を借りたものらしい。その後に発表された小説では

「鷗外」「鷗外漁史」「おうぐわい」となっている。

その後は、二十作ほど続けて「森林太郎」の本名で発表していた。しかし、本名を使うことが本業に差し障りあって、四十作ほどは「鷗外」を使っていた。晩年は死ぬまで、三十作ほどを「森林太郎」で署名している。

「森鷗外」名は発表時期に脈絡はなく、唐突に二回だけ使われているため、奇異な感じがする。

他にも、随筆なども含めると、複数の名前を使用して

おり、「腰弁当」「觀潮樓主人」「源高湛」「隱流」「S・S・S」「千八」等の冗談のようなものが多い。

私は小学生の頃、「森林太郎」という「木」の字を連續して五つ書く名前は珍しいので、本名でなく、ペンネームと思っていた。また、「もり・りんたろう」ではなく、「もりばやし・たろう」であると勘違いしていた。

四、鷗外自身のプロフィール

鷗外自身が自らを小説家というよりもサラリーマンとしての人生に重きを置いていた。

むしろ、文学での名声が出世に妨げになることで苦悩

をもらい、組織の一員として働いていることから、正真正銘のサラリーマンである。

何よりも出世の過程で、組織のために個人の能力を多大に犠牲にしていたのは、サラリーマンらしいと思う。

鷗外をサラリーマンとして表現するのは、私が最初でなく、日本銀行理事・旧山一證券のシンクタンク理事長を勤めた吉野俊彦氏であった。

最初に吉野氏の著作を読んだ時に、同じ銀行員として、同じ様に鷗外のことをサラリーマンと見る人がいるのだな、と思った。

「鷗外＝サラリーマン」論は、オリジナルなものでないが、全く独りよがりの意見でない。

三、「森鷗外」という名前は無い

本論を進める前に「森鷗外」という名前について説明をする。既にこの名前が定着しているが、森＝姓、鷗外＝名の語感もあり、正しくないと思う。

翻訳や医学論文を除いた百八の創作作品の内、「森鷗外」で発表された作品は僅か二作しかなく、これも本人の意志による署名であるとは不明である。最も多いのは、本名の「森林太郎」で五十三作である。単なる「鷗外」で発表されたのは四十五作である。

実際に、鷗外(漁史)は死んだ、と自ら「鷗外」の名

小倉左遷時に書いた『鷗外漁史とは誰ぞ』に次の様に書いている。

「何故に予は小説家であるか。(中略) 予がもし小説家ならば、天下は小説家の多きにたえぬであろう。(中略) 予が医学を以つて相交わる人は、あれは小説家だからともに医学を談ずるには足らないといい、予が官職を以つて相対する人は、あれは小説家だから重事を托するには足らないといって、暗々裡に我進歩をさまたげ、我成功をくじいたことはいくばくということを知らない。」

また、死の一年前に書いた『なかじきり』にも自分が作家として生きていなことを書いている。

「わたくしは医に学んで仕えた。しかしがつて医として社会の問題に上がったことはない。(中略) わたくしの多少社会に認められたのは文士としての生涯である。(中略) 然るにわたくしには初めより自己が文士である、芸術家であるという覚悟がなかつた。」

吉野氏を除いて、鷗外に対して、サラリーマンからの視点で見る人は少ないようである。

鷗外を研究する人がテーマにする場合の視点というのは、「作家」「医者」「軍人」等などである。

また、ドイツの恋人が鷗外を追いかけて日本へやってきたことや、一度の結婚から、女性関係をテーマにする人もいる。

鷗外は江戸時代から続く医者の家系の十四代目であり、

家父長制における当主としての存在という視点からも見
る人がいる。

鷗外を評する有名な表現として「テエベス百門の大都」
（テエベスとは古代エジプトの大都市テーベのこと）と
いう言葉がある。人は鷗外の一門しか眼に見えないが、
他にも九十九の門がある、という意味である。

その意味では、サラリーマンという立場は一つの門に
過ぎない。

しかし、時間的にも心理的にも、鷗外の人生の大半を
占めていたのは、サラリーマンであった。軍人や医者と
いう職人でなく、時間労働の対価として報酬を得る棒給
生活者であり、階級社会の中で昇進を目指した上昇志向
の人であった。

五、二生を生きる

鷗外の生き方に感銘を覚えるのは、「二生を生きる」
ということ、つまり、作家としての人生とサラリーマン
としての人生を生きて、両方で成功を収めたことである。

私自身は、文学と異なりスポーツであったが、プロの
世界を目指していた。サラリーマン生活を送る一方で、
真剣にプロボクサーになろうと考えていた時期があった。
そのことも二つの人生を生きた鷗外に愛着を感じる理由
の人であった。

（なお、一生を生きた鷗外の血を、子供たちがそれぞ
れ引き継いでおり、長男は医者、長女、次女は随筆家、
三男は画家になっている。（次男は夭折））

六、左遷の地・小倉を訪れて

鷗外のサラリーマン人生の中で最大の危機は、北九州
の小倉への左遷であった。

三年前（一九九八年）に、どうしても鷗外が左遷され
た小倉を見たいと私は思った。（小倉赴任は一八九九年）

当時、大阪に住んでいた島根も、三十年程住んでいた東京都文

京区も、留学していたドイツも全く行きたいという興味
が湧かなかったのに、小倉だけはどうしても見たいと思つ
たのである。当時、私は仕事で行き詰まりを感じており、
鷗外がどのように左遷の地で生きてきたか、知りたかっ
た。

七、サラリーマンを辞めていたら

私自身、サラリーマンを辞めたら、と考えたことがあつ
た。

鷗外は小倉への屈辱的な左遷をされて、退職を決意す
るが、周囲の説得によって思い留まることになる。

もし、鷗外が左遷の際に辞めていたら、どうなつてい
たか。

事実もあり、興味があった。

鷗外が実際に住んでいた住居跡には石碑が立っていた。

現在は、ビルが立ち並ぶ繁華街になっていた。小倉の土
地そのものに対して寂しい町のイメージは無く、異国情
緒を感じさせる雰囲気が残っていた。

もっとも、鷗外の時代から一世紀を経過しており、单

「二生を生きる」といっても、実際には様々な困難に
苦しむことになる。一般にサラリーマンであれば、副業
は許可されない。もし仮に許されても周囲の理解を得る
ことは難しい。本来の仕事以外で名声を得ると、本業の方に悪影響が出でてくる。

ビジネスの世界で、小説は、あまり理解を得られなかつた。
私がもしボクシングで成功しても、ビジネスマンとして
相応しくないという評価をされたかもしれない。鷗外
の場合も、小説が有名になつたため、軍人として相応し
くないとして左遷された。

また、外面向的な障害の要因に伴う苦労だけでなく、自
分を律していくという内面的な苦労もある。いくら環境
が整つても、孤独に打ち克ち、刻苦勉励しないと、
二生を生きることはできない。

仕事で疲れた後で、体を鍛えることは、肉体的よりも
精神的に辛いものがあつた。鷗外は、勤務後に睡眠時間
を削つて、執筆活動を続けており、専業の作家以上
に辛いものがあつた。

私はプロスポーツ選手として生きていくことを諦めた
が、サラリーマン人生と別の人生を生きようとしたこと
は貴重な経験と思っている。

た。ドイツ語の重訳によりトルストイ等のロシア文学も

多く翻訳していた。既に英語もできだし、新たに小倉の

地でフランス語を習得した。

当時、慶應義塾大学文学部で美学の講師をしており、専任として大学で教鞭を執ることも可能であった。具体的に東京大学で衛生学の教授の話もあったと言われている。

何よりも、医者であるから、その専門能力を生かす職場はあった。鷗外の専門は衛生医学であるので、開業医は難しかったかもしれない。しかし、大学卒業してから、陸軍に入るまでの五ヶ月間は開業医の父を手伝っていた。また、弟が病院を経営しており、一緒に経営していくこともできたかもしれない。

さらには、鷗外の名声を頼みに、政治家へ担ぎ出そうとする動きもあった。

陸軍を辞めていたら、日本文学史上、より多くの記念に残る作品を残したかもしれない、ということが言われている。

しかし、逆に辞めていたら、これだけの優れた作品を残せなかつたかもしれない。鷗外の場合は、本業が順調の時に優れた作品を多く書いている。鷗外の作品の八割が、陸軍軍医総監という最高位にいた時である。

鷗外を何よりも尊敬するのは、左遷されても、他に生きていく方法があつても、サラリーマンを辞めなかつた

ということである。

八、サラリーマンの悲哀を感じる作品

鷗外の作品の中に、サラリーマンの悲哀を感じながら読むと興味深い文章があるので、ここに紹介する。

①『青年』主人公の小泉純一の日記

「一体、日本人は生きることを知っているだろうか。小学校の門を潜ってからというもの、一所懸命にその学校時代を駆け抜けようとする。その先には生活があると思うのである。学校を離れて職業にありつくと、その職業を成し遂げてしまおうとする。その先には生活があると思うのである。そしてその先には生活は無いのである。」

②『妄想』の老主人公の回想

「生まれてから今日まで、自分は何をしているか。始終何物かに鞭打たれ駆かれているように学問ということにあくせくしている。（中略）しかし自分のしていることは、役者が舞台へ出てある役を勤めているに過ぎないようには感ぜられる。その勤めている役の背後に、別に何物かが存在しなくてはならないようには感ぜられる。鞭打たれ駆かれているために、その何物かが醒覚する暇が無いように感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校

う」とが、おぼろげながら見えて來た。」

（注　resignation=諦念）

九、おわりに

生徒、勉強する官吏、勉強する留学生というのがその役である。赤く黒く塗られている顔をいつか洗って、ちょっと舞台から降りて、静かに自分というものを考えてみたい。背後の何物かの面目を覗いてみたい、と思い思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けている。この役が即ち生だとは考えられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思われる。しかし、その或る物は目を醒まそう醒まそうと思ひながら、又してはうとうとして眠ってしまう。」

③『カズイスチカ』の花房の描写

「始終何か更にしたい事、する筈の事があるよう思つてゐる。しかし、そのしたい事、する筈の事はなんだか分からぬ。或る時は何物かが幻影のごとくに浮かんでも、補足することの出来ないうちに消えてしまう。（中略）」

（略）そして花房はその分からぬ或る物が何物だということを、強いて分からせようとした。ただ或る時はその或る物を幸福というものだと考えて見たり、或る時はそれを希望ということに結び付けて見たりする。その癖、またそれを得れば成功で、失えば失敗だというようなところまで追求しなかつたのである。しかし、この或る物が父に無いことだけは、花房もとっくに気が付いて（中略）。宿場の医者たるに安んじてゐる父のresignation（レジニーアシジョン）の態度が、有道者の面目に近いとい

鷗外の人生の軌跡を思い、その作品に触れると、サラリーマンとしての苦悩が軽くなる。
私はサラリーマンとしての挫折を経験したが、鷗外のように、けっして辞めることなく、自分に誇れる仕事をやり遂げるつもりである。

また、スポーツの世界で生きることができなかつたが、鷗外のよう二一生を生きようと思っている。公に文章を書くのは初めての経験であるが、これからは文筆家としての人生も生きていきたい。

（57）

詩 誤差ゼロの・他

青木昭成

誤差ゼロの

露地から 露地の角を曲がり

わたしは気まぐれな散策を ここから始める

今日の路はどう見ても 雨にそぼ濡れている

もちろん明日もそうあるとは限らない が

わたしの言葉の端々が 水彩のようにそこにある

独り言なのか でなければそれは うわ言か

それともわたしの自我の いつしか屈折し

とうとう残滓となってしまった姿なのだろうか

六月の空気は明るく しかし湿っている

叫んでみたい

「破たん」とは なんと
素っ気なくも味氣ない物言いではないか

わたしの筋向かいの

あの銀行が土曜日に破綻してしまった

月曜日には大勢集まって文句をいっていたよ
と 息子が窓ガラスごしに見た様子を伝えてきた
予期していた気分の話し方で

二級国道の人通りは それから
もう元の閑散にすっかり戻ってしまっている
車輪の通行だけが途切れることもなく

それが言わば このあたりへの「破たん」の訪れ

何處よりも一足早く実感させてくれたのだ

だけどあの ペイオフは困る それは困る

そう云ってみる だがなんと改めて考えれば
それは変な意地の張り方ではないか
わたしに預金なるものなし と反省させられる

払い戻して貰うものがない それでいて
支払い停止の体験だけを困った顔で わたしは

じつは何か叫んでみたい けつきよく
そう叫んでみたい欺瞞のなかに坐りこんでいるのだ

ときどき紫陽花がそれらしい色彩で
それらしい個数で咲き揃っていたりする

わたしはこの時 ふっと 思い出した

人類の時刻はすでに「誤差ゼロの」時代にいる
と誰かが何処かで そう言明していたのを

けれどなんと云うことだ この腕の時計は

今も決して「誤差ゼロの」には同調してはいない
いやはや まったく同調などできる代物ではない

まして 振ってみたとて どうにもならぬこの脳裏よ
その底のほうで脈絡しながら生き永らえているものよ
この誤差だけの わたしの過ぎてきた路々よ

左の中指

無用なものと考えたことはない

といつて 強いて

有用的なものと考えなおしたこともない

その左の中指の

第二関節を脱臼してしまった 愚かにも

人間の手には それぞれ

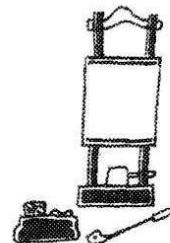
いかにも權威のありそうな親父の指がついている



なにやら秘密めき艶かしくもありとする小指もある
他人には後ろ指を差されるなども教えられる指もある
粉くすりはその腹で舐めてみるしかない指もある
けっきょく その存在は健忘のかなたに
ついに放置されていた わたしの左の中指よ
わたしはいま改めて
濡れタオル一本さえ絞りきれないでいる
人間にとつて生きるとは こんなふうに
実に こんなつまらぬ豊饒さを
取り戻す努力をつづけることでしかないように
た。

報徳の人 二宮尊徳

三戸岡道夫



(一) 幼少時代
報徳の人と呼ばれる二宮尊徳の幼名は、二宮金次郎である。

二宮金次郎は天明七年（一七八七）七月二十三日に、

相模国足柄上郡栢山村（現小田原市栢山）で生まれた。

小田原市から小田急線に乗ると、三つめに富水、四つめに栢山という駅があるが、その辺一帯には酒匂川に沿って平野が開けている。二宮金次郎の生家はこの二つの駅の中間にあたりにあり、すなわち東側に酒匂川、西側に小田急線といった立地条件で、現在でもその地に二宮金次郎の生家が保存されている。
さて二宮金次郎の生れた天明七年（一七八七）という

年は、天皇は百十九代光格天皇の御代、徳川幕府では徳川家斉が十一代将軍になった年である。そして松平定信が老中首座となり、大檢約令が公布されて、いわゆる寛政の改革が始った年であった。

すなわち時代としては、前年の天明六年に田沼意次が罷免されて、田沼時代というはなやかな時代が終わり、経済面を中心に幕府政治の衰退に拍車がかかってきた時代であった。
天明三年頃からは飢饉や天災が打ちつづき、それについて百姓一揆なども頻発していた。この天明七年の五月には大阪で飢えた人の群が蜂起し、それが江戸へも及んで打ちこわしが起るなど、全国的に騒然とした世相であつた。

もちろん金次郎は生れたばかりの赤ん坊であるから、そのようなことは何も知らないわけであるが、しかし金

次郎の生れた小田原藩とてもそうした世情の例外ではありえなかつた。だからそのような世相の中で両親が苦闘する家庭で、金次郎は育つていくのであつた。

父は栢山村の百姓で、利右衛門といい、三十五歳、母

はよしといつて二十一歳、金次郎はその長男として生れ

た。

金次郎が生れた当時の二宮家は、二町三反（一町歩は一ヘクタール）の田畠を持つ裕福な百姓家だった。だがこの財産を作つたのは、祖父の銀右衛門であつた。銀右衛門は生れつき剛毅で、勤儉力行の標本のような人だつたといわれている。つねに家業に身を入れ、質素儉約につとめて、土地を買い集め、ついに二町三反歩の土地を持つ上層百姓の仲間入りを果したのである。二宮金次郎はその性格が、父よりも、むしろ祖父の銀右衛門に似ているようと思われる（もっとも父の利右衛門は銀右衛門の養子であるので、銀右衛門と金次郎との直接の血つながりはないのであるが。）

従つて金次郎が世に言われる極貧の生活に入ったのは、幼少を過ぎてからであり、生れた当時からしばらくのあいだは、相当な財産を持つた平凡な小地主の、平和な家庭に育つたわけであった。

父の利右衛門は祖父の銀右衛門とはちがい、むしろ平

消え、砂礫の荒野と化してしまつた。
このため利右衛門の田畠もほとんどが流失し、石河原となつてしまつたのである。

そこで利右衛門は土石の下になつた田圃を元にかえすために借金を重ねた。しかし他方、自分が貸した金は返してもらうことが出来ないので、次第に生活は苦しくなつていつた。

こうして利右衛門の農地回復の苦闘が始まつたわけであるが、その復旧はなかなか困難で、一家の生活はますます窮屈し、金次郎、友吉の二子をかかえた利右衛門の苦労は大変なものだつた。その苦労する両親の姿が幼い金次郎の目に焼きつき、それは生涯金次郎の脳裏から消えない光景であつた。

しかし利右衛門の苦労の甲斐あって、徐々に農地も復旧し、五年たつた寛政八年（金次郎十歳の時）に、利右衛門は伊勢神宮へ参宮した。

なおこの寛政八年（一七九六）には、大久保忠真が小田原藩十一万石の藩主となつた。大久保忠真は生涯にわかつて金次郎と深いかかり合いを持ち、金次郎の人生の方向を決定した人間であるが、この時点の金次郎はまだ十歳であり、両者とも互にその存在を知らないのはもちろんであった。

なお翌年の寛政九年（一七九七）には、二宮家の総本家二宮伊右衛門家では、当主の義兵衛が死亡したが、相

凡な百姓であった。その上、
（栢山の善人）

と村人からほめられる、人がよく、思いやりのある人柄であった。人々の頼みに応えて施しをしたり、また困っている人を助けるために米や金を無利子で貸してやつたりしていた。

しかし善人という言葉の中には、ほめるだけではなく、『つける隙のある氣弱な人』という意味あいもある。

気前よく施したり、貸したりしても、無理に取り立てたりすることをしないので、その結果数年にして家は傾き、財産はことごとく散失して、極貧の底へと落ちぶれてしまつたのだった。

そのような中で金次郎が四歳になつた寛政二年（一七九〇）に、弟の友吉が生れた。

さて禍は突然やつてくるというが、金次郎が五歳になつた寛政三年（一七九一）に、その禍が突然二宮家を襲つた。金次郎の平穀無事な生活は、生れて四年ほどしか続かなかつたわけである。

寛政三年八月五日に南関東に暴風雨が荒れ狂い、小田原から江戸に至るまで沿岸には津波が発生し、陸地では家屋樹木が倒れて死者も出た。このとき相模国を貫流する酒匂川も坂口の堤が決壊して、東栢山をはじめとする一帯が濁流に呑まれ、水の去つた後は豊かだった田畠は

続者がないため、断絶した。この総本家復興の問題も金次郎の肩に重くのしかかつてくるのであるが、それは後日のことである。

それよりもこの年（寛政九年）、金次郎にとつて重大な事件は、父利右衛門の発病であった。利右衛門は酒匂川の洪水以来、四、五年間、農地復旧に苦闘していたが、その苦労、無理がたたつて、ついに病気になつてしまつたのである。金次郎十一歳のときである。

利右衛門は村の医者、村田道仙の治療を受けて、一度は回復したが、翌年（寛政十年）になつて、病気は再発し、それから後は病床に親しむようになつてしまつた。勢い、それまで利右衛門の肩に乗つていたものが、一挙に十二歳の金次郎の上に降りかかってきたのだった。まず酒匂川の堤防工事である。酒匂川は富士山の麓に端を発し、数十里をへて小田原へ入り、海へそそいでいるが、寛政三年の大洪水のように、たびたびの洪水は土砂を流し、堤防を破壊し、田畠を押し流し、民家へ災害を及ぼしていた。

そのため村々では毎年堤防普請の共同作業を行つたが、その作業に各家から一人ずつ、労役を出すことになつてゐた。ところが利右衛門は病氣で堤防工事に参加できなかつた。そこで十二歳の金次郎が父に代つて、労役に出ることになつた。

金次郎は大柄であったので、十二歳といつても身体の

一両を持ち帰った。

金次郎は父の帰りが遅いのを心配して、家の前まで出で待っていた。するとそこへ父が両手をふり上げながら、大よろこびで帰ってきた。

「どうしてそんなに喜んでいるのですか」

と聞くと、利右衛門は医師村田道仙の親切な扱いを金次郎に話す。

「この金でお前たちを育てることができると思うと、うれしくてたまらないのだ」

と答えた。それを聞いて金次郎も、

「それはよかったですね、さあ家へ入りましょう」

と、医者の家の方角へむかって両手を合わせた。こうして父親の持つ律儀な「善人性」が金次郎の中にも引き継がれ、また金次郎も道仙の仁の心に感動して、

(世のため、人のために、なにかをしなければならない)

という気持が、金次郎の中で育っていくのだった。

その翌年、十三歳になった金次郎は子守に雇われて働きに出た。そしてお礼に二百文の金をもらった。金をもらうとその金で、金次郎は、苗売りが売残した松の苗を二百本買った。そしてこれを酒匂川の堤防に植えた。

松の木の根は堤を丈夫にするという。父に代わって堤防工事に出た金次郎には、堤防工事の重要さが身に沁みてわかっていたのである。貧しい中でも松の苗を堰に植

るわけにもいかず、意を決して金次郎に、

「お前と友吉とは、どのようなことをしても、わたしが育てます。しかし末の富次郎までは力がおよびません。三人とも育てようとすれば、いっしょに飢え死するのを待つようなものです。それで富次郎は他所へ預けようと思います」

そう言って西栢山村に住む奥津甚左衛門という、よしの弟の家に預けることにした。

よしが富次郎をつれて甚左衛門のところを訪れ、事情を話して頼むと、

「わかりました。わが子同様にかわいがりましょう。姉さんも身体に気をつけて頑張ってください」

と心よく引き受けてくれた。

よしは喜んで家へ帰り、

「奥津のおじさんはよろこんで引受けってくれましたよ。これで安心です。これからは母子三人が力を合わせて、苦しみを乗り越えていきましょうね。おっかさんもこれまで以上に働きますよ。金次郎もしっかり頼みますよ」と、将来の希望などを語りあつた。

ところが数日して金次郎は母の様子がおかしいのに気がついた。それは夜母は床に入っても寝つかれず、泣いている夜がつづいているのだった。心配した金次郎は、「毎夜お休みになれないのはどうしてですか」と聞くと、よしは、

える、それは

(貧しくても、自分のことだけを考えるのではなくて、世の中のためになることにも目を向ける)

という後年の二宮金次郎の原型をここに見るのである。

なお金次郎が十三歳のこの年(寛政十一年)一番目の弟の富次郎が生れた。

こうして貧しい中にも、父、母、金次郎、友吉、富次郎と、親子五人がひっそり肩を寄せ合って暮していったのである。

(二) 一家離散

しかし家族五人のそうしたささやかな生活も長くはつづかなかつた。

三男の富次郎の生れた翌年、寛政十二年(一八〇〇)になると、父利右衛門は再び重い病の床につき、次第に衰弱していった。そしてついに九月二十六日、四十八歳で死亡した。金次郎は十四歳で父を亡くし、母子四人の生活の負担が一挙に金次郎の肩に降りかかるのである。

母のよしと金次郎は、父の死を嘆き悲しみ、その姿は村人の涙をさそった。しかし村人が生活を助けてくれるわけではない。母子四人が力を合せて生きしていくしかない。しかし乳呑子を抱えていたのでは、よしは仕事に出

「富次郎を預けてからは乳が張って、その痛みで眠れないのです。でもあと幾日かたてば、それも薄らいでくるでしょう。お前が心配する必要はありませんよ」と答えたが、答え終らないうちに、また涙にかきくれるのだった。乳が張って眠れないのもさることながら、富次郎を離した悲しみで夜も眠れないのである。その悲しみが金次郎の胸にびんびん響いてくる。それに、(母が乳が張って困るというのなら、母から引き離された富次郎も腹を空かして泣いているであろう)

と思うと、金次郎の頭に、母を求めて泣き叫ぶ幼い富次郎の姿が髪髷として浮かび上ってくるのだった。金次郎は矢も楯もたまらず、

「おっかさん 富次郎を奥津のおじさんのところへ預けましたが、でもよく考えてみると、家に赤ん坊が一人いたところで、それほど生活費がかかるわけではありません。明日からはわたし朝はやく起きて久野山へ行つて薪を取つて売り、夜はおそらく草鞋を作つて、いま以上に一生懸命働きますから、どうか富次郎をつれ戻して下さい」

それを聞くと母は臉にあふれんばかりの涙をためて、「すまないねえ、年はもゆかぬお前にそんな苦労をかけて……」

「いえ、わたしももう十四歳です。身体もこんなに大きくなりました。死んだおとうの代わりは十分できます」

「お前は心のやさしい子だね。お前がそう言つてくれるのであら、富次郎は家へ戻つてくるようにならう」

「ではさっそく連れにいってきましょう」

「とはやくも立ち上つて出掛けようとした。が、すでに時刻は子の刻（午前零時頃）である。金次郎はそれを押しどめて、

「おつかさん、もう深夜です。夜が明けたら、わたしが連れに行つてきます。この夜中に出掛けるのはやめてください」

「いえ、いえ、子供のお前が弟の面倒を見ようといふのに、どうして母であるわたしが夜道をいといましょうや」

「そう言つて母は深夜にもかかわらず西栢山村まで出掛け、わけを話して富次郎を連れ戻してきたのであつた。

富次郎を抱いた母を中心に、左右から金次郎と友吉が取りすがり、母子四人がうれし涙にかかりくると、金次郎の中に、

（よし、明日からは死にもの狂いになつて働くぞ）

という決意が雲のように湧き上つてくるのだった。

かくて金次郎の奮闘が始つたのである。

毎朝、金次郎は未明に起きて、薪を取りに行つた。山村は平地なので、山林がなく、箱根山の東斜面にある、久野山、矢佐芝山、三竹山などが、入会山となつて

を耕し、夜は縄をない、草鞋を作り、寸暇をおしんで働いた。

弟の友吉も十一歳になつていたので、富次郎の子守をして母を助けた。

しかし氣を強く持つても、金次郎もまだ十四歳の少年である。母と二人だけでは、田畠を耕すのにも力が足らなかつた。そうかといって人を雇つて耕し、賃金を払えば、残るものは何程ともなくなつてしまふ。一家は次第に追いつめられていった。

するとその年（寛政十一年）の暮に、またもや田畠を売らざるをえない破目に追いつめられた。それは父が死んだ時の医者への治療代や、葬式の費用、それに年末の諸支払いなどのことを考へると、田畠に手をつけるより外に手がなかつたのである。そこで七畝ほどの土地を一両三分で喜与八という村人に売つて、やつと年の瀬を切り抜けた。

こうして金次郎は母と力を合せて一生懸命働いたのが、貧困から脱出することはできなかつた。いや脱出どころか、ますます貧困に追いつめられていった。

父の利右衛門が死んで、一年有余が過ぎた享和二年（一八〇二）、金次郎は十六歳になり、弟の友吉は十三歳、末弟の富次郎も四歳になつた。その正月のことである。金次郎に大ショックを与える事件が起きた。

栢山村には大神樂といつて、正月になると神樂が家々

いた。金次郎はこの入会権のある山まで行つて薪を取るわけであるが、そこまで一里の距離を金次郎は歩いて通り、薪を取ると、今度は二里の道を歩いて、小田原の城下へ売りにいった。

だが薪を背負つて毎日、毎日、長い道を往復するだけでは、時間がもつたいない。そこで勉学好きの金次郎は『大学』という書物を懐に入れて、この往き帰りに本を読んだのである。田圃道を歩きながら読書する、誰も邪魔する者はいない。金次郎はその開放感から、声を出して『大学』を読んだ。するとよく頭に入つた。その頃、百姓のせがれ、それも貧困のどん底にある百姓が読書するなどということは、異例のことだった。

本を読む余裕があるのなら、もつとはやく歩くとか、薪をたくさん背負うとか、田圃を少しでも多く耕すとか、そうするのが百姓の知恵であり、生活信条であった。だから薪を背負いながらの読書姿は、村人にとっては、

（勉学好きの感心な少年金次郎）

という理想像というよりも、

（百姓の分際にあるまじき変な人）

（少しうがちの頭がおかしいのではないか）

と映つた。それで村人たちから金次郎は『キ印の金さん』などと呼ばれたりした。

薪を小田原で金に代えて家に帰れば、母を助けて田畠

を廻り、五穀豊饒、家内安全を祈り祝つて、一舞いする風習があつた。その舞のお祝義には百文を出し、もし舞を断わる時でも、十二文を出すのが、しきたりになつてゐた。その大神樂が今年もやつてきたのである。

しかしその時金次郎の家には、わずか十二文の金さえなかつた。

（どうしましょう）

とよしはうろたえ、

（もしかしたら神棚にでもあるかもしれない）

と探した。しかし用意がないのだから、あろう筈はない。

しかし父利右衛門が生きていた頃は、「栢山の善人」と言われた利右衛門は、気前よく大神樂に祝義をふるまつたものである。いくらその父が死んだとはいえ、いちおう一戸を構えている以上、十二文すら無いというのは人が信じてくれないのであろう。

（どうしましょう）

と母子四人は額を集めて途方に暮れたが、いい知恵は浮かばず、結局、

「居留守を使つて、お神樂に帰つてもらうしかありませんね」

という金次郎の意見に、

（そうするしかありませんね）

とよしも賛成して、急いで入口の戸を閉め、居留守を

使つて息をひそめていた。

やがてお神楽がやってきて、

「おめでとうございます」

と戸をたたく。しかし母子四人は息をひそめていた。

しかし四歳の富次郎はそうはいかない。笛や太鼓のに

ぎやかなお囃子に、

「お神楽を見たい、お神楽を見たい」

と我慢できないのを、

「しっ、声を出さないで」

となだめすかして、奥へつれいき、母子四人が寝室に

固まりあって、じっとしていた。

表からは、

「おめでとうございます」

とお神楽が戸をたたいて呼びかけてくる。しかしくら呼んでも反応がないので、大神楽は隣家へと移り、やがて足音が遠ざかっていった。

母子四人は顔を見合せて、ほっとすると同時に、十二文さえ払えない貧しさが、悲しく、恥かしく、屈辱の思いが母と金次郎の中をかけめぐった。

そんな大神楽事件のショックも影響したのであろうか、よしは急にやつれていった。そしてそれを追っかけるようにして、次の悲しみがよしを襲った。よしの父の死亡である。

あつた。

父も母もいなくなつた家の中は、急に空洞のようにがらんとした。幼い三人の兄弟に残されたものは、この空洞のような家と、六反ばかりの田圃であった。

しかし六月の梅雨に入ると、田植えの時期が迫つてしまつた。すると親戚が手伝つてくれて、いちおう田植えは完了した。

しかし田植えが終つてほつとする間もなく、六月二十九日に酒匂川はまた氾濫して、せっかく田植えの終つた金次郎の田畠はすっかり流され、土石の下に埋つてしまつたのである。すなわち金次郎は最後の砦ともいいくべき、わずかの田畠まで失つてしまつたのである。

家財もつき果てたあばら屋に子供三人では、いくら金次郎が働いたからといって生きしていくことはできない。

そこで親戚の者たちが集つて相談し、「このままでは兄弟三人が飢え死するほかはない。親戚で預つて養育し、後日を待つ以外に手はないのではないか」

ということで、金次郎は父方の伯父にあたる萬兵衛のところへ、友吉と富次郎の二人は、母の実家である曾我別所村の川久保家へ引きとられることになった。川久保家は先日の葬式のとき、焼香も許されなかつたという侮辱を受けた家であつたが、幼い第二人の養育のために仕方がなかつた。

よしは、相模国足柄下郡曾我別所村の川久保太兵衛の娘であるが、その太兵衛が大神楽事件のあつた年、すなわち享和二年（一八〇二）の三月二十四日に死亡したのである。

その葬式のときである。

母は富次郎を背負い、金次郎は母の白無垢の喪服を持つてかけつけた。が、その葬式の当日、母の喪服も金次郎たち子供の着物も、あまりに見すばらしいのを見て、親戚の者たちが、

「あなたたちは葬式に出席できないとは何としたことであろうか」

とよしは憤り、悲しんで泣いた。しかしどうすることも出来なかつた。

母は泣く泣く帰宅したが、その悲しみと屈辱が、よ

しの心を打ち碎き、生きる気力を奪つたのかもしれない。葬式から帰るとよしはどうと病の床についた。金次郎たち子供が手を尽して介抱したが、その甲斐もなく、よしは十日間ほど病床に伏しただけで、享和二年四月四日、死亡してしまつた。三十六歳であった。

こうして一年半ほどの間に、金次郎はあつという間に父を失い、母を失い、残されたのは十六歳の金次郎と十三歳の友吉、それに四歳の富次郎という、三人の兄弟で

こうして享和二年（一八〇二）七月、十六歳の金次郎は一家が離散し、ばらばらの人生を余儀なくされるのであつた。

（つづく）



破竹の唱

(下)

中 泉 聖 司



(一)

伊豆半島の連山に夏の太陽が消えた。

真紅の残光が西空を染める。四人は江ノ島橋からそれを眺めている、茜（あかね）色に染まつた海辺が佳子の瞳から零れ落ちた涙を飲み込んだ。いま、腰に回した駿介の腕によって支えられていた。

今に思えば家出同然の初体験、どうすれば良いか、不安がつのり出口の見えない迷路の中であがいでいる。江ノ島にいることは電話で正直に知らせた。

電車でもタクシーでも、使って帰りなさい。母が涙声で佳子に求めた。

刑事が参考人として、暴行事件の当日、駿介達と行動を共にしていた事実の供述を取りに来たことで、全てが母に判明し、ショックを与えていた。

真由美さんのせいね！今も、彼女と一緒になのね！すぐ

にお付き合いを止めて帰ってきて！あなたには、将来があるのよ、不良生徒の仲間だなんて信じられ無いわ、と嘆いている。

駿介と一緒になんてとても言えなかつたが、すでに母は最悪のシナリオで推測をふくらませているに違ひないと思った。

間もなく、海と空が薄紫色に暮れてゆくと、店やホテルの灯りが湘南海岸を連なり、砂浜の、あちらこちらからシユルシユルと音を立てて花火が見えはじめた。子供達の歓声があががっている。悩みのない澄みとおった子供たちの声が佳子の胸を突いた。

「たのしそう！」真由美が呟く。

「俺達もやろうよ！」賢治が真由美的手を取って駆け出して行く。

「たのしくやろうよ！俺たちも！」駿介が佳子の腰を

引き寄せて、
「心配しても始まらないさ！明日はあしたさ、君のことは、俺が守るさ！」
賢治が花火を買い戻つて呼んでいる。砂浜に降りていった。

真由美が缶ビールを開けて紙コップに注ぐ。

佳子も飲んだ。哀しみが痺れて消えていくように思えた。

感に、佳子は切ない吐息を指で噛んだ。更に花弁に守られた蜜壺の周囲を駿介が搔き分けながら、下りてくる。白く伸びた二枚の花びらが反応して閉じようとするが駿介の頭部で塞がれ、桃色の秘芯に添つて優しい舌の愛撫が続いてくる。

「イヤッ……アアーン」

「気持ち良いい？……」駿介の声が濡れている。

「ウ、ウーン……」

幸せだわ！愛されているの！下腹部の芯から押し上げてくる快感に悶えた。
蜜を吸う蝶のように触角の先端が膨らんだ核に集中し、刺激を試み始めた。

「いやん……いたい」腰を振る。

駿介は蜜壺に触角を差し入れたらしい。蜜液が溢れ駿介がさらに触角を伸ばして啜り込む、我慢している佳子の全身に浮き上がるような陶酔が再び押し寄せる。たまらず駿介の肌を求めて抱きついた。

顔に、熱い駿介の陽根が触れた。目の前に聳え立つている。

真由美が賢治にしていた光景が過ぎた。

佳子は掌を添えて、その先端を口に含んだ。
「ウッ、……」咽喉に先端が触れて苦しい。でも愛の表現なら、してあげたい。

何度も何度も駿介の指と舌が佳子の全身を愛で続く快

バスタオルに巻かれてベッドに運ばれた。

駿介が起き上がって佳子を抱き寄せた。

熱いものが佳子の中にゆっくりと注入された。駿介に抱かれて空を羽ばたく天女のように舞い遊ぶ、幸福感が押し寄せ、今は佳子の痛みを消していた。

佳子が軽い眠りから覚めたとき夜の十一時を回っていた。

駿介の胸に凭れて眠ったようだ。

静かに起き上ると、シャワーが浴びたくてベッドから出て立ち上がる。

駿介も身体を離した佳子の動きで覚醒していた。

ダウントライトを浴びて白い全裸の姿態が駿介の目に写る。キメの細かい柔肌が浮き上がり、何処かで見た聖女の裸婦像のようだ。均整の取れたバストとヒップの輪郭が美しい。

がむしゃらに性欲を満たしていくだけの、これまでのガールフレンド漁りの経験の中で、初めて大切なものを見つけた喜びを体験した駿介は、今更ながら佳子との出会いに感激していた。

佳子が振り返りバスタオルを拾い上げた。

「ごめんなさい、おこしてしまって」

「いいさ、気分爽快、ショット待つ……」

ベッドから下りて、全裸で佳子の前に立った。

佳子を抱きしめ、唇を重ねて背中の陰影を両掌でなぞ

た着信音が鳴り始めた。

駿介が佳子の手からそれを取つて耳にあてる。

「……賢治と一緒にいるよ。……心配しないで、今眠っていたんだよ。パパに言わないので、……エッ！ バレたの？」

「そう……エッ！ どうしてそれを！」

静寂の中に弱い女性の声が漏れてくる。佳子も駿介の聴いている受話器に耳を寄せた。

（…パパのことは、ママがうまくやるわ、それより、よそさまのお嬢様をどうしているの？ 一緒にね？ たい

そう御心配されて、何回も電話を頂いたのよ！ ……堀内さん、佳子さんとおしゃったかしら？ お母様が心配されているの、……ママにも厳しいお叱りを受けたのよ。

……お友達なの？ いつから？ ママ、何も知らないから、……）

（ごめん！ ママには心配ばかりかけて、……佳子ちゃんも真由美さんも一緒です。隣の部屋で休んでる。明日、帰ったら報告するよ。……） 苦しい言い訳に、声がかすれた。

（そうなの、……早く佳子さんのお母様を安心させてあげなくては……こんな時間では、どうしましよう……本当にご心配のようだし、無断外泊なんて、駿ちゃんとは、……男の子と違うから。どうしましよう……よく考えて行動するのよ、……駿ちゃんのこと、ママは信じてますよ。）

「……僕はすべてに責任持つよ！」

（……責任って、どうゆうことなの？ まだ高校生なのよ！ ……あなたは進学するのよ！ 洋ちゃんと同じ大学に行くのでしょうか！ 成績も抜群なのよ！ 今回のことでは、いま先生がたが骨をおつて下さっているから、心配しないで……）

（……そんな！ どうしよう、帰つて来たらお話ししますよ、パパも一緒に！ ……車の運転に気をつけてね！ 佳子さんは、すぐにお母様に電話入れるように、……話してね。……警察に捜索されると面倒なことになるわ……）

佳子の肩が小刻みに震えていた。

佳子の身体の小さな震えは止まらなかつた。

駿介は優しくベッドの中で抱き止めている。自分はどうしてこんなに身勝手なのかと初めて気づいてきた。これが愛なのか、相手の苦しみを知った今、自らの胸中も苦しくなつてくる。

駿介には、初めての感覚だった。

今まで本能のままにやつてきた、ガールフレンドとの遊びとは違う。

佳子が処女だったからか？ 刑事事件を引き起こした自分を侮蔑なく順応してくれた、包容力に感化されているいますよ。）

るようにならぬじめた。駿介には佳子がさらに愛おしかった。

佳子の胸を押さえていたタオルが音もなく落ちた。

「キミのこと、好きだ。何があつても、守るから……」少し反りあがつた乳房の谷間に顔を埋めた駿介は、足を折りながら上半身は徐々に下がり、背後に回した指はヒップの膨らみからゆっくりと丘陵の影に滑り込んでいく。

同時に駿介の唇は佳子の白い腹部の肌をなぞりながら若草の茂みに止まり愛のしるしを語りかけている。

「アーヘン……」

佳子はよろめきながら駿介の後頭部を抱え込んだ。たちまちベッドサイドのフロアーに倒れこむと激しい愛撫でお互いの愛を求める、愛を与える狂おしいほどの性愛に溶けていった。時は刻々と明日に向かって過ぎていく。

気が付くとどこかで携帯電話の着信音が鳴っている。切れでは、再び呼び続いている。佳子のバックの中だ、あの時、駿介から車の中で預かっていたものだった。佳子がベッドから下りてそれを取り出すとまた、切れた。

午前一時を回っている、駿介との激しい愛欲の名残が身体に余韻を残したまま、抱かれて眠りに入つて行った。佳子がベッドから下りてそれを取り出すとまた、切れた。

学校なんかくだらない！ すぐにでも社会人として立派にやつて見せるさ」

（……そんな！ どうしよう、帰つて来たらお話ししますよ、パパも一緒に！ ……車の運転に気をつけてね！ 佳子さんは、すぐにお母様に電話入れるように、……話してね。……警察に捜索されると面倒なことになるわ……）

佳子の肩が小刻みに震えていた。

佳子の身体の小さな震えは止まらなかつた。

駿介は優しくベッドの中で抱き止めている。自分はどうしてこんなに身勝手なのかと初めて気づいてきた。これが愛なのか、相手の苦しみを知った今、自らの胸中も苦しくなつてくる。

駿介には、初めての感覚だった。

今まで本能のままにやつてきた、ガールフレンドとの遊びとは違う。

佳子が処女だったからか？ 刑事事件を引き起こした自分を侮蔑なく順応してくれた、包容力に感化されているいますよ。）

家出人捜索が佳子の父母からでたようだ。ベッドに腰掛けた佳子に寄り添うように真由美が佳子の頭を抱いていた。

おそらく車のナンバーも割り出されているに違いない。

「警察にバレているの？ここに居ることが……」真由美が不安そうに佳子の頭越しに聴いた。

「とんでもない！それがわかれらのホーテルが、さっき言つたように面倒になります。居れば連絡しろ、と、言うことにして……警察には隠すつもりです。……私共は関わりたくないのですよ！」

これで、ことがうまく運ぶだろう。女子生徒が動搖している、男も頼りなさそう、どうせ女を連れ出して後先もなくやりにきたバカ生徒たちには違ひなかろう。今時子も子なら親も親だ。やられたあと、今ごろ騒いでも仕方ないだろうに！

駿介は黙つてこの男の言葉と表情に注目していた。モーテルの主人らしい。パートの従業員が警察の電話を受け驚き、自分が宿泊させた未成年者について、相談を受けて突然睡眠を妨げられたのか、何度も眠そうな目を擦っている。さらに見ると白髪に寝癖が付いて側面が七面鳥の鶏冠みたいに逆立っていた。

「うちには、皆さんお泊まりではない、と言ふ事にしたいのです。お泊まりの形跡も無い、ということです。」料金も返さなくて済みそうだ。出て行けば関係ない。も

凶行事件が頭によぎる。

反射的にドアのノブに手をかけていつでも逃げる大勢を取つてゐる。

予想通り、度量が狭小の男だ。

「どこへでも行けよ！連絡入れろ、警察に！」賢治が睨んだ。

駿介は可笑しくなってきた。とうとう、笑いながら、さ！でも騒ぐと……困るのはオヤジさんだよ！オヤジさんが俺たちの話も聞きもしないで、一方的に話しているからさ。」

駿介の落ち着いたソフトな声が響いた。

「脅かさないで下さい。そんな悪い生徒さんには見えませんが、少し驚きました。宿泊料金もお返しします。こんな状況では頂けません。もっとも、ご休憩の料金との差額になりますがね。」

「良いですよ！そうです。」駿介が答えた。

今聞いたアイディアにシラガ男は自画自賛し、内心ほくほく笑む。多少の損はしそうがないか、と自分に言い聞かせた。

「それではフロントでお会いしましょ。先に清算してお待ちしていますよ！……もう間もなく夜があけてき

う朝がくる。予定どおりこのままボートで釣りに出よう、とかんがえている。

駿介の胸に怒りが込み上げてきた。

「出でやつても良いよ！でもサツに捕まれば今まで聴いたこと全てバラすもんね！」賢治が投げやりに言った。その通りだ、女連れの高校生だと解り安易に自己保全ばかり並べ立てているこの男に駿介も同じことを言うつもりだった。

「そんな……！」シラガ男が眼を見張る。

「わざわざお知らせに来てあげたのに……それは困ります！……なんで警察に！」なぜ、またまた警察に閑わらねばならないのか、自分の不運をぼやいているつもりだが、相手のひるみを突いて賢治がウソ話で切り込んだ。

「警察が捜しているワケを教えてやるサ。オレがさ！ムカついた奴を殺めたのサ！新宿ですよー！」

「コロシ！」シラガ男の顔が見る見る引き攣った。最近の十七歳の

余程釣りの好きなオヤジらしい。先ずは一安心したのか、ホーと吐息を吐いて、出て行った。

駿介は逗子マリーナに停泊している父親の愛艇、クイーンフィッシュヤー35FBの挺身を思い出して、去年、父がボートを買い替えた時、マリーナに浮かんだアルミニウム製のスマートな新挺姿を見ると、忽ちそれに魅了されて大騒ぎをした。本来ならこの夏には四級の小型船舶操縦士の免許を取得する予定だった。

父と兄の洋一と三人で幼少のころからクルージングをした楽しい情景がコマ送りになって浮かんでいた。

(三)

薄い朝靄が立ち込めていた。

駿介たちはモーテルをでて街路灯のオレンジ色のライセンスがぼやけて連なる湘南海岸道路に車を入れた。BMWの窓を開けて、逗子に向かって車を走らせて、稻村ガ崎の突端を抜けると、暗い海の向こうに逗子、葉山の夜明けを待つ家々の明かりが丸く滲んで右に伸びて見えた。漆黒の帶に散

らした星染めの模様のように無数に淡くたたずんでいる。

ふと、あの灯りの下に眠る平穏な家族を想像し、モーテルを追い出された自分達との落差に心を疼かせているのか、無口になつてこれをながめている。

何分も走つただろうか？郷愁に似たセンチメンタルは、

この若者たちには長続きはしなかつた。

やがて、東方に三浦半島の山の稜線が見えはじめた。

見る間に青白い空が山の上に広がりはじめる。はやい夏の夜明けの始まりだ。

暑い夏の一日の幕開け。

今日も、小波を受けて返す砂浜が今は、無傷のまま連なり若者達を待ち受けている。四人にとっても、いま潮風に混ざる磯の匂いが新鮮だった。若い肉体に駆け巡る血が騒ぐ。曙光を待つ海の青白い光りに刺激を受けて身体の内部に新しい活力が芽を吹くように湧いてくる。

人も、鳥も、魚も砂浜の目覚めと共に命を吹き出し、新しい今日を生きしていくのだ。

駿介は気づいた。自分のなかに新鮮な緊張が（みなぎ）漲り始めたのを。

スタートラインについたボートがゴーサインに目を凝らし、耳を澄まして勝利の予感に気持ちが高ぶつてくるのと同じモノのように思えた。

佳子は駿介がギアレバーに置いていた手に自分の掌を重ねていた。

て、頓狂な声を出して喜んだ。

賢治も去年の夏、駿介に呼ばれて父のボートで遊んだことがあった。

クイーンフィッシュはメーカー名で「SANTA・MERUSY」号と父が命名し、その船名のボートが逗子マリーナの陸上艇置場に委託管理されている事は賢治も知っていたのだ。

賢治は東京に帰らないで海で遊べることを予感して、後部シートで真由美と抱き合つて歓声をあげている。
「水着が欲しい！」真由美が賢治に強請る。
「そんなの要らないさ！皆、オールヌードだ！ヌーディストクラブ専用の島を探そうよ！無ければ無人島に行くさ！」

この近辺にそんな所があるわけは無い。賢治の遊びに対する想像力の広さには駿介はいつも感心していた。

それより、果たして管理事務所でボートのカギが貰えるか？出航のセッティングが出来るか？親父の別荘に逗留している弁護士の家族が予約していないか、が心配だった。が、先生はおそらく小型船舶操縦士の免許を持ってはいないだろう。ボートをだす話は聞いたこともない。しかし駿介も無免許だ。

二級の免許を持つ親父の傍で駿介は度々操縦やコクピットの計器の見方や海図の読み方は教わった。駿介がボート部に所属してから兄の洋一より駿介のほうに親父が熱

気分は悪くない。全ての景色や匂いにだんだん爽快感を覚えている。

駿介の愛のすべてを受け入れた。そして自らの愛を駿介に与え尽くした今、なれば充実した感覚につつまれていた。

あれから真由美の電話に父が出て、娘の父親としての責任と義務について冷静に伝えたらしく。その後で佳子が替わると、はじめて父に投げやりな激しい口調で叱られたのだった。母は、昼間の刑事に相談を入れた、と言った。正式な捜査手続きは取られてはいなかつたようだ。

おそらく担当の刑事の思い入れで藤沢署の親しい刑事に青少年の性犯罪の予防を目的とし、協力を求めたのかかもしれない。

それでも、真由美のウソの言い訳にすがるように母が、

（早く帰って来てね、一人にはこれから、素晴らしい将来があるのよ）と、涙ながらに訴えたのだった。

あくまで、母にはいつまでも自分の可愛い娘であつて欲しい、これが親の本能なのだ。佳子もそれは、よく分かっていた。だから、悲しい思いもあつたし、そしてせつなかった。

しかし、今は駿介との激しい愛の体験がそれを打ち消して、一人の女としての本能を目覚めさせていた。

駿介は逗子マリーナの入り口のトンネルに車を向けた。

「ヒヤホー！クルージングだよ！」賢治がそれを察し

今まで事故もなく器用だと自負しても居たが、この感覚が無謀だった。いまは気づかない。

明晰な頭脳を持った駿介には法上の仕組みは解つてはいるが十七歳の体内に吹き出す動物的好奇心には理性による自己の制御のほうが負けてしまうのだ。法律上取りたくても十八歳までは取れない。

今まで事故もなく器用だと自負しても居たが、この感覚が無謀だった。いまは気づかない。

ハバーの中は大小の船でいっぱいだ。駿介の見覚えのある大型クルーザー「バードラム」が一隻、船体に灯りを灯して繫留していた。そのクルーザーの帆柱越しに江ノ島がある。

すでに靄は風に流れて三浦半島の空から薄い曙光の紅みが江ノ島の山肌を染め始めていた。

駿介は車に三人を待たせて管理棟に向かった。

顔なじみの管理人だとウソもつける。去年まで親父の指示で、よく出航準備の手配に行かされたものだ。

さすがにトップシーズンだ。

管理会社のハーバー部管理室にはフィッティングメンバーが既に何人も来て出航の準備でごった返していた。この時間帯はすべて、遠出のトローリング目的だ。

駿介は中に入ると顔見知りの男を探したが見当たらぬ。日焼けした若い男たちが船のオーナーの指示に従い船の備品だのトローリングの小道具の注文に答えてデッキに運んでいた。

殆どがアルバイトの高校生らしい。

「木下さん、来ていますか？」帽子に管理会社のマークを付けた丸顔の中年の男に訊いた。

「ああ！ キーさんいたよ。ハーバーじゃないの？」

「ありがとう！ じゃあ向こうに行つてみる。」

「田宮社長來てんの？ ここんとこ、とんと無沙汰で

しょう！ 元気なのね！」

「はい！ ……でも……」

「じゃあ！ 後でね！ ……ヤマさんのバウ（デッキ前部）

にロープ入れといで！」

忙しそうに、新しいロープを箱から出すと、それを若

い男に投げ渡して、自分はカギの束を擱んで飛び出して

行つた。

そういえば去年、こここのレストランで会つたことがある男だ。親父のサンタ・マルシイ号の担当ではないが、いつも親父がなにかと気を使つてゐるらしい。息子のこ

駿介は逗子のマリーナの港に架台で作られた艇置場に見える親父の「SANTA・MERUSIY」号を指で示し

「あのボートだよ。俺の親父の船さ」

「クイーン・フィッシュヤーじゃありませんか！ I社の最新機種ですな、35FB、271馬力のディーゼルターボエンジン搭載、ステキですね。……お金持ちなんだ！」

あなたの家は……」

見かけからは想像も出来ない位、船の知識は詳しいようだ。カタログマニアなのか、言わせればこの架台の上に並ぶ全てのボートの機種が説明出来るかも知れない。

自分のボートと見比べて、男はフードため息をはいた。
「操縦して見たいですねえ、やがては！」思わず口を突いて出た。

その時、真由美の声が響いてきた。色々な船を前にして驚嘆しているのだろう。

「スッゴイ！ 見たことナニイ！」賢治達がやってきた。

車から出て、散歩がてら賢治が真由美と佳子に船を説

とまでよく覚えてくれているもんだ、と思ひ少し嬉しくなった。

建物を迂回してボートヤード（陸上艇置場）に行つてみた。色とりどりの無数のジェットスキーがラック（立体艇庫）に整然と格納されているのを見ながら歩いていると、そのまま隣のエリアに管理されている白いボートを引き出している男の姿が駿介の眼に飛び込んできた。モーテルのシラガ男だった。

細い体を弓なりに曲げて、一人だけで手引きのレッカー

車に乗せたボートを引き出していた。

アクリルウレタン製の十フィート足らずの船体で、後部デッキにエンジン付きのスクリューを取り付けただけの釣り舟だった。

駿介の脳に電気のように、ある計略が走りぬけた。
「手伝うかい？」呼びかけた駿介にシラガ男の顔がある。

「は？ ……おえっ！」奇妙な声をあげて驚いている。

「あんたは！ 先刻の！ ……何故ここにいるの？ ……バ

イトですか？」面食らつて、動搖している。

「いえ……さっきはどうも！ あれから、おれ達も急に

船に乗りたくなつてさ、来たのさ、ここに……」

シラガ男の眼が不安そうに駿介を見た。モーテルのお尋ね者を追い出して清々として、好きな釣りに来たのだ。またしても厄介なこの高校生に出会うとはなんと不運！

明しながら歩いてきたようだ。

駿介と話している男を見つけると真由美が大声で、

「あらら！ モーテルのおじさん！」吃驚している。

シラガ男の眼がきまり悪そうにしょぼついた。

駿介が賢治を手招きして呼び寄せ、自分の計略を耳打ちして、

「あの船の船長にしても良いよ！ 今日だけ。」駿介が大声で言った。

「そんな！ 私をからかわないでください！ 家出の生徒

さんに何でそんな事が出来るの」

「オヤジさん！ 今日は、オレの親戚にしてあげるよ。それで、後はオレがうまくやるさ！」

「私は、今日は小魚を釣りに行くんです。私なんか近場でキスやアイナメをやるだけだから、このボートで良いんです。」いじけた眼を海に向けている。

「へーイ、オヤジさん！ キスとアイナメはラブホテルでやるもんだよ！」賢治が男の耳元で囁いて、笑つた。

駿介も、モーテルのシラガ男の呟いたキスとアイナメの言葉が可笑しかった。

シラガ男の顔が赤くなつて、また眼をしょぼつかせた。

おそらくいつも、トローリングに次々出航して行くクルーザーや新鋭のモーターボートに羨望の眼を送っているのだろう。ひょっとしたら、セックスの場所だけを提供してきたラブホテル経営の後ろめたさがこの男を卑屈

にしているのかも知れない。

「駿ばうじやないか！久し振りじゃないの」

管理部の木下課長がハーバーから上がりてきて駿介を見つけて近づいて来た。駿介が敬礼をする。

「田宮社長も今年は忙しそうだね。電話は時折貰つているけど、駿ばうが何かやらかして余計に忙しいと、こぼして居られたけど、何をやったんだい！」

賢治が駿介の代わりに答えようと前に出た。が、駿介が押さえた。余計な説明をすると計略が壊れる。

「体つきが見るたびに変わつてくるね！ボートで鍛えたこの体じゃ、腕力や脚力には負けないだろうからね：：：まま、ケンカの一つくらいは良いさ！若い時だけの特権だからな！」駿介の肩や腕を両手でたたいて、筋肉の成長を確認して感心している。

事件の詳細は解ってはいないらし。

海の男たちとの付き合いが長いだけに、お人よしで面倒見がよく、気性もさっぱりしていて、キーさんと愛称で呼ばれる木下課長はオーナー連中の人気がある。

「どうするの？……可愛いガールフレンドに船を見せに来たのかい？美人だね！水着でもつけて、写真でも撮るかい」

キーさんは朝焼けに映えた佳子と真由美の顔を代わる代わる見て微笑んだ。

「峰さん、いや、峰岸船長！よろしくお願ひします！」

駿介は敬礼した。あとから直ぐに賢治も掌を右耳に合させた。

真由美が佳子の手を取つて跳ねている。

「へんな縁ですね。どういうことでしょ……田宮さんの御曹司だなんて」

峰岸は頭に手をやりボリボリとシラガ（髪）を搔きながらぼやいているが、サンタ・メルシイ号に眼をやりながら表情が変り始めた。

緊張し始めたのか、顔が紅潮して眼に生気が漲りはじめた。

（四）

峰さんの港をでる操船技術は完璧だった。

直立不動の姿勢でコクピットに立ちキャプテンハットでシラガ頭を包んだ姿は、すでにラブホテルのオヤジではなかつた。

江ノ島を右手に見ながら、港をでた。そこは相模湾だ。風をきるハウダッキに賢治と真由美が座つて髪を靡かせている。

何の着替えも持たない彼女らのために駿介は売店で、それをお揃いで白地にイルカをプリントしたTシャツとレモンカラーのショートパンツを買って着替えさせた。峰さんは、家出同然のこの生徒らの秘密は誰にも漏ら

「木下さん！ボートを出したいんです。手配してくれませんか？」

「いいえ！この人です。今日のキャブテンです。」シラガ男を指差した。

「ほうー、峰岸さんが？……もつとも峰岸さんは一級免許だからね。駿ばうのところとどういう関係なの？峰さんと」

「実は親戚なんです。母方ですけど。」先ほど、浮かんだウソを堂々とさらりと答えたからキーさんはウソが見抜けなかつた。ラブホテルを経営している峰さんはメンバーの中でも孤立していたし、これまでに峰さんを親戚だと紹介することが、田宮社長も恥ずかしかつたのだろうかな、と思った。シラガ男の峰さんまでがコックリと頷いたように見えたから、忙しい朝のキーさんは直ぐにその船の手配を考えた。田宮社長が駿介を溺愛している親ばかでも、田宮社長自身が度量の広い大物でキーさんはこの常連さんを崇拜していたから、サービス精神も旺盛だったのだ。小型船舶一級の免許を峰岸さんがもっていることはメンバーの周知の事実だし航行には何の支障もない。

「事務所で航海スケジュール出しといて！直ぐに仕立ててあげるから」

キーさんはすぐにハーバーに向かつていった。

「取りあえず佃嵐崎に向かって油壺マリンパーク付近まで行こうと、キャプテンと話していたところだよ。」

「何か食べるかい？」食料は積み込んでいた。

冷蔵庫もレンジも全て整つている。

「私がやるわ！」佳子も空腹感を覚えていた。

コーヒーを入れて、サンドイッチを皿に明けて、トマトとチーズを切つてもりつけた。賢治と真由美もキャビンに入り、冷蔵庫から賢治がビールを見つけるとソファーに掛けで飲み始めた。

佳子は峰さんに小分けした食べ物を、コーヒーと一緒に渡す。駿介は甲斐甲斐しいその仕種に見惚れていた。

「未成年は酒を飲んではいけませんよ。……でも、私も船乗りの時分には二十歳までに酒は覚えましたからね、

文句の言えた道理でもありませんがね。」

「ヒヤー！元船乗りなの？どおりでキャブテンの雰囲気あると思つたぜ！」賢治が飲みながら感心している。

「いえ、単なる水夫でしたよ。免許は陸に上がってから取ったのです。……長い海の生活は辛いから……おかげに上りましたが、やっぱし懐かしくってね、海が……」

駿介もあのラブホテルで見た峰さんと今の違いに驚いていた。カクシャクとした舵取りの姿を見ていると、青春時代の航海を想い出し、昔と変わらぬ海の潮風が卑屈な心を洗い流しているに違いない。

海は人の心を純粹にさせる。心に溜まったウミやアカを洗い落してくれる。親父の言葉を思い起こしていた。

駿介は佳子とアフトデッキに出て並んで海風を吸い込んでいる。

「深呼吸、始め！」

「気持ちがいいわ！」

佳子が胸をはり、駿介に笑顔で答えた。

佃嵐崎の岩陰が左舷前方に見えてきた。

峰さんが船のエンジンをニュートラルにするとコックピットに装着したGPSプロッターのスイッチを入れて液晶ディスプレイを覗いている。

GPSプロッターを魚群探知機に切り替えて魚影のチェックを始めたのだった。

いる。

「違いますよ！これがメバル、これもメバル、……それがべらで、それはカサゴの子供ですよ！」

峰さんは少しムツとして魚を指差して教えていた。この生徒らは何も解っていない。セックスをやることばかりが早熟でそのほうの揶揄は直ぐに出るが、一尾の魚の名前すらも言えない。今の教育は一体どうなっているの！どうせ魚を料理することもできやしないだろう。あのカサゴでもじかに捌ませてカサゴのトゲでも刺されればいいや！刺されて痛がる様を想像すると内心可笑しくなつて叱る氣にもなれない。

午前九時を過ぎると満潮になって潮が止まった。

これからは引き潮になり釣れないのだ。

峰さんが竿を上げて釣りを終えると駿介はGPSプロッターをナビに切り替えてボートを南に向けて操舵しはじめた。

海は穏やかでマリンブルーに澄んでいる。

初声漁港の岬を大きく迂回した。

島ほどの大小の岩場が岬を埋めていた。峰さんが駿介に時折ルートの指示をだしている。左舷前方に油壺マリ

ンパークの展望台が見えてきた。

その半島の手前、小網代湾から大小の漁船が整然と行き交い、その向こうに繫留されたヨットやクルーザーが

油壺まで五海里、黒崎の鼻から半海里の漁場だ。

付近には岩場が多く絶好の漁場で既に乗合の釣り舟が二艘、小波を受けて十人位の釣り客に竿を降ろさせている。やがてダイバーもたくさんやってくる場所だ。

「ちよっと、やらせて下さい。今だったらお昼のおかずくらいになりますよ！ダイバーが来ると魚が散つて釣れませんから」

峰さんが手持ちの竿とエサをだししてデグスを海にいた。

「峰さん、船は動かせるから釣って下さい。」賢治がコックピットに立つ。

今は満ち潮らしく瞬く間に船が岩場に押されていく。駿介はコックピットでエンジンをローレベルにおいて操舵のハンドルを取って海流の流れにゆっくりあわせている。

「さすがに、田宮さんが基本を教え込んでいるね！上の潮の流れと海の下の流れに違いがあることを解っている。」

峰さんは感心しながら後部デッキシートに腰掛けて次々と小魚を釣り上げている。

「すごいい！すごいい！」

「名人！釣りの名人だよ、キャブテン！」賢治と真由美が歓声をあげている。

「キスして、キスして、アイナメだー」一人で歌つて

出航に（ひしめ）躊躇っていた。その半島の裏側に油壺湾があるのだが朝の出航ラッシュは同じだろう、このまま城ヶ崎に直行したい、と駿介は思った。

佳子は峰さんの裁いた小魚を鍋に入れている。賢治も真由美も峰さんの包丁の使い方に見とれていた。

「お寿司やさんの、板前さんみたい！」

大物メバルの一尾はたちまち生き造りの刺身に変わつて皿にもられた。

「生きたままで、すぐ食べなさい。美味しいよ！」峰さんが手で口に放り込む。

佳子は小皿にとるとコックピットに行き駿介の口に箸で運んで、自分も食べた。

賢治と真由美もビールを片手にご機嫌だ。

「このまま城ヶ島の航路に変更します！」駿介が峰さんに告げた。左舷、右舷の方向にある船の移動を注視し、エンジンギアを切り替えながら。

「沿岸ルートでやりなさい。頼みます。」

峰さんはそのエンジン音と他船の動きを見て駿介の舵取りを管理しながら、佳子に鍋の魚の煮方を教えていた。何処から見ても仲の良い五人父子のクルージングの風景だった。

午前十時を回ると気温が上がり、風が変わった。

朝風は終わり太平洋から陸地に向かう典型的な真夏の風だった。

逆風を突いて諸磣の沖を抜けて沿岸伝いに三崎港に向かった。

午前十一時三十分、サンタ・メリシイ号は三崎町城ヶ島の灘が崎防波堤を左に回りこみ長津呂崎の手前五マイル、小さな入り江に入船し錨を落とす。

城ヶ島周遊の観光船がその沖を優雅な船体を見せて走行している。

さすがに島の切り立つ崖下の入り江には人影も見えない。静かだった。

崖の上にはKホテルがある筈で、その太平洋を臨む景観は抜群だろう。

佳子と真由美が昼の食事をつくり仕上がった。スタンデッキに日よけシートを張り全員が車座になって食事を始めた。

炊飯器のご飯を皿に盛り、メバルやベラの煮付け、レタスとキュウリのサラダに卵料理を並べている。

「海の上で、こんなに食べるのははじめて！今日は船酔いしないしー、チョベリ、グー（最高の気分）」

「ビール、飲んだからだよ、船酔いの前に早くアルコールで酔えれば良いんだよ！俺のおかげさ！」

「船で仕事していれば酔わないのですよ。こんなにおいしい食事をつくる仕事が貴女がたにあつたことが、さら良かつたのかもしれませんね。」

峰さんもビールを手にして飲みながら、楽しそうに賢

治と真由美のたあいも無い造り取りを聴いて、お世辞を返しながら食べている。

佳子も楽しかった。駿介の食欲に眼を見張り、ご飯のお替りを自分の手でよそおうのが嬉しかった。手造りの料理を愛する人に食べて貰う気分とはこんなに楽しいの！

「一時間くらい休憩して行きましょう。四時過ぎにマリーナに帰港予定です。」

峰さんはデッキに横になつた。昼寝らしい。

駿介はキャビンに入つてロッカーから海水パンツを賢治に投げて泳ごうと言う。

「オーケー、あの岩まで行くか！」岩礁が見える。

真昼の太陽が降り注ぐ。陽光が海面の波を割つて浸透して透明な海の底を映し出している。

暑かった。

いつの間にか真由美が賢治の脱ぎ捨てたトランクスのパンツにはきかえてライフジャケットをつけていた。

「ヨシモ！……こっちにおいて！」自分の奇妙な姿に照れながら。

佳子は笑いころげた。スカートを履いて服をつけた子犬のようだ。

「マルチーズみたい！かわいい！」

「ヨシも着替えて、海に入ろうよ！」駿介のトランクスを抱いてふざけている。

たが駿介のプロポーズに脳裏が痺れるような感覚に覆われた。

駿介の腰に両手を回して頷く。

しばらくすると賢治と真由美も笑いはしゃぎ、飛沫を立てながら岩礁を回ってきた。

「やだー、いやだー……脱げらやうよー！」

「俺のパンツ返せ！」駿介と同じように真由美のヒップを抱いてふざけている。

一番暑い時刻だ。
(五)

帰港の準備にかかっていた。

峰さんがエンジンを始動し空吹かし調整している。

梯子を上げて、日除けテントをたたみサイドボックスにいれる。

「泳ぐ前にやるべきだったよね……」

真由美がキャビンのソファードで佳子の背中にオイルを伸ばしていた。

「泳ぐ前にやるべきだったよね……」

海に浸るのは僅かな時間だったが皮膚がヒリヒリと痛い。でも佳子は駿介の囁いた「結婚」の言葉に酔っていた。駿介の愛がひしひと身体に伝わって来て胸の奥から熱いものが湧いてきて全身に満ち渡る。

峰さんが確認点呼、相模湾に戻っていく。

「左舷前方、右舷よし！」

佳子は嬉しかった。どこまでも附していくつもりだっ

とすると。

「いじわる……」

片手で押されて泳ぎながら岩陰に回る。

「……楽しいわ」

「俺も！……結婚しよう！……すぐには無理だけどま

ずレストランでコック見習いから始めるさ！」

峰さんが確認点呼、相模湾に戻っていく。

佳子は嬉しかった。どこまでも附していくつもりだっ

駿介と賢治は後部デッキの手摺にすがって、海風に髪を靡かせている。

「賢治！……俺はね、もう学校には行かない。決めたんだ……」

「本気？……退学するの！」

「ああ！行ったところで何になるの？進学クラスの皆を見ても無表情で機械みたいに毎日同じカリキュラムをこなしているだけだし、大学受験だけの競争馬みたいに飼育されて……喜んでいるのは先生や予備校だけだよ！」

「高校だけは出ておけよ……世間が認めてくれないぜ！」

それより駿ちゃんの親父も許さねえさ！」

賢治のオヤジっぽい考えに駿介は苦笑し、

「夢ができたんだよ、俺は！……パパやママには悪いと思うよ！でも兄貴がいるから。同じタイプは二人も知らないさ！同じ大学に行って、同じように女のケツを追いまわすのは時間の無駄さ！」

「……どうするの？そんな」と言つても、食えないじゃん！」

「実はね、コックになりたいのさ！見習いで行けるところがあるさ！学歴には構わない世界さ。命がけでやる。努力して実力をこの身体に植え付ける。スポーツの世界や音楽の世界と同じだろう！学歴なんてナンセンス、料理のセンスを努力で磨いて一流になる！」

強い口調で駿介が城ヶ島の向こうに広がる外洋の海に

ボートが沿岸伝いに牽引しながらバラセールを上空に上げている。

海風を受けて赤と白、白とブルーとイエローの縞模様のバラセールが一機浮かんで、ゆっくりと駿介らのいる自艇の方に向いて動いてくる。

「鳥みた～い！乗ってみた～い！」

賢治は駿介に耳打をすると両手を広げた真由美の肩を抱いてバウデッキに移動した。

駿介は黙って頷いた。佳子と駿介のことについて話しているのか、賢治が真由美の耳に何かを囁いていた。

真由美がチラッと後部デッキの佳子を見て、すぐにデッキに腹這いになってしまった。子供がダダを捏ねるよう賢治に向かって何かを訴えているようだがエンジン音に消されでききとれない。

「ヨシのこと賢治に話したよ！」

「……ビックリするよね！駿介さんの考えていること」

「シュンって、呼んでいい！何か他人行儀だぜ……キミは俺の唯一のパートナーだよ！」

「シュン！……私の大好きなシュン！私のパートナー！……わたしも働きたいな！」

「働いて、いろいろな人に会う！人間として素晴らしい人に出会い、その人を先生として本当の勉強をするさ、……誰にも負けない社会人になろうよ、一人でさ！……海に来て良かった！見ろよ！空と海のこの広さ、小さな

目に向けて言い切った。

賢治は決意の堅い駿介の横顔を見ているしかなかった。

今まで自分が考えたこともない世界の話に新鮮な感動も湧いてきた。

「賢治！……もう、ひとつあるんだ！やがて、俺たち……佳子と結婚する。約束したんだ。仕事が一人前になつたときには！」

賢治の眼が見るまる大きく開いて口籠もつて、掌は駿介の肩を叩いている。

「賢治には感謝している。……佳子と会えたのはキミのお陰だから！」

右舷に三戸海岸が見えてきた。

砂浜は長く続いてカラフルなビーチパラソルが点在して午後の太陽に映えていた。

ジェットスキーが何台も白波を蹴散らしながら徘徊し、中には若い男女がバイクのように重なりながら操行し嬌声をあげている様子が見てとれる。

佳子と真由美もキャビンから出て夫々スターングッキの彼らの側で、その風景に見惚れていた。

小さく突き出した黒崎の鼻の半島を背にして二艘のモーターボートが見えてきた。

「すご～い！あれ！……チョー気持ちよさそうーー！」

真由美が空をみて叫んだ。

「佳子ばかり幸せになるのは嫌だよーー！」

それを見て駿介は佳子に微笑みながらキスをする。

一隻のジェットスキーが右後方から近づいて来た。

真由美は激しいショックを受けていた。

考えたこともないことだ。佳子が駿介と結婚するなんて、とんでもないと思っていた。子供のころから結婚とは母と父の関係が彼女にとっては全てだった。働く能力に欠けた父と、生活を補うためにクラブで男相手に働く母の姿を見て育った真由美には男と一緒に暮らすことは苦痛をともない、悲劇だと考え育ってきた。

三年前に母がとうとう父を追い出した。それから、しばらくすると無口な初老の男がたまに顔を見せるようになり、まもなく彼がお金を出して母に今スナックをやらせているのだ。

ところが母も、それまでより明るくなり幸せそうで、真由美もそれ以来小遣いには不自由しなくなった。結婚なんかしないほうが、むしろ楽しく暮らせるんだ、と思っていた。

それでも胸の心部では自虐的な自分に気づいてはいる。心のどこから湧いてくるのか？ 幸せな家族を眺めていると辛くなったり、温かい平穏な家庭のある佳子を知つて寂しさを感じるのはなぜ？

母の友人の娘は十六歳でクラスメイトと同棲して子供が生まれヤンママと呼ばれてテレビにも出た。結構楽しんでいる様子にジェラシーを覚えたこともある。

しかし、現実にかえると佳子に先を越されることは無いと思っていた。性体験の遅れていた佳子に、まず処女を失わせる、この性交渉だったのだ。

本音を探れば、駿介をやがて何時かの次元で真由美のモノにしたい、という彼女の願望があつたのだ。

駿介はいずれ佳子に厭まる、それまではいい。男という動物は男の為に性技をつくす女の方により魅力を発見するに違いないと、駿介の未来を見抜いていたはずだった。遠からず賢治と同じように性の為にだけ、女の相手を替えていくだろう。そのときこそ計画の第二段階としてマユは、自分の身体を張って計画を進展させる。

真由美にとって風貌とお金の両方を持ち合わせた駿介はより魅力だった。

アングラのマスメディアが無秩序に性を商品化し、それを表現の自由、選択の自由だと主張して意図的に乱性を創造してきたように、男女の思うが儘に性を自由に選択できる性風俗を真由美自身の世界でも創りあげる。真由美にとっては、そのための第一歩が体育館での合同の性交渉だったのだ。

(六)

ジェットスキーがサンタ・メルシー号の右舷に併走して来た。サングラスのゴーフルを嵌めた若いドライバーが蛇行をはじめた。

波と波がぶつかって弾ける。峰さんが警笛を鳴らして注意を呼びかけた。男はニヤッと口を曲げ、片手を挙げて挑発している。

れには成功した。

あのときの不自然な性交渉は、すぐに佳子の純情に変化を起こし自分の行為に悩み苦しむだろう。そして自暴自棄的な行為に走り狂うのが常道なのだ。

それをなだめながら少しずつ調教し、不幸を克服してきた真由美自身の性環境に順応させる。やがて不幸感の共有によって真由美の唯一の理解者となり、お互いに自由恋愛を繰り返していく内に姉妹より強い絆で結ばれるだろう。

やがて母以上のスponサーを見つけてクラブの経営をしよう、と考えていたのだ。テレビにも出る銀座の有名なママのよう。

はじめから賢治と結婚なんかするつもりは毛頭ないし、考えたこともない。

やがて、賢治には別のガールフレンドができるだろう。このことは真由美の目に見えていた。動物のようにただ溜まった精液を吹き出すためにだけ真由美的肉体を求め、そのくせ妊娠だけを恐れて女の胎外に射精する。挙句の果てに、性欲に満たされると何も真由美に与えてくれるものもない男だった。優子や慶子にもおそらく自分に対してやることと同じことだろう。女に対する誠意のなさは本能で感じられた。

いま、真由美が佳子に絡めた計略が崩れ去ろうとしている。

モーターボートの前に出ると急に左施回して左舷に出ると更に蛇行を繰り返し始めた。

蛇行によってジェットスキーがつくる横波がボートの左舷を叩いて飛沫をあげ、船が大きく揺れる。

ハウデッキの賢治と真由美がその飛沫を浴びて真由美が喚いた。

「バカ！ バカヤロー！ ふざけんなー！」

女の甲高い声に、男がステップに立ち上がり右足を上げて猫の砂撒きのよう躍飛ばす仕種で跳ねつけた。

「死んじまえー！ 死んじまえー！ お前なんかー！ チョベリーバー！ （大嫌い）」

真由美はただ叫びたかった。前のジェットスキーの無法ドライバーにもだが、いまのブルーな気分は誰でもよかつた。叫んでいると更に無性に腹がたって賢治も駿介も、そして佳子も誰もが敵に思えてきた。

峰さんが更に激しく警笛を鳴らす。

五十ヤード、右舷に一機、ヤマハのボートが通過している。パラセーリングのロープが上空に伸びてゆっくりと油壺方向に過ぎていく。

その後方にもう一機のモーターボートがヤマハを追つてきた。

前の友船だろうか？ 船名は「牡丹号」と読めたが、赤、ブルー、黄色の紋様のパラセールを上げて近づいていた。

「危ないぞ！ やめろ！ やめろ！」 駿介も怒鳴った。

事故は無謀なジェットスキーの若い男の無知から起きた。

峰さんの警告笛に反抗するように彼はサンタ・メルシイ号の左舷から右舷に横切る動作を見せた。

駿介と佳子もはらはらと見ている。

ハンドルを右に切ると同時にバイクのドライバーのように身体を海面すれすれにかたむけた。丁度その時、先に航路を抜けたヤマハの船から生まれ育った変形の横波が傾斜した彼の身体に衝撃を与えた。

彼の身体が浮き上がり、その反動でハンドルを握った手が硬直して意志とは関係なしにアクセルを回してしまった。海面を叩く激しいエンジンの噴射音が聴こえて、ジェットスキーの先端が宙に舞い彼の身体が風のようにならうに浮いた。

瞬間、牡丹号の右舷船腹に男もろ共ジェットスキーの先端から激突していった。

さらに宙に跳ね飛ばされた男は遠心力を受けて船のキャビンハウスの側面に激突して風防窓を破壊して海面に跳ね返っていた。

ガガーンと、大音響が響き牡丹号を操舵していたコックピットの船長らしい人影が消えてゆくのが見えた。

咄嗟に駿介は佳子をキャビンに押し込んだ。

峰さんはスクリューを逆回転に切り替えて左舷に舵を取りエンジンをニュートラルに落としていた。

駿介は後部デッキに返るとロープを掴んだ。

イクコードを外すことが出来ず駿介の頭上すれすれに自艇を跨いで左舷側海上にパラごと落ちていった。これが不幸な事故の始めになった。

その瞬間バラセールのメインロープが緩んで横転して

浮かんでいたジェットスキーの下を潜り抜けて気絶した無法者とを結んだセフティロープの下にもぐっていた。

これが、どんな運命を左右することになるのか、今は誰にも判断できない。

峰さんはこのエリアからの脱出を目論むとエンジンを吹かして前進しようと試みる。

が、船長の見えない牡丹号が引くバラセールのコントロールラインや無数の補助ラインロープがサンタ・メルシー号に絡まってきた。

「ロープを切ってくれ！頼む！ブレイク出来ない！」

海に落下した男はバラセールのコントロールラインに絡まつて叫んでいる。

「ナイフを投げて！」駿介が佳子に声を掛けた。手摺に食い込んだロープを手で外そうとするが牽引する牡丹号の力でロープが伸びて一本、三本とコントロールラインが絡まつてくる。

佳子はカウンターロックターのサバイバルナイフを見つけてキャビンの外に滑らせた。

「氣をつけて！シュン！」佳子には何がなんだか解らない。

「やめてくれ！こここの脱出が先だ！」峰さんが振り返り大声で叫んだ。

「無法者はアトでいい！死ぬことは無いよ！ライフジャケットを付けているから！」

ジェットスキーの男は牡丹号の船体に跳ね飛ばされて氣絶したのか海面に動かずに浮いている。海水を飲んで溺死するのではないか。

駿介は救助のためにロープを掴んで飛び込もうと考えたのだ。

「溺れているんだよ！」

「大丈夫！氣絶しているだけだ！死ねば自業自得だ！」

憎らしそうに吐き捨てた。

「それより右舷のボートに氣をつけろ！船長がみえない！」峰さんが分析する。

「衝突のショックで脳震とうを起こして倒れているんだ！」

衝撃を受けた牡丹号は激突の瞬間に左に舵を取ったままのようだ。コックピットに人影がない。舳先を海岸に向けてスクリューは動いていた。三角形に切れた船体の穴が波を吸い込みながら右に回転し始めた。

「上を見ろ！やばいよ！」賢治の声。

牡丹号が急に停止し不規則に旋回を始めたショックでバラセールのメインロープが緩んで海面を弾いた。

バラセールの男は咄嗟のできごとで緊急に身体のブレ

恐ろしいことが起きていることだけは認識できた。

駿介はコントロールラインのロープを次々と切つていった。バラの男は救われた。

メインロープは？船長は？いまだ回復していないようだ。

操船者のいない牡丹号が狂ったサメのように舳先を左右に振りながらバラの無数のラインに飲み込まれたサンタ・メルシー号を引っ張る。

いまあえて、そのメインロープを切ればコントロールを失った牡丹号は狂船となり、人とレジャー・ボートで溢れた三戸海岸の海水浴場に暴走するだろう。

峰さんもそのリスクがあるから自船で繋ぎ止めてタイミングを計っているのだ。

「ダメだ！向こうの船のエンジンを切らなきゃ！」同じ判断をした駿介が峰さんに告げる。

「俺が止めてくるから！」

「氣をつけてよ！たのもしかないな！こっちもやばいから」絡んだラインロープにぐいぐいと引かれてゆく自船の制御に峰さんは必死だ。

「シュン！氣をつけて！……」佳子はキャビンの手摺に掴まつて叫んだ。

チラッとみて微笑んだ。

活き活きとしたやさしい駿介の顔だった。

好きよ！シュン！愛しているわ！佳子は心の中に叫んでいる。

真由美は賢治の腰に抱きついたまま離れない。揺れる船の恐怖なのか、佳子の結婚に拗ねているせいなのか。

佳子は駿介だけを視界に入れていた。いま、自分はシュンのためになるなら何でもしてあげたい！何か駿介に指示されればすぐに側にいけるように自分に言い聞かせて待っていた。しかし経験の無い出来事に足の震えが止まらない。

佳子の額前の駿介は凜々しかった。パラセールの男をスタンディングデッキに引き上げる。

頭上には次々と絡んでくる細いロープが蜘蛛の糸のように見えた。

その先には暴れ狂う牡丹号の船体が見えている。赤、ブルー、黄色の布地が自船の腹壁からパルピットやキャビンハウスに掛かりはじめてピシッ、ピシッと裂けてきた。

佳子の眼に信じられない光景が飛び込んだ。

一瞬の出来事だった。

佳子は叫んだ。何回も何回も呼んだ。キャビンハウスのアンテナに引き千切れたパラシュー

トの残布が風に靡いていた。

シュン！シューン！シューン！

佳子は叫んだ。何回も何回も呼んだ。

牡丹号は浜に向かって蛇行し、暴走をしている。パラセールのロープを引きながら。

そのロープの先端に絡まった駿介の身体が浪飛沫をあげていた。

一分もまだ経ってはいないが、佳子にとつては一秒が怖い！息が止まりそう！

どうしてこんな事が起きたの？

「夢よ！これは夢よね！シュン！」
でも逃げられない目前の光景が現実に引き戻す。

駿介が牡丹号に向かうためにデッキガードを跨いだ時だった。

そのまま絶命の瞬間を迎える。その直前、息を吹き返したジェットスキーの男が船と船の間を漂う自分のジェットスキーを手繩り寄せてエンジンをかけた。

男の意識は朦朧としているのかこの危険な状況は解つた。

発信機のセットをして下さい。

「船長が倒れた！無人の船が暴れています！すでに本船の一人が飲み込まれて……緊急にヘリの手配を要請します……」

「峰さん！はやく！早く！……シュンが死んじゃうよー！」

「牡丹号は無人！救助の応援を求める！近海航行中の船舶は警戒態勢を願う、受信した船舶は海水浴場の遊客避難の対応を援助して下さい。」峰さんが無線をオーブンにして呼びかけている。

やっと牡丹号に接舷した。約五フィートだ。

「キミは操船できるか！」峰さんは駿介が引き上げたパラセールの男を大声で呼んだ。

「俺がやる！」賢治が飛び込んできた。

「私はあの船に飛び移るから、すぐにこの舵を左舷に取れ！そしてあの船からすぐ離れろ！」咄嗟の判断で、峰さんはキャビンを出ると牡丹号を目掛けて飛んだ。

左舷に加重をかけた為に、牡丹号がサンタ・メルシイ号の方に急旋回をはじめた。方向が変わってきたのだ。峰さんが指示した通り賢治は間一髪で逃げ舵を取ったから接触は免れる。

佳子は眼を海の駿介に集中した。

ロープに繋がれた駿介の身体は、ピクリともしない。網

何秒前か？直ぐに終わるよ！と、言つた駿介の笑顔が浮かぶ。

何があつたの！何が起つたというの！

峰さんの船舶緊急電話に呼びかける悲痛な声が響いている。すぐに牡丹号を追う為に舵を切り直した。

佳子には泣く余裕は無い。

「シューン！誰か助けて！助けてー！早くー、早くー」

牡丹号は浜に向かって蛇行し、暴走をしている。パラセールのロープを引きながら。

そのロープの先端に絡まった駿介の身体が浪飛沫をあげていた。

一分もまだ経つてはいないが、佳子にとつては一秒が怖い！息が止まりそう！

どうしてこんな事が起きたの？

「夢よ！これは夢よね！シュン！」

でも逃げられない目前の光景が現実に引き戻す。

駿介が牡丹号に向かうためにデッキガードを跨いだ時だった。

そのまま絶命の瞬間を迎える。その直前、息を吹き返したジェットスキーの男が船と船の間を漂う自分のジェットスキーを手繩り寄せてエンジンをかけた。

男の意識は朦朧としているのかこの危険な状況は解つた。

ていない。万一、エンジンが壊れていれば事故は発生しなかったのだが。

いきなり、メインロープを引っ掛けたままジェットスキーを発進させたために、一瞬の間にこの引力によって生じたパワーでサンタ・メルシイ号に絡んだパラシュー

トは引き千切られた。

パラシューのラインロープは蜘蛛の糸のようになつて、立ち上がった駿介の頭上を舞い、頭部から彼を飲み込むと、駿介の首に巻きついたまま海上に引き込まれ消えて行つたのだ。

「バカヤローー！何をするんだ！」その時峰さんが吼えた声が佳子の耳に焼き付いていた。一瞬の間だった。ジェットスキーは男を乗せて逃げるよう海岸に向かって行つた。

「助けてー、お願い！助けてよー！シュン！シューン！」
佳子の声が泣いているのをかき消すように、峰さんはエンジンを全開にした。

フルスピードで狂走する牡丹号を追いかける。

左舷に漁船が迫る。両船の警告笛が海上を交錯した。

この激しい警笛の音を知ると海水浴場の遊客は魚群が散るように無秩序に割れて見えた。峰さんの緊急船舶電話に応答する海上保安庁の職員の声が佳子には空しく聴こえてくる。

「海難事故の詳細と場所の確認をします……緊急救助

「シユン、死なないで！がんばってね！」

峰さんが操作したエンジンは止まつた。
すぐにロープを引いて駿介を後部デッキに引き寄せる。

操船をパラの男に任せた賢治が泳いで介抱にきた。

「シユン、シユンちゃん！」

駿介を呼ぶ、悲痛な佳子の声が響いてくる。

海上保安庁のヘリコプターが油壺の半島の上に現れた。

海上空のヘリからレスキュー隊が降りてきた。

すでに応急の回復術は峰さんの指示で始めていた。賢治は駿介の口を開いて息を吹き込み、峰さんが心臓マッサージを繰り返した。

予測もしない青白く冷たい体だった。

「おい！駿ちゃん！駿ちゃん！起きてくれ！息をするんだ！……死んじゃだめだ！早く！早く起きて！」賢治が駿介の耳に叫ぶ。

すこし顔に赤みがさしたような気もした。が、首に食い込んだラインの傷跡は、彼らを絶望的にさせていた。

サンタ・メルシイ号に立ち上がって駿介に呼びかける佳子には見せられない。

そのとき、上空から二人のレスキュー隊員が降りてきたので彼らに引き継いだのだった。

「あとはドクターにまかしてくれ！うえで待機してい

る」

「詳しいことは、マリーナ基地の無線に連絡する。そこで待機してくれ」もう一人が告げた。

駿介を担架に収容してヘリに引き上げると病院に向かって三浦半島の山並みに反転していく。

峰さんと賢治は蒼白な顔面で祈るようにそれを見送っている。

佳子も駿介の姿に祈る。ヘリに向いて両手を合わせている。

佳子の胸に次々に浮かんでくる。

優しく語る駿介の笑顔！二人を包む海の潮風！祝福してくれるカモメさん！

全てに包まれ幸せを感じていた佳子なのだ。ほんの数分前までは……。

いま、起きている、これはなに？いま、どうすればいいの？

凄まじい祈りの気迫が佳子の全身から溢れていた。

『イヤだ、イヤだ、イヤだー！こんなのがだよー！愛してる！シユン！愛してるのよ！神様！神様！神様！お願い！愛してるひとを！助けてー！

シユン！がんばるのよ！がんばって！私も後で行くよ！どこにも私をおいて行かないで！』

しかし駿介は再び戻らなかつた。

真由美がデッキを這つてにじり寄る。
佳子の肩を抱いた。真由美の瞳に陰湿な微笑が浮かんで消えた。
そのとき駿介の姿が空の青に溶けて消えていった。
『シユーン！行かないでー！いかないでー！もう少し居てー！……帰ってきてー！』

風が止まつたらしい。静かだ。静寂が時間すらも止めてしまつたような錯覚に落ちた。芦ノ湖の湖面も鏡のように白く止まつて見えた。

僕はソファーアを離れて窓の外を見ていた。長い話を終えた佳子の頬は幾筋も涙の跡で濡れている。

同じように僕の眼も濡れた。
すでに夜明けも近いのかも知れない。
時計を見るのはやめた。時間よこのまま止まれ！
『泣いても、泣いても、生まれてくるの、涙が……あれから、もう六年も経つというのに……』

『生きている証拠なんだ、ふたりの命が今も吹きだししているのかも知れない。キミの中にいる駿介くんの涙、口惜しさなのかも知れない……』

『口惜しいわ！……本当に！何もかもが』

佳子の肌に岩礁の岩陰で駿介の胸に抱かれた心臓の鼓動がよみがえる。
『ふたりで誓ったよね、これからはふたりだよ！ふたりでひとつなの！わたしたち働いて、修業して一流になるのね！もう学校もいらない、お父さんに叱られても泣かないわ、お母さんにも許してくれるまでシユンのことを話すわ！ずっとずっとシユンだけよ！神様どうかシユンを助けてください。シユンは皆を助けようとしたのよ！悪い人は他にいるのよ！無法者だって助けようとしたの、どうしてシユンが辛いめに会わなければいけないの！』

一瞬佳子は、人の悪口はいけない、人のせいにしてはいけない、と父に教えられたことを思い出す。

『ごめんなさい！神様！佳子が悪いの、だからシユンを助けてください』

その時、佳子の瞳には見えていたのだ。

ヘリの消えた青い空の中に駿介が佳子に微笑みながら答えていたのを。

『すぐに会えるさ！佳子、なにも心配しないで！俺たち結婚するんだよ！キミもオレもこの広い宇宙で自由に生かされているんだ！愛してる！佳子！あとで会いに来てね！これからのこと相談しようね！』

『シユン！シユーン！わかったよ！すぐに行くわ！病院に！まっていてね！まっていてね！』

ヘリの消えた青い空の中に駿介が佳子に微笑みながら答えていたのを。

『すぐに会えるさ！佳子、なにも心配しないで！俺たち結婚するんだよ！キミもオレもこの広い宇宙で自由に生かされているんだ！愛してる！佳子！あとで会いに来てね！これからのこと相談しようね！』

『シユン！シユーン！わかったよ！すぐに行くわ！病院に！』

『口惜しいわ！……本当に！何もかもが』

「会えたの？……最後に……放立つ前に？」

「……会えなかつた……会わして貰えなかつた……遠くから泣いて祈つただけ」

「悲しいな！……」僕はソファーに戻つて佳子を前に腰掛ける。

「でも駿介さんの、お母様がね、わたしを見つけてそつと庭の木陰に呼んで下さつて、両掌で抱いていたいたの……貴女は、まだ傷ついてはいけない人よ！これから

の人生の方が大切な人だから……解つてくださいね！母として駿介のこと私から謝るわ、ごめんなさい！ごめんなさいね！って。」

佳子は眼を潤ませて、言葉が泣いている。

「……でもあの子は、貴女のこと、愛していたのね……あの子に変わって、御礼を言わせてね！心から有難う、有難うございましたって、カエデの樹木の下でふたりして泣いたわ……」

「お母さんも、辛かっただろうな……愛する子供を失つて、お父さんもね」

僕は第二次大戦で散つた特攻隊、神風特別攻撃隊の若武者の姿を重ねていた。無駄な命を散らしたことを！僕が戦争の体験をしているわけではないが、祖父の話や映画、テレビドラマで知っているだけだ。

残された父母、愛する人の悲嘆は幾ばくのものか！

その責任、代償は誰がどう償えばいいのか！

「裁判って、こんなで良いの？」
法律が無い、という理由で正当化される。しかも弁護人も大局観なく、法意、法理の解明を避けて法庭で使う時間のはとんどを技術論争に使い、加害者の罪を救おうとする。悪人についた弁護人は悪をさらけだし、罪を償わせることを厳然と峻別しようとしていない！と、僕は思う。

「裁判って、こんなで良いの？」

法定主義は良いとしても、裁判制度のまえに、近年これを裁く判事も学生の時代から試験のための勉強ばかりで、世の中の多種多様の人間を知らない。法律の技術屋として、いきなり法廷に判事補として職業につく、さらには学閥だの人的派閥だのが蝕んで法社会を矮小化しているように感じる。広い社会での本来の正義がわからぬのか？それを解るために環境はないのか、人間の有機的な組成、機能や知識、人心の気微も解っていないよう思うのは、僕だけだろうか？

「変よね？」

「小さな機械のように杓子定期に判決を下す。人が自分の行為で人の生命を奪つて無罪とはね！社会的な影響は計り知れないものだよ！救いようの無い裁判だ！将来、悪人がもつともつとはびこるね、こんなことでは！」
「判事さんは法律家の中で一番優秀な人間ではないの？人が人を裁くんですもの！」

「その事故の張本人、ジェットスキーリの男は審判で重罪でしょう？刑務所暮らしだろう！」

佳子は両手で顔を覆つて頭を振つた。

「裁判をしたわ！わたしも証人で行つた……賢治さん、真由美も！無法者の処罰を裁判官にお願いしたわ！」

「判決は？」

「無罪、彼は刑務所に入らないの！こんなこと許される？」

「なぜ？」

「心神喪失とか……しかも未成年、……だからなにも罰が無いって！解らないわ！」

「このごろは罪を犯した人間の人権ばかりが擁護されているような判決が多いように思う。……公平ではないよな！」

死んだ人の人権は消える、と言うことからくるのか？人を殺しても大概が死刑にならない。因果応報という思想を否定したから？……被害者からすればやりきれない憤りを感じる。現代法のひずみのひとつかも知れない。

「そうよ……死んだ人、シヨンはあまりにも悲しいよね！人を死なせても罰を受けない！本当の悪人と犠牲者は誰？私たちには、はっきり解つても裁けないのね！痛ましい家族やわたしたちの気持ちは？……ただ犠牲を払うだけなの？」

「いまの時代は背後のヒトの悲しみは裁きの俎上にあたまたま僕が経験した民事事件だけど判事が業界の知識に乏しく、更にそれを理解しようとする度量もなく最低に見えた。僕が売った不動産の代金を払え、という単純な事案だが弁護士同士がああでもない、こうでもないと二年も時間をかけて、あげくに判事は判決を出さないで、和解だと調停を勧めて、判決に対する自己責任を回避しようとする意図がみえみえだった。この一例に苦い記憶がよみがえる。信頼関係で行つた商取引も、騙されたほうが激しく不利益をうけなければならない、いまの裁判官登用の不合理性と判事の無氣力を感じていた。

「正義の味方、南町奉行、大岡越前守様のような裁判官が欲しいわ……」

夢だ、そんな！でも佳子は間違つてはいない。

「学校は？……やめたの？」

僕は、この凍りつくような事件をもう少し聴きたかった。
プランナーを注いで寂しい顔をした佳子を伺う。佳子も飲みながら僕の眼に静かに答えた。

「学校は休学して……退学……勿論高校は止めるつむりだったから……」

「賢治くんって言つたっけ？……同じ？」

「それでキミは今のお店で働いてきたわけ？……」

「いいえ、それからしばらく氣力がなくて、何も出来なくて、またお母さんに迷惑かけたの……しばらくして真由美に誘われて六本木のクラブで働いたわ……お母さんに内緒で！」

「六本木？……」ふと僕のいく店を脳裏に描いた。このエリアのクラブには若い娘が多い。同じようなところか？

「もうシユンを忘れようと思ったの……つらい毎日から逃げようと思った！……でも高校の中退では、そんな場所くらいしか働く所も無かつたし、シユンが言つたよう人の出会いにかけて勉強しようと思ったの……でも私は合わなかつたわ。……あるとき真由美に中年の社長さんを紹介され、何回か食事に誘われ同伴出勤をするうちに、強引にホテルに誘われて関係を迫られたの：お金の面倒は見るから、愛人になれて！そのためには自由美に紹介料も払つたし、今更逃げられないぞ！と、脅かされたの……つらかったわ！」

僕は胸にツキンと走るものを感じた。

「汚い男だね……それは……」言いながら目をそらす。

「その夜、お店のママに相談した。……でもママに言われたわ、うちの店にはそんなことでメソメソ泣くコはいないよ！その社長を利用して稼いでちょうどいい！みんなやっているのよ、真由美を見なさい、何人もカモが付いているわ！キミと同じ日に入った美由紀だってお父さんがリストラでクビになつたせいで大変なのよ。身体売つても学校続けるってがんばっているのよ！……世の中不況なの！自分で生きるって、そんなに甘くは無いよ！……自分自身が強くなれば店もおまえも一挙両得と言うんだよ！……って」

僕は何も言えなかつた。戦慄に似た恐怖が走りぬけた。

「私は止めさせて貰つたの……真由美との友情も終わつたわ……そこで」

「いまの時代、大人も若い娘達も両方にそういうのが多いんだよ……若いコには愛人指向と言うか、言い方を変えれば援助交際なんだね！これも世の中がいびつになっている証拠だ。」

僕は分析して見た。その原因としては、所得が少なくて税金も払えない若い世代がカードだけでモノを買える、どんどん買って払えなくなるとサラ金でお金を借りる、みるとみるうちに膨大な借金を抱えて、困った挙句により高収入なソーピーで働いたり、お金もちを選んで、肉体の提供と引き替えに借金を払わせるという！結局甘い汁で

自分を正当化しながら交際をしていた僕こそ不潔なオトナの一人なのだ。

太り巨大化するのは誰だ！僕は高収益企業にのし上がつた金融企業を思い出していた。払えない世代にどんどん金を貸している。お金を計画的に使いましょう、と、C Mで流しながら高利の金を売る！

そらぞらしい！借りたお金を返せなくて困った子は、たいがい親や祖父母にねだっている。それの出来ないコは肉体を商品として売っている。貸す側も、そんなことは計算づくだろう！僕も一年前にだらしない娘のためのカバーをした。ただ親として悪流に行かせないために。正しいことが、どうだか！

僕は理屈っぽい話をしながら、自分の立場を考えて見れる。そんな社会の悪口が言えた立場か？世の中のひずみや、ゆがみの話をする今の僕は一体何者なんだろう。

僕はどういう立場で怒っているのだろうか？佳子に講釈をしているのか？二重人格の典型か？

佳子を誘い不倫関係を求めて、愛人にしたいと計画を立てたのはこの僕だ。

今まで、流れのままに数人と関係してきたし、やがて縁を見つけて結婚していった彼女たち。一体どんな気持ちで去つて行ったのだろうか？クラブやスナックで出会いを求め、それとなく背後に見えてくるその娘らの将来を危惧し、貧しい経済環境に同情して、これ以上汚れないように、とか、彼女たちの行く末に不安を抱き少しでも楽しい、清流の世界に導こうという屁理屈をつけて、

僕は戦後の自由主義を生きてきた。軍隊も知らないし宗教も確たるもののはもつてない。でも本当の自由とは何か、教わっただろか？兵隊に行かなくて良い、職業は自由に選べる、何を見るのも、何を聞いても、何を言つても拘束されることはない。

ただし、人の迷惑になることを自制していればこそだけど。

僕はその仕組みのなかで、それなりに楽しく生きてきた。

しかし先人の誰か、いまのいびつな現象を予測していくのだろうか？例え予測されていても推測されて以上に、どこかで、何かによつて、誰かに仕組まれて人の心がねじれ始めてきたのではないだろうか！变革と言う言葉の中に人の純粋な心を捻じ曲げる悪霊が隠されているのではないか？

まず僕達、子供の親がこの変革によってもたらせる異なる文化の進化の実態について教育を受けなければいけないのかも知れない。なぜなら子供の成育の課程で心中を浸蝕していくものが見えにくいし、たとえ見えたと

しても撃退してやるための正解がわからない。

いまも、子供らの身体の深淵で知らないうちにがん細胞のように浸蝕は増張している。教育者はどうしてこれを知り、教え諭すのだろうか？

いつまでも声をあげて議論だけをするつもりなのだろうか？

出口のない仕組みに取り残された若い芽が悶え、あがき伸びていく方向も解らないままに自滅してゆく。

何も知らない竹林の若竹が、え体の知れない菌に蝕まれ、彈けながら割れて死んでいくようだ。

いま、そこ此處で若竹らがはじけて、割れ、未来を絶望しながらねじれ、曲がりくねり、お互いの純粹な生命を犯しはじめている。

老竹が花をつけるとき、竹林が枯れて死ぬ前兆だと祖父に教えられた。あちらこちらで今の世で栄華をむさぼる竹林はいま、まさに若竹の犠牲のもとに悪の華を咲かせて実ろうとしているのではないか。

すぐ、そのあとに竹林の全てが死滅する運命になることすらも知らないで。

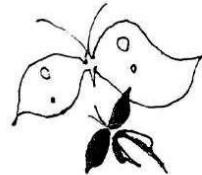
夜が明けてきた。バルコニーに来た雀たちが無邪気に飛び始めた。

僕は佳子の掌をとり、頭を下げた。

(完)

北条時宗とその時代(三)

島 津 隆 子



五、文永の役

1 戦闘の準備

文永十一年(一二七四)正月、元は日本襲来のための造船を高麗に命令した。属国高麗はいやでも命令に服さなければならず、十五日には、高麗の海辺の山々でその作業に着手する。

いつの時代でも、命令する者はいつも簡単であり、命令じられる立場は苦しい。この場合も同じ図式だ。

何度も日本に使者を送った蒙古は、いつも高麗に命じて案内人と資金を提供させ、結果、文句ばかりを食らわせる。反抗は国の滅亡を意味するから、高麗はどんな無理難題も呑むことになる。

高麗の服属をよいことに、元は日本遠征計画を安易に考え過ぎていた。ここには、フビライ西方遠征のときの

緻密さは微塵もないのだ。

日本偵察も効果があったとは言えない。ただ単に、入れ替わり立ち代わり使者が往復を繰り返すだけであり、誰ひとり京に上った者もいなかつた。唯一、日本人は人殺しを好む野蛮な国ということだが、元にとつての情報である。

その時の日本を牛耳るのは鎌倉幕府であり、朝廷と幕府が対蒙古に関しては密に連携していることも知らない。まして、愛國心に燃える日蓮のような傑僧が、人々を教化していることも。

ここ数年間かけて、日本が沿岸の防備と兵の結集を計画していることも知らないのだ。無謀といえば無謀きわまりないことがある。

しかし、高麗に申し付けた二百人乗りの千科舟、高速船バートル、軽疾舟、補給船の吸水小舟、各々三百艘ずつ、

一 社 告 (内規)

☆ 同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎しております。

「まんじ」は作品発表のための共有の(ひろば)として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせつかくのお申出でがあり、誌友として維持会員になつていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なつております。

* 同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座 〇〇二七〇一〇一六四五九二
加入者名 ま ん じ

合計九百艘が、六月半ばには造船し終った。いずれもご粗末な造りの舟である。

（フビライから日本遠征を命じられている一人の将軍、忻都と洪茶丘の率いる五千の屯田軍。さらに新たに加えられた兵一万五千と高麗軍六千、合計二万六千の兵士も集められた。）

その他、船員、船中の雑役夫、漕手など六千七百人が高麗から差し出されて戦闘態勢は整った。これらを指揮する総司令官・都元帥はモンゴル人の忻都である。高麗人の洪茶丘は右副元帥。メンゲ・ハーンの西域遠征に功のあった中国人劉復亨が左副元帥となつた。

しかし、いよいよ征東軍の出発が間近に迫った六月十八日、高麗国王元宗が薨去したので、その子が即位して忠烈王となつた。

忠烈王はフビライの娘クツルガイミシと結婚したばかりである。この凶事のために、元の征東軍出発の予定は大幅に遅れたが、

十月三日、日本に向けて高麗の合浦を出帆したのである。

十月五日の早朝、対馬の国府（現在の巖原か）にある八幡宮の辺りに大きな炎が上がり、早起きの漁民たちをて叫んだのだ。

「異国の船に聞き申す。何の子細があつてこの島に押し寄せたのか、その訳を承りたい！」
だが、船からは答えがない。
それどころか、七〇八艘の船から矢が放たれ、それが合団とばかりに、一千人ほどの兵士が船から降りて上陸してきた。そして、密集隊形をつくると助国陣営に向けて一斉に矢を射てきたのだ。

助国の兵士も負けじと矢を射て応戦したが、敵の数の方が圧倒的に多く、先鋒部隊を打ち破つても、次から次へと新手の兵士が群となって襲いかかってくる。それを押し返しても、雲霞（うんか）のような敵兵が猛烈な勢いで攻めかかる。一族郎党を引き連れ、日本國の盾になるのだ）
（そうだ、命を賭して、この対馬で敵軍を食い止めようぞ。一族郎党を引き連れ、日本國の盾になるのだ）
この離島の島守りの心にふつぶつと湧いてくる、己を捨てた愛国心と犠牲心は、何によつて培われたものだろ
うか。

驚かせた。たちまち宮の社殿は群衆に取り巻かれたが、不思議なことに、そこにはいつもと変わらない静かな社殿のたたずまいがあるばかりだ。

人々は幻影をみたのだろうか。

「妙なことがあるものよ。これはきっと、何か神のお告げではあるまいか」

「あの蒙古軍襲来の前兆であろうか」

不安を隠しきれない人々は、そこから去ろうともせずに立尽くす。そこへ、大勢の人々が息せききて駆けつけ来た。

人々に何かわめいているようだ。

「蒙古が來たぞ」

と叫ぶと、八幡宮の後の山を指さす。

「浜は危ねえ。山へ逃げろッ！」

人々は雪崩るように山を目指した。

その日の午後、対馬の西の沖合は一面、元の軍船で覆われつくし、午後四時ごろ、船団は佐須浦（現在の小茂田海岸）に近づいたのである。

島民のある者は国府の守護所に駆け込み、急使は国府地頭の館に走った。対馬の地頭・宗助国が、その子・右馬二郎と八十余騎を率いて国府を立ったのは午後六時頃だったろうか。

山越えをして佐須浦に着いたのは、夜中になつてからであった。

先祖伝来のものか、風土が生んだものか、これがもし大和魂というもののなら、いくら時間をかけても、培養是不可能だ。それは、その一瞬に咲いた“幻花”だったのかもしれない。

しかし、敵に多大な損傷を与えたものの、味方は一人、二人と倒れてゆく。最早、勝敗は明らかであつた。矢種もつき、弓を捨てた助国は、大刀をふりかぶつて敵兵の真っ直中に斬り込んでゆく。その勢いに氣を削がれた敵兵は、ずるずると波打際に後退した。

その時、血飛沫に赤く染まった右馬二郎が父・助国のに伝える。

右馬二郎もよく戦い、葦毛の馬に乗つて真っ先に駆けて来た敵の大将とおぼしき者を馬から射落したが、自らもまた、取り廻まれた敵兵から深手を負つてしまつたのだ。

そして、右馬二郎は、助国の娘婿の弥次郎が、敵の群れに斬り込み、最期を遂げたことを父に報告した。

（父上、あそこに戦つております小桜総（さくらおう）の鎧が小太郎、萌黄総（もえうおう）が兵衛次郎にござります。一族の者、見事に戦つております）
（あの二人に、ここを脱出して、太宰府にこのことを急報するように伝えるのじゃ。頼んだぞ、右馬二郎）
これが親子の、この世での見納めであった。

二三時間ほどの戦闘であったろうか。

大将・助国の後を追うように右馬二郎が戦死し、一族郎党と、庄太郎入道、肥後国御家人・田井藤三郎など十二人が討死して佐須浦に散った。助国の防御軍は完全に敗退したのである。

勝ち誇った元の兵士らは各舟から島に上陸し、部落に入ると、民家に火をかけて焼きはらうという暴挙に出たのだ。

島守りの助国亡き今、対馬全島は元軍の支配下に置かれた。

だが、助国から最後の命令を受けた小太郎と兵衛次郎の二人は、敵兵の監視の届かない東海岸から、密かに博多に向けて早舟を出した。

3 壱岐島の戦い

この二人の報告を聞いた太宰府の鎮西守護所には、とうとう来るべき時が来たと、極度の緊張が走った。

少弐經資は九州全土の守護地頭に出動命令を下し、京都の六波羅探題に急を知らせる使者を走らせた。その早馬が京に着いたのは、なんと、十二日後の十七日にもなつたのである。その六波羅から鎌倉に急使がもたらされた。

文永五年（一二六八）以来、いつかは必ず来るものと覚悟していた蒙古来寇が現実となつて、すでに対馬が敵の手中に墜ちているという報告である。それを聞いた血

の氣の多い頼綱は、例によつて、もう一時も猶予できない心境になつてゐる。

「執権殿、対馬を占領した元軍は、次に壱岐を襲うであります。そして、間もなく九州にも迫ります。一刻も早く、出陣命令をお出しください」

時宗は使者に命令する。

「かねてより合戦の用意はできており。敵の軍勢四万なら、九州勢だけで打ち破れ。敵は博多に押寄せようが、沿岸の防備をかため、一步たりとも上陸させてはならぬ。日を経れば敵は食糧が尽き、兵士の氣力も失せようぞ。そこへ斬り込んで、撃滅させよと、少弐に伝えるがよい」栗毛の駿馬にまたがった使者たちは、来た道、五百里（二千キロ）の道程を引き返すべく、再び九州太宰府へとひた走つたのである。

「頼綱、戦はただ戦つて勝てばよいというものではない。なるべくなら武力の衝突は避けるべきである。権力争奪のための戦なら、死のうと生きようと、その者たちの都合でする鬭いであろう。だが、何の罪もない人民を、闘いに巻き込んで死傷させるのは罪悪だと、このわしは考えるのじゃ。元国は軍を編成して、罪科のない島民の住む平和な島を襲つた。何故だ。自國の利益ばかりをむさぼろうとするのか、いや、獸のよくな荒々しい侵略の血が騒ぐのか。当然、島民は戦の災難を被つてゐるにちがいあるまい。それが許せないのじゃ。島の者たちがどん

（ああ、何としたことじや。われらの壱岐島は、完全に元の兵士どもに占拠されてしまつた）

「頼綱の考えは短絡に過ぎました。お許しくだされ。たしかに、島民が何事もなく、無事でいるなどとは、甘い考えにござります」

「だが、降り懸かる火の粉は払わなければならない。いまこそ、心を一つにして、国難に立ち向かうときぞ」

対馬占領から九日後の十四日、午後四時頃、元の船隊は壱岐島の西海岸にその姿を現した。海岸に着けた先頭の敵船二艘から四〇五百人の兵士が上陸すると、城をめがけて押寄せてときの声をあげた。

壱岐島の守護代平景隆は、わずか百余騎を率いて、城門に攻め寄せてくる敵を待つ。そして、一斉に矢を浴せた。さすがの敵兵も、矢の雨に一瞬ひるんだかに見えるが、次から次に加わる新手の兵士によつて、その勢いを盛りかえすのである。

景隆はじりじりと追い込まれる味方の軍を城門の中に退かせると、城門を堅く閉じたのだ。

こうして、城の内と外に對峙したまま夜を迎えた。

十五日の早朝、城楼から海につづく有様を眺めた景隆は息を呑む。城は元軍によつて十重二十重に取り囲まれ、その先には元の旗をたたかせた夥しい数の船が、海を埋めつくしているではないか。

その後の悲惨のさまがわずかに伝わつてゐる。

「島の百姓の男は、殺されたり、生捕りにされたりした。女は集められ、掌に穴をあけ、綱を通されて、船に結いつけられたり、生捕りにされたりした。生き残つた者は一人もいなかつた」と。

そして、それは両島とも同じ状況であつた。

ひとたび戦争になれば、人間本来の獸性がむきだしになるのは、古今東西を問わず、ことさら驚くにはあらない。

破壊と殺戮の歴史は、蒙古にのみ見られることではないが、止まるところを知らないその残酷性は、聞く者の耳にはいつも新しく悲痛に響く。

主君・景隆からの命で、なんとか血路を開き、舟で島を脱出した宗三郎が、博多の太宰府に着き、壱岐島全滅の報をもたらしたのは十八日。京都に伝えられたのは二十八日になっていた。

対馬につづき壱岐島から、命からがらの注進であった。報告を受ける太宰府の衝撃は深いが、その頃には九州各地から、軍兵が博多に集結してきていた。

鎮西守護の少弐經資、その弟・景資を筆頭に、豊後からは大友頼泰、戸次頼秀。肥後からは菊池武房、竹崎季長。肥前からは龍造寺、大村有馬など。その他松浦党の兵どもも。薩摩からは島津久経が身内の者を率いて馳せ参じたのである。

鎧・兜に身を固めた総勢四千騎が、くつきりと定紋の浮き出た各々の旗差物を押し立て、手ぐすねを引いて部署についた。

やがて、敵兵を鳥飼瀬まで追つめ、とうとう敵船に退却させた。だが、ここで、旗持の資安も、季長も、姉婿の三井資長も重傷を負ったうえ、敵の毒矢に射られた馬から落ちてしまったのだ。

しかし、不死身の季長たちは、駆けつけた白石通泰の後援部隊に助けられ、ともに、あくまで敵陣に肉薄して武勲を挙げたのである。

竹崎季長は、この先懸に先立ち景資に会った。そして、

「これから出陣いたす。かならずや敵に大打撃をあたえる働きをして帰還いたしますゆえ、その時は武勲のご披露をお願い申す」

と戦功確認の保証を受けていたのだ。

ということは、武士たちがいかに戦後の論功行賞を楽しみに戦ったかを物語っている。

この時である。

黒煙が晴れると、敵軍ははるか向うで陣容を立て直し、敵兵はその黒煙の中に姿をくらましてしまった。

武器を用いた新しい戦法である。

大音響とともに火花が散ると、黒煙が立ち込めて、敵

陣太鼓を鳴らしながら、矢を射ては挑発してくるのだ。

当時、歐州などでは実戦で使われていた戦法らしいが、これを元が真似たものとみられる。

味方の将兵は、初めて見るこの光景に大いに戸惑い、

4 決戦・博多湾
十九日午前八時頃であった。

博多湾の遙かかなたの洋上に、突如として元の黒い船団が現れた。海から襲いかかってくるような威圧的な迫力である。

九百艘の船団は幾手にも分れると、一方は博多湾の西の入り口である今津の浜に進み、一方は東の博多・箱崎を目指して進んだ。その中間に広がる百道原にも侵入路をとった。

二十日の早朝にはこの三ヶ所から上陸を開始する。

百道原から上陸した敵将金方慶は八千の兵士を率いて、

龜原山、赤坂の高地を真っ先に占領してしまった。

肥後の菊池武房は、たった百騎で赤坂の高地に斬り込み、敵兵を龜原山に追い、太刀と薙刀に首二つをさして意氣揚々と帰陣する途中であった。

その隊列の中に菊池の勇姿をみた肥後国の御家人・竹崎季長は、（おおっ、首を二つも打ち取ったか、うらやましい御仁よ。このわしとて、戦の恩賞に再起の命運がかかるておるのじゃ、ああ、心が逸るわい）

と心中、大いに期するものがあった。

この日、季長は大将・少弐景資から合戦の命令を受け、先懸をするべく主従六騎で赤坂の敵陣に向っているところだった。

そして、龜原の敵中に勇猛に斬り込んでいった。

悩まされたが、ここで怯んではいられない。

博多方面で指揮をとって闘っていた少弐景資は、十四・五騎の騎兵将校と七十名の歩兵を率いて、突撃をしてきた敵を迎へ討とうと身構えた。

先頭には身の丈七尺（二メートル余）もありそうな大男が、赤色の皮胴を巻き、腹のあたりまである長い髭をなびかせ、革毛の馬に乗っている。どうみても元の大將の風体である。

相手も景資を大将と見て取り、一騎打ちを迫るように追いすがる。（ようしつ、相手に不足はないわい）

とばかりに、景資はえびらから刺股の鋭い矢を取ると、弓弦につがえた。狙いを定めた矢は、ひょうーと唸りながら、敵将の太腿にざくりとつき刺さったのである。

敵将は竿立ちになった馬から、もんどり打って落馬した。

だが、大将の負傷で意氣消沈した部下に抱きかかえられ、慌てて逃亡していった。

この敵将こそ、元軍の左副元副元帥・劉復亨であつたという。

こうして、両軍にとつて最も長い一日が暮れようとした。

踏み散らされた山野も人馬の屍も、ようやく暮色に包まれてしまった。生き残った兵士たちは、朝からつづいた激戦に疲れ切った。元の兵士たちは海上の軍船に引き上げてゆき、味方の兵士たちは、太宰府の拠点である水城城に集ってゆき、戦闘の第一日目は終ったのである。元軍はどうして軍船に戻ったのだろうか。

左副元帥・劉復亨の負傷によって、各指揮官を呼集して作戦会議を開くことにでもなったのだろうか。

総括すれば、この日の戦いは日本軍にとって、苦戦であった。

モンゴル軍、高麗軍、漢人軍から成る元軍の指揮者は騎馬兵だったが、兵隊たちは軽快な武装をした歩兵であった。長い槍と弓矢を持った日本の騎馬武者は、その歩兵集團に取り囲まれてしまい、圧倒的に不利であった。結果、生け捕りにされたり、捕まって殺されたりした日本の武者が多数出た。

しかも、太鼓を叩いたり、銅鑼を鳴らして意氣を鼓舞するので、日本の馬が驚いたり怯えたりして、調教に苦心させられた。

武器に至っては、絶対に日本が劣っている。

元軍の弓矢の特徴は短くてよく飛び、射程二百五十メートルにも及ぶのだ。矢尻には毒が塗られているので、矢傷が浅くても受けたダメージが大きくて、日本の兵士たちは悩まされた。

によって、朱塗りの唐櫃に納められ、波多宿禰、權大宮司・大神元忠とわずかな神官に守られて、宮を後にした。

軍神である御神体は三里（十二キロメートル）ばかり離れた糟屋郡・宇美村に移されて、そこの社殿に納められたという。

そして、間もなく宮崎八幡宮は焼け落ちた。

5 暴風雨の到来

その真夜中、玄海灘から豪雨とともに烈風が吹き込み、陸も海も暴風雨に見舞われたのである。

水城に終結し、各陣屋に立籠もった兵士と馬たち、そして、宮崎宮から散っていた人々をはじめ、息をひそめる村人たちは、突然のすさまじい風雨の襲来で寝入りばなをたき起された。

しかし、この地方ではよくある自然現象である。じっとやり過ごすしか手のないことはわかりきっている。

だが、驚愕したのは、船中で仮寝の夢を破られた元軍の兵士たちであった。

風の唸りと、うねり狂う波浪と、叩きつける雨足とが、情け容赦なく、粗製濫造の船を木の葉のように弄ぶ。まるでこぼれ落ちるように波にのまれる兵士、解体された船とともに海に投げ出される兵士たちの阿鼻叫喚は、さ

また、火薬を使った鉄砲は、日本兵が初めて見た驚異の武器である。手榴弾のようなものともいわれるが、火繩に点火して飛ばすと、空中で爆発し、閃光と轟音が人馬の肝を冷すのである。この戦況は、『博多、宮崎を打ち捨てて、大勢は、一日の合戦に耐えかねて、水城に落ち籠つたのが口惜しい』と描写されてもいる。

劣勢な日本軍は、また、明日をどう闘おうとするのか。

その夜、箱崎博多付近の眠れない多くの人民は、避難民となって宮崎八幡宮の境内に参集してきた。

今はもう日本軍の有利を信じる人は誰もない。

集まる情報は不利な戦況ばかりを伝えて、人々の顔は一様に蒼白で、みな、無口になり、闇の中に立尽くしていた。

この時、底慣れぬ闇のそこそこから火の手が挙がり、炎が夜空を焦がしはじめたのだ。

「火事だ」

「暴徒が火を放ったのか。敵か、味方か？」

人々は八幡宮の境内にもじつとしていることができず、悲鳴をあげながら、どこへともなく四散していく。

その時、冷たい雨もよい風が境内の松の枝を吹きぬけ、人々を追いたてるように流れた。

やがて、この宮崎宮の御神体も大宮司・波多宿禰の手

ながら地獄絵である。

こうして、元のほとんどの船と兵士たちは、恨みの藻屑となつて一夜のうちに闇の海底に沈んだ。

その暴風雨の荒れ狂う闇のただ中に、海の方を眺めて、すつくと立つ独りの武将がいた。日本軍の総指揮官少弐經資である。

深い闇の底に沈んだ世界は、経資がどんなに目をこらしても何も見えない。だが、全身びしょ濡れになりながら、太刀の柄を握りしめた経資は心に叫ぶ。（もうこれ以上、無意味な殺戮を繰り返したくない。

もしもあるのなら、人間を狂わす侵略の魔性よ。この自然の猛威の中に消えろ、消えろ！

わしが両足を踏ん張って立つかぎり、この大地は微動だにしない。だが、海上の船は木つ端微塵か。そうなら、この暴風雨は自然がもたらした僥倖といふべきか？）

東の空が白みはじめる頃、次第に風雨はおさまり、あの修羅の世界は夢か幻のごとくかき消えて、海は静かになつた。

だが、戦の殘滓のように浅瀬に難破した元軍の船からは、降参した敗残兵が引き摺り出され、功名の証に、日本兵によって首をかかれたのである。

これを世に文永の役という。

6 戦いの功罪

さて、功名といえば、先に竹崎季長の戦いざまを記したが、その後、季長の武勲は報われたのだろうか。戦が終ってから、戦功の報告者である守護・少弐經資（景資の兄）は、季長の働きを幕府に報告してくれなかつた。半年たつても季長のもとに恩賞の知らせはなかつたのだ。

一門内部で所領争いをして、孤立を余儀なくされた季長は、このとき無足に陥つていた。だからこそ、季長はこれを機会に功名を挙げて、無足の身から抜け出そうと必死だったのである。

恩賞からはずされて、憤懣やるかたない季長は、一門の者たちの賛成を得られないまま、馬具などを売つて旅銀を作つた。そして、建治元年六月始め、直訴をするため竹崎（熊本県下益城郡豊福村竹崎）を発つて鎌倉をめざした。

八月半ば鎌倉に着いた季長は、幕府の奉行所に訴え出たが、誰も取り合つてはくれなかつた。

（こうまでも聞き届けられないならば、いっそ出家して、くそ面白くもない世を捨ててしまおうか）

季長の心境はお先真つ暗であつた。だが、十月三日、恩沢奉行の秋田城介（安達泰盛）に面接がかなつたのである。まさに“地獄で仏”とはこのことだ。

この時、高麗の左指揮官金侁は水死した。

また、元軍の戦死、溺死者は一万三千五百人を数えたと伝わるが、かろうじて命拾いした者たちは、一ヶ月余もかかつて、十一月二十七日、船出した合浦に帰り着いた。

忻都、洪茶丘、劉復亨らが元に辿り着いたのは、年を越した一月初旬であったという。

この侵略戦がどれほどの益をもたらしたというのだろうか。

元の、高麗の、漢の多くの民が徵兵され、異国に運ばれ、侵略という魔力の餌食となつて海底に死んだ。

とくに、長い間、服従を強いられてきた高麗の膨大な軍事的、人的負担の結果としては、あまりに大きな犠牲としか言いようがない。

日本でも二つの島で平和に暮らしていた島民のほとんどが、この魔力の犠牲となり、昨日の戦でも多くの命を散らした。そして、その犠牲者たちは怒り、嘆き、絶望さえも、独りずつの肩に背負つて、死んでゆくより術がなかつたのだ。

やりきれない愚かな歴史の反復である。

だが、権力者たちにとれどうだつたのだろう。まず、元のフビライにすれば、これは予期せぬ大風雨のなせる業であつて、敗退とは考えなかつた。

安達泰盛といえば、時宗夫人の父親がわりの実兄である。もちろん幕府の支柱ともいうべき実力者だ。

季長は戦の模様と自身の戦いぶりを子細に語つた。

「偽りなら、武者である私めが、何でここまでまかり出ましようぞ」

十一月一日、泰盛の館に召し出された季長は、泰盛からじきじきの下文を頂戴し、勲功の賞として竹崎に近い海東郷地頭職を与えられたのである。

その上、馬と鞍まで頂戴して感激ひとしおの季長は、泰盛に大事ある場合は先懸となることを深く心底に誓つた。

翌年一月四日、竹崎に帰つた季長が、その足で、与えられた海東郷に入つたことはいうまでもない。

文永の役で恩賞にあづかつた者は百二十余人いたが、関東下文をあたえられたのは、季長ただ一人であつた。

季長“もつ以て瞑すべし”である。

後年、出家した季長は絵師に命じて、安達泰盛、その子盛宗、少弐景資などを絵巻に描かせて、それを、海東郷の甲佐大明神に奉納したのだ。

『蒙古襲来絵詞』または『竹崎季長絵詞』として今日

まで残り、元寇の役の様子を雄弁に語つてくれている。

話をもとに戻そう。

現に対馬も奄岐も占領したではないか。そして、博多にも上陸して、戦いは有利に進められていたのだ。翌日も、勝ち軍はつづくはずであった。

奢るフビライは、こんなことで挫折する柔な精神の持主ではなかつた。早速、本国と高麗に向か、日本再征の計画を発する。

「兵、二十万を輸送する軍船を造れ。東海の小国、何するものぞ」

といきまくのである。

一方、日本では、少弐から大命を受けた牛塚小弥太の早馬により、元軍敗退の報告は、京都の朝廷と鎌倉の時宗のもとにもたらされた。

しかし、その時間差はあまりに大きくて、京都に知らされたのが十一月六日、時宗の耳に入るのは、もう少し時間が経つてからのことであつた。

この元軍來襲は、時宗を頂点とする幕府にとれば、外敵からの防備を詔い文句に、いっそその支配体制を強化する契機になつた。

事実、北条氏は九州地方のほとんどの守護職を掌握し、それまで介入しない方針であつた西国の本所領（貴族や社寺領）から、軍事費の徴収や、その領土内の武士や農民の徵発を行うようになった。つまり、元の來襲は期せずして、幕府体制の強化と充実に寄与したともいえるのである。

六、元寇の余波

1 新たな使者

文永の役の翌年春、御宇多天皇の即位とともに「建治」と改元される。その建治元年（一二七五）四月、またもや元から宣諭日本使と呼ばれる一行九名が派遣された。

宣諭日本使とは、朝貢、つまり元国に隸属して貢ぎ物を献じて服従するよう、日本に論すことを任務づけられた使者である。

モンゴル人の三十四歳の杜世忠とせいちゅうと漢人の三十八歳の何文かぶん著に、高麗王が案内人としてつけた徐贊じょさんと上佐じょうさらであつた。

蒙古・高麗の使者はフビライからの国書を持って、これまでに五度やつてきた。最初の時だけは朝廷も返書を出さないことにしたが、以後は返書を出すべきとした。しかし、幕府は朝廷の意向を無視して、返書もなく使者を追い帰してきた。

これは明らかに、朝廷が伝統的に持つ外交権を得宗・時宗の権力が奪つたことを意味するが、同時に、これでは外交の礼儀にはずれているといわれても仕方ないことである。

時宗は、なぜこうまで強硬な姿勢を示したのだろうか。

それは内外に、幕府の專制集権政策を誇示するためであつた。
朝廷の外交方針に同調したり、蒙古に柔軟な対応を見せることで、少しでも幕府の権威を損なってはならなかつた。

それには、時宗始め幕府の人たちが持つている禅の思想も大きく影響を与えていたが、これはもう少し後で記すことになる。

忻都や洪茶丘らがほうほうの体で元に帰り着いてからまだ一ヶ月しか経っていないのに、もう新たな使者を送つてよこすフビライの灰汁あくの強いやり方と、幕府の強い危機感が激しくぶつかり合うのは当然の成り行きであつた。が、幕府はあくまで強硬な構えをみせる。

四月十五日、杜世忠らは九州を避けて長門（山口県）の西海岸室津（豊浦町）に来た。

この通報を受けた少弐經資は怒つて、杜世忠らを直ちに太宰府に護送させて厳重な監視下に置いたまま、鎌倉に急報したのである。

しかし、知らせを聞いた時宗は、何の指示もあたえず、四ヶ月が経つた八月中旬に、使者を太宰府につかわした。そして、「元の使者を鎌倉へ連れて参れ」というのだ。

当然、これまでのように使者を元に追い帰すものと思っていた少弐は、時宗のこの意外なお達しに驚いたが、護衛の武士をつけて、杜世忠一行を鎌倉に送ったのである。

「いよいよ、将軍に謁見が叶うにちがいない。かならずわが國への服属を説き、自分たちが帯びてきた使命を達成しなければならない」

使者たちは自信と期待に胸を躍らせながらも、初めて見る異国の地形や風景の観察を怠ることがなかつた。

重臣の一人が言葉を添える。

「京都の御所に満一のことでもございましたなら。それに使者には敵意もなく、修好のために来日したやもしれませぬ。いきなり使者を斬るは、國家間の礼儀にもものりましよう」

「たつた五名の使者を斬つたことで、後の世まで、執権殿の名折れにでもなりますれば、それは日本国の大名誉毀損ひそんでもござりまする」

時宗は、そんなことは、今までに考えすぎるほど考えたことだと言わぬばかりに、余裕の面持ちを見せる。

「そうなつたら、御所の御二方に、鎌倉に御幸を願い奉る所存じゃ。しかし、今まで何度も博多から上陸をした使者が、今回、長門の浜に船を着けたというは、去年の合戦のおりの不都合を考え、もっと船を着けるに都合のよい港を探しに来たとは言えまい。船を廻してあちこちの地形を調べ、長門の室津に狙いをつけて停泊したのであろう。その方が京都にもずっと近い。修好のために來たのではないはずじゃ」

時宗は、使者の目的は、わが国の地形を調査し、国内情を探り、国力を計って、再征の作戦をたてるための密偵の役目だと踏んだ。

「ならば、生かして帰ることはできぬ。再び、国王にこのような使者を送らせないためにもじや」

「だが、従者まで斬ることは非道である。頼綱よ、四

人の者には、日本の真意を伝えて元に帰せ。五人は斬れ。それで後の世の者が、時宗は卑怯者よと言うならば、その謂うにまかせよ」

時宗の腹は決つたのである。

建治元年（一二七五）九月七日、杜世忠ら五名の使者は、鎌倉滝の口の刑場に引き出されて、斬罪に処する旨を宣告された。

思いもよらない処断に、一瞬、杜世忠らは動搖を隠せなかつたが、やがて事情を理解すると、さすがに落着きを取り戻した。

そして、検視の役人から筆紙をもらうと、杜世忠は辞世の詩をしたため、從容として首の座についたのである。

門を出でて妻子、寒衣を贈り

問う、わが西行いく日にして帰る

来る時、かりそめにも黄金の印を佩し

蘇秦を見て機に下らざること莫れど

（榮達を夢みて、ほどよい頃合を見失うことがないようにならぬ無事で帰って来てほしいと、妻子があれほど言っていたのに。王の寵愛を妬まれて殺された蘇秦の二の舞いになってしまった）

敢えてフビライの国使を滝の口に斬り捨てたからには、元の再度来襲は避けられまい。

時宗は建治一年（一二七五）十一月、筑紫探題に北条実政を、次いで翌年一月、長門の守護に北条宗頼を、建治三年（一二七七）七月、筑後の守護には北条時村を、その他、九州、裏日本のほとんどの守護に北条一族を配置して、その防衛力を統率したのである。

そして、十一月、時宗は弱冠十七歳の北条実政に、異国への逆襲の使命を与えて九州へ送り出した。

「明春、四月を期し、大宰府の少弐經資を総司令官として、敵国に逆襲せよ。そのための準備を進めるべし」

「敵国といいますのは……」

「高麗國である。高麗はいつも元の案内役をして来る。造船をするのも、援軍を出すのも、元の属国である高麗國じゃ。とりあえず、この高麗を征伐したならば、元は手をこまねいて傍観をきめこむわけにはゆくまい。つまり、それが元国をも苦しめることになるのじゃ」

実政は少弐經資にこの旨を伝える。

この命令は直ちに全九州の諸豪族、安芸国の御家人のもとに飛んだ。そして、三月二十日までに、動員でき得る兵隊の名、年齢、武具、船舶から櫓の数、さらには水手、舵取りなどまでの、かなり詳細な報告書の提出を申しわたされたのである。

しかも、四月中旬までにこれらの兵力を博多へ集結す

禅の心得のある何文著も偈を遺した。

「四大、元主なく
五蘊ことごとく皆空なり
両国生靈の苦
今日秋風を斬る

（一切の万物も自分の身も心も、ことごとく空である。いま二つの國の人民の魂の苦惱から、わたしの首が斬られようとしているが、それはまるで秋風を斬るのと同じく、空である）と。

「国王が白羽の矢を立てて、わが国に遣わした者たちだけあって、立派な最期でござりました」

「ねんごろに葬り、手厚く弔うように采配いたせよ。彼らも元の国にとれば、忠節の士であったのじゃ」

時宗の命によって、五人の骸はこの地の常立寺に葬られた。

ちなみに彼らの持ってきた宣諭の書状が朝廷に見せられたのは、翌月になってからであった。

3 石築地の防備

幕府の決意を内外に示し、国内の團結を固めるために、

るようにとっていたのだ。

これだけ現実的な要求を示されると、色良い返答には限りがある。しかも、この頃、ノビライは中国各地に南宋の義勇軍を打ち破り、すでに支那統一の見通しがついていた。そして、次はその精銳部隊を日本の攻撃に向こうとしている、という情報が入った。

時宗は勢力を外攻と守備に二分することの愚を避けて、結局、

「主力を守備にそそぎ、できるかぎり防備を固めよ」と命令を変更したのである。

このように、幕府の方針が防衛一方に変つたので、はじめ、今津長浜から博多湾を挟んで箱崎までの防壁構築の予定だったのが、

「こうなつたら、一人の敵兵も上陸させないことが肝心である」

ということになり、さらに距離を延ばして、堅牢な石

壁が築かれることになった。

石壁の長さは宗像郡の勝浦まで二十五里十四町（約百キロ）である。この工事は建治二年（一二七六）三月から始めて、八月にはほぼ竣工した。

まず高さ二メートルほどの土壁の上に石畳を築く。地上の高さは三メートルから五メートルほどもあり、海側には大きな石を積んで急な傾斜とし、陸側には小石をつめて、ゆるやかな斜面とした。

防壁の上は二頭の馬が並んで走れるほどの幅がある。交戦のときは防壁の上から敵を見下ろして射撃をし、下では敵から身を隠して休息できるようにならされたのだ。

「この工事の負担を要害石築地役」という。

「各々がその分担区域だけを責任をもって引受け、みんな一齊に築造にとりかかれば、意外と完成は早いはずであろう」

という時宗の計画に従い、石築地の区域は国ごとに割り当てられた。そして、労役や費用の負担は御家人、非後家人を問わず、田地の広さに応じて、すべての領主に割り当てられていった。

「博多湾内の島々には岩山が沢山ござりますので、運ぶのに都合のよい大きさに岩を切り出して、その岩を積み上げたらよろしかろうと存じます」

という宿老の意見に、時宗は大きく頷いて満足げである。また、

「それで海上からの上陸は防げましようが、前回には小舟に乗り移り、河をさかのぼって侵入をくわだてた敵兵もあったやに聞いておりますが……」

「それならば川口に乱杭を立てて、小舟が入れないよう

にすればよいではないか」

という意見に、しばらく沈黙がつづいたが、時宗の、

「それなら、領内の武士や土民が動員され、岩山から採

ういであろう。ゆえに告ぐ」

それは宋の旧臣として、元への服属を日本に勧告する文面であった。

牒状はいつものように鎌倉に届けられ、朝廷に廻された。

「この者たちを國に帰したなら、わが國の防備を知られてしまふぞ」

時宗の腹は最初から決まっていた。

「斬れ！」

の一言で、全員の首は博多で刎ねられたのである。

4 蘭渓道隆の死

このように外国との間がますます騒がしさを増す弘安元年（一二七八）、建長寺開山・蘭渓道隆が没した。

父・時頼時代からの禅師道隆は、時宗が幼少時から指導を受けた師匠であった。

その道隆を喪った時宗の心の痛手を埋めたのは、時宗が十九歳の時から崇拝して教養面でも大きな影響を受けっていた、宋国の仏源禅師であった。この仏源禅師が時宗に進言するのだ。

「私が来日してから長い年月が経ち、その間に中国も目まぐるしく変っております。この際、新しい師を迎えて、中国の情勢を知る必要がございましょう。宋に請願して、高徳な僧侶をお招きなさい」

掘し、海岸から運ばれた石材を陸揚げして、それぞれの領地に見合う長さを積み重ねていったのである。川口に杭が打たれたことはいうまでもない。

田一反について一寸、一町については一尺の割当てである。百町の田地ならば百尺（三十メートル）を築地しなければならないわけだ。

なお、一町（約百九メートル）の築地費用が当時の金で百文であった。

このように、多くの人々によって博多湾沿岸の防御が始まつた建治二年正月、龜山上皇は石清水八幡宮に七日間籠られて、再び国土安泰を祈られた。

翌年には、僧正道宝を伊勢大神宮につかわして、三十日間、異国調伏を祈らせたという。

その頃、元はひた押しに南宋を攻め立て、都・臨安を陥落した。その時、多くの将軍が元に降伏したのだ。

その中に范文虎という人物がいた。この男がフビライに取り入って、部下の周福、禪忠を日本に使者としてつかわしたのである。他に通訳の陳光、日本からの渡宋留学僧・本暁房靈泉を連れてきた。

この者たちが対馬に着いたのは、弘安二年（一二七九）六月末であった。

それから太宰府に来て「宋朝の牒状」を差し出したのである。

「宋朝もすでに滅ぼす所となる。恐らくは日本もまた危

弘安元年（一二七八）十二月、時宗は禅師の言葉を入れ、名僧を迎えた旨の自筆の請状を持たせて、建長寺の二人の僧・詮藏主、英藏主を宋の国へ送ったのである。

「樹木にその根があり、水にその源があるように、宋朝の名勝を請い、私はこの道を修行しようと欲します。詮

英の二兄を煩わせることになるが、鯨のような險阻な波を憚ることなく、俊逸な英傑を誘引して、本国に帰つて来るよう望みます」

当時の宋朝は元の攻略を受け、國の情勢も逼迫の度を加えて、弘安二年には崖山の一戦で南宋の社稷が滅び去つたのである。

そんな折、時宗から派遣された一人の僧が中国に着いたのだ。

そして、その年の五月には明州の天童山に登山して、仏光国師に時宗からの請状を捧げたのである。

仏光国師は明州慶元府鄞県の出身であり、許氏伯済という官僚貴族の子で、母を陳氏という。母は子供が多くつたために、この子を懷妊したが鬱々として楽しめなかつた。しかし、ある夜、白衣の女人が夢にあらわれ、腹を指さして、

「この子はよい男児であるゆえ、捨てないように！」

と告げたのである。

男児誕生のさいには、産室が白光で輝いたと伝わる。一歳になる頃には、いろいろな玩具を与えたが、それらには関心をしません、手に持った一巻の仏書を離さなかつたという。

十三歳で父を亡くした子は、出家を決意する。この少年を人物とみこんだ淨慈寺の住持・敬叟の得度の弟子となつて、諱を祖元、字を子元と称したのである。後に自ら無学と号した。十四歳で徑山興聖万壽寺にのぼり、無準師範の門に参禅したのであった。

二十二歳のある夜、丑の刻に（午前一時から四時の間）主座寮前の板声を聞いて悟つたという。その偈にいう、

一槌打碎精靈窟
突出那吒鐵面皮
双耳如聾口似啞
等閑触着火星飛
一槌打碎す 精靈の窟
突出す那吒の鐵面皮
双耳聾の如く 口啞に似たり
等閑に触着すれば 火星飛ぶ

（突如、鉄槌が下って亡靈どもがたむろしている巣窟をうち碎いてくれた。突出してどうしようもない厚顔無恥なこの私をも。耳は聾となり口は啞となつたかと思いながら、心しづかに禪問を交していると、心がぴたりと合ってきて、不思議なる恍惚の境地に誘われていた。そのとき空から流れ星が落ち、悟りが開けた）と。

そして、宗道・説道とともに兼ね備えた法嗣無学祖元となるのである。法の道だけでなく、志の高さは当時の志士の間でも高く評価されていた。年老いた母を扶養するために、大きな寺を出て、東湖の浜の白雲庵という小庵の住職となつた仏光国師（無学祖元）は、草鞋を蒲で編んで得るわずかな収入で母を養つた。

この庵での七年間に母を彼岸に送つたのち、台州の名刹真如寺の住職に出世して、多くの宗徒を教化した。そして、兵乱を避けて移つた雁山の能仁寺住職であつた五十歳のとき、寺が元の兵士に襲われて、白刃を首に当られる危険な目に遭つた。

その時、独り禪床に端座し、まさに首を刎ねられようとした仏光国師は自若として偈を唱えて、兵士たちに説法したのである。

乾坤無地卓孤筇
且喜人空法亦空
珍重大元三尺劍
電光影裏斬春風
乾坤の孤筇を卓つるなし
且喜すらくは 人空にして法も
また空なるを
珍重せよ大元 三尺の剣を
電光影裏 春風を斬るのみか

（この天地は広大無辺と思っていたのに、拙僧の一本の

（国が破れ、この危難に直面しているときに、親しい友と別れて日本に渡る。対面し握手をしても、再び逢えるとは思えない。今朝はこの宿鷺亭の前に佇む旅人である私が、明日は日本國の雲となつて、あの国を漂泊しているのだ）

5 仏光国師來朝

六月二十日、仏光国師は門弟の鏡堂覚円や入宋僧の

桃溪徳悟らとともに乗船して、波の荒い東支那海を日本に向かつた。そして、八月に日本へ上陸し、二十一日、時宗の請をうけて建長寺の住職の座に着くのである。時に仏光国師は五十四歳、時宗が二十九歳の邂逅であった。

その後、時宗と仏光国師の関係は、時宗を観ようとするなら、仏光国師を観ればよい。国師は時宗の半身、いや、全身といわれるほどに二人の関係は密着するのである。

例えばこんな問答が交された。

時宗が問う。

「人生の憂苦の最大は、怯弱なことです。国師、どのようにしてこれを脱するばよいのでしょうか」

「これを脱することは、はなはだ易いことです。怯弱のよつて来るところを閉じればよいのです」

「怯弱はどこから来るのでしょうか」

を読んだ。

この様子を見聞した兵士たちは、仏光国師が徒者でないことを観てとり、敬服して立ち去つたという。

戦乱で乱れ、仏道によつても救い難い故国・宋を出て、求道の志厚い時宗の誘いに応じようと決意した祖元・仏光国師と、時宗の禪師への渴仰が一致したことは、まさに仏の結縁というべきあろうか。

弘安二年六月、天童山を下る直前、仏光国師は、漢詩を読んだ。

世路艱危別故人

世路の艱危に故人と別る

相看握手不覺頻

相見て手を握り頻なるを覚えず

今朝宿鷺亭前客

今朝宿鷺亭前の客

明日扶桑國裏雲

明日扶桑國裏の雲

「時宗殿から来る」

時宗は国師の言葉が理解できずに反問をする。

「私は怯弱を最も忌み嫌うものです。それなのに、どうして私、時宗から来るときおっしゃるのですか」

「試みに明日から時宗を捨て去りなさい。果して膽玉は、地を支えるほどの大綱になるのです」

「どのようにして私、時宗を捨て去ればよいのですか。その方法をお教えください」

「心に感じる一切のことを絶つのです。それにはただ座して心身の静寂を待ちなさい」

「私は俗家としての事務を免れることができません。私に月日、時間がないことをどうしたらいいのでしょうか」

「日常の立居振舞い、一切の事務は、最良の禅を修するための道場なのです。ただ、ひたすら座禅を学ぶ場所です」

そして、国師は五個の秘訣を示してくれた。

一、下界のもろもろの事務的なことに心を奪われてはいけない。そのようなことに心を左右されるから、この心がこの心でなくなるのだ。常に膽をすえて、下界のことには心を揺さぶられてはいけない。

二、常に心が動き、下界のことには貪欲に執着すれば、必ずその他のことを忘却する。突然の怖い風はこの隙間に生じる。一方に注意深ければ、一方の油断もまた深くなる。つとめて平静にして、貪着することはいけない。

三、自分の中の思いを止めようとするな。またその思い

を止めずにおくな。ただ一念、仏道をつとめよ。才智智謀にのみ頼ってはいけない。恐れおののく魔の風は才智謀を現出する原動力である。その機会にあたり、変化に応じて、この心を失わなければ、必ず神秘的な当を得た策略が生じるのだ。常のときと非常のときと、常に心を一つにするべきである。

四、心の量を広大にするべし。人から見ても心が狭いときは、ものごとに関する考えも狭く、膽の量もまた少ない。すべからく常に注意して、心を広大に持つこと。

五、勇勢を保持しなさい。勇猛の志氣は白刃をも踏みつけることができる。柔弱な肢体は窓の風をも忍ぶことができない。常に志氣を保持すべきである。

というものであった。

禪問答とは、よく言つたものである。

凡人が聞くと、訳がわからず、ただ寺の門の前に佇むだけで終りそうだが、そこを拠つて立つ所とした時宗は、見事に自身の怯弱を禪によって克服したのである。

また、弘安四年（一二八一）正月、来謁した時宗に仏光国師は「莫煩惱」の三文字を書き、授けて言つた。

「春夏の間に、博多の地は必ず騒憂するであろう。しかし、一風やにわに起つて万艦を掃蕩するであろう。時宗公は煩惱することはない。昔の優れた賢者は言つてゐる。一つの忍耐が百の勇気を支え、一つの冷静が暴動を制するものだと。また、冷静を主とした力は、多くの牛や

虎よりも勇猛である。おもむろに熟考して、速やかに決断するようにと。私が言う莫煩惱といふのは、こういうことを言うのです」

時宗は答えた。

「私は仏光国師の鉄槌を受けて、人間にとつて大切な大きな宝を得た思いがいたします。天下を大きく搖るがすようなことも、憂うるに足らないことだとわかりました」

こうして、時宗は禪の修行、つまり座禅を行いながら大覚悟の練成に努めて、一重深く逞しい青年武将に変貌していったのである。

だが、この師・仏光国師と弟子・時宗との間には、禅道の修行以外に、元の再襲來をどのように迎え撃つかという当面の大問題が横たわっていた。仏光国師は敵国の情勢を説いて、策を練りながら、時宗を激励した。

そして、敢然として国難に當る時宗の決意を新たにさせた。

時宗もまた博多沿岸の防備の状態、將兵たちの配備、士氣についても忌憚のない報告をした。

祖国・宋において、王室の優柔不断のゆえに國が窮地に陥った悲惨をつぶさに味わった仏光国師の目には、時宗の勇猛果敢な対策は、満足のゆくものであったが、なお、万全のために心を碎いた。

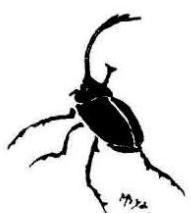
野鳥が飛び来て禪師の肩に馴れ親しみ、朝になると白龍が現れたと伝えられるが、禪師「在世のありさまをそのまま伝えるように、置かれた椅子には白鳩が二羽とまつて」といはる。白龍の姿もこの目に見えるようだ。谷は虚空にして山からの反応があり、人は無心になつてはじめてものがよく感じられる。芭蕉は耳がなくとも雷を聞いて葉を揺らし、磁石は無心であるから鐵を感じるのだ。さて、無心の心はどれほどのものを見て、感じられるのであろうか……」と。

(註)

「4 蘭溪道隆の死」に出てくる漢詩の読みと

解釈は、漢詩人・鯨游海さんのお世話になりましたことをお断りいたします。

体当たり戦法を強制された 神風特別攻撃隊の人びと(四)



千 坂 精 一

ソロモン諸島ガダルカナル(2)

八月中旬から十月にかけてのガ島奪回作戦が悉く失敗に終わったことで、焦った陸軍首脳部は、乾坤一擲の勝負を賭けて、精銳部隊の仙台第二師団を投入することにした。

丸山政雄中将率いる一万五千の将兵は、十月六日ガ島に上陸すると、ヘンダーソン飛行場を目指して密林の中を迂回進軍した。

この第二師団の奪回総攻撃は、十月二十二日に予定されていた。

その報を受けた南雲機動部隊と近藤前進部隊は、陸軍の総攻撃に呼応してガ島周辺のアメリカ艦隊を撃滅すべく、行動を開始した。

途中、第二師団の攻撃予定日が二十四日に延期の情報が入ったので、前進部隊の大型客船出雲丸を改造した軽空母飛鷹は、故障箇所修理のためトラック島へ引き返した。

アメリカ側は、このとき中破したエンタープライズの修復が完了して二十四日にホーネットと合流していた。

二十四日夜、第二師団は予定通り飛行場奪回の総攻撃をかけたが、成功しなかった。

二十五日早朝、南下していた南雲機動部隊は一旦北上したが、第二師団が再び夜襲をかけるということなので、夕刻前進部隊につづいて南下していくた。

ところが、二十六日零時すぎ敵哨戒機に発見されたので、所在を晦ますために反転しながら、艦攻十三機、水偵七機を発艦させた。

○四五〇、その艦攻機から、「サンタクルーズ諸島北方百浬に空母一隻、その他十五隻見ゆ」と打電してきた。

○五三五、南雲長官座乗の旗艦翔鶴、瑞鶴、瑞鳳の三空母から第一次攻撃隊零戦二十一機、艦爆二十一機、艦攻二十機が勇躍発艦した。

指揮官は、真珠湾、ミッドウェーで赤城飛行隊長だった雷撃の神様村田重治少佐である。

おなじころ、索敵機からの報告を受けたキンケード少将も、ホーネットから艦爆十五機、艦攻六機、艦戦八機、エンタープライズから艦爆三機、艦攻八機、艦戦八機を発艦させた。

南雲機動部隊は、さらに第二次攻撃隊も準備し、○六一五翔鶴から零戦五機、艦爆十九機、瑞鶴から零戦四機、艦攻十六機を発艦させたが、瑞鳳は上空に飛來した索敵

機の投下爆弾で後部飛行甲板を大破され、艦載機の発着艦が不能になつたため戦場を離脱した。

○六三〇ごろ、一攻隊はホーネットを発艦した艦爆十機と擦れ違つたあと、エンタープライズ攻撃隊と遭遇した。

零戦九機が襲いかかり、艦戦四機、艦攻四機を撃墜したが、こちらも四機を喪つた。

その後にホーネットを発見した一攻隊は、すかさず風上にまわって突撃態勢に入ると、制空隊の零戦十二機が三十八機の敵護衛戦闘機に挑んでいた隙縫を縫つて、艦爆隊がホーネット目掛けて急降下を開始した。

防御砲火を浴びて墜落されるなかを撞い潜った数機が爆弾、魚雷を叩き込んで減速させたところへ、艦爆隊指揮官坂本明大夫尉が魚雷を抱いたまま突入して止めを刺し、航行不能にさせた。

身を捨てての体当たりは特攻戦法の先駆けのように見えるが、坂本大尉は自分の意志による咄嗟の行動であったのに對して、特攻戦法で散華した人たちは、首脳部の意志に因つて首脳部のための犠牲にさせられたのであるから、結果はおなじでも事情は全く違うのだ。

この戦闘で一攻隊は勝利したことになるのだが、しかし、帰投途中十三機が燃料切れで不時着水するなど損害も大きく、帰艦した二十機のなかでも修理不能が半数あったという。

第二次攻の翔鶴隊は、南下中のエンタープライズ中心の第二船団を確認、制空隊の零戦が警戒中の敵戦闘機と交戦しているあいだに、艦爆隊がエンタープライズに襲いかかった。

遅れた瑞鶴隊が到着すると戦闘は有利に展開し、駆逐艦ボーダーを魚雷で撃沈、被弾した艦攻がスミスに突入して自爆炎上させた。

だが、エンタープライズは飛行甲板に三弾命中させただけで、取り逃がしてしまった。

二攻隊は戦果に比して犠牲大で、両隊合わせて四十四機中二十機が被弾自爆、四機が不時着水、帰投した二十機も全機被弾していた。

いっぽう、敵艦爆隊の攻撃を受けた南雲機動部隊は、旗艦翔鶴が飛行甲板に被弾して火災を起こし、消防はしたもののが発着艦不能になつたので司令部を駆逐艦風に移して、さきに被弾した瑞鳳とともにトラックへ回航した。

近藤前進部隊唯一の改造空母隼鷹から発艦した零戦十二機、艦爆十七機の攻撃隊がエンタープライズを発見したのは、瑞鶴隊の攻撃から逃れた直後だから、絶好の機会であったが、折悪しくスコールに妨げられた。

豪雨による視界不良で急降下出来ず、緩降下爆撃したため対空砲火の餌食になつて思うに任せらず、またもや取り逃がしてしまった。

しかし、隼鷹に着艦してきた翔鶴、瑞鳳隊の使用可能

機零戦八機、艦攻七機で編成した第二次攻撃隊が、応急修理しながら重巡に曳航されてゆくホーネットを発見した。

そこへ、瑞鶴から残存機で編成した第三次攻撃隊の零戦五機、艦爆二機、艦攻六機が到着してさらに魚雷一本を命中させ、ついに航行不能に追い込んだ。

止めを刺したのは、隼鷹から発艦した第三次攻撃隊であつた。

ホーネットは、アメリカ太平洋艦隊最後の沈没空母になつた。

陸軍のガ島奪回作戦に呼応したこのソロモン海戦で、機動部隊は勝利したものの、海戦当初の飛行隊の損害は痛手だった。

艦船は、空母翔鶴、瑞鳳、重巡筑摩が損傷した程度ですんだが、飛行隊のほうは、機動部隊保有機の約半数と、熟練搭乗員百五十人を喪つてしまつたのである。

この機動部隊所属飛行隊の尊い犠牲にも拘らず、肝腎の第二師団によるガ島ヘンダーソン飛行場奪回は、またもや失敗に終わった。

焦躁に駆られた陸軍首脳部は、ジャワに駐屯していた名古屋第三十八師団の主力を投入することにし、海軍舞鶴第四特別陸戦隊の協力を得て、一万三千五百の兵力で

第四回上陸部隊を編成した。

これで、一万五千の第二師団と合わせて実に三万近い大部隊の動員になった。

いっぽう海軍は、食糧、弾薬、重砲などの輜重を十隻の輸送船に積み込み、第十一水雷戦隊司令官田中頼三少将指揮のもと、十四隻の駆逐艦を護衛につけて、十一月十三日の夜ガ島上陸を強行することを計画した。

その輸送船団の支援部隊として、第八艦隊（司令長官三川軍一中将）主力で編成された外南洋部隊が出動した。

第十一戦隊司令官阿部弘毅中将（十一月一日付昇進）の前衛部隊が挺身攻撃隊を編成して、輸送船団の突入前にガ島を砲撃することになり、十二日夜半ガ島タサファロング岬沖に到達した。

丁度その頃、情報を得て待ち受けていたダニエル・J・カラガン少将率いる支援部隊の軽巡へレナが、二万メートル先の阿部艦隊を電波探知機で捕捉していた。

だが、双方艦隊の先頭を行く駆逐艦夕立、ヘッシング両艦ともそれを知らずに接近し、突如発見して慌てて砲撃を開始したので、初戦から混戦になつた。

どちらも敵艦隊のいることを承知していないながら、不意の出会いになつてしまつたところは、遠い戦国のむかし、謙信と信玄が信州川中島で鎧を削つた四度目の八幡原激突戦によく似ている。

このとき、カラガン艦隊は、海戦を有利に展開するた

めにT字戦法をとろうとして、単縦陣だった全艦船が一斉に右回頭をはじめたところだったので、たちまち隊形を乱され、そのまま砲撃戦になつた。

阿部長官座乗の戦艦比叡が探照燈を駆使して闇夜に潜む敵艦を照らし出し、それを各艦が攻撃する戦法をとつた。

接近戦だったので命中率は高かつたが、暗闇の混戦で彼我の区別がつかず、指揮もとれなかつたので、単独行動の一騎打ちになつてしまつた。

乱戦のなかで、防空重巡アトランタが火災を起こして沈没、カラガン少将は座乗の重巡サンフランシスコが大破して戦死した。

探照燈を照らしつづけて敵艦船発見につとめた比叡は、当然のことながら集中砲火を浴び、八十発余りの命中弾を受けて炎上し、ついに操艦不能に陥つたので、阿部司令官らは駆逐艦雪風に移つて自沈させ、戦艦霧島らとともにガ島沖を離れることにして、ヘンダーソン飛行場砲撃作戦は中止された。

この海戦で、アメリカの防空巡洋艦アトランタ、ジョン・ホーか駆逐艦四隻を撃沈、重巡サンフランシスコ、ボートランドほか駆逐艦三隻を大破したが、阿部艦隊の艇身攻撃隊も戦艦比叡が自沈、駆逐艦夕立、あかつきが沈没したほか、駆逐艦四隻が損傷した。

戦艦が沈没したのは、開戦以来初めてのことであった。

ターナー提督は、この十二日の夜戦を、

「海戦史上最も苛酷な戦闘」

と評したという。

阿部挺身攻撃隊が作戦を断念したことで、田中少将指揮の輸送船団のガ島突入は一日延期され、船団は途中からブーゲンビル島南隣のショートランド泊地へ引き返し、十三日夕刻にあらためて出港した。

ときをおなじくして、前述の外南洋部隊がヘンダーソン飛行場の夜半砲撃に向かった。

さらに、近藤前進部隊も、外南洋部隊が砲撃したあとを受けて、翌十四日夜半の砲撃を目指して南下した。

この両部隊の連繫砲撃実施は、田中輸送部隊にとつて頼もしい限りであり、十四日上陸成功の意を強くした。だが、この一連の動きはまたもや探知され、近藤前進部隊と田中輸送部隊が敵哨戒機に接触された。

ハルゼー中将は、キンケード少将に空母エンタープラ

イズを率いてガ島へ急行するよう命じた。

探知されなかつた三川外南洋部隊は、十三日夜半無事予定海域に到達したが、さいわいにもキンケード機動部隊とは出会わなかつた。

ここで、第七戦隊司令官西村祥治少将率いる支援隊は、本隊と別れてルンガ沖に向かい、主隊はエスペランス岬沖で警戒に当たつた。

西村支援隊が到着したルンガ沖は蝸の殻だったので、

重巡鈴谷と摩耶は二十センチ砲十門で一斉射撃して、三十分間に五百発ずつを撃ち込み、ガ島の新旧飛行場に大火災を起させ、急降下爆撃機一機、戦闘機十機を破壊し、三十二機に損傷を与えた。

西村支援隊は、十四日朝六時ごろニュージョージア島南方海上で無事に主隊と合流したので、三川外南洋部隊はショートランド島への帰投を急いだ。

一時間後、敵機に発見されたが、先頭を行く重巡衣笠が艦橋に直撃弾を受けたほかはさしたる被害もなく、危機を脱したかにみえた。

だが、それから三時間後にエンタープライズ攻撃隊の大空襲を受けて衣笠が沈没し、五十鈴が舵損傷、摩耶は甲板に被弾した。

いっぽう、ガ島へ急行中の輸送船団は、十四日の朝から夕刻にかけて七回空襲を受け、六隻沈没して四百五十人が戦死、五千人の将兵と乗組員が海上に放り出されたが、残存の輸送船や駆逐艦に救助されて、なおも怯まずガ島を目指した。

その日の夜、近藤前進部隊がヘンダーソン飛行場砲撃の射撃隊、直衛隊、掃討隊を編成して、サボ島北東方からガ島を目指した。

掃討隊は、ガ島守備に急行するウイリス・A・リード少将率いる戦艦ワシントン、サウスダコタ、駆逐艦ウォーク、ベンハム、プレストン、ダウインの艦隊を北方からこれによつて、ガ島奮回作戦はいよいよ困難になつた。

作戦は、勝つための戦術であつて、敗れることなど念头にないから、このガ島ヘンダーソン飛行場奪回作戦も、当然のことながら成算疑いなしだつたに違ひない。

これによつて、ガ島奮回作戦は情報不足がすべてであった。

的確な敵情視察を怠り、見縁つて送り込んだ旭川歩兵第二十八連隊一木支隊の全滅で誇示した威信を傷つけられ、大衝撃を受けた陸軍首脳部は、川口清健少将の第三十五旅団支隊六千、ついで精銳部隊といわれた丸山政男中将の仙台第二師団一万五千、さらにはジャワに駐屯していた名古屋第三十八師団の主力一万三千五百と、四回にわたり実に三万余の兵力を投入していった。

にも拘らず、奪回出来なかつたのは、（敵情視察を怠つたこと）併せて、（兵力の逐次投入）を禁じた兵法の戒めを破ったことが最大の原因であった。

その結果、損害甚大にして得るものなし、の虚しい消耗戦になつてしまつたのだ。

サウスダコタは火災発生して退避したが、所在が確認出来なかつたワシントンから逆に捕捉された霧島が、有効弾を浴びて火災を起こし、航行不能になつてついに沈没した。

戦艦を喪つた前進部隊は、ヘンダーソン飛行場砲撃を断念して、戦場を離脱した。

しかし、増援部隊を乗せた残存輸送船団の護衛にあつたつていた田中司令は、十四日深夜にタサフアロング海岸に兵員や

轍重空輸のための滑走路を増設して、ガ島を不沈空母に仕立てていった。

制海、制空権を喪つては軍需物資の搬送もままならず、どうやら潜れても、陸揚げしているところを爆撃され、可惜貴重な物資を喪失することの繰り返しであった。

偶々揚陸に成功すると、痩せ衰えた兵士たちがどこからともなく密林のなかから這い出てきて、食糧に群がり、貪り食らう有様で、補給路を絶たれたガ島は、まさに餓島と化して凄惨を極めた。

ここにいたって、ルーズベルト大統領は、「これでようやく、戦争の見通しがついた」と感想を漏らした、という。

いっぽうの東條首相は、十二月十日の御前会議（大本営政府連絡会議）において、現状の軍需生産能力では南太平洋地域における作戦指導上の要請を満たすことが出来ない、ことを認めざるを得なかつた。

大本営は、大晦日にいたつついにガ島の奪回を断念し、撤退を決定した。

そして、翌十八年（一九四三）二月一日から、夜陰に乗じての脱出が七日間つづいた。

だが、生存者は一万名に過ぎず、飢えと病に斃れた多くの将兵を含めて二万名が犠牲になつた、悲惨な戦闘であつた。

このガ島放棄によつて、南太平洋における戦局の主導権はアメリカ軍に掌握されてしまつたのであるが、大本営は、この奪回作戦の失敗をまたも直隠して、二月九日に、「ガダルカナル島に作戦中の部隊は、その目的を達成せることにより、二月上旬同島を撤し、他に転進せしめたり」とだけ発表して、取り縛つた。

第三章 朝鮮での思い出

二 灰岩

朝鮮半島を、兎が西を向いてしゃがんだ姿にたとえると、灰岩は、兎の耳の先から少し後ろの、日本海側に回った所にあつた。

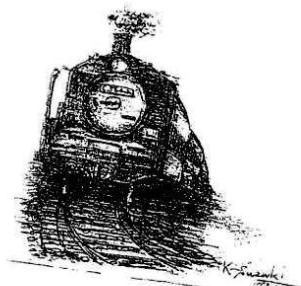
父小太郎が転勤になつた私たち家族六人は、会寧駅で汽車に乗り、滿州との国境に当たる豆満江に沿うように進み、阿吾地駅で降りた。さらに、昔の森林鉄道のよくな小さい客車に乗り換えると、間もなく灰岩駅に着いた。

駅前は工場の正門になつていたように思う。少し左に歩くと間もなく、煉瓦造り二階建ての雄電社宅に着いた。その一画が憲兵隊の借り上げ官舎になつていて、会寧の

泰山木（十）

—紙透小太郎の一生—

紙透寛夫



が、ほとんど、灰岩、灰岩と呼んでいた。

父が転勤した時は、張鼓峰事件の硝煙が消え去った直後だったようと思う。父としては早速、事件のことも調べたかったのである。ある朝、私を連れて出掛けた。

その日は晴れていて、街を出るあたりで、近くを散歩していた工場付属病院の看護婦たちの一団と出会った。

「お早うございます」

口々に挨拶され、

「やあ、お早う」

父も返事した。

あとは、父も私も黙々と一本道を歩き続けた。一軒も家が見えなくなり、あとはただ荒野が広がるばかり、はあるか遠くには、低い山並みが見えるだけであった。

と、一人の男が牛車を引いて、私たちを追い越すように、通り過ぎようとしていた。父は朝鮮語か満州語のかわからなかつたが、男に話しかけた。男は牛車を止め、父と何やら問答を交わしていたが、交渉は成立したようだ、私はその牛車に乗せられた。多分、父は私の歩き方が遅いので、時間に間に合わなくなってしまうか、私の体力では少し無理な距離だと判断したのである。牛車は速度をあげて進んだ。私は、ごつごつして乗り心地は良くなかつたが、牛車に座っていた方が楽であった。やがて、道の両側のあちこちに、ぼこん、ぼこんと、大きな穴が開いているのが見えてきた。これは張鼓峰事件

で、ソ連軍に爆撃された跡だと思った。間もなく小高い丘のふもとで私は牛車を降りた。

ふたたび父の後に付いて歩きはじめ、丘を登ると、木々に囲まれて見え隠れする一軒家があった。そこが父の目的地であった。

なかなか憲兵が一人、出て来て、

「やあ、やあ」

と、親しそうに挨拶して、部屋のなかに私も一緒に入った。ちょうど、昼食の時間だったので、私もごちそうになつた。二人は久し振りの再会のようで、張鼓峰事件をはじめ、積もる話に花が咲いたようであつた。私は大人たちの話を聞いても分からぬし、退屈して食事が済むと一人で庭に出て、まわりの木や石を所在無く、きょろきょろと見回していた。しばらくすると話は終つたらしく、二人はなかなか出て來た。

すると憲兵さんは、

「坊や、面白いものを見せてやろう」

と、指差した方に目をやると、さっきは気が付かなかつたが、大きな望遠鏡が隠し絵のように、木々の間に納まつていた。私は踏み台に昇り、その望遠鏡をのぞいた。

驚いたことに、すぐ目の前に、ソ連兵が、うじゅうじゅういるではないか。鉄条網や陣地を構築しているソ連兵、その器材を運ぶソ連兵が蟻の行列のように往来していた。ソ連兵の一挙手一投足まで、体の動きが手に取るように

見えた。あそこは、紛れもなく張鼓峰の中腹であった。

興奮のうちに踏み台を降りると、今度は、

「これをあげよう、ソ連軍の落とした爆弾の破片だよ」と笑いながら、その鉄の塊をお土産にくれた。

灰岩の街は、イコール、工場と言つてもよかつた。したがつて、憲兵隊もこの工場の防衛が主な任務だったようである。小学校も公立だったが、実際はこの工場が經營していたようである。街並みは整然としており、住宅が多かつたようで、スチームが通り、真冬でも室内は寒さを感じさせなかつた。今までいた会寧とは違い、経済・文化の面で、灰岩は一段進んでいたようを感じた。

灰岩に移つて間もなく、私は母にこの工場で何を作つてているのか、聞いたことがある。

「ベーカリートよ、ほら、茶托ちゃとうとかお盆とか……」

「ふうーん」

その時の私は、これ以上に興味をもたなかつたが、後年、灰岩洞の朝鮮窒素肥料会社の液化工場だったとか、阿吾地の朝鮮人造石油株式会社という軍需工場だったとか、資料によつて呼び方は違つてゐたが、当時としては非常に重要な工場であったことを知つた。阿吾地炭田から石炭を掘り出し、この工場で液化してゐるのである。今から十六、七年前に、経済雑誌『日経ビジネス』一九八四年七月九日号のページをめくつていたら、石炭液化の技術が、ほとんど、灰岩、灰岩と呼んでいた。

六月に試運転に入る一方、撫順工場も同年一月に試運転に入ったが、いずれも十分な稼働率をあげぬままに敗戦を迎える。

と、述べていた。

蛇足になるが、二〇〇〇年八月十八日の読売新聞に、『石炭液化事業は終了』という見出しで、

……第一次石油危機の教訓から、（中略）石炭から燃料油を製造する計画だが、当面はコスト面で実用化のめどがつかないため、二〇〇一年度で終了する……。という記事が載っていた。おやおや、あの『日経ビジネス』の記事と正反対の結果になっていることに私は驚いた。どうも、日進月歩の世の中、DNA、遺伝子、バイオや、石油を作る微生物の発見、等々の字や言葉を目にする現在、サイエンスの世界でも、革命が起っているようである。もう、石炭液化の時代ではないらしい。

私は灰岩の小学校に、四年生の二学期から五年生の二学期まで通学した。担任は高田五郎先生で、転校して、じきに慣れ級友とも親しくなった。とくに篠原幸利の家には、よく遊びに行った。篠原は雑貨・駄菓子屋の息子で級長だった。また、根来實は阿吾地駅長の息子で、仲の良い一人だった。私の古い手帳には、ほかに二木健吉、道脇一雄、森田一齊、藤原、松尾、山本の名前が書いてあつた。みんな、今どうしているか、その後の消息は全

然分からぬ。

学科は内地の小学校と同じだったと思うが、修身・国語（読み方、綴り方、書き方、話しか方）・算術・理科・職業・図画・唱歌・体操・手工・操行だった。五年生になると、国史・地理が加わり、手工がなくなった。通信簿は、会寧の小学校では甲・乙・丙であったが、灰岩では十点満点での評価だった。

「歴代の天皇百二十四代を、全部覚えてきなさい。一人ずつ空で言つてもらうから」

田先生は、人ずつ空で言つてもらうからと、試験問題を予告した。

（さあ、大変だ）

物覚えの悪い私は弱った。だが試験だから、覚えるしかない。病人が一日三回、朝・昼・夕の毎食後に薬をまじめに、必ず服用するように、神武・綏靖・安寧・懿德・孝昭・孝安・孝靈・孝元・開化・崇神……明治・大正・今上と、声を出して丸暗記した。おかげで、試験の日は、淀みなくすらすらと言えてしまい、社会に出てからも、私には、この丸暗記は役に立つことは無かった。

昭和十四年七月十二日、三男幹郎（私の弟）が生まれ

て、元気よく泣いていた。
「灰岩で生まれたから岩太郎と付けようかなあ、ハッハッハ」
あの無口な父が、にこにことして、一人で軽口をたたいていた。余程うれしかったのである。結局、父の尊敬していた軍司令官中将の『幹郎』の名を付けたようである。我が家も七人となり、にぎやかになってきた。

ちょうど、そのころは、ノモンハン事件の真っ最中であつた。滿州の西北部と、モンゴルとの国境に近いノモンハンで、日本軍とソ連軍の間で、凄惨な死闘がくり広げられていた。

戦車・重砲・飛行機と、圧倒的物量を誇るソ連軍の機械化部隊の前に、軽装備の日本軍は、苦戦を強いられ、ソ連軍の戦車に火薬瓶をもって肉弾攻撃しても、なんの効果もなく、いたずらに戦死していったそうである。

わずか一年前の張鼓峰事件でも、ただ、三八式歩兵銃とごぼう剣に頼るしかなく、苦戦を重ねた日本軍が一敗地にまみれたことを、軍中央部は反省しようともせず、またしても、日本兵は悲しい戦闘を続けなければならなかつた。こうして、日本軍は、ほとんど全滅されたようで、慘憺たる敗北を喫したのであった。

一方、このころヨーロッパではドイツがボーランドに侵入して、イギリス・フランスがドイツに対し、宣戰布

（紙透は軍人の息子だったな、位を気にしているぞ。
蛙の子は蛙だなあ）
先生は、にやりと笑って、
「じゃあ、上等兵にしてやろう」
これで一つ進級したが、あとで、我ながら幼稚さに恥ずかしくなった。

学芸会が終つてすぐ、私は南陽小学校に転校したが、高田先生は、その時の記念写真を郵送してくださつた。写真の裏には、紙透上等兵に贈る、『五人の斥候兵』、灰岩小学校学芸会、昭和十四年十一月二十三日と書いてあつた。

方解石の出る楠峠（十三）



伊澤敏久

昭和十八年の夏、相変わらずの暑さと、楠のまわりの蝉のかん高いなき声を聞きながら、久しぶりの九人の再会であった。

洞窟を七人で探検したことを喜びながら色々な疑問を話しながら山を下りた。夕焼が山々を一層美しくしていた。いつのまにかあたりは暗くなつて來た。

「よかつたな帰つて来て……」皆は満足していた。
明りのついた町に入りそれぞれ自分の家に向つた。しかし、どこの家も、光が外に出ない様、黒い布がかけられていたのである。

幸一が家に帰ると雑炊の支度が出来ていた。今日の様子を話しながら、雑炊を口にし始めた。

母は、

「明日はお父さんに逢えるね。何の話しをするだろうね」といった。何か心配そうな気配であった。

幸一は、
「今日はお母さん大変なものを見つけたよ。洞窟の奥におさむらいが鎧をつけて座つているようだつた」

幸一は、
「今日の出来事を色々話しするんだ。ところで洞窟の中で削り取つた方解石を二個お父さんに持つてこう……」

母も、
「それは喜ぶだらうね、歴史が好きだったから」

軍の正門が見えてきた。まわりをみると大勢の人達と一緒になつた。門の中に入つて行くと間もなく、ひげもじやの人が出迎えてくれて、

「よく来てくれたな」という。
父であった。顔の様子が一変していたのにびっくりした。
「これが家にいた時のお父さんなのか」
ややがっかりした感じがした。
腰には短かい剣がつってあつた。

父が改めていった。

「日本軍は現在は勝つてゐる様だが、これからどうなるかだな。シンガポールの陥落、ウエーキ島での勝利、空の紳兵がスマトラ島に奇襲攻撃、ソロモンの方面へも進出しているようだが……」

「幸一。お父さんが出征前に云つたこと覚えているか?」「うん」軍関係の学校へ行くなど云うことだつた。

「そうだ。必ず守るんだぞ。この部隊も、満州へ大勢行つた。お父さんは、南の方の島だといわれているが……」

「ほんとですか」お母さんが心配そうに聞き返した。

「とにかく今日の面会は最後かも知れんが、運がよければ帰れるだらうと思う……。今日幸一が持つてきてくれた方解石は魔除(まよけ)として持つて行くぞ……」

「お父さん必ず帰つて来てよ」

「大丈夫だ。幸一とお母さんが前に持つてきてくれた千人針もあるから大丈夫だ。ハハハ……」大声で笑つた。

面会の時間の終りが來た様だ。

「二人とも元氣でやれよ、幸一の洞窟の話は、面白い。帰つたらお父も見に行く」

「まあなんとかやっていますから安心して……」

汽車へ乗つたのも始めてだったので窓から見えるものは、木々の青く茂った様子等のどかなものでした。平和であれば、何でも自然の様子がよくわかるけど……」

「生活も大分變つただらうな、食糧などは十分足りているのか。」「まあなんとかやっていますから安心して……」

「汽車の中で色々考えてみたりしましたの。軍人になると服装等から何から、色々變った様ですね。」

「そう思うだらうなあ。男ばかりの生活で、やる事全てが一般の人と違つからな。仕方がないな……」

「生活も大分變つただらうな、食糧などは十分足りているのか。」「まあなんとかやっていますから安心して……」

汽車へ乗つたのも始めてだったので窓から見えるものは、木々の青く茂った様子等のどかなものでした。平和であれば、何でも自然の様子がよくわかるけど……」

三人は正門の所で手をふりながら別れた。

「お父さんの云った小島ととかはどこだろ……」

母は、「小島と云ってもわからないね、たくさんあるから。」

そして数時間も汽車にゆられやっと自宅についた。

幸一は、お父さんが何故軍関係に行つてはいけないと云うのか、心に何回もくりかえしたがわからなかつた。

洞窟の中でも、

「家康と信玄との戦いの時も最後は家康が負けたんだからな。……」

日本は、昔から戦争に負けたことがないからな……」

幸一は一人で色々考えてみたが判らなかつた。

夏休みも終り九人は再び逢うことはなかつた。

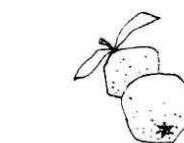
昭和十八年に入ると、

ニューギニア・ブナの日本軍が負けたとの報道があり、

どうも日本軍の様子が変ってきたことを感じさせた。

二月に入ると、日本はガダルカナル島より撤退し始めた。

陸軍省の「うちてし止まむ」のポスター五万枚が配布されたという。



笛ヶ崎村（十四）

太田和貞

ことになつたが、それとなく予告してから、いくのか、な

それとも予告なしに、突然に長八の家を訪ねるのか、な

かなか決め兼ねた。

結局、予告なしに、長八の家にいくことになつた。

「それでは、今からいきましょう。思い立つたが吉日と申しますから、……」

しげの声音には、十郎兵衛と平左衛門の反対を黙らせるものがあつた。

「凝つては思案に余ると申しますから、それがよろしくうございましょう」

平左衛門はすぐ、しげに賛成した。

「平左衛門さん、私はこの胸に赤子を抱きたいのです。

この名主屋敷の広い家に、赤子の元気な泣き声を響かせたいのです」

そう言って、しげは目をしばたかせた。

幸一はこの四月中学三年になった。日本は強いのか、弱いのか……さっぱりわからなくなつた。仲間達とは昨年の八月から逢っていない。

小沢・高橋・山本・村岡・憲造・健一・山口などは何しているのかなー、と日々想い出す事があった。

中学三年生になると、三八式の歩兵銃を持たされ教練を行つた。銃が重いので大変苦しかつたが厳しい教官だったため、授業にだらしのない者は放課後まで残され行進とか銃の撃ち方などを行つた。

幸一も、日々残されて参加させられた。

三月の最後の日、軍事郵便が届いた。発信者は父であつた。

色々書かれていたが、軍の様子は一言も書かれていた。

最後に神戸の駅に面会に来る様にとあった。

二人は突然だったので、暫らく無言だった。

「それでは筋が通りません。わたしたちが長八の家にいって、頭を下げるのが本当でしよう」

長八を名主屋敷に呼んで、養子になって貰いたいと頼むつむりだと十郎兵衛が、しげに話をすると即座にこう言つて反対した。

十郎兵衛が長八の家に出向くことも平左衛門との話合いの中で十郎兵衛の口から出たが、「それはいけません」と平左衛門は強い口調で反対した。

「お名主さまが水呑百姓の家にいき、しかも、頭を下げることは、あってはなりません」

平左衛門にそう言われると、十郎兵衛も平左衛門の反対を押し切れなかつた。

十郎兵衛としげに、平左衛門が介添役として同道する

十郎兵衛たちの姿を見た長八は暗い藁屋から飛び出してきた。

「これは、これは、お名主さま。こんなあばらやまでおこしくださるとは、もったいのうございます。お呼びくだされば、どこへでも、すぐさんじましたのに」

長八は恐縮して、二度、三度と頭を下げた。

「長八さん、先日は本当にありがとうございました。長八さんのおかげで、私は命拾いをしました。その私がきょうは長八さんにお願いがあつてまいりました。ちょっとあがらせていただけませんか、……」

「め、めっそりもありません。おくさまやお名主さまにあがつていただけるような家ではありません」

長八はしげの申し出を拒否するかのように、両手をひろげて、しげの前に立ちはだかった。

「長八、おくさまが、ああ言つていなさるのだ。そんなにむげにお断わりするものではねえ」

平左衛門が長八をたしなめたが、長八は両手をひろげたままだった。

「長八さん、お願ひ、……」

しげは両手を胸の前に合わせて言つた。

「長八！」

平左衛門の語氣を強めたことばに長八も洟々と従つた。

「驚かねえでください。きたねえ家ですから」

長八は体を開いて十郎兵衛たちを家の中に入れた。

そう思つていたことを知つて、こうしてお願いにあがりました」

「カニは甲羅に似せて穴を掘ると言います。このわしにお名主さまの器量がないことは、自分がよく知っています。わしには持高六斗五升の水呑百姓がいちばん性にあつています。どうか、そのお話はご勘弁ください」

「長八、この通りだ。わしの跡を継いでくれ！」

十郎兵衛は両手をついて、長八に深々と頭を下げた。

「長八さん、お願ひです」

しげも十郎兵衛にならつて両手をついて頭を下げた。頭を下げるふたりの姿を見まいとして、長八は目をかたくつぶつた。

「長八、そんないに、目をかたくつぶらねえで、おふたりの姿をよく見る。お名主さまと奥さまが水呑百姓の長八に、こうして頭を下げて頼んでいなさるだ。それわしは水呑百姓が性にあつていますと、よくもまあ平氣でそんなことが言えるもんだ。長八よ、心に思つてることがあれば、なにも、かにも言つてみたらいいではねえか、……。そりや、できることと、できねえことがあるのは長八も分かっているべえ。まず最初に、きくのことをお名主さまにお願いしてみろ！」

きくのことと言つて、長八はパッと目を開けた。

「それみろ。長八が何も言わなくとも、おめえの心はお見通しだ。きくを嫁に欲しいのなら、お名主さまにお

家の中の暗さに目が馴れるにつれて、長八のことばとは裏腹に、家の中はきちつと片付いているのが見えた。

「お湯が沸いておりませんので、せめてお水でもしきりに恐縮する長八に平左衛門は、

「そんなに気を使つてくれるな。それよりお名主さまの言うことを聞いてくれ。前々からわしが、ちくと言つていたことだが、……」

平左衛門のことばに、長八は、「へい」と返事をして十郎兵衛たちの前に正座した。

「長八、わしの家に養子に入つてはくれぬか。長八も知つてゐるように、わしとしげとの間には子が無い。わしの代でこれまで続いてきた名主の家を潰しては、ご先祖さまに對して申し訳が立たぬ。そこで、しげの命を救つてくれた長八にと、いや、しげを助けてくれただけではない。小合溜井での長八の働きを平左衛門から聞いて、長八を養子にと、わしは思うようになつていた」

感情がたかぶつた十郎兵衛は、ここで絶句した。

「あの泥海の中で長八さんが私の手を握つて助け出してくれたとき、『ああ、やつと息子に会えた』と私は思いましたよ。ほとんど氣を失いかけていた私は長八さんがつしりした手に搦えられて、そう思つて安心したのです。どうか私の息子になつて、名主の家を継いでください。私は助けられたときから、ずっと、そう思つていて旦那さまに申し上げたところ、旦那さまも前々から

願いするこつた。それを養子は嫌だ、嫌だと言つていては駄だっ子と同じでねえか、……」

平左衛門のことばを引き継いで十郎兵衛は言つた。

「きくと夫婦になつて、夫婦養子になつてくれれば、こんなに嬉しいことはない。氣難しい惣右衛門をわしが説き伏せて、必ずうんと言わせる。なにかと言えば、鶴代、鶴代と御廻御用の御役目を笠に着る惣右衛門だが、わしの貴祿で押し切つてみせる」

そう言い切つて、十郎兵衛は長八の顔を見た。長八は目を開けて、十郎兵衛の視線を静かに受け止めていた。

「長八さん、おきくさんはお地蔵さんの涎掛けを六つもつくるてくださつたそうですね。おきくさんは涎掛けを縫いながら、きっと、こう考へていたと私は思いますが。七つめの涎掛けは自分の子に掛けてやりたい。お乳もいっぱい吸つて、丈夫で、すぐすくと育つて欲しいと願つていた筈ですよ」

「長八よ。お名主さまと奥さまが、これほどまで言つてくださるのだ。お前が黙んまりを決めていては、折角、だけえ幸運も逃げてしまふぞ。きくを嫁に欲しいなら欲しいと、はつきり言うだ！」

平左衛門のことばにも長八はしばらく黙つていたが、

かすかに唇を動かした。

「長八、しっかりしろ！。きくが欲しいとはつきり言つうだ！」

平左衛門は長八を叱咤した。それでも長八は、しばらく黙っていたが、ようやく小さな声で言つた。

「本当に、きくを嫁に貰つてくださいますか？」

「長八の口元をみつめていた十郎兵衛は、

「おう、おう。それは約束する」

と体ごと大きくなずいた。

「私たちに、して欲しいことはなんでも言ってください。私たちで、できることはなんでもします」

しげは長八を論すように、やさしく言い添えた。

「わしの家は水呑百姓でも、わしは総領ですからお名主さまの家に養子に入ることはできませんが、養子

に入る代りといつてはなんですが、わしの家の紋所の丸に一文字の家紋をわしの紋として使わしていただけないでしょか？……」

平左衛門から十郎兵衛の養子に望まれていることを聞かされて、長八は長八で考えていたらしく、十郎兵衛としげにとつて思い掛けない長八のことばであった。

「馬鹿こくでねえ。水呑百姓の紋所を使うお名主さまがどこにいる。いくらお名主さまと奥さまが頭を下げるからと言って、のぼせあがるのも、たいがいにしろ！」

長、長八！お、おめえ、なにさまだと思ってるだ

平左衛門は長八を叩かんばかりに怒った。

「まあ、まあ。平左衛門。そんなに、きつく言つては

折角、ほぐれかけた長八の口がまたとじてしまう。口が

とじれば長八の心が見えなくなる。それにしても、家紋を変えてくれとは思つてもみなかつた。しげ、どうしたものかのう。わしの家の紋は丸に鳥だが、……」

「ご先祖さまは子孫の繁栄を願つて、丸に鳥の文様を選ばれたのでしようが、なにが子孫繁栄ですか。私たちに子が無いではありませんか。そんな家紋は捨ててしま

い、長八さんが望むなら丸に一文字の家紋にしてもよろしいでしよう。要は家紋ではなく、七枚目の誕掛けを首に掛けた赤子をこの私が胸に抱けるかどうかです」

しげのきびしいことばに、十郎兵衛も平左衛門もこと

ばが無かつた。

しばらく沈黙が続いた。

「七枚目の誕掛けのために、家紋を変えるとしようかのう、……」

「それが、よろしくうございます」

苦渋に満ちた十郎兵衛の声と違い、しげの声は明るかった。

「あのう、……。わしの母親はどうなりますかのう。……」

「おう、おう。そのことよ。長八を産んでくれたおっかさまだ。名主屋敷にきて、わしらといつしょに暮してもよし。この場所に隠居所を建てるで、そこに住んでもよし。おっかさまの好きにしたらよい」

長八が遠慮がちに聞いた。

「おう、おう。そのことよ。長八を産んでくれたおっかさまだ。名主屋敷にきて、わしらといつしょに暮してもよし。この場所に隠居所を建てるで、そこに住んでもよし。おっかさまの好きにしたらよい」

の連続でした。長八がお名主さまの跡継ぎに望まれて、こんなに嬉しいことはございません。長八を殺して、わしも死のうと思ったことが何度もありました。死なないで本当によかったです」

みねはしばらく肩を震わせて泣いていたが、手拭いで涙を拭いて十郎兵衛を見上げた顔はきりりと、ひきしまつていた。

「お名主さま、長八がお願いしましたように、おきくさんと、どうぞ添わせてやつてください。鶴代さんと水呑百姓じゃ、月とすっぽん。どんなに望んでも、かなえられるもんではねえと、ほとんどやけになつておりますだ」

江戸でも、どこへでも駈け落ちしてしまえと、けしかけました。ところが長八には、そんな度胸がなく、いいえ、あとに残るわしのことが心配で、駈け落ちもできなかつたのだとわしは思つておりますだ」

「おきくさんのことは、わしらに任せなさい。男雛と女雛が揃つて、わしらも今から楽しみだ」

「それから、長八が家紋のことをお願いしたようですが、それは、どうぞお忘れください。長八は丸に一文字の家紋を誇りに思つてゐるようですが、それは家紋の半分の話に過ぎません。長八が産まれて、すぐ亭主が死にましたので、わしは長八に誇りを持たせようと思つて、小さいときから家紋の話を聞かせて育ててきました」

十郎兵衛は早口にそう言つた。

「これでどうやら、話はあらかたすんだ。急いできたために、長八のおっかさまを呼んできていつしょに話の中に入つて貰うのを忘れてしまつた。これまでの話を長八から話して置いてはくれぬか、……。そのあとで、わしらがすぐお願ひにあがる」

そういうことばを結んだとき、長八の母親のみねを軽んじたという後ろめたさを感じた。

「長八には、ああ言つたが、矢張り、長八が話す前にわしからみねに頼んで置こう」

長八の家を出ると十郎兵衛はしげと平左衛門に言つた。

「女は女同士。私が呼んできます」

しげは屋敷の裏の水塚に出掛けていつた。水が出て以來、村の年寄りたちをこの水塚の家に収容していた。

みねは部屋に入るなり、

「お名主さま。どうぞよろしくお頼み申しますだ」

小さい体をさらに小さく折り曲げて十郎兵衛の前に両手をついた。

「しげから話をきいてくれたかな。お願いするのはわしの方だ。折角、苦労して育てあげた長八を取りあげるようで心苦しいが、どうか勘忍しておくれ。長八を立派な名主に仕上げて、おみねさんにも喜んで貰おうと思つております」

「長八が産まれてすぐ亭主が死んで、これまで苦勞

（145）

みねから家紋には前段の名譽と後段の屈辱にまみれた日々があつたことを聞かされて、家紋の榮誉ばかりを聞かされて育つた長八が、なぜ家紋にこだわったのか、その理由も十郎兵衛には理解できた。

長八のご先祖は安房の里見義弘の侍大将佐久間長八郎

康正であった。

永禄七年（一五六四）正月、里見義弘は武藏国岩槻城主太田三楽斎とその一族の太田新六郎とともに、国府台の市川城に陣を構えた。

この報を聞いた北条氏康は一月五日に小田原城を出発し、翌六日のは江戸城に入った。

八日の早晩、利根川（現在の江戸川）の西岸に、北条氏の大軍は集結した。

忍びの者の探索で、里見義弘の軍勢が前夜のうちに市川城から退いたとの知らせに、好機到来と北条氏の重臣江戸城の城代遠山丹波守直景らは、がらめきの瀬と言われる辺りから利根川を渡った。

やがて、国府台の丘陵づきの崖下に達し、ここから曲がりくねった坂道を一気に駆け登ろうとした。

ところが、里見勢の退却は計略で、坂上には里見勢の伏兵が待ちかまえていた。その指揮をとったのが長八のご先祖の佐久間長八郎であった。

不意を突かれた北条勢は、その先頭に立っていた江戸城の城代遠山丹波守が戦死し、その他の兵も討たれた。

巳下刻（午前十一時三十分頃）であった。

客殿で昼食をしたためたのち、融海和尚に案内されて境内に出た。表玄関から境内中央の松の巨樹まで緋の毛氈が敷かれていた。

「みごとな松であるのう。先刻、山門を入れたとき、わしは小松の林と見紛うたが、一本の松が、かほどまで枝を横に広げているとは驚きである」

「恐れ入ります。樹齢四〇〇年、東西十四間、南北十三間の樹冠の繁茂面積が御座居ます。八代將軍吉宗さまが葛西領に御鷹狩りの際、当寺に立ち寄られてこの松を殊の外、愛でられ、日本一の名松である。仍って大閑の松と名付けよとのおことばをいただきました。以来、大閑の松と人々は呼んでおります」

「吉宗さまが名付け親か？ それにしても、大閑とは、よう名付けられた。あの樹幹の張り出し具合、大閑の大きい腹に似ておるわ」

蹲距した大閑の姿のように、地上から出た太い幹が地上三尺位の高さで肥大化し、膨れあがっていた。

大閑の松の巨幹は大人四人でも抱え切れないこと、その巨幹に刻まれた亀甲形の文様が雨に濡れると、青くあざやかに浮びあがってくることなどを融海和尚は得々と語ったが、正弘は聞いていなかった。

（家康公が江戸に幕府を開かれてから二百四十余年。この大閑の松の年齢まで幕府が続くとは、よう思われぬ）

緒戦の大勝に気をよくした里見義弘は、その夜の勝利の祝宴で、佐久間長八郎康正を関東随一の武者を讃えて、丸に一文字の紋を使うことを許した。

「里見家の余の家紋は、二つ引両（輪の中に横に二線を引いた家紋）である。そこに与えた家紋とよく似ておるわ。口を真一字にして、よく励めよ」

とのすことばまでいたいで、佐久間長八郎康正は大いに面目をほどこした。しかし、その夜、勝利の美酒に酔った里見勢は、北条勢の逆襲を受けて敗走した。

國府台対岸の笹ヶ崎村に土着し、名も長八と改めた。

「口を真一言字に結んで、土を耕せ！」

これが家紋にこめられた戒めであった。

「わしの家は貧しかったで、長八には家紋の誉れだけを聞かせておりやした。それが、お名主さまの家紋は使いたくないと言わしたのだと思ひます。よおく言い聞かせて、二度とそのようなことは言わせません」と、みねは強く断言した。

「長八のご先祖さまはお侍か。どうりで長八は人をまとめ、人を使うのがうまいと思っていた」

平左衛門はつぶやいて同意を求めるかのように十郎兵衛の顔を見た。

（阿部正弘が御膳所に当てられた善養寺に入ったのは、

南に北に、異国船が出没して、正弘を悩ましていた。
「伊勢守さま」

融海和尚の声に、正弘は我に返った。

目の前に、袴を着た男が平伏していた。
「余が伊勢守である。本日、上様ご不快につき余が名代を仰せ付かた。上様の御諭を読み聞かす故、とくと承れ」

ここで、正弘は奉書を開いて重々しく読み始めた。

其方儀東葛西領下之割組合大物代として、村々の融和を図り、治安の維持に尽力致し居り候

趣相聞、奇特の至りに候、更ニ、今般、江戸川増水に際し、水防二工夫を致し、洪水を防ぎ止めたる段、殊勝ニ付き、苗字帶刀を差し許すもの也、

弘化三年十月

白銀の下賜と思い込んでいた十郎兵衛は、思い掛けない苗字帶刀御免と聞いて、思わず顔を上げてしまった。奉書を折り畳み、胸に藏いながら正弘は十郎兵衛に笑顔を見せた。

「ご苦労であった。そのこれまでの御奉公、この正弘、しかと存じおる」

「は、はあッ」

十郎兵衛は平伏しながら御老中から声を掛けられた喜びと苗字帯刀を差し許された驚きに、体が震えた。

江戸時代、苗字帯刀は武士の特権であり、百姓・町人には許されていなかった。その百姓・町人に勲功と善行の褒賞として苗字帯刀が許されることがあった。

苗字帯刀を許されることは、百姓・町人にとって最高の名誉ではあったが、幕府にとっては令達するだけで、何等の資本も掛からなかったので、豪農の名主や富裕の町人に対する一種の懐柔策であった。

苗字御免を言い渡されて、十郎兵衛が最っ先に思い浮べたのは、佐久間という苗字であった。

長八のご先祖の佐久間長八郎を意識していた。

長八もやがて十郎兵衛を名乗るであろうそのときに、佐久間という苗字にいちばん懐しさを覚える筈だと十郎兵衛は考えていた。

今の中十郎兵衛は、長八が何を喜び、何を悲しむかを最っ先に考えるようになっていた。

それは、これまで赤子を抱いたことのない十郎兵衛としげの心のむなしさを癪すことでもあつたし、長八をいとおしく思う心でもあつた。

十郎兵衛から「佐久間」という苗字を聞いたしげは、「旦那さまが、ご先祖の苗字を選んでくださったと、長八もさぞかし喜ぶことでしょう」

と、すぐに賛成した。

「わしらのお名主さまが苗字帯刀を許されなすつた」

この噂はまたたく間に、広がっていった。

「苗字帯刀を許されたお名主さまに、御年貢の迷惑をお掛けしてはなんねえ」

百姓たちは、そんな思いで、たんぽに倒れた稻を刈り、稻架に掛けた。泥水から現れたばかりの穂は半熟であつたが、稻も倒れたりに稈を完熟させていた。

「百姓たちの稻にかける思いで、稻もきっと立ち直つてくれる」と、わしは信じております」

平左衛門の言った通りに、稻は立ち直って実を結んでいたのだつた。

水さえ出なければ、豊作に間違いなかつた作柄だけに、平年作の八割が見込めて、百姓たちは安堵し始めた。

（二割の減収ならば、なんとか凌げる）

と十郎兵衛も思い始めていた。

「長八ときくを夫婦養子に迎えるについて、ご隠居からよいお知恵をいただいてくる」

十郎兵衛は、しげにそう言つて表玄関に出た。

「いってらっしゃいまし」

玄関の式台に座わつたしげは、十郎兵衛の袴姿を見上げて、「よくお似合いで御座居ます」と、付け加えた。

十郎兵衛はうなずきながら両手を広げて、奴隸のよ

うに一回転して見せた。

「まあ、旦那さま、……」

しげは袂で口を押さえて笑つた。

（これも、長八のおかけ、……）

あの泥海の中で、長八がしげを探してくれなかつたら、長八の手がしげの手をガシッと摑えてくれなかつたら、きょうのこの幸せはなかつた。

脇差を腰に差した袴姿の佐久間十郎兵衛の姿を見ることは、できなかつた。

「弥七、旦那さまをお願いしますよ」

弥七を従えて、十郎兵衛は長屋門を出た。

西一之江村の隠居、高橋善右衛門は前の触次役で、十郎兵衛が触次役になれたのも、この隠居の推挙があつたからだつた。その触次役になり、なにかと苦労の多い毎日ではあつたが、それだけ生き甲斐を感じてもいた。

推されて下之割組合村の大惣代にもなり、さらに忙しさがまつたが、その忙しさに身を置くことが十郎兵衛の性にあつていた。

子のない淋しさを十郎兵衛は仕事の忙しさで、まぎらわしていたのだった。

もし、触次役にならなかつたならば、苗字帯刀を許され到底あり得なかつたし、大惣代にならなければ、このようすに弥七を供にして、腰に脇差を差し、袴姿で歩くこともなかつた。

こんにちの佐久間十郎兵衛が生まれるきっかけを作つた。

「水呑百姓の小作がお名主さまの養子になるなんて、しげが、みねを水塚に呼びにいったとき、最初のうちとんでもねえことでござえます。人には、もつて生まれた分というものがござえます。長八には、とてもとも、そんな分は、これっぽっちもござえません。せいぜい水呑百姓がいいところで、ござえます」

そんなおみねを、しづは根気強く説得した。

「おみねさん、こんなに反対するのは、旦那さまとわ
たしが嫌いなんだ」

しげが、おみねの説得に困り果てて、やや乱暴な口調
でおみねに言い返した。

「と、とんでもねえ。そ、そんなこと、これっぽっち
も考えたことはございません」

「おみねさんに嫌われているなんて、……。夢にも思つ
ていなかつたわ」

「お、おくさま。そ、それは、ち、ちがうだ。わ、わ
しは旦那さまとおくさまをありがてえと思うことはあつ
ても、嫌いだなんて思ったことはありませねえだ」

「なら、なぜ反対するの。嫌いだから反対するんじゃ
ないの」

「嫌いではねえす。嫌いだなんて思ったことはねえだ。
いつも、いつもありがてえと思ってるだ」

「ことばだけだつたら、なんとでも言えるわ。嫌いな
旦那さまと嫌いなわたしに、伴はやれないと思っている
んでしょ」

「お、おくさま。そ、そりゃちがうだ。わしは旦那さ
まもおくさまも好きだ。ただ、わしの伴の長八に旦那さ
まのような器量がねえと言つているだ」

「旦那さまもわたしも、長八さんはいまに旦那さまを
越える立派な名主さまになると言つてているのよ。おみね

さんは、長八さんの分、分と言つてゐるけど、長八さん
の運を考えたことがあるの。わたしが長八さんに助けら
れたのも運。長八さんがわたくしたち夫婦に見込まれたの
も運。長八さんの留守に、おみねさんの家が空き巣に入
られたのも運。それで、おみねさんをうちの水塚でお世
話したのも運。長八さんが鶴代の孫娘のおきくさんを見
染めたのも運。おみねさんが長八さんの母親だからと言つ
て、長八さんのこの運を止めるることはできないわ」

そう言って、しげは逆襲した。おみねが黙った。
「ねえ、おみねさん。おみねさんのお孫さんを旦那さ
まとわたしに抱かせてちょうどいい。そのためには、この
名主屋敷のすべてを長八さんに差し上げます。もし、わ
たたちが邪魔なら、わたしたちは、すぐにでも出でい
きます。でもね、赤ちゃんが生まれたときには、抱かせ
てちょうどいい」

そう言つた、しげの頬に涙が流れていった。

「お、おくさま！ そ、それほどまで言つてくださる
なら長八を差し上げます。どうぞ貰つてやつてください。
おきくさんことは、長八からよく聞かされていました。

おきくさんといっしょにさせてやつてください」

「おみねは両手をついて、しげに深々と頭を下げた。

「おみねさんも、ようやく納得してくれました」

十郎兵衛にそう報告した、しげの顔は晴ればれとして
いた。

(あとは、惣右衛門だけ)

十郎兵衛はそう思つた。

きょうの高橋のご隠居への挨拶にも、この惣右衛門へ
の口利きを頼もうと思っていた。

高橋のご隠居とわしのふたりが頭を下げれば、いくら
頑固な惣右衛門も首を横に振る筈はないと十郎兵衛は読
んでいた。そして、なによりも心強いのは、きっと長八
とが恋仲であることだった。

十郎兵衛は江戸川に背を向けて、しばらく浅間の森を
眺めていた。

「浅間の森の梢よりも、もっと高い大檜おおのぼりを立てて、
コノハナサクヤヒメにお礼を申しあげようと、心から思つ
ております」

高橋のご隠居の隠居所で聞かれた名主の会合で、そう
約束した自分のことばを思い出していた。

「この洪水を治めてくだされば、手水石を二基、奉納
します」

（大檜と手水石、……。長八ときくの婚礼がととのつ
たとき、何を奉納したらよいかのう、……）

そう考えるだけで十郎兵衛の心は躍つた。

(完)

祝出版

三戸岡道夫著

栄光出版社

1,500円

ねずみ小僧丸楠（二十一）



鈴木昭三

私達川の前のがき共は、折にふれ年寄り衆や若い衆からヤマノカミの話を聞かされたものです。話の中のヤマノカミは普段山に住んでいます。話を聞いてみると、ヤマノカミはカミと言う名はついていますが、学校の本にあった天孫降臨の図のように、雲の上に屯している八百万の神がみとは別の気がしました。ヤマノカミの所業には氣高さも神ごうしさもなく、神様と言うよりはむしろ人間に近いのです。

ヤマノカミはいたずら好きです。いたずらの標的は、村の中でも専ら山仕事衆であります。話の筋も大体同じようなものです。からかわれたり、いたずらされたりして困っている山仕事衆を、どこかに隠れて眺めて面白がっ

ているのです。ヤマノカミの仕業は人間の生命に関わるようなあくどいものはないようです。ヤマノカミの話には聞いている私達がき共がはずかしくなるような助平なものもあります。それからヤマノカミは酒が好きのよう

です。

ヤマノカミのいたずらは、私達川の前のがき共には愉快に感じました。話してくれる年寄り衆も、これはおれの父親から聞いた話だとか、これはおれが実際に体験した事だとか、前置してから語りますから、真実味があるのです。

ヤマノカミは、私達川の前のがき共には、同じ村に住んでいる仲間のような親しみを感じていました。

私達がき共がヤマノカミに親しみを感じているのとは意味は違うかも知れませんが、村でも山の講と称して年二回二月六日と十一月六日にヤマノカミを祭りました。

祭るのは主として山仕事衆を始めとして、材木、薪炭、しい革など山に関係している職種の人達でした。

この日それぞれの家いえでは、山の神としたためた奉書の前に、大人の顔程もあるつぶし餡ときな粉のぼた餅二個を一対にして三方に乗せ、清酒の入った一升徳利と共に供へて、家の者が柏手を打つて拝むのであります。この日は山に関わる業種の人達は、山に入ることを遠慮します。山の登り口には、しめ縄を張り、一升徳利を供えました。

山の講の日に私達川の前のがき共はうち揃って、同じ町内の山仕事衆の束ねをしていて、庄屋と呼ばれていた家に出向いて、切り分けたぼた餅を振るまってもらいました。庄屋の家の座敷では、配下の山仕事衆が賑やかに酒を飲んでいました。

「意地悪するヤマノカミをなぜ祭るぞらか」

ぼた餅をほおばっているがきの一人が不思議そうな顔をすると、地ごく耳がしたり顔で答えました。

「粗末に扱うとたたりがおつかないだつて。ヤマノカミは山仕事衆をからかっているくせして、自分じゃ仲良く遊んでるつもりだつてさ。遊んでやるお礼に、祭つてもらい、酒を飲ませてもらうの、当たり前だつて、ヤマ

ノカミはそんな風に思ってるらしいよ」

ヤマノカミは人間をからかうのは自分の務めだと思っているらしいのです。

当時の山仕事衆の弁当箱は、蓋付きの木箱の割り子を使っていました。中味は四合ぐらいの麦飯の上に、五つ六つの梅干がころがり、掌に山盛程のたくあん漬と、竹皮にくるんだなま味噌で、人によつてはそれに指ぐらいの大きな煮干が二つ三つ。でもその煮干は囲炉裏の大鍋の味噌汁の中で幾日も煮られて散ざんうますを絞りとられた末の出がらしの真っ黒く変色した煮干です。

飯どきになつて、山仕事衆が焚火を囲んで背負子に結いつけたり、背負籠に収めてあつた割り子をさあ取り出そうとすると、それがなくなつてゐるのです。或いはそれが元通りにあつたとしても、中味が空だつたり、木の葉や石ころに変わつてたりするのです。これだけの手のこんだいたずらはからすや狸の仕業ではありません。空きつ腹をかかえて悄然としているところ、突然高い立ち木の梢あたりから

「はらへつた はつはつはあ。はらへつた はつはつはあ」

と、村の衆とは柳揚もアクセントも異つた奇妙な声が、いつまでも響き渡りました。

この話はおたぎりさんの社務所で、氏子総代の年寄りから聞きました。聞いていたがき共はみんな押しだまつ

た後に、「ふーん」と溜め息をつきました。

「おじいさ、ヤマノカミがそんな、うまくもない弁当、ふんとに食べたずらか。おらいくら腹へったって、割子の飯なんか食べやへんわい」

地ごく耳が言つたのです。氏子総代は反論しました。

「お前らにやわからんのさ。山で食べりや、味噌もた

くあんも梅干も、鰯の味だ」

「じゃあ、おじいさ鰯を食べた事あるかえ、食べた事ありもせんくせして」

地ごく耳の言葉に、周りの他の総代衆から笑いがもれました。がき共も笑いました。年寄りの総代の日頃の暮しぶりから見て、鰯とは縁遠いと思われたのです。年寄りの総代は黙ったまま周囲の人達をいまいましげに見廻わしただけでした。

私達がき共はこの話でヤマノカミは意外に粗食なんだと知りました。

川の前の薪屋の若い頃の話です。

結婚したての頃、夫婦で山に入つて薪の束を作つていました。薪屋は仕事をしている中に急に気差して睦み合いました。気がつくと周りの立ち木の枝がざわざわと音を立てて振り動いていました。葉も落ちてきました。二人はそんな事一向におかまいなしでした。その中に枝から枝へ、まるで鳥が飛び移るよう、あちこちから声がするのです。「へたへた」「それそれ」「ああ又やりそ

した。

おきよめの酒とは、五勺ぐらい入る薬びん等に酒を入れて山仕事衆はいつでも持っているのです。山で古い大木を伐り倒す時や、なんとなく靈がこもつていそうな気味の悪い木や、昔誰かがぶら下がった事のある木とか、うつかり墓石を蹴飛ばしたり踏んづけたりした時など、まあ気持の悪いものにたずさわった時におはらいの意味で、持参のおきよめの酒をふりまくのです。

取り出したガラスのびんには何故か半分ぐらいしか酒がありませんでした。誰かに飲まれたのだと思います。私はその少ない酒を目の前にふりまきました。すると効果てき面、ぱっと道が現されました。

みんなでよかつたよかつたと喜んで歩いていると又、ぱっと道が消えたのです。おきよめの酒が足らなかつたのです。後の五人の山仕事衆におきよめの酒を借してくれたのみました。五人の酒びんは、いつか飲んでしまつてあって、みんな空でした。前の話の時にも言いましたが、山の中では、いくら急いでも決して道でない所は歩いてはいけないのです。私は一計を案じました。ヤマノカミは酒が好きで、夕方山を下る酒好きの山仕事衆の背中や肩に飛び乗つて、川の前のデパートに行って晚酌のコップ酒のお相伴にありつくものだと聞いた事がありましたから、わざと大きな声で後の山仕事衆に語りかけたのです。

ね」「そのいき、そのいき」「ダメダメ」

見られていると気づいて二人は飛び離れました。あたりに人影はありませんでした。

こんどは庄屋の話です。二、三年前の夕方でした。山仕事衆の先頭で山を下つていると、真っすぐの筈の道が妙な所で曲っていました。

道を間違えたかなと思いましたが、その道も里の方向に下りになつっていましたのでそのまま歩き続けました。すると又道が曲っています。これは狐狸に化かされたかなど初めて気づきましたが、もうあたりは暗くなつていました。後からついて来た山仕事衆と相談しました。だまされたとしても道から離れたら一番危険だから、道であることを確めてから歩こう、と決めました。暗い山の中を時どきマッチで足元を明るく照らして、道の上を歩き続けて、とうとう朝になつてしましました。山の中で一つ所をぐるぐる廻り続けていたのです。山を下り始めると、杉の梢で三、四羽のからすが一齊に鳴きました。

「ワッハッハア、ワッハッハア、ワッハッハア」笑つてゐる様に聞えました。

又、これは十日程前の事でした。やっぱり私が先頭で歩いていると、目の前の道がぱっと消えました。後の山仕事衆も、又やられたなと笑いました。ヤマノカミの仕業だと思いました。そうだまさはしないと、私は背負子のてっぺんにくくりつけたおきよめの酒を取り出しました。

庄屋の話を聞いた露人館の太平は梁山泊で校長にヤマノカミとの約束は守りました。

校長は笑つた後、暫く間を置いて答えてくれました。
「よその土地の事は知らないが、小田郷村には、今でも住んでいるかも知れないよ」

(つづく)



潮騷

錄(廿九)

鯨

游

海

奉祝沓澤孟先師古稀

平成十三年黄鐘

陽春白雪辯如風

筆墨翩翩無不中

再拜蘭亭舉杯舞

嬉哉孟子氣愈紅

押韻・風 中 紅

△沓澤孟先師の古稀を祝い奉つる

「陽春白雪」弁すれば風の如く

筆墨翩々として中らざるは無し

蘭亭に再拜して杯を挙げて舞えば

嬉しき哉孟子 氣愈々紅なり

〔注解〕

黄鐘は陰曆十一月。

陽春白雪は高尚な芸術の喻え。特に詩と音楽について云う。本義は楚の名曲の題名。筆墨は詩や文章。

歐狗蘭土國際機場始抱初孫

平成十二年臘月

迎客群中忽視珠
孫乎孫也放荷趨
柔哉溫矣團團重
君不看開口咲吾

押韻・珠 趨 吾

△欧狗蘭土國際機場にて始めて初孫を抱く

迎客群中 忽ち珠を見る

孫か孫なり 荷を放りて趨る

柔きかな温きかな 団々として重かりき

君看ずや 口を開けて吾に笑いたるを

〔注解〕

臘月は漢語で十二月。和語の師走。

空港のことを現代中國語では機場といふ。

団々は丸々と。

送出口嘉雄大兄歸北都

平成十三年辰月

花有雪霜人別離
春秋如夢盞無辭
東風度海柳翻頃
孰子遊吟啄木詩

押韻・離 辭 詩

△出口嘉雄大兄の北都に帰るを送る

花には雪霜あり 人には別離

春秋夢の如し 盞 辞するなけれ

東風海を渡り 柳翻がえる頃

孰が子ぞ遊吟するは 啄木の詩を

〔注解〕

起句は唐の詩人于武陵の名句、勸酒「勸君金屈卮」

滿酌不須辭「はならいでふくおもくひとうまれてつづる」

花發多風雨「ひとうまれてふくう」人生足別離「を踏む」

春秋は歲月。ここでは若かりし頃。転句は同じく唐

長女がニュージーランドで女兒を生んだ。私にとっては初めての孫である。空港のゲートを真っ先に飛び出した私。その途端群れる迎客の混雜の中に、眞珠のように愛らしい姿が忽ち眼に

踏び込んで來たのであった。訳す迄もあるまい。

☆初孫は団々として重かりき

異邦の空の青の眞中に

銀行の同期生である出口大兄がこの春故郷の札幌に帰るという。仲間数人でささやかな送別の宴を持つた。彼へのささやかな餞別の色紙である。

翩翩は文章や詩が美しい事の形容。史記・平原君傳「平原君翩翩獨世之佳公子也」。文才がありいきで姿形が美しいさま。

中は、ここでは動詞。中毒＝毒に中る。

蘭亭とは晉の王羲之が紹興の蘭亭に文士を集めて詩文を作った故事より。後「文学サロン」を寓意。

口語訳してみよう。

一度、高尚な芸術について話されたら、風の如く爽やかで博学であられ、一度筆を採って詩文をお作りになつたらその見事な美しさは喻えようもなく且つ正論を説かれる。今日、あの蘭亭かとまごう芙蓉亭で久し振りにお逢いし杯を挙げて舞つたら嬉しい事に先生はあの孟軻の如く氣概益々旺盛であられた。

☆さわくと松籜のごと語る君

筆めし卓意のさこそ高けれ

☆君行かば東風も吹くらむ海越えて
梅散りぬとも遊子慕いて

燐鳥井會館聽辻岡義一大兄出演慶應樂友

會合唱隊五十周年記念演奏會口號
平成十三年辰月

天女美聲仙境漂
雷神呼應慶雲飄
玉山欲倒千人唱
幽聞滿來調若潮

押韻・漂飄潮

△燐鳥井會館にて辻岡義一大兄の出演す慶應樂友會合唱隊五十周年記念演奏會を聴きて口号す

天女の美声 仙境に漂よえ
雷神呼応して 慶雲飄がえる
玉山倒れんと欲す 千人の唱に
幽に聞こゆ満ち来たる調べ 潮の如きを

〔注解〕

朋友辻岡義一大兄の歌は素晴らしい。果せるかな彼は慶應大学の合唱團出身であった。今もOB組織の合唱團「樂友會」で唱っている。この日東京赤坂

のサントリーホールに招待され、仲間達と彼の唱いぶりを拝聴した。プロの歌手や東京交響樂團も贊助出演する本格的な音樂の祭典に酔つた。

慶雲は瑞雲、めでたい雲。五色の雲ともいう。なお慶應の塾名も年号のそれも列子・湯問「慶雲」に由来する。

転句の玉山欲倒については、晉の嵇康が「酒を飲むといつも玉山のまさに崩れんとするが如く」陶醉したという故事（世説新語・容止篇）及びこれを引いた李白が「襄陽の歌」で「青風朗月不用一錢買玉山自倒非人推……と詠んだのを借りた。

口語訳してみよう。

女声合唱は恰も天女達の美声のようで、ここ仙境の如きホールにこだますれば、これに呼応するような男声合唱が雷神の轟ろくよう響き、五色の雲＝慶雲が眼上に飄がえった。私は千人に垂とする男女の美声の迫力に圧倒され、まるで酒に酔ったように陶酔の境地にさ迷い、幽かに満ち来る調べを聞いていると潮が満ち来るような心地がし陶然と酔うが如くであった。

☆満ち来れば忽ち干きて復寄する

厳しく甘く美しき声

讀論語

平成十三年巳月

燕居燭下繙論語
春懶犬眠妻弄針
恨是過半名語錄
一言一句興愈深

押韻・針

深

△論語を読む

燕居して燭下に 論語を繙く
春は懶うくして犬は眠り 妻は針を弄ふ
恨むらくは是れ過半なるかな 名語錄の
一言一句 興いよ／＼深かるに

〔注解〕

巳月は陰曆四月の事。燕居は、くつろいで休息する意。燕の字は①つばめの他に②宴（さかもり）③たのしむ、くつろぐ、やすむ等の意がある。また燕下は飲み込む意である。漢字は奥が深い。

さてここ数年来、私は論語に熱中した。伊藤仁斎が「最上至極、宇宙第一の書」といつただけの事はある。こんな面白い書物はない。病膏肓に入つて（左傳）拙論を書き世に問うた（まんじ前号に掲載）。

☆月おぼろ犬も居眠める春の夜

吾居眠めれず論語一句に

黒雲壓城城欲摧
甲光向日金鱗開

次に十七歳で韓愈に認められた端緒となつた詩「雁門太守行」の色彩をみてみよう。

大酒を愛し死ねば酒甕と共に埋めて

くれと遺言した）墳上の土に（がんもん）

（雁門太守行）

れた移住者でもありません。露国の民間商事会社の植民団でありまして、我が方より強く立ち退きを命ずるべきは、当然乍ら、直接に和人と交易をしている訳でないの事で、事を荒立てず、一切交易に応ぜず自然に退去するのを待っている次第であります、如何でありますか。」

と問いかけると、

主席老中松平伊豆守信明は、何にを自明の事を云うかと、今後の蝦夷地御用総理の戸田采女正氏教の方を向いて返事を督した。

戸田采女正は、

「近藤重蔵も弁えていようが寛政四年露国の使節ラクスマンが、正式に修好通商を求めて根室に来たが、幕府は鎖国の祖法を以って応ぜず、女王のエカテリーナ二世よりの国書も受理せず、宣諭使石川将監と村上大学を派遣して、唯、長崎への回航入港許可の信碑を与えたのみでした。

尤も、光太夫、磯吉、等漂民送還の礼として將軍より、米百俵、日本刀三振が送られた。

斯のように国と国とが通商修好の約束をすることは重大なのじや、従つて得撫島に居残つてゐる露人に、速やかに立ち去るよう、特に役人を派遣すべきであろう。」

「派遣役人を以つて、帰国退去を説論しても仲々応じない場合は、箱館に動員されている南部・津軽の勤番兵を向けて捕縛し、シベリヤの商事会社に通報し引き取り

本島のアイヌであろうが、択捉島・国後島、或いは樺太・千島列島南北よりカムチャッカ半島迄も行き来て狩猟・交易をしております。従つて領土意識や、国家社会の観念など、全く持たず、全てカムイの神の恵に包まれた天地に生きていますので、和人であろうが、露人であろうが珍しいものはお互いに交易して楽しんで居ります。従つて、露人とは交易するなど云つても効果はありません。寧ろ蝦夷本島は勿論、国後島や択捉島・歯舞色丹など、我が國の領土内で自由に交易し、アイヌが遠方まで交易に行かずとも、和人と共に楽しく暮せる郷土づくりが肝要と存じます。」

とアイヌに努力させるのでなく、幕府役人の努力すべきことと云つたのであった。

戸田采女正氏教は、

「左様、嘗つて松平定信公は、田沼意次の蝦夷地開拓計画に反対されて、蝦夷地は未開の仮にして置けば北方異族との緩衝地帯にして良ろしと申されたが、当時は、蝦夷地も渡島半島は、松平藩領で、東蝦夷や西蝦夷地等を指して緩衝地帯と目されていたようですが、今は明らかに松平藩領でも、蝦夷地御用で上知されたので、領有地とか国境の線を明らかにしていないようだな」と云つたので、近藤重蔵は、

「左様で天明六年（一七八六）最上徳内が蝦夷地見分隊の先駆けとして得撫島に渡り、得撫島東海岸ワニナウ

に来るよう勧告したら如何か」

と若干の牧野備前守忠精が云うと、

「いや、余り強硬に執行すると、赤人は銃などを持っているので、反抗して撃ち合いとなつては困る」と太田備中守資愛が制止するよう云い

「露人は野菜とか米とかの食料や衣服にも窮しているので、エトロフ・アイヌや、ウルップアイヌに露人と交易してはならぬと厳禁すれば、衣食にも窮している露人共は自ずと本国に引きあげるであろう。」

と云つた。

松平伊豆守信明は、

「左様、露人が遠く遙かに三百里の欧羅巴の露西亞本国より不毛寒冷の原野シベリヤを越え東海ペーリングや、カムチャッカや、オホーツクの海を越えて、千島列島に迄渡り来るのは貂や獵虎の海獸の毛皮を求めて先住民族を銃とキリストの神の名の下に屈従させ來つたのである。遠征に依つて巨額の富となる獸皮は山と積ましたが、偏頗な野菜不足の食生活で重症の壞血病者が続出し、病死したり仲間割れして引き上げたりして、現在は僅か夫婦者と子供達を含めて十七人と報告されていたが、肝腎の衣倉が窮すれば全員帰国するであろう。」

と云つたので、近藤重蔵が

「然し乍らアイヌは本来狩猲の民でありますので、土地の所有とか、他種族の支配など全く念頭になく、蝦夷

に残っていた、無人の露人植民団の住居跡を発見したが、安永四年（一七七五）より天明二年（一七八二）まで露西亞のレバデフ商事植民団が着島していたことを、残つていた十字架柱で知つたが、十字架柱には長さ四尺、幅一尺五寸程の板が打ち付けられ、三百字程の露文で九十五人の植民団が七年間の植民活動をした事が書かれてあつたが、露国の領有地と明記してある訳ではなかつたそうです。」

「左様か、商事会社の植民団であるから、分を弁えて領土の標柱を建て無かつたのである。然し我が方としては明確に領有地の標柱を建てるのが宜かろう。いずれにせよ、我が國の領土である事を示す標柱を建てよ。」

老中主席松平伊豆守信明も、

「左様、近藤重蔵が先頃送つて寄こした択捉島薬取のシャルシャムにあつた露西亞文字の十字架は、図によれば、三、四寸程の角材で高さも一寸程で、あつたな。」

近藤重蔵が寛政十年戊午七月に、択捉島のカムイワッカオイの高地に建立した大日本恵登呂府のような堂々たる標柱を建てよ

と松平伊豆守信明が改めて國家領土の意識を明確にして、国境確認の役人も派遣し、露人に退去するよう説論させよう。

国後島・択捉島・得撫島・歯舞・色丹は幕府の直轄地

で、得撫水道より以北の北千島の島々や樺太は、アイヌ共が自由に行き来する異国人との緩衝地帯としておけば良かろう」

斯うして、老中伺いの一議案に従って、六月に富山保高と深山運営等の役人をエトロフ島に派遣し、ウルツブ島に渡り寛永七年以来在営中の露人と対談して退去を諭し、同島のオカイワタラに「天長地久大日本属島」の標柱を建ててエトロフ島に戻った。

亦、翌二月二十三日蝦夷地奉行を置き戸川安論と羽太正養を奉行に任命し、五月十一日に箱館奉行と改称した。

第二の老中伺いの鯨漁については、山田鯉兵衛の資料が膨大であり、審議の内容から勘定奉行、石川左近将監忠房が加わるので、翌日の午後に執り行われた。

当日、松平伊豆守信明以下各老中が居並ぶと、石川左近将監忠房は一同に一礼して、

「本日は相役の中川飛驒守忠英は、他用にて出席できないが、本日の資料を充分に検討致し答え申し上げよう」と挨拶の後、直ぐ山田鯉兵衛が、

「国後島より択捉島の海岸には鯨群の遊泳多く、湾内に入つて陸に乗り上げ屍となつて異臭を発してコタンの者共を悩ましております。鯨は皮も肉も血油も骨も何一つ無駄にならず、アイヌにとつては、年一度子供連れの鯨が来遊することは喜ぶべき事乍ら、タンネモイ近くの

飯米 千二百四十三石五斗 衣類用具・器具
宿泊宿、作業場等に至る迄見積っていたが略す

細部に至る迄の見積に松平伊豆守信明は、

「山田鯉兵衛、克くぞ鯨漁の大仕事の予算をたてたが、大変な出費となるが、全て蝦夷地御用の幕府勘定の中で行なう訳ではなかろうな、今度の蝦夷地御用の予算の範囲の独立採算として執行できるのか」と難色を示した。

山田鯉兵衛は、「確かに初年度は大変な赤字出血となりましようが。

今年度の漁獲量全体は、今迄の原子的手摑み漁法と違って、漁網や器具を使っての、アイヌにとつては全く新しい漁獲法なので、漁獲量が倍増しておりますし、従前の場所請負商とは違つて、漁獲物を引受ける商人共も択捉島の交易は幕府の直捌であると自覚させて正当の取引値を以つて売り捌き、取引商人も、高田屋嘉兵衛や長崎屋半兵衛とか、加賀屋宇右衛門等が運上金を払つて売捌きました。

手前、山田鯉兵衛が計算しました各会所に入った運上金は総額十万両を越えました。

亦、横道に外れますが、多量に獲れた生魚は、魚粕や魚粉にして肥料とすれば、農作物を豊かにします。例えば水田一反に魚肥を八貫目施せば収穫は一倍になります。



海岸は、ザトウ・セビ・白ナガス等の大鯨が、湾内に溢れてアイヌ舟も出入りできない程で苦しんでいます。鯨漁の本職に任せると鯨船にて鯨突きの本職が鯨を突き上げ、鯨油を油絞する竈や、工場施設、器具等の見積を出した次第でござります、鯨突きの本職は、九州の平戸組、南部の宮古組等の組合を成して居りますが、九州平戸組が最も充実して居りますので、平戸組頭に見積らせました。次の通りです。

択捉島、タンネモイ鯨組見積

五月より六月、八月 百二十日間

一双海船（百石積、網十八反より廿反程の十八尋四方

八艘 但一隻に付水主十八人乗

一勢子船（一名追船、十六艘 一艘に付水主二人

一持双船（モツソウ船）六艘 鯨船三十艘 羽差一人

一団合船 五艘 於箱館にて打立候積

○羽差三十二人 ○水主四百五十六人

○魚切拾六人 ○筋こさげ拾七人

○鍛冶三人 ○桶方式拾人

以下 右の如く詳細に例記している。蝦夷人百人 小役人、医師迄用意し羽差水主四百八十八人

一反一石二斗の収穫が二石五斗程の収穫となれば一
幕府直轄領だけでも十五万石の增收となります。

魚粉は水田よりも棉造りの畑等により有効であります。

鯨漁は人的・物的に支出が一時に多量に使われますが目に見えない増収十五万石で收支の調整が肥れるものではありませんか。」

老中伺い列席の老中達は、經濟的計算には疎く、山田鯉兵衛が何にか強く鯨漁を実施しようとしているように思えて不安であった。松平伊豆守信明は魚獲物の売捌が全く松前藩の場所売り制でなく幕府の直捌である上に、高田屋とか長崎屋とかが多額の運上金を出して幕府直捌に応じているのも不安に思えた。

勘定奉行の石川左近将監も部厚な資料を持ち帰つたが、直ぐには結論が出ず、時期を失するようだった。

近藤重蔵は直ぐには結論が出ないと見て、択捉島の村の人別改めが中断されているので択捉島に戻った。

☆ 本号より最年少の同人を迎えた。宅見勝弘。三四歳。
 S・Eで銀行員。膨大細密な銀行の情報系、勘定系のデータを瞬時に処理するシステムの危機管理や安全対策を担当。一昔前には想像も出来ない第三の技術者。柔軟な発想、稠密な注意力、雄大な構想力、創造力や先見性。これは文学にも通じる。前号より参加「平成の『太陽の季節』」と評された中泉聖司共々新風よ吹け。
 ☆ 万葉集で開花した和歌はその後沈滯、子規によつて木端微塵にやつつけられ、どん底からアラギ派を梃として再生し、近代短歌の隆盛に至った。また詩経の四言詩は单调素朴の故に亡びんとした時、西域や南方の五・七言のリズムを知つて触発され、更にインドの音韻学の原理を導入変貌し、唐代に近体詩として華発いた。異質の物に接し混沌と模索の中から甦えつた。

☆ 文化も文明も組織も絶えざる自己革新を怠るとマネリ化し衰亡する。企業も官庁も王朝も国家すらも例外ではない。今、日本は国際化に立ち遅れ立ち竦む。

☆ 一方伝統も貴重である。全国至る所に簇生する同人誌。然し二〇年八〇号を越えるのは稀だ。さて、まんじが持続し得た秘訣は何だつたのか。更には先人達が嘗々と育くみ築いて来た特質・理念は何だつたのか。各人が抱く同人誌像は様々であろうし世代によつても異なるであろうがその方向を決めるのは同人自身だく)

まんじ 第81号

平成13年8月1日発行(非売)

発行人 三戸岡道夫(みとおかみちお)
 編集長 鯨游海(くじらゆうかい)
 事務局長 鍋屋次郎(なべやじろう)

(事務局) 〒223-0056 横浜市港北区新吉田町2477-3 太田善朗方
 TEL・FAX 045(544)5947

(郵便振替口座) No.00270-0-64592 加入者名 まんじ

(印刷製本) 大和印刷株式会社
 〒332-0031 川口市青木1-12-20
 TEL 048(254)3311 FAX 048(254)3313

表紙の絵について

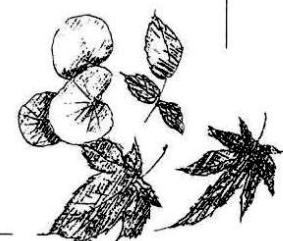
宮城正彦画
 仲間、継続、積年等をイメージして描いた(宮城)。限りない空想の世界に遊ばせてくれる作品(く)。

まんじ

No. 82

2001.11.1

まんじ第八十二号 目次



孫弟子の忠誠	下剋上と奴隸王朝	大田和貞
—米国テロより異文明史を考証する—		
政治家の条件	鉄砲と大砲の戦い	宅見勝弘
		新井宏
悪流修羅(第一部)	シナリオ 龍化妖姫(一) —周の幽王伝—	瀧澤中
		青木昭成
詩あどりぶ	相原精次	新井宏
	52	42
中泉聖司	青木昭成	31
60	50	25
中泉聖司	相原精次	17
三戸岡道夫	青木昭成	4
島津隆子	相原精次	
千坂精一	青木昭成	
島津隆子	相原精次	
98	青木昭成	
81	相原精次	
報徳の人 二宮尊徳(二)	島津隆子	
北条時宗とその時代(最終回)	98	
体当たり戦法を強制された 神風特別攻撃隊の人びと(五)	81	
泰山木(十二) —紙透小太郎の一生—	98	
ねずみ小僧丸楠(二十一)	98	
漢詩潮騒錄(三十)	98	
近藤重蔵・富蔵の生涯とその時代(三十一)	98	
鈴木昭三	98	
鈴木昭三	98	
鯨游海	98	
金子正義	98	
宮城正彦	98	
表紙・カット	98	
千篇萬律	98	
カット	98	
清木國男	98	
水トム	98	
鈴木正彦	98	
宮城正彦	98	
表紙・カット	98	
千篇萬律	98	
カット	98	



千篇萬律
表紙・カット

お ば ば



太 田 和 貞

「わしの跡取りの重兵衛を縄付なわつきもん者にはさせん」

そんな思いから東小松川村の名主久左衛門は、代官所に日参した。

初午の前日、祭り酒に酔った重兵衛、久兵衛、勘七、孫兵衛の四人が甚兵衛の家を壊わし、甚兵衛の母親のつねから訴えられていた。

重兵衛たちを連れて久左衛門が謝りにいっても、相手にして貰えなかつた。

「家の修繕費はいくらでも出す。訴状そじようは取り下げてくれぬか」

久左衛門がどんなに頭を下げても、つねは首を縦に振らなかつた。

「わしを後家だと思って馬鹿に、しくさつて」

そんな悪態をつかれ、塩までまかれて久左衛門はつねを説得するのを諦めざるを得なかつた。

その代わり、代官所に出向いて、つねからの訴状をお取り上げにならないようにと嘆願して回つた。

「あす、例の件でお手入れがあるぞ」

代官所の役人から耳打ちされて、久左衛門は顔色を変えた。代官所の役人たちには、久左衛門は音物ひんものを欠かさなかつた。

（それにしても、これまで代官所に対するわしのご奉公を考えてくれれば、つねの訴状ぐらい、わしの思わず通りに進めてくれてもよさうなものなのに……）

急いで村に帰りながら久左衛門は、そう思い続けた。

（たかが後家のひがみではないか、……）

そこまで考えてハッとした。

ニタニタと笑っている西小松川村の名主庄兵衛の顔が、急に目に浮んできた。

（うかつであった）

久左衛門は視線を足元あしもとにおとした。

つねの村の名主庄兵衛と久左衛門は小さいときから馬があわなかつた。同じ寺子屋に通い、まわりから仲の良い筆子同志と思われていたが、庄兵衛が久左衛門に嫉妬きどしていたのを久左衛門は知っていた。

「読み・書き・そろばん」で半歩、久左衛門の方が勝つていたし、ふたりの村の名前が東小松川村と西小松川村とに分かれていたことも庄兵衛の瘤かぶにさわっていた。

太陽は東から昇り、西に沈むから、おれは久左衛門には勝てないのだと子供らしい屁理屈へりくをつけていた。

そんな庄兵衛が、つねから訴状の相談を持ち掛けられたとき、「しめた」と思わない訳はなかつた。

今度の件で、願人ねがいじんがつねひとりならば、代官所も内々でつねを呼んで、和解になるように話を進めてくれたかもしれないが、願人に名主庄兵衛の名前が連記されていれば、代官所も庄兵衛を無視できなかつた。

（わしとしたことが、……早く気付いていれば、手も打てたのに、……）

久左衛門は悔やむばかりであつた。

久左衛門はこれまで庄兵衛を軽く見ていた。その庄兵衛がはじめて久左衛門に、はむかったのだ。

（そう簡単にすむはずはない。だが、わしも久左衛門だ。庄兵衛ごときに負けはせん！）

庄兵衛への敵愾心が燃えてきて、村に帰る久左衛門の

足も自然と早くなつた。名主屋敷に帰り着くと、久左衛門はすぐに重兵衛たちを呼び集めた。

「あす、御役人様がお前たちを召し捕りめりにくる」

久左衛門はそれだけ言うと、四人の顔を見回した。四人とも久左衛門と視線があうと、目を伏せた。

（意氣地いきぢのない奴らだ）

久左衛門は舌打ちしたい思いだった。

「重兵衛はどうする？」

久左衛門は息子に聞いた。

「はあ、……」

重兵衛は答えを探しあぐねていた。

「手が後ろにまわるぞ。それでいいのか、……」

「おらあ、嫌だ！」

「ならば、どうする？」

「…………」

「ばくち打ちではないが、草鞋くさびをはいたらいい。お前たち四人とも、この村から出るんだ。お前たちがいなければ、御役人様も縄を打つことはできぬ」

「わしら逃げても、よいかのう？」

「逃げてはならぬ。しかし、このまま村におれば、お縄なわを受けることになる。逃げるのではなく、村を十日程、留守にすればよい。その十日間のうちに、わしがつねの心をときほぐす」

四人とも、ほつとした表情をみせた。

「もし、つねの心が閉ざしたままならば、この久左衛門もお前たちといっしょに、お仕置を受けようぞ」

重兵衛たちだけに、縄目の辱めを受けさせてはならぬと久左衛門は考えていた。女房のおきみが亡くなつて三年。その頃からぐれ始めた重兵衛だった。

小若から若頭になつて、まともになり始めたと喜んでいた矢先でもあった。

（重兵衛に縄を打たせては、おきみに申し訳がねえ）

そんな思いも、久左衛門にはあつた。

きちんと正座している四つの膝の前に、久左衛門は一枚小判を二枚ずつ置いた。

「これを旅費にしたらよい。小岩・市川の御闕所のお取り締りは厳しいが、篠崎の渡しは近在の百姓なら関所手形がなくとも渡れる。下総に逃げ込み、成田参詣にまぎれ込んだらよからう」

当時、経済的に余裕を持つてきた江戸の町人や近郊農村の百姓たちは、信仰と遊山のために遠出の旅をするようになつた。特に、けわしい山もなく、女子供でも容易に行ける成田不動詣がさかんにおこなわれた。

江戸歌舞伎の名優、市川団十郎が成田山新勝寺に帰依したことでも大きな影響を持っていた。ちなみに団十郎の家の屋号は成田屋と称して、今に続いている。

「わしがお前たちにしてやるのは、ここまでだ。名

主の御闕所手形も書いてやりたいが、それはできぬ。あ

とはお前たちの才覚で行動したらよい、……久兵衛、勘七、孫兵衛よ。重兵衛を頼むぞ」

そう言つた久左衛門の声は、かすれていた。

「そう、そう。忘れるところであつた。村に帰つてきてよいときは、辻の六地蔵に赤い涎掛けを掛けて置く。涎掛けがなければ、村に入つてはならぬ。涎掛けがめじるし、決して忘れるではないぞ！」

初午の前日、杉森稻荷社の清掃と祭りの飾り付けを終えて、小若たちを帰したあと、若頭の重兵衛たちは拝殿の間に車座になつて、胸に風を入れていた。

四人とも紺の法被の襟に若頭と白く染め抜かれていた。この正月の総寄り合いで、組頭の喜左衛門から推挙されて、小若から若頭に昇格したばかりだった。

若衆組に入つて、五年が経つていた。重兵衛たちと若衆組にいっしょに入つた甚兵衛は若頭になれなかつた。ふだんはおとなしいが、一旦、酒が入つてしまふと、目がすわり誰彼なしに、「てめえ」、「馬鹿野郎」を連発して、喧嘩を吹きかけるので、甚兵衛が酒席でわめき出すと、「そら、始まつた」と誰もが甚兵衛の側に寄り付かなかつた。

酒癖の悪るさが甚兵衛を若頭にさせなかつたのだと、まわりは承知していた。

拝殿の間に車座になつた四人が、なんとなく、ぎ

こちないのも、若頭になれなかつた甚兵衛のことを考えていたためであつた。

「甚兵衛のことが気に掛つて、陰氣でいけねえ。お神酒をおさげ渡しいただいて、直会にするか、……」

重兵衛のことばに、「そうすべえ」と急に勢いづいて神前に供えられたお神酒をさげたり、三法に乗つていたするめを火にあぶつて、こまかく、さいたりした。

〔茶碗酒でいいな〕

「そうよ。小さな盃じゃ呑んだ気がしんねえ」

みんなの心から甚兵衛の陰気な影が消えて、この真つ昼間から酒が呑めるという喜びに、宵宮のような錯覚におちいっていた。

〔なおらい！〕

重兵衛たちは茶碗を高く上げて、そう叫んだ。

叫び終わると茶碗のふちに口を付けて、一気に酒を呑み干した。

〔うんめえ〕

「腹の虫が喜んで、キュウキュウ言つている」

「それにしてもよう。去年はおれたちは、まだ小若で境内の掃除をやらせられただけで、初午の飾り付けはやらせて貰えなかつたなあ」

〔初午だけじゃねえ。浅間神社の大轍り祭り、北野神社の茅の輪くぐりも、力仕事をさせられただけで、飾り付けは若頭のするのを黙つて見ていただけだった〕

「こりゃまあ、若頭が四人とは豪勢なもんだ。おれんちだつて初午の酒はあらあな。ちょっと寄つて、のどをしめしていっても罰は当たらねえぜ。それとも、小若の甚兵衛の酒は呑めねえっていうのかい。お高くとまつていると承知しねえぞ」

甚兵衛の言葉は最初から棘があつた。重兵衛は、しまつたと思った。杉森稻荷社を出たときは、甚兵衛の家を遠回りして帰ろうという気持ちはあつたが、茶碗酒と初めて着た若頭の法被の気持ちよさに、四人とも甚兵衛のことを忘れていた。

甚兵衛の家の屋敷森に似ているなど重兵衛が気が付いたときは、もう遅かつた。甚兵衛に見付かつて、嫌味な言葉が飛んできたのだった。

「お前にも声を掛けようと思つたんだが、……」
「見え透いた嘘はよしねえ。小若と若頭と一緒にしないでくれ。それとも小若のおれをからかおうというのかい、……」

「いや、そんなことはねえだ。小さいときから一緒に遊んだおれたちじゃないか、……」

「小さいときは小さいとき。今じゃ、小若と若頭の大きなちがいがあらあ。ふん、てめえたちの誰かが、おれの悪口を言いやがったおかげで、おれだけ小若のままだ。そのうち、この仕返しは、きっと返させて貰うぜ。おや、豆狸の孫兵衛、おめえ、若頭の法被がよく似合うじゃないか、……。ところで、まだ嫁かなめを貰つていねえところをみると、おめえが江戸で買った簪かんざしの貰い手がみつかってねえようだな。おめえから簪を貰つたおれの妹は、おれに簪をあずけると、さっさと嫁にいっちまつた。あの簪をまだ持っているのかい、……」

甚兵衛のいたぶりに、孫兵衛は嫌な顔をした。

「おふくろ、若頭四人さまのお通りだ。酒を出してくんねえ」

「氣持はありがてえが、まだしのこした仕事があるで、これで失礼するだ」

「なに、いってやがる。重兵衛、てめえ、いつからこのおれを仕切るようになつた。おれは小若でも、てめえより年上だぞ。喧嘩したって、相撲とつたって、てめえ

に負けたことなんかねえぞ。なんならここで、相撲でもとつて、おれが負けたらおめえの言う通りにしようじゃないか」

甚兵衛のことばに圧倒されて、重兵衛たちは渋々と甚

兵衛の屋敷内に入つた。

「さあ、さあ。遠慮しねえで畠炉裏に踏ん込んでくんな。初午といつても、まだ火が恋しいや。おふくろ早く酒にしてくれ」

「はい、はい。そんなに大きな声を出さなくつたって聞こえていますよ。折角、お寄りいただいても、なんにもなくて申し訳ねえだ。酒だけは、じゅうぶんにあるで、ゆっくりしていってくだっせえ」

母親のつねの運んできた膳からどじょう汁のいい匂いがしてきた。

「こりやすごい。どじょう汁ではねえか。しかし、甚兵衛、どじょうをとるのは、たしか御禁制だぞ」

「なにが御禁制だ。おれのたんぼの脇の用水堀のどじょうはおれのもんだ。おれはどじょうをとつたりはしねえ。用水堀に笊ざるを入れたら、どじょうたちがこんにちは、ご無沙汰しておりやしたと勝手に入つてきたんだ。それで、おれは長い旅でお疲れでしたと、鉄鍋の五右衛門風呂に入つていただいたのだ」

三代将軍家光は寛永五年（一六二八）に江戸周辺の農村一帯を鷹場に指定し、その村々に鷹場法度が触れられ

た。その鷹場法度のひとつに、つぎのような魚殺生禁止定書がある。これは鳥たちの生餌となる魚類を確保するため、魚釣りやかへどり（用水堀の一部をせきとめ、水をかい出して魚をとる）を禁止した。

びっくりする位のうめえ濁酒に仕上がつてゐるだ。それで、おれひとりで呑むのは惜しいと思つて仲間を探していたら、おめえたちが來ただ

重兵衛はチラッと甚兵衛の顔に視線を走らせた。

（どうりで、いつもの甚兵衛とちがつて、舌のすべりがなめらかだった）

と納得した。

この濁酒も、寛永十九年（一六四二）から、「當年より在々ざざにて酒造り申すまじく候」

と度々、禁止令が出されていたが、百姓たちはかくれて濁酒を造つて楽しんでいた。

特に、村の祭りには代官所も大目に見るのを知つていたので、百姓たちは競つて濁酒を造り、その味を自慢し合つていた。

「これは、うめえ。ええ味してゐるだ

重兵衛は思わず言つてしまつた。

「そうだろう。さあさあ、やつてくんねえ」

甚兵衛の調子のいい言葉に乗せられて、重兵衛は無意識に茶碗を差し出してしまつた。

（濁酒なら腹がくちくなつて、そんなに呑めねえ）

頭のどこかで、そんな算盤そろばんをはじいていた。

「どじょう汁ぐれえで驚いては、なんねえ」

台所に消えた甚兵衛が大きな甕かめを抱えてがに股で廻炉裏に近付いてきた。

「けさ開けたばかりの濁酒だ。味見して、このおれもすぐつた。

「けさ開けたばかりの濁酒だ。味見して、このおれも取るかのように言つた。

「そりやそろさ。用水堀の水を干して、底の泥を両手でかっぽって、とつたどじょうだ。ましいはずはねえ」

甚兵衛は、そう言うと満足気にうなずいた。

「どじょう汁のお代わりをしてもええかい？」

と聞いた。

「ああ、どんどんやつてくれ。おらとこの用水堀にはどじょうが、うんとわいているだ。鍋がからになつたらまたとつてくるまでよ。おつかあ、みんなにどじょう汁のお代わりを頼むぜ」

そう言いながら甚兵衛は甕から柄杓で濁酒をくんで、みなに配つて回った。

「うめえ濁酒とどじょう汁をご馳走になつて、ええ初午が迎えられる」

重兵衛たちが甚兵衛にあいさつして帰ろうとした途端に、甚兵衛が怒り出した。

「なんでえい。食い逃げかい。そりやあねえぜ、これから楽しくやろうと思っているおれを置いていくのかい。わかった。やっぱり、小若のおれとでは酒は呑めねえといふのだ」

重兵衛は、甚兵衛のトロンとした目を見て、
(長居しすぎた)と思つた。

甚兵衛に逆らえば、逆らう程むきになる性格を知つていた重兵衛は、

「ください。酔っぱらった重兵衛たちが家を壊わしたと泣き叫ぶで、わしは行つてみた。外側の下見壁や底が壊わされているのを見て、まずびっくりした。家の中に入つて、もっと驚いた。かまどの下の灰を撒き散らして土間と台所が真っ白になつていて。そこに釜や鍋が転がつていて目もあてられんありさまだ。いちばん、いけねえのは、仏壇と神棚を壊わしたことだ。おふくろさんがお代官さまに訴え出るとわめいても、無理ではねえ」

「仏壇と神棚を壊わした?、……」
「うんだ。家を壊わされただけなら我慢もする。しかし、亡くなつた亭主の位牌を放り出された上に、神棚まで壊わされでは、勘弁なんねえ。なにがなんでも重兵衛たちに、お仕置きしてもらうんだとおふくろさんは息巻しているだ」

久左衛門に、そう言われて、重兵衛はかまどの下の白い灰を思い出した。
「重兵衛、いっちょうど相撲をとつてみねえか、いくら若頭になつても、おれに勝てるはずはねえけど……」
甚兵衛はニヤニヤしながら重兵衛にいどんできた。
(どうせ、俺が勝つんだ)
という目であった。

「おもしれえ。その勝負うけた。三番勝負でどうだ」「おれは一番でも、三番でも構わねえ」
「畠戸裏の横座から土間におりようとした甚兵衛は体の

「そうじゃねえ。そうじゃねえ」と両手を左右に振つて否定しながら浮かし掛けた腰をおろした。
「そう、そう。それでいいんだ」

甚兵衛は両手を上下に振つて、みなに腰をおろさせた。重兵衛には悪いが、これからはおれに仕切らせて貰うぜ」

この甚兵衛のことばを重兵衛は、はつきりと覚えていたが、そのあとは記憶がところどころ途切れていった。

名主屋敷に駆け戻つてきた久左衛門の怒鳴り声に、重兵衛は叩き起された。

「重兵衛!。おめえ、なんの恨みがあつて……。あんなことしだ!」

久左衛門に怒鳴られても、重兵衛にはなんのことが分からなかつた。頭の芯がズキン、ズキンと痛んで重兵衛はこめかみに思わず手をやつた。頭の痛さが、甚兵衛と濁酒を呑んでいたことを思い出させた。

「甚兵衛に濁酒をご馳走されやしたが、……」

「重兵衛、なんにも覚えていねえのか。初午のお使いのおきつねさまに取つかれたような暴れようだ。四人の若者が暴れた位で、あんなに家は壊われはしねえぞ」

「わしらが甚兵衛の家で暴れた?、……」

「甚兵衛のおふくろさんが飛んできて、お名主さま見

平衡を崩して顔から土間に転げ落ちた。

「い、いてて……」

土間で額をすりむいた甚兵衛は、てのひらで額の傷を押えた。額から血がにじんでいた。

「縁起でもねえ」

甚兵衛はブツブツ言いながらかまどの下の白い灰をひとつかみ握ると、額の傷にすり込んだ。白い灰が額から胸元にかけてこぼれた。

「重兵衛、三番ともおれの勝だ。ほれ見てみろ。かまどの灰の白いこと。白い丸は勝、炭団は負けと相撲の世界では昔から決まつてゐる」

「なにをぬかす。白無垢の花嫁は、黒紋付の花婿に床角力で負けるわい」

重兵衛は負けずに、へらず口を叩き返した。

「孫兵衛は行司、久兵衛はかまどの白い灰で土俵を書いてくれ。勘七は手桶に水を運んできてくれる。わしらは四股を踏んで準備をする」

褲ひとつになつた甚兵衛は孫兵衛たちに仕事を言い付けてから四股を踏み始めた。

右足をあまり高く上げすぎて、甚兵衛はよろめいて、

「チエッ」と舌打ちした。

百姓仕事で鍛えられた一人の体はひきしまつていて、入念に四股を踏むにつれて、一人の表情がけわしくなつてきつた。

「ヨッシャー」

重兵衛が気合いとともに、土俵に入った。

渋団扇を軍配に見立てた久兵衛が「まだよ、まだよ」と二人の呼吸をあわせようとしたが、呼吸が合わずに仕切り直しとなつた。

手桶の水を口にふくんだ重兵衛は、「パツ」と水を土間に吐いた。四散した水は黒い斑点を土間に浮きあがらせた。

「パン、パン」と両手で顎を叩いた重兵衛は、甚兵衛より早く仕切りに入り、両手で甚兵衛の胸を突いた。

「まだ、まだ！。呼吸をあわせて、……」

久兵衛が重兵衛を止めた。三度目の仕切りで重兵衛はゆっくりと腰を割って、左手をつき、右手をついたとき、甚兵衛が突っ掛けってきた。重兵衛は、とっさに体を開いて甚兵衛の背中をはいた。

「勝負あつた！。重兵衛の勝！」

久兵衛は渋団扇を重兵衛に高くかかげた。
一瞬のはたきこみが見事にきまつて、甚兵衛は土俵の外に飛び出していた。

「はたきこみとは、乙なことをするじゃねえか」

甚兵衛は、にくにくしげに重兵衛を睨んだ。

「乙にからむのは、よしにしようぜ。土俵の外に飛び出りや、誰がなんと言おうと甚兵衛の負けだ」

重兵衛は負けずに、言い返した。

立ち重立った役人が屋敷中に聞えるように大声を出した。
「これは、これは。佐々木勘十郎様、このものものしこ様子はなんぞござりましょう」

久左衛門は腰を低くして聞いた。

佐々木勘十郎は代官所で、

「あす、例の件でお手入れがあるぞ」

と耳打ちしてくれた役人だった。

「おう。久左衛門か、西小松川村の後家つね及び西小松川村名主庄兵衛の訴えにより、重兵衛、久兵衛、勘七、孫兵衛の四名を後家つねの居間損壊並びに仮壇、神棚に対する不埒なる振る舞いについて、糾明すべく召し捕りに参つた。かくし立てをしては相成らぬぞ」

「滅相もございません。かくし立てなぞ、この久左衛門がいたしましょうか。お氣のすむように屋敷の内外をくまなくお探し下さい」

「さようか、しかば改める」

佐々木勘十郎の合図で役人たちは土足のまま、屋敷に踏み込んだ。それを見て、下男・下女たちが、「あッ」と声を挙げた。

「久左衛門に尋ねる。重兵衛はどこにおるか」

「これは異なることをお尋ね遊ばされる。この屋敷内におらぬ者をどうして久左衛門が知つておりましょうや」

甚兵衛は土俵に入るとき、パアーッと手にした白い灰を撒いた。塩のつもりらしかつた。

仕切る度に、甚兵衛が撒いた灰は土間を白くした。

「ハッケヨイ！。残つた。残つた」

久兵衛の掛け声とともに立つた重兵衛は、

（土間が、嫌に白いなあ）

と思つたのをかすかに覚えていた。

翌朝、まだ暗いうちに重兵衛たちは、ひっそりと成田に向つた。

久左衛門は見送らなかつた。

ヒタヒタと遠ざかっていく草鞋の音を床の中で耳をそばたてて聞いていた。

親爺は何も言わなかつたが、どんなにか、つらかったろう。親不幸な伴を持ってはじめて親爺の心が分かつた

朝四ツ（午前十時）ごろ、代官所の役人たちがあわただしく村に入つてきた。

顔をひきつらせた百姓たちが名主屋敷に集つてきた。
「騒ぐでない。万事、わしが応対する」

久左衛門は両手で百姓たちの動揺を制した。

「名主久左衛門の伴、重兵衛に問い合わせことがあるによつて神妙に出て参れ！」

「おらねば召し捕る訳にもまいらぬ。久左衛門、三日のうちに重兵衛、久兵衛、勘七、孫兵衛を同道して代官所に出頭することを申し付ける。若し、違背ある場合は急度、お咎めくださるものと心得よ」

「は、はーあッ。ありがたき仕合わせに存じます。久左衛門、必死に探索いたしまして同道する所存にござりますが、万が一にも見い出せぬ場合には、お日延べを願わしく存じます」

返事はなかつた。
しかし、佐々木勘十郎の表情からは、二日間ぐらいの猶予はあるであろうと久左衛門は思った。

「必ず連れて参れよ」

佐々木勘十郎は長屋門を出るとき、久左衛門にそう言った。
「は、はーあッ」

久左衛門は、さらに腰を低くして答えた。

（代官所に出頭してくれば、悪いようにはせぬ）

佐々木勘十郎がそう言つているように、久左衛門には聞えた。

「西小松川村の後家つね並びに西小松川村名主庄兵衛の訴えにより、……」

名主屋敷内に響き渡つた佐々木勘十郎のことばを久左衛門は心の中で何度も思い返していた。

(あれは、佐々木さまがわしに訴人は後家つねと名主庄兵衛だと教えてくださったのだ)と思えた。

久左衛門が推察した通り、庄兵衛がこの訴えに一枚かんでいたことが、はっきりした。

しかし、どこから手をつけていいのか、今の久左衛門には皆目、見当もつかなかつた。

(よもや、こんなことにならうとは、……)

寺子屋時代に、庄兵衛を冷たくあしらつてきた付けが今になって一気に噴き出してきた感じだった。

悪態をつき、塩まで撒いたつねがそう簡単に重兵衛を赦してくれるはずもなかつた。

だからと言って、庄兵衛にいくら頭を下げても、その昔、久左衛門がそうであったように、庄兵衛が久左衛門を冷たくあしらうのが目に見えていた。

久左衛門も庄兵衛も名主の伴であつただけに、二人は張り合つていて心を通わせることはなかつた。

笑顔を見せていても、いつでも心の中で、(ふん、なんだ)と毒突き合つていた。

(つねも駄目、庄兵衛も見込みなしとすれば、重兵衛たちへの訴えはどうなるのであろうか、……)

ここで久左衛門の考えは、どうどうめぐら堂々巡りを始めた。

(そうだ。寺子屋のお師匠さまにお願いしてみよう)

久左衛門は光明寺和尚の政寛を思い出した。光明寺と

「久し振りだったのう。久助」

顔をあげた老婆の顔は二十数年前に会つたときの顔そのままだつた。

「おう！ おばば！」

久左衛門は老婆にしがみついた。老婆に初めて会つたのは、久左衛門がまだ久助と呼ばれていたときだつた。

道端で生爪をはがして苦しんでいた老婆を背負つて納屋に運び、傷の手当てもし、食事もこっそりと運んだ。

「なにか困つたことがあれば、わしを呼びなされ。どんなに遠くにいても、必ず助けにきてあげる」

老婆はそう言い残して去つていった。

「おばば、いつまでも若いのう」

「いや、わしもとしをとつた。久助に会いたいと、この地に戻ってきたのがその証拠よ。屋敷内で役人がなにやら、わめいていたとき、長屋門のかけに隠れていたわたしに気付かなかつたようだが、……」

「おばばはあるのとき、……」

「なにもかも聞かせて貰つた。『必ず助けてあげる』と約束したのが、どうやら間に合つたらしいのう」

「お助けくださいますか、……」

「わしは久助に背負われたときのお前の背中のあたたかさを今でも忘れてはおらん。むさくるしい、このわしをいやがりもせずに、よくぞ背負つてくれたと、時折、思い返していた」

いう山号にも、久左衛門ははない希望を持った。
(この春に、お会いしたときは、お元気だった。お師匠さまはわしと庄兵衛の仲をとり持つてくれる)

そう思うと、久左衛門は心の中に希望のともしびがあるのを感じた。

(お師匠さまのお好きなお酒も用意した)

角樽つのる二本を持った下男を振り返つて、久左衛門は道をいそがせた。

「お会いしても、どなたか分からぬと思いますが、光明寺の大黒さんに玄関で、そう挨拶されて久左衛門は仰天した。

「半月ほど前に、中風で倒れましたが、まだどなたにもお知らせをいたしておりませぬ」

大黒さんが、くどくどと言ひ訳するのを久左衛門は聞いていなかつた。

持参した角樽は病氣見舞いとして納めていただき、久左衛門は病室を見舞つたが、お師匠さまのあまりの変わりようによく思ひ出せなかつた。

久左衛門はうちのめされた気持ちで、光明寺の玄関を出た。

山門の脇に老婆がうずくまつていた。

久左衛門は何気なく、その脇を通り過ぎようとした。

「久助！」

久左衛門は幼名を呼ばれたようで、足を停めた。

「あのようなささいなことを、……」

「ささいなことではないぞえ。あのときの久助のやさしい心根がわしを大きく包んでくれたのだ。人を思うやさしさがあれば、川の水が流れるようにもつれることもないわ」

「わたくしもそう思います。でも、もつれさせるのも人でござりますから悲しくなります」

久左衛門はしみじみと、そう言つた。

名主屋敷に着き、久左衛門が老婆を母屋に案内しようとすると、老婆は拒んだ。

「わしは納屋の方がいい。久助に助けて貰つたあの納屋で、久左衛門の悩みを聞こう」

その夜、久左衛門は老婆と一緒に納屋で夕食をとつた。

「えらく馳走になつた。腹の虫がびっくりしておる」

食事の礼を言ったあと、

「久助に助けて貰つたあのときは、わしは恐山おそれざんに修業にいく途中であった」と話し始めた。

「わしは小さいときから物を予見する不思議な力を持っていた。五歳のとき祖母が亡くなつたのをきっかけに、わしは祈禱師の道に入つた。占い、雨ごい、尋ね人や悪魔払いなどの祈禱をおこなう折は、瞼の裏に浮び上がってきたことを口にすれば、それがことごとく的中した。わしの評判を聞いて多くの人集まつてきたが、わしはむ

なしかつた。わしは亡くなつた祖母と話がしたかった。
そんな思いから恐山で修業することにした。恐山の五年

間の修業はつらかった。その荒行のおかげで、今ではあ

の世の人と自由に話ができるようになった」

「亡くなられたおばあさまは、いままにをなさっていますか」

「はずの花びらの上で、いねむりをしておるわ」

「それは、それは、平和でまことに結構なことでござりますか」

「うん。わしの話はこれくらいにして、久助の話を聞

こう。わしに話をするときは、わしを心から信じることだ。信じなければ、わしの靈感もにぶる。よいな」

老婆は久左衛門に、そう念を押した。

翌朝、五ツごろ老婆がつねの家に出向くとき、久左衛門にこう言い残した。

「これから一刻（二時間）ほどして、つねが長屋門の前をいったり、きたりする。三度目に長屋門に入ってきた、久助にあやまるであろうから、久助も腹に据えかねることもあつたであろうが、赦してやれ。つねが長屋門を出て、一刻したら久助は角樽二本を持って庄兵衛の屋敷にいくがよい。つねが万端、話をつけてははずだ。角樽二本は和解のしるし。和解すれば、両家とも繁栄は間違いない」

そう言われて、久左衛門は長屋門の前の通りを注視し

た。老婆が言つた取り、つねがやってきて長屋門の前を通り過ぎた。

（一回、二回、……）

久左衛門は心の中で数えていた。三度目に、つねは意を決したように、急いで長屋門に入ってきた。

久左衛門は玄関に出ていった。

「これは、これは。お名主さま、これまでのご無礼、心からお詫び申し上げます。死んだ亭主が出てきやすて、お名主さまに、はむかうとは、なんたることかと、ごしゃかれました（おこられました）。代官所の訴状も取り下げます。これこの通り、土下座してお詫びいたしますで、どうぞ堪忍してやってください」

つねは玄関の式台の前に両手をついて土下座した。

「重兵衛も、このわしも悪かった」

「滅相もありませぬ。悪いのはわしらで、お名主さまは何も悪いことはありませんだ」

つねは必死に抗弁した。

「これから西小松川村のお名主さまに、訴状は取り下げるごとをお知らせしようと思ひますので、これで失礼させていただきやす」

一礼して帰り掛けたつねの後ろ姿に、

「家の修繕費は、わしが持たして貰うぞ」と声を掛けた。

つねは前を向いたまま、ペコリと頭を下げた。

孫弟子の忠誠

大和禎人

てくる。

（やぶ医者め）

中山元^{はじゅ}は近ごろになつて両の肩の激痛に悩まされている。肩甲骨のあたりから首筋にかけて、それはほとんど慢性化したように、症状は変わらない。そつと横臥していれば幾分かは楽でも、日常の生活はそうはいかないから、苦しい。かかりつけの医師に診てもらつてはいるが、

「あなたもそろそろ年齢だから」と相手にしてくれない。レントゲンも撮つてもらつた結果、格別の異常はないという診たてで、湿布薬をもらつてはいる。

「まだ痛みますか、おかしいねえ」と、痛い肩を指先で押され、しまいになる。馴染みの医師だが、突き放されて恨めしい思いで帰つてはいる。

(あれだな)

「あれだな」と思い当たるのは日通の大型トラックで二台、粒粒辛苦の末に、送り出すことができた膨大な冊数の書物のことである。手弁当で日参し、まずカードを作り、分類して目録を作る労作の末、恩師の遺志に添い某私大に寄贈し、文庫とするための整理で、目録作成の大役をかれは果たし終えていたのである。同大にはすでに恩師にとても恩師にあたる方の文庫があり、これにならぶものとする企画の実現へ向けた作業だった。夥しい書冊の書棚からの上げ下しに、学徒の一人として学術書への興味にひかれる仕事に、夢中になつて労力を集中したのだ。やはりそれ以外には原因は思いあたらないのだった。

孫弟子、そして忠誠なぞという主題から想像されるこの小説の内容は、少なくとも現代ではない世界に相違ないと思われるに相違ない。だが、そうではないことはここまで叙述でおわかりいただけたことと思う。

古くさいようだが師弟関係は現代でも存在する、教えるものと、教えられるものの辯によって成立する。戦後に簇生した大学に学ぶ、浮薄な茶髪の学生であろうとも、教授との間には師弟関係は立派に成立する。ただし、師の影を三尺下がってこれを踏まず、といったモラルとなると、すこぶる怪しいであろう。さらに忠誠の二字を加えるとなると、ただごとではなくなる。

自分の死後を仮定し、蔵書の始末を生前に頼む心境がどういうものか、思いがけない話で、少なくともこの場の中止にとつてただちには理解に困難があった。

「先生、失礼ですが、死後とおっしゃると、なんですかお早いのでは……」

恐る恐るようやくかれはこんな言葉を口にした覚えがある。

「いや、君、そういうものでは無いんだよ、これは学問をするものの心構えのようなものなのだ、父子相伝で同じ分野の学究に跡継ぎが育つとは限らん、となると、惨めなものでね、一代をかけて収集した文献、書籍はたちまち散逸するのがオチです。わたしは何人もそうした人の例を見ています」

木内がそこでとりなし顔で言葉を挟んだ。

「先生の言うとおり、そうした例はいくらもある。まれには西洋史の村川堅固、堅太郎先生親子、東洋史では中州三島毅先生の孫三島一先生、神田喜一郎、信夫先生親子の例があり、また、わが木内の泰輔とわたしの場合、憚りながら辛うじて親子並ぶ例のようだが、一般にはそうはいかないほうが多い……」

「飛山先生は京城を終戦でお引き揚げに際し、多く蔵書を現地にむざと残ざる得ないお氣の毒の事情、恐らく断腸の思いでしたろう、文庫には内地のお宅に保存されていたものののみ、散逸を免れ文庫として今日あるのは

「黄河の流れ」という名著の誉れ高い東洋史の飛山教授は旧制富山高校教授から、転じて永く京城大学教授を勧められて、戦後は富山大学長を最後に、私大の東洋大學文学部に迎えられた。その教えを親しくうけた船山和英教授は官学九州大学、俗に言う九大を定年前に辞し、飛山教授の推舉により東洋大に迎えられている。この小説の主人公中山元は両先生の教え子だから、そもそも師弟関係にあつた両先生の薰陶をうけた孫弟子に相当するのであった。

「中山君、ぼくの死後は蔵書のすべてを飛山先生にゆかりの双葉学園大学のほうに寄贈して、尊敬する先生の蔵書を納める文庫にならぶ文庫としていただくようにお願いするつもりでいる、については君に迷惑でもわたしの蔵書整理をお願いしたい、家族にも言っておくから、寄贈の手続き一切をやってくれんか、よろしく頼むよ」

軽々にはなんとも返事の言葉に苦しむ大事であった。この場面に居合わせたものは双葉の副学長の木内勉、蔵書を受け入れる側のこの人物は実は中山とは同学同期であった。木内の父泰輔は飛山氏と同学の縁があり、私大を経営して今日を築いた人である。幾重にもこの場には中山を縛るしがらみがあった。

「君、こんど一度遊びに寄らんか、木内も来てもらう予定にしている、どうかね」

木内君の大学のお陰ですよ、わたしの収集は大先生を捕つてどれだけのお役に立つものか、危惧もありますが、わが家の息子は理系ですから、今のうちに方角だけは決めておきたい、そう思ってね」

胃潰瘍で胃の三分の一を切除したという船山教授は弱々しい衰えかたをしていて、すっかり窪ませた眼窩の底に、必死さを滲ませていた。潰瘍と言われたが、癌を病まれたものであつたかも知れない。教授はすでに密かな自覚をもつておられた、としか思われない。中山はその日を回想する時、今もって胸迫るものがあり、篤く己ごときに蔵書整理を囑する師の信頼に対して、身内に震えるような感動を覚えるいきさつだった。

ifの想定にもとづいた委嘱だったが、その日は意外に早く訪れた。船山和英という氏名に黒いサイドライン、あの計を告げる新聞報道が中山の目に飛び込んだ。大学の教授クラスについて扱われる数行の記事だ。

講筵の末席を汚したに過ぎぬと自覚していたかれだが、過ぐる日の教授の依頼に応え、かりそめとは言えぬ重い信頼に奮い立たねばならぬ日がきた。

「おい、中山よ、船山先生が亡くなつたぞ、あの日の約束は大丈夫だろうな、うちの大学の方の受け入れはいつも結構だ、骨折りは大変だと思うが、ひとつ頼んだぞ、おれは手伝いたくも、縛られていて動けない、だか

ら頼むぞ」

大学経営に携わる御曹子の気楽な声かけがあった。

「あの折、先生は奥様にきみのことは申し伝えておくという話だったな、おれの方からもあらためて今は故人の先生のご意志については確認をとつておく、近々きみの方からも、挨拶に出向いてくれたまえ」

飛山教授の文庫とならぶ、文庫創設のために蔵書をあげて寄託しようという、船山教授生前の遺言は二人の学者の間に結ばれる関係を考えるとき、単なる師弟という範疇を超えることに理解をもとめておかねばならない。

船山和英の出生届は大正十三年一月二十六日、朝鮮仁川府花房町の生まれとなっているが、母の証言では前年の十月二十六日が正しく、昭和天皇（当時皇太子）が関東大震災のため婚儀をこの日に延期したので、あやかり同日出生として届け出たものという。ために一年遅れで学徒出陣を免れる幸運に恵まれた。京城の小中学校を了え、京城帝国大学予科（旧制高校同格）文科乙類に入学したのが昭和十六年、まさに太平洋戦争開戦の年にあたり、昭和十八年九月、予科を繰上卒業、同十月、法学部文学科（東洋史専攻）に進み、早くも「城大学報」編集員として活躍したが、十九年十二月、一般徴集兵として馬山府の朝鮮第七二部隊（重砲兵）に入隊。最後に編集

大を退職するのだが、学者としての研究軌跡はおよそ飛山教授の足跡を襲うところ多く、終生の師として教授を仰ぐ姿勢は変わることがなかった。

主を失った書斎は不気味な空氣を淀ませていた。机上ばかりではなく、部屋中に累々と積み重ねられた夥しい書籍の山を見て、中山は暫し茫然とした。どこから手をつければ良いのか、途方にくれる思いだった。

師を慕いこれまで、年頭の挨拶などで訪れてはいるが、それは書斎の主が健在の時だ。主がそこにいて会話をかわす場合の充実した時間しか脳裏にイメージしていない。いま壁間に掛けられて微笑をかすかにふくむ師の遺影がある。それを撮影したのは実は中山だった。

「主人はこの写真が気に入つてました、あなたがお撮りになつたのでしたね」

夫人にそう告げられて、恐縮したことであった。和服姿の学者らしい、重厚な雰囲気がそこにあり、いま部屋の内に佇む中山をあらためて見下ろし、不肖の教え子に後事を託した信頼の眼差しに中山はたじろぎを見る。だが、同時に信託に応えなければならない、という決意を促されるようでもあった。

朝、六時には家を出た。ラッシュを避け、座席を占めること。二時間余りの通勤である。通勤と呼ぶに相応しい通

を手がけた「城大学報」を千人針に縫いこみ入隊した。二十年九月、敗戦により除隊、米軍により漢江以南に逐われ、苦難、変装して帰宅、後、父の郷里大分の四日市にたどりついた。昭和二十一年四月、九州帝国大学法学部史学科に転入学、翌二十三年九月卒業、無給の副手を経て、二十五年助手となっている。

ここまでの経歴で気づくことは飛山教授との触れあいは京城のきわめて短期間であり、九州大学（昭和二十三年にいたり帝国の称を省く）に飛山教授が富山大学長退任後、一時講師として九大に赴任され、再会することがなければ、両者の間の結縁は多分ひらけなかつたであろう。一期一会の縁と言つたような、人間関係のふしげがこのあたりに存在する。

飛山教授が富山大学長を定年で辞して、東洋大学に迎えられ、文学部教授を委嘱されたのは昭和二十九年四月であり、船山氏が助教授として着任したのはさらにその翌三十年四月であるから、推輓の那辺にあっての人事かを容易に察せられる。九大にあっての不遇から、私学とは言え、学者としての脚光をはじめてうける成り行きであつた。しかも飛山教授の昭和三十四年の没後はまもなく教授となり、立教大学、中央大学の講師をも兼ね、やがては東洋大の文学部長に就任するのである。

なお、晩節としては昭和五十年東洋大を辞して、中央大学文学部教授として迎えられ、定年により平成六年、同

い路であった。かれの住む横浜からは時間節約上、通過駅の多い東海道本線で新橋へ、乗り継いだJR普通電車では有楽町まで、あとは営団地下鉄有楽町線で氷川台までという経路を辿る。船山教授宅は練馬区早宮にあつた。駅弁を横浜で買って昼食用として携行している。足代とも約三千円を要した。すべて自弁である。

どれだけ時間をかければ良いものか、見当のつかない作業であつた。地道な根気のいる仕事であつた。

まずカードを作るのにおよそ二十日を要した。

船山家では教授が九大時代に結婚された数子夫人との交渉以外には他の家族との接触はなかつた。一女、一男と伺っていたが、すでに他に嫁し、また後継の方は銀行員と伺つてみると、教授が生前蔵書の始末について他への付託を考えられた思慮が理解できるのであつた。

（これは学問をするものの心構えのようなもの）

そして、

（父子相伝で同じ分野の学究に跡継ぎが育つとは限らない）

こう言われた故人の言葉が蘇る。悲痛、断腸の思いを察しなければならない。

しかし、幸い縁あつて、恩師飛山教授の蔵書を文庫として保管する篤志の大学があり、並ぶ文庫としての受け入れを約束された。冥すべき成り行きとしなければならぬ

ない。

夫人は教授の九大助手時代の苦節を知る人だ。

「ご迷惑をあなたに、申し訳ございません」

何べんもこの言葉は繰り返された。山積する書籍の整理に取り組む中山の姿には後光射す尊さを覚える。夫の教え子筋という、教師と学生の一期一会の縁だけで、無償の奉仕に遠く通い続ける、いったい、夫にそれだけの徳があったのだろうか。

「いいえ、わたしはもうリタイアして数年、毎日が日曜という身でございますから」

もとは教職の人と聞いていた。ともあれ夫の業績に尊崇を寄せての奉仕と考えねばならない。

「お茶にいたしましょう、少しお休みなさいませな」

「はい、どうぞお気づかいなさいませんように、わたしは駅で缶の飲み物を買ってまいりますので、お構いなくお願いいたします」

九大助手という身分の薄給の中、夫はたとえ高価でも金円に糸目をつけぬ買い物をしている。

（博多は田舎だ、欲しい本はなかなか目にふれる機会がない、新刊だって広告を見て数週間は待たされる、早いのは映画の封切りだけだ）

地方都市での^{りょうしょ}狹書の不満足を嘆いた夫だったが、東京の大学に迎えられてからは壇を切ったように買い物の時を過ごしている。

汗牛充棟^{かんぎゅうじゅうとう}の書斎の現状の大部分は主として昭和三十一年四月、東京の大学の助教授に登用されてからの涉獵^{しゃりょう}にかかるものだった。

「いかほど交通費その他をお支払い存じませんが、どうか当座の費用としてお受け取りになつてください」「いいえ、これでは多過ぎます、いただけません」夫人の差し出した五万円は返されてしまった。

中山はカード作りが一段落すると、しばらく在宅して、分類して目録を作る作業にとりかかった。

一 類目・目録・索引・書目等の部

二 和漢古書の部

三 故宮博物館・中国博物館の部

四 考古・文物／中国石窟／歴代石刻拓本の部

五 美術の部

六 講座・全集／敦煌講座等の部

七 歴史事典・辞典類の部

八 アジア史・概説の部

九 専門書・南海西域・シルクロード・内陸アジア・東西交渉史の部

十 考古・文物／辺境の部

等々以下三十四分類に及んでいる。

韓国から引き揚げに身命を賭して、リュックに重く詰め込めるだけ持ち帰った貴重な書冊もある。

四庫全書総目叙訳注などの読話会用のガリ版の珍物がある。一方には「洛陽出土歴代墓誌輯繩」「吐魯番出土文書」「居延漢簡」など考古・文物には貴重なものが網羅購入されています。

「魏書」「広弘明集」「歴代三宝記」「釈氏通鑑」「使西域記」「仏祖統紀」などにひろく比較考証して宋雲、惠生の西域旅行の年次に関心を寄せて神亀元年十一月出発（五一八）帰還を正光二年二月（五二二）とする学説を立て、また「魏書」西域伝をめぐり「北魏の西域交通に関する諸問題」、「魏書西域伝考」（1）（2）などの論文が多く、とりわけ北魏史に造詣を深められていた。東洋史家の論文集、個人全集もひろく配架されていた。所蔵の辞典類では満州語、蒙古語などを利用、研究の手をひろげておられたことがわかります。

先生の恩師であり、研究の先達、飛山先生については「黄河の流れ」解説・略伝、「渤海史考」の校訂・改題「渤海史上の諸問題」編集および、あとがき。などの論稿があります。

「東洋学の系譜」中の飛山喜一の項は船山教授が担当、精緻を尽くしております。その叙述の「黄河の流れ」初版の弥冨書房大正十五年の刊行の挿話として、父大和眞人の飛山さんとの関係に及び、その出典として平成七年

「奥さん、もう少しです、今日はカードのオチに気づきましたたしかめにまいりました」

「そうでしたか、わたしがお役にたちませんばかりに、お手数をかけます、申し訳ありません」

ワープロのキーを叩く作業が毎日続いた。フロッピーデスクに記憶させたものを呼び出し、前日の作業を点検チェックする。良しとなれば、ノンブルを入れて印刷する。

通し番号・書名・編集者・発行年月日・発行所の順にデーターを打ち込む。液晶画面と向き合う戦いである。もはやそれは戦いに相違ない奮迅の作業である。

カード記入の不備を発見する、そうしたカードは不審箱を用意してあって投げ入れる。再確認のため、氷川台へ足を運ばねばならない。その項目は一時ストップしておいて、別の項目に移る。不審カードがまた出る。うんざりしてそういう日に出会うと、作業を中断して気晴らしに散歩の杖をとる。近ごろ足の弱りがきている。屋内の作業に閉じこもりがちのせいかも知れない。

いたん書棚にもどし、また山積みの中から拾い出した

書籍をもう一度探し出すのは大変困難な仕事になる。うろ覚えを呼び覚まし、勘に頼って肝心の一冊を取り出すのだから時間がかかる。もどかしい思いである。

すべて蟻が塔を積むような根気を必要とする作業であり、日々であった。両腕はかつてない運動量を耐え抜いた。分類目録の作成によそ二〇〇日を要している。

大学の木内勉からは寄贈の荷物受領について、なんの挨拶もなかった。忙しいのだろうか。と善意に解し時を経るうちに、両肩に痛みを覚えはじめ、激痛の症状に悩むようになった。

そうした中山が姪の結婚という吉事に際し、無理をして甥の介添えもあって出かけている。その折の新幹線の車窓に駅ホーム、沿線の派手な広告を見て学園双葉の目覚ましい発展ぶりを認識させられた。医療、情報の二つの専門学校、大学院、四年制大学も十学部を数え、最近発展の浜松大学も傘下に入る模様で、東京の大学が少子化に悩む折、いち早くアジア系の留学生を受け入れるなど、経営の実権が老父の学長よりも副学長の木内勉にあるとすれば、その才腕は驚嘆に値し、学内総合センターに図書集中保管を計る構想とか、その後ようやく聞かされている。中山が右の所感にことよせの電話を入れたか

らだ。
「失敬、失敬、悪かったな、謝るよ、近いうちにそちらへ、と、言つても省略めぐりで忙しいんだ、ま、そのうち敬意を表することにするよ、悪い、悪い」

かつてのクラスメートの驕りの姿勢が受話器の向こうに浮かんで消えた。今の中山は次第に腹も立たなくなっている。人生観も年齢相応、それだけ練れて悟りの境地に達していたようである。

中山元は横臥するよりも楽なので、藤椅子に身を寄せて、さまざまな想念を弄ぶ日頃である。

いま健康上の不調に悩みながら、思うことは二人の恩師の墓参を実現したいということである。高輪、伊皿子先生の墓前に額^{ぬが}づき、蔵書整理、目録完成の上、ご遺志に添い双葉学園へ発送済みのことを報告したいと考えているのだ。だが、思うようではない、歯痒く無念である。
(H一三・九・二〇)

下剋上と奴隸王朝 ——米国テロより異文明史を考証する——

宅見勝弘



一、米国同時多発テロ

二〇〇一年九月十一日、アメリカで、ハイジャック機が世界貿易センタービルに突っ込むという未曾有のテロ事件が起こった。

テロで倒壊したビルには筆者の会社の知人も勤務しており、本人は奇跡的に助かったものの、このテロは決して別世界の事件では無い。

本章の執筆時（九月十四日）で犯人は確定していないが、アフガニスタンに潜むイスラム原理主義者の存在が浮かび上がっている。

第三次世界大戦は、イスラム文明（の一部の狂信者）と西洋文明との衝突から発生するかもしれない。第三次世界大戦の火薬庫にアフガニスタンがなる可能性がある。多くの日本人が犠牲になるかもしれない世界の衝突を前にして、イスラムについてもっと関心を持つことが必

要である。

本稿では、宗教について触れないし、ほとんどの善良なイスラム教徒を非難するのでも、イスラム文明を批判するのではない。

前半で「下剋上」について、日本の戦国時代から世界史全体まで言及してから、後半で最大の下剋上「奴隸王朝」という歴史を考証する。

二、世界史の下剋上

下剋上というと、家臣が主君を裏切って乗っ取るイメージが強い。

本来、下剋上は、社会的地位の下の者が実力で上の者に克（剋）ち、自らの地位を上げて行くことである。その意味では、日本では、水呑百姓の出身でありながら、天下統一を果した豊臣秀吉は下剋上の霸者であると

思う。

スペインが支配していた世界情勢を考えてみても、秀吉が覇者の名に相応しいと思う。

しかし、世界史全体でみると、下剋上という意味では、豊臣秀吉よりもスケールの大きい歴史が存在する。

農民でもなく人権すら認められていない奴隸が、新しい王朝を築き、自ら国王として君臨した。

歴代の国王も前国王の世襲でなく、別の奴隸がなって最高権力者となることを受け入れていたのであった。

これが「奴隸王朝」と呼ばれるものであるが、この王朝名は俗称でなく、歴史学上の正式な名称である。

三、下剋上の日本チャンピオン

下剋上の代表的な人物と言うと、北条早雲・斎藤道三・松永久秀などが挙げられる。

北条早雲は、京都辺りから小田原に流れ着いた素浪人であった（鎌倉時代の北条氏とは全く関係が無い）。足利将軍家の堀越公方を滅ぼし、小田原をはじめ、関東の大半を支配した。

斎藤道三は、諸国を回っていた油売りであった。最初に仕えた長井家の当主を殺し、守護代の斎藤の名を騙り、守護大名の土岐氏を追放し、美濃の国を奪い取った。

世界の中では、日本は未だ地位の低い邊境の野蛮な国ぐらの認識しか持たれなかつた。

当時、世界を支配していたのは、スペイン国王のフィリップ二世（フェリペ二世）であつた。

十五世紀末に、地球を南北に二つに分けて、発見した土地をスペインとポルトガルで山分けする、というトルデシリヤス条約が結ばれていた。日本はその境界線上にあつたのである。

十六世紀末にスペインはポルトガルを併合したこと、斐リップ二世は全地球が自分の所有物と思っていたであろう。ヨーロッパは他の国があつたが、南アメリカの諸国を征服し、オスマン＝トルコといったイスラム世界を征圧していた。

アジアにおいてはフィリピンを支配していた（フィリピンの名前はフィリップ二世から名づけられている）。

そのフィリップ二世に対して、秀吉はスペインを開城せよ、との手紙を送っており、マニラを通じてスペインに届けられた。その前にも、秀吉は天下統一した手紙を送っているが、フィリップ二世の手元に渡っている。

まさしく、日本という下位の国が世界を相手に下剋上を試みようとしたと思う。

秀吉の外国侵略に対する非難すべきであり、多くの人を犠牲にした罪は責められるべきであろう。

しかし、善惡の問題を置けば、下剋上の日本チャンピオンは豊臣秀吉であると思う。しかも、何のシード権も無く、一番下からトーナメントを這い上がり、世界チャンピオンを目指した。その点で、豊臣家を滅ぼした徳川家康よりも日本チャンピオンの名に相応しいと思う。

四、下剋上＝ルネサンス

下剋上の時代と呼ばれる戦国時代は、十五世紀の応仁

の乱に始まり、一世紀続くが、終りは諸説がある。室町幕府の滅亡、秀吉の天下統一、江戸幕府の成立、等がそうである。

一つの時代区分として、豊臣秀吉の天下統一までが下剋上の時代と考える方が良いと思う。下剋上の終焉としては、単なる政権の崩壊・誕生という事件よりも、天下統一という事件の方が時代の区切りを示しているであろう。

また、秀吉の人掃令（身分統制令）により、百姓が武士になるのを禁止し、生れた時の身分が固定するようになった。このことも下剋上の終りを告げると思う。

家康が豊臣家を破ったのは、あくまでも権力者同士の争いである。

この十六世紀という時代は、世界史上では、イタリアを中心ルネサンス（再生）と呼ばれる、文芸復興の時代である。

しかし、当時は、イタリアを巡り神聖ローマ皇帝とフランス王が争い、多くの小国家が抗争を繰り広げる「イタリア戦争」の最中であり、まさしく戦国時代であった。ドイツでもルターの宗教改革の時代で、「ドイツ農民戦争」が起り、戦国時代であった。

一方の日本は、応仁の乱で政治から逃げた將軍足利義政が銀閣寺を建て、東山文化を築いた。東山文化では和風住宅の基になる書院造といった建築技術が発達した。

松永久秀は、出自が不明であるが、將軍の家臣（細川氏）の家臣（三好氏）の家臣であった。主君の三好家の嫡子を殺し、將軍足利義輝を殺し、幕府の実権を握った。

豊臣秀吉は主君の織田信長を裏切っていないので、下剋上の代表と言わることはあまり無い。

しかし、社会的地位の下の者が上の者に克つという意味では、下剋上の覇者である。生れた時から死ぬ時までの社会的な地位の格差は日本人の中で最大であろう。

秀吉個人だけでなく、十六世紀末の日本と世界との関係を考えても、下剋上の覇者に相応しい。

秀吉の野望は日本統一で留まらなかつた。誇大妄想であろうが、本人の野望はアジア制覇・世界制覇であった。

秀吉は朝鮮出兵の時に、唐（当時は明）を手に入れる、と妻への手紙に書いていた。また、天皇を北京に置き、天竺（インド）を支配する、と養子の秀次への手紙に書いていた。

また、日本の伝統文化の茶道・花道も始まり、雪舟・狩野派といった絵画の発展もあり、狂言などの庶民文化も流行った。この文化は戊辰戦争の間も発展していく。

も流行した。この文化は戦国動乱の間も発展していく。文化だけでなく、戦国時代は、商業・工業・農業でも

飛躍的な進歩があった。商業面では信長の楽市楽座により自由経済になった。工業は、鉄砲の生産では世界最大になつた。農業は戦国時代の間に生産高が二倍以上になつた。

ルネサンスとは、旧来の格闘を否定して個人の能力の發揮を肯定したものである。まさしく下剋上はルネサンスと同様の現象である、と言える。

(なお、戦国時代や東山時代をルネサンスに例えるのは、堺屋太一氏・山崎正和氏の著書等にあり、オリジナ
ルなものではない。)

五 中国は下剋上の歴史

中国史にも日本と同じく戦国時代があるが、中国は最古の王朝交代から下剋上であった。

この中国の王朝交代のことを「易姓革命」と呼ぶが、天命が革^{あらた}まって王の姓が易^{かわ}る、つまり、天命を聞いた

よるものであつた。これは太平道たいへいどうという宗教結社が中心となつてゐた。

漢の次は、魏・吳・蜀の三国時代である。後漢から帝位を引き継いだ魏（曹操・曹丕）、蜀（劉備）、吳（孫權）の三つ巴の霸権争いであった。

魏が蜀を滅ぼすが、魏の將軍・司馬炎が國を奪い（形式上は禅譲^{じんこう}）晋を建てた。その後、晋は吳を滅ぼした。

四世紀初から、五つの民族と十六（實際は二十以上）の國が興亡を繰り広げる五胡十六國の時代が一世紀以上続いた。

晋は南に逃げて、東晋となつた。北部は北魏が統一した。北朝は北魏含め五王朝が、南朝は四王朝が短期間に興する南北朝時代が一世紀半続いた。

六世紀に北周（北朝最後の王朝）の外戚の楊堅^{ようけん}が帝位を奪い、隋王朝を開いた。その後、南朝を滅ぼし、天下統一をした。しかし、わずか三十年で滅びた。

隋の滅亡後、一時的に群雄割拠になつたが、
(高祖) が隋の帝位を奪い、唐を建国し、次の李世民の時代に統一した。

唐王朝は七世紀から約三世紀も続くが、途中の十五年間、皇后の則天武后が周（武周）を建てたので、一時中断している。

と言えば、誰でも下剋上ができるのである。

前八世紀に、幽王が「傾國の美人」褒姒に夢中になつて政治に関心が無くなり、周の国は傾いた。周は東に逃げ、東周となつた。

入った。なお、「吳越同舟」の吳と越との争いも春秋時代である。吳が先勝したが、越が逆転勝ち、越も楚に敗

前五世紀に、戦国の七雄と呼ばれる七国が霸権を争う
れた。

戦国時代に入った。春秋戦国として五世紀も続く戦乱の時代であった。前二世紀に、戦国の中國の天下統一を果したのは秦の始皇帝であった。秦の統一よりも注目したいのは秦朝末期の反乱である。「王侯将相いはずくんぞ種あらんや」という下剋上を表す言葉は、陳勝・吳広の乱を指導した陳勝の言葉である。

この反乱の初期に楚の名門の項羽を倒して、漢王朝を

築いたのは、農民出身の劉邦であった。なお、項羽は「虞美人」にとともに「四面楚歌」に囲まれ、自殺した。漢王朝は前三世紀末から約四世紀も続くが、途中の十五年間、皇后一族の王莽が新を建てたので、一時中断している。かんぱん

漢は宦官の支配により玉抜きになつて衰退した。漢の滅亡は、黃巾の乱（黄色の頭巾を被つた農民の反乱）に

唐が復活した。しかし、皇后の韋后が中宗を殺し、独裁化した。

韋后を殺した玄宗が唐を立て直したが、「傾国の美人」楊貴妃に夢中になって政治に関心が無くなり、唐の国は傾いた。節度使（地方の軍団長）の安禄山が反乱を起こし、鎮圧されるものの、皇帝を名乗った。

位を奪った。朱全忠の建てた後梁を含め、半世紀の間に華北で五王朝が交代し、十あまりの国が興亡する五代

十国の時代になった。
十世紀末に五代最後の後周の将軍・趙匡胤(太祖)が帝位を奪い、宋を建国し、次の太宗の時代に統一した。しかし、宋は軍人による反乱を恐れ、文人を重用した。

十二世紀に北方異民族の女真族じょしんが建てた金きんが宋を侵略した。宋は南に逃げて、南宋となつた。

その南宋もチンギス・ハンが率いるモンゴル帝国が滅ぼした。

した。元はモンゴル人を頂点とし、次いで色目人（外国人）、第三身分が漢人（金の住人）、最下層が南人（南宋の住人）とする身分制度を定めた。

しかし、元は一世紀も持たずに、滅びた。元の滅亡は、紅巾の乱（紅色の頭巾を被った農民の反乱）によるもの

であった。これは白蓮教という宗教結社が中心となつていたので、白蓮教徒の乱とも言う。

南人の乞食であった朱元璋（洪武帝）は明を建国し、モンゴル民族を北方へ追いやって、異民族の支配から脱した。明の支配は三世紀続いた。

しかし、明は宦官の支配により玉抜きになつて衰退した。十七世紀に李自成が率いる農民の反乱で明が滅びると、女真族の後金が侵略して、国号を清として支配した。

清も明と同じく、三世紀続いた。清滅亡の原因是、日清戦争はじめ多くのが、白蓮教徒の乱（紅巾の乱）とは別、同じく宗教結社が中心の太平天国の乱、西太后による皇后独裁等も挙げられる。

その後は、中華民国、中華人民共和国となり現在にいたる。

以上、王朝滅亡の共通原因を強調して記述したが、ほとんどの王朝が下剋上により成立している。

もっとも、金・元・清は異民族による侵略王朝であるので、成立の過程が他の王朝と異なつており例外である。

詳細に検証すると、例えば、春秋五霸は「尊皇攘夷」を唱えており、周王朝を打倒するというのでは無かった。

また、始皇帝は戦国七雄の一つ秦の王・政であり、当初より他国に従属していなかつた。

三国時代も、曹丕は後漢から帝位を奪つて魏を建て、劉備は流れ着いた先で蜀を奪つたものであるが、孫權は

吳の国を継いだものである。

則天武后的武周は判断できない。自分の子供を殺し、

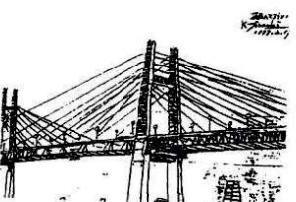
当時の皇后を犯人に仕立て上げるなどして、皇后の座、さらに皇帝の座まで奪つた（四千年の歴史で唯一の女帝として男性社会に対する下剋上と言つてもよいが）。

しかしながら、皇帝から家臣が奪つて建てた国や、戦乱の中から身分に関係なく実力で天下統一を果した国が大半を占めている。

南北朝時代等の戦乱の時代を除いても、周・漢・新・晋・隋・唐・宋・明は、下剋上により成立した王朝である。

南北朝時代等の戦乱の時代を除いても、周・漢・新・晋・隋・唐・宋・明は、下剋上により成立した王朝である。

政治家の条件



瀧

澤

中

(1) 「政治家悪玉論」は、国民の「逃げ」

テレビや映画に出てくる政治家というのは、だいたいが悪役です。

歳をとっているくせに脂ぎっていて、酒とタバコをバカバカやるくせに健康で、外に二号さんを持っていて、毎晩誰かと待ち合いで会つては、お金の詰まっている、なぜか風呂敷を受け取る、というおきまりの構図。

一部の政治家が待ち合を使つては、お金の詰まっている、なぜか風呂敷を受け取る、というおきまりの構図。まして、現金の受け渡しなど、ほとんどあり得ないと言つていでしよう。（最近の汚職は、現金よりも「情報」をやりとりしているケースが多いと言われています）。この件に関しては別の機会に稿をあらためたいと思います。

政治家は毎日汚職に励んでいる、というようなイメージは、ごくごく一部の不心得な政治家のお蔭でニュースになり、それが一般化している、と言えます。

しかし眞面目に仕事をしている政治家が圧倒的に多いのに、なぜそのような虚像が実像にすり変わってしまうのでしょうか。

一つの原因是、私たち自身が普段、政治家とのつきあいがない、というところにあるのでしょうか。

知らない世界について、マスコミから悪い情報が流れれば、それがすべてだと思い込んでしまう。

たとえば、大きな家電メーカーのクレーム処理係の人々が、消費者に罵詈雑言を言ったとします。

「あんた、クレームつけてお金が欲しいんだろ」これがニュースとして流れる。

その家電メーカーに勤めていない人たちにとっては、（あの会社はなんてひどい会社だ）

と思つてしまふわけです。

政治も同じです。

少数の例外を一般化してしまうと、本当の姿は見えてきません。

そこでここでは、そもそも政治家の役割とは何か、実際の政治家はどうに働いているのか、これから求められる政治家像とはどんなものか、についてお話しします。

まず、政治家についての先入観を無くして、読み進め下さい。

なお、ここで言う政治家は、選挙によって選ばれ、議席を得て活動する人々を指します。広い意味での政治家には、政治に影響を及ぼす各界のリーダーなども含まれますが、それはここでは除外します。

そもそも政治家の役割とは何でしょう。

それは、国民の意見を集約し、それを政治に活かしていく、ということです。

つまり国民からの要望をインプットし、政策としてアウトプットする働きがまず第一に上げられます。

第二は、啓蒙です。教育と言い換える構いません。政党の場合は機関誌の発行などをいますが、政治家は通常、自分の後援会などにあてて通信文を送ります。政策的なことを積極的に取り上げる政治家とそうでない政治家に二分されます。

また、小さな集会などをやって、政策を説明するという人もいます。

国会議員（衆議院議員と参議院議員）と、地方議員（都道府県議会議員、市町村議会議員）では、今上げた二つの役割以外に、政治家としての役割に大きな違いがあります。

本来、国会議員というのはその名の通り、「国」のことを考え、決める政治家のことです。

日本は軍事的にどのような立場をとるべきか。

日本は国際関係をどう考へればいいのか。

日本の国土発展のために、いまやるべきことは何か。日本の財政を健全化するには、どうしたらいいのか。

こういう「日本」という国全体の利益を考え、国全体の行方を模索するのが国会議員です。

有名な話があります。

「ワンマン」とあだなされた、吉田茂・元首相。ある時、選挙区の高知から、陳情団が来ました。

「吉田先生、どうかここに、鉄道を通してもらえませんでしょうか」

吉田茂はその計画書をチラと見て一言。

「それは、県会議員の仕事でしょ。そちらにお頼みなさい」

ちなみに、吉田茂は一度も落選したことはありません。これが国会議員です。

ただし、では地元に橋や道路を作らせる議員は全て悪なのか」というと、一概にはそうとも言えないのです。

まず第一に、橋を作れ、と言ってくる人がいるから、政治家は橋を作る訳です。つまり、依頼者と実行者の関係がここには存在します。一方的に実行者だけを悪と決めつけるのは、どんなものでしょうか。

第二に、国会議員が動きでもしないかぎり、絶対に作られないモノというのはあります。田中角栄・元首相の地元、新潟県のある豪雪地帯の山村では、「陸の孤島」と言われて、冬に病人が出ると、医者のいる町まで一日かかりで山を越えなければならなかつた、という場所がありました。田中角栄・元首相は、政治力でそこにトンネルを掘り、その山村では冬でも安心して暮らせるようになつたのです。

第三に、その橋やトンネルや道路が、日本全体の国土発展にかかせない工事であった場合は、やはり国会議員の仕事ということになります。

こういう国土発展のための公共事業については、財政再建・構造改革の中でやり玉に上がっていますから、しばらくは表立つて、新幹線などを誘致することはなくななると思います。ただほとんどの公共事業について、その工事に従事する人たちに対しても、

「もっと公共事業を持つてくるから、私を支持してほしい」

と頼む議員たちを見ていると、ああこの人たちも「国会」議員ではないな、という感じがします。

最も問題なのは、第一の、国会議員にこういう陳情（お願い）をする一般の人々がいる、という現実です。議員は誰でも、いつまでも、当選し続けたいと思いません。それを否定するつもりはありません。普通のお店だって、なるべく長い間商売が出来るように努力をするのですから、政治家も同じことです。

しかし、政治家には、他の職業には見られない倫理觀が求められています。

私が言う倫理觀とは、単純に汚職がいいとか悪いとか言う以前の問題で、国会議員ならば国会議員として、日本という国家全体の利益を常に念頭において、政治活動を行う、ということです。

「当選しなければ政治家として活動できないから、まずは当選のことを考え地元利益を国益より優先するんだ」ということではない、という意味です。

しかし、人間は完璧ではありません。

政治家も人間ですし、仕事というのはどんなものでも、どこかでバランスをとりながらやるもののです。

大抵の政治家が、国益優先をしたいと考え、現に国益を考える政治家もたくさんいます。しかしそういう政治家も一人の人間。地元から「是非とも」と言われば、橋をつくる口添えくらい、と考えてしまうものです。

ちょっとぐらい、いいじゃないか、と思うかもしません。

たしかに、一人の国會議員がちょっと口をきいて、地元に小さな橋を一つ掛けたとして、別に日本がどうなる、ということはありません。しかし、すべての国會議員がそれをやつたら、どうなりますか。

「人がやれば、

「あっ、オレもやろう」

と思うのは人情です。

こういうことをやらせないためには、議員個人の資質ももちろんですが、そもそもそういうお願いを、有権者が議員にしなければいいのです。

民主主義は民意を政治に反映する政治ですから、国民からの「陳情」にも、大いに耳を傾けなければいけません。しかし、陳情の中身が問題なのです。

「汚職議員を落選させよう」

という運動があります。また、選挙公約を守らなかつた議員を公表することもあります。

どちらも、間違っているとは思いません。しかし、出来れば、

「汚職しない議員を応援しよう」

とか、

「公約を守った議員を表彰しよう」

いま、小泉純一郎首相が選ばれて、何かが変わるのではないか、という期待感があります。

それは、選ぶ側の意識が変わったからです。

小泉純一郎が首相になったのは、政権与党の自民党で総裁になったからです。

その自民党的総裁選で、事前の予想では、党内最大派閥の橋本派、その領袖である橋本龍太郎が圧倒的に有利、と言わっていました。投票は、国会議員一人が一票づつ、都道府県が三票づつ、というものでした。

業界団体に強力な影響力をを持つ橋本派が、地方の組織をフル活用したにも関わらず、それまで業界の利益を代表してきたような党員たちまでもが、雪崩をうって小泉純一郎と投票したのです。

自民党中央の体質が変わったのではありません。また、自民党的政治家たちが大変動したわけでもありません。

現に、橋本派の国会議員の中で橋本龍太郎と書かなかつたのは、二、三名と言われています。

変わったのは何か。

変わったのは、「有権者」である一般の自民党員なのです。この自民党員の意識が変わったことで、小泉純一郎首相が誕生したのです。

これは単に、一自民党だけの話ではありません。

「痛みを伴う改革を行う」

という動きがあつてもいいのではないでしょう。あるいは、この議員は国會議員として素晴らしい決断をした、ということを認めるのもいいでしょう。

何が言いたいかといいますと、政治家を良くするのも悪くするのも、国民だということです。

国民が政治家を作り、国民が政治家を育てる。政治家が国民に対して啓蒙を行うように、国民も政治家に対して、影響力を行使すべきなのです。

もういい加減に「政治家悪玉論」から卒業して、私たち自身の責任で、良い政治家を選び、育てようではあります。

政治家悪玉論は、すべての政治的責任を、政治家個人に向けることによって、国民自身がまったく傷つかない、という、いわば国民の安全弁のような働きをしています。

確かに悪い政治家もいます。

しかし、どう考えてみても、選んだのは私たち国民です。

「今の政治は良くない」=政治家が全部悪い=私たちに責任はない」

という論理から導き出される結論は、政治家を変えれば国が良くなる、ということです。

しかし、政治家を選ぶべき国民の意識が変わらないのに、政治家の顔だけ取り替えてみても、なにも変化は起きません。

（2）どんな人が政治家に向いているのか？

通常、痛みを伴うなどと言えば、選挙の票は減ります。

かつて大平正芳が消費税導入を表明して臨んだ選挙で、自民党は大敗しました。

しかし、時代は変わり、国民の意識も変わりつつあります。

甘言を弄するような政治家と訣別する時が、ようやく訪れたよう気がします。

私たちは、「政治家悪玉論」から脱却し、新しい時代にふさわしい新しい政治を生むために、新しい政治的意識を持とうではありませんか。

（2）どんな人が政治家に向いているのか？

どんな職業にも、適性はあります。

政治家にもそれは当てはまります。

ここでは、政治家が持つべき資質についてお話しします。

マックス・ウェーバーというすぐれた社会学者がいました。

彼が提示する政治家の条件というのは、

● 責任感

● 熱情

●先見性

の三つです。

しかし彼は二十世紀初頭に活躍した人ですから、現代の政治家の資質としては、もう少し付加しなければならないと思います。

まず、政治家として根本的に必要なのは、肉体的にも精神的にも、強いエネルギーを持っているということです。

何をするにしても、エネルギーの小さい政治家では仕方がありません。

その上で、政治家の役割を考えた時、つまり、國民からの意見・要望集約という機能を考えると、國民世論に対して、常に敏感でなくてはならない、つまり感受性が鋭くなくてはならない、ということが言えます。

次に、集約された意見を政策に活かしていく実行力ということになると、折衝力や交渉力に長けていることも大きな要素になります。さらに、國民に対する教育・啓蒙という役割を考えると、弁舌や文筆といった自己表現力に優れていることも、大切でしょう。つまり、大きなエネルギーを持ち、感受性が鋭く、自己表現力に長けているということが、政治家の機能面から考えられる適性と言えます。

の肉親がもつ「無条件で受け入れてくれる優しさ」と、父親や祖父という男系の肉親がもつ「愛情に裏打ちされた厳しさ」です。

大野伴睦という自民党的副総裁をやった昔の政治家は、前者の「無条件で受け入れてくれる優しさ」型政治家でした。頼まれるとどうにも嫌と言えない。自分はついに総理・総裁にならなかつたけれども、その人柄を慕う政治家や支持者が多くいました。

逆に、あの五・一五事件で殺された犬養毅という人は、支持者にとっては「愛情に裏打ちされた厳しさ」型政治家と言えるかもしれません。とにかく選挙運動など何もしなくても当選してしまう。地元では、「神様」扱いまでされていましたが、犬養は決して支持者を甘やかすことなく、正しく日本の進むべき道を獅子吼する、というタイプでした。大野も犬養も、親しみやすさという点では共通しています。

大野は「伴ちゃん」というあだなで呼ばれ、犬養も小さな政党を運営して、仲間から決して見放されることのなかった人です。

二つ目の「威厳」というのは、親しみやすさと矛盾するように思えます。しかし、威厳は単に威張っているということではありません。畏敬、敬愛の念を人に抱かせる、という意味で

これらに加えて、政治家個人の性格の面から考えてみましょう。

政治家という仕事は、多くの人から話を聞き、多くの人を説得し、多くの人を動かし、そして多くの人に成果を報告するという必要です。この際、つまり多くの人と接する時に必要な性格は、どのようなものでしょうか。

まず、人柄が重要です。人から好かれなければ、何も始まりません。

ここに私は、二つの一見矛盾する、しかし絶対に必要な政治家の資質について触れます。結論から言うと、

●親しみやすさ

といふものです。

人から好かれるにはまず、身近に感じてもらえるような人柄でなくてはいけません。つまり、偉ぶらずに庶民的であり、ユーモアと官僚的でない話ぶりができる、といふことです。

親しみやすいということは、自分に近い、あるいは自分が好ましく思う人と同じである、という雰囲気がなければなりません。

通常、人が好意を持つのは、母親や祖母といった女系

最近の政治家に最も欠けている一つは、この威厳です。この威厳であります。

畏敬や敬愛というのは、何か行動や言動があつて、その結果として生れるのではなく、理屈以前に、それこそ会った瞬間に惹きつけられてしまうというようなものです。

その命令を自分の軍に伝えに行つた男が、自分はまた西郷先生の所に戻る、と言うのです。俺たちと逃げよう、と説得する同志に、彼は

「西郷先生と一日接すれば一日の愛情が芽生え、三日接すれば三日の愛情が生れる。もはや自分は西郷先生と離れる訳にはいかない」

という意味のことと言います。

大西郷と今の政治家を比べるのは少々酷ですが、しかし畏敬や敬愛というのは、自分でそうなろうと自覚して磨けば、意外と理想に近づけるものなのです。

西郷隆盛の従兄弟に、大山巖という人がいます。西郷が死ぬまでは、剽輕で明るく、冗談ばかり言うような人間でしたが、西郷が死んでからは寡黙になり、やがて日本陸軍の元帥となつて、日露戦争の、現場の最高指揮官

となりました。

大山巣は西郷隆盛をいい意味で意識していました。西郷亡き後、自分が西郷の遺志を継がなければと、自分の性格を見つめなおしたのです。

結果、その部下の誰もが畏敬の念を持ち、ロシア軍の猛攻で「敗北か」という緊急事態の時に、大山巣が顔を出しただけで参謀たちは落ち着き、ついに日本は勝利を得ました。

身近に感じる親しみと、畏敬の念を抱かせる威厳を併せ持つて初めて、本当の意味の「大物政治家」と言うことができるのでしょう。

さて、資質について書いてきましたが、さらに政治家の持つべき「美質」について言及したいと思います。

それは次の二つです。

●清廉

「政治家は宗教家や教育者ではないのだから、倫理だ清潔だと騒ぐ必要はない」

という議論がかつてありました。確かに、倫理的に正しいかどうかが全ての判断基準となることは、政治にとって好ましいとは言い切れません。だいいち「倫理」と言つ

約束を守る、ということです。
逆に、出来そうにないことは、はっきりと「これは出来ない」と言うことです。

出来的る、とウソをついてはいけないです。

「誠実そう」と、「誠実」は違います。

政治家は国内はもちろん、対・外国との約束事など、真の意味で誠実に対応しなくてはならないことが多いのです。

政治姿勢として誠実であるには、元の人間が誠実でな

くては、絶対に出来ません。
求められる美質として、清廉と誠実、この二点を上げておきます。

(3) 政治家の使命とは

政治家、というか、リーダー全般に言えることですが、物事に躊躇する人間はそもそも指導者には向いていません。

こんな話があります。

第二次大戦中、日本海軍奇跡の作戦と言られた「キスカ撤退」の指揮官・木村昌福中将の逸話です。

あるとき、木村昌福の乗船する軍艦に、敵の魚雷が、それも左右から同時に迫って来ました。

操舵手は、木村の操舵指示を待ちます。

た時に、その基準が曖昧です。

がしかし、もし「汚職をしない」ということが倫理基準の一つだと言うのならば、それはその通りです。

政治家は国民のある種の象徴です。

「国民が政治家に対して厳しい、俗な言い方をすれば「キツく当たる」のは、それだけ政治家に対して期待感があるからです。

長野県出身、というだけで、甲子園で長野県代表校を応援するのですから、まして自分が選んだ政治家には、活躍して欲しいし、立派であって欲しいと願うのは当たり前です。汚いことをしない政治家だから、国民は汚いことを頼まない、ということも言えます。ですから、倫理上などという堅苦しいものではなく、政治を正常に機能させるためにも、つまり汚職につながる陳情を受けないためにも、自ら常に律していなくてはなりません。

誠実、というのはどうでしょう。

ウソをつかない、約束を守ると言い換えてもいいかもしれません。

誠実というのは、一所懸命ということと若干意味が異なります。

出来ない事でもとにかく懸命にやる、というのは、少なくとも政治的には誠実と言えません。

誠実の実は、実る、つまり実現する、ということです。引き受けたら実現することが、誠実というものです。

左右どちらに舵を切っても、魚雷は避けられそうにありません。

が、木村昌福は瞬時に、

「面舵いっぱい」

と呼びました。

操舵手は復唱して直ちに舵を右に切りました。すると、魚雷は幸い右側に逸れて、船は無事でした。

「なぜあの時、面舵ならば大丈夫だとわかったのですか?」

部下がそう尋ねると、「なあに、どちらに切ったってぶつかるなら、私が言えば他のやつの責任にはならんだけれど」と、木村は言ったのです。

おそらく木村昌福は、部下の責任を回避させることと同時に、躊躇して確実に艦が沈むよりは、どちらかに思い切り舵を切らせればあるいは、という気持ちがあったに違いありません。

政治的な判断にも、こうした事態は起こり得ます。躊躇することでその政治家自身への信頼感は失われ、事態は悪化し、得るものはないと言えましょう。

では一体私たちちは、どんな政治家を選ぶべきなのでしょうか。

政治家の役割や資質については既に触れました。ここ

でさらに大切な、政治家の使命についてお話しします。

一つは、政治家は常に、国をまとめていくという使命を帶びています。

もう一つは、政治家は国と国民の平和と安全を確保していかなくてはなりません。

この二点に触れない政治家、この二点を知らない政治家は、政治家とは言えません。

「主婦感覚で政治を行います」
「自衛隊はアジアの脅威です」

こういうことを恥ずかしげも無く言える政治家は、もはや選ぶに値しないと言ってさしつかえないでしょう。

まず主婦感覚とはなにか。

主婦感覚というものが、主婦を含めた一般国民の家庭生活の実情を言うのならないのですが、主婦の価値観だけで政治を行うというのであれば、夫や父、隣人の感覚や価値観はどうでもいいのでしょうか。

おそらく、主婦感覚を売りにする政治家は、「そうではない、家庭生活全般を言うのだ」と反論するでしょう。

あるいは、家庭生活を支えている柱は主婦だ、と言いたいのでしょう。

確かに、主婦も家庭生活を支えていますが、夫も支えているし、年老いた父母も違う意味で家庭を支えています。

意図的に反発する人々は、やはり政治家としての使命感に問題があります。

「自衛隊があるから、戦争に巻き込まれる」
「自衛隊があるから、戦争に巻き込まれる」
という論理の展開もありますが、それならば、世界じゅうの軍隊を持つ国はどこでもその危険をはらんでいることになり、日本だけの特殊な事情ではない、と言えます。少なくとも、安全保障に関して一切発言しないか、あるいは日本をことさら特殊な国に仕立てて、「日本を軍隊のない素晴らしい国にしましょう」などという無責任な理想論は、評論家や学者ならいざ知らず、政治家としては不適任と言わざるを得ません。

こうしたことから言えるのは、選ぶべき政治家というものは、
「政治家らしい政治家」ということです。
政治家らしい政治家とは、国をまとめることが、國の平和と安全保障に努めること、この二点の欠如していない人です。国政を司る以上、「国家」という視点の欠如していない人です。
さらに言えば、政治家としての人格、風格を持った人です。

威厳や親しみやすさの所でも触れましたが、人々を掌握する力のある人物こそが、求められる政治家像であつて、決して素人っぽい、自分たちの周りにいるお兄さん、

さらに聞きたいのは、その主婦感覚の中で日本という国はどんな位置づけになつてているのか、ということです。

普通、主婦感覚と聞けば、そこから歴とした国家觀を感じ取ることはできません。主婦感覚で国家財政をどう見るのか、主婦感覚で日本の安全保障はどう考えるのか。

別に主婦感覚でなくてもいいのではないか。

もし、「店の主人感覚で」とか、「サラリーマン感覚で」政冶をします、という人がいたら、どうでしょうね。

あるいは「お坊さん感覚で」「町内会感覚で」でも同じです。何となく違和感があります。

それは、私たちが政冶を、特に国政を、もっと大きなものだと感じているからです。

大きいということではありません。ただ、家庭生活や家計簿の問題は、国家財政やあるいは国の安全保障といった大きな問題の中の一部である、という考え方は出来ないでしょうか。

つまり、国家という視点が抜けていたら、政治家のそもそもの使命である、国を統合するという機能、国をまとめていくという発想 자체が出てきません。

また、「自衛隊はアジアの脅威です」と臆面もなく言う人々もいます。それが他国の人ならわかるのですが、日本人が日本の自衛隊を「アジアの脅威だ」とは、どういうことでしょうか。

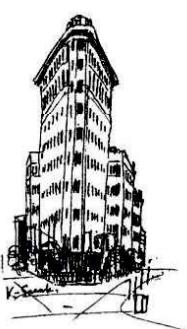
政治家として、国の安全保障に興味のない、あるいは

お姉さんではない、ということです。

私は、国家意識のない素人に国政を預ける勇気はありません。

国家と言うとすぐに、強権的で高圧的なものを連想しますが、現実に私たちは日本という「国家」に住んでいます。他国と比較して、別になにも変わったことはありません。国民がいて領土があつて政府がある。普通です。ならば、国家というものについても、他国と同じ程度に意識し、国家について考えることは、軍国主義や全体主義とは何の関係もありません。

いま、求められている政治家は、正に政治家らしい政治家なのです。そしてそれを出現させられるのは、私たち国民自身なのです。



鉄砲と大砲の戦い



新井 宏

慶長三年（一五九八）八月十八日、伏見城に秀吉が没した頃、第二次朝鮮侵略（慶長の役・丁酉再乱）で、朝鮮南部海岸を占拠していた日本軍は、またしても李舜臣により制海権を奪われ、補給面で苦しめられ、戦線の縮小を余儀なくされていた。

第一次（文禄の役・壬辰倭乱）の場合とは異なり、講和後の権益として、朝鮮半島南部を実質支配する目的があり、各地に強固な日本式の城郭を築き守りにも力を注いでいた。それにもかかわらず、前年末には、築城成ったばかりの蔚山城が、明・朝鮮連合軍に不意をつかれ包囲され、さすがに加藤清正でさえ死を覚悟したほどの苦戦を味わっている。その時はぎりぎりの状況になつてやつと黒田長政や毛利秀元の援軍が到着して明・朝鮮連合等は崩れ去つた。しかし戦局は日増しに日本側に不利になつていた。

そこに秀吉の死の知らせである。釜山近くにいた、機

を見るに敏な武将たちは、秀吉没後の政局のため、いち早く帰国したが、西側地区の順天城や泗川城で明・朝鮮連合軍に対峙していた小西行長や島津義弘たちは厳しかつた。海上封鎖で、日本への道は閉ざされていた。

しかし、日本側は陸戦では強かった。十月一日泗川城に立てこもつた島津勢は一万たらずの軍勢にもかかわらず、十倍以上の明・朝鮮連合軍を迎え撃ち、わずかな犠牲を払っただけで記録的な大勝利を得る。三方を海に囲まれた丘陵に築いた日本式城郭・泗川城（船津里城）は、敵を引き寄せては鉄砲で狙い撃つ戦法に実に効果的で、その後の朝鮮の築城史を一変させたほどの影響を与えた。近くには、明・朝鮮連合軍の四万人の犠牲者を葬つた大きな塚がある。

一方、順天城を守る小西行長ら一万三千も十月二日に陸海から激しく攻撃を受けるが、十月八日になると主力の明陸軍が戦意を喪失して撤退してしまう。

この勝利で日本は明・朝鮮連合軍との間に和議を結ぶ。陸戦の勝利のお陰で、何とか日本へ安全に帰国できる日途がついた。

しかしおさまらなかつたのは李舜臣である。順天城の海上封鎖をかえつて強化して、小西行長らの日本への撤退を許さない。

この頃、泗川城で大勝した島津義弘は既に帰国のため与善島に集結していたが、そこに小西行長らが順天城に閉じ込められているとの知らせが入る。このままでは補給のない日本勢は全滅するしかない。島津義弘は諸将と協議し、全軍あげて順天の救援に向う。

そしてついに慶長三年十一月十八日両軍は露梁海峡で激突した。島津側は五百隻の船の大半を失うほどの犠牲を出したが、李舜臣も銃弾を受け亡くなる。その間に小西行長らはようやく脱出に成功する。諸将我先に逃げ去る中での島津義弘の義挙であった。

韓国の英雄はなんと言つても李舜臣である。文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）の時、侵略してきた日本軍と十度戦つて全戦全勝している。日本軍が水上で戦つて勝つたのは、第二次侵攻（慶長の役）が始まつた直後の巨済島の海戦だけで、それは李舜臣が同僚から大功を妬まれ讒言により白衣従軍（一兵卒として従軍すること）に貶められていた最中のことであった。その後、三道水軍統

制使に復した李舜臣は残存のわずか十二隻の亀甲船を率いて、珍島付近で百三十三隻の日本水軍に攻め込んで三十一隻を大破し大勝利している。

それにもしても、この圧倒的な強さはどこからきたものであろうか。単に戦争上手というには理解しがたい強さなのである。

もつとも、日本という国は、海上国でありながら、海軍が強かつたのは日清・日露戦争の時だけである。百濟救援の時にも白村江では全滅しているし、元寇の時も水軍で守る発想がまるで無かつた。だからこの頃の日本船の多くは「武装兵士を乗せたジャンク」に過ぎなかつたと酷評されてもしかたがない。その上鉄砲の生産には熱中しながら、大砲には極めて冷淡であった。

それに対して韓国は、高麗時代に蒙古に七次にわたつて攻められながらも、首都を江華島に移して、三十年近くも抵抗を続けた歴史をもつてゐる。これは高麗が制海権を維持していたからにはかならず、高麗が蒙古に屈してからでさえ、三別抄が抵抗運動を三年間も続けられたのも水軍の力による。第一、その頃日本には独立した水軍など無かつたが、李朝では陸海独立の軍制がしかれ、李舜臣は全羅左水使から三道水軍統制使に登つてゐる。思うに、倭寇に悩まされながら、水軍の強化を続けていた結果であろうか、火器の開発にも熱心であつた。その頃、日本から多量の銅を輸入したのも砲の生産のためで

あつた。

さて、李舜臣が戦った亀甲船とはどのようなものであろうか。記録によると船長三十四メートル、極めて強固な構造材を用い、体当たり攻撃ができるようになつてゐる上、甲板を厚板と鉄甲で覆い、接舷されても敵兵が乗り込めないように無数の刀鎌が立てられていた。復元船を作るのに、七億円ほどかかったと言われているが、亀甲船の特徴はそればかりでなかつた。船首、船尾に各二門、左右両舷に各六門から十門の大砲が搭載されていたのである。砲架をつけた内部配置構造は、その頃のヨーロッパ船と極めて良く似ている。

大砲としては主として十五世紀初に制定された中型砲の地字銃筒や玄字銃筒が用いられた。玄字銃筒は口径が六センチで射程距離は二千歩（二千四百メートル）と記録にある。しかし実戦では有効射程は四百メートル位だったであろう。それにしても、制定当初の十五世紀初の水準としては、歐洲でも通用するほど立派なものであつた。

十五世紀初といえば、そのころ日本では大砲はもとより鐵砲も知らない。いや知っていたかもしぬないが使おうとはしていなかつた。だから、文禄の役（壬辰倭乱）の頃になつても、日本側の火器としては、実質的には百匁玉（〇・四キロ）の大筒が最高で、地字銃筒の五キロ砲丸はもとより、玄字銃筒の一キロ砲丸にも及ばなかつた。水軍の劣勢に驚いて、急遽、秀吉が作つて送つたの

とにかく、海上では亀甲船のように、兵員の露出するところがない構造に対し、鐵砲は全く無力であった。接舷して切り込むにしても刀鎌が邪魔をして自由にならず、逆に近接距離から発射される大砲斉射は実に効果的であつた。おそらく日本としても多少の戦闘用船は持つていたであろうが、その多くは船員輸送用のものに過ぎなかつた。その頃、日本軍は海上補給を断たれる恐れなど予想もしていなかつたのではなかろうか。

戦争という行為には、その国民性が實に良く現れる。この頃、日本には大砲と船の思想が欠如していた。

ヨーロッパが東洋を制したのは何と言つても大砲と船である。C・M・チボラの『大砲と帆船』を読むと、それらの進化がヨーロッパの歴史、しいては世界の歴史にいかに多大な影響を与えたか實に良くわかる。

新大陸発見にわくポルトガルやスペインに、大量の大砲二百丁であつた。

砲を送りこむヨーロッパ、そして新大陸からもたらされる膨大な富が再びオランダ経てヨーロッパに還流される様子、そこに銅資源に恵まれぬイギリスが鋳鉄砲を開発して参入し、スペインそしてオランダと覇権を奪う様子などを知ると、長つたらしく書かれた西欧史ではなかなか理解しえなかつたことが、いっぺんに理解できる。

そもそも砲とは、大型の投石器のことであった。巨大な繩に蓄えた振り弾性を利用して、投擲用の腕木を反射的に動かす原理で、中国の七梢砲では二百五十人で操作したといふから、数百キロくらいの石なら百メートル以上飛ばせたであろう。このような戦争機械は西洋にもあつたが、日本では全く聞かない。古来日本には砲の思想がなかつた。

厳密な意味での大砲の出現は、中国・ヨーロッパとともにほぼ同時期で、十四世紀のはじめとされているが、いざが先かについては見解が分かれている。しかし火薬の軍事使用となると中国が圧倒的に早く、十世紀には一種の爆裂弾として使われはじめ、元寇の時にも「鐵砲」と称して用いられている。また大砲の実物が残っている点でも、中国には至順三年（一三三二）銘の銅砲（口径八センチ）があるのに、ヨーロッパでは一三九九年のタンネンベルク城の攻略につかわされた銃筒があるだけで、全體としては中国に一日の長があるようである。

ところが、その後の大砲の進化に関しては、ヨーロッ

パが圧倒的に早い。一四二〇年代に铸造されたロードス銅砲は全長三メートルを越え口径が三十七センチもある。また一四五〇年に作られ、現在はエジンバラ城にあるモンス・メグ砲は鍛鉄製で、重さ七トン、口径四十八センチであり、重さ百五十キロの石弾を三キロも飛ばせたといふ。その砲身部の製法は、四十八センチの丸太の周りに鍛鉄二十五枚の角板を円筒状に並べ、これを外側から三十七個の鍛造リングで焼き嵌める方法によつている。樽を作る要領に似ていることから、バレル式鍛鉄砲と言われている。

そして大型化の窮屈は、オスマントルコが一四五三年のコンスタンティノープルの攻略に用いたメフメット二世砲で、同型のものが英國ウールウィッチ博物館にある。ハンガリー人の技師ウルパンの設計によるといわれ、長さ五メートル、重さ十九トン、口径六十四センチの鍛銅砲で、五百キロの石弾を二キロ飛ばせたといふ。戦艦大和の主砲口径でさえ四十四センチであったことと比較して見てほしい。

何時の時代でもそうであるが、ひとつの技術や様式が生まれると、人類はその効率を考えることなく、必ずいつたん巨大化に向かう性向がある。ピラミットや巨大墳墓がその最たるものであるが大砲もそれに劣らないしかし、このような巨砲は機動性がなく、装填するにも時間がかかり、狙いも不正確で心理的な効果しか上げ

得ず、その後の大砲進化の主流とはなり得なかつた。大型化が主流となり結局遅れをとつたのが、トルコやイングランドなど回教国であり、ヨーロッパでは野戦や海戦でも使える機動性のある大砲開発に向う。

ところで、大砲の製法には、上述した青銅鋳砲や鍊鉄砲の他に鉄鋳砲があつた。もちろん、鉄鋳砲はコストが安く、青銅鋳砲の替りとして誰もが技術開発を目指したものであるが、何しろその脆さが問題であつた。強度を高めるために、重量を増やすことは、操作性が保てず、結果は青銅鋳砲の進化が先行する結果となつていた。

そこに登場したのがイギリスの鉄鋳砲である。イギリスとしては銅資源に恵まれず、何としても鉄鋳砲を開発したかった。ヘンリー七世のお声懸りで始められた鉄鋳砲の製作はなかなか成果を上げなかつたが、ついにセックスにおいて鉄鋳砲の製作に成功する。これがスペインの無敵艦隊を破る大きな要因となつた。

一方、中国の大砲も十五世紀のはじめまでは、ヨーロッパに全く遜色なかつたと考えられている。元を倒して建国した明は、火器に対する関心が極めて高く、洪武八年（一三七五）製の口径二十三センチ、砲重七十四キロの銅製砲二門や洪武十年（一三七七）製の口径二十一センチ、長一メートルの鉄鋳砲などが出土している。また銃としては、永樂元年（一四〇三）から製作された一・五センチ口径の天字銃筒が、正統元年（一四三六）までに

約十万丁製作されたという。大変な分量である。しかし、その後の平和的到来で、中国では火器の技術的な進歩は停滞を招く。

ところが朝鮮半島では大砲の製造がむしろ盛んになる。かつて蒙古に攻められ、また元寇に動員された時に火器の威力を知つてからは、主として倭寇を対象にした矢箭による火攻用に力を入れていたが、十五世紀に入り李朝になると、明の技術を盗んで改良し各種の砲を作り始めたが、その中で最大の天字銃筒は青銅製で重量が約千二百斤（八百キロ）で、口径十二センチ、重量十三斤（八キロ）の鉄鋳鉛衣丸を千二百歩（千五百メートル）飛ばせた。ヨーロッパの水準から見ても立派な大砲である。

さて、この頃いittai日本はどうしていたのであろうか。

十五世紀の中頃には、日本は中国や朝鮮半島に対して大量の銅や硫黄を輸出している。明や李朝ではこれを大砲や火薬の原料としていた。いくら明や李朝が火砲のことを秘密にしていても、これが洩れないはずがない。ましてこれらの武器は倭寇対策にも用いられていた。日本人がこれを知らなかつたとはとても思えない。人がこれを知らないことはとても思えない。

しかし、日本では大砲のことが全く話題になつていていた。十五世紀の末には、日本は中國や朝鮮半島に対して大量の銅や硫黄を輸出している。明や李朝ではこれを大砲や火薬の原料としていた。いくら明や李朝が火砲のことを秘密にしていても、これが洩れないはずがない。ましてこれらの武器は倭寇対策にも用いられていた。日本人がこれを知らないことはとても思えない。

日本での史料上の大砲初見は、永禄三年（一五六〇）豊後の大友宗麟が將軍足利義輝へ「石火矢ならびに種子島筒」を贈ったとの記録である。種子島への鐵砲伝来から遡ること十七年である。しかしこ時の石火矢は小型のものであった。

大友宗麟はその頃しばしばボルトガルに大砲を求めているが、船の難破などによって実際に入手できたのは天正四年（一五七六）になってからで、それも二門だけであった。その内の一門が口径九・五センチで全長三メートル弱の青銅製仏郎機（通称石火矢）で、靖國神社遊就館に現存している。「国崩」の異名があり、「貫目大玉以上を撃てる性能があつたが、当時のヨーロッパの水準で言えば、まだ小型砲である。これをモデルにして、大友氏は天正六年（一五七八）には大砲数門を铸造していし、天正八〇十年には織田氏に大砲を贈っている。

ちょうどこの頃（天正八年）織田信長は「テツハウヲイサス」ため「ナラ中」で梵鐘を徵發している。また天正十三年（一五八五）に小西行長が雜賀攻めに用いた大砲も「信長がシナ人に命じて伊勢の國で铸造させた」ものであり、北条氏も天正十七年（一五八九）に領内の铸

物師に大筒二十丁の铸造を命じているなど、日本でも铸造砲が製作され始めたのは間違いない。おそらく青銅砲であったであろう。新規なものに興味を示す信長のもとで、いよいよ日本にも大砲の時代が将来されつつあった。しかし日本にはもうひとつ独自な技術系列があった。鐵砲である。これは種子島に鐵砲が伝来してからわざか三十有余年後には、世界最大規模の鐵砲戦・長篠の戦いが行われるほどに急发展していた。その技術をもとにして発達したのが国友鍛冶による大筒すなわち鐵砲の大型化の流れである。信長は元亀二年（一五七一）国友に命じて二百匁玉用九尺大筒砲二丁を岐阜に納めてさせていた。ただしこれは大砲というにはあまりに小型でやはり鐵砲の範疇のものであった。

秀吉ももちろん大砲には注目していた。特に文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）のために、名護屋城に梵鐘を集めて砲を铸造させたり、徳川家康ら諸大名に「大鐵砲」の供出を命じたり、播磨の铸物師に「唐人之御用大鐵砲」や「石火矢」の铸造を命じたりしている。

しかし、その程度の努力では、大砲に関しては、まだ朝鮮や中国のレベルまではヨーロッパのレベルとは大差があった。これが文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）で李舜臣に徹底的にやられる原因となつた。

その後、日本では慶長五年（一六〇〇）に關が原の戦いが起こるが、大砲はほとんど使われていない。やはり

野戦は鉄砲にかぎった。

むしろ、日本において大砲が注目されたのは、大阪冬の陣の時である。難攻不落の大坂城には、朝鮮での鹵獲砲などを含め、かなりの大砲が備蓄されていた。徳川家康は大砲を求めて動き出す。

まず、大筒をさらに大型化したものとして、国友鍛冶に対して、慶長九年（一六〇四）に八百匁玉用、慶長十四年（一六一七）に一貫目玉用を発注している。また、堺の鉄砲鍛冶芝辻に対しても、慶長十四年に一貫三百匁玉用、慶長十六年に一貫五百匁玉用が各一門発注される。

この内最大の一貫五百匁玉砲が、有名な「家康の大砲」すなわち靖国神社遊就館の芝辻砲である。口径九・五センチ、長さ三・一三メートル・重量一・七トンで、五キロの鉛砲丸を発射できる。均衡のとれた美しい大砲で、ここに至り国产の大砲が、はじめて大友宗麟が輸入したポルトガル砲の青銅仏郎機の規模を越える。

この「家康の大砲」は形状から見て当初鉄砲と思われていたが、調査の結果、約十三ミリの鉄板を同心円状に八枚重ね合わせて鍛接したものと分った。技術的には、鉄砲製造方法の延長線上にあり、極めて高価なものだったことは疑いない。筆者の推定によると一門千両程度で当時のヨーロッパの同口径青銅砲の十倍、鉄砲の二十倍はしたと思われる。これでは汎用武器には到底なりえなかつたが、一方その性能も抜群であった。おそらく同

口径砲としては、当時のヨーロッパの大砲をはるかに抜き去る射程と命中精度を有していたに違いない。淀君を脅かすための大型狙撃砲としての役割を担っていたのではあるまいか。

それにしても、これだけ高価ではどうにもならない。家康は結局オランダから慶長十九年（一六一四）に四貫目玉（十五キロ）あるいは五貫目玉（二十キロ）を擊てる大砲十二門、イギリスから真鍮鋳造製のカルバリンナップボンド（八キロ）砲（口径十三センチ）四門を輸入している。

このように遅ればせながら盛んになつた大砲も、大阪冬の陣を終えると全く省みられなくなる。よほど日本人は大砲を好まなかつたようである。その原因は何だったのだろうか。

今まで挙げられている理由を列挙すると次のようになつてている。

- 一、日本の都市には、ヨーロッパのような城壁がなく、城郭も土塁と水濠で防護されていたため、当時の実体弾では威力がなかつたため。
- 二、日本人の戦争観に基づくもので、個を前面に出した手柄しか称賛されず、技術よりも技能が重用される風土であったため。
- 三、当時の日本は、道路が整備されておらず、日本馬の体格も貧弱で、牽引車両が全くなく、大砲の機動力ではなかろうか。

た。戦国時代の日本が大砲には見向きもせず、鉄砲に走つたように、機動力のある航空戦力を生かす方が日本のやり方だったのかも知れない。そして戦況が悪化してお里帰りした時、それが神風特攻隊の悲劇になつてしまつたのではなかろうか。

韓国では李舜臣は忠武公と謚名されている。一五四五年生まで亡くなつた時は五十三才。韓国南部の李舜臣海戦ゆかりの地には忠武公を祭る忠烈祠がいくつもある。離型があつたには違ひないが、亀甲船を考案したのも李舜臣。職業軍人として彼は実際に良く日本を研究していた。

戦いに臨んで命をかけるものは必ず生き、命を求めるものは必ず死す。

韓国では誰でも知っている李舜新の言葉である。戦場で助かる方法はただひとつ危険に飛び込むことだと日頃言っていた。そういえば、島津義弘も関が原で西軍総崩れの中、家康の本陣の前を突破して、「前に向って退く」という捨て身の戦法で、薩摩に帰還した。やはり戦いの帰趨は武器ではなく、将の器量によるところが多かつたのかも知れない。鉄砲と大砲にちょっとこだわり過ぎたかも知れない。

さて、このように歴史的に大砲や船を軽視していた日本が、幕末、明治維新で大変革をとげる。よほど四隻の黒船に脅威を感じたのである。夢中になつて欧米を追いかけてはじめる。そして早くも明治九年（一八七六）には、軍艦雲揚丸で江華島に迫り、李朝を開国させ、さらには日清・日露戦争に勝ち大艦巨砲主義に走り出したのである。

しかし大艦巨砲主義は日本の気風には結局似合わなかつた。むしろ、日本において大砲が注目されたのは、大阪冬の陣の時である。難攻不落の大坂城には、朝鮮での鹵獲砲などを含め、かなりの大砲が備蓄されていた。徳川家康は大砲を求めて動き出す。

詩 あどりぶ



青木昭成

自 称

ぼくは 時に ぼくはね
と自称することがある つまり
すでにぼくは幾らかの追憶と 甘えと

そのなかに身をおいているようだ

ことに ことさらな幼なじみを相手にすると
彼がこの鼻先に遠慮なくタバコを煙らしたりしても
それはもう ぼくにはその横顔さえ困惑にはならず
浪漫の名残のなかに自らをも見つけ出していて
すっかり何もかも許したりしている

けれどおれは 僕は ときどき喋る
おれはその時ひどく投げ遣りなおのれを見つけて
だけだしていいるのだ つまり 人々は

詩 人

わたしは詩人ではない
これが 詩であるわけがない
そう言いつつ 詩を創る
詩作とはそんな根拠のない
告白のようなものだ

かくて わたしはますます詩人ではない
そう肯定しつつ わたしはわたしの
言葉を創りつづける

林檎が林檎の香りをひそかに漂わせるよう
小石が小石の形をそれぞれ置いていくよう
そして それが
すべて素朴で かつ豊饒であるようにと

だから わたしの言葉は
わたしのかけがえのない刻印

わたしの刻印はわたしの生きることへの回帰

わたしには信仰がない

わたしことに在ること それがうつづ

その姿がわたしの詩そのもの

生身の憂さを一杯の酒にまぎらわすこともある
だがおれは そのほろ酔いの術をももたない下戸だ
それは おれの無駄な妄想そのものかもしね
それは おれがおれと話す悔恨そのものなの
でなければ おれの呪術の一つだったのか

ぼくはと語り おれはと喋る しかし
やがて 私は私と言い それは自然に口をついて出る
それはまるで霖雨のよう 郷愁のようで だから
そうだ私は私が私とよぶ私のなかに返すしかあるまい
この私が今 この私をやさしく書きはじめるとき
私の魂はいつよりも柔軟で 叙情にみちている
この髪の白さは あの日よりいいよ白く けれど
だからと言つてこの思考までもが いよいよ
白髪になるとまでは 私は信じたくないのだ

友だち

雨がそぼふる 九月の夜
彼は逝った
あれから一年 彼は何処まで歩いて
とふと想う
それは物悲しい連想だよ
私をさらに誘う
三年前の また五年前の
逝ってしまった友だちよ
そう その享年さえも
さらに数え直してみなければならなくなる
またしても 何処まで逝つただろうかと
その幻影の歩調を想つてしまふ
人の死とは こんなにも
人の心を内省させてしまうものか
ただ 己の生のある瞬時を
忘れさせている

龍化妖姫

(一)

相 原 精 次



1 山奥の瀧

緑に囲まれ、岩肌にぶつかりながら瀧が、水音激しく落ちている。瀧はまるで龍が天に昇るようである。

2 山崩れ

地震が起り、大地が割れ、崖が崩れる。

3 日照りの烟

激しい日日照り。川の水が枯れ、畠は乾き、ひび割れた土の上で作物が枯れている。

5 幽王の居室

絹のベールの奥に寝台。その前には王と王後のための椅子とテーブルがあり、その周りには三、四人の侍女が侍る。幽王は椅子に座り、王后艶麗は脇に立っている。

4 メイン・タイトル

『龍化妖姫』

「一周の幽王伝」

赤い文字で強烈に浮かび上がる。

怨麗 幽王様、なぜ私の顔を見ると、そのように不満そうになりますか。（嘆きながら、歩き回る）あゝ、近頃周室には明るさがなくなってしましました。笑顔も、とんと絶えてしまいました。

幽王（いらっしゃ）だから何だというんだ。全ておまえのせいだ。（意地悪げに）どうだ、おまえも、酒の池に浸ってみるか。若い男どもが、おまえのその体をどう持て扱うか、とくと眺め入ってやろうではないか。

虢石父 我が幽王様、お呼びで？

幽王 ワシは退屈した。庭の池に酒を満たせ。男ども、遊びをこれからも続けられるようでしたら、この周の国の先行きが思いやられます。

幽王 いらぬ心配だ。今ワシを楽しませてくれるものは何もない。全てのことに飽きてしまった。熟れ始めたばかりの女に、筋肉たくましい男が絡みつく。あの様子だけだ。このワシを楽しませてくれるのは、ワシに意見するおまえは、俺にそれを止めさせるほど、すばらしい魅力にあるふれている、とでも言うのか？

（王、横にいる侍女の一人を近く引き寄せ、怨麗に当つけるように、その女の腰をさする。）
ばかりしている！さア、下がっておれ！おまえの顔を、見たくもない。

6 庭の一隅

庭の一隅の木陰。虢石父の命令で庭の池に酒を満

縛のベールの奥に寝台。その前には王と王後のための椅子とテーブルがあり、その周りには三、四人の侍女が侍る。幽王は椅子に座り、王后艶麗は脇に立っている。

宰相室の戸を開けて、虢石父登場。王の前で頓首の礼をする。

虢石父 虢石父はおらぬか！

幽王 ワシは退屈した。庭の池に酒を満たせ。男ども、女どもを百人ずつ、池の中で遊ぼせろ。また見たくなつた。その男ども女どもが、酒に浮かれながら、交接し合う姿をな。上等な猪肉を木々の枝につり下げ、その者どもに食いたいだけ食わせてやれ。

虢石父 その義でしたら、手抜かりはございません。いつ命じられても、瞬時に用意することができます。

幽王 いつもながら、さすが虢石父。それでこそ、ワシの宰相というものの。

虢石父 お褒めの言葉。恐縮の至りにございます。では、今命じて参ります。

たしている様子を、後の怨麗と、王子宜白が見ている。

怨麗 さア、向こうへ行きましょう。また、あなたの父上様が馬鹿な遊びを始めるようです。あなたは、こんなものを見てはなりません。父上様のような馬鹿な王とならないためにも。

怨麗、王子宜白の手を引いてその場を立ち去る。

7 庭の酒の池

若い男、若い女、大勢が酒を満たした池の中で嬌声を発しながら戯れている。池の畔には肉の盛られた皿が用意されて、その肉を手でつかみ、むしゃぶりつく者もいる。

8 池の見える庭の一隅

幽王、酒を飲みながら、池の中の騒ぎを楽しそうに眺めている。

幽王 ところで虢石父よ、その後、褒の国の貢ぎ物は届いたか？ まだ何の知らせも受けておらんぞ。

11 鎌京の街

酒の池の中では、裸の男女たちが、戯れ、あたりには嬌声が響く。王は、侍女の差し出す杯を干しては、その様子を見て喜ぶ。

9 后の居室

怨麗 それでは父上様、王にお諫めの言葉をかけて下さいね。

義 かわいい娘のためじゃ。そして、かわいい孫、宜白のため。それは何より、周室繁栄のためである。しかし、あの王のことだ、言つて止まることではないと思うが。

10 幽王の居室

幽王 畏れながら王様。

義 何だ、（皮肉っぽく）我がお后的父君ではございませんか。改まって、何用でございますかなア。

義 あのようなお遊びは、もうお止め下さい。

幽王 ほほう。また、そのことか。

義 民、百姓が、今いかに飢えているか、おわかりでしょうか。

（以下、義の声のみで）

畑は水が枯れ、作物がなく、人々が軒先にすわりこみ、子供は飢えのため泣きわめいています。

12 岐山の様子

山肌が乾き、木々の葉は茶色に枯れ、立ち枯れている木々もある。さらに崖崩れによつて地肌がむごくあらわになつてゐる風景が続く。

近頃は鎌京の街の市もさびれました。一年にも亘る旱魃で、作物は枯れ、緑豊かだった、あの岐山でさえ、木々が枯れてしましました。

幽王 言い訳はもうよい。もっと酒を持って来い。虢石父 は、はい。（侍女に）酒だ。酒を用意しろ。

幽王 ワハハハハッ、戯れておるわ。ワハハハハッ。

13 幽王の居室

幽王 いらぬ世話だ。ワシの義父として、目付役にでもなつたつもりでそういうのか。

義 そのとおりです。私は、あなたの父君であられ先の

虢石父 はい、もう今日明日にも届くことと存じます。幽王 何だ。まだか。去年滯り、今年がまだ。あまり遅くなるようだつたら、かまわん、兵を繰り出し、国を滅ぼしてしまえ。他の諸侯どもへの見せしめだ。

虢石父 王様！ まだそれには及ばぬようでございます。こちらからの使いの者が、つい先ほど帰って参りました。貢ぎ物が遅くなつたお詫びにと、褒の国の王の特別な心配りとして、とりわけ、殿をお喜ばせるものを、何か加えておることでござります。

幽王 何？ ワシを喜ばせてくれるものを、だと？ ワハハハハッ、それは面白い。もはや、ワシは全てのことに飽きてしまつたのだ。そのワシを、何を以て喜ばせることができると思っておるのだ。面白いではないか。まだ見たことのない龍でも持ってきて示そうとでも言うのか。あの田舎者めが。（虢石父に向かって）それが何であるのか、おまえもわかつておらぬのか？

虢石父 はっ、はい。申し訳ございません。もう漢水の急湍を渡り、太白山を越え終わつた頃と思われますので、あとしばらくのお待ちを。何せ、褒城は山の中。早馬を立てても、十余日を要するところでございますから。

宣王様をよく知り、その宣王様の亡き後、私が義父として、宣王様になり代わり今、この周室の行く末を、心から憂えております。

幽王 義よ、おまえに礼を言いたいが、ワシの耳にはただうるさく響くだけだ。わが周室は、たかが一年の旱魃でやらいでしまうような脆弱なものではない。鎬京は広いとはいえ、それさえ我が庭にすぎん。九国はもつと広いぞ。諸侯は、我が周室の徳を慕って、毎日貢ぎ物は山のように届いておるわ。

14 鎬京城の入口

幾組もの使者が、次々と到着して諸侯からの挨拶を伝えている。荷車の中には多くの貢ぎ物。

使者 吳の国の使者でございます。

役人 これは遙々、吳の国から、ご苦労なことです。
使者 吳の都、梅里より、南の幸をお届けいたします。
役人 どうぞ、奥へ通って長旅の疲れをお休め下さい。

つぎの使者、すぐ続く。

使者 晋の国、文侯よりの使者でございます。北の幸を、お届けに参りました。

15 蔵の前

次々に届く貢ぎ物を役人たちが蔵にしまい込む。
そこへ、宰相の虢石父が来かかる。

虢石父 （コソコソした様子で）この荷物は人に知られぬように、わしの家の蔵へ送るように手配しろ。（袖の下から何か渡す）

役人は、はい。

16 幽王の居室

義 私の心配を、宮涅様あなたは、年寄りの单なる杞憂とお思いかもしませんが、それは間違います。この鎬京城を包む三つの川、涇水、渭水、洛水から流れが消えました。これはただごとではありません。私のこれまでの生涯に、かつて記憶しない事態です。何か不吉なものを感じます。昨日も、その前日も、西の戎の住む地から来た黄砂によって空が赤く覆われたのを王もご存じのはずです。

幽王 （むつとした感じで）だからどうしたというんだ。

義 このまま好き勝手なことをしている隙に、西の戎が……

幽王 攻めてくるのか。バカめ！ 義よ、おまえは、自分を恥じてはどうだ。西の戎の動向を窺うのは、おまえの大事な役目。

義 それ故に、お諫め致しております。

幽王 いいか。よく考えろ。おまえはたかだか、申といふ小さな國の侯にすぎぬ。その諸侯の一人にすぎぬおまえが、こんなに高く買われているというのも、昔からおまえの國が西の戎と少なからぬつながりを持つており、何かといえば便利なためだ。その申候が、戎の動きを手をこまねいて見てているようではな。

幽王 そうか、おまえはこのワシより、孫が大切なのだな。よからう、それもよからう。孫のためにも、この周が無事であり続けることをしつかり見届けよ。

17 後の居室

怨麗 父上様。先ほど幽王と話しておられたこと、私も、物陰で聞いておりました。

義 あのバカな王を説得することは無理なようだな。これからも、あの遊びは当分続けて行くだろう。

怨麗 私も周室に嫁いだ身。このままで周室の将来が心配でござります。

義 それでこそ周王室の后じや。民がこのことを放って

18 幽王の居室

虢石父 裹の國の使者がただいま、到着致しました。

幽王 ようやく今頃来たのか。

虢石父 遅れましたお詫びとして、いつもの年より品数も多く持参致しました。

幽王 品数？ そんなものはどうでもよい。蔵の中へ放り込んでおけ。それより、とりわけこのワシを喜ばせようという物とは何なのだ。田舎者が、何を以て、このワシを喜ばせようと思っていたのかが知りたい。

虢石父　はっ、承知いたしました。（虢石父、一人の従者に目配せする。従者、その場を去る）

幽王　そのとりわけの物とは一体何なのだ。

虢石父　はっ、それは女でござります。

幽王　（カッとなつて）何だと、女だと！

19 廊下

先ほどの従者、一人の女と褒國の使者らを従えて歩いてくる。女は下を向き加減であるが、目も醒めるように美しい顔立ちをしている。

20 王の居室

幽王　何をバカな。ワシを愚弄する氣か。褒の國の王も、よほどのたわけ者だ。今すぐ兵を集め褒の國を打ちのめしてしまえ！

虢石父　お待ち下さい。とりあえず、その女に一日お会いになつてから、その義を御命じになつて下さい。

幽王　たかだか女一人。ワシには珍しくも何ともない。

虢石父　お怒りはよくわかりますが、田舎者の浅い考えとは思いますが、一応、向こうは礼を尽くしたつもりでございましょう。一目その女に会つてから。

幽王　ウーン、よし、ここは宰相のおまえの意見に従つ

女は、相変わらず下を向いたまま、あまり動かない。

幽王　（女に目を向けたまま）使者の役目ご苦労であった。さがつてよい。女はここへ残れ。（虢石父に）この使者の勞をねぎらい、厚くもてなしてやれ。

虢石父　はっ、承知いたしました。

王、立つて女の方に近づき、女の顔に手を当て下を向いた顔を起こさせる。

幽王　よくワシに顔を見せろ。（王、しみじみ女の顔を見つめる。女も初めて王を見る。眸は妖しいほど深く、端整な顔立ちは比類のない美しさである。）名は何といふ。

褒姒　（澄んだ声で）はい、褒姒（ぼうじ）と申します。

幽王　褒姒か。忘れ難い名だ。

21 後の寝室

怨麗、寝ている。夢にうなされて顔をしかめ、寝返りを打つ。

ておこう。

虢石父　褒の國の使者をここへ通せ。

その声とともに、先ほどの従者が、一人の使者と、静やかに従つてくる女を伴つて部屋に来る。

二人は王の前に出て、恭しく頓首の礼をする。

褒の使者　周王室におかれましては、益々お榮えであり、使者が丁寧な挨拶をしている間、王は下を向いた

幽王様には、ことのほか、ご機嫌麗しいご様子。褒の国より、心からお祝い申し上げます。また、このたび、昨年の事故に引き続き、不手際が重なり、かくもお届け物の到着が遅れましたこと、誠に、申し訳なく存じております。

使者が丁寧な挨拶をしている間、王は下を向いたままの女から目を離さない。王の目は次第に輝きを増し、女に関心を示してゆく。

幽王　（初めて使者の方を見て）おおよい、ワシは寛大な男だ。詫びの心に誠意がこもつておればそれでよい。この女か？ 褒の國の王がワシに宛てた詫びの印というのは。

褒の使者　はい。（頭を深く下げて）左様でございます。

22 夢の中

一匹の龍が幽王の周りをぐるぐるまわりながら次第に空に昇る。すると、王も系にでも操られたよう、龍とともに空の高みに昇つてゆく。

23 後の居室

怨麗　父上様、私は、変な夢を見ました。龍が宮涅を空中で弄ぶ夢です。

義　龍の夢か。瑞兆、とも言えるのだが。逆夢でなければいいが。（問をおいて）実は気になることがあるのだ。

怨麗　気になること？

義　そうだ、褒の國の使者が、妙な女を伴つて來たようだ。

怨麗　褒の國は、近頃、貢ぎ物を届けるのが滞りがちで、宮涅は腹を立てておりましたが。

義　貢ぎの添え物として女が送られてきたのだ。あの威力者の迷いに輪がかかるねばいいと思うのだが。怨麗　褒の國も、怒りを恐れて、考へた末のことでした。宮涅は、性懲りもなく鼻の下を長くして、あれほど怒りを收めてしまうつもりでしようか。

義　明けても暮れても、女と酒。（つづく）

悪流修羅 第一部



中 泉 聖 司

(一)

朝から二人の男にQ銀行青山支店、猫田玄一商店長は悩まされていた。と、言つても自ら仕掛けた悪略のシナリオが最終段階に来た為に、引つ切り無しに入る、その二人の男からの面会の申し入れを逃れるためだけのことなのだが。

その二人の男とは建材卸販売会社D商事の藤田社長と小田専務だつた。一九九五年、三月三十一日、昨日までの暖かい日和とうつて変わり朝から肌寒い小雨模様。D商事への融資話の打ち切りを副支店長の山田に最終宣告の役割を押し付けると猫田は青山支店を逃げ出すように支店長車に乗り、九段の靖国通りを抜けて優良企業のSシステム社に向かつていた。ようやく花びらを付け始めたそめい吉野の桜が寒そうに小雨の中に震えているように見えた。

「満開が遅れるな、この冷たい雨で…」

猫田にとってD商事は、お荷物になつた小雨模様のよ

うに寒々しい会社で、今月で融資を打ち切り倒産させることにしていた。D商事株式会社の藤田社長も小田専務も今もってこれを知らない。猫田は、さすがにウソと言ひ訳で貸金回収を進めてきた、今までの自分の判断と行為に一抹の罪悪感が湧いているのだろうか。自分の良心に呼び覚された憂鬱な気分を寒空に突き出した桜の花びらに重ねて感傷的になつてゐるのか？いやいや融資の打ち切りが罪になるとは銀行業始まって以来マニュアルには書かれてい、企業の経営が行き詰まれば倒産するしかなかろうに！俺は今更何に怯えなければならないのか、俺は本部の貸付資金回収マニュアル通りに判断したのだ、いま人情を入れて支店長としての判断を誤れば自分の昇進時期が遅くなる、自分がQ銀行で満開の花を咲かせる時期が遅れるだけだ、絶対に同期の連中に遅れをとりたくないぞと、桜の蕾と自分とを対比をして自分の行為を正当化しているのが本音なのだろう。

それとも知らず運転手がまともに受けた答えた。

「遅れる…今年の店内の花見は、いつになりますでしょうか？」

「そうだね、花見か！…去年はどうしたかな？」

「青山墓地で花を見て、…（寿司源）でパーティーしましたよ…」

嬉しそうに老運転手が答えた。運転手にとって、花見会は行員と歓談できる数少ない機会なのだ。
猫田にはそんな事が解かるはずも無い。花見会などどうでも良かった。

猫田玄一は今年四十一歳、T大の経営学科を出て入行、地方の支店を歴任し三十六歳で本部に帰り、審査部から融資管理部次長になり一昨年から青山支店長に抜てきされて赴任、二年目の春を迎えていた。今年は、花見に浮かれて飲んでいる時期ではない、本部の指令は更に厳しく、支店長の交際費はないに等しい状態だった。そういえば去年は（寿司源）で宴会をし、幹事から会費の足りないことを相談され超過分は新任支店長の自分が身銭を切つたものだ。

その記憶に呼び覚まされたのか猫田の右目の下に陰のようにある卯大のシミがゆがんだ。あの時は赴任した早々だから部下のために仕方がないとあきらめたが、今になると見るとこんな役立たず行員の多い店だとは思わなかつたからだ。遠慮もなく目いっぱい飲む奴ばかりで仕事はハンパ、俺の為にロクな仕事も出来ない奴らのために二

度と身銭はきれない！と怒りが込み上げてきた。
「今年はやめた！みんな勝手にやればいい！…今の時代にそんなことをやって浮かれている会社は倒産するのさ！

今年は倒産の嵐が吹き荒び、潰れた会社の花吹雪きで春が来る！」

運転手は黙った。信号機が青に変わったのを確認しながら、今度の支店長には青い血が流れているのではないか、と言う行員のヒソヒソ話を思い出していた。
猫田が前支店長から青山支店を引き継いだ時、D商事に四五億の融資残を抱えていたが一年の間に三〇億の資金回収を進め、去年末の融資残を十五億にまで減らした。D商事の手持ち資金は返済に次々返済で、すでに底をついていた。しかも建設の不況で、建築資材の商社の経営は苦しい、が、市況の回復まで総力をあげて乗切るための営業政策を打出して、経営計画書を猫田支店長に提出して融資の継続を懇願していた。

しかも、D商事としては、これまでQ銀行と長年の友好的な取引の経緯から判断し、メイン銀行であるQ銀行青山支店の親密な対応を疑いもしていない。

D商事の小田専務兼経理部長は、支店長の指示通り今月始めに一旦五億の返済をし、月末の手形決済は運転資金として改めて五億の融資金で手当てる計画を立てたし、来月以後の不足資金もこれまで通りQ銀行に頼むつもりで、残り少ない資金の中から猫田支店長の要望とおりの

繰り上げ返済をしてきたのだった。

D商事の社是は〈尽誠〉、それに基づき藤田社長の経営哲学は何事にも〈誠意を尽くす〉ことだった。小田専務も先代社長からの社是を謹厳実直に守り、猫田支店長の方針のままに誠意を示して返済指示を忠実に実行し、必要が生じた都度、短期の融資金で苦境を切り抜ける覚悟ができたし、実際に、猫田支店長や担当者が返済に見合う融資を確約したから何の疑いもなく他銀行の預金まで取崩して返済に応じてきたのだが。

三月末日、今日が、引落とされる五億の振出手形決済の最終期限だった。が、すでに二週間前から猫田は計画の最終段階に入り対面上も豹変していた。今週に入ると担当者を通じて、D商事の二人から何回も面会を申し込まれていたがアポイントを受けず逃げまわる、電話にも出ない、これが予定の戦術だった。それでもD商事の小田専務はこれを読めず、昨日までただひたすらに誠意を込めた経理資料を作成し、忠実に何回となく支店に出かけて面会を求めたが不発で、今日まで来ている。山田副支店長、担当者も猫田支店長の指示で“支店長が本部にかけ合っている”という回答しかできないし、真実を告げることも出来ず胸を痛めているだけで、猫田の指示に逆らう勇気もない。結局、猫田の描いたシナリオ通りに時間が経過しただけだった。

今の猫田の頭には、会えば疎ましい思いしかなかった。

それ以上不運なことに、それまでのD商事に信頼の厚い人情派の前支店長は猫田が判定した内容を知られることによって弊害となる恐れをいだいて、自分の親衛隊長である専務や常務に働きかけて外部に出向させて本隊から切り捨てていた。

組織の常道だが、不良債権を発生させた役員は責任を負い退任せられ、その軍団は解体し一転して、新しい組織をつくり始め、それまでの政策を転換して本部役員の政策に忠実なタイプを登用し、未来を志向するための企画、応用力を削ぎ落とし、イエスマントラップの支店長に変えた。

ある日、突然降って湧いたように支店長になつた行員は、ひたすらに本部の意向を遵守し与えられたマニュアルを尊重し、事務的、近視眼的に政策の遂行をやるのだ。人間としてのバランス感覚の教育も受けてはいないし、顧客の人間性、将来的資質を見極める力もないし、その必要もない。

猫田も同じタイプだった。

それまでの銀行のスタンスをいつまでも信じて、変革に気づかない顧客にとっては不幸なことだったし、それまで彼等がQ銀行のためにどれほど多くの貢献をしてきたかは新しい経営者には関係のないことだった。この当時から、米国に影響を受けてドラッグな手法で人や企業を評価し人間性を必要としない時代が思つた以上に

冗談ではない！猫田は赴任以来、本部のマニュアル通りの点数をつけて企業の診断を下し、すでに赴任して来た時、斜陽化してきた建材卸販売のD商事を見切る方針を上層部に告げていた。そのためには債権の回収を急いだし、自行の損害を最小限にすることがお手柄の条件になつていた。その流れを変えて今更、追加融資など出来るはずもなかろうに！

不幸なことにD商事の二人は当初から支店長の悪巧みに気づかず猫田支店長の謀略にはまつたまま、返済に応じ、今もって誠意を込めて何回も面談を求め、追加融資の実行を得ようとしていた。

猫田の方針は表向きにはフレンドリーに接触をして、すみやかに債権の回収を計り、実損の無い状態でD商事を倒産させる。ウソも方便だ。そのため、わざわざ無能な担当者をつけて、ウソの継続的な融資計画を持ちかけてこれまでの貸付資金の回収に努めてきたのだった。これを正当な戦術だと考えている。いまさら、方針を曲げて本部に新たに融資を進言したら自分の立場はどうなる！出世頭の花を、あの桜のように短期間で散らせてしまうではないか！

当時はQ銀行本部も大口の不良債権を抱え、金融監督の考查をうけなければならず大企業の判定に揺れ動いていた。従つて中小企業の管理は支店長にまかせていた。

長く続くだけにD商事の一人にとっても、D商事と同じ運命をたどる企業にとつても変革による不幸な犠牲を生む初期の時代だったし猫田のような一人の支店長の接点が企業と人の命運を分かつことになるとは、誰が想像しちただろうか？

猫田の携帯電話にD商事の担当者と副支店長から、ひっきりなしに着信号が入ってくる。彼は腹立たしくなり電源を切った。もっと早く時間が経たないものか！わずらわしい！わずらわしい！今日の三時をもって、手形は不渡りになりD商事は終わる。その他にも今月で、建設、機械工具会社ら五社の運命は計画通りに当行には最小被害の範囲で幕を引く。この私の才覚、決断でだ！朝からの憂鬱が知らしめているように、多少の罪悪感が無いでもないが、金融界とはこんなものだ。この時代に困った奴に金なんか貸す方が無能だ、銀行も自分も身がもたない。

いままで人情や義理を重んじて来た役員や先輩支店長が良いお手本だろうが、不良債権を発生させて、みんな更迭されたではないか！猫田は自説を正論づけて納得しようとしている。

Sシステム社に到着する。

今やパソコンのネットワークの構築とサーバー事業を営む新進企業だ。創業十年、時代に適応したSシステム

社は、最初に開発したゲームソフトがうけて、たいした苦勞もなく同社は忽ち市場をひろげていった。

横山社長が猫田を迎えて、昼食に誘う。

そもそもこの会社は前任支店長が日参し、社会の仕組みに疎い電子工学あがりの若い横山社長に経営の基礎を助言し、会社に有望な顧客を紹介、潜在需要の市場調査を提案し分析、さらに人材の紹介をして開拓したのだが、猫田には前支店長の苦労はわからないし、分かろうとも思ってはいない。が、万一横山社長に裏切り行為があった時こそは、この事実を切り札にしてやろうとだけは前任支店長の引継ぎでマークしているのだが。

すでに日本のなかで同社の評価は、これから的情報時代に、ベンチャー企業として無限の可能性を秘めた魅力ある会社として定評を持っていたし猫田はこれを更に成長させて自分の業績に取り込まない手はない、と考えている。

「猫田さん、転換社債だけど〇銀行がうるさくてね、十億受け取れさせてくれ、ときているんだ…」

この社長もドライなタイプで過去をかえりみることがない。前任支店長や、様々の人の縁に救われた認識もないのか平気な顔で猫田に告げている。そもそも五十億の転換社債はQ銀行の前支店長が上場する前提で仕掛けたものだった。

赤坂の料亭、和室の卓上に運ばれた、天ぷらを摘まみ

ます。私どもはどこまでも付いて行きますから」

猫田は今の勝負は口からでまかせでも構わない、と思っている。時流に乗っている、自分のいる間はつぶれるおそれのない会社だから。

ふと、D商事の藤田社長の困惑に満ちた顔が浮んできた。

料亭で昼食をとる横山社長との違いに落差を感じる。すぐには枯盛衰は世の常だと思い直し、苦笑に満ちた藤田社長の幻影を胸の外に追い出して捨てている。

Sシステム社は、当行が主導で準備をすすめ、まもなく公開株の上場をする。一挙に二部上場だ。社債を株式に転換すれば株式評価は何倍かに跳ね上がるだろう。ウマイ汁を他行に吸われてたまるか！ 転換日等、段取りは万全に進行していた。

フスマが開いて女将が正座した。

「ようこそ、お出でくださいました。…いつもご贔屓にありがとうございます。…こここの女将でございます」

世が世なら昼間の客に挨拶などしたことのない女将だ。十数年前、老政治家との浮名を流した芸子あがりの有名女将だ。五十歳にはとても見えない、ふくよかな色白美人だ。

今は官々接待、官民接待が激減し、夜の料亭へ鈴千代の経営だけでは板前も抱えられず、一年前から昼食営業もやりだしたのだった。

ながら、横山が上目づかいで猫田の反応を見ている。「社長！ダメですよ！本部にも稟議を取って今日、すでに五十億、振り込む手はすになっています。そんな！私の立場が…」

「キミのところは、それで良いよ。別に付き合う、ってことだ。もう十億社債の発行をする；不要な金を借りるのも、今後の仕事にプラスになるか、ならないかだけどね」

「何があるんです？〇銀行の見返りは？」

「…国とのパイプだよ。国のIT政策の中身だよ、いち早く情報がつかめるか！わが社の勝利を決める、〇銀行はその方面に特に強いと言ふんだけどね」

猫田は同期の峯尾の顔を思い浮かべた。銀行の中で、モフ担と呼ばれた峯尾和夫は中央官庁、特に金融関係の担当部署や政治家との交流を通じて金融政策の情報収集をして経営陣に流す役割をしていた。しかし金融監督庁の検査日時や入り支店まで調べあげることがマスコミにもれて官僚と銀行の癪着が世論の攻撃を受けたために今は表面上の組織から消えていた。

「うちにも担当がいます。私の同期で親しいのが：私は財務省にも友人が居ますし、明日にかけあります。御社、…いや横山社長とは太い一本のパイプで行きたい。当行の方針です。他行とは止めてください。これからどんな時も必要資金を調達できるメイン銀行が必要になり

「お飲み物の用意は…御すすめいたしませんでしたか？

それはそれは…」

女将は横山がこの料亭を昼食で五～六回使ってくれてることをすでに承知していた。ハイテク企業の創業者で景気の良い会社だと聞いて、男の器量を見たくて初めて挨拶に来たのだった。

社長の年齢、三十六、七歳はすぐに読めた。案の定乗ってくる。

「ビール位は飲むよ…ね、支店長！…折角、美人女将にご挨拶いただいたんだから…」

「あら、どちらの支店長さん！」

「Q銀行です。どうかよろしく」名刺をとりだす。最近は銀行の支店長クラスはそれ程の顧客にならないことはわかっていても身体のこなしは妖艶だった。

「Q銀行さんはお世話になつて居ますわ、特に先代の頭取様には：可愛がつていただきましたの…」

仲居がビールを持ってきた。

天ぷらとご飯を半分食べたところで女将のお酌で飲むのだ。二人とも斜に女将を見てビールを受け、ぴちゃぴちゃと猫のように皿の近くで天ぷらを食べて飲んでいるさまに、長年の経験から女将はガッカリしていた。特にこの支店長は食べる姿が陰だ、品性がまるで見えない、と思うと（まだまだ未熟な猫仲間だわ。悪猫にならなければいいが）口には出せないがしっかりと記憶してしまっ

た。

特に猫田の名刺が女将の連想を呼んだのかもしれないが。酒の肴のオーダーもなく食べ尽くすとフードため息を吐いている。

「またのお越しをお待ちしています。あとデザートの用意をさせますから」

「うん、ありがとう。お酒も熱燗で一本頼んでよ。」

女将さん！今度、夜出かけてくる、芸子さん付きで、よろしくね」横山が言う。

ニコリと礼をして女将は出て行く。金を使ってくれるのは嬉しいが、何とも気味が悪い。

粹な飲み客に慣れ親しんだ女将から見ると今の中堅世代の食べる料理の組み合わせは汚れた水を咽喉に流し込んでいるように映る。注文をうけたデザートと燐酒の取り合せもだが、ご飯をビールで流し込んでニヤニヤと笑う猫田の目の下のシミがアルコールのせいで陰気に浮き出しているのを見て更に気色が悪かった。

二人が料亭をでると午後二時を回っていた。

雨は上がった。薄日の差し始めた日比谷通りを抜けると猫田は財務省に車を向けさせる。

O銀行の転換社債引受を横山社長に断らせることで、確約を得てホッとしていた。十億を上積みして上場後に利益の一部を社長個人に還元する手法に同意したのだ。

酒のせいで身体が火照り車の窓を開けさせて、携帯電話の留守番メッセージを聴いている。

メモリの中でD商事の小田専務が支店の応接で待っている、と、何回も山田副支店長が喚いていた。

担当者はD商事の本社で藤田社長につかまっていると言ふ。

「バカな奴ら！」

運転手がギョッとして振り向いた。

「何でもないよ！君に言つたんじゃない。うちの山田も支店長にはなれないね！」

副支店長の山田が小田専務に早く結論を言えればいいのだ。猫田の指示通りに、未だ引導を与えていないのが惜らしいのだ。今時の部下は上司の命令をきかないし、だからと言って自分の見解を主張しようともしない、最低の部下だと思っている。

携帯を山田副支店長につないだ。

「いつまでぐずぐず言わしているの！朝の打ち合わせ通り、融資の打ち切りを宣言してよ！本部の決定だとね、支店長じゃないよ！本部、融資審査部の方針だよ、そのところを良く説明してよ！私が逆恨みされたらいやだからね！私か？いまから財務省の友人を訪ねる、が、山田君、わたしは：本部の決定が出たけど、それでも本部でD商事の融資の継続で骨を折っていることにして話してくれよ、うんうん、良いよ」

「勿論だよ！…どうせ十ヶ月の手形を切つてている企業だ。融資しても一年はもたないさ」

当座残はゼロ、D商事はこの口座に五億の融資金が入金されると考えて、今か今かと待っているのだが、猫田の採決で手形は落ちない。普通預金の金も定期預金も全部銀行の貸金の相殺に当てると言う。こんなことをして企業を倒産させて良いのか？山田副支店長は前任支店長のもとで二年間温情のある取引を教えられた一人だった。余りにも格差のある猫田の命令に自分の気持ちがいつも合致してこない。だからと言って反対の意見も言えないし、支店長に反逆して融資を実行する権限は勿論ない。

（…言いにくいなあ：倒産させる…）弱々しい声がもれる。

「山田！キミも銀行マンだろう！そんな弱音を吐いてどうなる！人情は無用だ！今の世は食うか食われるかだ！うちがつぶれるんだよ、そんな姿勢では！本部命令だよ、専務の了解も取っている。心配はいらん…やればお前も出世できる！」

これを実施しても未回収貸金は八億弱が残るが、D商事の本社ビルや保養所、藤田社長、小田専務の自宅の不動産担保は第一順位で取つてあるから回収はやさしい。当行は無傷で逃げることができる。

間もなく三時がくる。支店のシャッターが降りて行く

（D商事の当座は不渡りを出して…取引停止に…）

光景が瞼に浮んでいた。決着だ！自分の才覚で不良債券が膨らむことなく幕をおろしていく、これは自分の栄光への舞台の幕が開かれるまでの一瞬の幕間にすぎない、

猫田の眼に陰湿な笑みがこぼれていた。

更に本部役員の川口専務、丸井常務の機嫌のいい顔が重なり合ってきた。

(二)

午後四時、D商事の小田専務は地銀のT銀行麻布支店の応接にいた。

藤田社長も俯いて堀田支店長に頭を下げている。

「私共に入金を頂いていた御社の売上がありませんが、どうとう当座も定期も普通預金も何も無い：全部Q銀行ゆきですか！」

堀田がため息を吐いた。

小田専務がQ銀行の指示で今日の午後一時にT銀行に振り込まれた売上金の三億四千万をQ銀行に振り替えたのだった。専務が掌の汗を拭いながら平身低頭した。

「御社とは先代からの長いお付き合いですから：なんとかしたくても、今となってはどうにもならない。：五億ですか！」

T銀行もハンパではない不良債権を抱えて、融資枠など無いに等しい。

「私が：Q銀行の猫田支店長にはめられた！…全て責任

けて申し訳ありません……」

T銀行の融資残の二千万は先刻、T銀行にある社長の個人預金で返済手続きをした。が、一部は返済不能だった。

Q銀行に置いていた個人の定期預金、普通預金はすべて会社の債務を保証していたから会社債務の一括相殺で消えていた。

あとは手持ちの現金と妻子名義の若干の預金がT銀行にあるだけであった。

堀田支店長もD商事の五十年史に眼をやり悲しそうな表情を見せた。

「御社の社は、『誠意』が仇になるとはね：時代とは言え、：やりきれませんね！そのまま分割返済されていれば何でもないものを、無謀な一括返済を求めて企業の体力を削ぎ落として計画的に抹殺するとは！Q銀行は冷酷すぎるよ！私には出来ない！」

企業を育てる時代は終わり、見込みの無い企業を潰す時代にあることを、この経営者たちは気づかなかつたのだ。経営者として失格なのか？

堀田支店長も藤田社長に世間並みのリストラを進め、企業の体質を強化し財務内容の健全化を計ることを提案したことであつたが。

ところが藤田は「人が財産」です、縁あつて会社に来ていただいた人には一生のつき合いをしていきたい、と

は私にあります！」経理担当の小田専務の眼が真っ赤だ。「専務、もうそれはいい：何もかも僕の方針だったから」

社長の藤田が専務を遮ると、

「長年、お世話になりました。T銀行さんは誠に申し訳ありません。今更、融資をお願いできる立場でもありません：しかし予期もしないことでした。：おそらくQ銀行の融資は始めから予定に無かつた：それどころか全てのお金は債務の相殺で消えてしまい、Q銀行のやり口が分かりました今は、二回目の不渡りが公に出た後の対策についてお話をします」

応接の本棚の中には、去年発刊し贈呈したD商事の五年史がみえた。

すでに亡き先代を称えて自分の企画で出したものだ。華やかなパーティーを思い出して、すぐに空虚なものが身体に流れた。

「弁護士には破産の手続きをとらせます。仕入先の手形支払い、従業員の退職金と未払い給与、契約不履行の違約金や損害金、一部は保険でカバーできますが：」

倒産すると負債は一挙に膨らむものだ。

未収金の売上が回収出来ればかなりカバーできるが、倒産の情報が果たして支払う側にどんな影響を与えるか、予測できない。

「出来るだけ取引先の皆さんに迷惑をかけない方法をとりたいのですが、堀田支店長さんにも色々と迷惑をかけた」

すでに五億の支援は今では遅すぎていた。本部と掛け合っても一回目の不渡りを出した企業には融資の道は無い。

せめてこの一人だけに五百萬づつの無担保融資くらいは手配できる。支店長の職をかけて。

「どうぞ、生活の優先くらいにしかならないが：」

説明して、ローン申込書を行員に持たせようとした。

「ご心配をいただいて、有難うござります。：これ以上どなたにもご迷惑はおかけできない：」

小田専務が社長の言葉に頷きながら堀田支店長の好意に涙をこぼしている。

「これから社員皆にお詫びをしなければなりません。堀田さんのお気持ちちはこれからも忘れることはありません。：本当にありがとうございました」

二人が肩を落として出て行く。

支店のロビーを通らずに通用口まで堀田が一人で送った。

花冷えの夜風が通用口に吹き込んで、今度は二人とも無言で深々と頭をさげた。

堀田支店長は、これから避けられない倒産劇の背後に潜む死にもの狂いの激務が二人に待ち受けていることを知つており、胸が痛んだ。

(三)

猫田は新宿の南口にでると人ごみを横き分けてHホテルに急いでいた。

ホテルのロビーで女に会う予定だ。
財務省のキャリアの友人とは来週やつくり食事をすることで約束を交わし、関連諸官庁に先手を打つて情報のルートは確保できた。元モフ胆の峯尾まで引っ張り出すこともなく政財界の委員にも紹介をさせる確約をし、Sシステム社の横山社長には電話を入れてその関連を説明し、当分は他銀行に食われることもなく安泰になつたことに満足していた。

この件では俺の功績だ！手柄は独り占めの方がいい、に決まっている。親衛隊長の専務に明日報告すれば特別に本部機密費から接待費をもらえるだろう。

気分はウキウキ、今夜はワンランク上の女を指名した。二十二才、OLで色白の長身美人。すでに某秘密データクラブに猫田は偽名を使って登録していた。会員には予めアルバムを見せられて、猫田が交際したい候補者が

数人届け出であるのだ。

その内の一人の娘が今夜はオーケーだ、と返事が来た。

胸が高鳴る。

「真理子さんは五万円です。それに若干の車代をつけてやつて下さいな」

電話の奥から、あの白人のような大柄な中年女の係りが付け加えた。

「もしも、お会いして「あれ」をしたくない時は、申し訳ありませんが一万円だけお渡してすぐに帰してやってください。…当社でも評判のいい娘ですから、ご満足いただけるとは思いますわ、薄茶のオーバーコートに栗毛の長い髪で、週間テレビガイドの雑誌をもつていてます。

念のため…ホホホホ…お楽しみください」

支店長になつてから猫田だけの秘密の女遊びだった。中学時代の同窓会で女好きの家具屋の二代目社長に会い、この秘密クラブを紹介をされて利用していた。妻しかしらない男にとって若い娘は新鮮だった。

打ち合わせ通りロビーの喫煙席で待つ。猫田の特徴も待ち合わせ場所もクラブを通じて女も承知なのだ。

猫田の誰でも判別できる特徴は、右目の下のシミだ。

女は猫田の陰気な顔にはじめは驚く、その後反応に自分も多少の引け目を感じるが、裸になれば男は顔じゃない、メス猫のように猫田の愛技と男根にノドの奥からなき声を吹いて喜ぶものだ、楽しんだ挙句に女は大金を持って

ト会社から紹介を受けたのだった。

男にやらせる覚悟では來たがお金が無くてお昼ご飯も食べていなかつたから空腹だった。

しかも風邪気味なのか寒氣もしている。

歌舞伎町の裏通りでそれらしいホテルに入る。表示板から空き室のキーを抜き取り部屋に向かう。湿った空気が漂いかび臭い。この前のAグレードの男とは高級ホテルで食事をして、セミスイートの部屋でブランデーを飲みながらムードいっぱいの夜を過ごした。

今夜は何と言う落差だろう。気分が急に悪くなり今夜の不運を後悔はじめたがすでに遅かった、落胆したがカード会社の強引な督促の声も耳に残照のようにな響いていた。

猫田はフロントに電話でミックスピザを頼んだ。

「一時間くらい、かかるようだよ。…マリちゃん……だったね」

たちまち上着とズボンを脱ぎ捨てるとブリーフだけの姿で風呂の蛇口を捻りに行つた。

「早く脱いでくれよ、すぐにお湯に入れるからさ…」

戻ると部屋の冷蔵庫からコーヒーを出して女に手渡す。椅子に座つて両手で頭を抱えていた。それでも猫田は真理子を抱きかかえるとオーバーコートをとり、

食事をすれば金がいる、冗談ではないと猫田は考えている。さらに銀行の支店長として自己防衛のために、二人の姿を知人にでも見られたくないし誰にも会いたくなかった。

真理子と名乗つた女は黙つて付いて来る。真理子にとつては今夜の相手はムードも何も魅力のない男だと思うが、昨日がカードローンの期日だった。勤め先の会社になんどもサラ金から督促の電話が来て困っていたところにデー

「ピザが来るまでに…いいよね！」

猫田は真理子をベッドに倒してスカートを捲りあげてパンストを引き下ろした。

「待って…すこし…お願い」

足を曲げて抵抗する女の手を払いのける。黒のパンティも尻のほうから引下げて片足を折開いて抜いた。衰弱しているのか女の手足の力は弱かった。

猫田は薄い陰毛の中に褐色の陰唇をみつけて眺めていた。真理子がダメッ！と叫んで両手で防ぐが猫田はこれを払いのけると指で割り開き食いついた。

そしてピチャピチャと音をたてて舐めはじめた。真理子の顔が苦痛にゆがんで蒼白になっていく。意識のなかに風呂の湯船が溢れて流れる音が響いてくる。

「気持ちいいだろ！…もう我慢ができない」

猫田は女の両足を割り、一気に進入していった。セーターも肌着も付けたままで背中のブラジャーのホックを外して両掌で乳房を揉みしだく。

「いいだろう！…いいだろう！…」

真理子は両手で顔をかくして、ヤダ一、ヤダ一と声をあげて荒い息を吐いている。

猫田はこれを見て女を征服したと錯覚し、顔の手をつまみ上げて首に回させると真理子の唇を吸いながら到達した。真理子は猫田の生臭い息に反応して激しく咳き込んでいた。

「ピザが来たら食べて帰りなさい。私は明日の仕事で朝が早いから帰る。…」

真理子が薄目を開けて、手を伸ばした。

「解っているさ！お金はここに置いとく！…フロントでピザの料金もすべて払って帰るから心配するな！…ゆっくり休んで帰れ…」

猫田は出て行った。

真理子は悲しかった。手を伸ばしたのは、起き上がる力が湧かないほど疲れていたから猫田の手を借りたかったのだった。こんな場所に一人にされるのも初めてで不安だった。

もう食欲はなかつた。ピザなんか食べる気になれない！抱いた女を一人ぼっちにしたまま、帰って行くとは！何と言う薄情な男だろう！

ゆらりとベッドを降りると着替えをはじめた。全身が痺れたように気だるく、微熱がさらに悪寒に変わり身体をゾクゾクと刺していた。

缶コーヒーの残りを啜りこんだがすぐに吐き出してしまった。

そしてテーブルの上の吐き出したコーヒーに濡れた二つ折りの一万円札に手を伸ばして開いた。

真理子の瞳がみるみる充血しその金を握り潰した。両手の先がぶるぶると痙攣を起したように震えている。猫田は二万円しか置いていかなかったのだ。

猫田はこれでは終わらなかつた。

ぐつたりとした真理子を湯船に運んで体中を触りまくる。湯船の中で、すぐに回復した男根を膝に乗せた女の陰口に差し込んで、

「俺は強いだろう！…最近はいないはずだよ、こんなのは！ボーアフレンドと比べてどうだ？最近の若い男はみんな淡白なんだって？」

真理子は氣力なく身体をあずけていた。苦痛だった。

早く終わればいい、と思って我慢している。

猫田はそのまま濡れて絡んだ状態でバスを出るとベッドに女を運んで、倒れこみ激しく突きしごき、女の体位を変えながら、さらに攻め立てて二度目の射精を放ち、すぐに身体を離して呟いている。

「失神したのか…？」

真理子は死んだように動かなかつた。猫田はこれを見て満足していた。死んではいないのだ、時々荒い息を吹きながら恍惚に漂い眠っているように見たからだ。女は何時もこれだから！エクスタシーが長いのだ、男より…。

欲望が急激に冷めていく中で、憎らしそうに下半身に流れれる体液を拭き取りながら考えている。

更に猫田はシャワーを浴びて着替えをはじめた。女はまだ眠っていた。

そろそろピザの配達が来るはずだ。それまで女は俺の余韻を楽しめばいいや！

(四)

四月四日、午後八時、D商事の藤田社長と小田専務は伊豆の川名にある別荘にいた。

JRの伊東駅からタクシーで山を登って来た。
「今年は暖かいから…もう満開です。桜は毎年満開が来ますがね、…年末には経済企画庁の長官が花の咲く頃景気が良くなるなんて言つたが、景気はいっこうに花開いてこない…」

世間話で老運転手がグチをこぼしていた。そう言えばそうだ、藤田も小田も閣僚の談話をテレビで見た覚えがある。予測は大きく外れて景気は更に冷え込んでいるし、景気対策の議論ばかりで政策は何ら変わつてもいい。これを口先三寸と言うのだろう、最近の閣僚も政治家もいい加減なのが多い、猫田と同じ類なのかと思い、二人は顔を見合せて苦笑しながら、満開になつた桜並木までくると運転手にチップをはずんでタクシーを降り、花を眺めながら歩いて別荘地に着いたのだった。

仕出屋から花見料理を取り寄せて、備付の温泉で身体を流した後に二人は和室で酒を酌み交わしていた。

「ここ二週間くらいは、とともに食事も取つていなかつたが…専務には苦労をかけたな…」

藤田が小田に冷酒を注ぐ。

「そんな…！…社長こそご苦労様でした。…経理担当の私

の不手際で、こんなことになってしまった！死んでも先代に顔向けるできない：勘弁してください」

「オイオイ：小田ちゃん、その格好は、まるで花見料理を狙ったトドみたいだぞ！顔を上げて！……」

藤田も胸に突き上げてくる熱いものを飲み込みながら掌で小田の頭を撫でている。思えば先代の時期から五十年近くまで謹厳実直に勤め上げてくれた男だ。猫田に裏切られれてさぞかし無念だろう。

自分より十五歳も年上だが、幼年時代から今は亡き親父とともに家族同然で付き合ってきたから、会社を離れると小田ちゃん、小田ちゃんと呼びながら旅行したり酒を飲んだりゴルフを楽しんだ、この別荘にも何度もなく来て引き込んだ温泉に浸かり、翌日、川名や伊東でゴルフをしたものだ。ここも今回で最後になるだろう。当然、Q銀行の担保に取られている。早晚、執行官が来て債権保全のために封印されるに違いない。

「さあ、飲もう：今夜は飲み明かそう！」

「わたしのこの頭がトドですか、トドのつまりが金詰り！」

小田は涙を指でぬぐいながら笑った。

「うまい！……座布団一枚あげよう！」

静かな部屋に笑いがこぼれた。

この山深い別荘の庭園にも一本の山桜が植えられてい

かなりの蓄財があるはずだった。それに反して社長の藤田には何も今は無かつたし専務の小田も蓄財まで失わせてしまい断腸の思いのところに……。
娘を売れ！とは、体中に打撃を受けたように痛みを感じ、始めて情けなさが身を包んだ。

藤田は二人とも娘で高二と中三だった。専務は男の子が三人、すでに成人した社会人で、長男には間もなく子供が出来る予定だった。

「ごめん！……今は何を言っても胸を刺すことばかりになってしまふ……良い想い出までも壊してしまう……」

倒産はしても家族には心配はかけられない。家庭生活は破綻しても妻や子供達には生きていく権利はある。いくら会社に誠意を尽くすといっても娘たちを犠牲にはできないのだ。

家族にも誠意を尽くさねばならない。

昨夜は妻を一晩中抱きしめながら説得し、夜明けを迎えた。これほど愛しい思いに駆られたことはなかった。しばらく身を隠すことを告げて藤田は妻に離婚届を書いて渡し、妻の実家に娘を連れて向かわせた。理解を求めるのに苦労したが、その方法しか無かった。

倒産した会社の手形は短期間の間に闇の社会に消えて行き、吸血鬼のような取り立て屋の手の中で踊り狂い、何が起ころうか予測できないのだ。

「専務の家族はどうしたの？……相談に乗りたいが……」

て、いまライトアップに浮き上がっていた。庭石の上に小さな花びらが一つ、二つと音もなく舞い落ちている。

「明日、川名のゴルフ場が見ておきたいな、：小田ちゃんは会社のハンデはいくつだった？」

「十一です。：次回はシングル入り間違いなし……と言わっていましたが……」

「そうそう！営業部長の田村くんとシングル入りを競り合っていたよね……」

取締役の田村の顔が浮んだ。

三月三十一日夜、役員会の情景が眼に浮んでくる。会社破産の報告をして小田専務とともに床に土下座して謝ったのだが五名の取締役のうち田村だけが一人に喚き散らした。

「退職金もないのか！冗談ではない！……会社に無いのならお前らの隠し財産で償つてよ！娘を売つても金をつくれ！」

藤田社長は、その場景を思い出したのか苦痛の顔で歪んだ。

隠し財産などある筈は無い。あれば勿論少しでも従業員に置いていくことも出来ようが、誠意を社是として生きてきた藤田には論理がなりたたない。

役員には、先代の時期から長年に亘って世間並み以上の役員報酬で答えて来たし、会社の保証はさせていないから一切の債務に責任は無いし、自己の住居も残るし、

「ありがとうございます。：息子たちはもう何も心配いりません。女房には、しばらく姉のほう：山形の山奥で農家なんですが……そこへ行かせました」

「苦労をかけて、申し訳ない……」卓上にひれ伏したまま顔をあげない。

「今度は社長がトドですか！……トドのつまりは飲みましょう！今夜は」

二人は泣き笑いながら飲む。

「社長の家族に対するお考えはわかっています。：わたしは何処までも社長に付いて行きます！わたしも良い花の時期もありました。良い想い出ばかりです。本当に感謝しています」

藤田は立ち上がりと庭に面した窓を開いた。冷え冷えとした早春の夜の空気が流れてきた。遠くに船笛の音が聞こえている。伊東湾に霧でも出てきたのか？

春先に庭師をいれて手入れの行き届いた、白い山桜を囲む樹木を薄闇に見ながら、これから先の人生には余り意味は無いな、と思っていた。

翌朝、経済新聞はD商事の倒産を小さな記事で報じていた。

「破産申立、負債総額は七十億、社長と専務が行方不明だと付け加えられている。

別荘専用の4WD（ジープ）を伊東駅に走らせて専務

が各紙を買い込んできたのだった。

「どうして七十億になるのだろう！」

リサーチ会社がおそらくマスコミに答えたのだろうが、何もかもが無茶苦茶に思えた。倒された獲物を前にハイエナのように債権者の強奪競争が始まっているのか。あるいは相殺されたQ銀行の債権がそのまま未返済として報告されたのか。実際には未収売掛金を引当てれば十億未満なのに、更に営業を継続すれば優良な顧客が販売を伸ばす予定で経営計画が組まれていたものを、D商事は五億の運転資金をショートして全てを失い、ハイエナの餌食になって群がり食い尽くされようとしている。

「今更、何を言つても無駄になろう！敗軍の将、兵を語らず……だ！ただ消えゆくのみ！」

藤田が静かに言った。兵隊のせいではない、それどころか素晴らしい忠実な精銳だった。

田村は私が大手の商社から引き抜き連れて来た男だから全ては自分の責任だ。

経営は政治や社会や人のせいに出来ないことくらいは知っている。が、今は自分のせいでは世の中の流れや人の価値観の変遷が経営者として見抜けなかつたことだけは慚愧に耐えないし、やり場の無い悲しさに襲われていた。従業員その家族、合わせて約一千人を路頭に迷わせてい

る。

小田が掃除を終わり出支度が整っていた。

最後に昨夜の残飯を庭木の肥料にでも、と考えたのか老木の根元に撒いていた。山荘だから問題はなからう。

「まもなくいい芽を吹くだろうよ！その肥やしが効いて……」

藤田が声を掛ける。小田は垣根の方を見ている。

「もう野良猫が来ている……すごい臭覚だ！」

「シッ、シッ」と追いかけてやれよ！」

「猫は嫌いだ！……特にコイツはあの野郎に似てやがる！盗人猫のくそったれ！行け！行け！お前なんかに誰が食わせるもんか！野垂れ死にしろ！」

小田が物置からシャベルを取つて返すと土を盛り上げて残飯を隠している。

フーと息をついて安堵の色を藤田に見せた。

「目の下が黒斑（ブチ）になった奴で、油断もスキもない奴……」

ブツブツとこぼしながら、手を洗い部屋に上がってきた。

「小田ちゃん！……見て、あれを見て！」藤田が笑う。

黒斑の猫が、小田がさっきかけた土を掘り起こしている。盛んに両手を交互に使って黒土を跳ね飛ばしていた。

「コンチキショー！」

小田が真っ青な顔で駆け出そうとしたが、すぐに藤田が小田の肩を引き止めた。

「猫田じやないんだ！……奴はただの野良猫なんだから、食わせてやれよ！」

小田もそれは解つていたが、無性に腹が立っていた。

Q銀行支店長の猫田の顔が脳裏に絡んでいた。卑しい顔だった。半年前までは猫なで声で「貴社の融資は全面的に応援します、今は銀行も手持ち資金が苦しいので企業の余裕資金を一旦貸してください。その後に御社のために返済金に見合う融資枠をつくるのは当たり前です。御社とは長いお付き合いで全幅の信頼関係がありますから！」いつでも必要な時にお申し出ください」

小田は両耳を覆つて頭を振つていて。

苦しいのだ、やっぱり当分は心の傷は治るまい、と藤田は思った。妻のいる山里の農家に潜んでしばらく養生をさせよう。

「生き延びるには、あの猫のようにならねばならないのか！」

藤田も猫田の顔を、あの野良猫に重ねていた。

カエデの老木に与えた肥やしが、猫の知恵と生きるための執念で食われている。老木はこれを拒む術を持たないし、自分を犯す何ものにも恫喝を与えるための声もない。

それどころか猫は魚の小骨が絡まつた老木の毛根まで

も噛み砕いているではないか。

もう一匹が現われた。互いに威嚇を始めた。またその後から黒いのが一匹来ていて。

冬場の山中で、どこでどうエサを獲つてきたのか、いずれも丸々と大きい。

「薬殺してやりたい！……こいつらめ！」

小田の声でビクッと顔をあげて、しばらくじけた眼で人間を警戒していたが、本能的に無害を感じたのか、猫同士が争いはじめた。夫々が交互に飛び掛り、逃げながら掘り起こしたエサを食い合う様は畜生そのものの世界を映し出していた。

残飯の争奪戦はすぐ終わつた。もう何も食いつく物は無いかから猫らは消えていった。食い尽くした後は黒土が散乱し枯葉や小枝が撒き散らされている。

それらを小田が簫で刷き寄せながら、まだ怒っていた。

「恩義も何も知らない猫らだ……」

「犬は一生、猫は三日とよく言うじゃないか。一食一飯の恩義を犬は主人と感じて生涯懐いて人を裏切らないが、猫にはいくら尽しても三日で恩義を忘れられてしまう……」

「猫田らのグループと一緒にすねえ、社長！あいつらに真心を尽すべきではなかったです」

「人間社会にも人の顔をした節操のない野良猫の集団が蔓延（はびこ）ってきたのかも……な……でも今の時代

は恩義を感じて仕事に打ち込むタイプは少ないし、そんなことを言うだけでナンセンスだと言われてしまう……そういう手合いが多くなった」

アメリカナイズされた日本の産業界も狩猟民族の真似をした野良猫集団の時代がとうぶん続くのかもしれない。営利のためには義理や人情は必要としないのだ。それがプラスチック経営手法として持て囃されている。結局、自分も小田も時代に取り残された忠犬ハチ公のように忠誠精神だけの未熟経営者だったのだ。

今となっては、正しく犬の遠吠えだった。

別荘に鍵をかけて外にでると二人は深々と頭をたれた。そして藤田は小田を横席に４ＷＤを運転して伊東駅に向かった。

ソメイヨシノの大木が爛漫の花に煙って見える。曲がりくねった道の両手の山肌には乳白色や萌黄色の木々の新芽が今にも吹き出そうに命を膨らませていた。しばらく走ると川名のゴルフ場に到了。駅に出る前に迂回して見ておきたい場所だった。

ゴルフ場とともに年代を重ねた川名ホテルが爛漫と咲く桜花のなかに重厚な古壁に守られて佇んでいる姿は気品のある老大のようを感じられた。まもなくこのホテルが世界の舞台になることはマスコミが報じていた。日本首相がロシアのエリツィン大統領をこのホテルに迎え

て会談するのだ。
幸い知人や親しい従業員にも会うことなく海が見える高台に出て各コースを眺め、ホテルのレストランで食事をとった。

レストランの支配人は顔馴染みだが、藤田と小田の会社の名前すら知らないはずだ。ここでは誰がどんな仕事をしているか、どんなに社会的地位が高いかは不要なのだ。一人のゴルファーとしての人間性を大切にしていたから。

さすがに二人は無口になっていた。そうそうに食事を済ませると駅に向かう。

後部座席に二本の掛け軸の箱が積まれていた。藤田が別荘から持ち出していたものだ。父親が蒐集した古物だった。

「小田ちゃん、駅に着いたらあれをあげるから持つていってくれ。何も出来なかつたから……せめて……親父の形見だけど、古物商に見せれば百万位にはなると思う。今はお宝ブームだから」

「俺は芸術に疎いから何も解らないけど、ひょっとすると国宝クラスかも……大観かもしれない」

笑い始めた。が、声は空虚に車窓をすり抜ける風に流れさせていく。

「万一一、ガラクタだつたらごめんよ！ オヤジにだけは自

慢の代物だったが……」

「私は社長にお供します！ 帰るところはないんです！」すでに帰するものは解っていた。社長の子供の時から家族と同然で來たのだ。いま社長の腹の中にあるものは、みんな読めていた。

「ダメだ！ ……と、言われても私は社長のとられる道と一緒にです！」 藤田の胸には針を刺されたような痛みが走り抜け、苦痛の表情に顔が歪んだ。しばらくハンドルに顔を伏せてうめくように言った。

「……死ねるか？」

「当然です！ たいした未練も無い、この世に……」

「専務を死なせたくない：犬死になる！ 三面記事でバカにされて終わるだけだぞ、：専務には責任はない、俺が捨石になり少しでも善良な取引先に有利にしたいんだ：後始末を専務に頼みたい！」 死ねば債権者集会にもでない弱虫の社長だと罵倒されるだけだろう。死んでも責任意識も礼節もない経営者と非難を浴びるだろう。しかし生き長らえて、今の仕組みでどんな後始末ができるだろうか？ 生きていて何ができるだろうか？ 経済戦争で落城した自分は債権者に何一つ言い訳の出来ない被告席に座らせられるだけだ、頭をさげるだけでことが終われるか！ 営業部長の田村のように、家族を犠牲にしろ！ と、言われてそれができるか？

死んで虎は皮を残す。伊東に着いた昨日の午後、ジャーナリストの親友、星野駿介には胸の内をしたためて手紙を投函してある。世の中の怨み節も書いて本音を残した。政治家の堕落と失政、金融政策の失敗、外交政策によるアメリカ偏重の産業界、敗戦後の日本の歴史の否定、家族制度の崩壊による倫理道徳の欠如、教育者の堕落による無教育世代の台頭、これに輪をかける情報メディアの無節操。手紙が届く頃にはこの世にいないのだが。愛国心も愛社心も少なくなった日本のなかで、あの猫田はどう生きてゆくのか？

やがてずるい悪猫たちが日本のリーダーシップを取り始めたときどんな社会が構成されて国民はどんな考え方をもって生活していくのだろうか？

伊東から下田にきた。下田港に車を入れて藤田はいつまでも迷っていた。

小田を道すれにするのが辛かった。連れて来なければ良かったのだが、他所に居てもいざれこの忠誠な男は城主の死を聴いて、戦国武者のように腹を切るだろう。夕日が太平洋に落ちていく。

小田は落ち着いていた。横顔に笑顔さえ浮んでいるようを見える。藤田は自分のほうが震えているようで、小田に悟られては居ないか、心配だった。

防波堤に一本の道ができる。約二百メートル。両サイドにテトラポットがガードして先端まで巡らされて

いる。

いま車のエンジンはニュートラルに入つて静かに回転している。ウイスキーを交互に飲んでいるが酔いがこない。

「怖いか？」

「怖いです」小田は答える。

「おれも怖い！」

「遺書は書いたの？」

「いりません、余計に苦しむのは、妻も息子も同じです……でも猫田には手紙を出した。昨日……自いっぽい叱つてやりました！」

たった一人いた釣り人が防波堤から去つていく。誰も事故に巻き込む人も居なくなつた。

「行きましょう」

二百メートル先が俺たち人生の終着点だ。

4WDのワゴンが防波堤の先端を飛び越えて夕闇の海上に飛沫をあげて突入していく。白い泡がいつまでも湧き上がつて弾け、無数に消えていった。

社 告（内規）

☆ 同人参加へのお誘い

私達はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会員へのお誘い
本誌の經營を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせつかくのお申しあり、雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なつております。

* 同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願ひいたします。

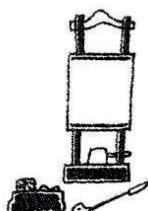
郵便振替口座 ○○二七〇一〇一六四五九二

加入者名 まんじ

報徳の人

二宮尊徳（その二）

三戸岡道夫



（三）伯父萬兵衛の家にて

こうして一家離散した金次郎は、伯父の萬兵衛の家へ引き取られたわけであるが、萬兵衛の家は金次郎の家の隣にあつたから、隣の家に移つただけで、距離的に遠い場所に移つたわけではなかつた。永年住み慣れた家は、いつも眼の前に建つていた。

しかしその家はもう空き家である。一年前まではそこに親子五人が貧しくても肩を寄せ合つて生きていたのに、今はもう誰も住んでいない。その激変を思うと、金次郎の胸は悲しみで潰れんばかりだった。しかし感傷にばかり浸つてはいられなかつた。

（一生懸命働いて、いつかはきっと家を再興してみせる）

と固く心に誓つて金次郎は萬兵衛の家へ移つたのだつた。

金次郎は伯父萬兵衛の家で、十六歳から十八歳まで、約一年半ほどを過すのであるが、もともと金次郎は働くのが好きである。だから金次郎はよく働いた。そして萬兵衛は、父親を亡くした甥を立派な百姓に仕立て上げよう、きびしく指導した。

金次郎は毎日、一生懸命に田圃を耕し、山に登つて薪を取り、柴を刈り、また酒匂川の堤防の普請工事にかかり出されて力を尽し、夜になれば必ず縄をない、筵を織り、草鞋を作り、休むひまがなかつた。

しかし金次郎はただ働くだけでは満足しなかつた。生來の向学心が燃え上つてきたのである。それに加えて金次郎の胸中には、離散した家の再興の念願がある。いつ

も眼の前に空き家になつた我が家を見るたびに、その思
いが金次郎の胸の中を駆け巡る。眼の前の空き家が、早
く帰つて来てくれと、金次郎を呼んでいるような気がす
る。はやく立派に家を再興して、家に戻りたい。そして
遠く離れて住んでいる二人の弟を引き取つてやりたい。

そのためには、
(はやく立派な百姓になることだ)

と決意を新たにするのだった。しかし立派な百姓にな
るには、ただ、がむしゃらに働くだけでは駄目だと思つ
た。立派な百姓になるには知恵が必要である。それには
学問することだ。

しかし昼間は忙しくて勉強する時間など、とてもない。
そこで夜なべの仕事が終つた後、萬兵衛たちが寝静めの
を待つて、読書に励んだ。ところがある夜、それを萬兵
衛に見つかってしまったのである。そしてひどく叱られ
た。

「学問などするのは、武士や名主のすることだ。百姓
が学問などして、何になる。どれほど書物を読んでも、
一文の得になるわけではない。金次郎や、家を再興しよ
うとするのならば、一把の縄、一足の草鞋を作れ。そう
すれば、五文、十文の得になる。学問などやめて、はや
く寝よ」
当時は百姓には学問など要らぬ、百姓が学問などする
のは百姓の堕落だというのが、一般的な考え方だった。

けたのである。遠大な計画というか、気の長い話である。
しかしこれ以外に方法がない。そして成功すれば絶対萬
兵衛に文句を言われない方法である。

金次郎は友人のところへ行つて、五勺ばかりの菜種を
借りた。そして農作業の暇を見て、洪水で荒地になつて
しまつた自分の土地や、それに隣接する酒匂川の堤に蒔
いたのである。これなら萬兵衛から文句の出る筋合はな
かつた。そしてよく手入れをした。

すると菜種はよく成長して、翌年の初夏には八升ほど
の菜種が取れた。
金次郎は喜んでこれを取り入れ、隣村の油屋嘉右衛門
のところへ行つて、菜種を燈油に替えてほしいと頼んだ。
嘉右衛門は、

「わかりました。よく実のいった菜種ですね。菜種一
升について、油二合の割合で引き替えましょう」

「ありがとうございます。でも油は今すぐには全部要
りませんから、必要になった都度受取りに来ますから、
それまでは預かっておいてください」
油は読書の灯として使うのだから、一度に貰つても仕
方がないからである。そこでこの日は二合の燈油を受取つ
て家に帰つた。

(これで伯父さんに文句を言わることなく、勉強す
ることが出来る)
金次郎の胸は躍るようだった。

生糀(きうじ)の百姓だった萬兵衛もそれと同じ考え方だったわけ
で、

(金次郎よ、お前もはやく大人になり、立派な百姓とな
つて、家を再興せよ)

というのが願いだったのである。学問などするのは、
その邪魔になる、百姓はひたすら百姓をするのがいいと
いうのが、昔かたぎの萬兵衛の考え方なのだった。

「金次郎や、お前には家もなく、田畠もない。わしに
助けてもらって、ようやく命をつないでいる身なのに、
学問などが何の役にたつものか。その上、一晩中行燈の
灯を付けっぱなしにしてはいるが、燈油もただではないぞ。
お前が読書すればするほど、油がどんどん減っていくの
だ」

油が減るといわれれば、なるほどその通りである。読
書することに夢中で、そこまでは気がつかなかつた。

(わかりました。わたしが悪うございました)

金次郎は素直にあやまつた。

「わかつたら、はやく寝ろ」

「はい」

しかし読書をやめることは出来なかつた。

燈油がもつたいないという。それなら、

(自分で燈油を作れば文句を言われないだろう)

と金次郎は考えた。

そこで金次郎は燈油の原料となる菜種の栽培に手をつ

こうして再び金次郎の夜中の読書がはじまつたのであ
る。

しかし再開した読書もそう長くは続かなかつた。秋に
なるとまた萬兵衛に見つかり、叱られたのである。

「金次郎、また書物を読んでいるのか。たしかに自分
の力で燈油を作れば、わしの出費にならんから、夜の讀
書はいいと思うのかもしれないが、わしはな、燈油が惜
しいから勉強するなと言つてはいるのではない。お前がや
らねばならぬことは、はやく立派な百姓になることだ。
百姓には学問は要らぬ。学問をしたからと言つて、何の
役にもたたぬ。むしろ立派な百姓になる邪魔になるのだ。
そのところが、金次郎、お前にはわからないのか」

「…………」

金次郎は返事をしなかつた。立派な百姓になるために
こそ、学問が必要なのだと金次郎は思つてゐる。いわば
百姓というものへの基本的考え方の相違であった。交わ
ることのない平行線のようなものである。

「燈油は自分の力で手に入れたとしても、時間の無駄
だ。それに夜いつまでも起きていて寝なければ、明日の
農作業の妨げとなる。さっさと寝ろ」

萬兵衛は捨科白(さくわく)のように言うと、出て行つた。
しかし金次郎の学問への情熱は消えなかつた。

(自分と萬兵衛伯父さんは、学問に対する考え方が
基本的に違うのだ。決して一緒になる事はないだろう)。

自分の考え方を変えることは出来ない

萬兵衛の家に円蔵という者が住んでいた。円蔵は、萬兵衛の妹の子供で、金次郎にとっては従弟に当る人間である。円蔵は金次郎の勉強に理解があった。そこで円蔵は萬兵衛が就寝すると、

「もう伯父は寝ましたよ、大丈夫です」

と勉強のタイミングを教えてくれたり、また、深夜に寝巻を持ってきて、金次郎が勉強している行燈に掛けて、灯が外に洩れないようにして、金次郎の勉強を助けてくれた。

こうした助けもあって、萬兵衛の叱責の後も、金次郎は寸暇を惜しんで書物を読み、文字を習い、「一番鶏の鳴くころにやっと床に就くのであった。しかし一番鶏が鳴けば、朝のはやい農家はもうすぐ起きねばならない。それこそ寝る時間も惜しんでの勉強であった。

また雨や雪が降って野良作業が出来なければ、納屋で、米や麦を春くのも金次郎の仕事であった。そして金次郎はこの臼で春く暇にも読書に励んだ。臼で米や麦を春くときの仕掛けは、足踏みで杵を一押ししながら、軸の周囲を回転して歩くようになっている。すなわち杵の上下を繰り返しながら回転し、ふたたび元の位置に戻るのである。

金次郎はただ杵を踏むだけの時間を惜しんで、スタートの位置に書見台を置き、そこへ論語や大学を載せた。

（こんな田圃だって、なんとか育つかも知れない。捨てられて、枯れてしまうよりはいいだろう）

そう思って、そこへ植えておいた。すると秋になるとその苗は、一俵ほどの米の収穫になつたのである。

（捨てた苗が、一俵の米になるとは……）

金次郎は喜びと同時に、自然というもの力の偉大さに感動した。そして、

（これこそ大自然の恵みだ）

と思った。が、この時金次郎は、はたと稻妻に打たれたようにある大発見をした。それは、捨てられた少しばかりの苗でも、大事に育てれば一俵の米となる、すなわち、

（小さい事でも、積み重ねれば大きいものになる）

ということであった。そして、この事は菜種についても同じことだと思った。五勺の菜種も、地に蒔いて育てれば七升になる。天地の間には

（小を積んで、大を為す）

という道理が満ちているのを実感したのである。

もちろん金次郎は幼い頃から農事の手助けをしていましたから、知識としては知っていることであった。少ない菜種の種を蒔いて大量の菜種とする、少ない糞を蒔いて苗とし、それを大量の米に育てる、それはこれまでに金次郎がやってきていることであり、知識として知っていることであった。

そしてスタートの位置へ戻るたびに、必ず書物の数節または一章を、大声で読み勉強したのである。そのため金次郎に『ぐるり一遍』という三番目の綽名もついてしまった。

菜種油の収穫をした同じ年、十七歳の金次郎はもう一つ貴重な体験をした。

初夏、田植えの季節である。萬兵衛の家でも田植えが終わり、金次郎がその帰りに道を歩いていると、あちこちに、植え残りの稻の苗が捨ててあるのが目についた。

（この苗もどこかに植えれば、秋には米となつて実るのに！）

もったいないと思った。いや、もったいないというよりも、

（他の苗と同じように畠から育てられたのに、余ったばかりに捨てられてしまつて、かわいそうだ）

と、苗の命がいとしく金次郎には思えたのだった。金次郎はあちこちに捨てられているその苗を拾い集めた。だが、拾つても植える田圃がない。金次郎は洪水の災害にあって荒れたままに放置されている、自分の田圃へ行ってみた。すると、用水路の両側にあって、荒れたままになつていい自分の田圃の一部に、水溜りになつている所があった。それはとても田圃といえるようなものではなかつたが、

それが、捨てられた苗を、荒地の水溜りに植えても一俵の米となるという経験をした時、はたと自然の力の偉大さに感動し、靈感のように、

（小を積んで大を為す）

という天地の道理に目覚めたのである。

金次郎は自分の体験を通して自分の思想を作り上げた人であるが、この天地の力に人間の勤労の力を加えた

「積小為大」の理法は、その後強く金次郎の中に根を下ろし、報徳思想の主要な柱の一つになった。すなわち、（大きい事をしたいと思えば、小さい事を怠らずに勤めなくてはならない。およそ小人の常として、大きい事を望んでも、小さい事を怠るので、結局大きい事を成しえげられない。それは小を積んで大となる事を、知らなければいけない。例えば、百万石の米といつても、米粒が大きいわけではなく、小さな米粒が沢山集つて百万石となるのである。また一万町歩の田を耕すのも、一鋤ずつ耕していくのである。千里の道も一歩ずつ歩いて行きのだし、山を作るのにも一もつこの土を重ねて積み上げていくのである。この道理をよくわきまえて、小さい事を勤めていけば、大きい事は必ず出来上がる。小さい事をいい加減にしては大きい事は決して出来ない）

という報徳思想に結実するのである。

そして金次郎はこの「積小為大」を思想として説いただけでなく、生涯にわたつて自ら実行したのである。そ

ここに金次郎の偉大さがある。

そして金次郎はこの積小為大の思想を怠ることなく実行していけば、

（いつかは潰れた我が家の再興も必ず出来るにちがいない）

と固く信じて、仕事と学問に励むのだった。

（四）奉公修業

金次郎は文化元年（一八〇四）、十八歳になると、伯父萬兵衛の家を出て、栢山村の名主岡部伊助のところへ奉公に行った。結局、萬兵衛のところには、二年足らずしか世話をならなかつたわけである。

百姓に学問は不用だといい、金次郎を生粹^{なま粹}の百姓にきびしく育てようとする萬兵衛と、学問好きの金次郎との間には、基本的に性格の不一致があつたのである。そうでなければ、伯父と甥という間柄にあり、かつ金次郎の生家の隣にある萬兵衛の家から、わざわざ遠い場所へ移る必要はないからである。

それに萬兵衛の家を離れたのには、生家の復興を念願している金次郎には、もう一つ別の理由、すなわち経済的な打算もあつたのである。生家を復興するには金が必要る。しかし萬兵衛のところに居たのでは、給料が貰えるわけでもなく、いくら働いても萬兵衛のものになつてしまつた。

明を聞き洩らして、どうしても意味の不明のところがあつた。父親の伊助に尋ねても、十分解明出来なかつた。

（仕方がない、今度先生がまた来られた時お聞きする事にしよう）

などと話していると、この事が金次郎の耳に入った。そこで金次郎が、

「どの点がおわかりにならないのでしょうか」と尋ねると、

「どの個所って……？　金次郎、お前などにわかる筈がないじゃないか」

岡部親子は相手にしなかつた。しかし金次郎が、

「でも、わたしも縁先で講義を聞かせて頂きましたので、覚えているかもわかりません」

あまり熱心にそう言うものだから、その不明の個所を言ふと、金次郎はしばらく考えていたが、やおら、

「このような意味ではないでしょうか」と、その正解を述べたのである。岡部父子は驚いて、

「金次郎や、どうしてお前にはそれがわかるのか」と問うと、

「あの先生の講義の筋道をたどつて考えれば、それくらいの推測はできます。もしお疑いのようでしたら、次

回に先生が来られて講義される個所をお示し下されば、わたしがその内容を『説明しましよう』と自信を持って答えた。それで、

まう。金次郎のところには一文も入つてこないのである。

それに気にかかる生家の荒れた田圃を、余暇に整備することも出来ない。そんな暇があつたら、萬兵衛の家の田圃を耕せという。生家の荒地の整備が少しでも許されれば、少しでもそこから獲れる米が金次郎の手元に残るのに、それさえ許されないとすれば、萬兵衛での労働は、いわば、

（ただ働き）

である。今まで萬兵衛の家にいても生家復興の足がかりさえ摑めないわけである。

（他所の家に奉公すれば給金が貰える）

その給金を貯めれば、生家復興の基手になる、それが金次郎には魅力だった。

が、その上に金次郎にとって名主岡部伊助の家が魅力だったのは、萬兵衛とちがつて、岡部父子が学問好きだということだった。

（学問嫌いの萬兵衛の家にいるよりも、学問をする環境がずっといいにちがいない）

学問好きの岡部伊助は、しばしば学者を招いては、父子ともどもに講義を受けていた。

そこで講義のある日は、金次郎も襖の外でこれを聞かせてもらうのを楽しみにしていた。

ある時のことであった。講義が終つて学者の帰つた後、岡部の子供が講義の復習をしていたが、ある一箇所、説

「次回はここにじゅう」と書物の頁を指すと、金次郎は、

「ここは、こういう意味にちがいありません」と、よどみなく答えた。

さて、次回に学者が来てその個所を講義すると、金次郎の説明した内容とほぼ同じであった。岡部父子が再び驚き感嘆したので、金次郎は、

「これからは、わたしがまず岡部さまより素読をしてもらい、その内容をわたしがご子息に説明して、学者先生の講義の予習になさつたらどうでしょか」と冗談まじりに言つた。岡部が、

「金次郎は、どうして講義も聞かないうちから、そのように理解できるのかね」と聞くと、金次郎は、

「世の中の人たちは書物を読む時、まず文章を読んでから、その後で内容を理解しようとします。しかしわたくしはまず最初に、天地大自然の中にある道理をよく考え、かかる後に、読んだ書物の内容が天地大自然のどの道理に当るのであろうかと考へると、おのずと見当がつきます」

こうして金次郎は岡部家へ奉公してからは、学習や読書、習字などに励むことが許され、学問への要求が大きいにみたされたのだった。

もちろん金次郎は学問ばかりに身を入れていたわけではない。学問は奉公の余暇に許されることであり、農耕などの仕事を熱心に働いた。

が、さらにその仕事の余暇にまだ金次郎にはやらねばならぬ仕事が待っていた。金次郎は、たえず没落した生家の復興のことを願っていた。そのためには荒地になつた我が家のが田圃を元に戻さなくてはならない。

そのために金次郎は少しでも暇があると、荒地と化した生家の田圃へ走つていって、少しずつでも荒地を整備していく。そのため、十八歳のこの年には、生家の荒地の田圃でも、五俵の米が獲れるまでになった。

そんな頃のある日だった。小田原へ出たついでに金次郎は飯泉村（現小田原市飯泉）にある勝福寺の観音様にお参りに立寄った。

お堂のもとに座つてお祈りをしていると、一人の行脚僧があらわれて、お堂の前に座つて読経をはじめた。金次郎は美しく心に沁み入るその声に感動し、一瞬悟りを得たような気持になり、歓喜の気持を押えることが出来なかつた。それで読経が終ると、その僧に、

「今唱えられたお経は何のお経ですか」と丁重にたずねた。

「これは観音経です」

「そうですか。でも、わたしはこれまでに何度も観音

と話した。見ればまだ十八歳の若僧である。この若僧が何を知ったかぶりを言うかと和尚は、

「ではその観音経の功德とはいつたい何なのか、説明してごらん」

と言うと、金次郎は教義の解説まで細かくしたのである。それを聞いた和尚は非常に驚いて、

「わたしはもはや六十歳をこえ、長いあいだ何回となく観音経を唱えているが、まだその深遠な理念を悟るに至っていない。それを金次郎さんはまだ若いのに、一度観音経を聞いただけで、広大無辺で深遠な理念をそのように悟ることができたとは、お前さんはまさに菩薩の再来ではないかと思う」

「和尚さん、冗談を言つては困ります。わたしは感じた事を申し上げただけです」

「いや、いや、そんなことはない。わたしははや々にこの寺から出て行くから、どうか金次郎さんが僧になり、この寺に住んで、大勢の人々のために、魂の救済の道にはげんで下さい」

金次郎は驚いて、

「和尚さん、わたしはそんなつもりで申し上げたのではありません。それに僧になつて寺に入ることは、わたしの望むところではありません。わたしは一生懸命働いて父祖の家を再興し、祖先の靈を安らかにしたいと願っているだけです」

経を聞いた事がありますが、ただいま聞いたお経とはどこか違つているように思います。ただいま聞いた観音経はこれまでのものと違つて、非常にありがたくわたしの心にひびくような気がするのです」

「それは世間で一般に唱える観音経は呉音ですが、いまわたしは国音で転読したのです。それで解りやすかつたのでしょうか」

すなわち普通は呉音（中国南方系の漢字音）で読むのに、この行脚僧は日本語の発音で、しかも要所だけを拾いあげて略読したというのである。

「そうですか。お陰で有難い観音経の意味を知ることが出来ました」

金次郎はそう言つて懐から錢二百文を取り出すと、「これはわざかばかりの志です。どうかお納めください。そしてもし出来ましたらもう一度、観音経を唱えてくださいませんか」

僧は金次郎の志に感心して、もう一度観音経を唱えると、何處へともなく立ち去つて行った。

金次郎は胸の中がすっきりと開けた思いがして、非常にうれしくなつた。そして栢山村へ帰ると善栄寺という寺に行つた。そして和尚に面会すると、

「わたしはやっと観音経のありがたさがわかつたようになります。その功德はなんと大きく、またその意味するところはなんと広大無辺なのでしょう」

と言つて善栄寺を去つた。

この時金次郎は、少年の頃から読み親しんできた『大學』の教えと、観音経との一致点のようなものを感得したのだった。『大學』の教えは一口に言えば修身齊家治國平天下であり、これを成し遂げる道は『仁』である。一方観音経は衆生濟度を本願とするが、これを施す道は『慈悲』である。仁も慈悲も、道は違えども同じものであり、一家を興し、一切を興すのに、儒教の教えも仏教の教えも、両者の間に差のなきことを悟り、生家復興への気持がますますかき立てられるのだった。

岡部伊助のところに奉公していたのは一年あまりで、翌年文化二年、十九歳の金次郎は同じく名主の二宮七左衛門のところへ奉公先を変えた。

岡部家から二宮家の方へ移つたのは、金次郎の胸の中に、

（おれもそろそろ二十歳になる。生家の復興を急がねばならない。岡部家の学問の雰囲気の中で、安穩としているわけには行かない）

と、さらに給金が多く稼げ、また生家の荒れた田圃を整地するのに、より良い条件を求めて、二宮家へと移つたのであろう。

その金次郎が志したように、二宮家へ移つてからは生家の荒地田圃の整地も進み、昨年岡部家にいた年は五俵

であったが、二宮家へ移ったこの年は二十俵という、四倍の米の収穫を上げることが出来た。

また金次郎は、給金や、日傭をして働いた賃金などは、全部名主の七左衛門のところに預けておいた。もちろん生家復興のための積み立て金である。

ところが金次郎の変っているところは、この金が一貫文になると、これを持ち出して、村内の生活困窮者などに恵んでやつたりすることであった。せっかく貯めても、他人に与えてしまう、矛盾した行為である。

しかし、この、

(思いもかけぬところで、思いも及ばぬ行動をする)のが金次郎の特性なのだった。だがこの特性はすでに幼い頃から、芽生えていたといつてよかつた。たとえば、せっかく子守を働いて得た二百文の金で惜しげもなく松の苗を買って酒匂川の堤防に植えてしまったり、旅の僧侶が観音経を読むのを聞いて感激し、さらにもう一度これを所望して僧に二百文を与えるとか、そして今回の生家復興のために貯めた金を村の貧しい人々に与えてしまふとか、そこに金次郎の、個人の殻を破って社会的な行動をしようとする、一般の人とは違った特性が現れているといつてよかつた(そしてこの特性が、後日、金次郎の中で成熟し、報徳思想の根本思想の一つである、推讓『世の中のために尽す』の思想へと発展していくのである)

またこの頃になると、金次郎はまた新たな道理を發見した。

それは困窮者を助けるつもりで金品を与えたり、また無利息で金を貸してやつたりすると、その人たちは少しでも生活に余裕が出来ると、必ず金を返しに来て、それに何らかのお礼なり、利息をつけるのである。それはいくら金次郎が断つても、

「わたしのほんの気持ですから」

といって置いていく。金次郎の方はただ助けるつもりだったのに、相手は助かったといって、お礼をしないと承知しないのである。

(人が喜ぶと同時に、我也喜ぶ。それによつて財が増えていく)
人の財の増え方というものは、こうで、なくてはならぬ、と金次郎は思ったのである。報徳思想の、(貸して喜び、借りて喜ぶ。売つて喜び、買って喜ぶ)という自他両全の理念は、この頃からすでに芽生えていたわけであった。

なおこの年、すなわち文化二年(一八〇五)、十九歳という若さながら、金次郎は二宮家の本家再興という大事業を計画した。
二宮の一族は全部で十三軒あって、総本家を伊右衛門

といった。伊豆の伊東の一族曾我祐之の子孫、二宮太郎を祖とし、柏山村の旧家であった。したがって土地所有も村の中では圧倒的な地位を占め、万治元年(一六五八)(四代将軍家綱の頃)の台帳には、田畠合計で六町四段歩となっていた。

しかしこのような資産家も、その資産を頼んで次第に贅沢怠惰に流れて貧困に陥つた。そして最後の当主である儀兵衛の代になると、没落して住む家もなく、その昔、祖先が建立したといふ薬師堂の一隅に起居する有様であった。そして本然恵性沙彌と称して、近くの村々を託鉢して辛うじて生きている惨めな有様だった。そして老後は、一族の恵みにすがってわずかに余命をつないでいたが、寛政九年(一七九七)一月六日にその悲惨な生涯を終えた。金次郎十一歳のときであった。それ以来、二宮本家は断絶してしまった。

すると二宮の一族にはいろいろと不幸がつづき、金次郎の家も天災や両親の相つぐ死亡で困窮におちいり、これは誰いうとなく総本家の祟りではないかということで、加持祈禱などを行つたりしたが、その効力はなく、かえつてその費用の支払いに困難を來すという始末だった。しかし一族の中で誰一人として、本家の再興を考える者はいなかつた。

そうした中で金次郎だけが、二宮七左衛門のところへ奉公中で、自分の独立さえ果さない身でありながら、本

家再興の願望が火のように燃えており、その基金設定までやつたのである。

すなわち文化二年(一八〇五)、十九歳になった金次郎は、本家の売れ残りの屋敷にある稻荷社の社地が荒れにまかせてあつたのに目をつけて、(ここに竹木を植えておけば、将来、相当な財産となり、本家再興の資金として役立つのではないか。竹木を売った代金ぐらいでは、田畠が六町四段歩もあつたところ、五勺の菜種が八升にもなつた。そのことを考えればこの竹木も、毎年よく手入れをして育てれば、案外大きな資産になるかも知れない)

そういう思い、稻荷社の土地に竹木を植えたのである(そして後年、これが本家再興の大きな柱になつたのである)。

(五) 生家復興

文化三年(一八〇六)、金次郎は二十歳になつた。

(ついにおれも二十歳になつたか。はやく生家を復興させ、親戚へ預けてある一人の弟を呼び戻して、いっしょに暮したい)

そういう思いが、ますます金次郎の胸にこみ上げてき

た。

(そのために、とにかく一旦、思いきって生家へ帰ろう)

う)

そう決心すると金次郎は、二宮七左衛門のところには一年ほど奉公しただけで、生家へ帰った。

しかし生家といつても、数年ものあいだ誰も住んでいない、廃屋のような空家があるだけである。破損がひどく、軒先からは蔓草が垂れ下がっている。金次郎は雑草を取り除き、屋根をふき代え、壊れたところを修理して、やっと人が住めるようにした。

金次郎が生家に戻ってまずやったのは、死んだ父の時代に失った、田畠を買い戻すことだった。この日のために、これまでの奉公の給金などを貯めていた。金次郎はその貯金をはたいて、まず、亡父が質入れして質流れになっている下々田（土質が悪くて安い田）の九畝十歩（約九・三アール）を、三両二分で買い戻した。金次郎ははじめて自力で、田畠を持ったのである。

こうして金次郎は生家復興へのスタートを切ったわけであるが、しかしこのままずっと家にいて、眞面目にコツコツ農業に従事してさえいれば、生家が復興するとは考えなかつた。生家の復興とは父の時代に失った土地を取り戻し、さらにそれ以上に田畠を増やすことである。田畠を増やすには、荒地を開墾するか、田畠を買うか、いずれかである。荒地の開墾は自分の努力で出来るが、

金次郎は大きな身体を波打たせて泣いた。

しかし、いつまでも泣いてばかりもいられない。

（一刻もはやく家を復興さすのが、富次郎への供養だ）

そう決意すると、金次郎は生家復興を目指して、八面六臂、馬車馬のように働きはじめた。

しかし馬車馬のようだといつても、ただ金次郎は我武者羅に働いたわけではなかつた。金次郎の働き方は、知能的であり、多面的であった。

もちろん仕事の中心は岩瀬家での日雇いであったが、

日雇い奉公であるから、金暇があればその他の仕事も自由に出来た。そこで金次郎は余暇を利用して、昨年買戻した自分の田畠を耕して米や野菜を作るほか、さらに荒地を開墾して新しい田畠も増やしていった。また山へ行つて薪を採り、その薪や、自分が作った米や野菜を小田原へ持つていって、金に代えた。この小田原での売却は、小田原の岩瀬家へ日雇奉公しているので、その道順が便利であった。

また他にも日雇いの口があれば進んで引受けた日銭を稼ぎ、また米や金を貸して利息を得たりして、現金収入を増やすよう努めたので、金次郎の手許には次第に金が蓄積されていった。

すなわち金次郎は、賃金の高い小田原岩瀬家へ日雇奉公すると同時に、自分独立の仕事もするという、二本立てで働いたのである。

田畠を買うには金が必要だ）
金次郎はまだ独身である。生家に帰ったといつても、當時、自分の家に居なければならぬわけではない。いい奉公先や、いい日雇いの仕事があれば、積極的に出掛けている。賃金を稼ぐのに越したことはない。その方がより多く田畠を増やすことが出来る。

そう考えると、翌年（文化四年）（一八〇七）、二十一歳になった金次郎は、小田原藩士で千石取りの岩瀬佐兵衛のところへ、日雇いで雇われることになった。

末弟の富次郎が死んだのである。まだ、いたいけな九歳であった。親戚に預けて、元気で育っているものとばかり思っていたのに、この突然の悲報は金次郎を打ちのめした。

はやく生家を復興して、友吉、富次郎二人の弟と、たとえ貧しくともいっしょに暮すのが金次郎の夢だった。幼い富次郎もそれを望んでいたのに、その願いも果さず死んでしまつたのかと思うと、金次郎の眼からは涙がふきこぼれ、

「すまねえ、富次郎よ、兄ちゃんが不甲斐ねえばかりにお前を死なせてしまつて……」

こうして得た金で金次郎は、前回の田畠の買戻しに続いて、第二回目の田畠の買入れに成功した。

すなわち二十三歳の時に、二反六畝十一歩（約二十六アール）の田を八両一分で買い、さらに下々田二畝二十七歩も買入れる事が出来た。

その後もさらに日夜家業に励み、金を貯えて、田畠を買い集め、ついに二十四歳の時には一町四反五畝二十歩（約一・四六ヘクタール）の田畠を所有するまでになつたのである。

こうして金次郎は二十四歳にして、念願の生家復興の悲願を達成したのであった。生家復興を決意して生家に戻つてから四年日のことであり、また父の死後から数えれば十年目、母の死から八年目のことであった。

こうして生家が復興すると、その年（文化七年）（一八一〇）の十月、一ヶ月半ばかりかけて、江戸見物に出掛けた。これらの百姓は、田圃にばかり居たのでは駄目だ、将軍さまのお膝元の江戸ぐらい見ておかなくてはならぬという、いわば社会勉強のためだつた。また、帰つてくると、生家復興のお礼参りに伊勢神宮に参拝に出掛け、そのついでに、京都、奈良、大阪などを旅行して、関西地方の社会勉強をもした。これは生家復興という一段落のついた金次郎が、次の新しい世界を求めての摸索の旅行でもあった。

こうして金次郎は一町四反の田畠の主となつたのである。

るから、一応栢山村では中程度の自作農の百姓に復興したわけであった。

ここで親戚に預けてある弟の友吉を呼び戻し、兄弟二人で眞面目に百姓をやつていけば、平穀で落着いた生活が得られる筈であった。

しかし、さて、一旦そのような生活に落着いてみると、金次郎はそのような小じんまりとした人生に満足出来る人間ではなかつた。復興の成つた生家の中で毎日暮しても、

(この狭い家中だけなら、もっと広い世界で生きてみたい)

という希望が、潮のように心中に押し上げて来るのだった。かつて岡部伊助や二宮七左衛門という二人の名主や、小田原藩士の岩瀬佐兵衛へ日雇奉公していた金次郎は、彼等の世界が、百姓の世界よりももっと別の広い世界につながっているのを、本能的に嗅ぎ取っていたからである。

こうして金次郎は生家復興に成功したのであるが、その秘訣は何であったのであらうか。その働きぶりを、ちょっと振り返ってみたい。そこには一般の百姓には見られない金次郎の働きぶりの、ユニークさが見られるのである。そのユニークさとは、生家に戻った金次郎はしばらくの間、もっぱら自家の農業に精を出していたが、少し余

てしまう農業より、二倍も効率がいいのである。
自分の体験の中から身につけ、この商人的な近代経済金錢感覺が、後年の偉大な篤農家、実業家としての金次郎を育てていくのであった。

だから金次郎は岩瀬佐兵衛の日雇いの仕事だけでなく、さらに仕事の暇を見ては、山へ行って薪を採り、その薪や、自分が作った米や野菜を小田原で売つて現金収入を得た。米や薪を売つた代金にも税金が掛からないので、まるまる自分のものになった。

そのようにしていると金次郎は、小田原の米穀商の武松屋と親しくなり、自分の作った米だけでなく、村の百姓から頼まれた米の委託販売なども次第に引受けようになつた。すると委託手数料が入つてくるわけであり、委託手数料にも税金が掛からないから、まるまる金次郎の懐に入つてくる。こんないい商売はない。

また金次郎は米を売るだけでなく、困っている人に米の貸付もやつた。その年の新米が取れれば、その時点で米は返つてくるのだが、その時お礼として何がしかの米が付いてくる。すなわち米を貸した利子である。また米だけでなく、金を貸せば、貸した金にも当然利子が付いてくる。そしてその利子にも税金は掛かってこない。金を貸して、利子をまるまる受取る。これこそ自分の労働を投入しないで現金収入を得る、最上の方法であった。

以上が金次郎の重要な理財法であった。金次郎は商人

裕が出来ると、現金収入を得るために、すぐ他の仕事を手に出している点である。すなわち百姓でありながら現金収入への関心が非常に高く、かつ、現金収入を得る方法が非常に巧みだったのである。

それは生家復興が成ると、また小田原藩士の岩瀬佐兵衛のところの日雇いの仕事に出て、給金を稼いでいる

とが、金次郎の金錢哲学をよくあらわしている。これは、それ以前に、名主の岡部伊助や二宮七左衛門のところへ奉公して、給金を貰う、うま味を十分体験していたから

であったが、それに加えて金次郎は幼い頃から、子守りをして駄賃を貰つたり、山で採つた薪を小田原で売つて金を得たり、また他所の家へ奉公して給金を貰つたりして、現金収入の威力を大いに感じていたからであった。

百姓の仕事は、金になるのに時間がかかる。手間が多い。まず田畠を耕し、種を蒔き、作物が育ち、その作物を売らなければ金にならない。田畠を耕すという労働をしただけでは、金は入つてこないのである。その上百姓の仕事は、米が穫れても、五公五民とかいって、半分は年貢に取られてしまう。自分の手に入るのは、その半分である。割が悪い。

その点、日雇いの賃金とか、奉公の給金は、何がしかの労働をすれば、その分の金がすぐ入つて来るのである。てつとりはやい。その上、賃金や給金には税金が掛からない。全額、自分の懐に入つてくる。半分税金で取られれば田畠は買えないのである。

その金を得るには一攫千金的な事を考えていても駄目で、小さい金でも少しづつ積み立てていく、それが積り積つて大になる『積小為大』の方法が一番いいのである。

これは守銭奴というような金への執着というようなものではなくて、金次郎が生きている文化文政時代の、米経済から貸弊経済へ激しい勢いで変わつてゐる世の動きを、金次郎が敏感に捉えているからであった。百姓だって、金と無縁では、生きていけない。大きくなれない。金は商人の専門分野ではない。百姓は百姓としての金のさばき方を知つていなければならない。そして金次郎は生來、その金のさばき方が巧みだったのである。

しかし金次郎の驚く点は、この現金収入感覺が、さことに田畠開発や農耕事業の方にも及んでいたことであった。

田畠を増やす方法は、荒地を開発する方法と、田畠を買う方法と二通りある。もちろん金次郎はその両方を併用したわけであるが、どちらに重点を置いたかというと、荒地の開発に重点を置いた。それは田畠を買うやり方は、

手っ取り早いが、金がかかる。荒地の開発は手間と時間がかかるが、自分の労働力をそこに注入すれば出来る、すなわち金がかからないからであった。

さらに荒地を開発した場合にはメリットが大きかった。荒地を開発した田圃からの米には、二三年、年貢がかからないからである。それに対して買った既存の田圃の米には、五公五民の割合で半分は年貢に取られてしまい、手許に残るのは半分以下である。ところが荒地開墾の田畠は、二、三年、無税である。まるまる自分の収入となる。収入に税金（それも五割という高い税金）が掛からないというのは、大きなメリットである。だから金次郎は荒地の開発に力を入れ、自分の労働力を税金の掛からない分野に集中したのである。

そして無税の期限が切れて、年貢を納めなくてはならなくなると、その田圃は小作に出されたのである。すなわち他人に貸し、他人に耕させたのである。小作に出せば、当然小作料を払わなくてはならない。しかし年貢を納め、小作料を払っても、一割や三割の米は、地主である金次郎のところに入ってくる。すなわち田圃を貸しておけば、金次郎が何もしなくても、一定の収穫が入って来るのである。これは金を貸すのと同じである。これほどいい仕事はない。農耕についても金次郎の商人特有のそろばん勘定が、自分の田畠での米作りにまで及んでいたのは、勘定が、自分の田畠での米作りにまで及んでいたのは、

驚異という外はない。

もちろん金次郎は田畠を増やすのに荒地開発だけをやつたのではない。金が貯まると、その金で田畠を買い、田畠を増やしていくわけであるが、当然、買った田畠は税金が掛かるから、小作に出してしまっていた。

税金の掛かる仕事へ、自分の労働力を投入しない。税金のかかる田畠は他人に耕作させておいて、自分は税金のかからない荒地の開発や、税金のかからない日雇い賃稼ぎや、金貸し、米の売買仲買いなど、効率のいい仕事を振り向けているのであった。

当時の封建制度の下での税制を、金次郎は巧みに使い抜けたのである。金次郎は一生懸命に仕事をしたが、決して割の悪い仕事はしなかったのである。効率よく仕事をした。これは幕藩体制の百姓としては異例なことであり、これが二十四歳にして生家を復興させた秘訣であり、未来の偉大な金次郎像の原型となるのであった。

このようにしてみると金次郎は単なる田畠を持った百姓ではなく、同時に労務者であり、商人であり、勤め人であり、金融業者という、多面的に活躍した実業家と評価すべきなのである。これはまさに現代ビジネスにも通ずる仕事ぶりを、今から二百年も前の文化文政時代に金次郎がやっていたということは、驚き以外の何物でもない。

さて金次郎が意識的に税金の掛からない分野の仕事へ、

自分の労働力を投入したのは、金次郎の節税の方法が巧みで、仕事の仕方が効率的であったからであるが、しかし果して金次郎の狙いはただそれだけだったであつたらうかと、筆者は思うのである。というのは仕事の効率性もさることながら、金次郎の心の奥底には、
(百姓は汗水垂らして働いて、なぜ五十パーセントも年貢を納めなくてはならないのだろう)

という強い不満が横たわり、それが、

(そのような仕事へ、自分の貴重な労働力を投入したくな)

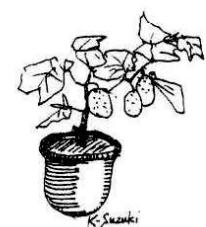
という年貢への抵抗感が、『年貢を納める仕事』を金次郎に忌避させたのではないかと思うのであるが、そこまで考えるのは、少し行き過ぎであろうか。

(つづく)

「まんじ」季刊発行内規

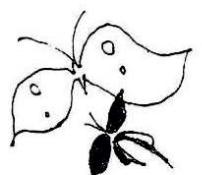
(発行日) (原稿締切日)

春季号	…	二月一日	…	十二月三十一日
夏季号	…	五月一日	…	三月三十一日
秋季号	…	八月一日	…	六月三十日



北条時宗とその時代(四)

島津隆子



七、文永の役

1 フビライ対時宗

来日した元の外交使節、杜世忠らを鎌倉・滻の口に斬つてから四年後の弘安二年（一二七九）八月、水夫たち四人が、高麗に帰り着き、詳細が高麗から元にもたらされた。

これを聞いた元の宮廷は怒り狂う。

フビライも日本の態度に腹を立てたが、范文虎がさし向けた周福らの消息を心待ちにしながら、日本遠征の準備は着々と進めていた。造船命令が高麗に下っていたことはいうまでもない。しかし、それから一年経つても、周福らが帰還することはなく、風の便りさえ届かない。

弘安三年（一二八〇）八月、「日本憎し」のフビライは「征収日本行中書省」略して「征東行省」という日本征

服のための軍政機関の設置を決意する。そして、范文虎・忻都・洪茶丘らを首脳とした。

忻都と洪茶丘は、蒙古人・漢人・高麗人の混成軍で、四万人から編成された東路軍を。范文虎は蛮子軍、つまり南宋からの降伏兵十万からなる江南軍を統率する。東路軍は高麗の合浦を、江南軍は元の江南から出発し、両軍は奄岐で合流、日本に上陸する作戦が計画された。

九月から十一月にかけて、高麗の慶尚道、全羅道の造船所には前回と同様、民衆が苦役に狩り出され、日夜をついで船を急造する。

しかし、日本と宗の間では商船が往来して、綾錦、青磁・白磁などの高級品や、經典、書籍、文房具などが運ばれていたために、元に使者を帰さなかつた時宗の思惑どおり、元側には日本の情報は一切入らなかつた。

こうして司令官たちは燕京を出発し、文永の役から七年ぶりに、再び日元両国の戦いの火蓋が切られようとしていた。

「蒙古の異賊らは、来年四月中に襲来するであろう。厳重に守備を固めるように。また、守護人と御家人との不和は不忠に等しい。一致協力して守備に当るよう」

といふものである。

幕府はこの先見の明をいかし、十二月八日、豊後の守護・大友頼泰に御教書を下した。

「蒙古の異賊らは、来年四月中に襲来するであろう。厳重に守備を固めるように。また、守護人と御家人との不和は不忠に等しい。一致協力して守備に当るよう」

といふものだ。

こうして司令官たちは燕京を出発し、文永の役から七年ぶりに、再び日元両国の戦いの火蓋が切られようとしていた。

元の世祖にとっても、日本の執権にとっても、この期に及んで気がかりなことは同じだった。ただ一点、獅子身中の虫を恐れたのである。

この獅子身中の虫として、時宗の怒りを買い、血祭りにあげられた一人の武士がいる。

話は、元軍が博多沖に襲来した一報に沸く、四ヶ月ほど先に進む。

「元軍襲来す！」

探題北条実政の急使は鎌倉にとんだ。

急を聞いて関東各地から馳せ参じた、評定所に溢れるばかりの守護地頭を一堂に集め、執権・時宗は口を開いた。

「元の軍勢が大挙して博多に押寄せてきた。今こそ国の大興亡がかかる一大事の機である。まず、その方たちの覚悟のほどを聞こうぞ」

「文永の役以来、家人の土地売買を差止め、諸国の年貢、また所蔵米徵収の強化をして、兵糧米を蓄えてきた。用度を節約し、武を練り、馬を養い、弓を張り矢をはいだら出たように答えるよ」

「予がいちばん憂慮することは、卿たちが不和に陥ることである。もし、日本人と卿たちが交渉する場合には、つねに同心になつて協議し、謀り、かならず一つの口から出たように答えるよ」

范文虎のための軍政機関の設置を決意する。そして、范文虎・忻都・洪茶丘らを首脳とした。

のも、あらゆる犠牲を払って防御線の完備を図ったのも、それらはみな今日に備えるためであった。蒙古からの国書を何度も退け、その使者を最初に滝の口に斬り、再度博多に斬り捨てた。その時の断固とした覚悟を元国に知らせるのは、今をおいて他に無い」

時宗の張りつめた声が、叱咤のように聞く者の胸にひびく。

「かくあることは、かねてより覚悟の上」

二階堂信濃守が口火を切る。

「武士であるかぎり、命より名が欲しうござる。出陣のご命令を」

秋田入道がつづけた。

「早かな出陣を願っております」

いっせいに、どよめくような同意の声がおこった。

その時、

「しばらくお待ちを」

「もんじょうはがせら」 文章博士・源兼章の声である。時宗が咎めるように聞く。

「兼章か、なぜとめる」

「恐れながら、まだ時はございます。どうか和睦をなされませ」

「何と申す。不埒な」

時宗は兼章のそばに進み寄るなり、その手は太刀の鯉口を切っていた。

「返答によつては、容赦はせぬぞ。和睦とはいかなる意味じゃ」

「ご勘気は「もつともでござりまするが」自分なりに調査した結果、蒙古の力がいかに強大かを思つたのだ。元の人々の智も武勇も日本に劣るものではない。

文永の役で使われた武器の石火矢にしても鉄砲にしても、日本よりも長足に進歩していることは、あの苦戦でまざまざとみせつけられたとおりである。

そのような国の危険な戦いの挑発に乗ることこそ、日本を危うくするのではないか、と言うのだ。

それよりも、和睦を結んで国の安泰を守るべきだと言つ切つた。

「黙れ、黙れ、兼章。日本男子の風上にもおけぬ腰碎け奴」

「しかし、もしも万が一、力およびず、国が前回の対馬、奄岐の轍を踏むようなことになりますれば、取り返しのつかないことに」

「もうよい。そちは戦わずして夷狄の手に国を渡せ、といつているようなものじゃ。もう許してはおけぬ」

時宗の太刀の一閃で、血に染まった兼章が前のめりに倒れた。

「國中で、たつた独りの異論者がいなくなつたのだ。いざ、心おきなく戦え」
まさに時宗の獅子吼である。

それでも、命と引きかえに、自論を吐露して逝った兼章の死は時代を超えて、一つの生き方を貫いた若者の潔さを示している。斬った時宗もまた、善し悪しを超越したところで、決然と己の立場を貫く権力者の典型的をみせている。

だが、時宗に為政者として、少しの狡猾さがあつたなら、

（この男、ほかの場面で、意外と使えるやもしれぬ）

と殺さずに手駒の一つにしたかもしない。

しかし、時宗は自分に逆らう者を潔く決済し、後は人々の謂うにまかせ、自身の裁きは神仏に委ねたのである。

2 二度目の襲来

さて、話をもとに戻すと、五月三日、東路軍四万は九百艘の軍船を連ね、高麗の合浦（今の馬山港）を出発した。そして、ひとまず巨濟島に集結して、しばらく停泊していた。

それは六月中旬を約した、江南軍と老岐で合流の時期調整のためかもしれないが、そのうち、順次、巨濟島を後にした。

五月二十一日、東路軍の一部、高麗兵は対馬に上陸して残虐行為に及んだが、五日ほどして、東路軍は奄岐に向かつた。

その後、船団は十日近く奄岐周辺の海上を漂つて、

て残虐行為に及んだが、五日ほどして、東路軍は奄岐に向かつた。

この頃、博多の本営に駆けつけた武将は、少弐經資一族はじめ菊池武房、竹崎季長、阿蘇宮司惟景、龍造寺季時、大友頼時らで、それぞれが防壁に拠つて、敵を向え討つ態勢に入った。

関東からも多くの軍勢を率いた安達盛宗が到着したのである。

六月五日、東路軍は博多湾に入ってきた。

しかし、近づいてみると、沿岸一帯には大防壁線が張りめぐらされ、文永の役の折に上陸した博多・今津の長浜も室見川河口の百道原も、日本軍によって守り固められているではないか。

これは明らかな情報不足の結果である。

「知つていたら、このコースはとらなかつたものを」

「あの堅固な防壁線を突破することはむずかしい。江南軍を待つよりはかかるまい」

六月六日、上陸を阻まれた東路軍は志賀島と能古島辺に引き返し、一部の軍が志賀島に上陸して襲ってきた。

そして、陸つきのここを根拠地としたのである。

日本の将兵は陸地から突撃を開始、戦闘になつた。

数百艘の敵船から鉄砲が火を噴き、元軍の兵士たちが

襲いかかる中、日本軍は矢先を揃えて射まくった。だが、さしもの合戦も日暮れを合図に相引のかたちで終息した。その夜のことである。

日中、激しい戦闘が行われていたことなど、嘘のよう静かな深夜の海上を、櫓の音をしのばせながら、敵船に漕ぎ寄せる二隻の小舟があつた。

大矢野種保、種村兄弟の率いる夜襲隊である。やがて、一艘の敵船に近づいたと見るや、鉤のついた長柄を船縁にひっかけた武士たちの一隊が、ひらりと敵船に躍りこんだのだ。不意をつかれた敵の船中は大混乱に陥り、叫び声や物のこわれる音などで、たちまち修羅場と化した。

そして、船から船に飛び移り、兵士を斬りまくって、数艘の船に火をかけると、夜襲隊は素早くもとの舟に乗つて迅雷のように引き揚げたのである。引き上げの途中、振り返ると、志賀島の前面の海は、船が燃える炎で赤く染まっていた。

兄弟の成功が伝わると、日本側からは先を争つて夜襲をかけるものが多く出た。

極度に恐れた敵側は、用心のため船と船を鎖でつなぎ、五十艘ぐらいを一塊として、交替で見張りを立て、近寄る小舟に石弓を放ち沈める作戦に出た。

河野通有は嫡子八郎、伯父・通時以下百名ばかりの決死隊を率いて、敵船団の真っ直中に突入した。

この度胸のよさには、敵味方なく驚嘆するばかりであったが、長柄をのばして敵船に引っかけようとした時、敵がつなぎの鎖を切ったのだ。そして、通有たち二隻の舟を囲んで、いっせいに石弓を射てきた。小勢のうえに、武器は弱い。たちまち郎党五人が射倒され、伯父・通時が負傷する。通有も敵の石火矢に肩先をうたれた。だが、その矢を抜き取った通有は、流れる血をものともせず、太刀を振りかぶると、自分の舟の帆柱を切り倒したのだ。

そして、帆柱を梯子がわりにして、われにつづけとばかり、敵船に駆けのぼった。百余名も白刃をかざして敵船に躍り込んだ。

敵の兵士たちは攻太鼓を打つのも忘れ、周章狼狽する。

同士討ちを恐れてか、近くの敵船からは石火矢も打つてこない。通有父子は大太刀、伯父は薙刀をふるい、力のかぎり奮戦した。そして、頃はよしと、わが小舟に飛び移り、味方の待つ陣に帰還したのである。

3 志賀島の戦い

六月八日、日本兵は志賀島に上陸した東路軍の一部を、海の中道（志賀島の海峡）から攻撃し、三十騎を率いた大友貞親は、島と陸地が細長い州になつてゐる箱崎方面から猛攻を加えた。

洪茶丘をはじめ敵兵は耐えきれずに命からがら本船に逃げ帰ったという。

「まだ食料も残っている。江南軍を待つべきだ」

金方慶の反対にあって、二人の意見は引つ込まれた。

六月十八日、当の江南軍・十万の兵と三千五百艘の船団は、まだ揚子江の慶元（明州の寧波）と舟山島の定海に集結していたが、この日、やっと日本に向けて進発しはじめた。大幅に予定が遅れたのには理由があったのだ。新たに任命されたのは阿塔海である。

六月下旬、江南軍の主力は平戸島から五島列島付近の海上に到着し、一部は東路軍と共に、壱岐を襲つた。

六月二十九日、

「壱岐の島を奪いかえすのだ」「再度受けた島民の恨みを晴らしてくれようぞ」

と守護の少弐経資と父・資能、子の資時を始め、薩摩の島津久経、長久兄弟など九州勢が参戦し、奮闘した。

だが、熾烈をきわめた戦いで経資・資能父子は負傷し、経資の子資時は戦死した。

七月一日、前日の激しい戦の余波を受けて、松浦党、彼杵、千葉、高木、龍造寺など数万といわれる軍が、戦場となつた壱岐、瀬戸浦の陸・海で奮戦し、敵に多大な損害を与えたのである。

そして、数日間の合戦の後、東路軍と江南軍は平戸方面で合体し、元軍となつた。

船体も腐りはじめ、食料も減ってきた。約束の時期がきてても江南軍は姿を見せないではないか。軍を引き返そ

う

この頃、亀山上皇は伊勢神宮に勅使として経任大納言(けいとう)を派遣し、
「身をもって国難に代らせ給わん」と、祈らせた。

また、岩清水八幡に元国降伏祈願の一切經転読を行わせた。これを聞いた國中の社寺で、真剣な異國調伏の祈禱がなされたという。

では、國を守る責任を双肩に負った時宗は、鎌倉でどんな時を送っていたのだろうか。

時宗は伯父經時の子で鶴岡八幡宮別当・頼助に命じ、異國降伏を祈禱させた。

自身は毎日建長寺の禅堂に入つて座禅を組み、國の勝利を祈った。仏光国師や仏源禪師などと法語を交した後、執權本邸の自室に入ると、机に向かうのを日課とした。机の上には、金剛經、円覺經をはじめ諸般若の經本が整然と置かれている。

時宗が端座した日の前には、般若經の經巻が広げられていた。

しばらく瞑目すると時宗は、左手の小指に巻いた包帯をほどきはじめる。血が滲んだ白い包帯を傷口からはがしとると、そこには、毎日切り刻んで傷ついた紅い小指が現れた。

時宗は右手に持つ小刀で、小指を思いきりよく深く切つ

である、危機に直面している祖国の命運を賭けたひたむきな行為なのだ。その純粹な心情には主義もイデオロギーもなかつた。

5 再びの嵐がもたらした勝利

時宗の祈りが届いたのか、不思議なことに、七月の上旬に一つになつた元軍は、二十日以上もの間、平戸島から五島近海を漂泊したままで、戦いを挑んでこなかつた。

夏の季節、船に閉じ込められる日々を余儀なくされた元の兵士たちは、さぞ苦痛なことであつたろう。

司令官たちは、意思統一を図つていたのだろうか。

それとも、元の大船団の脅威に怯えたであろう日本からの、何らかの意志表明を待つていたのか。

いや、燕京でのフビライの訓示は、日本に服属をすすめる交渉を示唆してはいなかつたか。

七月二十七日、元軍がやっと動いた。

肥前の鷹島付近に移動を開始し始めたのだ。

そこから一挙に博多湾に侵入し、上陸する態勢をとつたよう見えた。

潤七月一日、前日の宵の口から灰色の雲がたれこめ、嫌な蒸し暑さが海上を覆つていた。風も出てきた。次第に波も高くなりそうな気配である。元・全軍に命令が下つた。

「明日は海が荒れそうだ。夜明けとともに総進撃せよ」

た。

さつと溢れ出る鮮血を、時宗は小皿に受けた。

(こんな痛みなど、遠く九州で戦っている将兵たちの労苦に比べたら、何ほどのこともない)

時宗は止血のためしばらく、疼く傷口をおさえてから、もとのように包帯を巻く。

やがて、筆を持つと、血をたっぷりと含ませ、昨日のつづきの般若經を書き始める。書き終えると、仏光国師に、一枚一枚の血書の供養を願うのである。

國師は、
太守諸經を血書して 国土を保持せんと

陞座(じゆざく)して請う

(時宗公は諸經を血書され、日本國を守り固めんとして、仏の座に昇つて祈願された)

「一句一偈と、一字一劃と、ことごとく化して神兵となるであろう」

と時宗を励ますのだった。

自身の書いたこの一字一字が神兵となつて祖國を守りますようにと、時宗は自らも、仏天の助けを願つて、祈りを込めるのである。

神仏への祈りによって誕生した子・時宗が、今、自らの血で贋(あぶな)いの祈りを捧げている。それは自らの衆達への祈りでもなければ、肉親へのちっぽけな祈念でもない。この世に生を受けた時から身に引き受けた國土への責任

翌朝、石墨の上から日本の將兵が見たものは、波風の

静まつた海面を埋める夥しい船の残骸や破片と、その間に漂う、数えきれないほどの溺死体だった。海岸に打ち上げられた遺体の様は、目を覆うほどの惨状であった。

実際に、数万の兵士たちが波に呑まれて逝つた。また、海に溺れた者、海浜に打ち上げられた者は数千を数えたと伝わる。

助かった兵船は、遅れて東進してきた軍船と鷹島沖で一緒になり逃げ帰つた。

これら残兵に対し、約一週間もの間、日本軍の掃蕩戦がつづけられた。九州の武士たちは舟に乗り、鷹島辺りに打ち上げられた残存の兵士を攻撃し、恩賞目当てで捕虜の数を競つた。さらにそれまでの残虐行為への復讐をこめて、博多の那珂川付近で元の兵士たちの首を、躊躇なく刎ねたのである。首の数も恩賞を受けるための戦功

の認知となつた。

博多から今津、鷹島、さらに松浦半島北岸一帯は、元兵の遺体で埋めつくされた。

こうしてあっけなく終つた二度目の元寇を「弘安の役」という。

現在でも、異国に来て命を落した元の兵士たちを供養した蒙古塚が各地に残つてゐる。

それでも命強く本国に帰りついた者は二万人弱いたのだ。

伝わるところによると、范文虎など元軍の司令官たちは、われ先にと沈没を免れた堅牢な船を選んで乗船、十余万の兵士を鷹島にして、それぞれが本国に帰還を果したといふ。

潤七月九日、幕府は朝廷に対し、幕府の管轄外である寺領の荘官を動員して、戦場に出動させることができるように勅許を請願した。だがこの時、すでに戦いは終結していた。

潤七月十四日、元軍覆滅の報が京都に届き、急使はつづいて鎌倉の時宗のもとに飛んだ。

潤七月二十日、朝廷は、先の幕府の請願を九日付で承認したのだが、朝廷も弘安の役で元の襲来が終つたとは、考えていいなかつたのだろう。結果として、幕府の権力は増大することになった。

つづいて起つた十一月十四日の火事で、ほとんどの社殿を焼失する災難に見舞われていた。

しかし、翌十五日には、時宗から沙汰が出され、いち早く再建にとりかかるほどの手廻しのよさであった。さすがに神仏の申し子として誕生した時宗の見事なお手並みである。

活気に満ちた槌^{づち}や鑿^{のみ}の音、多くの宮大工たちの声が八幡宮の森に響きわたり、ここには戦の暗さはなかつた。やがて、弘安四年（一二八一）八月には再建された立派な社殿が姿をみせ、何か事があるたびに八幡宮にお参りしなければならぬ、鎌倉っ子たちを喜ばせたのであつた。

6 フビライの終焉

だが、この後も、またいつ日本沿岸を襲つてくるかもしれない元軍に対して、再び強風が吹くとはかぎらない。それは誰にも予測できないことである。

人にも國にもふりかかる災難は多いものだが、何が起るかを知ることはできない。どのように起るかも誰も教えてはくれない。ならば、元軍の転覆に氣を緩め、浮かれてばかりはいられない。

その思いは、決して解き放されることのない重圧感で時宗を呪縛しつづけた。

時宗は三度目の元襲来に備え、この直後、叔父・時定

「なに、再び暴風になつたというのか。それにしても、よくぞ人知では理解できない自然の加護をくだされたものよ」

さすがの時宗も喜色を満面に浮べ、満足そうであつた。長い間の胸のつかえが一挙に下りたような、晴やかな風姿である。

わが軍大勝利の知らせは、たちまち鎌倉中を駆け巡つた。

武士はいうに及ばず、町人も百姓も、男も女も童まで、未曾有の国難を乗り越えた安堵感にじっとしていられず、軽い足取りで執権屋敷や、木の香も新しい鶴岡八幡宮に集まってきた。

この日ばかりは解放された屋敷の庭が人で埋つた。

二度までも吹いたあの風は偶然か、神仏の思召しか。時代、人によって受け取り方は違うが、当時は「神風」が吹いたと多くの人々は有難がつた。

それはともかく、わが国にとつて幸運な強風であったことは確かだ。もしも、元軍が大挙して上陸していたら、日本は膨大な犠牲を強いられたことだろう。また、上陸作戦が成功していたなら、元は本國から後続の部隊を次々と送り出す予定になつていていたのである。

ちなみに、この日、たくさんの人人が詣でた鶴岡八幡宮は、二年前の弘安三年（一二八〇）十月二十八日、中下馬橋に起つた火事で、神宮寺が焼けてしまつた。また、

を鎮西に派遣、肥前の守護に任命し、警固番役を監視する任務を与えた。

翌年には北条時業（のちの兼時。時頼の孫）を播磨に派遣し、近畿防衛の任に着け、近畿沿岸まで防備を行き届かせる。播磨国の守護を兼任する時宗は、最も近い身内を派遣したのである。

九州の御家人たちには遠行を禁じ、警固番勤務を命じた。石築地役と異國警固番役は、これから幕府滅亡まで続くのである。そして、警固番をもつと強固なものにするため、関東派遣の奉行に、少弌、大友、安達の鎮西守護を加えた特殊合議機関をつくったほどである。

弘安四年（一二八一）八月十一日から十八日までの七日間、亀山上皇は岩清水八幡宮に「異國覆滅」のお礼の参籠をした。僧侶百人を連れた叡尊も、ともに盛大な法会を営んだ。とくに、この機に上皇の信任を深めた叡尊には、不思議な逸話が生れた。

運命の潤七月一日、叡尊が五百余人もの僧とともに、

「東風をもつて兵船を本国に吹き送り給え」と祈禱していたところ、叡尊が持っていた愛染明王の鏡矢が、西をさして飛んだ、というのである。

一方、潤七月二十九日、フビライのもとに日本襲来が失敗に終つた報告が入つた。長い年月と、多大な人的、

物的な犠牲を払っての遠征だっただけに、すべてが徒労に終ったフビライの挫折感は察して余りある。

元軍破滅の原因は、暴風雨だけにあったのではなさそうだ。

征服者フビライによって編成された被征服者たちによる軍隊が強いはずはない。フビライが危ぶんだとおり、かつての敵同士の司令官の意志統一は難しく、持てる力を殺された高麗の軍隊の弱さも露呈された。強制的に建造させられた船もろかた。江南軍のあの異常ともいえる遅延は、まるで暴風到来の日時に合わせたかのようである。

フビライにとれば悪い条件が重なった結果であった。その後のフビライは日本からの報復を恐れ、自國が支配する耽羅（濟州島）の警備を強めるとともに、高麗にもその補強を命じた。また、高麗の金州に鎮辺万戸府を設けて日本からの遠征の警戒に当らせた。

しかし、日本侵略の野望を捨てきれないフビライは、翌年の弘安五年二月、またもや高麗と江南に兵船の建造を命じるのである。

だが、高麗では、何度も続く苦役に辟易としている人々

が逃亡するなどの事態が起き、江南では反乱や内紛が頻発したのだ。

フビライはその後も、征東行省の廃止と復活を繰り返

したが、造反者の鎮圧に追われるようになり、日本遠征

に、泰盛は権勢の拡張をおし進め、弘安五年（一二二八）、北条氏独占の官途である陸奥守に任官した。そして、十七名の評定衆のうち六名が、十三名の引付衆のうち五名が、泰盛の同族か一派で占められた。

泰盛の子・宗景（むねかげ）は引付衆一年を経て、二十四歳の若さで評定衆に加えられ、その上、父から秋田城介の地位まで譲られたのである。こうして、安達氏は北条氏と肩を並べるほどの権勢を持つにいたった。

得宗御内人たちは、危機感から、泰盛への反発を強めていった。しかし時宗は、西国防備の人物配置の手を打つと、仏光国師のための円覚寺建立に力を傾注するのだ。

八、円覚寺建立と時宗の最期

1 時宗の悲願

弘安の役がおわって程ないある日、仏光国師は時宗に一編の詩を贈り、本国に帰る気持ちを告げた。

檀那（だんな）に辞して唐に帰るを求む

故國望斷碧天長

故國の望断ちて 碧天に長し

那更衰令近夕陽

那ぞ更に衰令 夕日に近きおや

補報大朝心已畢

大朝に補報して 心已に畢えたり

送歸太白了殘生

太白に送帰して 残生を了えん

は実現不可能となつた。

永仁二年（一二九四）の世祖フビライの死は、同時に日本征服計画の終りを意味した。

「日本大いに恐るべし。舟師をおこすべからず」と。

余りにも遅いフビライの思考の転換であった。

7 幕府の内憂

二ヶ月以上にもわたり、多数の兵士が参戦した弘安の役の論功行賞は、文永の役での竹崎季長の恩賞の顛末にもみられるように、困難をきわめた。実に弘安四年十一月ごろから九年まで、五年間もつづけられたのである。

幕府内の主導権は、安達泰盛が握っていた。

もちろん異国との戦いであるから、没収地はない。恩賞の地を与えるのは、並大抵のことではなかつた。しかし、どんなに綿密を期そうが、かららず不満分子はうま

れるものである。このような不満分子を吸収して泰盛と対立したのが、得宗御内人の一人である平頼綱であった。

時宗が信頼し、深秘の沙汰（さとう）で政治を動かしてきた仲の二人の微妙なすれに、時宗は心痛した。

だが、義弟というより婿のような存在の時宗をバック

（私は帰依している時宗公に別れを告げ、唐に帰ることを求める。故国は望めども望めず、碧天は遙かに遠い。

拙僧ももはや老いて、間もなく夕日が没するのと同じ歳とはなつた。お世話になつた大日本國の朝廷にも多少とも報いることができて、私の心は閑である。あの宵の明星の輝いている所に帰つて、余生を了えよう）

時宗は仏光国師に辞意のあることを知つておどろいた。だが、自分の祖先の墳墓のある郷里に里心を抱きはじめた国師の気持も理解できる。しかし、心の支えである国師が帰郷してしまつたら心もとない。国師にはいつも自分そばにいて欲しい。時宗はなんとかして国師に帰国を思いとどまらせようと心に決めた。

その師弟の心が通わないわけがない。

「元の国との戦の結果は、師のお力に預かって大きなものがござります。何のご恩返しもできない今、帰国などとおっしゃらないで下さい」

「私はいつか時宗公のことを、優れた力量があり、お釈迦さまの再来の人、天下の人傑だと、評したことがあります。その心は今も変つておりません。公はもう私がそばにいなくても……」

時宗はすぐるような思いで、心に反芻している思いを国師に披瀝した。

「私は何年間にも及んだ戦時態勢から荒廃した国を鎮護

しなければなりません。そのために仏法をもつと隆盛にしたい。そして、二度の蒙古襲来で戦没した敵味方の亡靈を弔いたい。それが私の悲願でございます。それには大禅院を創建して、ぜひ国師に開山始祖となつていただきたいという大願を持っております」

苦労人で人情味あふれる国師は、時宗の激しくも熱い好意に感激して、その願いを聞き入れたのである。
国師はついに、この日本國の土となることを決心したのだ。

大唐沈卻す 孤筇の影
添へ得たり 扶桑一掬の灰

（唐には一本の杖の影がなくなつて、日本に一握の灰が増える。つまり、唐からは私の姿が消えて、そのかわりに、日本に私の骨の一握の灰が増える）

そんな仏光国師の温情深く涙もろい一面を伝える話が残つてゐる。

徳誼と宗英という二人の僧が、時宗の招請状を持って招聘使として宋に渡り、仏光国師を日本に招來したことは前にも記した。

日本に来ることが決った国師は出発に先立ち、天童山景德禪寺に集まつた僧衆たちを前に、別離の辞を述べた

のである。

「私が日本に渡るのは、大法を広めるためである。そのことを理解してくれるならば、中国と日本がいかに遠く隔たつていようとも、私とみなさんは、毎朝会つていよいに近い距離にいることになる。このことを理解してくれなければ、あなた方が心にかかるつて、私は乗船して日本に向かつても、あなた方が心が恋しく思ひ出されてたまらないだろう。とにかく、人間の出会いの縁も、別離の理由も、その運命はわからないものである」

中国の僧衆たちに心惹かれながらの涙の告別であったという。

2 円覚寺建立

時宗は父・時頼が建長寺を建てた鎌倉・山ノ内に禅寺を創立することを決意した。

この辺りは、鎌倉の裏手にあたる郊外だが、狭い鎌倉の中に広い寺域をとることはむずかしいので、細長い谷間に深く入る谷戸を切り開いて寺の境内にした。木々が深く生い茂る小高い左右の山が寺を抱え込み、幽玄な趣をかもしだすことだろう。

時宗は、さっそくこの場所に寺院建設工事を着手させた。

仏殿、僧堂、方丈、厨庫（庫裡）が完成した翌弘安五

年（一二八二）十二月八日、執權・北条時宗が開基となり、仏光国師（無学祖元）を開山第一世に迎えて、開堂の儀を行つた。

仏殿には本尊の廬舎那仏や観音、十二菩薩、天童八部衆を安置し、さらに時宗は、地蔵菩薩一千体を寺の一閣に奉安した。国師の導師で、これら諸仏の入仏の儀が嚴肅のうちにも喜びに満ちて執り行なわれた。建長寺五世の住持であった国師は、ある期間、両方の寺の住持を兼務することになる。

深い木立ちの境内には国師の説法を聽こうと、多くの人々が集まつた。その時、どこからともなく雪のようない白鹿が群れになつて出現し、国師の説法にじっと耳を傾けたという。いわば社寺創建にまつわる奇瑞譚であり、山号の瑞鹿山は、この草創の縁起によつたという。白鹿は円覚寺によく似合つて、今でもどの木陰に白鹿を配しても、その風景には違和感がない。

ちなみに総門の左右にある“白鷺の池”は、仏光国師が鎌倉に来たとき、白鷺と化した八幡大神が道案内をして、この池に羽を休めたという伝えがある。

さて、国師の説法は菩薩の靈威を説かれるところから始められた。

「このお寺の本尊は、華嚴の教主・廬舎那仏であります。悟りを開かれた釈迦は、文殊菩薩などのすぐれた菩薩に

対して『華嚴經』をもとに、仏の悟りの内容を示されました。つまり、この寺院創建の目的は、菩薩が行うべき修行をして、功德をおさめ、そして得た、徳の満ち満ちた仏界をこの世に具現しようと考えたことにあるのです。この思いは、時宗公とこの拙僧の一一致した願いでもあります。

この華嚴經と同系統の經典『円覺經』にちなみ、円覚寺という寺名をつけました】

国師は、人々に向い、時宗が胸奥に秘めた戦争の悲惨と戦死者の慰靈についても縷々説き、供養の詩をたむけたのだ。

その詩は、次のようなものである。

前歲及び往古、此軍、及び他軍、戦死と溺死と、萬衆無帰の魂、ただ、願わくは、すみやかに救いたまえ。みながな将に苦海を越え、法界ついに無差、冤親ことごとく平等ならん。

（前の戦いでも後の戦いでも、味方の軍兵であれ敵の軍兵であれ、戦死と溺死を問わず、もう帰ることのない、多くの魂たちを、ただ、早かに救い給えと願う。みなが苦海をこえて入つた仏界には差別がない。無実の罪をかぶつたものも、そうでないものも、平等であれかし）

そしてまた、国師は僧衆に向い、檀那・時宗の心に応えるべく仏道修行に励むよう、切々と訴えた。

「修行には一層の刻苦勉励を望む。万が一にも座禅、読経もせずに、寮舎で寝転がり、真裸になつて袈裟もつけず、托鉢もせずに、無益な一年を送るようなことがあるなら、どうして檀那・時宗公の志に報いることができようか」

時宗は、国師の言葉を噛みしめるように胸に刻んだ。

（思えば、この師から不動の心を修養し、身はこの鎌倉に置きながら、心は九州の戦場にあった。同時に、師を請いながらの法喜禪悦の日々でもあった。しかし、この戦のために死んでいった多くの犠牲者の慰靈こそが、この寺を建てた私の目的なのだ。それを果たすまで、私の心は休まることができなかつた。敵・味方を問わず、散つていった靈魂たちよ、この山懷に抱かれた静謐な寺で、今こそ安らかに眠れ。それにつけても思い出す。誤つて教時の兄・北条時章を斬つた罰で殺した大蔵頼季らよ、元との和睦を勧められて斬つた源兼章よ。謀反の疑いで討つた異母兄の北条時輔よ。そして、異国から来て滝の口で斬つた杜世忠と何文著、博多で斬つた周福と樂忠らよ。それそれが、自分の役割を存分に果たそうと熱い意気に燃えていた。

しかし、不幸にして立場の相違から、この世では相容れない者同士になつたが、今は心から冥福を祈る。安らかに眠れ）

だが、時宗の生前には勅額の下賜はなく、それを賜つたのは二十四年後のことになつた。
その後、円覚寺、正確にいうと、瑞鹿山円覚興聖禪寺は、徐々に建物もととのえられ、建長寺に次ぐ、鎌倉五山第二位の寺格をもつ巨刹となり、臨済宗円覚寺派の大本山となるのである。

3 早すぎた別離

円覚寺の開堂の儀をおこなつてから、わずか一年三ヶ月後の弘安七年（一二八四）三月二十八日頃から、時宗はにわかに病の床についた。三十四歳の若い身に巢食つた病は思ったよりも重く、進行は早かつた。みるとうちに身は細り、偉丈夫な面影は失せていった。
得宗の家に生れ、十三歳で父・時頼を亡くし、十四歳で執權見習いの連署の座に就いた時宗。そして、若干十六歳で執權の重責を負うのである。この年には、蒙古がはじめて国書をもたらしている。それからは、何度も蒙古や元から国書が届けられ、国難の表舞台に立たされつづけてきたのだ。心の休まるいとまもなかつた。文永十一年の元寇襲来時には、時宗は二十四歳であり、弘安の役では、三十一歳であった。

そして、元寇敵味方の亡靈供養のための円覚寺を建立して、仏光国師を開山第一世と仰いだのは翌年十二月のことだった。それから、わずか一年を置いて、三十四歳

と、時宗の慰靈は心ゆくまでつづいたのである。

国師にとつても、円覚寺の新築、とくに壯麗な仏殿の落慶は、どんなに嬉しいことであつたろうか。法会が

済むと、「老僧の手は舞い、足のふむところを知らず、君が勧める樽の中の酒を飲みつくしてしまった」

ほどで、国師の口からは珍しく日本語までとび出し、いろはにはへと、ららりりらららと歌いながら飲み、笑い、飲みながら歌う愉快な宴は、時のたつのも忘れさせて、いつまでもつづいた。

当時、寺には僧百人、行者・人工百人、承仕二十人、洗衣四人、方丈行者六人、下部ら三十八人、合計二百六十八人が生活していた。これだけの大人數を養う草創の寺の維持には、経済的な援助が不可欠である。

開基檀那の時宗は、弘安六年七月十六日、寺の財源として、尾張国富田庄（名古屋市庄内川西南方）や上総国亀山郷の寄進を將軍・惟康親王に願い出て許された。富田庄、亀山郷は円覚寺領となり、寺にとって大切な財源になったわけである。

同時に時宗は、円覚寺を北条氏の私寺ではなく、將軍家の祈願寺、つまり公的な寺とすることをも申請したのだ。これはひとえに寺の基礎を固め、寺格の向上を願う時宗の頑張りであった。

の身は、重い病に冒されてしまった。文永五年から弘安七年までの実に十七年間は、元寇問題のために費やされたといつても過言ではない。
権力者はいつも孤独であり、苛酷な道を歩みつづけたのだ。
夫人・堀内殿は瘦せた夫を抱きしめる。
「先に逝つた者たちが呼んでいるようじや。まだ、このわしの指揮が必要らしい」

かつての若い力に満ちた夫とは、まるでちがう肉体を撫ぜさすりながら、夫人は言葉を失つていた。そして、病んだ息子をいとおしむ母親のような思いにかられていた。
「ふつうの人なら、とても耐えられないような十七年間を、ひたすら夷狄から国を守ることに心を碎き、仏さまに仕え、心血をそそいで、よくぞ生きてこられました」「いや、過ぎてみれば私の労苦などなにほどのこともなかつた。すべては風のようすぎ去つた」

無力な妻である私はそばで見守ることしかできなかつた。でも、真摯で強靭な男らしい男をみつめて生きられたことは、幸せだった。叶うことなら、この夫にもうしばらくの命が欲しい、と夫人は祈るような気持であった。

だが、堀内殿や子の貞時、仏源禪師や仏光国師、そして、多くの人々の祈願も空しく、時宗の命は刻々と終り

に近づいた。

死を悟った病床の時宗は、苦しい息の下から仏光国師に最後の願いごとをしたのである。

「師より先に逝くことをお許しくだされ。どうか剃髪をして、法衣をお授けくだされ」絶望的な別離である愛弟子の“死”は、国師にもどうすることもできなかつた。その死への導師を任せるために、老いた国師の帰國をひき留めたのだろうか。いや、それもこれも人知では計り知れない仏知のとりはからいなのであった。

時宗の願い通り、国師は時宗が息を引き取る前に戒名を授け、時宗は“法光寺殿道果”と称した。

国師は偈を読んだ。

檀那法光寺殿落髮す

了了知了了見

了々として知り 了々として

見る

生滅根源一刀截斷
斬新風月付兒孫
枝枝葉葉無邊春

生滅の根源
斬新の風月は 児孫に付きて
枝々葉々 無邊の春

(檀那である法光寺殿は、明らかに仏光をお知りになら

そして、偈を賜つたのである。

志道大姉落髮す

無量劫來都是夢

夢中那覺路頭長

一刀斬郤閑恩愛

日照菩提萬樹香

無量の劫來 都て是れ夢

夢中那んぞ覺ゆ 路頭の長きを

一刀に斬郤す 閑かなる恩愛を

日は菩提を照らして 万樹香ばし

(時宗公の夫人、志道大姉の長い一生も“都ては夢”であった。しかし、夢の中にいて、路の長いことをどうして覚えることができたであろう。今一刀の下に髪を断つて閑かに仏の恩愛の深きを思う。日は寺を照らし、また悟りの境地に入られた大姉を照らし、万樹が美しく日に映えている)

付衣

前三三與後三三

只要機先便荷擔

脱体不留絲線影

始成百福相莊嚴

前に二二三と 後に二二三
只機先を要して 便ち荷擔す
脱体して留めず 絲線の影を
始めて百福の相は 莊嚴となる

法光寺殿下火す

梅子青々着子時

花殘鶯老燕初歸

天開地闢山河靜

解脱門開知不知

知らずや

(前に九度と後に九度。剃髪の礼では、只一気に力を添えた。頭には一筋の髪の毛も残されていない。始めて百福の相がさらに莊嚴となられた)

れ、仏光を御覽になられ、生死の根源である頭髪を一刀の下に断たれた。ここから新たなる風月の現世界は児孫に引き継がれ、子々孫々に至るまで、無限に広大な春のように明るい)

付衣

佛祖秘要

似空藏空

包裹不及

絕羅絕籠

山重々水重々

迦葉不住鷄足峰

佛祖の秘要

空の空を藏するに似たり

包裹及ばずんば

羅を絶ち 篠を絶ゆ

山は重々たり 水は重々たり

迦葉は鷄足峰に住まわず

(お釈迦さまが大切になさつたものは一切が空であり一切が空ではない。包容が十分でなければ鳥が羅を絶ち、籠を破って離散していったであろう。それほど包容力が大であったのだ。山また山、川また川、あの釈迦第一の弟子・迦葉は、食物の豊富な鷄足峰には住まわなかつた。現世の逸楽を求めなかつたのだ)

妻の堀内殿も時宗につづいて、落飾と付衣を国師に願つた。

国師はその願いを聞き入れ、“志道”という法号を授けられ、夫人は潮音院覓山志道と号した。

四月四日、酉の刻（午後六時）、山ノ内別邸での突然の時宗の死は衝撃的であった。

幕府も朝廷も愕然として息を呑み、北条家一門はじめ近親者の五十余人が出家して、時宗の死を弔つた。

朝廷に訃報が届いたのは九日であったが、諸臣の任官の儀式や評定、諸社の祭り、全国の漁獵を禁じて、哀悼の意を顯し、「天下触穢」を三十日とする旨、天皇のお触れが出された。

時宗の葬儀はしめやかに、厳粛に執り行なわれた。起龕の導師（棺を送る導師）は仏源禪師が、大導師は仏光国師がつとめて、時宗の遺体は荼毘に付された。

愛弟子に先立たれた仏光国師の嘆きは深く、その姿は一場の人々の胸をしめつけ、下火（火葬に付す）の語は、哀切に響いた。

(法光殿を火葬に付す)

梅の実が青々としているが、この実が始めて成ったとき、花はすでに残れ、鳥は老いて、燕が初めて帰ってきた。天地は開闢以来、山も河も静かであった。この時、すべてに縛られない自由な悟りの境地にお入りになる門が開かれたのだ。法光寺殿はもうお気づきであろうか、未だであろうか)

法光国師は、さらに時宗をこう評している。

「故わが大檀那杲公禪門は、仏の大願力によって来られ、ここに住した人である。その行いのおもとを観ると、十種の不思議がある。何を十種といえども、母には孝を、君には忠を尽くし、民には恵みをほどこして、参禅して宗教を悟られた。二十年の間、天下を掌握しても喜びも怒りの色もあらわにはしなかった。風が吹いて外国船を掃蕩しても少しも誇る姿はみられなかつた。円覚寺を造つて死者の靈を慰め、この私を敬い悟りを求められた。これはすなわち人と天が転振して、仏法のためにここに来られたのである。また、臨終の時には死を悟り、この老僧の法衣を受けてくれた。

残された私は終りを悟り偈を書いてまだ生きてゆく。これは世間並の凡夫のすること、また菩薩の應世と名づくるものだ。老僧は時宗公に托して残生を了らんとするが、それでも予測できなかつた。この老僧に一着を

先きんじて時宗公が去つてしまふなどとは。世相は定めがたく、華は落ちやすい。一笑し身を翻して、成仏、得脱してのち、また天に相まみえよう。この時、老僧末後のはこをさらに助け引くことを願おう」

烈燄光中如薦得　烈燄れきえん 光中こうちゆう 如し薦得せば
優曇華放百千年　優曇華ゆうじんげ 放くほぐ 百千年に

(この激しい炎の中で、お供をすることが出来たならば、三千年に一度、花が咲くといわれる優曇華も、未来永劫に花を咲かせつづけることであろうに)

こうして、時宗の遺骨は円覚寺域内に葬られ、祠堂が建てられた。廟所は仏日庵と名づけられ、時宗の尊像が安置されている。謚おくりなは法光寺殿杲公大禪定門という。時が移つて今日も、ここに香をたむける人が絶えることなく訪れている。

4 寂寞の法光国師

時宗の死後の法光国師の姿は、孤影悄然として寂寥の感をぬぐうことはできなかつた。

弘安七年（一二八四）十一月には、満二年の在住であつた円覚寺の住持を辞して、建長寺の専住になつた。

そして同九年（一九四六）九月三日、国師は斎前に報

5 覚山尼と東慶寺

夫・時宗の死の間際、夫とともに髪をおろし仏道に入つた三十三歳の堀内殿は、以後、覺山尼と呼ばれて、夫の菩提を弔いながら読經三昧の日々を送つた。

十四歳で亡き父時宗の跡を継ぎ、九代執權となつた貞時は、その母親の姿に深く心をうたれ、弘安八年（一二八五）、母を慰めるために円覚寺の寺域に一尼寺の創建を思い立つたのである。

今、円覚寺と道路をはさんではすむかいに建つ東慶寺（鎌倉市山ノ内町字松ヶ丘）こそが、その寺である。寺号は松岡山しょうこうざん 東慶総持禪寺といふ。

法光国師の語錄によると、この寺に入った覺山尼は、亡き夫を偲んで読經と写經に費やす日々であった。時宗の三年忌には、四〇五十万の文字にはなるであろう華嚴經八十卷を書写して、時宗の菩提に供養している。

覺山尼の胸中には、元の襲来中に、やはり華嚴經を自らの血をもって写經していた時宗の面影が焼きついてはなれることはなかつた。また、覺山尼は自領である寒河江庄のうちの五郷を時宗の眠る仏日庵開基廟に寄進した。

だが、山寺で仏に仕える生活に入った覺山尼を、すぐ悲痛のきわみにつき落し出来事が襲つた。

弘安八年（一二八五）十一月の霜月騒動である。北条氏一族と血縁によって固く結びついていた泰盛を

謝の偈を書いて諸人をさとし、斎後は徒弟に、「私はこの地に臨んで受苦八年が経つた。喜ばしいことに、私は今夜、楽しんで去ろう」と言つた。そして、自ら遺書を認め、親書をも方々におくつて、ほっと一息されたのである。そのとき、「部屋の外に聞こえる声は何か」と尋ねられた。

「國師さまの保命のために、みなが誦經をしている声でござります」

と徒弟が答えると、國師は、「私のこの世に住する縁は尽きたのだ。私は今夜あの世に逝く。

みなは仏道をひろめることに力をつくしてほしい」と静かに言葉した。

亥の刻（午後十時）、國師は衣をあらためて端座し、筆をとつて偈を書かれたのだ。その筆を置いて、淡淡として逝つたのである。

六十一歳であった。

死後、朝廷から仏光禪師という勅謚ちょくしを贈られ、さらに後光嚴帝から円滿常照國師と追謚ついしやくされた。円覚寺派内で開山國師と称した。

建長寺では國師のために卵塔を造営して常照と名づけ、その塔院は正統庵と呼ばれている。

頂点とする安達氏に、「謀反の気配あり」という対抗勢力からの讒訴があったのだ。

この讒言を信じた若すぎる執權・貞時によつて、安達氏はことごとく討たれ、滅び去つたのである。覚山尼の父親がわりの実兄・安達泰盛は、ことあるうに妹の子である甥の貞時によつて攻め滅ぼされたのだ。まさに悲劇的な結末である。

時宗殿さえ生きていてくれたならと、いくら嘆いてもせん方ないこと、と知りつつも、覚山尼は寺をおおう深い山の樹木の茂みに身をかくして、人しれず熱い涙を流した。

「女というものは、時には不法の夫に身をまかせることもあるが、狭い心から、往々にして自殺などをすることもある。このような哀れな女性を救済したい。三年間この寺内に入れて縁切りをさせ、女性が身軽で自由になれる寺法を定めてほしい」

という母・覚山尼の希望を聞き入れた貞時は、

「その趣旨には賛成いたします。幕府が認めただけでは強力な寺法にはならないため、勅許を仰ぎましょうぞ」こうして縁切寺法が公認され、円覚寺は女人の擁護の施設となつたのである。

この時代すでに、つまらない男に隸属させられる女の悲哀に心を痛め、そこから逃れようとする女を匿う場所

てこの世を去つた父子のはかない栄華の残照が、私たちの心をひきつけてやまないのかもしれない。

(註) 「1 時宗の悲願」「3 早すぎた別離」に

出てくる漢詩の読みと解釈は、漢詩人・鯨游海さんのお世話になりました。

ここに厚く感謝いたします。



祝出版

月岡兎平著
(滝澤中)

「米百俵の眞実」

—六日間で人々の心が変わった—

中経出版八〇〇円

TBSドラマ制作部脚本
森 実与子 ノベライズ

「世界で一番熱い夏」

—TBSドラマの小説版—

青春出版社一、四〇〇円

を提供したことは、覚山尼の深い人間性と知性を感じさせずにはおかしい。悲しい境涯の女が生きられるようになれば、救いの手を差し延べたのだ。

以後、寺の格式も上り、由緒ある女性が住職の座についた。俗に縁切寺とか駆込寺とか呼ばれ、長い間、女性の心強い味方となってきたのである。

この東慶寺に五十五歳まで暮らした覚山尼は、嘉元四年(一一三〇六)十月九日、ひつそりとその生涯を閉じた。

時宗を見送つてから二十二年目のことであった。

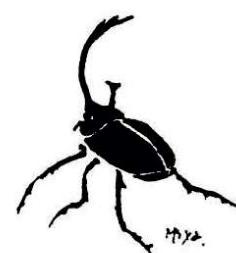
亡骸は、寺奥の小高い山肌をくりぬいた岩窟内に葬ら

れている。鎌倉特有の墓“やぐら”である。寺には覚山尼の木造の仏像と、開山覚山大和尚と刻まれた靈碑が安置されている。

現在、覚山尼の墓の近くには、後醍醐天皇の皇后で五世・用堂尼と、豊臣秀頼の息女、二十世・天秀尼の墓が寄りそなうようにある。また、時宗の廟所、円覚寺・仏日庵の隣に覚山尼の廟所が造営され、潮音院殿覚山大姉の靈碑が安置されている。それを見ると、一对の雛人形のような幼いころの時宗夫妻の姿が彷彿として、訪れる人の心をなごませてくれる。

現代、観光客がひきもきらない鎌倉の名所は、北条家一時頼と時宗一家の遺物に彩られているといつていいだろう。国の権力を掌握し頂点を極めながらも、若くし

体当たり戦法を強制された 神風特別攻撃隊の人びと(五)



千 坂 精 一

痛恨、山本長官の戦死

ガ島を奪回出来なかつたということは、すなわちソロモン、ニューギニア地域の制空権をも喪つたことであり、僅かにニューブリテン島ラバウル、ブーゲンビル島ブイン、バラレなどの基地周辺だけになつてしまつた。

連合艦隊司令部は、空母と陸上基地に分散している航空隊の合理化を図り、機動部隊所属の飛行隊を母艦から切り離して陸上基地に揚げ、航空戦力を集中することにした。

第三艦隊司令長官小澤治三郎中将（海大十九期）は、

「将来の海上決戦に支障を來す」と反対したが、山本長官の決意は固かつた。

だが、現在トランク泊地にいる空母は瑞鶴と瑞鳳だけで、隼鷹と飛鷹は整備のため呉に帰港していて、三月下旬の帰投予定だったので、航空部隊を主力とする「号作戦」は四月上旬以降に実施することになった。

連合艦隊司令部は、開戦時の戦艦長門から大和に移していたが、半年余り遅れて完成した同型の巨艦武藏のほうが通信設備がより充実していたので、ガ島撤退作戦が

終了して一区切りついた二月十一日に司令部を武藏に移した。

整備完了した隼鷹と飛鷹が帰投ってきて、空母所属の飛行隊は陸上基地へ分散移動した。

四月三日、山本長官は身の回り品を整理したり、手紙を何通も書いたあと、明治天皇の御製、

弓矢とるくに生まれし益良雄の

名をあらはさむときはこのとき

に、直接指揮するため武藏から飛行艇でニューブリテン島のラバウル基地に移った。

山本長官は、近代戦における指揮官は陣頭に立つべきではない、というのが自論であつたから、開戦時は瀬戸内海柱島に碇泊の長門、ミッドウェー戦では後方の大和、そしてソロモン、ガダルカナル戦ではトランクの大和、武藏に座乗して指揮を執っていたが、このたびは、航空部隊を主力とする決戦開始にあたり、みずから搭乗員の士気を鼓舞するため、異例の陣頭に立つことにしたのであろう。

事実、幕僚たちは枯草色の防暑服か第三種軍装（陸戦用）を着用しているなかにあって、山本長官は唯一人當時純白麻の第二種軍装に軍帽の正装で通し、攻撃隊の出撃時には見送る宇垣参謀長や幕僚たちにも正装をさせる、自身も飛行場まで足を運び、戦闘指揮所に立つと高々と軍帽を振って見送った。

郷土の先人河井継之助が、戊辰北越戦争で陥とされた長岡城を奪回する奇襲をかけるとき、最高指揮官みずから先陣に立つた例に倣つたのであろう。

「号作戦」は、四月七日ラバウル、ブイン、バラレなどの各基地から出撃した九九式艦爆約七十機、零戦約六十機が、ガダルカナル泊地の敵艦船を攻撃することからはじまつた。

そして、十一日にはオロ湾在泊中の艦船。

を墨書きした。

『易經』の周易繫辭下伝にある、

「治に居て乱を忘れず」

とおなじような意味であろうが、山本長官はこの教訓を好んで武人の心の支えにしていたようである。

この揮毫は誰かに頼まれたものか、それともただ想念を吐露したものであるかは定かでない。

とにかく、山本長官はこれだけのことをすませておいて、宇垣参謀長、黒島、藤井、土肥参謀らの幕僚とともに

十二日にはニューギニア島ポートモレスビーなど三飛場。

十四日にはミルネ湾の艦船及びラビ飛行場。

と精力的に反撃をつづけた。

このときの雄姿を称えた、佐伯孝夫詞、小関祐而作曲の『ラバウル海軍航空隊』

銀翼連ねて南の前線

ゆるがぬ護りの海鷺たちが

肉弾碎く敵の主力

栄えあるわれらラバウル航空隊

は、軍国調の波に乗って国民のあいだに浸透していく

た。

十日間毎日出撃を繰り返した「い号作戦」は、十六日

だが、航空戦に集中した作戦にしては、たいした戦果

が得られなかつた。

軍艦行進曲に乗つての大本営発表は多大の戦果であつたが、それは、アメリカ側の損害記録とはあまりにも懸け離れた数字であった。

戦果は過大に、損害は過少に発表して士気を鼓舞したい焦りはあるにしても、アメリカ側の記録が正しいとすれば、このときの大本営のそれはあまりにも誇大発表で

あつた。

しかし、かりに作為はなくとも、双方の記録が一致するということはまずあり得ない。

これが艦隊同士の決戦ならば、対象物が大きくしかもゆったりしているから、擊沈、大破航行不能、中破などの戦果を多くの眼で確認出来るが、航空戦は別に偵察機を飛ばして敵味方入り乱れての格闘戦結果や、陸上施設の破壊状況などを記録するというわけにはいかないから、戦果の確認が難しいのである。

戦果の多寡はともかく、山本長官は「い号作戦」が終了したことで、トラック泊地の旗艦武藏に戻ることになつたが、そのままにブーゲンビル島各基地の将兵を慰労する前線視察をすることにした。

最高指揮官として、激戦に生命を懸けた部下たちの劣を犒おうとする山本長官の恩情溢れるこの行為が、仇になつた。

十三日夕刻、山本長官の行動予定を知らせる暗号電報

が、関係先に発信された。

「長官ハ、四月十八日左記ニヨリ、バラレ、ショートランド、ブインヲ実視セラル。○六〇〇中攻二、戦闘機六機ヲ附シテラバウル発、○八〇〇バラレ着。直チニ駆潜艇ニテ〇八四〇ショートランド着。○九四五右駆潜艇ニテショートランド発、一〇三〇バラレ着。一一〇ブイン着。一根（第一根拠地隊）司令部ニテ昼食。一四〇〇

中攻二テブイン発、一五四〇ラバウル着。天候不良ノ際ハ一日延期

という、詳細な長文電報であった。

この暗号電報が、ハワイのアメリカ軍諜報部に傍受され、解読されてしまったのである。

山本長官の视察出発直前にこの話を聴いた小澤第三艦隊司令長官は、難色を示して、

「危険だから」

と中止を進言したが、山本長官は、

「もう行くと連絡したから、みんな待つているだろうし、危険なこともあるまい」と言つて諾かなかつた。

出発当日は、前夜の豪雨が止んで晴天になつた。

前線视察する山本長官らの搭乗機は、陸攻基地西飛行場（ブナカナウ）に七〇五空所属の一式陸攻二機が用意された。

小澤治三郎中将をはじめ、南東方面艦隊司令長官草鹿任一中将（海大十九期）、第二航空戦隊司令官角田覺治中将（海大二十三期）、同航空參謀奥宮正武少佐らの見送りを受けて、機長小谷立飛曹長が操縦し、偵察、電信員とも七名搭乗の一式機には、山本長官をはじめ副官福崎昇中佐、軍医高田六郎少将、航空甲參謀樋端久利雄中佐が乗り込み、偵察員谷本一飛曹を機長とし、林浩二二飛曹が操縦する七名搭乗の一式機には、參謀長宇垣

軍装に戰闘帽の身仕度であった。

赤道直下の基地で汗と油に塗れ、命懸けで戦つている

前線部隊の將兵を慰労するについて、最高指揮官も陣頭に立つてわれわれとともに戦つてゐるという一体感を抱かせるための配慮だったのであろうか。

これまで発表されている山本長官の遺影は、どれを見ても一種軍装または一種軍装の正装姿であつて、三種軍装のはないからおそらくこれがはじめてであったかも知

れない。

全幅二四・八八メートル、全長一九・九七メートルの大型機一式陸攻は、高度二五〇〇メートルを巡航速度三一四キロで飛行した。

一時間半余り何事もなく過ぎて、機はあと十五分ほどでバラレに到着するブーゲンビル島上空にさしかかった。

そのとき、あろうことか突然敵機が襲いかかってきた。

アメリカ陸軍の双発双胴P-38Gライトニング戦闘機十六機であった。

随行のつもりの零戦六機が慌てて応戦したが、三倍の敵を向こうに回してこれを追い払うなどということは所詮至難の業であった。

まず、山本長官搭乗の一式機が右発動機に被弾して黒煙を噴き、超低空で避難しようとするところを、さらに執拗な斉射を加えられてついに堪らず、密林の中へ墜落した。

宇垣参謀長搭乗の一式機も、おなじく右発動機に被弾して火を噴き、海上に不時着した。

一番機の搭乗者は全員戦死したが、一式機のほうは、宇垣参謀長、北村主計長、林操縦員の三名だけが重傷を負ったものの、辛うじて救出された。

山本長官は、後頭部から前額部への貫通銃創で即死だった。

遺体は、座席にシートベルトを締めて腰掛けたままの

あつた。

そのため、アメリカ側では一式陸攻のことを、「ワン・ショット・ライター」と綽名で称んでいたという。

山本長官の遺体は、ラバウルから一式陸攻でブインに到着した連合艦隊参謀渡安次中佐によって収容され、ブインの一根基に運ばれて検死のあと、荼毘に付された。墜落現場が敵地ではなかつたことが、せめてものさいわいであった。

渡邊参謀は、その手で拾い、白木の箱に收め、白布で包んだ遺骨をラバウル経由でトラック泊地にいる旗艦武藏に運び、さらに東京の海軍省に届けたが、山本長官の戦死は内外に及ぼす影響極めて大であるといふことから、暫らく極秘にされた。

一ヵ月余りのちの五月二十一日、大本営はようやく重い口をひらいて、

「連合艦隊司令長官海軍大将山本五十六は、本年四月前線に於て全撮作指揮中敵と交戦、飛行機上にて壮烈なる戦死を遂げたり。後任には海軍大将古賀峯一親補せられ、すでに連合艦隊の指揮を執りつつあり」

と発表し、正三位、大勳位、功一級に叙せられ、元帥の称号と国葬を賜うことを告げた。

国葬は、日露戦争の名将元帥東郷平八郎に次ぐ二人目で、その国葬の日であると同時に山本長官の四十九日に

姿勢で、白手袋の右手で軍刀の柄を、左手で黒鞘を握つて両膝に挟み込んでいた、という。

この思ひぬ敵襲で、連合艦隊司令部は司令長官をはじめ幕僚の約半数を喪つてしまつた。

山本長官は、近衛總理との約束の期限一年半が近づいてきて、このさき保証出来ないところまで追い詰められていた。

そのあいだに和平工作を依頼しておいたのだが、頼みの近衛はすでに政界を逐われ、陸軍大將東條英機が總理・外務・内務・陸軍・文部・商工・軍需の主要部署を抑えて大臣を兼務している独裁政治体制になつていて、陸軍強硬派が主流を占めている現状では、和平への道は閉ざされてしまつた。

ならば、己れの進退はみずから手で決めるよりほかなく、砲弾飛び来る前線に身を曝して死を覚悟したのではないかだろうか。

余談だが、山本長官らの搭乗した一式陸攻は、開戦の年の四月に採用した三菱製双発機で、長距離爆撃を目的とするために軽量化を強いられ、防弾装備は脆弱でお粗末だった。

致命的な欠点は、六〇〇〇キロの長距離航続を支える多量の燃料を主翼内の容器に収納しているために、そこを狙われて被弾するとすぐに火を噴き、炎上することでの

あたる六月五日に、日比谷公園内の斎場で執り行われ、國家を挙げてその死を悼んだ。

葬儀委員長は、開戦回避派の同志で、山本長官が次官のときの海軍大臣だった米内光政大将であった。

相次ぐ長官の死

遠い戦国のむかしは、総大将が討ち死にすればそれで勝負あつた、で合戦は終わるのだが、近代国家の軍隊は組織化されているから、序列によつて次の人物が就任して指揮を執るので、戦争終結の決め手にはならない。

後任の長官は、序列で言えば山本の一期後輩（海大十五期）豊田副武大将のはずであったが、海軍大臣嶋田繁太郎大将（海大十三期）は軍令部総長永野修身大将（海大八期）と相談の結果、軍事参議官の豊田より海兵は一期後輩であるが海大同期の実戦部隊を束ねている横須賀鎮守府司令長官古賀峯一大将を充てることに決めた。

古賀長官は、昨年五月に海兵三十四期一七五名のなかでただ一人大将に進級した英才であった。

山本長官の戦死が極秘にされているため、新長官の親補式は執り行えず、古賀長官は南方出張という名目で四月二十四日に横浜航空隊から飛行艇に搭乗して、翌二十二日の午後トラックに在泊中の旗艦武藏の司令部に着任

した。

古賀長官は、重傷の宇垣参謀長の代わりに宇垣の前任者だった軍令部第一部長福留繁中将（海大二十四期）の再任を要請した。

福留中将は、五月二十三日に着任すると、まず古賀長官とともに、壊滅状態になってしまった幕僚の補充を急いでいた。

こうして、山本前長官が保証出来ないといつて現れたのである。古賀長官、福留参謀長という新しい組み合わせですすめられたが、山本前長官がやはり戦力の較差が歴然としてきた。

開戦一年半でやはり戦力の差が歴然としてきた。経済力の相違がそのまま生産力の差になって現れたのである。

積極に転じたアメリカ軍は、アメリカとソ連（ロシア）の連携を遮断する目的で占領した北方アリューシャン列島に反撃を開始してきた。列島西端のアツツ、キスカ両島のうち最初に狙われたのは、守備隊の寡いアツツ島であった。

五月十二日、午前二時頃から爆撃がはじまり、十時半頃には上陸してきた。北海道守備隊第二地区隊長山崎保代大佐指揮のもと、二五七六名の隊員はこの孤島で増援部隊の到着を期待しながら善戦したが、アメリカ軍の猛攻撃の前には抵抗も

虚しかった。

大本営は救援部隊を派遣するどころか、ガダルカナル島消耗戦の轍を踏む結果をおそれて、五月二十一日に撤収を下達した。

しかし、陸・海・空からの徹底攻撃を受けて、島の北東部に追い詰められた守備隊は、潜水艦による救出まで持ち堪えられず、二十九日山崎大佐以下一五〇名の将兵は総突撃を敢行して、全員玉碎した。

この開戦以来初めての全員玉碎を告げる悲報は、翌三十日に大本営から発表された。

アツツが陥れば、つぎはキスカが危うい。大本営がキスカ島守備隊五六〇〇名の撤収を決めるに、海軍は救出に全力を傾注した。

七月二十九日、第五艦隊司令長官河瀬四郎中将（海大二十期）率いる第一水雷戦隊が、待望久しい濃霧に紛れて入港し、全員救出に成功した。

アメリカ軍はこのあと、無人の島に二週間も空爆と砲射撃を加え、八月十五日に三万余の将兵を上陸させてはじめて蛇の殻だったことを知ったという。

アツツ、キスカ両島を奪還したアメリカ軍は、矛先を南方戦線に向かってたたかれた。

十一月一日未明、アメリカ軍が突如ブーゲンビル島に上陸してきた。

山本前長官が戦死した場所である。

○ 混（かり）（約三三三五キロ、東京一名古屋）の近さに曝される。

脅威を感じた連合艦隊司令部は、とておきの航空戦力小澤部隊の第一航空戦隊をラバウルに終結させて、「ろ号作戦」を発動、アメリカ軍の進出を阻止して制空権を確保し、戦局挽回を図るべく、五日夕刻、瑞鶴分隊長清宮綱大尉指揮の艦攻十四機の雷撃隊をもって、ブーゲンビル島西方海上のアメリカ艦隊攻撃の火蓋を切った。航空隊による攻撃は十一日まで繰り返されたが、戦果を挙げるどころか逆にラバウル基地を攻撃される破目に陥り、一航戦は出動機数一七三機中一二〇機を喪う大敗を喫してしまった。

貴重な搭乗員は、三六三名中半数の一八一名が戦死。

うち隊長、分隊長は一八名中一〇名で、半数を超えた。

古賀長官は、十三日にいたって「ろ号作戦」終結を宣言し、大打撃を受けた小澤部隊はトラック泊地に帰還した。

年が明けて昭和十九年（一九四四）になると、正月早々からアメリカ軍の大型偵察機が頻繁にトラック島上空に現われはじめて無気味な様相を呈した。

そして、ついに二月十七日、艦載機による大々的な攻撃を受けて、艦船四三隻、航空機二七〇機を喪う大損害を蒙り、太平洋方面作戦の中核基地はその機能を喪って撤退を余儀なくされた。

古賀長官は、司令部を西方のパラオ島に移したが、追跡してきた機動部隊の執拗な攻撃を受けて、ここもまた作戦機能が麻痺してしまった。

やむなく、さらに西へ後退して、フィリピンのミンダナオ島ダバオへ移すことになった。

それには、四〇〇〇キロを航続出来る大型飛行艇が必要であった。

急拠、中部大太平洋方面艦隊司令長官南雲忠一中将直属の八〇二空、八五一空の二式輸送飛行艇（二式大艇）三機が集められた。

一番機には、古賀長官はじめ機関長上野権太、大佐、主席参謀柳澤藏之助大佐、航空参謀内藤雄中佐、航海参謀大槻俊一中佐、副官山口肇中佐、柿原饒軍医少佐、暗号長神宮等大尉の八名。二番機には、福留参謀長はじめ艦隊医長大久保信大佐、艦隊主計長宮本正光大佐、作戦参謀山本祐一中佐、機関参謀奥本善行大佐、水雷参謀小池伊逸中佐、航空参謀小牧一郎少佐、気象参謀島村信政中佐、掌通信長山形中尉他二名の十一名。三番機には、司令部附の暗号士、暗号員などが乗り込むことになった。

三月三十一日夜、出発直前の給油中に空襲警報が発令されたので、一番機と二番機は給油を打ち切り、二二〇〇慌しく飛び立った。

ところが、途中で熱帯低気圧に遭遇して、一番機は消息を絶ち、二番機はフィリピンのセブ島付近の海上に不時着して大破した。

福留参謀長、山本作戦参謀、山形掌通信長の三名と、乗員十名のうち機長岡村松太郎中尉、吉津正利、今西善久、杉浦留三一飛曹、岡田敏郎、奥泉文三一整曹の六名は辛うじて脱出し、海岸に泳ぎ着いて一命を取り止めたものの、セブ島のゲリラ部隊に捕えられて、暗号書や機密書類を奪われてしまった。

それを知ったセブ島駐留の熊本陸軍独歩一七三大隊長大西精一中佐は、直ちにゲリラ部隊を包囲すると、撤収を条件に福留参謀長以下九名全員の身柄を救出することに成功した。

三番機は、艦載機の空襲が去ったあと、翌日〇四三〇に発進して無事ダバオに到着した。

山本前長官遭難のときは、幕僚の約半数がトラック泊地の旗艦武藏に残っていたので、司令部の再編は容易であったが、こんどの場合はほぼ全員を喪ってしまったのであるから、作戦指導機能は完全に停止した。

本陣を破られ、総大将が行方不明になつたということは、どう聴耳目に見ても惨敗に相違なく、戦意を喪失し

てしまうところである。

だが、大本営は、この満身創痍の末期的症状に到つてもなお強氣の姿勢を崩さず、徹底抗戦の方針を変えようとはしなかった。

一ヶ月の空白のあと、五月三日によく後任の長官が決まった。

古賀大将に先んじられた横須賀鎮守府司令長官豊田副武大将が親補されて、木更津沖に碇泊中の軽巡洋艦大淀に連合艦隊司令部を新設した。

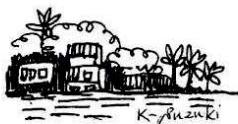
その二日後、ついに発見されぬまま古賀長官の殉職が発表された。

古賀大将は元帥の称号を賜わったが、国葬ではなく、十二日に海軍葬儀が執り行われた。

泰 山 木（十一）

—紙透小太郎の一生—

紙 透 寛 夫



第三章 朝鮮での思い出

三 南 陽

昭和十四年十二月、父小太郎が南陽憲兵分遣隊に転勤となり、これに伴い、私は南陽公立尋常小学校に転校した。南陽は朝鮮半島の最北端にあって、ほぼ北緯四十三度に位置し、豆満江を隔てて、満州国の団們と向かい合う国境の街であった。街というよりも、国境でなかつたら、むしろ、山と大河に挟まれた猫の額ほどの、辺鄙な寒村だったといつてよかつた。

南陽駅を降りて、まっすぐ行くと、すぐに、豆満江で行き止まりとなっていた。途中で一本の道と交差するが、初めの四つ辻を右へ曲がると、すぐに借り上げ官舎があつ

た。左へ曲がると、角に郵便局があり、その先は右手に警察署、左手にグラウンド、続いて憲兵隊、井上薬局があり、ガードをくぐると、右手に小学校があった。ガードの手前で右折すると、豆満江に架かっている長い木の人道橋に出た。そのたもとには、交番のような税関があり、隣には、本田洋行という果物屋があった。

この店の息子である本田幹雄は、私が転校した南陽小学校の、ただ一人の同級生で、すぐに仲良しになつた。二人で、橋の真ん中あたりを行ったり来たりして、

「こちらは朝鮮、あつ、こちらは満州だ」
「今日は、朝鮮と満州を十回も往復したなあ」
などと、たわい無い遊びをしたこともあった。

この木の橋と並行するように、左側には国際鉄橋が架かっていた。

鉄道は、日本海に臨む羅津を起点として、満鉄北鮮線が雄基・阿吾地を経て、南陽に至り、更に、この国際鉄橋を通り、団們につながり、吉林から滿州国の首都新京（現長春）に達していた。

南陽と、その東にある穩城・慶興や、南にある鐘城・上三峰などは、いずれも豆満江に接し、羅南憲兵隊隸下の分遣隊があつた。それぞれに、本来の第十九師団の軍紀維持の任務と、常に、国境警備、情報の収集、スペイに対する、激しい防諜戦に従事していた、一番苦難の多い憲兵隊であつたそうである。

昭和の初期というから、私たちが南陽に来た十年ほど前、ということになるが、この地域には狼が跳梁し、熊も出没したという。『羅南憲兵隊史』の回想記を一部転載すると、南陽から、わずか十キロほどの穩城の街では、

●……冬期になると「ぬてて」という朝鮮狼が侵入し、屋外に係留してある牛馬を食い殺す被害が、しばしばあつた。（一五七ページ）

● 大熊退治
……南門外に、まつ昼間、巨大な熊が現われ、朝鮮人を襲うという、ショッキングな事件があつた。直

るところに出会ったのである。多分、近くを巡回していたのであろう。ほかには、犬猫一匹も見ることはなかつた。この十年ほどの間に、もう、狼などは絶滅したのであろうか。

もつとも、現在でも、『送り狼』はあちら、こちらに沢山いるようであるが。

当地の冬は、厳寒零下三十五、六度となり、十一月下旬から翌年三月下旬まで、豆満江は氷結する。『羅南憲兵隊史』によると、六メートル、『日本憲兵外史』（全國憲友会連合会本部発行）によると十六メートルぐらいの厚さに氷結する。二冊とも戦車、砲車の通行は自由になる、と述べている。氷の厚さの桁違いの差は、測った場所によって、こんなにも違うのかなと思った。豆満江のような大河の氷結は、スケート場のような平面的なものではなく、例えば、穩城付近のように、流水が次第に堰止められて出来るので、所によつては氷塊を積み重ねたように、凸凹起伏が甚だしく、寒さが増すにつれ、氷が膨張してピーンピーンと、腸をえぐるような音を立てて龜裂が生じ、いかなる重量物を通じてもびくともしないといふ。一方、上三峰の上流約六キロの地点のように、長さ約百メートル、幅約一メートルが急流のために、水音を立てて氷結していない所があり、急流に落ちて、氷の下に吸い込まれそうになつた憲兵がいたということなど、危ない所もあつた。

ちに憲兵、警察を非常呼集して、騎銃の一斉射撃を浴びせ射殺したが、体長が二メートルぐらいもある巨大な奴であった。……（一五九ページ）

●……夜間巡察中、真夜中ごろ、中天に鎌を研ぎ澄ましたような、半月に照らされて、高原の稜線上を十数頭の狼群が、あたかも、影絵のように移動するさまを見ると、自身がぞくぞくするような、戰慄を覚えることがある。……（一六二ページ）

●……鐘城から穩城までは約三十キロ、中間に北蒼坪という荒涼たる高原がある。（筆者注・南陽からは約十五キロ）同地には、第十九師団の中継通信所があり、下士官以下七一八名が常駐していた。この附近は夜間になると狼が群をなしてうろつき、夜間における単独行動は禁物である。……（一五九ページ）

●……山道の険路に虎が出たという……（一四三ページ）

以上のように、憲兵にとつては、きつい任務と相まって、正に、『前門に虎を拒ぎ後門に狼を進む』のことわざ通りであったようと思う。

私が南陽にいたころは、獸としては、馬しか見たことがなかつた。下校の途中で、時々、父が軍馬に乗つてい

住民が、豆満江を渡るには、夏は、橋か渡し舟であったが、氷結すると、どこでも自由に往来していたそうである。これはまた、好まざる不逞分子が、どこからでも侵入できることもあり、氷結期間、憲兵や警察官は夜間、江岸に張り付いて、不逞分子の侵入を警戒したそうである。『羅南憲兵隊史』（一六一ページ）によると、

冬期の夜間警戒は大変なもので、零下二十度から三十度の寒さの中を、防寒具に身を包み、騎銃と拳銃に実弾を装填して、満月白燈々たる雪中を一人一組となつて、あるいは隠密に、あるいは陽動巡察するには気持ちのよいものではない。

と述べていた。

ある日、

「お父ちゃん、今朝、豆満江に変なおじさんがいたよ、体操のようなことをしていたけど、スペイみたいだったよ」

「ううん、まさか」

私は情報提供のつもりで言つたが、父は、
(子供の話だ)

と、まともには、取り合わなかつたこともあつた。

平成七年八月十日のことである。私は毎日新聞の紙面をめくっていた。と、横に白抜きで大きく『中朝国境貿易が低迷』。縦にやや大きく『団們ルポ 行きかう車も

少なく。』のタイトルがあり、記事のなかほどに葉書

大の写真が載っていた。その下には『展望台から図們大橋の向こうの北朝鮮を望遠鏡でのぞく観光客』と説明があった。

（おや、あの山の稜線や中腹の様子には、見覚えがあるぞ……）

私には、五十数年前の、南陽の記憶がよみがえってきた。写真を更によく見ると、中央には水量豊かな豆満江が、悠々と流れている。しかし対岸、つまり、南陽に目をやると、当時の家並みは、なにも見えない。この新聞の写真に写っている展望台の、望遠鏡でのぞいても、見えないのでないかと思った。戦後、北朝鮮もいろいろ変わったと思うが、それにしても、建物が一軒も見当たらぬのは摩訶不思議であった。木々は所々にあり、左手には林が見えた。私はこの光景を見て、もし、あそこに芝生があれば、立派なゴルフ場の河川敷コースになるな、と想像を、たくましくしたものである。この平地の先は、すぐに標高五百メートルと言われる、山並みに突き当たっていた。

灰岩小学校の、同級生で親しかった根來から、昭和十五年一月七日付けのはがきをもらった。表は楠木正成の絵と、郵送料（貳錢2）が印刷されていて、

南陽憲兵隊

年生、敏子が一年生で、私を含めて、仮に一学年が二人づいたとしても、十二人となるが、一人もいらない学年があったのかも知れない。学校に教室は一つしかなく、学年ごとに、五つか、六つの小島のように、ぱらぱらと分かれて席があった。二人しかいなかつた先生が、掛け持ちで、あっちの学年に行ったり、こっちに来たりして授業していた。

私は五年生の二学期末から、六年生の一学期まで通学した。五年生の担任は衛藤彌太夫先生で、六年生になつたら、校長の岸川廣次先生が担任となつた。印象に残つてゐるのは、冬、体操の時間になると、校庭につながつてゐる豆満江の氷上に出て、スケートに打ち興じたことである。

官舎での思い出を三つ。

夜中に私は、小便がしたくなつて、便所に行つたことがある。窓から見た夜空には、すき間もないほどの星がきらきらと輝いていて、それはそれは奇麗だった。だが、それに引き替え、便所ぎりぎりの所まで、隣が庭で魚を沢山干してある臭いがして、鼻が曲がるほど、臭くて臭くてこれには閉口した覚えがある。

我が家には、バリカンをはじめ、床屋の道具一式がそろっていた。会寧・灰岩にいた時もそうであったが、南陽でも、私の頭髪が伸びると、バリカンで刈るのは大抵

紙透寛夫君

阿吾地満鉄社宅

根來 實

と書いてあった。裏には、

紙透君お元気ですか、僕も元気で学校に通つております。

紙透君、南陽の五年生は、わずか八人ですつてね、先生に来た手紙を読みました。

僕が、この前、南陽に行った時、紙透君がおるかと思つていたけれど、おりませんでした。紙透君手紙をくれる時、南陽の学校の様子を知らせて下さいね。

紙透君今度、阿吾地の方に来た時は、寄つていってください。

ではお体を大切に

さようなら

とあった。

南陽小学校には、高等科はなく、尋常科だけであった。児童の数は、少ないのに、なぜか全然覚えていない。原來のはがきによると、五年生は、わずか八人となつていて、何かの間違いではないかと思う。本田幹雄が唯一の同級生で、ほかには話をしたり、遊んだりした同級生の記憶がまったくないのである。全校の児童数が八人ではなかつたのかな、とも思つてゐる。私の妹、淑子が三

は、父の仕事であった。庭でよく刈つてくれたが、上手なもので、父は寅年生まれながら、決して虎刈りの頭にされたことはなかつた。

南陽と対岸の図們は、両地とも住民の大半は農業を営んでいた。父はこの様子を見て、自分が少年時代に、横浜の生家で農業を手伝つていたころを思い出し、郷愁を覚えて、昔取つた杵柄で、むずむずと鍬を振つてみたくなつたのだろうと思う。休日になると、借り上げ官舎につづく更地の四、五十坪を畠にして、野菜を作つていた。私は、この父の姿や光景が、今でも瞼にうかぶ。しかも、それは、父の少年時代に、横浜で働いていた姿と、ほとんど同じであつただろうと、想像して、二重写しに映るのである。南陽の畠で、父の板に付いた仕種を思い出すと、父が根っからの農民だったようである。

南陽にも初夏がやつてきた。ある日、私が下校すると、山梨の祖父がいた。ちびりと、酒を飲みながら、楽しそうに食事をとつてゐた。母は台所で一生懸命、祖父のために、料理をこしらえているところであった。

「今日は」

「おお、寛夫か」

私がびょこんと、お辞儀をすると、祖父は、にっこりと答えた。母方の祖父、鈴木義平であった。額に三本しわのある満面に、笑みを浮かべた、あの時の笑顔は、今

でも私の脳裏に刻まれている。私が四歳の時から、七年振りの再会であった。祖父は静岡県周智郡山梨町の自宅から、娘（母茂登子）の家庭を訪ねがてら、朝鮮と満州の観光にやつてきたのであった。

翌々日だったか、

「おじいちゃんを、会寧の街に案内して……」

母に言われ、

「会寧旅館で、昼食をとつたらいい。旅館に着いたら、この名刺を出しなさい」

父からは、名刺を渡された。

南陽駅で、祖父と私は汽車に乗り、向かい合って座った。祖父は、内地とはまた違った、窓外の移り変わる風景を眺めながら、時々、持参した小さな帳面に何やら書いていた。おそらく、俳句か短歌だったようだ。また、停車するたびに、駅名を書き留めていたようだ。やがて、会寧駅に着いた。私にとっては、一年振りの会寧で懐かしかった。街はとくに変わった様子もなかつたが、どこを、どう案内したか、ほとんど記憶がない。しばらく歩いたあと、会寧では一番と言われていた会寧旅館に着いた。

なかなか女将らしい人が、にこにこしながら出て来た。

「はい、これを……」

私は、つと、父の名刺を渡すと、

「まあー、坊や、よく来てくれたわねー」

時に、

「寛夫は、こんな山奥にいては、ものにならん。おじいちゃんが、満州を回つたら帰りに寄つて、山梨へ一緒に連れていく。内地の子は、みんな、はしごこいぞ」祖父は、こう、言い残して、満州に渡つた。私は、うれしくなり、すっかりその気になった。

満州には、父小太郎の弟である平八郎と、母茂登子の妹であるいつ子夫婦がいた。私から言えば叔父と叔母である。昭和九年、叔父は龍井の総領事館に勤務しており、そのころ、私はその官舎に八か月間、預けられたことは既に述べた通りである。叔父と叔母の間には、昭和十二年十二月十一日に、長女の郁子が生まれた。その後、叔父は転勤か、あるいは、満州国警察官に転職して、斎齊哈爾市に転居し、昭和十二年十一月二十六日、次女の英子が生まれ、昭和十四年八月十三日には、長男政治が生まれていた。大勢いる私の従兄弟・従姉妹のなかでも、この従妹と従弟たちは、妹・弟のように、濃い間柄であるということになる。

祖父は、まず、父小太郎の案内で、この斎齊哈爾の娘（いつ子叔母）の家庭を訪ねたのであった。その後は、平八郎叔父の案内で満州のあちこちを見物したようである。

私の内地へのあこがれは、日に日に募り、

女将は、ちらりと、祖父に目をやりながら、「こちらが、おじいちゃんで？」
「そうです」
「まあー、いらっしゃいませ。よく、お越し下さいました」

と、今度は三つ指ついて挨拶し、

「さあ、どうぞ」

と奥まった座敷に通された。祖父は、余所行きの顔で、少し澄まして見えた。その静かな部屋で、祖父と私は、ゆっくり食事をした。祖父に、お銚子がついたか、どうかは覚えていない。食休みの後は、父が勤務していた会寧憲兵分隊の正門前と、私たち家族が住んでいた官舎のわきを通りながら案内した。

無事に、南陽の官舎に戻ると、祖父と母は、お茶を飲みながら、談笑していた。

「やっと、くぐれるような、木の下を通つて、禿げ山に連れていかれたが、あそこは、なんだつたのかなあ」

「ああ、官舎の方だったでしょう、あそこは、子供たちがよく遊びに行つた裏山よ」

「ああ、そうだったのか、ハッハッハ」

こうして、私は曲がりなりにも、案内役が勤まつたようである。

祖父が、帰る前日だった。みんなで、食事をしている

（よし！行くんだ）

という決意は、固まる一方だった。そして、今日か、明日か、と祖父を待ち兼ねていたが、いつまでたつても、いつこうに祖父が南陽に立ち寄る気配はなかつた。しごれを切らして、ある日、母に聞いた。

「おじいちゃんは、いつ帰つてくるの？」

「おじいちゃんはねえ、満州を見物したあと、都合で大連から内地に帰つたのよ」

「むむ、……」

この一瞬、私は逆上し、

「おじいちゃんの、うそつき！僕は山梨へ行くんだ！」と、わめき立てた。

置き去りにされた私は、憂うつな日々を送つていた。

一方、父と母は、

（寛夫を、どうしようか）

と、ひそかに話し合い、祖父とも相談、連絡をとつて

いたと、今にして、私は想像するのである。

官舎で昼食をとつていた時に、ふと、父が言った。

「あさって、羅津から出る船があるんだが、一人で行くか？」

私は即座に答えた。

「静岡県周智郡山梨町上山梨二十九番地、鈴木義平」

「よしつ、行け」

すらすらと答えて、話は決まった。

私の心は、すぐ、山梨町に飛んだ。

(教科書は全部持つて行こう、こちらと一緒にのはずだ、このノートも。そうだ！あの時、もらった張鼓峰事件の、ソ連の爆弾の破片も、向こうの小学校へ、お土産に持つて行こう)

と、さっそく私はどんどん持ち物をトランクに、詰め込んでいった。

父は、羅津の波止場まで、私を見送ってくれた。羅津は、港湾から背後の山岳地まで、要塞地帯になっていた。真夏の太陽は、この羅津の街を、まぶしく、照り付けていた。父と歩いていると、やがて羅津憲兵分隊が見え、父は私を連れて、立ち寄った。

(おや、なんで憲兵隊に？……、せっかく、羅津まで来たのだから、敬意をあらわしに。あるいは、仕事上のことで。そのほか、なにか)

子供だった私には、まったく、訪問の意味は分からなかつた。憲兵隊を辞して、父と私は、羅津の繁華街にあつた旅館に一泊した。

夕食の時、父は、ちびり、ちびりと、独り静かに盃を傾けていた。私には、心なしか沈んだ表情にも見えた。

ねずみ小僧丸楠（二十一）



鈴木昭三

校長が今でも住んでいるかも知れないよと言ったヤマノカミは、やはりその言葉通りこの村に住みついていたのです。

それにヤマノカミの存在を身を以つて証明してしまつたのは、ことあるにわががき大将だったのです。

二、三日前の事です。私は放課後家に帰るといつもお決まりの茶ぶ台の上の、母の出勤前の伝言メモを読み、その通りに傍に置いてあつた十銭銀貨を握ると床屋に掛けました。床屋の亭主は鏡の前の一つしかない椅子で、客の頭にかたかたと軽快なバリカンの音を響かせていました。私は番を待つて窓際の、夏だと言うのに箱火鉢の置いてある長椅子に腰を掛けました。長椅子には私の他の

に和服姿のぶら甚が一人いて、大声でしゃべっていました。

このぶら甚は村役場の土間の片隅に机を構えている代書屋ですが、仕事が少ないせいか役場を抜け出し、川の前の家をのぞいたり、この床屋で暇をつぶしたりしているのです。それでぶら甚とあだ名されているのですが、村の衆が面と向ってあだ名で呼んでも、本人は少しも嫌な顔もせずに、あいよと返事をする大らかさです。

「椎茸さんとこの総領がな」

私はぶら甚の言葉に思わずきき耳を立てて、箱火鉢の向うの彼の顔を見つめました。今の総領とは、がき大将のことです。椎茸さんはがき大将の父親の村での通称であ

私の道中を心配していたのか、寂しさを感じていたのだろか。今朝、南陽を出発してから、父とは、一言、二言、言葉を交わしただけで、取り立てて、話をした記憶はない。

父は無口だったが、親父と息子とは、こんなものなのであろうか。

(つづく)

ります。私は身近かな話で聞き捨てならないと思いました。所がぶら甚はここで話を中断したまま、見ている私にはまるで芸当のような事を始めたのです。

ぶら甚は口にくわえていたキセルを勢いよく吹いて、吹き出た火のついた吸がらの玉を左の掌で受けて、それを平気で転がし始めたのです。それから膝の上に置いた手垢でよごれた印伝のたばこ入れの中から、右手の指先できざみたばこを摘み出し、器用に丸めキセルのがん首の火皿に詰め込むと、その上に掌の火玉をそっと移しました。

そんなさまを見とれていた私にぶら甚はにやっと笑いかけました。私は手品を見ているような気になりました。

「甚さ、掌あやけどしてるじゃないかね」

私の心配にぶら甚は首を左右に振り、直ぐに掌を見せて両頬にえくぼが出来る程にキセルの吸い口を吸いました。じいっとかすかに音がして火皿のたばこは赤く輝きました。それからほんの数秒、間を置いて、ぶら甚は口から、細い白い煙を私の顔に吹き掛けました。

「うまい」

ぶら甚が私に言いました。その煙は枯れ草のようないいで、私が吸ったチェリーやエアシップの巻きたばことは比較にならないと思いました。

ぶら甚は火玉を転がした掌で私の頭を軽くたたくと顔を亭主に向けました。

「がら言いました。

「ヤマノカミも、小学生の初わらべが好きだと見えるな」「ばかあ。そんな女郎みたいな事聞いてるじゃあないわい。今どき、ヤマノカミの話だなんて、怪しいと思わんかな。どうもヤマノカミが怪しいな。おれはそんな気がするだけど」

「ぶら甚さんよ。この間の夕方、椎茸さんとこのその小僧、瓜が崎のこんど出来たあいまい屋から出てくる所をわしは見たぜ。あそこの女共あ、金さえ出しやあ小学生でも客に取るずらか。それに了見出来んのは、あの小僧、遊ぶ金がよくあるあるなあってこと」

瓜が崎のあいまい屋とは、この川の前からすぐ近くの集落で、廃屋だった昔の宿屋に手を入れて再び宿屋が復活したと聞いていたのですが、その実は時節柄景気のいい銅山労務者を目当ての店のようです。

亭主はヤマノカミよりがき大将に興味があるようです。

「そうそう、あの小僧の事なら、おれも聞いている」

鏡の中から男が言いました。

「あいつ、夜なんると、おたぎりさんの裏山から、露人館の二階座敷を眺めているそうだぜ。十五夜のかっぱれに見とれているがのう」

その時店の前に自転車のとまる音がして、この頃衣更えしたばかりの夏の白い官服姿の駐在が入って来ました。

「頭やつてくれるかのう」

駐在はぶら甚と私の方をちらっと見てから、入口に立ったまま、帽子をとるとハンカチで半白の頭をくるっと拭きました。サーベルがかちかち鳴りました。

「はいはい、少しうお待ちを。今日は又正装で」

亭主は仕事の手を休めると、奥から一人掛けの椅子を持ち出して駐在にすすめました。

「その、さっきのその総領のことだけどな。この前の春子の頃だ。おれの知ってる才取りがな、明け方椎茸まさんとこの山へ買付けに入ると、ほだ場に横になつて

る総領を見つけただつて。おいと声を掛けたら総領の奴め、目を開けて驚いた風で、体にかぶつていた桧の葉っぱをぱっと払いのけ、ばね仕掛けのように立ち上つたと。その総領を見て、今度あ才取りがおつ玉げたそうだ。だって総領の奴め、下半身はすっぽんぽんのふりちん。未だ薄明るくなつたばかりの山の中でも、かり首はちゃんと大人並みで、その上ひげもじゅら。

とても小学生の高等科には見えなんだそうだ。どうしたんだと尋ねたら、妙に赤い顔で、ヤマノカミにやられたと言うやいなや、けつ丸出しで椎茸小屋めがけてすっ飛んでつたそうだ。その時の総領の吐く息、すごく酒くさかつただけな。才取りがおれに、ヤマノカミつてふんとにいるずらかって。どおもいやなにおいのする話だとおれは思うけど、どうずらか」

鏡の中で、もう丸坊主になつてしまつた男が、笑いながら言いました。

「ヤマノカミも、小学生の初わらべが好きだと見えるな」

「ばかあ。そんな女郎みたいな事聞いてるじゃあないわい。今どき、ヤマノカミの話だなんて、怪しいと思わんかな。どうもヤマノカミが怪しいな。おれはそんな気がするだけど」

「今日は署長にえらく油を絞られたよ。戦時下なのに小田郷村の風紀は乱れておるって。瓜が崎は宿屋で許可したのに丸で淫売屋みたいだと。露人館の女中のかっぽれも又猥せつこの上ない。それから馬鹿な話だが、ヤマノカミが現われて小学児童がいっ時かどわかされたと言う投書があつたが、その真相を知つてゐるかって。その様な報告が本署に無かつたのは全て、お前の職務怠慢だぞつて。いやはや全くその通りで素直にかぶとを脱いだよ。氣分がむしゃくしゃするんで、虹流れの水で顔を洗つてみたが未だすっきりせん。いっそ頭を坊主にしてみようと思ってな。坊主になりや又村の衆に赤紙がきたかえって言われるかも知れん」

駐在は余程癪にさわったのか自分の務めの事までペラペラとしゃべりました。

鏡の前では散髪が終り、男が椅子から立ち上りました。

「おれはやらんから、お前の番だよ」

こう言ってぶら甚は私に鏡の前の椅子の方に行けど、あこをしゃくりました。私が長椅子から立ち上つて歩き出すと同時に

「どおぞ、どおぞ」

亭主は片手を泳ぐように指し出して強引に駐在を鏡の前の椅子に掛けさせてしまいました。

ぶら甚はたばこ入れを腰の帯に差すと急に立ち上りました。それから長椅子の前でぱつ立つている私の手首を

突然きつく握ると、耳もとで小声で言いました。

「だまつて一緒においで」

私はぶら甚と床屋を出ると、そのまま彼に従つて役場まで行きました。ぶら甚が床屋を出る時は怒っているような表情でしたが、直きに和やかな笑顔に変わっていました。

「お前、おまささんとこの件だな。床屋の奴め、お前に不公平な扱いをしたで、おれも怒れた。今から小使室で散髪してやるぞ」

私が小使室の明るい窓側の椅子に坐わると、黄色っぽいしみのついたカーテンのような日向くさい白布で首の下を覆いました。ぶら甚は側から私を見ていました。

小使さんはバリカンを私の頭に当てながら私の父とは小学校の同級生だったと言いました。

「かわいそうだな、おまささんもお前さんも。見捨てられて、時節柄苦労するずらになあ」

「おい、そんなしめっぽい話はよせ。それより、今駐在に会つたで思いついたが」

ぶら甚は窓際に背を持たせかけ、湯呑みの茶をすすりながら、私に向つてゆっくり話しかけました。

「川の前の衆も、駐在も、お前ら川の前のがき共が、おたぎりさんでたばこ吸つてることみんな知つてるぜ。それから、貸本で金儲けしていることも。お前らが、いくら金を持っているか知らんが、さつき話を出した

でもがき大将のヤマノカミとのぶざまな話など、がき仲間にはとても恐ろしくて話せないと思いました。

私は家に戻ると十銭銀貨を茶ぶ台上に置き、露人館の太平と連れ立つて地ごく耳の家に行きました。地ごく耳の家は露人館の前の往還から露地を入つた間口の狭い長屋の一角でした。いつも縫い物をしている母親の姿はなくて、地ごく耳が一人、寝そべつて絵をかいていました。これはおたぎりさんの大杉の下で、がき共に見せる紙芝居の黄金パートの下絵だと言いました。

紙芝居用の画用紙もボール紙も絵の具もみんな貸本の儲けで買うつもりだそうです。

「それを買う錢は大将が持つてているだよなあ」

私はぶら甚の話が又心配になつて遂に尋ねてみました。

地ごく耳は顔を上げて私を見ました。当然じゃんかねと言わんばかりの表情でした。さすがの地ごく耳も、がき大将のヤマノカミやその他の噂は知らない様子でした。その時隣との仕切り壁の向うから、けだものが喰るよう、吠えるような、ともかく異様な声がしたのです。

太平と私は思わず顔を見合させました。すると又ずしんずしんと、足踏みするような物音が響いて、この部屋の天井から埃が落ちてきました。太平と私は恐ろしくなつて立ち上りましたが、地ごく耳は平氣で絵をかいていました。暫くして地ごく耳が独り言ひに言いました。

「寝しょんべん封じだよ。寝しょんべん」

(つづく)



椎茸さんとこの総領、あいつには気をつけろよ。お前に言ってもわからんかも知れんが、あいつ今、さかりがついてるだよ。ヤマノカミにやられたって言つてはいるようだが、この小田郷村にやあ、ヤマノカミみたいな色きちがいが大勢いるだで

「甚さあ、その色きちがいって誰のことすらか」

小使さんがバリカンをとめてぶら甚に尋ねました。

「うーん、まあー、大きな声じや言えんが、昔くうにいが惚れた丸楠のおソノ。それからあ、これもくうにいがちよっかい出したことのあつたおがみ屋のトメ女。

そのあんねえのあんまのおさよ。それに最近じゃあ、露人館の十五夜嬢。未だいるかも知れんが、これらの女共、毎日毎日男を欲しくて、目んくり玉きょろきょろさせて、男を探しているだよ。若い男はみんな戦争に行つちゃつたで、ぢぢいでも子供送も餌食にされちゃう。小使、お前だって氣をつける、まだ四十代すら

散髪が終つて、私はぶら甚と小使さんに礼を言いました。小使さんはこれからは床屋へ行かなくともいいからいつでも来いと言つてくれました。私はこの時にどうやら川の前の衆から私達一家は同情されているらしいと初めて感じたのであります。

私はぶら甚の話から、私達川の前のがき共の一部始終は全て大人衆に筒抜けになつてることを知つたのです。私はがき共にそれを知らせなくではなりません。

鯨

游

海

(三十)

長吠歌・鈍犬太郎自詠疊句十二首連作其一

平成十二年十月

我輩小庵高閣隈
雖方三尺乾坤廻
主人氣色今朝奈
鳴鼻徘徊忽起來

押韻・隈廻來

△長吠歌・鈍犬太郎自から詠める疊句十二

我が輩の小庵は 高閣の隈なり
方三尺と雖も 乾坤めぐる
主人の氣色 今朝いかんぞ
鼻を鳴らし徘徊すれば 忽ち起きて來たる

我が輩の小庵は高閣の隈なりに、三尺四方と狭い乍らも空は美しく、昼は太陽や白雲が行き夜は月や星が天上を東西に廻り雄大な光景を満喫出来る。さてご主人様のご気嫌、今朝は如何であろうか（日頃気分屋なのでお付き合に気を遣う事よ）。

夏目漱石の「吾輩は猫である」に想を借りた我が愛する愚犬の詠める疊句十二首。疊句とは十二首共通して同

じ語句を同じ場所に用いて連句を作る事。この連作では起句冒頭の「我輩」と、転句の「主人」がそれである。

彼の目線は略一尺なので主人たる筆者の1/5。よつて二階建の我が陋室も十階建の高さに相当しよう。まさに高殿閣と云うべし。

方三尺は三尺四方。乾坤は天地、宇宙、日月等を云うが、ここでは日月、星雲を指す。

口語訳してみよう。

我が輩の小庵は高殿閣の一隈にあり、三尺四方と狭い乍らも空は美しく、昼は太陽や白雲が行き夜は月や星が天上を東西に廻り雄大な光景を満喫出来る。さてご主人様のご気嫌、今朝は如何であろうか（日頃気分屋なのでお付き合に気を遣う事よ）。

曉け方、鼻をクン／＼鳴らしうろ／＼してみたら案の定ご主人様はいそ／＼と起きて來た（催促するにはこの甘え声に限るのよ）。

☆クンクンと夜の明けぬるを告げぬれば

宜べいそいそと主人起き来る

△又・十二首連作その二

我が輩この時 無類の 欣

綱を牽き疾駆すれば 晓風薰んばし

主人氣息 何ぞ奄々たる

路上嬉しき哉 また君に逢う

〔注解〕

我が輩とは息も絶え／＼な様子。又逢君は杜甫・江南逢李龜年「落花時節又逢君」より。君は勿論私かに恋する雌犬ちゃん。

口語に訳してみよう。

我が輩はこの数刻が一日で一番嬉しい時なのだ。

綱を牽つぱって疾駆すれば、曉の風が薰り全く気持ちがいい。

それにしてもご主人様はどうしてこう息も絶え／＼なのだろう（最近少々齢をとったかな）。

あなた嬉しや。我が輩の大好きな彼女と散歩の路上で又しても逢えたとは！

なお転句六字目の奄は仄字であり「二四不同、一六対」の近体詩の原則からは平字でなければならないが（但し転句に限り五六言転倒可）の規則により許される（五言目の何が平字であるから）。

我輩此時無類欣
牽綱疾驅曉風薰
主人氣息何奄奄
路上嬉哉又逢君

押韻・欣薰君

又・十二首連作其二

平成十二年十月



平成十二年十月

我輩歸來渴且飢
菜魚一椀自涎垂
主人有妻嚴於彼
余亦聊知武士儀

押韻・飢垂儀

☆襟正し魚菜睨みて動くまじ
南無たらくと涎垂るるもの

△又・十二首連作その三▽

我が輩帰り来たれば渴き且つ飢う
菜魚一椀自ずから涎垂る

主人に妻ありて彼よりも厳し
余も亦いささか知る武士の儀を

〔注解〕

儀は法度、手本。「武士は喰わねど高楊子」の心意氣である。なお余は予とも書くが餘の略字とは別の本字。口語訳。

我が輩家に帰り着いたら喉が渴き腹もペココである。用意されている魚菜の一椀がいやでも眼に入る。自然に涎が滴り落ちて了う。
所でご主人様には奥方様がいらっしゃるが我が輩の見ところどうもこちらの方が貌が厳しい。
(さて我が輩はシエットランドと呼ばれるコリー種の小型で頭が良く、先祖は牛羊を取締っていたと聞く。自分で云うのも照れるが、走る姿は実に美しい。顔も素敵だ

△又・十二首連作其四

我輩正襟虎視窺
一聲下命乍飧之
主人之妻莞然咲
抱擁欲梳只耐慈

押韻・窺之慈

我が輩襟を正して虎視もて窺がう
一声命下りてたちまち之れを飧う
主人の妻莞然として笑い
抱擁し梳すらんと欲すを只慈しみに耐えむ

〔注解〕

襟を正す、は蘇東坡・前赤壁賦「蘇子愀然正襟危坐而問客曰」より。居ずまいを直し正座する意。
飧は喰らう。莞然は莞爾と同じで、につこり笑う形容。

平仄の関係で然を用いた。梳るは髪を梳く。ここでは我が輩の髪や体毛を金属ブラシでゴシゴシと擦する事。只是只管で「ひたすら」と訓じる。いちづに、と同じ。

シゴと梳けずられる。これが何ともこそばゆい。でもこれも功德だと思って我が輩はこれにじっと耐える。
只に耐える。

☆朝餉済むを今や遅しと待つならむ
抱き竦めて梳ずらむと

△又・十二首連作其五

平成十二年十月

我輩撲身漸遁逃
靡鬚翻尾一跳高
主人未悟澄眸裏
功德施行心氣豪

押韻・逃高豪



口語に訳してみる。

我が輩は正座して虎視眈々と窺がう。「よし」の一声が下るや否や瞬く間にペロッと平らげて了つた。

ご主人の奥方様はこれを見てニッコリと笑う(しかし)この後が問題なのだ。

食事を終えるや否や、我が輩を抱き竦めてブラシでゴ

髪は垂れ髪。ここでは長い頭髪や体毛を云う。功德は仏教用語で神仏の恵み、他人の為にする善行ならびにそ

と皆褒めてくれるのよ。名犬ラッシーを憶えているだろう。あれよりも恰好いいと自分では思っているのだが)。かくして立派な先祖の血を引いている我が輩であるからして、みつともない眞似は出来ないのだ。武士は喰わねど高楊子、と聊か痩せ我慢をして正座しているのよ。

の果報の事。施行も仏教用語で、ほどこしを実行する意。ここでは奥方様に善行を施こす事を指す。

口語訳してみる。

我が輩は身を撲^{まわ}って漸やく逃れ得た。

たれ髪を靡かせ尾を翻えして主人の所へ駆けつけ飛びついた。爽快なるハイジャンプ一番だ。

しかし我がご主人様は、我が輩の眸が清らかに澄みきつてゐるのが何故だかをご存知ない。

人に善行を施こせば自ずから我が輩の心は爽快になり、ひいては我が双眸も清々しく澄んで来ると云うものだ。(夜毎飲んだくれている人には判るまい)。

☆あな嬉し髪ひるがえし飛びはねむ

徳施こせば心清けし

△又・十二首連作その六
我が輩の姓は鯨 名は太郎

兄たり難く弟たり難くして

主人の妻怒りて 訓を垂る

頓首し枕を並べて 傷をあい舐む

又・十二首連作其六

平成十二年十月

我輩姓鯨名太郎
難兄難弟再愚行
主人之妻怒垂訓
頓首竝枕相舐傷

押韻・郎行傷

〔注解〕

兄たり難く弟たり難し、は劉義慶・世說新語「優れてどちらとも優劣のつけ難い」の比喩で、伯仲(伯は長兄、仲は次兄の意)の間、とも云う。つまりこの詩では反語的ユーモアである。愚劣さを競っているのであるから。

頓首とは、頭で地をたたいて敬意を現わす仕草。頓首



再拜と熟して用いる例が多い。手紙の終りに用いて相手に敬意を示すのにも用いられる。

ここで敬意をあらわす相手は勿論ご主人の奥方様で、枕を並べて傷を舐め合う相手はご主人様と愚犬の私なのであるが。

口語に訳してみよう。

我が輩の姓は鯨で名は太郎と云う。

ご主人様と我が輩とは何が兄とも弟とも判別し難いぐらい劣っているが(尤も名前からすれば我輩が兄かも知れないが)。そして再々愚行、悪戯をやってはった。

ご主人の奥方様が怒って訓戒を垂れ給うた。

吾等両名は平身低頭、頓首再拜してひたすら恭順の意を表し、何とか罰を逃れんと必死である。そして枕を並び互に脛に持つ傷を舐め合つた事であった。

△江雪 千山鳥飛絶

萬徑人蹤滅

孤舟蓑笠翁

獨釣寒江雪 独り釣る 寒江の雪

右は五言絶句の代表作ともされる。押韻は切迫した仄声「屑」。起承句は完全な対句である。

白一色の全景からやがて焦点は絞られ、漁翁のポツンと釣糸を垂れる姿に凝縮し、動きが止まる。静寂の世界。色彩と動きを一切拒否し、二十字に凡ゆる念いを込め

る。詩人が大自然の美しさそのものを詩歌の主題として歌うようになったのは、必らずしも遙かな昔ではない。六朝時代の謝靈運を山水詩の祖と呼ぶようにたしかだ四百年。やがてこのジャンルは謝朓、王維らに受け継がれ発展、遂に柳宗元に至つたのである。

☆私はもや兄たり難く思えども

よも詮るまじ名こそ惜しめば

白楽天の七言古詩の名作「長恨歌」を振つて「長吠歌」

と題したこの七言絶句の疊句は全十二首の連作である。さてこの後如何なる展開をしていくであろうか。さし絵の漫画清水トム先生の画く絵と併せてご期待を乞う。

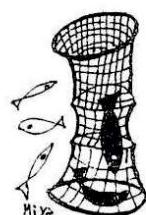
近藤重蔵・富蔵の生涯とその時代（三十二）

第一部 北方探検近藤重蔵 下

第一章 重蔵の栄華と失脚

四 北邊開明の振幅

金子正義



(二)

重蔵は択捉島係として、鯨漁を大々的に実施しようとは思わなかつた。唯、幕閣達が当初に莫大な資金を出資しても、本格的に択捉島開発の事業を振興するように、関心を深めれば良しとしていた。

唯、可笑しな事に、山田鯉兵衛が、無類の策謀軍略家のように、綿密な鯨漁の計画を老中伺いに提案したが、当初の出資を渋つて、応答なく、先送りになると見ると、「直ぐ択捉島に戻りましょう」

と、品川盡岸島の幕府蝦夷地物産取引所の御船手組頭の向井将監に、蝦夷地行御用船の手配を申し入れて來た。

近藤重蔵は、山田鯉兵衛が御番の出自なので總て遭ることが迅速なに感じ、今度の事で江戸に戻ったのに未だ、勘定奉行の石川左近将監忠房と相役の、中川飛驒守忠英に挨拶に行つていないので、霞が関の奉行所に行つ

たが外出中なので、駿河台の屋敷の方に、従者の宮本源次郎を遣わして、奥方に都合を確かめると、中川忠英は昨年二月、谷中のいろは茶屋より出火し、吉原京町へ、飛び火して廊中焼亡し、田町、聖天町、山之宿、瓦町、新島越、山谷町、横山町等の焼跡道路一帯の確認に臨んでいるので、帰りは六ッ半（七時頃）を過ぎるが、門前で待つが宜かろうとのことであつた。

重蔵は、失礼とは思つたが、長崎奉行以来の厚誼に甘えて、門前に控えて待ち、夕暮の薄闇の中を網代駕籠で帰宅した中川忠英に声をかけて来意を陳べると、飛驒守は、

「うむ……」

と領いたが、暫時黙して、「積る話も有ろう……明日申の刻、七ッ半（四時頃）

参れ、どうじゃ」と確かめた。

重蔵が、ハッと上半身を折り曲げて拝礼するのを見届けると駕籠昇を督して邸内に消えた。

翌日近藤重蔵は、併も連れず、早目に屋敷に訪問する

と、中川忠英は早く帰つて待つていた。

重蔵が久闊の挨拶を延べ、

「老中伺に出した、鯨漁の件が、石川忠房様、中川忠英様両人の勘定奉行の承認によつて決定されるものと存じ上げ、如何なるものであろうかと伺いに参上仕りました」

と申し上げると、中川忠英は、

「山田鯉兵衛の微に入り細に及ぶ膨大な資料は、余も石川左近将監忠房より廻された目を通したが、驚き入つた鯨漁であるな、石川将監殿も一応蝦夷地御用役に名を列ねているので、鯨漁を幕府直捌の仕事として許し度いが、将監殿は上野の湯島聖堂の再建の大仕事があつて、蝦夷地の方は余り手が届かなかつたので、鯨漁の事について暫く待つて貰い度い、とのことであつた」

近藤重蔵は幕府の重役は、有能な者程複数掛け持ちであるので止むないであろうと思つたので、「勿もであります。山田鯉兵衛としても、老中伺に提出した実施案のような大規模な鯨獣を、択捉アイヌにやらせよう計画したのでなく、鯨漁事業の職人と契約し

て、利をあげ、択捉島を開発しアイヌ達の暮らしを向上させようとするものであつた。

未開発の択捉島アイヌの漁獣は、鮭、鱈、鰆、赤魚、鯨、海豹・など海の資源が豊かで、鮭、鱈など手摑みや打頭木（イサバキクニ）の棒叩きで獲っていた原始的な獣で、今度の蝦夷地御用役の面々や、高田屋嘉兵衛などの尽力で、漸く網を使っての掬い獲りや、垣網や舟を使っての追い込む、ヤシャ張り網などを使つて多量に獲れるようになつたばかりで、鯨漁まで手を延ばせませんが、廻遊中の子鯨がコタン近くの浜辺に乗り上げて動きがつかぬのを、引き上げただけで、身も皮も、鯨油も充分絞り取れるので必用以外はいりません却つて腐つて悪臭を発して困る程です。」

中川飛驒守も、

「余も浜名湖や品川沖に迷い込んだ親鯨からはぐれた子鯨が、岸辺に乗り上げて、大勢の男共が大騒ぎで取りついているのを何度か見たが、鯨は魚類でなく海の獣で大きな体軀なので、網では獲れず、本職の漁師でも仲々手に負えないものであろう。

四方海の日本の湾内には良く入り込むが、漁村の漁師共も一人や二人ではどうにもならず、村中の大仕事となるのである。」

従つて鯨漁の盛んな漁村には鯨漁専業の羽差し職人等も出てくるのである。

現在鯨漁の盛んな地方は何処かな

近藤重蔵は、中川飛驒守忠英が、勘定奉行だけあって克く知っているであろうと思い乍ら

「左様、蝦夷地は別として、九州は肥前の平戸、紀伊では伊勢志摩、陸中は岩手の宮古等が、捕鯨が盛んであります。然し、それぐの土地の領主や網元が直接営んでいる訳ではありません。

本土の鯨漁師達は、鯨漁を專業として暮して居りますが、相等の資金財力を必要としますので組合を作つて営んで居る訳であります。山田鯉兵衛が今度の老中伺いに提案した幕府直捌の鯨漁の構想案は、此の鯨漁組合を参考にして立案したもので、

中川飛驒守様は勘定奉行であられますので、万事承知と思いますが、九州肥前の平戸組を例と致しますと、名称は、平戸組鯨漁組合と称しますが、単に『平戸組』で通ります。

四百石積程の鯨船二、三艘が中心でそれぐ船頭、水主人夫等の船員數十人の船に、鯨に銛を投げ差通す羽差職人數十人が乗り込み、數頭の鯨を突き差して、鯨を処置する基地に運びます。基地には番屋があつて鯨を処置する工作人が番屋に設けてある、鯨油を絞り取る圧搾機や、鋸物の大鍋を使って、行燈や高燈台の燈明油を作り、油を入れる三斗入の樽に集めております。

番屋は、鯨漁のない時期には、鱈などの大漁の時に煮

達が総出で勢子舟や八丁櫓の捕鯨船で鯨を追い、長柄の銛を投げたり、子鯨を陸に追い上げたりの大仕事となります。

銛を付き差そうとしても仲々旨く当たらず、無駄骨を折るばかりですが、漸く何十本もの銛で突き差して、浜に引き上げてからが大仕事となります。

皮、肉、骨、油、と解体処理をしますが主として鯨油を取ります。辻行燈の油として貴重です。然し速やかにしないと異臭を発して腐り始めて処置に窮します。

アイヌ達は鯨を発見すると、コタンの長老がカムイフンベ鯨捕りの狼煙をあげさせて、各地のコタンより若者が皮舟や板縫舟で集つて、鯨を追います。小さな舟ですから鯨も別に追われていると思わず、仲よく並んで泳いでいるような状態で、鯨に近づき、トリカブトの毒を塗った銛を鯨の頸筋の急所に打ち込んで、銛の引綱を引いたり放したりし乍ら、弱まる迄一緒に漂つて、動けなくなると浜に引き上げて頭の先から尾鰭まで何に一つ残さず、皮は衣類に肉は冬の食物に干物とし、骨は粉にしたり針にしたり、さまざまに転用し、然かも必要な者に平等に分配します。

然かも年に一、二頭獲れば、後は何頭廻遊していくても獲りません。

従つて今度の大規模な、平戸組を使っての鯨猟は、押捉島のアイヌの生活の向上の為に幕府の直捌きとして利

しめる油絞窯もあり多くの工作人が乗る団合船も必要となり船員や工作人の宿舎もあり、故郷を数ヶ月も離れている船員の為の宿舎であるから、衣食、医薬等も施行する医師や人夫賄婦までも雇入れています。

其れ等が基地と外部と連絡したり、海産物の売渡をする為の団合船もあります。

全体を統括する組の親方は、老練の羽差職人で、地方の領主や廻船問屋と契約して鯨産物（肉、皮、骨、鯨油）を売り渡す訳であります。

勘定奉行中川飛驒守忠英は、近藤重蔵の鯨漁組合の説明に、何にか自分の全く知らぬ漁師達の世界があることに胸を搏たれた。田畠を耕す百姓の暮しや身分関係は、土地を領地としている大名としてよく知っていると思つてはいるが、海を仕事場とする漁師達の権勢を感じない仲間同志の組合と云う結びつきの凄さに驚いた。

其処で中川忠英は、組合と云う組織のない本土や蝦夷地ではどうなつてゐるのかと、重蔵に尋ねた。

重蔵は組合は欧羅巴で起きている争動とは異なるものとして、

「蝦夷地の海洋は鯨の好む鰯などの小魚が多いので、魚群を追つて、ザトウ、セビ、白ナガス等の鯨が内浦湾や石狩湾などに毎年、春より夏にかけて、子連れの鯨が湾入しますが、本土の鯨漁組合のような組が出来ないので、子連れの長須鯨などが湾入すると、湾内の和人漁師

益を得ようとしたのであるが、幕府としては、平戸組を丸抱えするような莫大な資金が当初に出費されるものと、躊躇されたのであろうと思いますが、押捉島のアイヌ達にとって果して平戸組による何百人もの和人漁師達が入るに至るが幸福であるかどうか疑問に思えます。

其れにしても、少々気になる事がありましたので、中川勘定奉行様のお耳に入れて下されば、山田鯉兵衛が喜ぶであろうと思いますので、申し上げます。

今度の蝦夷地御用の押捉係の船団が、昨年の寛政十二年閏四月、国後島泊港に集結しておりますと、千二百石積の大船が入港して来ました。押捉島へ渡る手前共の船団の出航手配を司る山田鯉兵衛が、全く知らぬ大船の入港に驚き、国後島会所の支配人勘右衛門に問い合わせると、船は撰州兵庫の和泉屋伊兵衛の千二百石積の辰吉丸で、國後島会所の仕入物を積んで來たと云つた。不審に思つて上船して確かめようと云う山田鯉兵衛に、押捉島がいよいよ島開きであると伝えられて、利に聴い西方の商人が一儲しようとして來たのであろうと、重蔵が笑つて止めました。

處が、翌日、大坂の杉子島の多田屋清左衛門の船、八百五十石積の明神丸が入港しました。

押捉島へ渡る船団への次々の手配で多忙な山田鯉兵衛も堪り兼ねて、国後島会所支配人勘右衛門と通詞役長三郎を呼んで、明神丸に乗り込んで調べると確かに国後島

会所用としての器財も積んでありますが、何んと辰吉丸には平戸組の鯨突大夫の安兵衛、南部宮古の羽差番人等が乗船していて、両船共に船頭、水主等の船員を含めて百三十人程が乗り込んでいるではありませんか。明らかに国後島の、何処かの湾か浦辺で、此れから二、三ヶ月鯨漁を実施するのであらう、国後島は松前藩より幕府へ治行は上知されているので、肥前平戸組、南部宮古組より、箱館の奉行所に、鯨漁許可願を出してからの出漁でありましよう。箱館には蝦夷地御用役の根拠地として現地司令の松平信濃守忠明公がおられる訳であるが、もう冬期に向って引き上げられ、冬越しする留守役として、村上三郎右衛門常福が残っていて、厳しい冬を越す見上げた人物と、近藤重蔵も敬意を表していますが名譽欲と権勢を好む傾向もあって、近藤重蔵を見下しているようです。従って、国後島の何処かでの鯨漁についても重蔵の方には何の連絡も無い、江戸表の方にも知らせて無いようである。

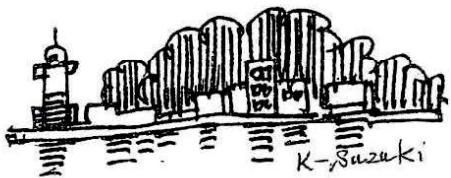
山田鯉兵衛の大規模な鯨漁は、鯨漁組合を丸抱えする幕府直捌の鯨漁で、旧来の場所請負制の交易は無くそうとしている。然るに、国後島の何処かで実施する鯨漁は、平戸組の鯨突大夫や、南部宮古の羽差職人と契約して、鯨漁を行なうもので、今後一、三月間で莫大な利益が和泉屋や多田屋に入る訳です。山田鯉兵衛の立案の鯨漁は

幕府直捌ですから、平戸組には、幕府より契約した大金が支払われる訳です。だが、山田鯉兵衛の立案した幕府直捌の鯨漁は当初の支出資金が大きいので承認されず、何万両かの収益も単なる夢と消える訳です。一方国後島の方は、幕府直捌の計画でないので、和泉屋や、多田屋の方は、平戸組、宮古組の鯨突大夫や羽差職人が国後島の海で鯨両を始めています。二、三ヶ月後には何十万両かの収益となりますので、和泉屋や多田屋は大儲となります。勿論、万事心得た両方の廻船問屋は箱館の村上三郎右衛門常福達の役人衆にも礼金を支払っているでしょうが。幕府直捌で鯨漁を実施できれば莫大な収益は幕府の収益となり、勿論、択捉アイヌの生活向上に資する事が出来たものであります。

明敏なる山田鯉兵衛は計画は夢と流れたとして、早々に択捉島に戻りましょうと云う訳でありますが、手前重蔵も未だやりかけた択捉アイヌの人別調らべが残っていますので、択捉島に早く戻って、人別調らべを完成しようと思います」

黙念と近藤重蔵の独断に近い長広説を訊いていた中川飛驒守忠英は、何にか期する事がある如く、高く登り上った煌々たる中秋の名月を見据えていた。

続く



☆テレビで見る映像は現実離れしていた。何時か見た劇映画でゴジラが巨大ビルを襲うシーンと重なって見えた。その時向う側にもう一機がぶつかり紅蓮の炎を見、これは現実の出来事だと改めて知覚した。大変な事が起ったと直感した。果たして大変な事になった。世界は真暗だ。☆マンハッタンの二本のノックビル。「塔勢如湧出孤高聳天宮」と王維は長安の大雁塔を歌った。繁栄を謳歌する資本主義のメック。然し事もあろうに自國の民間機によつてあつ氣なく瓦礫と化して了つた。十五年余前私はこのビルの頂上に立つた時、或る種の危うさを感じた。予感は適中した。要塞の如き堅固なペントAGONも崩れた。☆然し、然しである。私は今回の惨事とは桁違ひの空襲を経験している。終戦直後の廃墟の東京、大阪を眼の当たりに見てゐる。延べ何万機の米軍機によつて破壊されたのを知つてゐる。そして広島、長崎。あの光景の方が遙かに悲惨、残酷であった。一瞬ではなく数年間、一点ではなく一面、数千人ではなく数百万人の被災。あの時は無辜の一市民として被害者の立場で眺めた。因果は巡る。☆幸か不幸か米市民は自國の本土で被害者になつた事がない。金持ちの育ちのいい坊ちゃんに他人の痛みが判るだろうか。一人勝ちの強者、アメリカとブッシュが弱者の痛みを初めて口苦く否、激痛を以つて知つた。アフガンで敗けたロシアは変つた。さて米国は変れるか？（く）

まんじ 第82号

平成13年11月1日発行（非売）

発行人 三戸岡 道夫（みとおか みちお）
編集長 鯨 游海（くじら ゆうかい）
事務局長 鍋屋 次郎（なべや じろう）

（事務局） 〒223-0056 横浜市港北区新吉田町2477-3 太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947

（郵便振替口座） No.00270-0-64592 加入者名 まんじ

（印刷製本） 大和印刷株式会社
〒332-0031 川口市青木1-12-20
TEL 048（254）3311 FAX 048（254）3313

表紙の絵について

宮城正彦画
仲間、継続、積年等をイメージして描いた（宮城）。限りない空想の世界に遊ばせてくれる作品（く）。